續國譯漢文大成

文學部 十七

309
65

始

吉田得郎氏寄贈本

續國譯漢文大成

文學部第十七册（第五帙の二）

杜少陵詩集　中の一

309
65

杜詩釋義中册の起稿につき讀者諸君に一言す

余杜詩を釋して第九卷に入るとき歐洲差遣の公命を蒙る。是に於て劇忙中勉めて筆を執り、神戸埠頭出發前第九卷を釋し了れり。

第十卷以下は航行船中に於て之に從事す。今第十卷を釋し了り、更に第十一、第十二卷に至らんとす。

第十二卷に至りて頁數の幾何に達すべきか、豫測する能はず。若し或は豫定の頁數に達せずとするも、事誠に已むを得ざるものあり、願くは讀者諸君枉げて寛假を賜はらんことを。不足に至りては後册に至りて之を補ふあらんとす。

行旅中にありては必要なる參考書を多く攜ふる能はず。余が平日抄錄し置ける材料も亦た座右に之を缺く。余の釋詩繁簡の態度は前册に比して敢て變ぜること無しと雖も、往往にして更に研究せまほしくおぼえし點も之なきに

非ず。此等の點は余の甚だ遺憾とする所なるも、是亦異日諸多の誤謬、疑義と共に補訂すべきを以て讀者諸君の深く之を責めざらんことを望む。

余は行旅中必要なる事務のほか殆ど出來うるだけの餘暇を割き、風浪炎熱と鬪ひつつ本册を成すに努めたり。余の杜詩癖と讀者諸君の期待に背かんことを虞るるの切なるに非れば恐くは之を成すこと難からん。諸君請ふ諒察を垂れたまはんことを。

昭和四年七月十七日午後五時箱根丸船室に於て

鈴木虎雄誌

杜少陵詩集中卷目次

卷七

新安吏……一
潼關吏……五
石壕吏……八
新婚別……一三
垂老別……一六
無家別……二一
夏日歎……二五
夏夜歎……二七
立秋後題……三〇
貽阮隱居……三一
遣興三首……三四
留花門……四〇
佳人……四四
夢李白二首……四七
有懷台州鄭十八司戶……五二
遣興五首……五五
蟄龍三冬臥……五五
昔者龐德公……五七
陶潛避俗翁……五八
賀公雅吳語……六〇
吾憐孟浩然……六一
遣興二首……六二

天用莫如龍……六二
地用莫如馬……六四
遣興五首……六五
朔風飄胡雁……六六
長陵鋭頭兒……六七
漆有用而割……六八
猛虎憑其威……六九
朝逢富家葬……七〇
秦州雜詩二十首……七二
滿目悲生事……七二
秦州城北寺……七三
州圖領同谷……七五
鼓角緣邊郡……七六
西使宜天馬……七七
城上胡笳奏……七九
莽莽萬重山……八〇
聞道尋源使……八二
今日明人眼……八三
雲氣接崑崙……八四
蕭蕭古塞冷……八五
山頭南郭寺……八七
傳道東柯谷……八八
萬古仇池穴……八九
未暇泛滄海……九〇
東柯好崖谷……九一
邊秋陰易夕……九三
地僻秋將盡……九四
鳳林戈未息……九五
唐堯眞自聖……九六
月夜憶舍弟……九八

天末懷李白……九九
宿贊公房……一〇一
赤谷西崦人家……一〇三
西枝村尋置草堂地夜宿贊公土室二首……一〇四
出郭眄細岑……一〇四
天寒鳥已歸……一〇六
寄贊上人……一〇九
太平寺泉眼……一一一
東樓……一一四
雨晴……一一五
寓目……一一六
山寺……一一七
即事……一一八
遣懷……一一九
天河……一二一
初月……一二二
擣衣……一二三
歸燕……一二五
促織……一二六
螢火……一二七
蒹葭……一二八
苦竹……一三〇

卷八

除架……一三三
廢畦……一三四
夕烽……一三五
秋笛……一三六

日暮……一三八
野望……一三八
空囊……一四〇
病馬……一四一
蕃劍……一四一
銅瓶……一四二
送遠……一四四
送人從軍……一四六
示姪佐……一四七
佐還山後寄三首……一四八
從人覓小胡孫許寄……一五一
秋日阮隱居致薤三十束……一五二
秦州見勅目薛三璩授司議郎凡三十韻……一五四
寄彭州高適虢州岑參三十韻……一六四
寄岳州賈司馬巴州嚴使君兩閣老五十韻……一七一
寄張十二山人彪三十韻……一八六
寄李十二白二十韻……一九五
所思……二〇二
別贊上人……二〇三
兩當縣吳十侍御江上宅……二〇六
發秦州……二一三
赤谷……二一五
鐵堂峽……二一七
鹽井……二二〇
寒峽……二二一
法鏡寺……二二三
青陽峽……二二五
龍門鎮……二二七
石龕……二二九
積草嶺……二三一

泥功山……二三三
鳳凰臺……二三四
乾元中寓居同谷縣作歌七首……二三八
萬丈潭……二四七

卷九

發同谷縣……二五三
木皮嶺……二五六
白沙渡……二五八
水會渡……二六〇
飛仙閣……二六二
五盤……二六四
龍門閣……二六六
石櫃閣……二六七
桔柏渡……二六九
劍門……二七一
鹿頭山……二七四
成都府……二七七
酬高使君相贈……二七九
卜居……二八〇
王十五司馬弟出郭相訪遺營草堂貲……二八一
蕭八明府實處覓桃栽……二八三
從韋二明府續處覓綿竹……二八三
憑何十一少府邕覓榿木栽……二八四
憑韋少府班覓松樹子栽……二八五
又於韋處乞大邑瓷盌……二八六
詣徐卿覓果栽……二八七
堂成……二八八

蜀相……二八九
梅雨……二九一
爲農……二九二
有客……二九三
賓至……二九四
狂夫……二九六
田舍……二九七
江村……二九八
江漲……三〇〇
野老……三〇一
雲山……三〇二
遣興……三〇三
遣愁……三〇四
杜鵑行……三〇六
題壁上韋偃畫馬歌……三〇七
戲題王宰畫山水圖歌……三〇九
戲爲韋偃雙松圖歌……三一一
北鄰……三一四
南鄰……三一五
過南鄰朱山人水亭……三一八
因崔五侍御寄高彭州一絕……三一九
奉簡高三十五使君……三一九
和裴迪登新津寺寄王侍郞……三二〇
贈蜀僧閭丘師兄……三二三
泛溪……三二七
出郭……三二九
恨別……三三〇
散愁二首……三三一
建都十二韻……三三三
村夜……三三七

寄楊五桂州譚……三三七
西郊……三三九
和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄……三四〇
暮登四安寺鐘樓寄裴十迪……三四一
寄贈王十將軍承俊……三四三
奉酬李都督表丈早春作……三四四
題新津北橋樓……三四五
遊修覺寺……三四六
後遊……三四七
絕句漫興九首……三四八
客至……三五五
遣意二首……三五七

卷十

漫成二首……三五九
春夜喜雨……三六一
春水……三六二
江亭……三六三
早起……三六四
落日……三六五
可惜……三六六
獨酌……三六七
徐步……三六八
寒食……三七〇
石鏡……三七一
琴臺……三七二
春水生二絕……三七三
江上値水如海勢聊短述……三七五

水檻遣心二首……三七七
江漲……三七八
朝雨……三七九
晚晴……三八一
高柟……三八二
惡樹……三八三
江畔獨步尋花七絕句……三八四
進艇……三八九
一室……三九〇
所思……三九二
聞斛斯六官未歸……三九三
赴青城縣出成都寄陶王二少尹……三九五
野望因過常少仙……三九六
丈人山……三九七
寄杜位……三九九
送裴五赴東川……四〇〇
送韓十四江東省覲……四〇一
柟樹爲風雨所拔歎……四〇三
茅屋爲秋風所破歌……四〇五
石筍行……四〇八
石犀行……四一〇
杜鵑行……四一三
逢唐興劉主簿弟……四一六
敬簡王明府……四一七
重簡王明府……四一九
百憂集行……四二〇
徐卿二子歌……四二三
戲作花卿歌……四二四
贈花卿……四二六
少年行二首……四二七

贈虞十五司馬……四二九
病柏……四三一
病橘……四三三
枯椶……四三六
枯柟……四三八
不見……四四〇
草堂卽事……四四一
徐九少尹見過……四四二
范二員外邈吳十侍御郁特枉駕闕展待聊寄此作……四四四
王十七侍御掄許攜酒至草堂奉寄此詩……四四五
王竟攜酒高亦同過共用寒字……四四七
陪李七司馬皂江上觀造竹橋卽日成往來之人免冬寒入水聊題短作簡李公……四四八
觀作橋成月夜舟中有述還呈李司馬……四五〇
李司馬橋成承高使君自成都回……四五一
入奏行贈西山檢察使竇侍御……四五三
得廣州張判官叔卿書使還以詩代意……四五七
魏十四侍御就敝廬相別……四五九
贈別何邕……四六〇
絕句……四六一
贈別鄭鍊赴襄陽……四六二
重贈鄭鍊絕句……四六三
江頭五咏……四六四
丁香……四六四
麗春……四六六
梔子……四六七
鸂鶒……四六八
花鴨……四六九
野望……四七〇
畏人……四七一
屛跡三首……四七二

少年行……四七六
即事……四七六
奉酬嚴公寄題野亭之作……四七七

卷十一

嚴中丞枉駕見過……四八一
遭田父泥飲美嚴中丞……四八三
奉和嚴中丞西城晚眺十韻……四八六
中丞嚴公雨中垂寄見憶一絕奉答二絕……四八九
謝嚴中丞送青城山道士乳酒一瓶……四九一
三絕句……四九二
戲爲六絕句……四九五
野人送朱櫻……五〇〇
嚴公仲夏枉駕草堂兼攜酒饌得寒字……五〇三
嚴公廳宴同詠蜀道畫圖得空字……五〇五
戲贈友二首……五〇六
大雨……五〇八
溪漲……五一一
大麥行……五一三
奉送嚴公入朝十韻……五一四
送嚴侍郎到綿州同登杜使君江樓宴得心字……五一八
奉濟驛重送嚴公四韻……五二一
送梓州李使君之任……五二三
觀打魚歌……五二四
又觀打魚……五二七
越王樓歌……五二九
海棕行……五三一

姜楚公畫角鷹歌……五三二
東津送韋諷攝閬州錄事……五三三
光祿坂行……五三五
苦戰行……五三六
去秋行……五三八
廣州段功曹到得楊五長史譚書功曹却歸……五三九
送段功曹歸廣州……五四〇
題玄武禪師屋壁……五四二
悲秋……五四三
客夜……五四四
客亭……五四六
九日登梓州城……五四七
九日奉寄嚴大夫……五四八
秋盡……五五〇
戲題寄上漢中王三首……五五二
翫月呈漢中王……五五六
從事行贈嚴二別駕……五五七
贈韋贊善別……五六一
寄高適……五六二
野望……五六四
冬到金華山觀因得故拾遺陳公學堂遺跡……五六六
陳拾遺故宅……五六八
謁文公上方……五七〇
奉贈射洪李四丈……五七三
早發射洪縣南途中作……五七五
通泉驛南去通泉縣十五里山水作……五七八
過郭代公故宅……五八〇
觀薛稷少保書畫壁……五八三
通泉縣署壁後薛少保畫鶴……五八六
陪王侍御宴通泉東山野亭……五八八
陪王侍御同登東山最高頂宴……五八九
漁陽……五九二

花底……五九四
柳邊……五九五
聞官軍收河南河北……五九六
遠遊……五九八
春日梓州登樓二首……五九九
有感五首……六〇二
春日戲題惱郝使君兄……六〇九

卷十二

題鄭原郭三十二明府茅屋壁……六一三
奉送崔都水翁下峽……六一四
鄭城西原送李判官兄武判官弟赴成都府……六一六
涪江泛舟送韋班歸京得山字……六一七
泛舟送魏十八倉曹還京……六一八
送路六侍御入朝……六一九
涪城縣香積寺官閣……六二二
泛江送客……六二三
雙燕……六二三
百舌……六二五
上牛頭寺……六二六
望牛頭寺……六二七
登牛頭山亭子……六二八
上兜率寺……六二九
望兜率寺……六三一
甘園……六三二
陪李梓州王閬州蘇遂州李果州登惠義寺……六三三
數陪李梓州泛江戲爲艷曲二首贈李……六三四
送何侍御歸朝……六三六
江亭送眉州辛別駕昇之得蕪字……六三八

行次鹽亭縣聊題四韻……六三九
倚杖……六四〇
惠義寺送王少尹赴成都得峰字……六四一
惠義寺園送辛員外……六四二
又送……六四三
巴西驛亭觀江漲呈竇十五使君二首……六四四
又呈竇使君……六四六
陪王漢州留杜綿州泛房公西湖……六四七
得房公池鵝……六四八
答楊梓州……六四九
舟前小鵝兒……六五〇
官池春雁二首……六五一
投簡梓州幕府兼簡韋十郎官……六五三
漢川王大錄事宅作……六五四
短歌行送祁錄事歸合州因寄蘇使君……六五五
送韋郎司直歸成都……六五七
寄題江外草堂……六五八
陪章留後侍御宴南樓得風字……六六一
臺上得涼字……六六三
送王十五判官扶侍還黔中得開字……六六四
喜雨……六六六
述古三首……六六八
陪章留後惠義寺餞嘉州崔都督赴州……六七三
送竇九歸成都……六七五
章梓州水亭……六七六
章梓州橘亭餞成都竇少尹得涼字……六七八
隨章留後新亭會送諸君……六七九
客舊館……六八一
戲作寄上漢中王二首……六八二
椶拂子……六八四
送陵州路使君之任……六八六
送元二適江左……六八八

九日……六八九
對雨……六九一
薄暮……六九二
閬州奉送二十四舅使自京赴任青城……六九三
王閬州筵奉酬十一舅惜別之作……六九五
閬州東樓筵奉送十一舅往青城得昏字……六九六
放船……六九八
薄遊……七〇〇
嚴氏溪放歌……七〇一
警急……七〇三
王命……七〇四
征夫……七〇六
西山三首……七〇七
與嚴二郎奉禮別……七一〇
贈裴南部……七一三
巴山……七一四
早花……七一五
發閬中……七一七
江陵望幸……七一八
愁坐……七二〇
遣憂……七二一
冬狩行……七二三
山寺……七二七
桃竹杖引贈章留後……七三〇
將適吳楚留別章使君留後兼幕府諸公得柳字……七三三
舍弟占歸草堂檢校聊示此詩……七三七
歲暮……七三九
送李卿曄……七四〇
釋悶……七四一
贈別賀蘭銛……七四三

杜少陵詩集 卷七

文學博士 鈴木虎雄 譯解

新安吏 【原注】收京後作。雖收兩京、賊猶充斥。

新安の吏 【原注】京を收めて後作る、兩京を收むと雖も賊猶充斥す。

客行新安道。喧呼聞點兵。
借問新安吏。縣小更無丁。
府帖昨夜下。次選中男行。
中男絕短小。何以守王城。
肥男有母送。瘦男獨伶俜。
白水暮東流。青山猶哭聲。
莫自使眼枯。收汝淚縱橫。

客行く新安の道、喧呼兵を點するを聞く。
新安の吏に借問すれば、「縣小にして更に丁無し。
府帖昨夜下る、次選中男行く」といふ。
中男絕だ短小なり、何を以てか王城を守らむ。』
肥男は母の送る有り、瘦男は獨り伶俜たり。
白水暮に東流す、青山猶哭聲。
自ら眼をして枯れ使むる莫れ、汝が淚の縱橫たるを收めよ。

眼枯(三〇)卽見骨。天地(三一)終無情。』　眼枯れて卽ち骨を見はすも、天地終に情無し。』
我軍(三二)取相州(三三)。日夕(三四)望其平(三五)。　我が軍相州を取る、日夕其の平ならむことを望む。
豈意(三六)賊難料(三七)。歸軍(三八)星散營(三九)。　豈に意はむや賊料り難く、歸軍、營に星散す。
就糧(四〇)近故壘(四一)。練卒(四二)依(四三)舊京(四四)。　糧に就きて故壘に近づき、卒を練りて舊京に依る。
掘壕(四五)不到水(四六)。牧馬(四七)役(四八)亦輕。　壕を掘るも水に到らず、馬を牧する役も亦輕し。
況乃王師順(四九)。撫養(五〇)甚分明(五一)。　況んや乃ち王師の順なるをや、撫養甚だ分明なり。
送行(五二)勿泣血(五三)。僕射(五四)如父兄(五五)。』　行を送るも血に泣くこと勿れ、僕射は父兄の如し。』

【字解】【一】新安　河南省河南府の新安縣なり。【二】收京　京は長安及び洛陽をさす。【三】賊　安慶緒等の軍。【四】充斥　「左傳」(襄公三十一年)にみゆ、みちひろがること。【五】客　旅客、作者自らいふ。【六】喧呼　やかましく大ごゑをだす。【七】點兵　兵籍に點つけをして人數をしらべる。【八】借問　作者がかりにたづぬる。【九】吏　縣の小役人。【一〇】縣小　此句より「次選」の句まで吏の語なり。【一一】無丁　丁は壯丁、兵卒としてめしださるるわかき男子。【一二】府帖　府がだした兵籍なり、府は縣の上級官廳なり。【一三】下　縣へきたこと。【一四】次選　第一位のものなくなりしゆゑ第二位のものをえらぶこと。【一五】中男　唐にては民を年齡によりて黃・小・中・丁・老等に區別す。年次によりちがひあるも天寶三歲には十八歲以上を中男とし、二十三歲以上を丁とせり、こは丁無きを以て中男をとるをいふ。【一六】行　東都をまもるためにゆく。【一七】中男絕短小　此句及次句は作者の胸中なり、絕は「はなはだ」短小はからだのせいひくくちひさし。【一八】王城　東都洛陽の城。【一九】肥男、瘦男　中男についての肥瘦をいふ、肥はふとり瘦はやせたる體格のものをいふ。【二〇】母送　ははおやが見おくりにきてゐる、こえた男はこの母に愛してそだてられしものならん、之に反しやせた男は母もなくみじめな境遇のものなるべし。【二一】伶俜　單子なる貌、ひとりぼっちのさま。【二二】白水　しろく暮れのこる溪流。【二三】東流　東とは男のゆく方向なり。【二四】青山　附近の山をいふ。【二五】猶　ゆく人已に見えざるになほの意。【二六】哭聲　母、その他の見送る人人のなくこゑ、「肥男」より「青山」まで四句は敍事敍景をはさむ。【二七】莫自使眼枯　此句より末尾の「僕射」の句までは作者が送行者をなぐさむる語なり。眼枯とはあまり泣きつくして淚の枯れ竭くすにいたるをいふ。【二八】收　とりかたづける。【二九】縱橫　次第もなくながるるさま。【三〇】卽見骨　卽の字或は却に作れるも卽をよしとす、「もしも」の意、見骨とはなきかなしみやせて顏面の骨をあらはすにいたるをいふ。【三一】天地終無情　天地はつれなし、とは征戍にゆくべきものをゆかぬ樣にはしてくれぬこと。【三二】我軍　官軍。【三三】相州　鄴城。【三四】日夕　旦夕として用ふ。【三五】望　こちらが希望する。【三六】豈意　意外にも。【三七】料　はかる、豫想する。【三八】歸軍　九節度の敗け軍をいふ、「歸」(もどつてくる)の字を用ひしは作者敗をいふことをきらひしなり。【三九】星散營　敗軍がそれぞれの軍營に星のごとくばらばらにちらばつてかへる。【四〇】就糧　兵食のある場所につく。【四一】故壘　洛陽ちかくのもとのとりで。【四二】練卒　兵卒を訓練する。【四三】依　根據とする。【四四】舊京　洛陽をさす。【四五】掘壕　ほりをほる。【四六】不到水　淺くほるをいふ。【四七】牧馬　うまをまきばでかふ。【四八】役　力しごと。【四九】王師順　王師は官軍、順は正道にかなへるをいふ。【五〇】撫養　兵卒を愛撫し食物をあたへること。【五一】分明　その事疑ふべからざるをいふ、だれにもはつきりわかつてゐる。【五二】送行　わが子の征戍にゆくのをおくる。【五三】泣血　血のなみだをだしてなく。【五四】僕射　郭子儀をさす、子儀は至德二載五月に滏水に敗れ、司徒より降され左僕射となる。乾元の初には中書令たりしを以て前の「洗兵行」(馬)には「郭相」といへり、この詩はまた貶官を用ひて僕射と稱せり、僕射は射を主どる義なりといふ。【五五】如父兄　兵卒に對して親切なるをいふ。

【題義】作者乾元元年冬末華州をはなれて洛陽に至り、二年に洛陽より華州にかへるとき、途上にて新安の吏と問答して此の詩を作る。此詩より「無家別」に至る三吏・三別六篇は「垂老別」を除きて

同時の作なり。前後の事情は次の如し、官軍は至徳二載九月癸卯に長安を回復し、十月壬子に洛陽を回復す、翌乾元元年に賊安慶緒が勢また振ひ、相州（鄴城）を成安府とす。九月に郭子儀に詔して李光弼等九節度の兵凡そ二十萬を率ゐ安慶緒を討たしめ之を相州に圍む。二年三月慶緒は救を魏州の史思明に求む、官軍利あらず、南に向つて潰え、諸節度の軍引いて還る。郭子儀は朔方軍を以て河陽の橋を斷ちて洛陽を保ち、南北兩城を築きて之を守る。詔して東都に留守たらしむ。この詩中の兵卒は新安より募集されて洛陽の郭子儀が軍へとやらるるなり。

【詩意】自分が新安の道路をとほつてゆくと、やかましく人ごゑがして兵の點檢がはじまつてゐる樣にきこえる。どういふ次第かと新安の小役人にたづねてみると、彼がいふに『この縣は小さくてこのうへもはや壯丁としてとるべきものはゐませぬ。ゆうべ府から兵籍がさがつてきましたが、前述のわけで第二位のわかものをえらぶので「中男」がこんどゆくのでございます」と。さうであつたか、みれば中男はひどくせもひくくみなりもちひさいが、こんなをとこで王城が守れるのかしらん。』中男のなかにはこえた男がゐるがそれはおつかさんが見送りにきてゐる。またやせた男がゐるがそれはひとりよるべなくさびしさうにみえてゐる。みちばたの溪流が暮れのこる白き光をうかべて東にむかうてながれゆくのに、あたりの青山には見送る人人のなきかなしむ聲がまだたえずひびいてゐる。（以下作者の語）おまへがたはそんなに泣いてしせん涙をからしつくさぬがよい。ともかくその樣にみだれおつる涙をとりかたづけられるがよろしい。たとひ泣きからして骨がでるほどになつたとて、この天地といふものはつれないものでいたしかたのないものだ。』（作者の語つづく）我が官軍は賊軍の手から相州（鄴城）を取るといふので、自分たちはあさばんそれが平らぐのをまちつつあつたのだ。それに意外にも賊の力は豫想しにくくて、彼等がかへつて勝つたため我が九節度等のもどり軍隊はそれぞれの營にちりぢりになつてかへつてしまふことになつた。そのうちで郭僕射の軍隊はこれまでのとりでに近づいて糧食に就き、もとのみやこ（洛陽）を根據として訓練をせらるるのである。ほりをほることもあらうが水のでるところまでふかくほるといふではなく、馬を牧養するというたとて輕い力わざにすぎない。そのうへ賊軍とはちがひ官軍は道理の順當な軍隊で、兵卒を愛して養うてくださることはうたがひもないことである。だからおまへがたも自分の子どもの出征をみおくるにしても血の涙をながしてなくにはおよばぬのである。總司令官たる郭僕射は彼等にとつては父兄のやうにいつくしんでくださるお方である。

潼關吏（一）

潼關の吏

（二）士卒何（三）草草。（四）築城潼關道。』

士卒何ぞ草草たる、城を築く潼關の道。』

（五）大城（六）鐵不如。（七）小城（八）萬丈餘。

大城は鐵も如かず、小城は萬丈餘。

(九)借問(一〇)潼關吏。修關還備胡。　潼關の吏に借問すれば、「關を修めて還胡に備ふ」といふ。
(一一)(一二)要我下馬行。爲我指(一三)(一四)山隅。　我を要して馬より下りて行かしめ、我が爲めに山隅を指す。
(一五)連雲列(一六)戰格。飛鳥不(一七)能踰。　雲に連りて戰格を列す、飛鳥も踰ゆる能はず。
(一八)胡來但(一九)自守。豈(二〇)復憂(二一)西都。　「胡來らば但だ自ら守らむ、豈に復た西都を憂へむや。
(二二)丈人視(二三)要處。(二四)窄狹容(二五)單車。　丈人要處を視よ、窄狹にして單車を容る。
(二六)艱難(二七)奮長戟。(二八)萬古(二九)用一夫。　艱難に長戟を奮ふに、萬古一夫を用ふ」と。』
哀哉(三〇)桃林戰。(三一)百萬化爲魚。　哀い哉桃林の戰、百萬化して魚と爲る。
請(三二)(三三)囑防關將。愼勿學(三四)哥舒。　請ふ防關の將に囑せむ、愼みて哥舒を學ぶこと勿れ、と。』

【字解】〔一〕潼關　陝西省華州華陰縣の東北、河南省河南府閿鄉縣の西六十里にあり。〔二〕士卒　兵卒。〔三〕草草　勞苦する貌、せわしさうなさま。〔四〕築城　城は城壁。〔五〕大城　大なる城壁。〔六〕鐵不如　鐵の堅きもそれにおよばぬ、城の極めて堅固なるをいふ。〔七〕小城　小さい城壁。〔八〕萬丈餘　これは山巓にまたがりてきづく故に甚だ高きなり。〔九〕借問　作者が試みに問ふ。〔一〇〕修關還備胡　此句は吏が答ふる詞なり、修關とはこの潼關を修理すること、還は「また」、この前に一どここで戰ひて敗れしに拘らずこんどもまたの意、胡とは安慶緒・史思明等の賊軍をいふ。〔一一〕要　邀なり、むかへること。〔一二〕我　作者。〔一三〕指　吏がゆびさしてしめす。〔一四〕山隅　山のすみのかた。〔一五〕連雲二句　仇氏は吏の詞とみたるも余は從はず、敍景の文とみる。〔一六〕戰格　格とは障害物をいふ、戰格は防禦用の柵なり。〔一七〕不能踰　嚴重にして飛びこゆることができぬ。〔一八〕胡來六句　これは吏の詞なり、胡來は賊が攻めてくること。〔一九〕自守　こちらでまもりふせぐ。〔二〇〕復　前四に對して「また」といふ。〔二一〕西都　長安をさす。〔二二〕丈人　長者に對する敬稱、吏が作者をさしていふ。〔二三〕要處　要害のばしよ。〔二四〕窄狹　みちはばせまし。〔二五〕容單車　敵が攻めこむにもひとつの兵車だけしかいれられぬ。〔二六〕艱難　國事なんぎのときをいふ。〔二七〕奮長戟　奮は用力をいふ、いきほひこんで長いほこを使ふこと、味方につきていふ。〔二八〕萬古　永久、いつもの義。〔二九〕用一夫　一人の武夫を用ふれば事足るをいふ。〔三〇〕桃林戰　天寶十五載六月哥舒翰の靈寶の敗戰をいふ、桃林とは塞の名、河南府靈寶縣の西にあり、秦の函谷關の地、凡そここより西、潼關まではみな桃林と稱す。周の武王が牛を桃林の野に放ちし處なるを以てなり。〔三一〕百萬化爲魚　百萬とは多くの兵卒をいふ、時に哥舒翰の兵は二十萬なり、「北征」にも潼關百萬師とみえたり。翰は宦者の督促により已むを得ず兵を引いて潼關より出で靈寶の西原に至りて賊軍とであひて大敗し、黃河に墜ちて死せしもの數萬人。化爲魚とは溺死せしことをいふ。〔三二〕囑　たのむこと。〔三三〕防關　このせき所を防禦する大將。〔三四〕哥舒　哥舒翰。

【題義】官軍相州を圍みて敗れしにより、潼關を修理して賊の入寇を防がむとす、作者たまたまその防禦築城の場所をすぎ吏と問答してこの詩を作る。

【詩意】ここの潼關の道ではなんであの樣にせわしさうに兵卒どもが城をきづいてゐるのだらうか。』大きな城は堅固で鐵さへおよばぬほどであり、小さな城も萬丈あまりの高いところにきづかれてある。なぜこの樣にするのかとせきしよの役人にたづねてみると、役人のいふには、「この關しよを修理してまた賊が攻めてくるのにそなへるのだ」といふ。』さういつて役人は自分をむかへて馬からおりてあるかせ、自分のために山のすみの方をゆびさししてしめす。その方をみると雲にまでつづいて障害物の柵がならんでをり、飛ぶ鳥さへとびこえられぬ嚴重さである。』役人がいふに、「かうやつて

あれば、賊が攻めてきたときはこちらはただ自ら守ればよいので、二どと長安方面を氣づかふにはおよばぬのである。あなたは要害の箇所をとくとごらんなさい、路はばがせまくてたつた一つのいくぐるましかいれることができませぬ。一朝國家の難儀のときに味方が長い戟をふるふならば、ここを守るには永久にただ一人の兵士だけでたくさんである」と。』まことに哀いことであつた、前年桃林の戰のとき官軍は大敗して百萬の兵士が溺死して魚とかはつてしまつたではないか。自分はこのせきを防ぐ大將におたのみしたい、どうかつつしんで前年の哥舒翰のまねをせぬ樣にと。

石壕吏

石壕の吏

暮投石壕邨。有吏夜捉人。

暮に石壕邨に投ず、吏有り夜人を捉ふ。

老翁踰墻走。老婦出門看。』

老翁墻を踰えて走る、老婦門を出でて看る。』

吏呼一何怒。婦啼一何苦。

吏呼ばはること一に何ぞ怒れる、婦啼くこと一に何ぞ苦しめる。

聽婦前致詞。三男鄴城戍。』

婦が前みて詞を致すを聽く、「三男は鄴城の戍り。

一男附書至。二男新戰死。

一男は書を附して至る、二男は新に戰死す。

存者且偸生。死者長已矣。』

存する者すら且生を偸む、死せる者は長へに已んぬ矣。』

室中更無人。惟有乳下孫。

室中には更に人無し、惟乳下の孫有り。

孫有母未去。出入無完裙。』

孫、母有りて未だ去らず、出入に完裙無し。』

老嫗力雖衰。請從吏夜歸。

老嫗力衰へたりと雖も、請ふ吏に從うて夜歸らむ。

急應河陽役。猶得備晨炊。』

急に河陽の役に應せば、猶晨炊に備はることを得む」と。』

夜久語聲絕。如聞泣幽咽。

夜久しくして語聲絕ゆ、聞くが如し泣いて幽咽するを。

天明登前途。獨與老翁別。』

天明前途に登るとき、獨り老翁と別る。』

【字解】【一】石壕　河南省陝州陝縣の石壕鎭なり、今、硤石といふ。陝州よりは東、新安よりは西に在り。【二】投　投宿すること。【三】石壕邨　唐時は村名たりしなり。【四】捉　とらへんとする、徵發のためなり。【五】老翁　作者の投宿せる民家の主人翁なり。【六】老婦　主人翁の妻。【七】出門看　仇氏本は「出看門」に作りて、上句の邨、人と韻を協へんとせるも、今、諸本により「出門看」とす、蓋し看も丘虔切の音（ケン）ありといへば、邨、人と協へしものならん。【八】聽　作者がきく。【九】婦　上の老婦。【一〇】前致詞　前は吏の方へ前進すること、致詞とは吏に向つて言辭を申しあげること。【一一】三男鄴城戍　此句より猶得備晨炊まで十三句は老婦の詞なり、三男は三人の男兒なり、鄴城は已に屢〻見えし相州のこと、戍はそこへまもりにいつてゐること。【一二】一男　三男兒のなかの一人の男兒。【一三】附書至　附とは他人に付託せること、書は手紙、至とはこの家に到來せしこと。【一四】二男　三男兒のなかの他の二人。【一五】存者　生存してをるもの、手紙をよこした男兒をさす。【一六】且偸生　しばらくかりにいきてをる、いつ死ぬとも知れぬをいふ。【一七】死者　戰死せし二人の男兒をいふ。【一八】長已矣　死してかへられば永久にいたしかたなし。【一九】室中　家の奧のへやでは。【二〇】更無人　ほかにだれもゐぬ。【二一】乳下孫　ちちにぶらさがつてゐるまご、三男兒中の長男にあたる

もの子なるべし、而してその長男は蓋し戰死せる二男兒中の一ならん。【二二】孫有母未去 仇氏本は「孫有」を「有孫」に作れるも孫の字は上句の孫字をただちに承けずしては不都合と考ふる故に諸本に從ひ「孫有」を取る。母未去とは母は孫の母、長男の妻、老婦にとりては「よめ」にあたる、未去とは長男戰死せば年わかのよめならば或は里方にかへりもすべきにさはせず、なほこの家から去らぬをいふ。【二三】出入 へやからのではひり。【二四】無完裙 完全にして破れぬはかまとては無い、いつもぼろぼろのはかまをつけてゐる。【二五】老嫗 おばあさん、老婦吏に對して自ら稱す。【二六】夜歸 歸とは河陽の方へと赴くをいふ。【二七】急應 いそいで役命にしたがふ。【二八】河陽役 河陽は縣の名、唐の孟州に屬す、今河南省懷慶府孟縣の西、これは黃河の北にあり。仇氏は又孟津を引きて之に充つ、孟津は黃河の南にあり、浦氏はその必ず孟津をさすべく、孟縣をさすべからざるをいへり。愚案するに、郭子儀の孟の三城は、河の南にも北にもありしものなれば、必ず孟津のみをさすとは定めがたし、役とはまもりのしごとをいふ。【二九】備 わが身のわざをそれに充てること。【三〇】晨炊 あさのごはんたき。【三一】夜久四句 作者の立ちばより敍す。【三二】語聲絕 人のはなしごゑがたえてなくなる、語聲は蓋し吏婦の問答。老婦と少婦・老翁との告別のこゑなど。【三三】如聞 聞こえた樣だ、蓋し作者已に寢に就き將に睡らんとして未だ睡らざるの際に之をきくことをいふ。【三四】泣幽咽 かすかにむせびなく、これは「よめ」や老翁のなきごゑなり。何人が泣きしかについて仇氏・楊倫等は「よめ」がなきしととく、浦氏も同說ならん、これは老翁は墻をこえて走り匿れて在らずとみる故なり、しかし吏と老婦との問答にて老婦が翁に代りてゆくことにきまりしうへは老翁あらはれ來るもさしつかへなし、故に余は上句の語聲にも老翁加はりをるとみ、この泣聲にも老翁加はりをるとみる、仇氏が「老翁は曉になつてからもどつてきた」といへるは奇異におもはる。【三五】天明 よあけ。【三六】登前途 作者翌日の旅途にのぼること、華州へと向ふをいふ。【三七】獨 ひとりとは老翁一人をいふ、老婦は已に河陽の役に赴き、少婦（よめ）には別を告げず。

【題義】 石壕の村にて役人が河陽へゆくべき人夫を徵發するとき、こどもを二人まで戰死させた老婦人が乳のみの愛孫を家にのこし、その夫の老翁に代りて出かけることをのべたる詩。製作時は前詩に同じ。

【詩意】 自分が日暮に石壕の村にはひつてとまると、役人が夜に人をつかまへ樣としてゐる。やどのおぢいさんはつかまへられぬ樣にと墻をこえて走りだす、おばあさんは門から出てそとをみつめてゐる。』なんであの樣に役人が大聲をだしておこつてゐるのか。なんであの樣におばあさんが苦しさうにないてゐるのだらうか。ばあさんがすすみでて役人に申しだす所をよくきいてゐると、次の如くいふ「わたくしに三人の男の兒がありますがみんな鄴城へまもりにいつてをりまする。』「そのうちひとりの兒は人に手紙をあづけてよこしまして手紙はまゐりました。他のふたりの兒はちかごろ戰死してしまひました。死んだものはもどる氣づかひはありませぬ、永久にいたしかたもありませぬ。生きのこつてゐるものだとてまあかりに生きてゐるだけのことで、なんどき死なうも知れぬのでござります。』「奧のへやにはだれもほかに人はゐませぬが、ただまだ乳ばなれをせぬ孫がござります。この孫には母がありましていまだにこの家を去らずにをりますが、出るにも入るにも滿足に破れぬはかまとてはもちませぬ。』老嫗は力が衰へはしましたが、どうか吏のおともをして今夜まゐりませう。すぐに仰せにしたがつて河陽のお仕事をしにまゐりますならば、これでもあさのごはんたきぐらゐにはおまにあひませうとぞんじます。』夜がだんだんふけてきたとき、人のはなしごゑがとだえた。おぼろげにかすかにむせび泣きするこゑがきこえた樣であつた。翌朝よがあけて自分がたびぢへふみだすときにはただおぢいさんとだけ別れをつげて立ち去るのであつた。』

新婚別

新婚の別れ

兎絲附蓬麻。引蔓故不長。

兎絲、蓬麻に附す、蔓を引くこと故より長からず。

嫁女與征夫。不如棄路傍。

女を嫁して征夫に與ふるは、路傍に棄つるに如かず。

結髪爲君妻。席不煖君牀。

髪を結びて君が妻と爲る、席、君が牀を煖めず。

暮婚晨告別。無乃太怱忙。

暮に婚して晨に別れを告ぐ、乃ち太だ怱忙なる無からむや。

君行雖不遠。守邊赴河陽。

君が行遠からずと雖も、邊を守りて河陽に赴く。

妾身未分明。何以拜姑嫜。

妾が身未だ分明ならず、何を以てか姑嫜を拜せむ。

父母養我時。日夜令我藏。

父母我を養ひし時、日夜我をして藏せしむ。

生女有所歸。雞狗亦得將。

女を生みて歸がしむる所有れば、雞狗だも亦將ることを得。

君今往死地。沈痛迫中腸。

君今死地に往く、沈痛中腸に迫る。

誓欲隨君去。形勢反蒼黃。

誓つて君に隨つて去らむと欲するも、形勢反つて蒼黃たり。

勿爲新婚念。努力事戎行。

新婚の念を爲すこと勿れ、努力して戎行を事とせよ。

婦人在軍中。兵氣恐不揚。

婦人軍中に在らば、兵氣恐らくは揚がらざらむ。

自嗟貧家女。久致羅襦裳。

自ら嗟す貧家の女にして、久しく羅襦裳を致せしことを。

羅襦不復施。對君洗紅粧。

羅襦復た施さず、君に對して紅粧を洗はむ。

仰視百鳥飛。大小必雙翔。

仰いで百鳥の飛ぶを視るに、大小必ず雙び翔る。

人事多錯迕。與君永相望。

人事錯迕多し、君と永く相望まむ。

【字解】【一】兎絲　ネナシカツラ。【二】附　くつついて生ずる。【三】蓬麻　ヨモギ、アサ。【四】引蔓　つるをひきはえる。【五】故　「因」と同じ、もとより。【六】不長　みじかきをいふ、「兎絲」二句は「興」の體のたとへなり、女蘿は松柏のうへにかかりて生ずるゆゑにそのつるながし、兎絲は蓬麻のごとき草のうへにかかるゆゑにつる短し、つるの短長を以て婦人の運命の末までのびると否とをたとへしなり。【七】嫁女　むすめをよめにやる。【八】征夫　征戍にでかけるをとこ、此句まで起四句は詩人としての敍述なり、以下は婦人としてのぶ。【九】結髪　かみをゆふ、男女ともこどものときはつのがみ、さげがみなり、成人すればかみをゆふ、男は二十歳にして冠し、女は十五にして笄す。【一〇】君妻　君とは婦人よりをつとをさす、以下同じ、仇氏本には「君妻」を「妻子」に作る、「妻子」も亦「つま」の義なれども今「君妻」とあるを取る。【一一】席　むしろ。【一二】不煖　あたたかなるにいとまあらざるをいふ。【一三】君牀　をつとのねだい。【一四】無乃　無の字反語によむ。【一五】太怱忙　あんまりせわしい。【一六】守邊　かたゐなかの地方をまもる。【一七】河陽　前詩の地と同じ。【一八】妾身　妾は婦人の謙遜の自稱、身は身分、資格をいふ。【一九】未分明　はつきりきまらぬ、古禮に婦人は嫁してのち三月たちて之を夫家の廟に告げ、薦まゐりし、始めて成婚とす、成婚以後に婦と舅・姑の名分定まる。【二〇】拜　禮拜する。【二一】姑　しうとめ。【二二】嫜　舅姑を併せていふ語なり、わけていふときは嫜は姑の夫、すなはち舅のことなりといへり。【二三】養我　我とは婦人みづからをいふ。【二四】藏　「草堂詩箋」に閨內護惜とし、おくふかくそだてしこととせり。余は詩經の不忮不求、何用不臧、または既見君子、庶幾有臧、等の臧の字義に非ざるかと疑ふ。臧は善なり、「よからしむ」とは幸福にして

くれしことをいふ。【二五】所歸　歸は嫁をいふ、「とつぐ」なり。【二六】雞狗亦得將　將の字、舊解には攜帶、將行の義とす、「ひきゐる」なり、之に從へば、雞狗をつれてゆくは、室家長久の計を爲さんと欲するなりといへるも、それにては下文との關係うすきに似たり。余はず次公の說によりこの將は詩經の百兩將之の將のごとく「送る」義かとおもふ、送の義をとるは下文の自己が夫に隨ひ、夫を送りゆく能はざるを反撥せんため用ひしものとみるなり。【二七】往死地　仇氏本には「生死地」に作るも諸本に從つて往死地とす。死地とは河陽の征戍地をさす。【二八】沈痛　ふかき心のいたみ。【二九】中腸　はらわたの内部。【三〇】形勢反蒼黃　草堂箋に「行役の急なるを謂ふ」ととく。しからば形勢とは時事のありさまをいふ、されど余は自己夫妻間のありさまをいふものと考ふ、反つてとはその然るべからざるをいふ。蒼黃は倉皇に同じ、あはただしきさま、妻の身として夫につき從ひゆくはあまりにあわてふためくに似たり。【三一】新婚念　新婚のことを心にとめる。【三二】事　わが大切なしごととする。【三三】戎行　軍中の行伍なり、いくさなかまのこと、ただなかまの人をいふに非ず、なかまの仕事をいふなり。【三四】兵氣　軍隊の士卒の意氣。【三五】揚　ふるひおこるをいふ。【三六】久致　致とは使用してなりしこと。【三七】羅襦裳　羅襦（うすぎぬの袖無しのうはぎ）羅裳（うすぎぬの下衣）。【三八】施　身につけること。【三九】對君　あなたの面とむかつて、みてゐるめのまへで。【四〇】洗紅粧　紅粧は紅粉の粧をいふ、べに、おしろい、のよそほひ、洗はあらひさること。【四一】雙翔　雌と雄とならびかける。【四二】錯迕　錯はまじはる、迕はさからひたがふ、いろいろのもつれをいふ。【四三】永相望　あへるときまで永久にながめてまつ。

【題義】新婚夫婦の生き別れするものあるを見て、婦人のこころもちをのべたる詩なり。製作時は前詩に同じ。

【詩意】兔絲が「よもぎ」や「あさ」のくきにくつついて生えても、そのつるのひつぱりかたは長くのびるわけのものではない。女子もただの人によめにやればそのゆくすゑものびるであらうが、征伐にやられるをとこなどによめにやつたのではすゑがのびぬ。征伐にゆくをとこにやるくらゐなら路ばたへすてた方がましなくらゐである。』わたくしは髮をとりあげてむすぶ年ごろにあなたの妻となりましたが、よめにきたてであつて、あなたのねだいにしいてある席がまだあたたまらぬほどしか日かずがたたぬ。ゆふぐれに婚禮をしてあしたははや別れをつげるとは、あんまりせわしないことではござりませぬか。あなたのおでかけは遠くはないとはいふものの、かたゐなかの地方を守るために河陽へとおゆきなされるのである。わたくしはよめとはいへ、よめたるの身分がまだはつきりきまつてはゐませぬ。どうしてよめだというてしうとごしうとめさまに拜禮ができませうぞ。』わたくしの兩親がわたくしを養うてくだされたときには、ひるもよるもわたくしに幸福であれとておそだてくだされた。（舊解、わたくしを大切に奥深くおそだてくだされた。）むすめをうんでそれをほかへよめいらせるときには、家つきのにはとりやいぬさへもそれを送つてゆけるとまをすに（よめにきたわたくしは夫のたびたちにはお送りすることがなりませぬ。）あなたはともすれば死なねばならぬ樣な場所へおゆきなされるとのこと、それをおもへば心のおくそこのいたみがはらわたの内へひしひしとせまる樣なここちがいたしまする。心にちかつてあなたについてゆかうかともかんがへますが、それではあんまりあわてた樣子にもみえませう。（舊解、せわしないおんたびゆゑそれもなりませぬ。）』おでかけのうへは新婚のことなど心にとめてはくださらず、せいせいつとめていくさなかまのおしごとばかりをなさる樣にしてくださいませ。軍隊のなかにをんなが居るとあつては、恐らくは軍隊の士氣のふる

ひおこることはむつかしいでありませう。ああ、わたくしは貧しい家のむすめでござりますのに、よめにきたてとはいへ、がらにもなくながながうすぎぬの袖無しうはぎや、したぎぬを身につけてをりました。こんどといふこんどはそのうはぎなどは二度とは用ひますまい。あなたのごらんのおめのまへでべにおしろいもすつかり洗ひおとしてしまひませう。』そらをあふいでさまざまの鳥のとぶのをみてみるのに、大きなとりも小さなとりもきつと雌と雄とがならびかけてをりまする。それにどうしたことか、人間の事がらといふものはままならぬもつれの多いものでござりまする。お別れするは是非もないこと、このうへはただいつまでもおたがひ心をかへず、おあひするそのときまで心待ちにながめくらすでござりませう。』

垂老別

四郊未寧靜。垂老不得安。

子孫陣亡盡。焉用身獨完。

投杖出門去。同行爲辛酸。

幸有牙齒存。所悲骨髓乾。

垂老の別れ

四郊未だ寧靜ならず、老ゆるに垂んとして安かなるを得ず。

子孫陣亡し盡く、焉ぞ身の獨り完きことを用ひむ。』

杖を投じて門を出で去る、同行爲めに辛酸なり。

幸に牙齒の存する有るも、悲しむ所は骨髓の乾くを。

男兒既介冑。長揖別上官。

老妻臥路啼。歳暮衣裳單。

孰知是死別。且復傷其寒。

此去必不歸。還聞勸加餐。

土門壁甚堅。杏園度亦難。

勢異鄴城下。縱死時猶寛。

人生有離合。豈擇衰盛端。

憶昔少壯日。遲廻竟長嘆。

萬國盡征戍。烽火被岡巒。

積屍草木腥。流血川原丹。

何鄕爲樂土。安敢尙盤桓。

棄絶蓬室居。塌然摧肺肝。

男兒既に介冑し、長揖して上官に別る。』

老妻路に臥して啼く、歳暮れて衣裳單なり。

孰か知らむ是れ死別なるを、且復た其の寒からむことを傷む。

此を去つては必ず歸らず、還聞く加餐を勸むるを。』

土門壁甚だ堅し、杏園度るも亦難し。

勢は鄴城の下に異なり、縱ひ死するも時猶寛ならむ。

人生、離合有り、豈に衰盛の端を擇ばむや。

昔の少壯なりし日を憶ひて、遲廻して竟に長嘆す。』

萬國盡く征戍、烽火、岡巒に被る。

積屍、草木腥く、流血、川原丹し。

何の鄕か樂土爲る、安んぞ敢て尙盤桓せむ。

蓬室の居を棄絶して、塌然肺肝を摧く。』

【字解】〔一〕垂老　老ゆるになんなんとす、老境にちかづくをいふ。〔二〕四郊　王城の四方の野外、ただし四方をいふなり。

【三】寧靜 やすらかにしづか、平和をいふ。【四】安 自身の安泰をいふ。【五】陣亡 戰死。【六】焉用 用なし。【七】身獨完 わがからだひとり完全に生存する。【八】投杖 つゑをなげだす。【九】出門 我が家の門を出でて征役に從はんとするなり。【一〇】同行 いつしよにゆく人人。【一一】爲 わがために。【一二】辛酸 かなしくつらいおもひをしてくれる。【一三】幸有四句 これは老人が同行者に示す意氣ごみなり。【一四】骨髓乾 乾は內分泌液のなくなること。【一五】男兒 老人自ら稱す、丈夫といふのたぐひ。【一六】介冑 よろひ、かぶと。【一七】長揖 起立しながらゑしやくすること。【一八】上官 自己を徵發に來りし役人の長なるべし。【一九】老妻 年よりのつま、この老人の妻なり。【二〇】歲暮 必ずしも年末をさゝず、秋以後はみな歲暮といふ、これは蓋し乾元二年秋以後をさす、此語については驗吏に「題義」の條に說くべし。【二一】單 ひとへのものをきてゐる。【二二】孰知 知るものなし、氣がつかぬ。【二三】死別 死にわかれ。【二四】傷其寒 傷とは老人がいたむこと、其寒とは老妻のさむきこと。【二五】此去 「こののち」と同義、時につき將來をいふ、場所についていふに非ず。【二六】不歸 老人自らもどり來らぬこと。【二七】聞 老人がきく。【二八】勸加餐 老妻が老人に加餐せよとすすめるなり、加餐とは食物を多くとりて養生すること。【二九】土門 仇氏は直隸省正定府の井陘縣にある井陘關なりとせり、しからば賊の山西省に入るを防ぐ處なり、浦氏は下文に勢異鄴城下とあるにより鄴城にて敗れしものが鄴城より北にて賊の根據地にちかき井陘をもちだして、縱死時猶寬といふはずなしとて仇說の非なるをいへり。【三〇】壁 城壁。【三一】杏園 仇氏は河南衞輝府汲縣の杏園鎭をひく、浦氏之を駁し、「唐書」に郭子儀杏園より河を渡りて衞州を圍むの記事あれば杏園は黃河の南岸にあるべく北に在るべからずといへり。浦氏の說にては土門も杏園も其地の所在たしかならずとす、ただ浦氏は杏園は河陽（浦氏は河陽を河の南岸とす）の附近の地ならんとせり。【三二】度 渡と同じ、賊軍がわたること。【三三】勢異 今回の官軍の形勢が以前とちがふをいふ。【三四】鄴城下 乾元二年三月鄴城の下にて九節度の軍の大敗せしこと。【三五】寬 切迫せぬこと、餘裕あること。【三六】離合 わかれたり、であふたり。【三七】豈擇 えらばぬ。【三八】衰盛端 仇氏本は「衰老端」に作れるも、衰老端にては一事にてえらぶといふことあたはず、「衰盛」とあるに從ふべし、元氣の衰へた時と盛なるとき、離合は時に定めなきをいふ。【三九】遲廻 ぐづぐづしてまへへすすまぬさま。【四〇】長嘆 ためいきしてなげく。【四一】萬國 天下ぢう。【四二】征戍 征伐や戍衞。【四三】積 まろきみれ。【四四】何 鄉 どのむらさと。【四五】樂土 樂土・樂國は詩經に見ゆ、安樂な土地。【四六】盤桓 ぶらぶらしてゐること。【四七】蓬室 よもぎふのいへ。【四八】塌然 地面の低下しおつるさま、意氣のくづれる貌。

【題義】 或る老人が老衰の身におよんで河陽の方面へ征戍にでかけるとき妻に別れることをのべたる詩。「三吏」・「三別」は乾元二年春洛陽より華州へかへる途中の作とせらるるが、此篇の「歲暮」の二字は人生の晚暮をあらはすならば「遲暮」等の字面を用ふべきにより、季節の歲暮をあらはすものとみざるべからず、季節をあらはすとせば乾元二年の秋以後とせざる可からず、何となれば下文「勢異鄴城下」とあれば、事は乾元二年三月九節度の大敗以後たるを要す。而して秋初には作者已に秦州に赴けり。黃鶴の注には此詩を乾元二年冬晚の作ならんといへるが冬には作者同谷に赴けり。史を案ずるに乾元二年秋七月李光弼は郭子儀に代りて朔方節度使兵馬元帥となり洛陽に赴き、十月史思明と河陽に戰ひて大に之を敗る。詩中に土門・杏園等をいひ老人の河陽に赴くものなるは推測せらるれば老人は光弼が軍に赴くものなるべく、時期は秋以後にあらん。製作地は「遣興」・「留花門」・「佳人」等が秦州の作なることと、此篇には十月河陽の勝を豫想しをらざることとによつて秦州ならんとかんがふ。然らばこの「垂老別」は華州途上の作にはあらず、後人類を以て之を此に置きたるものとみるべきなり。

【詩意】 四方が平和にをさまらないので、自分はこの老いかかつた身ながらにおちついてゐることができぬ。子も孫もみな戰死しつくしたいまはこの身體だけ完全であることもいらぬことだ。』（こん

なにかんがへて）たよりにした杖をなげすてて我が家の門からでかけてゆくと、いつしよにゆくなかまのものは自分のためにかなしんでくれる。自分には牙や齒はまだのこつてゐるが、悲しいことには骨髓にしめりけがなくなつた。しかし自分はもはや男兒としてよろひかぶとを身につけて、立ちゐしやくしてうは役の方におわかれしてでてゆくのだ。』このをり、自分の老いた妻は路にふして啼いてゐる、みれば歲の暮れなのにひとへのうすい衣裳をきてゐる。このたびのわかれは死にわかれだとだれが心づかうか、にもかかはらず自分はかへつてまたいささか妻の寒さうなのについて心をいためる。自分はいまでかければのちにはきつともどらぬにきまつてゐる、にもかかはらず自分は妻が自分に對して多く食事をして養生せよというてくれるのを耳にするのである。』（いやそんなに心配したものでもないよ）、土門の城壁ははなはだ堅固であるし、杏園の渡りも賊がわたつてくるには困難である。現在自分のでかけてゆく地（河陽ならん）の官軍のありさまは鄴城の下でまけた時とはちがつて有利であるから、たとひ戰死するにしてもいますぐといふわけでなくゆとりがあるであらう。人間世界ではあふとわかれとは時節がきまりないものだ。血氣盛んなときだけわかれをさせ、衰へたときにはわかれをさせぬといふ樣なものではない。しかし自分はわかく元氣であつた昔のことをおもうて、今もあのころのやうならばとかんがへて、にはかには立ち去りかねてけつきよくためいきしてなげくばかりである。』いまや天下ぢうみんな征伐や衞戍ばかりで、のろし火が岡や山にかぶさつてをり、しかばねは積まれて草木もなまぐさく、血は流れて川やのはらもまつかにそまつてゐる。どこの地方が安樂世界なのか、そんなところはないのだ。どうしてなほここにのつそりぶらついてゐられよう。自分は斷然としてすみなれたよもぎふのやどを棄てさるのである。そのためぐつたりとしてつらさに肺や肝までくだけるのである。』

無家別

寂寞天寶後。園廬但蒿藜。

我里百餘家。世亂各東西。

存者無消息。死者爲塵泥。

賤子因陣敗。歸來尋舊蹊。

久行見空巷。日瘦氣慘悽。

但對狐與狸。豎毛怒我啼。

四隣何所有。一二老寡妻。

宿鳥戀本枝。安辭且窮棲。

無家の別れ

寂寞たり天寶の後、園廬、但蒿藜。

我が里、百餘家、世亂れて各東西す。

存する者は消息無く、死せる者は塵泥と爲れり。

賤子、陣敗に因り、歸り來つて舊蹊を尋ぬ。

久行、空巷を見れば、日瘦せて氣慘悽なり。

但狐と狸とに對す、毛を豎てて我を怒りて啼く。

四隣には何の有る所ぞ、一二の老寡妻。

宿鳥、本枝を戀ふ、安んぞ辭せむ且窮棲するを。

(二七)方春獨荷(二八)鋤。日暮還灌(二九)畦。』　方に春にして獨り鋤を荷ふ、日暮れても還畦に灌ぐ。』

縣吏知我至。召令習鼓(三〇)鞞。　縣吏、我が至るを知り、召して鼓鞞を習は令む。

雖(三一)從(三二)本州役。內顧(三三)無所(三四)攜。　本州の役に從ふと雖も、內に顧みるに攜ふる所無し。

(三五)近行止(三六)一(三七)身。遠(三八)去終(三九)轉迷(四〇)。　近く行くに止一身、遠く去らば終に轉た迷はむ。

(四一)家鄉既盪(四二)盡。遠(四三)近理亦齊(四四)。』　家鄉既に盪盡す、遠近、理亦齊し。』

(四五)永(四六)痛長病母。五(四七)年委(四八)溝谿。　永く痛む長病の母、五年、溝谿に委するを。

生我不(四九)得力。終(五〇)身兩(五一)酸(五二)嘶。　我を生むも力を得ず、終身兩ながら酸嘶しき。

人生無(五三)家別。何以爲蒸(五四)黎。』　人生、無家の別れ、何を以てか蒸黎と爲さむ。』

【字解】　【一】無家　家とは室家の義、妻をさす、無家とは妻なきをいふ。【二】寂寞　さびしきさま。【三】天寶後　天寶十四載安祿山の叛きし以後。【四】園廬　はたけ、いほり。【五】蒿藜　よもぎ、あかざ。【六】里　村里。【七】東西　人が東に西にちりぢりになりしこと。【八】存者　いきのこつてゐるもの。【九】消息　たより。【一〇】爲塵泥　死骸くちてちりどろにかはる。【一一】賤子　いやしきもの、この別をなすをとこの謙稱。【一二】陣敗　いくさのまけ、これは乾元二年三月鄴城の敗軍をさす。【一三】舊蹊　村のもとからのこみち。【一四】久行　久しく他方へであるいてをりしこと。【一五】空巷　だれも人のゐぬこうぢ。【一六】日痩　太陽の光の力なきさま。【一七】氣　氣象。【一八】慘悽　ものがなしきさま。【一九】豎毛　毛をさかだてる。【二〇】四隣　四方のとなりや。【二一】何所有　なにがあるか、あるものはなにか。【二二】寡妻　やもめをんな。【二三】宿鳥　木にやどるとり。【二四】本枝　もとすんでゐたえだ。【二五】安辭　どうしていなまう、いなまず、甘んずる。【二六】且窮棲　まあまあこまりながらすんでをること。【二七】方春　ちやうど春のをりに、この春は乾元二年の春をいふなるべし。【二八】荷鋤　すきをになふ、耕作に從事すること。【二九】灌畦　灌は水をそそぎいれること。畦は「うね」。【三〇】鼓鞞　鼓は「たいこ」、鞞は「こつづみ」。【三一】從　從事する。【三二】本州役　自己の籍の屬する州のしごと、華州をいふか。此の句は他鄉へゆかぬをいふ。【三三】內顧　みづから內部をかへりみてみるに。【三四】所攜　てをひきあふもの、妻子眷屬をいふ。【三五】近行　すなはち本州の役に從ひつつあることをさす。【三六】止　とどまると訓ずるも可、便宜「ただ」とす。【三七】一身　わがみひとつ。【三八】遠去　自己が遠方他處へゆくこと。【三九】終　おしまひには、結局。【四〇】迷　仇氏は「往くに定所なきをいふ」とし、楊倫は「將來、未だ骨を何の所に埋むるやを知らず」とす。案ずるに前程にめあてなきを迷といふ。【四一】家鄉　自家も故鄉も。【四二】盪盡　人も物もすつかりなくなるをいふ。【四三】遠近　上の近行、遠去をうけていふ。【四四】理亦齊　よい運命にであはぬといふ道理は相ひとし。【四五】永痛　永久に心をいためる。【四六】長病母　ながわづらひのははおや。【四七】五年　五年間、天寶十四載より乾元二年まで。【四八】委溝谿　みぞやたににうちすててある、死して泉下に歸せしをいふ、溝谿は溝壑のごとき意に用ひたり。【四九】不得力　我が扶養を得ざることをいふ。【五〇】終身　しやうがい。母と己とについていふ。【五一】兩　ふたりながら、ともに。【五二】酸嘶　ひどくつらくおもひてなく。【五三】無家別　家に人なくしてしかも我が家にわかれさること、じつはわかるべきあひてのなきわかれなり。【五四】蒸黎　蒸は衆なり、もろもろ、おほくなり、黎は黒きこと、頭になにもかぶらずかみの黒きをあらはしてをる人民をいふ。

【題義】　妻子も母もなにもなきひとりぼつちの男が他方へ征役にやられんとし、その家にわかれさるこころをのべたる詩。乾元二年春華州にての作なるべし。

【詩意】　天寶の騷亂以後はわが地方もあれてさびしくなり、はたけやいほりにはただ「よもぎ」だの「あかざ」が生えはびこるばかりとなつた。自分のむらには百軒あまりの家があるのだが、世がみだ

れてから住民はそれぞれ東に西に散つてしまうて、いきのこつてゐるものはたよりもなく、死んだものは泥やちりにかはつてしまつた。』自分は戰爭にでてをつたがいくさがまけたによつて村へかへつてきて、なつかしいもとのこみちをたづねてみる。ながながであるいてゐていまだれもゐないこうぢを見てみると、太陽のひかりも力なげにあたりの氣象ものがなしさうにみえる。わがむかひに立つものはただ狐や狸であり、彼等は自分に對して怒るかのごとく毛をさかだてて嘷くのである。』またに近所となりにはなにがあるかとみると、一人二人のとしよりやもめがゐるばかりである。樹にやどる鳥はやはりもとすんだ枝がこひしい。（あれはてたとて自分は故鄕がこひしい。）こまりながらすむことでもどうして自分はそれをいなまうぞ。ちやうど春なので自分はただひとり鋤をになうて日がくれてもまだはたけのうねに水をそそぎいれてゐる。』ところがわが縣の役人は自分がもどつてきたことを知つて、自分をよびだしていくさ太鼓やこつづみをうつことをならはせる。自分はお上のためしかたなしに所屬の州のしごとには從事してゐるものの、さて一私人として內部をふりかへつてみると、自分には手をひきあふ所の妻子眷屬といふものがないのだ。縣內だけの近いところをゆくにもわが身ひとつである。もしもつと遠方の地にゆくのであつたらつまりはいよいよ前途わけのわからぬ境涯になつてしまふことであらう。しかしまたかんがへてみれば一家一鄕なにもすつかりなくなつたいまでは、近いところも遠いところもどこにしてもどうせよい運命にであはぬといふ道理はおなじことだ。』自分がことに永久いたましくおもふことは、自分のながわづらひをしたおつかさん。あのおつかさんは五年のあひだつめたい地下の水にうちすてられてある。自分といふものをお生みなされたが自分から扶養されるといふめにおあひなされずにおはてなされた。これについてはおつかさんも自分もしやうがいつらくおもうてないたのである。自分はこれからもそのきもちはなくならない。ああ人間世界に於て別るべき家人をもたぬ別れをするとは。これでどうして人民でさふらふのいふことができようぞ。』

夏日歎

夏日出東北。(一)陵天經中街。
(二)朱光(三)徹(四)厚地。(五)鬱蒸何由開。』
(六)上蒼久無雷。(七)無乃(八)號令乖。
雨降不(九)濡物。(一〇)良田起(一一)黃埃。
飛鳥苦熱死。池魚(一二)涸其泥。』
(一三)萬人尙流(一四)穴。(一五)擧目惟(一六)蒿萊。

夏日の歎

夏日東北より出で、天を陵ぎて中街を經る。
朱光、厚地に徹す、鬱蒸、何に由りてか開けむ。』
上蒼久しく雷なし、乃ち號令の乖くなる無からむや。
雨降るも物を濡さず、良田に黃埃起る。
飛鳥、熱に苦しみて死す、池魚其の泥に涸す。』
萬人尙流穴、目を擧ぐれば惟蒿萊。

至今大(一七)河北。化作虎(一八)與豺。　今に至りて大河の北、化して虎と豺と作る。
浩(一九)蕩想幽(二〇)薊。王(二一)師安(二二)在哉。』　浩蕩、幽薊を想ふ、王師安くに在りや。』
對(二三)食不能餐(二四)。我心殊未諧(二五)。　食に對して餐する能はず、我が心殊に未だ諧はず。
眇(二六)然貞觀(二七)初。難與數子(二八)偕(二九)。』　眇然たり貞觀の初、數子と偕にし難し。』

【字解】【一】陵天經中街　或は「經天陵中街」に作るといへり。陵は「しのぐ」、經は「わたる」、經歷すること。中街は天の中央のみちをいふ。【二】朱光　太陽のあかきひかり。【三】徹　とほる。【四】厚地　あついぢめん。【五】鬱蒸　むしあつきさま。【六】上蒼　あをぞら。【七】無乃　ではあるまいか。【八】號令乖　乖は「そむく」、「易」にては雷を號令の象とす、いま雷なし、因つて號令の正を失ふかと疑ふなり。【九】潤　うるほす。【一〇】良田　よきたんぼ。【一一】黃埃　きいろのほこり、田面かわくゆゑほこり起る。【一二】涸其泥　涸は水のかれること、涸其泥とは泥上に涸死せんとすること。【一三】萬人　萬民なり。【一四】流冗　流とは移轉すること。冗とは家居なきこと。【一五】舉目　目をあげて見わたすかぎり。【一六】蒿萊　よもぎ、あれくさ。【一七】大河　黃河をさす、その北方は賊軍の巢穴なり。【一八】虎與豺　盜賊をたとへていふ。【一九】浩蕩　大なる貌。【二〇】幽薊　幽州范陽郡、薊州漁陽郡は唐の時倶に河北道に屬せり。【二一】王師　くわんぐん。【二二】安在哉　どこにゐるか、之を認むる能はざるをいふ。【二三】對食　食物にうちむかふ。【二四】餐　食事すること。【二五】諧　ととのふ、心の平調を得ること。【二六】眇然　渺然の意、はるかなる貌。【二七】貞觀　唐の太宗の年號、その時、房玄齡・杜如晦・王珪・魏徵等の名臣多し、故に之を思ふ。【二八】數子　上記の諸臣をさす。【二九】偕　「ともにす」、同時に生存して國政に參與するをいふ。

【題義】乾元二年の夏、四月旱す、因つて氣候と時事とについて歎を發す。華州にての作。

【詩意】夏の太陽が東北からでて、天をしのいで中央のみちをとほる。（或は「天をとほつて中央のみちをしのぐ」）。その赤い光は厚い大地までとほるし、どうしたらばこのむしあつくるしさが散開さることであらうか。』そらにはながらく雷が無い、それは上の號令にまちがひがあるのではなからうか。雨がふつても物をうるほす程度にはふらず、よい田地もかわいてほこりがたつてゐる。飛ぶ鳥も熱にくるしんで死んでしまひ、池の魚も泥のなかでかれ水にうごめいてゐる。』人民たちはまだ流散してゐるし、みわたせば見ゆるものはよもぎだのあれくさだのばかりである。今日になつては黃河以北の地はすつかり虎や豺のやうな盜賊ばかりにかはつてしまつた。遠く幽州薊州の方面を想像してみるに官軍といふものがどこにゐるか、ゐないではないか。』自分は食物にむかつてもそれをたべることはできず、心の中はことにととのひ平かなること能はざるものがある。はるかに貞觀年代の初のさまをかんがへてみるに、あのころ居た三四人の人人といつしよに事ができたらばとおもはれるのであるが、それはできぬことである。（遺憾な次第である）。』

夏夜歎

夏夜の歎

永日不可(一)暮。炎蒸毒(二)我腸。　永日、暮る可からず、炎蒸、我が腸を毒す。
安(三)得萬里風。飄颻(四)吹我裳。』　安んぞ萬里の風の、飄颻として我が裳を吹くことを得む。』

昊天(五)出華月(六)。茂林(七)延(八)疎光(九)。
仲夏(一〇)苦夜短。開軒(一一)納(一二)微涼(一三)。
虛明(一四)見纖毫(一五)。羽蟲(一六)亦飛揚。
物情(一七)無巨細(一八)。自適(一九)固其常(二〇)。』
念彼(二一)荷戈士(二二)。窮年(二三)守邊疆(二四)。
何由一洗濯(二五)。執熱(二六)互相望(二七)。
竟夕(二八)擊刁斗(二九)。喧聲(三〇)連萬方(三一)。
青紫(三二)雖被體(三三)。不如早還鄉(三四)。』
北城(三五)悲笳(三六)發(三七)。鸛鶴(三八)號且翔。
況復(三九)煩促(四〇)倦。激烈(四一)思時康(四二)。』

昊天、華月出づ、茂林、疎光を延く。
仲夏、夜の短きに苦しむ、軒を開きて微涼を納る。
虛明、纖毫を見る、羽蟲も亦飛揚す。
物情、巨細と無く、自ら適するは固より其の常なり。』
念ふ彼の戈を荷ふの士、窮年、邊疆を守る。
何に由りてか一たび洗濯せむ、熱を執りて互に相望む。
竟夕、刁斗を擊つ、喧聲、萬方に連る。
青紫、體に被ると雖も、早く鄉に還らむには如かずとす。』
北城、悲笳發る、鸛鶴、號び且つ翔ける。
況んや復た煩促に倦むをや、激烈、時の康からむことを思ふ。』

【字解】【一】不可暮　暮るる能はざるをいふ。【二】毒　つよく害を與ふるをいふ。【三】安得　希望をしめす。【四】飄颻　ひらひら。【五】昊天　昊は元氣博大の貌、夏のそらを昊天といふ。【六】華月　ひかりあるつき。【七】茂林　しげつたはやし。【八】延　ひく、月光をむかへいれるをいふ。【九】疎光　疎散のひかり。【一〇】仲夏　五月。【一一】開軒　軒は「のきば」。【一二】納　こちらへいれる。【一三】微涼　すこしのすずしさ。【一四】虛明　空中むなしくしてあきらかなり。【一五】纖毫　ほそいけすぢ。【一六】羽蟲　羽のある小蟲。【一七】物情　事物のこころ、蟲についていふ。【一八】巨細　大小。【一九】自適　自己の意にかなふ樣にする。【二〇】其常　常理常態。【二一】念彼　以下の八句は作者征人に代りてそのさまと情とをうつす。【二二】荷戈士　ほこをになふ人人、從軍の士をいふ。【二三】窮年　年いつぱい。【二四】邊疆　くにざかひ。【二五】洗濯　あつさをあらひ去ること。【二六】執熱　「詩經」小雅桑柔篇に、誰能執レ熱、逝不二以濯一とあり、熱氣のものを手にもちたるとき、その熱を去るには、水にてその手をあらはぬものなきをいふ。孟子(離婁上)に之を引きて、夫國君好レ仁、天下無レ敵、今也、欲レ無二敵於天下一、而不レ以レ仁、是猶二執レ熱、而不一レ以レ濯也といへり。孟子は濯を仁にたとへたり。杜詩の意も表裏の二樣あるなるべし。【二七】互相望　征人等遠近にありてお互に相望む、この相望は冠蓋相望などの相望とおなじく、ただながめるばかりでなく、因つて其の守りの墻域の相連るを示す。【二八】竟夕　よつぴり。【二九】刁斗　大なる「どら」の類、或は之をうちならし、或はこれにて食を煮る。【三〇】喧聲　やかましいおと。【三一】萬方　四方八方の意。【三二】青紫　印の綬(ヒモ)の色、漢の時、丞相太尉は金印紫綬、御史大夫は銀印青綬、武功あるもの此等の官を得れば青紫を佩ぶるをうべし。【三三】被體　からだにおびてきる。【三四】不如早還鄉　この句は從軍者の心でかくかんがふるをいふ、作者の立場よりいふにあらず。【三五】北城　華州の城の北の方面をいふ。【三六】悲笳　かなしさうな笳聲。【三七】發　おこる。【三八】鸛　かうづる。【三九】況復　鸛鶴に對していふ。【四〇】煩促　心のうるさくせまりてくつろがぬさま。【四一】激烈　情のはげしくなること。【四二】時康　時世の安康なること。

【題義】「夏夜の景物と時事とに感じて歎をおこす。」乾元二年五月の作。

【詩意】夏のながい日はなかなか暮れにくく、そのむしあつさは我が腸をさへひどくそこなふのである。どうしたなら萬里の風に我がもすそをひらひら吹かせることができようか。』やがてそらにはなやかな月が出で、茂つた林はその散らばる光をうけいれる。こまることには夏の半期ごろは夜が短いのだ。が、自分はのきばの戶をあけてそとからすこしばかりの涼しさをいれる。外は眼をさへぎるな

にものもなく明るくあつてほそいけすぢさへも見える。羽のはえた蟲も飛びあがりつつある。物はその大小にかかはらずそれぞれの心では自分自分の意に適ふやうにするのがきまりである。(しかるに從軍の人たちはどうだ)。』自分は念ふ、あの戈をせおうて出かけてゐる人たちのことを。あの人たちは、年ぢう國ざかひの方を守つてゐるのだ。彼等は熱いものを手にもちながらおたがひに遠方から望みあつてゐる、どうしたならばその熱氣を水でさらりと洗ひ去ることができようか。彼等從軍の身は夜つびり刁斗をうち鳴らし、そのやかましい聲が八方へつらなつてゐる。いくら功を立てて青紫の印綬をからだにおびる樣になるとしても、それよりか早く故鄉へかへる方がまさつてをると、かやうに彼等は考へるのである。』北城方面では悲しさうな笳の聲が鳴りだして、鸛や鶴がさけびながらかけつてゐる。ましてこの自分は苦熱のため心のくさくさしさにつかれてゐるから、情も激してひとへに時世のやすらかなれかしとかんがへこむのである。』

立秋後題

日月(一)不相饒。(二)節序(三)昨夜隔。
(四)玄蟬無(五)停號。(六)秋燕已(七)如客。
平生(八)獨往願。惆悵年(九)半百。
(一〇)罷官亦(一一)由人。何事(一二)拘(一三)形役。

立秋の後題す

日月、相饒さず、節序、昨夜隔たる。
玄蟬、號ぶことを停むる無きも、秋燕、已に客の如し。
平生、獨往の願ひ、惆悵す年半百。
官を罷むるも亦人に由る、何事ぞ形役に拘せられむ。

【字解】〔一〕不相饒　饒は「ゆるす」、おほめにみてくれること、唐代の俗語なり、許渾が詩句に公道世間唯白髮、貴人頭上不二曾饒一、とある饒も同じ。〔二〕節序　立秋の節をいふ。〔三〕昨夜隔　これによれば此詩は立秋節の翌日の作なり。〔四〕玄蟬　ひぐらしの類。〔五〕停號　なきさけぶことを中止する。〔六〕秋燕　燕は秋になれば立ち去る。〔七〕如客　客はたびびと、自己をさす、自己將に遠地にゆかんとしつつあるゆゑにかくいふ。〔八〕獨往願　世俗をはなれ自由に自己の赴かんと欲する所にゆきたしとのねがひ。「莊子」(在宥篇)に、出二入六合一、遊二乎九州一、獨往獨來、是謂二獨有一とあり。「淮南子」に、江海之士、山谷之人、輕二天地一、細二萬物一、而獨往也、とみゆ。〔九〕半百　五十歲のこと、時に作者は四十八歲なるも成數をあげていふ。〔一〇〕罷官　華州司功の官職をやめること。〔一一〕由人　他人のためにやめさせられるをいふ、自己は頓著するに及ばずとする意あり。〔一二〕拘　拘泥する、そのことにかかはりなづむ。〔一三〕形役　肉體に使役さるること、心の側よりいふ、官途にあることをさして形役といへり。陶淵明の歸去來辭に、既自以二心爲一レ形役一とあり。

【題義】乾元二年の立秋節の翌日華州にありて、まさに官をやめ秦州の方へ赴かんと志したるときの感をのべし作なり。

【詩意】月日は遠慮會釋もなくすぎゆくもので、いま立秋になつたとおもうたに、それはやくも昨夜のこととへだたつてしまつた。ひぐらしは鳴きつづけてゐるが、燕はもう旅人(自己にあてていふ)のやうに立ち去るのである。自分はふだんから獨自に自由に往來することを願つてゐたが、うらめし

くもいつのまにか五十歳ちかくになつたのだ。自分は官をやめるがそれは先方の御勝手である、自分としてはなんで肉體のために心を奴隷化させる樣な仕事にへばりついてゐることがあらうぞ。

貽阮隱居(一)名防。

阮隱居に貽る　名は防。

陳留(二)風俗(三)衰。人物(四)世不數(五)。　陳留、風俗衰ふ、人物、世數へず。
塞上(六)得阮生(七)。迥繼先父祖(八)。』　塞上、阮生を得たり、迥に繼ぐ先父祖。』
貧知靜者(九)性。白益毛髮古(一〇)。　貧には知る靜者の性、白は益す毛髮の古なるを。
車馬(一一)入鄰家(一二)。蓬蒿(一三)翳(一四)環堵(一五)。　車馬、鄰家に入る、蓬蒿、環堵に翳し。
清詩(一六)近道要(一七)。識子(一八)用心苦(一九)。』　清詩、道要に近し、識る子が心を用ふるの苦しめるを。』
尋我草逕(二〇)微(二一)。褰裳(二二)踏寒雨(二三)。　我を尋ぬ草逕の微なるに、裳を褰げて寒雨を踏む。
更議(二四)居(二五)遠村(二六)。避喧(二六)甘(二七)猛虎。　更に遠村に居らむことを議す、喧を避けて猛虎を甘んず。
足明(二八)箕潁客(二九)。榮貴(三〇)如糞土(三一)。』　明かにするに足る箕潁の客、榮貴は糞土の如くなるを。』

【字解】【一】阮隱居　隱退の士阮防なり。【二】陳留　河南の開封府の地方の古名、魏の阮籍は陳留尉氏の人、防が先祖なり。【三】風俗衰　風俗は昔はよかりしに後世衰へてわるくなれり。【四】人物　傑出せる人物。【五】不數　かぞふるに足らざること。【六】塞上　秦州をさす、この地は羌夷と接して關塞多きを以てかくいふ、塞は城寨なり。【七】阮生　防をさす。【八】先父祖　阮籍の父は瑀、子は渾、姪は咸、咸が子瞻、瞻が弟孚、咸がたび修、孚がいとこ放、放が弟裕、みな當世に名を知らる、籍等をさして先きの父祖といふ。【九】靜者　人がらの沈靜なるもの。【一〇】毛髮古　古とは老成の古貌をいふ。【一一】車馬　富貴の人ののる車馬。【一二】鄰家　防がとなりのいへ。【一三】蓬蒿　よもぎぐさ。【一四】翳　くらし、生ひしげりかぶさつてゐること。【一五】環堵　めぐらせるどべい。【一六】清詩　さつぱりとした詩、防がつくる所のもの。【一七】近道要　道德の肝要なものとへだたりなし。【一八】識子　識とは作者が知ること、子は防をさす。【一九】用心苦　辛苦して心をつかふ。【二〇】草逕　草のはえたこみち。【二一】微　あるか無きかのほそさ。【二二】褰裳　もすそをかかげる。【二三】踏寒雨　寒雨のみちをふむ、寒雨とあれば秋冬間の雨をいふ。【二四】議　相談する。【二五】居遠村　現住の地よりはなれた遠方の村にすむ。【二六】避喧　やかましさをさける。【二七】甘　平氣で苦にせぬこと。【二八】足明　明かに知るに足るをいふ。【二九】箕潁客　昔、堯のとき許由巢父といふ隱遁者ありて箕山潁水の地方にのがれすみたりと傳ふ、箕潁客とはかかる隱遁の士はといふこと、防をあてていふ。【三〇】榮貴　世にときめき身分顯貴となること。【三一】糞土　つまらぬものをいふ。

【題義】乾元二年の秋冬の間に作者秦州に至り、そこにて隱遁者阮防にあひ、之におくりたる作なり。此篇より以下は秦州に移りてのちの作なり。

【詩意】陳留の風俗は昔はよかつたが後代に及んで衰へてしまひ、傑出した人物は世間に於てかぞへるに足るものがない。ところがこの秦州の塞上へ來て始めて自分は阮生なるものを得た。阮生は非凡であつてはるかにその先代の父祖の風をつぐものである。』彼は貧しくあるがその貧しいことによつて彼の沈靜な性をもつてゐるものであることがわかるし、かみの毛の白くなつてゐるのを見ればいよ

いよその古めかしいさまが加へらるる。彼の住宅には土塀がめぐらされてゐるがそれはよもぎの草でおほひかぶせられてゐるので、車馬で來訪する人などはかれの家にはひらずまちがつて鄰の家へはひつてしまふ。かれの作る詩はさつぱりとして道德の肝要を得たるに近いものであり、以てそのいかに詩を作るに苦心してゐるかがわかる。』　この彼が有るか無きかの草のこみちをわけて自分をたづねてくれ、寒雨のみちをもすそをかかげながらやつて來た。物語りのするゐはさらに遠方の村へ移住しようではないかと相談した。塵俗のやかましさを避くるのが目的で猛虎の害があつてもそれは苦にせぬといふのである。古代の許由・巢父にも似た彼にとつては世間の榮貴は糞土ぐらゐにしかあたらぬものだとしてゐることがこれでよく知らるるのである。』

遣興三首

興を遣る　三首

下馬古(一)戰場。四顧但茫然。　馬より下る古戰場、四顧すれば但茫然たり。

風悲浮雲去。黃葉墜我前。　風悲みて浮雲去り、黃葉、我が前に墜つ。

(二)朽骨(三)穴螻蟻。又(四)爲蔓草纏。　朽骨には螻蟻穴す、又、蔓草に纏はる。

(五)故老行歎息。今人(六)尙開邊。　故老、行くゆく歎息す、今人、尙邊を開く、と。

(七)漢虜互勝負。(八)封疆不(九)常全。　漢虜互に勝負あり、封疆、常には全からず。

(一〇)安得(一一)廉頗將。(一二)三軍同(一三)晏眠。　安んぞ廉頗將を得て、三軍同じく晏眠せむ。

【字解】【一】古戰場　秦州城の附近にあるものをいふ。【二】朽骨　戰死者のくちたるほね。【三】穴螻蟻　穴はあなをつくるをいふ。螻蟻は「けらむし」、「あり」。【四】爲蔓草纏　爲二蔓草所一レ纏の略なり、つるぐさにまとはれる。江淹が恨賦に、蔓草縈レ骨、拱木斂レ魂、とみゆ。【五】故老　在來の老人たち。【六】尙開邊　今日もなほ邊疆の土地を開いて廣めんとする、尙の字に之を怪訝にたへずとする意あり。【七】漢虜　唐と、異種の夷と。【八】封疆　くにさかひ。【九】常全　きまつて缺損なきをいふ。【一〇】安得　希望をしめす語。【一一】廉頗　戰國の時の趙の良將なり。【一二】三軍　上中下の三軍、全軍の義。【一三】晏眠　おそくまでねむる、安泰のさま。

【題意】作者秦州に至りて折りにふれて思ひをやるために作りたる詩なり。詩中の事實によるに乾元二年秋の作なり。

【詩意】自分は古戰場へきて馬からおりて、四方をふりかへつてみるとただ茫漠としてとりとめもない樣子である。風は悲しさうに吹いて浮き雲が飛び去るし、黃ばんだ木の葉が前にとおちちる。地上に橫はつてゐる戰死者のくちた骨には「けら」・「あり」のたぐひが穴をつくつたり、またはつるぐさにからめられたりしてゐる。とほりかかる老人たちが途すがらなげきつつ語ることには、今時の人は今日が日になつてもまだ此のかたよつた地方を開き廣めようとしてをるのであるか、と。自分がおもふに、我が中國（唐）とえびすとはいくさをしては一勝一敗で、くにざかひはいつも完全を保ちうる

といふわけにゆかぬだ、どうしたならば、むかしの廉頗のやうな名將を得て、全軍がいつしよにおそくまでねむつてゐることができることになれるのであらうか。

【餘論】「漢虜」以下亦故老の言のつゞきとみるも可なるに似たり。

〔二〕

高秋登寒山。南望馬邑州。　高秋、寒山に登りて、南、馬邑州を望む。
降虜東擊胡。壯健盡不留。　降虜、東、胡を擊ち、壯健なるは盡く留まらず。
穹廬莽牢落。上有行雲愁。　穹廬、莽として牢落たり、上に行雲の愁ふる有り。
老弱哭道路。願聞甲兵休。　老弱、道路に哭し、願くは甲兵の休するを聞かむといふ。
鄴中事反覆。死人積如丘。　鄴中、事、反覆す、死人、積むこと丘の如し。
諸將已茅土。載驅誰與謀。　諸將は已に茅土なり、載ち驅るも、誰とともにか謀らむ。

【字解】【一】高秋　天高き秋。【二】寒山　寒天の山。【三】南望　秦州よりさして南の方をのぞむ。【四】馬邑州　唐の開元十七年秦州と成州との間に置きたる州名。寶應元年成州の鹽井に徙す。秦州都督府に屬す。代州の馬邑をさすに非す。【五】降虜　秦州附近の降參せしえびすをいふ。【六】胡　安・史の殘黨をいふ。【七】壯健　降虜の壯健なるもの。【八】留　ゐのこる。【九】穹廬　テントをはりたるいほ。【一〇】莽　はつきりせぬさま。【一一】牢落　さびしきさま。【一二】上　テントの上方。【一三】行雲　とびゆく雲。【一四】老弱　居民の老いたるもの、よわきもの、弱とは婦兒をさす。【一五】甲兵休　よろひ、武器の事のやむこと、いくさのなくなることをいふ。【一六】鄴中　卽ち鄴城、河南の彰德府臨漳縣。「新安吏」、「石壕吏」をみよ。【一七】事反覆　官軍が勝つとおもひしに反對にひつくりかへりてまけとなる。【一八】如丘　多きをいふ。【一九】諸將　官軍の諸將。朔方大將軍孫守亮等九人を異姓王とし、李商臣等十三人を同姓王となせし等の事をさす。【二〇】茅土　王侯に封ずること。尙書の「禹貢」の厥貢惟土五色の句の注に、王者が諸侯を建つるときには、之を封ずる方位に從つて、その方位の色の土（東方は靑色、南方は赤、西は白、北は黑、中央は黃）を割きて之に與へて社を立てしめ、その土は黃土を以ておほひ、白き茅を以てつつむ、とみゆ。因つて王侯に封ぜらるることを茅土といへり。此句は憤激してのべたるものなり。【二一】載驅　詩經の「載馳」の詩に、載馳載驅、歸唁衞侯」とみゆ、載驅の二字之より借用したるも、これは單に自己が馬を驅る義なり、第一首に「下馬」とあり、作者は馬にのりつつありしなり。舊說に之を諸將のさまととくものあるも今取らず。【二二】謀　國を治むることについて相談する。

【詩意】高秋の時に自分は寒天の山にのぼつて、南の方馬邑州の方をながめる。いま降參した附近のえびすたちは東のかた賊軍をうちにでかけてゐるので、壯健なものはすつかり居なくなつてゐる、だからかつて彼等がゐたテント小屋も陰氣にさびしさうにつらなつてをり、その上の方にはうれはしさうな雲がうごきつつある。老人や婦童らはみちに哭して、どうか戰爭がやまつたといふことをききたいものだというてをる。今豫期とちがつて鄴城のいくさの樣子はすつかり反對になり、官軍はまけて死人のしかばねは積んで丘のやうになつてゐる。このとき武將たちは茅土をうけて王侯に封ぜられてをる。（厚顏無恥の甚しいものではないかとの意）。自分は憂へながら馬を驅りつつあるが、こんな人人ばかりではだれと國事を相談すべきやうもない。

〔三〕

豐年孰云遲。甘澤不在早。
耕田秋雨足。禾黍已映道。
春苗九月交。顏色同日老。
勸汝衡門士。勿悲尙枯槁。
時來展才力。先後無醜好。
但訝鹿皮翁。忘機對芝草。

〔三〕

豐年、孰か遲しと云はん、甘澤、早きに在らず。
耕田、秋雨足り、禾黍已に道に映ず。
春苗、九月の交、顏色、同日に老す。
汝衡門の士に勸む、悲む勿れ尙枯槁するを。
時來らば才力を展べむ、先後、醜好無し。
但だ訝る鹿皮の翁が、機を忘れて芝草に對せしことを。

【字解】【一】豐年　耕作物の收穫の多きとし。【二】孰云遲　遲くともおそしなどとだれがいはうか、是は遲速は論ずるに足らざるをいふ。【三】甘澤　雨露のよきうるほしをいふ。【四】不在早　「早きに在らず」とは早きが貴いといふわけではないといふこと。【五】映道　みのりの色が道路にてりはえてゐる。【六】春苗　春でたなへ。【七】九月交　九月十月のあはひをいふ。【八】顏色　苗の色。【九】同日老　この老は老熟の義、同日とは一般に同時にといふこと。【一〇】衡門士　隱者をいふ、但し自己を他人視していふ、衡門といふは柱を立て、その上方に一本わたしたる門にて隱者の家の門なり。【一一】尙　晩年に至つてなほの意。【一二】枯槁　かれてうるほひ無きこと、貧賤のすがたなり。【一三】時來　よき時運到來すれば。【一四】展才力　自己の才能實力をのばす。【一五】先後無醜好　先後はあとさき、醜好はみにくきと、かほよきと、好は壯年にて先なり、醜は晩年にて後なり、先後無醜好とは無先後醜好をいふ。【一六】訝　いぶかる、あやしくおもふ。【一七】鹿皮翁　仙人なり。淄川の人にて少き時府の小吏となる。岑山のうへに神泉あり、翁屋を作りてその傍に留まり、芝を食し泉を飲むこと七十餘年、あるとき淄水あふれ出づ、翁、宗族家室を呼びて山の半に上らしむるに、水いでて盡く一郡をただよはす。翁また宗族等をして下山せしめ、己は鹿皮衣を著けてまた山に上る、後百餘年下りて藥を齊の市に賣るといふ。【一八】忘機　からくりの心を忘る、機心といふこと莊子（天地篇）にみゆ。【一九】對芝草　鹿皮翁は芝草を食したるゆゑ、之に對すといふなり。

【詩意】豐作の年はそれが來さへすればよいので遲いからとておそいなどと不平をいふものはあるまい。また耕作物に對してくださる甘露のしめりも早くおりるだけがよいといふわけではないのである。いま耕へされた田地には秋の雨が十分たりて「きび」などのみのりの色がはや道路にてりはえてゐる。春の頃でた苗は九・十月のあはひとなれば、どれも一樣に老熟の色を見せるのである。（耕作物已に此の如し、人も亦た之に類せるものあり。）自分は汝、隱遁の人士におすすめする、「あなたは今尙ひからびてゐるなどと悲むことなかれ。時運さへ到來するならば必ずあなたの才力をのばすことができるのであつて、決して少壯美好のときに先づ功を爲さねばならぬといふはずも無く、また老年醜惡のときに後れて功を爲すがわるいといふはずも無いのである」と。自分はかくはいふものの、さてあの鹿皮翁といふ昔の仙人は、なんで世俗の機心を忘れて山中の芝草とむきあつて生活してゐられたものであるか、なかなかできさうにもないことである、そこが不思議でたまらぬ。（暗に鹿皮翁を以て自己に擬するなり）。

留花門

花門天驕子。飽肉氣勇決。高秋馬肥健。挾矢射漢月。自古以爲患。詩人厭薄伐。修德使其來。羈縻固不絶。胡爲傾國至。出入暗金闕。中原有驅除。隱忍用此物。公主歌黃鵠。君王指白日。連雲屯左輔。百里見積雪。長戟鳥休飛。哀笳曙幽咽。田家最恐懼。麥倒桑枝折。沙苑臨清渭。泉香草豐潔。渡河不用船。千騎常撇烈。胡塵踰太行。雜種抵京室。花門既須留。原野轉蕭瑟。

花門を留む

『花門は天の驕子、肉に飽きて氣勇決なり。高秋、馬肥健なり、矢を挾みて漢月を射る。』古より以て患と爲す、詩人、薄伐を厭ふ。德を修めて其をして來らしむ、羈縻固より絶えず。胡爲れぞ國を傾けて至り、出入、金闕に暗きや。中原に驅除有り、隱忍して此物を用ふ。』公主、黃鵠を歌ひ、君王、白日を指す。雲に連りて左輔に屯す、百里、積雪を見る。長戟、鳥、飛ぶことを休む、哀笳、曙に幽咽す。田家最も恐懼す、麥倒れて桑枝折る。』沙苑、清渭に臨む、泉香ばしく草豐潔なり。河を渡るには船を用ひず、千騎常に撇烈たり。胡塵、太行を踰え、雜種、京室に抵らむとす。花門既に留むるを須たば、原野轉た蕭瑟たらむ。』

【字解】【一】留　唐の方へひきとめおくをいふ。【二】花門　堡の名なれども回紇種族そのものをさす、詳は上卷三六二頁にいだせり。【三】天驕子　漢書の匈奴傳に胡者、天之驕子也、とみゆ、胡のえびすは天のだだつこ（やんちやもの）なりといへるなり。【四】飽肉　肉食に十分あきる。【五】氣　氣象。【六】射漢月　漢の月に向つて矢をいる、漢とは唐をいふ。【七】詩人　詩經の詩の作者をさす。【八】厭薄伐　詩經の「六月」の詩に周の宣王が北狄をうつことをのべて、薄伐玁狁、至于太原といへり、薄伐の二字之より借用す、玁狁は後世の匈奴なり、厭は「いとふ」なり。【九】修德　中國の天子たるものが自己の德をおさむること、「國語」に先王之制、戎翟荒服者、有不王、則修德とみゆ。【一〇】使其來　其とはえびすをさす、來は來り從はしむるをいふ。【一一】羈縻　どちらも「つなぐ」こと、馬に羈といひ、牛に縻といふ、四方の夷狄をこちらへつけておくこと、牛馬をつなぎとめておくごとくなるをいふ。【一二】胡爲　胡は何と同じ、「なんすれぞ」、どういふわけで。【一三】傾國至　彼の一國のものどもをつくして中國の方へやつてくる。【一四】出入　えびすのではひりすること。【一五】暗　無數なるゆゑ「くらし」といふ。【一六】金闕　黃金をかざりし天子の宮殿のわきのごもん。【一七】中原　洛陽方面をさす。【一八】驅除　驅り除くべきもの、卽ち賊黨安慶緖・史思明等をさす。【一九】隱忍　がまんして。【二〇】此物　回紇のえびすをさしていふ。【二一】公主歌黃鵠　公主は天子の姬宮をいふ、公羊傳に天子至尊、嫁女不自主婚、使同姓主之、故曰公主とみゆ。歌黃鵠は故事あり、漢の武帝の元封中に、江東王建が女細君を以て公主となし、烏孫國の昆莫に妻はす、昆莫年老い言語通ぜず、公主悲みて歌を作る、その中に願爲黃鵠兮歸故鄕の句あり、事實は唐より回紇へ女をよめにやりしことをいふ、乾元元年七月、肅宗はその幼女寧國公主を以て回紇可汗に妻はせたり、可汗は公主を可敦（回紇の皇后）とし、三千騎を唐へつかはし安慶緖を討つことを助けしめたり。【二二】君王指白日　天子が回紇と親睦のかたき誓約をなすをいふ、君王とは肅宗をさす、指白日とは誓ひの方法なり、眼前にみる明白なる物をさしてちかふこと古の風習なり、或は日をさし、或は江河の水をさすの類こ

れなり。【二三】 連雲　多きをいふ。【二四】 屯　あつまる、たむろする。【二五】 左輔　沙苑の牧馬場地方をさす、詳は上卷二五七頁「沙苑行」にいだす。【二六】 見積雪　或は回紇の衣冠白色を用ふるによりていふとし、或はその旗幟白色を用ふるによりていふとす、余は沙色をいふものとみる。沙苑行に左輔白沙如二白水一とあると同意ならん。【二七】 長戟　ながきほこ。【二八】 休飛　武器のいかめしさにおそるるなり。【二九】 田家　農家。【三〇】 沙苑　同州馮翊縣南十二里に置かれたり、詳は沙苑行をみよ。【三一】 渭　水の名。【三二】 泉香　わきいづるいづみの水かんばし。【三三】 豐潔　多くしてきよらか。【三四】 渡河　黄河をわたる。【三五】 不用船　騎馬のままわたるをいふ。【三六】 千騎　多くの騎兵。【三七】 撇烈　潎洌に作るべし、上林賦に見えたり、相擊つ貌。【三八】 胡塵　安・史の兵馬の塵。【三九】 踰太行　太行は直隸・山西のあひだに在る山脈の名、兵塵東より西へひろがり、山西の方へ入るをいふ。【四〇】 雜種　安・史の族はみな雜種なり、これ安・史の族をさす。【四一】 抵京室　長安の宮室の處にまで至らんとする。史思明は乾元二年九月に大梁を取り、洛陽を陷れたり、作者之によりて更にその軍の長安に及ばんことをおそれてかくいへるならん。【四二】 須留　沙苑にとどまることを必要とするならば。【四三】 原野　耕作物の地をいふ、上の麥桑の語と應ず。【四四】 轉　うたた、いよいよ、これは安・史等の兵禍に對比していふ。【四五】 蕭瑟　さびしきさま、掠奪後の一物なき狀をいふ。

【題義】 花門卽ち回紇種族の兵を內地にとどめおくことに就き、そのとどめおく可からざることをのべたる詩なり。製作時は或は乾元元年秋となすも、余は仇氏に從ひ乾元二年秋秦州にゆきて後の作とす。

【詩意】 花門卽ち回紇は天の降せるやんちやものであつて、平生肉食に飽きて氣象勇決なものである。彼等は高秋、馬の肥えてたつしやな時候になると、矢をたばさんで中國の月を射んとするのである。』このえびすどもは古來中國の人がこまりごととしたのであつて、巳に周代の詩人も之を征伐にでかけることをきらうたことをのべてをるのである。それでいくさはなるたけせず、こちらの德を修め感化してそれをこちらへ來させる樣にしむけ、牛馬をつなぐ樣につないで離れさせぬ樣に取り扱ふことは固より絕えずやつてきてをるのだ。ところで回紇はなんでその國をすつかりかたむくるまで擧つてこちらへやつて來て、そのではひりするときには金闕を暗くおほはんばかりにむらがつてをるのであるか。いま中原の地方に逆賊がはびこり、それをおひのけるの必要から巳むを得ず、我慢してこんなしろもの（回紇）をつかつてをるのである。』さらに我が天子の姬宮さまは故鄕なつかしさに黃鵠の歌をおうたひなさる樣な思ひをして彼の地へおよめにおいでなされ、我が君には彼と親睦のため太陽を指してお誓ひになるといふありさまで、彼等の京畿東方の地に雲につらなつてたむろしてをり、その地方は百里の遠くにわたつてまつ白く雪がつもれる如く白く見えてをる。彼等の立てならべてゐる長い戟をみては鳥もおそれて飛ぶことをやめ、哀れな笳の聲があけぼののころにはむせぶが如くなりひびく。農家は最も彼等をおそれるのは麥がたふされたり桑の枝が折られたりするからである。』彼等の居る沙苑は淸き渭水にのぞんでをり、泉水も香ばしく草もゆたかにきよらかである。彼等はそこに馬をとばしてゐるので河をわたるも船は用ひず、千もある騎兵がいつも川波をうちあげて躍りこんでゐる。胡賊の兵馬の塵がまさに太行山を踰え、雜種の族が都までもこようとしてゐる。それだけでもいとふ可きであるのに、花門回紇をとどめておかねばならぬとならば、彼等の過ぐる所いよいよ

もつて原野はさびしく無一物になることであらう。』

佳人

佳人

絕代有佳人。幽居在空谷。　絕代、佳人あり、幽居して空谷に在り。
自云良家子。零落依草木。　自ら云ふ良家の子、零落、草木に依る。
關中昔喪亂。兄弟遭殺戮。　關中、昔、喪亂、兄弟、殺戮に遭へり。
官高何足論。不得收骨肉。　『官高きも何ぞ論ずるに足らむ、骨肉を收むるを得ず。』
世情惡衰歇。萬事隨轉燭。　世情、衰歇を惡む、萬事、轉燭に隨ふ。
夫壻輕薄兒。新人美如玉。　夫壻は輕薄の兒、新人、美なること玉の如し。
合昏尙知時。鴛鴦不獨宿。　合昏すら尙時を知る、鴛鴦、獨り宿せず。
但見新人笑。那聞舊人哭。』　但だ見る新人の笑ふを、那ぞ聞かむや舊人の哭するを。』
在山泉水淸。出山泉水濁。　山に在れば泉水淸し、山を出づれば泉水濁る。
侍婢賣珠廻。牽蘿補茅屋。　侍婢、珠を賣りて廻る。蘿を牽きて茅屋を補ふ。
摘花不挿髮。采柏動盈掬。　花を摘むも髮に挿まず、柏を采れば動もすれば掬に盈つ。
天寒翠袖薄。日暮倚修竹。』　天寒くして翠袖薄し、日暮れて修竹に倚る。』

【字解】【一】佳人　美人。【二】絕代　絕世と同じ、絕えて世間にこれなきほどのうつくしきあるをいふ。漢の李延年の歌に、北方有佳人、絕世而獨立とあるに本づく。【三】幽居　ひつこんでくらす。【四】空谷　人の居ぬたに。【五】良家　しかるべきよい家がら。【六】零落　おちぶること、草に零といひ、木に落といふ。【七】依草木　依はたよること、草木とは谷中の居宅のまぢかに生じたるくさきをいふ、句意は零落せる草木に依るをいふなり。【八】關中　函谷關の以內、長安地方をいふ。【九】喪亂　喪は人の亡くなること、亂は世のみだるること、天寶十五年六月安祿山の軍長安を陷れしことをさす。【一〇】官高　兄弟なるものの官位の高きこと。【一一】何足論　言ふにたらぬ、高官といふともれうちなきをいふ、理由は下句にいふ。【一二】收骨肉　骨肉は親しき身內のものをいふ、佳人が自己をさす辭なり、自己はその官高き兄弟にとりては骨肉の親にあたる。收とは取り入れてくれること。【一三】世情　世間の人情。【一四】衰歇　色衰へ芳歇むをいふ、顏色の衰ふるをいふ。【一五】隨轉燭　轉燭とは燭の影、風に吹かるれば轉搖して定まらざるをいふ、世態の定まらぬたとへなり、隨とはそれにまかせそのとほりになること。【一六】夫壻　をつと。【一七】輕薄兒　うはきもの。【一八】新人　あらたに迎へいれた女。【一九】合昏　合歡に同じ、「ねむの花」なり、「ねむ」は夕方になればその葉左右相合す。【二〇】尙知時　時とは夕方の時刻をいふ、尙とは木すらなほの意。【二一】鴛鴦　をしどり。【二二】笑　よろこべるさま。【二三】舊人　ふるくからゐる人、卽ち佳人。【二四】在山二句　この二句舊說淸濁二字に拘泥して佳人が貞節を守ることのたとへとす。今從はず、余は單に境遇の變化をたとへしものとみる。强ひてあてはむれば佳人のなほ富貴なりしときが泉淸にあたり、今貧困に居ることが泉濁にあたる。【二五】侍婢　こしもと。【二六】賣珠廻　佳人の所有の眞珠をうりてもどる、生活のたしまへにするなり。【二七】牽蘿　ひめかつらをひつぱりて。【二八】補　屋根の破れめをたしつくらふ。【二九】摘花　花は實物なり。【三〇】不挿髮　粧飾を念とせざるなり。【三一】采柏　「かや」の實をとる、食料にあつるなり。【三二】掬　ひとすくひ。【三三】翠袖　翠色のそで。【三四】倚修竹　たけののびた竹によりそふ。

さびしき様子をうつす。

【題義】秦州の山谷に於て貴族出身の一婦人のおちぶれたるを見て、その有様を敍したる詩なり。乾元二年秋冬のころの作。

【詩意】ここに絶世の美人があつて、その人はだれもゐない山谷のなかにわびずまひをしてゐる。彼の女みづからの語る所によると、もとは相當の家柄のものの子なのだが、今はたよるべき人も無くて秋とともにおちちる山中の草木をたよりとしてゐるのだ。まへかた長安地方が喪亂にかかつたときに兄弟たちは殺されてしまつた。兄弟たちは高い官のものであるがそんなものはとりたてていふほどのねうちのあるものではなく、彼等は言ひがひなく殺されたのでこのわたしさへひきとつてくれることはできぬのである。』人情は女子の顔色の盛りは愛するが、その衰へたのはいやがるものであり、わが身のさまも萬事はなりゆきのまゝになつてきた。すなはち自分の夫はうはきもので、美しいこと玉のやうな人をあらたにむかへいれた。「ねむ」の花さへ夕方になれば時刻を知つて葉と葉がよりあふ、をしどりはひとりではやどらぬ、必ず雌雄ならびあうてねむる。(夫と新人とはその「ねむ」・その「をし」であつた)。』新しくはひつて來た女のおもしろさうに笑つてゐるのはみとめらるるが、彼等はどうしてもとの妻がなきかなしむこゑなどをきく耳があらうぞ。わきでるいづみも山に在るときはすんでゐるが、山をでればにごる、この佳人の境遇の變化もまたこれに似てゐる。昨日の富貴は今の貧困とかはつた。くらしのもとでにするため、こしもとは眞珠を賣つてもどつてくる。かやぶきの屋根の破れはひめかつらのつるを引つぱつて補ふ。花をつみとることはあるが、それは髮にはさむことはせぬ。食料にあてらるべき「かや」の實はともすると兩手にみちるほどすくひとらるることがある。さむぞらにあたつてこの佳人は薄い翠の袖をつけて、日ぐれのころはひさびしく竹むらのそばによりそうてゐるのである。

【餘論】前解は舊說の意を酌みてなせり。ただ余は在山泉水清以下八句の一段、作者の側よりの敍述としてはつねにものだらぬ心地す。これも亦佳人自述の語としてのべしものには非ざるか。杜詩に往往その法あり。讀者の一考を煩はす。

夢李白二首

(一)死別已呑聲。(二)生別常(三)惻惻。
(四)江南(五)瘴癘地。(六)逐客無(七)消息。
(八)故人入我夢。(九)明我長(一〇)相憶。
恐非(一一)平生魂。路遠(一二)不可測。

李白を夢む　二首

死別、已に聲を呑めり、生別、常に惻惻たり。
江南は瘴癘の地なり、逐客、消息なし。』
故人、我が夢に入る、我が長相憶を明かにす。
恐らくは平生の魂に非ざらむ、路遠くして測る可からず。

(一三)魂來楓(一四)林青。魂(一五)返關(一六)塞黑(一七)。』　魂來るとき楓林青し、魂返れば關塞黑し。』

(一八)君今在羅網。何以有羽翼。　君今羅網に在り、何を以てか羽翼有るや。

(一九)落月滿屋(二〇)梁。猶(二一)疑照顏(二二)色。　落月、屋梁に滿つ、猶疑ふ顏色を照らすかと、

(二三)水深波浪濶。無使蛟(二四)龍得(二五)。』　水深くして波浪濶し、蛟龍をして得せしむること無れ。』

【字解】【一】死別已吞聲　此句諸說紛然たり。鄙說はかろくみる、死別は往時李白と別れしとき死別なりとおもひしによりかくいふ、已とは往時をさす語なり。【二】生別　現在なほ存在して別離しをるをいふ。【三】惻惻　心のいたむさま。【四】江南　揚子江の南、白の居る地。【五】瘴癘　わるい水蒸氣。【六】逐客　朝廷からおひだされたもの、李白をさす、李白は永王璘が兵を擧ぐることに關係せし罪により乾元元年に夜郎に流され、二年に途中より赦されてもどりたり。詩は赦されざる以前のものゆゑ逐客といへり。【七】消息　たより。【八】故人　ふるなじみ。白をさす。【九】明　李白が明かに知ること、句意は明知せるために夢にあらはれたといふなり。【一〇】長相憶　いつまでもおもふ。【一一】平生魂　ふだんのたましひ、ふだんとは在世のことをいふ。【一二】不可測　なぜ遠路を來たのかそのわけがはかり知られぬ。【一三】魂來　李白の魂が作者の居る關塞の方へくる。【一四】楓林青　楓林は江南の名木なり、李白の居る地方の物なり。【一五】魂返　李白の魂が江南の楓林のある地へとかへる。【一六】關塞　秦州のせきしよ、とりで、即ち作者の居る地方の物なり。【一七】黑　夜の色をいふ。【一八】君今在羅網、何以有羽翼　この二句を仇本は「逐客無消息」の句のつぎへくりあげたれども不穩當と考ふるゆゑ舊本に從ひてここに置く。君は李白をさす、羅網は罪禍の「あみ」なり、罪人は鳥があみのなかへいれられてある如く拘束されてをる。【一九】落月　おちかかる月のひかり。【二〇】屋梁　やねのはりの木。【二一】猶疑　猶とは夢のさめたのちまだの意。【二二】顏色　李白のかほつき。【二三】水深　水は南方の江湖の水をいふ。【二四】蛟龍　人を害する水蟲なり。【二五】得　得意、跋扈せしむるをいふ。

【題義】李白が罪人として南方に逐はれてをるころ、作者之を夢みしことをのべたる詩なり。乾元二年秦州に於ての作なるべし。

【詩意】自分は李白とかつて死に別れの思ひをして聲をのんでなきわかれをしたが、今日となりては生き別れをしてをるのでいつもいつもかなしみのこころをうごかしてをる。白の居る江南は惡氣の多い土地だのに、どうしたか彼からはさらにたよりが無い。』　ところが一夜彼はわが夢のなかにはひつてきた。これは彼が自分がいつもいつも彼をおもうてゐることをはつきり心得てゐるためであらう。さて白のやうすをみるとなんだかふだん在世のたましひではない樣な氣がしてならぬ（死魂がきたのではあるまいか。）江南といへば非常な遠路なのにそれがこんなところまでくるとはどうしたわけかはかり知ることができぬ。白の魂は楓林の青くつづいたところからここへとやつて來たのであらうが、ふと彼の魂があちらへもどつてしまふとただとりのこされた關塞の夜色は黑くよこたはるのである。さておまへ（白）は罪人で網のなかにはひつてゐるはずだのに、どうしてはねつばさがあつてここへとんでくることができたのか、不思議でたまらぬ。』　自分の寢室ではあけがた落ちかかる月の光がはりの木を一ぱいにてらす、自分はその光はまだ白の顏をてらしてゐる樣にうたがはれるのである。ああ白よ、南方江湖の地は水が深く、波浪の起るところもひろいから、蛟龍にはびこられてそれに害せられぬ樣にするがよいぞよ。』

〔二〕

浮雲(一)終日行。遊子(二)久不至(三)。
三夜頻夢君。情親(四)見君意(五)。
(六)告歸(七)常(八)局促。苦道(九)來(一〇)不易。
(一一)江湖多風波。舟楫恐失墜。
(一二)出門搔白首。若負平生(一三)志。
(一四)冠蓋滿(一五)京華。斯人(一六)獨顦(一七)顇。
孰云網(一八)恢恢。將老身(一九)(二〇)反累(二一)。
(二二)千秋萬歲名。寂寞(二三)身後事。

〔二〕

『浮雲、終日行く、遊子、久しく至らず。

三夜頻に君を夢む、情親しむこと君が意を見る。』

『歸るを告げて常に局促たり、苦に道ふ來ること易からず。

江湖、風波多し、舟楫恐らくは失墜せむ、と。

門を出でて白首を搔く、平生の志に負くが若し。』

『冠蓋、京華に滿つ、斯の人獨り顦顇す。

孰か云ふ網　恢　恢たりと、將に老いむとして身、反つて累せらる。

千秋萬歲の名は、寂寞たる身後の事なり。』

【字解】【一】終日行　一日中うごき去る、遊子のかへらざるを興す。【二】遊子　たびびと、李白をさす。【三】至　自己の居る處へくる。【四】情親　心のしたしきこと。【五】君意　李白の情親しむの意。情親見君意とは見君情親意といふにおなじ。【六】告歸　李白がもはや南へかへるべきことを作者につげる。【七】常　三夜ともいつも。【八】局促　心ののびぬさま。【九】苦道　李白がしきりにいふ。【一〇】來不易　ここへくることは容易でなかつた。【一一】江湖二句　仇氏は白の言とす。【一二】出門二句　上句は白のさま、下句は作者がそれをながめてくだせる語、出門・搔首は共に白がなすなり。【一三】平生志　白の平生の志。【一四】冠蓋　かんむり、車のおほひ、官人の用ふるもの、因つて貴人をさす。【一五】京華　大にしてはなやかな地、都をさす。【一六】斯人　白をさす。【一七】顦顇　やつれる。【一八】網恢恢　「老子」(七十三章)に天網恢恢、疎而不漏とみゆ、恢恢は大なる貌、ここの詩の網は好運のあみをいふ。【一九】老　白がおゆる。【二〇】身　白の身。【二一】累　わづらひをうける。【二二】千秋萬歲名　永遠不朽の名。【二三】寂寞　さびしきさま、これは「身後」へかかりて「事」へはかからず。

【詩意】『そらに浮んでゐる雲は日いつぱい飛び去りつつあつてもどらぬが、その樣にわがおもふたび人(李白)もながながこちらへやつてこぬ。ところが近來三ばんつづいてしきりとおまへを夢にみた。それでおまへが自分に對して如何に相親しまうとする意をもつてゐるかがみられるのである。』あふたびに(夢で)いつもおまへはもうかへるかへるといつてのびのびせぬ樣子であり、またしきりとここへやつてくるのは容易ではなかつた、江湖の地方は風波が多いから、舟や楫があるひはおとされ失はれはせぬかと氣づかはれるなどといふ。かくておまへは我がやの門から出でてしらがあたまをかいてゐる、ところはどうも平生の志を爲しとげ得ずそれにそむいてゐるとかんがへてゐるかのやうである。』都には冠蓋をとばす富貴の人人がたくさんゐるのに、この李白のやうなをとこだけがひとりやつれてうかばずにゐる。古人は天の網はひろく大きいなどいふが、大きな網なら李白をすくうたらどうだ。大きいといふはだれのたわごとか、李白は老境にさしかかつてかへつてその身がわづらひをうけてゐる、永遠不朽の名は生時にはのぞむべくもなく、ただ寂寞たる死後の事である。

有懷台州鄭十八司戶
台州の鄭十八司戶を懷ふこと有り

天台隔三江。風浪無晨暮。
天台、三江を隔つ、風浪、晨暮無し。

鄭公縱得歸。老病不識路。
鄭公、縱ひ歸ることを得るも、老病、路を識らざらむ。

昔如水上鷗。今爲罝中兎。
昔は水上の鷗の如し、今は罝中の兎と爲る。

性命由他人。悲辛但狂顧。
性命、他人に由る、悲辛、但だ狂顧す。

山鬼獨一脚。蝮蛇長如樹。
山鬼、獨り一脚、蝮蛇長うして樹の如し。

呼號傍孤城。歲月誰與度。
呼號して孤城に傍ふ、歲月、誰と與にか度らむ。

從來禦魑魅。多爲才名悞。
從來、魑魅を禦ぐは、多くは才名に悞らる。

夫子嵆阮流。更被時俗惡。
夫子は嵆阮の流なり、更に時俗の惡みを被る。

海隅微小吏。眼暗髮垂素。
海隅、小吏微なり、眼暗うして髮、素を垂る。

鳩杖近青袍。非供折腰具。
鳩杖、青袍に近づく、腰を折るの具に供するに非ず。

平生一杯酒。見我故人遇。
平生、一杯の酒、我が故人の遇せしを見る。

相望無所成。乾坤莽回互。
相望するも成る所なし、乾坤、莽として回互す。

【字解】 【一】 台州　浙江省の台州府。 【二】 鄭十八司戶　鄭は鄭虔、司戶は戶口・籍帳・婚姻・田宅・雜徭・道路の事を掌る州の屬官なり。至德二載虔が台州司戶に貶せらるゝや作者之を送る詩あり。(上卷五一四頁)、翌年また虔が故居に題する詩あり。(上卷五六四頁)併せ看るべし。 【三】 天台　山の名、台州府にある名山、虔の居る地ゆゑに之をあぐ。 【四】 三江　「爾雅」の注に岷江・浙江・松江を三江となせり。仇氏は台州に適切ならずとして長江・浙江・曹娥江をあぐ、しかし大體の方位をいふものゆゑ古說に依りて可なるべし。 【五】 晨暮　朝夕に同じ。 【六】 歸　都の方へかへる。 【七】 不識路　歸る路をよくしらず、迷ふならんといふなり。 【八】 水上鷗　悠悠自適せるさまをたとへていふ。 【九】 罝中兎　詩經に「兎罝」の詩あり、罝はうさぎあみなり、ここは罪禍のあみのなかにいれられしうさぎ、自由を失へる身の義に用ひたり。 【一〇】 性命　生命。 【一一】 由他人　他人の手にまかす、他人に左右せられる。 【一二】 悲辛　かなしみ、つらきおもひをする。 【一三】 狂顧　くるふが如く左右にふりかへりてみる、おちつかぬさまなり、悲辛も狂顧も鄭虔のさまをいふ。 【一四】 山鬼　一本足にて「くびす」が反對に前の方へついてゐるといはるる怪物なり。 【一五】 蝮蛇　「まむし」。 【一六】 呼號　虔がかなしみて大聲にさけぶ。 【一七】 傍　そふ、近地にさまよふ。 【一八】 孤城　台州の城をさす。 【一九】 歲月　時間をいふ。 【二〇】 誰與度　度とは經過するをいふ。 【二一】 從來　これまで。 【二二】 禦魑魅　罪人として貶せらるることをさす、左傳(文公十八年)に舜が四人のわるものを四方にながして魑魅を禦がしむとの記事あるに本づく。 【二三】 爲才名悞　爲才名所悞と同じ、悞は誤と同じ、才名が盛んなため身を誤るにいたるをいふ、才名盛なれば他人にねたまれおもはぬとがを被るに至る。 【二四】 夫子　虔を尊敬していふ。 【二五】 嵆阮流　魏の嵆康・阮籍のともがら。二人とも超俗の生活を爲せし人人なり。 【二六】 時俗　世俗の人。 【二七】 海隅　うみのかたすみ、台州をさす。 【二八】 微　あるかなきかのさま。 【二九】 眼暗　老眼にてよくみえぬこと。 【三〇】 垂素　白い糸すぢをたらす、しらが多きさま。 【三一】 鳩杖近青袍　此句余正解を得ず、古人また注せず、このままならば「鳩杖の身を以て青袍の小吏に近づく」の義かと考ふ、鳩杖は長さ九尺の玉杖に鳩の首の飾りをつけしものにて後漢にては八十歲九十歲のものに賜はるもの、鳩は物を食するにむせばぬ鳥ゆゑ老人をそれにあやからせんためなりといふ、後世また七十以上にも賜はる、鄭虔已に老年なればこの杖を賜はるべき身なり、青袍は台州の他の官吏の衣色をいふなるべし。」次に此の句を黃帽映青袍に作れる本あり、之によれば亦二種の解をなすことを得、其一は黃

帽青袍ともに庚の用ふるものとするなり、隋のときには都下外州の七十以上のものに鳩杖黄帽を賜はるといへば黄帽また鳩杖のごとく老人の用ふるものなり、その帽が庚自らのきてゐる青袍にうつろふことを黄帽映青袍といふ。其二は黄帽は竹の皮にてつくりしものにて船夫のかぶるものなりとす、しからば庚は台州の水邊に居るゆゑ船夫とも伍すべく、從つて船夫の帽の色が自己の青袍の服の色と相映ふ、庚が賤人と雜居するさまをさして黄帽映青袍といふ。諸解みな通ずべし。今煩をさけ原文のままにとく。【三二】非供　供す可きものに非ざる意。【三三】平生　ふだん、長安時代のことを回顧していふ。【三四】具　道具、材料。【三五】折腰　上官の前にて腰をかがめること、陶淵明が故事。【三六】見我故人過　見は作者がみるなり、我は作者自身、故人は鄭庚、過とは庚がこちらを酒を以て好遇してくれしこと、過を遭過の義とみる説あるも取らず。【三七】相望　こちらよりながめることなり。【三八】無所成　成は事を成就するをいふ。【三九】乾坤　天地。【四〇】弄　はつきりせぬさま。【四一】回互　周圍をとりかこんでゐるさま、李華の海賦に、乖ㇾ蠻隔ㇾ夷、回互萬里とあり、注に回互は回轉なりとみゆ。

【題義】台州の司戸として流されてゐる親友鄭虔がことをおもふことありて作れる詩なり。乾元二年華州の官をはなれし以後の作ならんも、時期は明かならず。

【詩意】君が居る天台の地方は三江といふ大水をへだててをるので、朝夕となく風浪が已むときがない。たとひあなたは罪をゆるされて都へかへることができるとしても、あなたの如く老い且つ病める身ではかへり路の樣子さへさだかにおわかりにはなりますまい。』昔は水上にういてゐる鴎のやうにゆつたりとくらされたが、今は「あみ」のなかのうさぎのやうな身となられた。自己の生命さて他人の手ににぎられてをり、ひどく悲んでただきよろきよろ左右をみまはされてをることである。あなたの居らるる處では一本足の山鬼といふものがゐたり、樹木のやうにたけのながい「まむし」がゐたりする。そんな處でさびしい城の附近をさまよひながらさけびあるかるることとおもふが、このとしつきをだれといつしよにおすごしになることであらう。』これまで罪人として遠方へ魑魅でもふせげといつて逐ひだされた人人は、多くはその人の才名が盛んなため身をあやまることになつてゐる、（あなたもさうだ）。あなたは世俗を超越した昔の嵇康・阮籍のともがらであつて、その點がさらに世俗のものからにくまれてゐる。あなたは海べのかたよつたところのちつぽけな役人として、視力はくらく頭髪は白絲をたれてをられる、已に鳩杖でもつかるべき身を以てゐるなか役人の青袍にまぢかく居られるが、あなたの樣な大人物は到底尋常一樣、長官の前で腰をかがめる材料に供すべきものではないのである。』おもひ起せば共に長安においでのころ、いつも一杯の酒を酌みかはして、あなたはよくわたくしをおもてなしくだされたものだ。今や遠くへだたつてあなたの方をながめやつてみるが、自分は何一つとして成就したものは無く、ただこの身をとりかこんで茫漠たる天地が横はつてゐるばかりである。』

遣ㇾ興五首

興を遣る　五首

〔一〕

蟄龍三冬臥

〔一〕

蟄龍三冬に臥す

蟄龍三冬臥。老鶴萬里心。　蟄龍、三冬に臥す、老鶴は萬里の心。

昔時賢俊人。未遇猶視今。　昔時賢俊の人、未だ遇はざりしときは猶今を視るがごとくなりしならむ。

嵆康不得死。孔明有知音。　嵇康は死を得ず、孔明は知音有り。

又如壠坻松。用舍在所尋。　又、壠坻の松の如し、用舍は尋ぬる所に在り。

大哉霜雪幹。歲久爲枯林。　大なる哉、霜雪の幹、歲久しくして枯林となる。

【字解】【一】蟄龍　穴ごもりの龍。【二】三冬　冬三箇月。【三】萬里心　萬里の大空を飛ばんと欲する心、二句自己をたとへていふ。【四】賢俊　かしこくすぐれた人。【五】未遇　よき時運にであはざりしとき。【六】視今　自己が現今の時をみること、現今の時はやはり賢人は不遇の地位に居る。【七】嵇康　魏の嵇康は賢にして鍾會が讒言により司馬昭がために殺さる。【八】不得死　善死を得ざること。【九】孔明　諸葛亮、字は孔明、徐庶これを臥龍に比す、蜀の劉備遂に之を用ふ。【一〇】知音　鍾子期が故事、知己のこと。【一一】壠坻松　禰衡が鸚鵡賦に「命二虞人於隴坻一」張華が鷦鷯賦に「甚二隴坻之高松一」の句あり、壠は隴を正しとす、隴坻は隴坂なり、甘肅地方の大坂なり、坂を坻といふは秦の方言なり。【一二】用舍　用ふるとすておくと。【一三】在所尋　その材をたづぬる所の人如何に存す。【一四】霜雪幹　霜雪を犯して立つ松のみき。

【題義】古人の事にふれて自己の感興をのべたり。此篇は老いて不遇なるを歎ぜり。

【詩意】穴ごもりの龍は冬ぢうぢつとしてねてゐるが、鶴は老いても萬里に羽うたんとの心をいだいてをる。（自分の今はそんなものだ）。昔のすぐれた人人は、それがまだ時運にであはなかつたときにはやはり、今自分が現今をながめてゐる樣なここちでゐたであらう。同じ賢俊でも運のわるい嵇康は不自然な死にかたをしたし、諸葛孔明は劉備の如き知己があつて用ひられることができた。人もたとへてみれば又大きな坂に生えてゐる松の樹の樣なもので、之を用ふるとすておくとはその材をたづぬる人如何にあることである。惜いことにはあのやうに驚くべく大きな霜雪をしのぐ松のみきも、いつまでも歲久しくすておかれて枯れ木のはやしになつてゐるのである。

〔二〕

昔者龐德公

昔者龐德公

昔者龐德公。未曾入州府。　昔者、龐德公、未だ曾て州府に入らず。

襄陽耆舊間。處士節獨苦。　襄陽、耆舊の間、處士、節獨り苦しむ。

豈無濟時策。終竟畏羅罟。　豈に時を濟ふの策なからむや、終に竟に羅罟を畏る。

林茂鳥有歸。水深魚知聚。　林茂れば鳥歸する有り、水深ければ魚聚まるを知る。

舉家隱鹿門。劉表焉得取。　家を舉つて鹿門に隱る、劉表焉んぞ取ることを得む。

【字解】【一】龐德公　後漢末の人、名は詳かならず。「後漢書」に傳あり、襄陽の峴山に居り未だ嘗て城府に入らず、荊州の刺史劉表就いて之をとひ、出でて天下を保全すべきをすすむ、公笑つて人は各〻其の棲を得るを貴ぶといひて應ぜず。のち妻子をたづさへ

て鹿門山に登り藥を採りて返らず。【二】襄陽　湖北省襄陽府。【三】耆舊　故老。【四】處士　官に出で仕へざる人。【五】節　節操。【六】濟時策　時世の艱難をすくふはかりごと。【七】羅罟　ともにあみのこと、罪禍の拘束にたとふ。【八】鳥、魚　生物の本性を遂げんとするさまをいふ、龐公もかくのごとしといふなり。【九】擧家　一家みんな。【一〇】鹿門　襄陽にある山の名、事は上にみゆ。【一一】劉表　荊州刺史、この地方の長官なり、事は上にみゆ。

【題義】龐德公の事を敍して、暗に自己の志す所も亦之と同じきことをしめせり。

【詩意】むかし後漢の龐德公は、山の中にひきこんでいちども州や府へいりこんだことがなく、襄陽の老人たちの間に於て、獨り處士としてのくるしい節操を守つた。公には時世をすくふはかりごとが無いわけではないが、つまるところ世へ出て罪禍の網にひつかかることをはばかつたのである。林が茂れば鳥はそこへかへるべきものだと知つてかへるし、水が深ければ魚はそこへ聚ることを知つてゐる。公もそのごとくであつて山の中が公の安棲の場所だとさとつてゐるのだ、だから一家を擧つて鹿門山にかくれてしまはれた。どうして劉表などが公を取り收めようとしてもできるものではない。

〔三〕

陶潛避俗翁

〔三〕

陶潛は俗を避くるの翁

陶潛避俗翁。未必能達道。

陶潛は俗を避くるの翁なるも、未だ必ずしも能く道に達せず。

觀其著詩集。頗亦恨枯槁。

其の詩集に著すを觀るに、頗る亦枯槁なることを恨めり。

達生豈是足。默識蓋不早。

達生、豈に是れ足らむや、默識、蓋し早からず。

有子賢與愚。何其掛懷抱。

子有り賢と愚と、何ぞ其れ懷抱に掛けむ。

【字解】【一】陶潛　陶淵明なり。【二】避俗翁　世俗をさけて隱居せし老人。【三】達道　道理に通じてゐる。【四】著　言を載せてあるをいふ。【五】恨　淵明がうらむなり。【六】枯槁　生活のゆたかならぬこと。この二字は淵明が飲酒詩に顏回が飢ゑ居りしことを評して、雖留身後名、一生亦枯槁といへるに本づく。【七】達生　生死の境地をしりぬくこと。【八】豈是足　足らぬをいふ。【九】默識　「論語」の默而識之、孔融が薦禰衡表の安世默識は「識」の音誌にしてみな記憶の義なり、ここは記憶にては通ぜず、蓋し口に言はれども胸中にて道をさとりをることをいふならん。【一〇】有子賢與愚　淵明に五男子あり、みな紙筆を好まず、それにつきなげきたる詩あり。【一一】掛懷抱　念慮にかける。きにする。

【題義】陶淵明を借りて自己を嘲る詩なり。客觀的に淵明を評論せるものとおもはば作者の意を失ふべし。

【詩意】陶潛といふ男は世俗をさけてくらしたいいおやぢではあるが、必ずしもよく道をこころえてはゐなかつた。なぜかといふとあの男の詩集に著はしてゐることばをみると、かなりひからびた貧乏生活をすることを恨んでゐるさまがわかる。これでは十分生死の理をさとつてゐるとはいへぬし、みちをさとることがおそいとおもはるるのである。また彼は自分の子供がかしこいとかばかだとか愚痴をこぼしてゐるが、そんなことも氣にするにはあたらぬことではないか。

〔四〕

賀公雅吳語

賀公雅吳語。在位常淸狂。
上疏乞骸骨。黃冠歸故鄕。
爽氣不可致。斯人今則亡。
山陰一茅宇。江海日淸涼。

〔四〕

賀公雅に吳語す

賀公、雅に吳語す、位に在るも常に淸狂なり。
疏を上りて骸骨を乞ひ、黃冠、故鄕に歸りぬ。
爽氣、致す可からず、斯の人、今は則ち亡し。
山陰の一茅宇、江海、日に淸（淒）涼たり。

【字解】【一】賀公　賀知章をいふ。賀知章は四明の人、唐の玄宗に事へて祕書監となる。天寶三載に上書して故鄕に還らんことを請ふ、玄宗文を作りて之を送り、鏡湖の一曲を賜ふ。人物脫俗にして自ら四明狂客と號す、李白を玄宗にすすめしも知章なり。【二】雅　つねに、ふだん。【三】吳語　南方の土語をはなす。【四】在位　祕書監の位になること。【五】淸狂　たわけたさま。【六】上疏　疏は天子にたてまつるてがみ。【七】乞骸骨　辭職のゆるしを乞ふ、君に仕へてゐるあひだはこの身を君にささげたるものなれば、そのあまりのほねをくだされと願ひいづるなり。【八】黃冠　道士のかぶるかんむり。【九】故鄕　四明の地方。【一〇】爽氣　山のさわやかな氣、これは「世說」に晉の王徽之がかつて手板（笏）にて頰をささへて西山には朝から爽氣があるなどとそらとぼけをして吏務を耳にせざりしといふ話あるにより用ふ。【一一】致　こちらへよびとること。【一二】斯人　知章をさす。【一三】亡　なし、死せしこと。【一四】山陰　浙江の紹興府、鏡湖の在る處、知章ここになりしなり。【一五】茅宇　かやぶきのやね、知章が家をいふ。【一六】江海　南方の江やうみ。【一七】淸涼　淸を淒に作れる本あり、淒の字よろし、淒涼はものがなしきさま。

【題義】賀知章が人物をしたひたる心をのぶ。

【詩意】賀知章公は都へでてもふだんお國辯まるだしで、官位に居りながらたわけぢみたことをしてをられた。そして書面をたてまつつて辭職を願ひでて、道士の冠をつけて故鄕へかへつてしまはれた。今やこの人はなくなつてしまはれ、かの西山の爽氣も招き致すわけにはゆかぬ。山陰には公の一茅屋が空しくのこつてゐるばかりで、江海の地方に人物がなく日にましさびしさを覺ゆるのである。

〔五〕

吾憐孟浩然

吾憐孟浩然。裋褐卽長夜。
賦詩何必多。往往凌鮑謝。
淸江空舊魚。春雨餘甘蔗。
每望東南雲。令人幾悲吒。

〔五〕

吾は憐む孟浩然

吾は憐む孟浩然が、裋褐、長夜に卽きしことを。
詩を賦する何ぞ必ずしも多からむや、往往、鮑謝を淩ぐ。
淸江、空しく舊魚あり、春雨に甘蔗餘る。
東南の雲を望む每に、人をして幾たびか悲吒せしむ。

【字解】【一】孟浩然　襄陽の人、詩を以て天寶中に名あり、開元二十八年、年五十二にて卒す、一生布衣にて終る。【二】裋褐　卷五「北征」にみゆ、粗末な毛織り物のチヨツキ。【三】卽長夜　幽冥の地に赴くこと、死をいふ。【四】鮑謝　宋の鮑照、謝靈運。【五】淸江　襄陽の漢水をいふ、水すめり。【六】空舊魚　空しく舊魚ありの義、舊魚とは浩然が生前釣りにしもとのうをのこと、浩然

は顚る釣りた好み之に關したる詩句多し、試垂二竹竿釣一果見樝頭鯿、といへるがあり、舊魚は鯿魚の類をさす。【七】甘蔗　砂糖きび、浩然が園にうゑしもの。【八】東南雲　東南は秦州より襄陽の方位をいふ。【九】舍人　人とは吾を含みていふ。【一〇】悲吒　吒は歎聲を發するなり。

【題義】詩人孟浩然が詩を善くして窮死せるを憐みて、之を追憶せる詩なり。

【詩意】自分は氣の毒におもふ孟浩然は、貧賤のきものを著たまま永久の眠りについてしまつたことを。彼は詩をつくつたことは必ずしもかず多くはないが、ときどきその佳篇は鮑照・謝靈運をしのぐに足るものがある。それに今や漢水のすんだ水にはむかしながらの魚がをるばかり、はたけには栽培されてあるさたうきびがはるさめにのこつてをるばかりである。いつも東南の雲をながめやるたびに、幾度となく我我をしてかなしみなげかせるのである。

遣興二首

興を遣る　二首

〔一〕

天用莫ㇾ如ㇾ龍

〔一〕

天の用は龍に如くは莫し

天用莫ㇾ如ㇾ龍。有ㇾ時繫二扶桑一。

天の用は龍に如くは莫し、時有つてか扶桑に繫ぐ。

頓ㇾ轡海徒湧。神人身更長。

轡を頓すれば海徒に湧く、神人、身更に長し。

性命苟不ㇾ存。英雄徒自强。

性命、苟くも存せず、英雄徒に自ら强うす。

吞ㇾ聲勿二復道一。眞宰意茫茫。

聲を吞みて復た道ふこと勿れ、眞宰、意茫茫たり。

【字解】【一】天用莫如龍　「史記」の平準書に天用莫ㇾ如ㇾ龍、地用莫ㇾ如ㇾ馬、人用莫ㇾ如ㇾ龜とみゆ。天用・地用の二句は天の用ふる所のものでは龍が最上である、地の用ふる所のものでは馬が最上であるとの意、用語は之に本づくも用意は同じからず、史記の龍は寶物をいふ、ここの龍は日輪の乘車を曳く龍をいふ。支那の古傳說にては日（太陽）は車にのつて走り、羲和が御者となり六匹の龍にてひかせてゐることと考へらる。【二】扶桑　扶桑の考は時代により同じからざるも漢の初に於ては、碧海中に桑ありて、長け數千丈、周圍も一千餘丈、その樹が相生になりをるものとせられたり。東海にさやうの樹があり太陽がそのうへに照る。【三】頓轡　龍を御する「たづな」をとどめ、こやすみする。【四】海徒湧　海水がいたづらにわきたつ。徒らにわくとは海水の淺深の變化あるをいふ、數千年をふれば海も淺くなることもある。【五】神人　「神異經」に、西北海外に人あり、長けは二千里、兩脚の中間は相去ること千里、腹のまはりは一千五百里とみゆ。非常なる巨人なり。【六】身更長　これは上にいふ身長のながきこと。ただし身長のみならず裏面には壽命の久しきことを含めるならん。「更に」とは上の「徒に湧く」に對する辭にて、海水には深淺の變化あるもこの神人は身長のながきが如く壽命もながきをいへるならん。【七】性命　生命に同じ。【八】存　永久に存在すること。【九】英雄　すぐれたる人、暗に自己をさす。【一〇】吞聲一句　自ら自己に命令する辭なり。【一一】眞宰　造化、宇宙の支配者。【一二】茫茫　とりとめなく、はつきりせぬさま。

【題義】二首ともに自己のおもひをやるために作りしもの。乾元二年秦州にての作なるべし。此の二篇古來諸說區區として定解なし。浦起龍の如きは不ㇾ知二何指一とさへいへり。余は余の私見によりて釋く。第一首は英雄の身を以てして自然にはうちかてず、むなしく老い去らんとするを歎ず。

【詩意】 天の用ふるものでは龍が最上のものだといふ。太陽はその龍に車をひかせながら、時として扶桑の枝にたづなをつなぐ、そこでたづなをとどめ小憩みするまに海水はいたづらに湧きたち深淺の變化を起すが、ここに神人といふ不思議のものがあつて其の身體の巨大なるは言ふまでもなく、海水の變化の時間以上に長壽をたもつのである。神人ならばさやうであるが尋常の人間はさやうにはゆかぬ、いくら英雄が氣どつて自分だけで强がつてみたところでその生命は永久には存在せぬのである、(詩の原文を直譯すれば、「生命はかりそめにも永存せぬものだから、英雄が强がつたところでむだのつよがりだ。」) これを思ふと自分は歎息せざるを得ぬが、しのびねに泣いてもうなにもいふな。造物主のこころはなにがなんだかさつぱりわからぬものであるから。

〔二〕

地用莫レ如レ馬

〔二〕

地の用は馬に如く莫し

地用莫レ如レ馬。無レ良復誰記。
地の用は馬に如くは莫し、良無きをば復た誰か記する。

此日千里鳴。追風可二君意一。
此の日千里に鳴く、追風、君が意に可なり。

君看渥洼種。態與二駑駘一異。
君看よ、渥洼の種は、態、駑駘と異なり。

不レ雜二蹄齧間一。逍遙有二能事一。
蹄齧の間に雜はらず、逍遙として能事有ることを。

【字解】 【一】地用莫如馬　第一首の條にいだせり。【二】無良　良を相馬の名人王良とする說、良馬とする說あり、竝に取らず、良は良才をいふ、無良とは馬に良才なきをいふ、無良は不良の義なり。【三】復誰記　反語とみず、詰問の語とみる、記とは記省、それをみとめ、とりあげるをいふ。【四】追風　秦の始皇の七名馬の一に追風の名あり。【五】可君意　君はひろくいふ、馬を用ひんとする人をさす、可は「にあふ」こと。【六】渥洼種　卷三「沙苑行」にいだせり、渥洼は水の名、其地名馬を產す、種は馬種。【七】駑駘　どば、無能のうま。【八】雜　雜居する。【九】蹄齧　人をひづめにかけ、又はかむ馬、即ち悍馬。【一〇】逍遙　ゆつたりする。【一一】能事　馬の眞能力、本領をいふ。

【題義】 第二首はみづからを千里の馬に比し世上の駑馬と雜居せざるをいふ。

【詩意】 地の用ふるものでは馬が最上だといふ。馬なら千里の馬を用ひたらよささうなものだが、世間ではなんでまた無能力の馬をとりあげて用ふるのであるか。今日はここに千里の名馬がゐて千里に向つて嗚いてゐる。この馬たるや追風のごとくはやく走らせることも君が意のままである。看よ、渥洼產と同種の馬は、その態が駑馬とはちがつてゐて、人をかんだりひづめにかけたりする樣なながにはまじらず、遠くそんなところをはなれて、ゆつたりとして本來の能力をじつとたもつてをるのである。

遣レ興五首

興を遣る　五首

〔一〕

〔一〕

(一) 朔風飄胡雁

朔風飄胡雁。慘澹帶砂礫。
長林何蕭蕭。秋草萋更碧。
北里富薰天。高樓夜吹笛。
焉知南隣客。九月猶絺綌。

朔風胡雁を飄へす

朔風、胡雁を飄へす、慘澹として砂礫を帶ぶ。
長林、何ぞ蕭蕭たる、秋草、萋として更に碧なり。
北里、富、天を薰す、高樓、夜、笛を吹く。
焉んぞ知らむ南隣の客、九月に猶絺綌なるを。

【字解】〔一〕朔風　北からふく風。〔二〕胡雁　北方胡の地より飛び來る「かり」。〔三〕慘澹　ものがなしきさま。〔四〕帶　ともにもち來ること。〔五〕砂礫　すな、こいし。〔六〕長林　せのたかい木の生えたはやし。〔七〕萋　しげるさま。〔八〕北里　城の北方の地區。〔九〕薰天　富を火焰にたとへていふ、薰は火にてくすべること。〔一〇〕高樓　富家のたかどの。〔一一〕南隣客　自己をさす。〔一二〕絺綌　細き糸の葛のあさ、ふと糸のくづあさ。

【題義】寒さの時になりて富家のさまを見て自己の貧窮をのべたる詩なり。乾元二年秦州に於ての作ならんといふ。

【詩意】北風が胡地の「かり」をひるがへし、その「かり」はものがなしくも砂や小石をさへもろともにもつて吹かれくる。せの高い木のはえた林は風がさびしく吹きわたる。秋の草はしげりながら碧をましてゐる。此の時北里では富家の勢焰は天をもくすべんばかりであり、たかどので夜は笛を吹きすさんでゐる。まことに氣樂でおもしろさうにしてゐる。之に反して南隣の旅人（自分）はどうかとみると、九月であるのにまだくづのかたびらをつけてをるのである。

〔二〕

(一) 長陵銳頭兒

長陵銳頭兒。出獵待明發。
騂弓金爪鏑。白馬蹴微雪。
未知所馳逐。但見暮光滅。
歸來懸兩狼。門戶有旌節。

〔二〕

長陵の銳頭兒

長陵の銳頭兒、出獵、明發を待つ。
騂弓、金爪の鏑、白馬、微雪を蹴る。
未だ知らず馳逐せむ所を、但だ見る暮光の滅するを。
歸り來つて兩狼を懸く、門戶には旌節有り。

【字解】〔一〕長陵　漢の高祖の陵の名、長安の北、咸陽縣の東三十五里にあり、豪族の住する處なり。〔二〕銳頭　頭の形小さく尖りたるなり、勇武なる相貌なり、戰國の頃秦の將武安君はかかる頭なりしといふ。〔三〕明發　よあけ、天明の始めて發るをいふ。〔四〕騂弓　「詩經」（角弓篇）に騂騂角弓とみゆ。騂騂は調和の貌とあり、弓のこしらへ方がぐあひよくできてをること。〔五〕金爪鏑　鏑はやじりのさき、それがとがりて金の「つめ」のやうにするどきなり。〔六〕未知所馳逐　どこに馳逐すべきかを知らぬ。といふはまだ馳逐し足らぬゆゑどこへか馳逐したしとおもふこころなり、馳逐とは馬をはせて禽獸をおひかけるなり。〔七〕暮光　ゆふ日のひかり。〔八〕門戶　わがやの門戶のあたり。〔九〕旌節　節度使・大將は旌と節とを賜ふ。旌は絳色の帛五丈に胡粉にて虎を畫きたるものなり、それをたてる、また節は三四すづつ間をおきて畫ける木盤を三個垂れ、盤の網には一尺の麻をさげる、それをたてる。いまこの家の門戶に旌節あるはその家が節度使か大將かの家がらとみゆるなり。

【題義】長安附近の貴族のわかものの遊獵のいさましさを寫しいだせり。

【詩意】長陵のそばに住む鋭頭の少年が、夜明を待つて獵にでかける。工合よくできてる弓に金の爪かとまがふやじりのついた箭をたづさへ、ちらりとふつた雪を白馬のひづめでけちらしてゆく。まだどちらへかけ出してゆかうかと飽き足らずおもふうちに、殘念ながら夕日のきえかかるのをみとめるのである。已むなくもどつて來て門戸のところへ獲物である二匹の狼をつるさげる。その門戸のところには旌だの節だのがたてならべてある。

〔三〕

漆有用而割

漆有用而割。膏以明自煎。
蘭摧白露下。桂折秋風前。
府中羅舊尹。沙道尚依然。
赫赫蕭京兆。今爲時所憐。

〔三〕

漆は用有りて割かる

漆は用有りて割かれ、膏は明なるを以て自ら煎る。
蘭は摧く白露の下、桂は折る秋風の前。
府中には舊尹羅り、沙道尚依然たるに、
赫赫たる蕭京兆は、今、時の憐む所と爲る。

【字解】【一】漆有用二句 「莊子」（人間世）に山木自寇也、膏火自煎也、桂可食、故伐之、漆可用、故割之、とみゆ。功用あるものはその功用あることが身に禍してそこなはるるにいたるをいふ。【二】府中 府は宰相の役所をいふ。【三】蘭、桂 蘭の花はかんばしく、桂花亦しかり、風露にあへばかかる香ある草木もそこなはれる。【四】羅 つらなる、多くならぶこと。【五】舊尹 尹は京兆尹なり、都市の長官なり、舊尹とはもとの京兆尹といふこと、以前この尹をつとめし人たちをいふ、唐の宰相は自己の親しき者を京兆尹に任命せり。【六】沙道 すなをしきたる道路、宰相がとほるとき沙をしく故かくいふ。【七】依然 もとどほりに。【八】赫赫 威權のかがやくさま。【九】蕭京兆 京兆尹蕭炅をさす、炅は宰相李林甫にとりいりて京兆尹にとりたてられしが賄賂をうけしかどにより天寶八載に汝陰の太守に遷されたり。【一〇】今 この詩を作りしときをさす。【一一】時所憐 時は當代をさす、憐むとは氣のどくがられる、上の官を遷されしことをいふ。

【題義】一時權威ある者も材力却つて身に禍して忽ち覆滅にいたるをいふ。

【詩意】漆は用ひくちがあるために木からさきとられるし、膏はもやせば火があかるいためにみづからをにる。蘭の香花も白露の下で摧かれ、桂枝のかぐはしきも秋風の前には折れてしまふ。宰相の府中には以前からの京兆尹たちが幾人もならんでをり、その宰相のとほる沙をしいた道路はもとどほりに存在してゐるが、さてかつて權威赫赫として時めいて居た京兆尹蕭炅はいかにといふに、彼は今ははや沒落してしまひ世間のものに氣の毒がられてゐるのである。（彼はなほ漆膏蘭桂の類である。）

〔四〕

猛虎憑其威

猛虎憑其威。往往遭急縛。
雷吼徒咆哮。枝撐已在脚。
忽看皮寢處。無復睛閃爍。

〔四〕

猛虎其の威を憑む

猛虎、其の威を憑んで、往往、急縛に遭ふ。
雷吼、徒に咆哮するも、枝撐、已に脚に在り。
忽ち皮の寢處せらるるを看る、復た睛の閃爍たる無し。

人有甚於斯。足以勸元惡。(九)(一〇)(一一)　人、斯より甚しき有り、以て元惡を勸むるに足る。

【字解】〔一〕憑　たのむ、よる。〔二〕急縛　にはかにしばること。〔三〕雷吼　雷のごとくほえる。〔四〕咆哮　ほえたてる。〔五〕枝撐　枝にてささへる、「あしがせ」なかけるをいふ、撐は或は樘か、卷二「登慈恩寺塔」詩には樘を用ふ、樘はつかへ柱なり、枝樘はつかへ柱をくみたることにてやはり足かせのこととなる。〔六〕皮寢處　「左傳」に臣食其肉、而寢處其皮矣。または譬之如禽獸、吾寢處之矣とあるに本づく、寢處は「いれ、ねる」なり、その上にねたり、すわつたりすること。〔七〕睛　ひとみ。〔八〕閃爍　きらめきかがやく。〔九〕斯　猛虎の場合をさす。〔一〇〕勸　「すすむ」と訓ずれども「戒むる」義に用ひたり、韓愈が「符讀書城南」詩の末に作詩勸躊躇とある勸もおなじ用法なり。〔一一〕元惡　大惡なり。

【題義】人にして一時暴威をふるふ者も、忽ち猛虎の縛につくが如きものあるをいふ。

【詩意】闕く。

〔五〕

朝逢富家葬

朝逢富家葬。前後皆輝光。(一)(二)
共指親戚大。緦麻百夫行。(三)(四)
送者各有死。不須羨其強。(五)
君看束縛去。亦得歸山岡。(六)(七)(八)(九)

〔五〕

朝に富家の葬に逢ふ

朝に富家の葬に逢ふ、前後、皆輝光あり。
共に指す親戚の大なるを、緦麻、百夫の行ありといふ。
送者も各〻死有り、其の强を羨むことを須ひず。
君看よ束縛し去られて、亦山岡に歸するを得ることを。

【字解】〔一〕前後　柩のまへうしろ。〔二〕輝光　喪具・喪者のさまうるはしくしててりかがやくなり。〔三〕緦麻　ほそきいとすぢのあさにて作れる喪の服なり、喪服は死者に對する親疎輕重により五等に別る、期は三年より三月に至る、緦麻は三月の喪服にてその輕きものに屬す。〔四〕百夫行　百人の行列。〔五〕其强　其は死者をさす。〔六〕君　送者をはじめ一般人をさしていふ。〔七〕束縛去　其人の死骸を席・繩などにてたばれしばること。〔八〕亦　今の富人のみでなく「君もまた」の意。〔九〕歸山岡　死して山岡の墓處におちつくこと。

【題義】富者の葬をみてその羨むに足らずして何人も富者と同じく死の運命を一にすることをのぶ。

【詩意】あさがた富める家の葬式にであうた。みるとその柩の前後はあたりもかがやくばかりにうつくしい。それで之を見る者は之を指さしてこの人の親戚もまことに多大なものである、緦麻三月の輕き親族のものさへ百人も行列にたつてゐるなどと感服してゐる。(以下作者の考をのぶ。)が、その富者のみでなく之を送る人人もめいめい死といふことはあるのであつて、この富者の勢力が强大だなどいつてうらやむ必要はないのである。看よ、諸君と雖も亦一旦死するときは死骸をくくられて墓處たる山岡におちつくことができるのではないか。

【餘論】此の五首舊說により乾元二年秦州に於ける作とせるも、仔細にみるとき、特に秦州にての作なるを覺えず。秦州にての作とすれば、長安に關する事など、みな追憶の言とみなさざる可からず。余はむしろ、長安時代の作にて、自己の目擊せる所をのべしものに非ざるかと疑ふものなり。さすれば、始めて北里・長陵・蕭京兆・元惡・富家葬、みないきいきと感せらるるとおもふなり。

秦州雜詩二十首

秦州の雜詩 二十首

〔一〕

滿目悲生事

滿目悲生事。因人作遠遊。
遲廻度隴怯。浩蕩及關愁。
水落魚龍夜。山空鳥鼠秋。
西征問烽火。心折此淹留。

〔一〕 滿目生事を悲しむ

滿目、生事を悲しむ、人に因りて遠遊を作す。
遲廻、隴を度りて怯に、浩蕩、關に及ばむとして愁ふ。
水は落つ魚龍の夜、山は空し鳥鼠の秋。
西征、烽火を問ふ、心折れて此に淹留す。

【字解】 【一】 秦州 陝西省鞏昌府秦州なり。作者寓居の地。【二】 雜詩 寓居中の種種なることについてのべしゆゑひとまとめにして雜詩といふ。【三】 生事 生活上の事、この句は生活の意の如くならぬことをさしていふ。【四】 因人 他人の力に由る。これはその誰なるや不明なるも、秦州に於て作者を世話するから來れといふてくれし人あるならん。【五】 遠遊 華州の方より秦州まではみちとほし。【六】 遲廻 みちはかどらぬさま。【七】 度隴怯 度は「わたる」、經過すること、隴は隴坻・隴坂なり、陝西鳳翔府隴州の西北六十里にあり、大きな「さか」地なり。【八】 浩蕩 大なる貌、蓋し心の散漫なるさまをいふならん。【九】 及關 關は或は一般に邊地の關をさすとし、或は特に隴山の下の關をさすと爲す。前說可なるに似たり、前說をとるときは「及」は「及ばんとする」にて將來にかかる語なるべし。【一〇】 水落 落は水量が減じて低落すること。【一一】 魚龍 川の名、汧水のことなり、隴州の南にあり、東南流して渭水に入る、これは自己の已に經過せる地につきいふ。【一二】 山空 空とは人の居らぬをいふ。【一三】 鳥鼠 山の名、鳥鼠同穴山ともいふ、甘肅省蘭州渭源縣の西にあり、これは未踏の地を想像してのぶ、魚龍の句は度隴の句を承け、鳥鼠の句は及關の句を承くとみるべきなり。【一四】 西征 征は「ゆく」こと、征伐の義にあらず。【一五】 問烽火 烽火は兵亂の急を告ぐるもの、問とはその有無を問ふなり、當時隴西にわたりて吐蕃の亂ありしなり。【一六】 心折 心がくじけをれること。【一七】 此 秦州をさす。【一八】 淹留 ひさしくとどまる。

【題義】 作者乾元二年秋七月華州より官を棄てて西に向ひ秦州に至りて寓し、くさぐさの事を詩もて詠じたり。第一首は全體についてのべたり、宛も總序の如し。

【詩意】 自分は今、悲しいことには目にふるるもの皆自己の生活に都合あしき事ばかりであつて、他人の力に由りて遠方へたびをするのである。進みて隴坂の險路をとほるときはみちもはかどらず心がおびえることであり、想像してみるとこれからさき邊境の關所のあるところまでゆくのだとおもふと氣心もばつとしてしまりなく愁へを催さるるのである。魚龍川のあたりの夜には水かさの減つてゐるのがめだち、鳥鼠山の秋は何人も居らぬ寂しさが想像さるる。西方に旅行して前路に烽火の有るや無きやを問うてみると烽火は有るのであつて、それがため前進の心もくじけてしまひ、ここの秦州で滯在するのである。

〔二〕

秦州城北寺

〔二〕 秦州城北の寺

秦州城北寺。勝跡隗囂宮。

秦州、城北の寺、勝跡、隗囂が宮。

(四)苔蘚(五)山門古。(六)丹青(七)野殿(八)空。　苔蘚、山門古りたり、丹青、野殿空し。
月明(九)垂葉露。(一〇)雲逐度溪風。　月は明かなり垂葉の露に、雲は逐はる溪を度る風に。
(一一)清渭(一二)無情極。(一三)愁時(一四)獨(一五)向東。　清渭は無情の極、愁時、獨り東に向ふ。

【字解】〔一〕城北　北は東北をいへるなり。〔二〕勝跡　景色のよい古跡。〔三〕隗囂宮　隗囂は人名、秦州は漢代の天水郡にして前漢の末、王莽の時、隗囂この地に據りて雄と稱す、秦州の東百里に麥積山あり、山の北を雕窠谷とす、上に隗囂が避暑宮あり、風景甚だ佳なりといふ。〔四〕苔蘚　あをごけ、ぜにごけ。〔五〕山門　寺門。〔六〕丹青　宮殿の彩色。〔七〕野殿　山野にあるごてん。〔八〕空　人なし。〔九〕垂葉露　下垂せる葉におきたる露。〔一〇〕雲逐　逐とはおはるるのみに非ず、おひつおはれつするさまをいふ。〔一一〕清渭　すめる渭水、これは秦州の北を流れ東南流す。〔一二〕無情極　おもひやり無きことのきはみ、水を罵るなり。〔一三〕愁時　作者の心のうれふるときに。〔一四〕獨　自分ばかり、水につけいふ。〔一五〕向東　東は長安、作者の故郷とする地なり。

【題義】此篇は隗囂が故跡をみたることと兼ねて懷鄕の情をのぶ。

【詩意】秦州の城の北（東北）に寺が存してゐるが、これは風景すぐれた古跡でもとは隗囂の宮殿なのである。見ればこけむして寺門も古びてをり、彩色もはげちよろけて野なかのごてん、さつぱり人影さへ見えぬ。夕方には下方へ垂るる葉においた露のうへに月の光がうつろひ照り、溪をわたる風のために雲が逐ひつ逐はれつしてゐる。渭水のすんだ流れをみるとそれは情知らずの極みであつて、この自分がこんなに愁へてをるのをも知らずがほに彼の水は自分だけ東の方長安に向つてながれゆくのである。

〔三〕

(一)州圖(二)領同谷

州圖領同谷を領す

州圖領同谷。(三)驛道出(四)流沙。　州圖、同谷を領す、驛道、流沙に出づ。
(五)降虜(六)兼千帳。(七)居人有萬家。　降虜、千帳を兼ね、居人、萬家有り。
馬驕(八)朱汗落。(九)胡舞(一〇)白題斜。　馬驕りて朱汗落ち、胡舞ひて白題斜なり。
(一一)年少(一二)臨洮子。西來(一三)亦自誇。　年少の臨洮子、西より來りて亦自ら誇る。

【字解】〔一〕州圖　秦州の地圖。〔二〕領同谷　領とは管領、支配すること、秦州は唐の時都督府を置き天水（秦州）、隴西、同谷の三郡を領す。同谷は秦州の南、階州成縣に屬する地。〔三〕驛道　うまやぢ。〔四〕出流沙　出はそちらへ追出しうるをいふ、流沙は唐の沙州、卽ち今の甘肅省安西州燉煌縣以北の地方、新疆省に通ずる道路をさす。〔五〕降虜　唐に降りしえびす、吐蕃。〔六〕兼千帳　兼とはそのすべてがといふこと、千帳とは多くの天幕をいふ、虜は天幕の内に生活す。〔七〕居人　住居する本土民、虜に非ざるものをいふ。〔八〕朱汗　あかき汗、駿馬は血のあせを流すといふ。〔九〕胡舞　えびすのまひ。〔一〇〕白題斜　題は「ひたひ」、えびすの習俗はひたひに白堊をぬるといふ、斜とは首をかたむけて舞ふゆゑにひたひもななめになるなり。（別說に白題は胡種の名なりといひ、或は毛おりものをかぶせた笠なりともいふ）〔一一〕年少　としわか。〔一二〕臨洮子　臨洮は鞏昌府岷州の地、秦州の西にあたる、子とは男子をいふ。〔一三〕亦自誇　誇とはその驕悍についてほこるをいふ。

【題義】降虜と漢民と雜處のさまを寫す。

【詩意】この秦州の地圖でみると南は同谷がここの管轄となつてをり、西北の方はうまやぢが流沙の方へ出られるやうにつらなつてをる。ここでは降參したえびすがたくさん居り、千ばかりもある天幕がみなそれであり、本土人に屬する住民は一萬戸ばかりもある。駿馬を走らせるものがあるがその馬はあかい汗をおとす、またえびすが舞ひなどをするが首をかしげ白氎をぬつたひたひつきをかしくゆがめてまふ。西の方臨洮からわかい男子がくるが、彼等もやはり、えびすとおなじく驍悍な夷俗をもつてゐることをほこりとしてゐる。

〔四〕

鼓角縁邊郡

鼓角縁邊郡。川原欲夜時。
秋聽殷地發。風散入雲悲。
抱葉寒蟬靜。歸山獨鳥遲。
萬方聲一概。吾道竟何之。

〔四〕

鼓角縁邊の郡

鼓角、縁邊の郡、川原、夜ならむと欲する時。
秋聽けば地に殷として發り、風に散じて雲に入りて悲しむ。
葉を抱きて寒蟬靜かに、山に歸る獨鳥遲し。
萬方、聲一概、吾道、竟に何くにか之かむ。

【字解】【一】鼓角　太鼓、つのぶえ。【三】縁邊郡　邊境によりそうた郡。【三】秋聽　秋にあたりてきゝつけてきく。【四】殷　雷のやうにひびくさま。【五】發　おこる、鼓角の聲がおこる。【六】風散　聲が風にちらされる。【七】入雲　たかくのぼるをいふ。【八】抱葉二句　夜ならんとするときの景。【九】寒蟬　ひぐらし。【一〇】獨鳥　一羽のとり。【一一】萬方　四方におなじ。【一二】聲　鼓角のこゑ、ここに至りて始めてこの字を田だせり。【一三】一概　一樣。【一四】吾道　道は有形のみち、自己の脚にてふむ道路。【一五】何之　何處にか往かん。

【題義】邊境の鼓角の聲をうつし、かねて自己のよるべなきさまをのぶ。

【詩意】川ぞひの原野が夜になりかかるころ、國境一帶の郡で鼓角が鳴る。秋の空氣のすんだときそのおとをきくと大地のそこから雷がとどろく樣におこつてくるし、またそれは風に吹きちらされて雲のうへまでいりこんでかなしさうである。木の葉につかまつてゐるひぐらしの聲はなきほそり、一羽の鳥がのつそりと山の方へと歸りゆく。どの方面をみわたしてもこの鼓角の聲の無いところはない、結局自分がふまへてゆく道路はどちらへ向つてゆけばよいのであるか。

〔五〕

西使宜天馬

西使宜天馬。由來萬匹强。
浮雲連陣沒。秋草徧山長。
聞說眞龍種。仍殘老驌驦。

〔五〕

西使天馬に宜し

西使、天馬に宜し、由來、萬匹强。
浮雲、連陣沒す、秋草、徧山長し。
聞說らく眞の龍種、仍老いたる驌驦に殘り、

哀鳴思戰鬪。迥(一〇)立向蒼蒼(一一)。　哀鳴して戰鬪を思ひ、迥に立ちて蒼蒼に向ふ、と。

【字解】〔一〕西使　或は「南使」に作る、西使は西へゆきし使者、南使は南へかへる使者にて、ともに漢使（漢より外國へやりし使者）の義とす。然れども西使・南使ともに此句に於ては通じがたし。それは次の「宜」の字に對して說明がつきかぬる故なり。西（或は「南」）使のままにて解釋する方法ありや、讀者の敎を俟つ。或は曰く、秦州淸水縣に馬池あり、又、隴西の神馬山に淵池あり、龍馬の生ずる所なりと、作者、蓋しそれらの地を指せる語を用ひしものならん。余は假りに「西地」・「西境」の意味の字の誤りとして解しおく。卽ち支那本土の西北部地方の義とみる。〔二〕宜天馬　天馬の如き名馬の產するに似つかはしきこと。〔三〕强　あまりの義。〔四〕浮雲　羣馬のむれたるさまを雲をもてたとへていふ。〔五〕連陣沒　連陣とは幾度ものいくさにつづけさまにの義。舊解に鄴城の敗軍（乾元二年三月三日）をさすといへり。ただ余は鄴城の一戰のみをさすとみる能はず、幾回かの官賊の戰をいふとみる。沒とは馬が死沒するをいふ。〔六〕偏山　この秦州地方の山にあまねく。〔七〕聞說　「他の人の說くをきくに」の義、「きくならく」と訓す。〔八〕眞龍種　龍は龍馬、西域の天馬は龍の種なりといはる。〔九〕驌驦　驌驦は鳥なり、馬それに似たる故かく名づくといふ、駿馬なり。〔一〇〕迥立　迥は「はるか」、天に對して地上をいふ辭なり。〔一一〕蒼蒼　天のあをあをとした色、卽ち天をさす。

【題義】羣馬みな沒し、老馬獨り殘存して戰ひを思ふことをいふ。暗に自己をたとへいふなるべし。

【詩意】西方の土地は天馬の產するに都合のよいところで、これまで萬匹以上も居たのである。ところがその空に浮べる雲の樣に見えてゐた多くの馬は本土の方へいくさに送られてそこで幾度かのたたかひにつづけさまに戰沒してしまひ、今やこのあたりの山いつぱいにただ秋の草がせいたかくのびてをる。きくところによると、まことの龍種たる名馬がまだ老いたる驌驦のなかにのこつてをり、その老馬はかなしさうに鳴いてたたかひをしたいとおもひ、はるかに立ちながらあをぞらの方にむかつてうつたへてゐるとのことである。

〔六〕

城上胡笳奏

城上(一)胡笳(二)奏。山邊(三)漢節(四)歸。　城上に胡笳奏せらる、山邊に漢節歸る。

防(五)河赴滄(六)海。奉詔發金(七)微。　河を防がむとして滄海に赴く、詔を奉じて金微より發す。

士(八)苦形骸黑。林(九)疎鳥獸(一〇)稀。　士苦しみて形骸黑く、林、疎にして鳥獸稀なり。

那(一一)堪往(一二)來戍。恨(一三)解(一四)鄴城圍。　那ぞ堪へむ往來の戍の、鄴城の圍を解きしことを恨むに。

【字解】〔一〕城上　秦州の城のうへ。〔二〕胡笳　蘆葉を卷きて吹きならすもの、これは唐兵が吹くなり。〔三〕山邊　秦州のちかくの山のあたり。〔四〕漢節　漢の使者をいふ、節は棒のさきに牛尾をつけたるもの、使者たるのしるしに持つもの、これは唐より吐蕃の方へやられし使者をいふ。〔五〕防河　卷二「兵車行」の防河の義と同じく、河西地方の黃河の守備をすること。〔六〕滄海　靑海地方をさすならん、（防河・滄海を東の方渤海郡の地方のこととみる說あれども今從はず）鄴說は趙次公注の意を取る。〔七〕金微　山の名にしてまた郡の名、唐には關內道に屬し、また單于都護府に屬す、今の內蒙古綏遠の喀爾喀地方なり、防河二句は胡笳奏を承く。〔八〕士　歸士なり。〔九〕林疎　疎は葉のまばらなるをいふ、林を旌に作れる本あり、從はず。〔一〇〕鳥獸稀　さびしきさまをいふ、士苦二句は漢節歸を承く。〔一一〕那堪　作者がたへがたしといふこと。〔一二〕往來戍　往の字は防河二句を承け、これから出發する士卒をいふ、來の字は士苦二句を承けいま邊地より歸り來りし士卒をいふ、戍は番兵。〔一三〕恨　往來の戍がうらむなり。〔一四〕解鄴城圍　乾元二年三月の九節度の敗軍をさす、（舊解は此句あるにより防河の句を東方のこととせんとするものなるも、しかみるにはおよば

す、此句は治亂の根本にさかのぼりていへるまでなり、もし九節度の軍が勝ちたりしならば吐蕃の驕氣も起るまじ、戍卒は吐蕃の驕氣のために往來せしめらるゝゆゑそれが敗軍を恨むは當然のことなり、故に防河の句は青海地方吐蕃のこととして順當なり。）

【題義】 秦州に於て往來の戍卒を見て感をのぶ。

【詩意】 城のうへではあしぶえが吹きならされる、（まだ亂がやまぬのである、）附近の山にはやつと朝廷からの徵兵の使者がもどつてきた。亂がやまぬから詔を奉じて士卒は金微の地方から出發して、ここを通つて黃河の防禦のため青海地方へ赴かうとするのである。使者についてもどつてきた士卒をみるといかに辛苦をしてゐるかそのからだもすすけてまつ黑く、それが秋の木葉まばらに鳥獸も稀なるころにもどつたのである。これら往來の戍卒はこの春官軍が鄴城の圍を解いてさへくれなかつたならばと恨んでゐるが、自分はどうしてそのやうな話をきくにたへられようぞ。（此篇舊解分明ならざるもの多し、よりて暫く鄙見によりて釋せり。）

〔七〕

(一)莽莽萬重山

莽莽萬重山。(二)孤城(三)石谷間。
(四)無風雲出塞。(五)不夜月臨關。
(六)屬國歸何晩。(七)樓蘭斬未還。
(八)煙塵一(九)長望。(一〇)衰颯正(一一)摧顏。

〔七〕

莽莽たり萬重の山

莽莽たり萬重の山、孤城、石谷の間。
風無うして雲、塞を出で、夜ならざるに月、關に臨む。
屬國歸ること何ぞ晩き、樓蘭、斬らむとして未だ還らず。
煙塵一たび長望す、衰颯、正に顏を摧く。

【字解】 〔一〕 莽莽 暗昧の貌。〔二〕 孤城 ひとつあるしろ、秦州の城をさす。〔三〕 石谷 岩石より成りたちたる谷。〔四〕 無風一句 下よりわくゆゑ風なくとも雲出づ、塞は「とりで」。〔五〕 不夜一句 舊解よろしからず、塞さへくらきゆゑ月のすがたあらはるるをいふ、關は上句の塞とおなじ。〔六〕 屬國 典屬國の略、漢の蘇武、武帝の時匈奴に使し昭帝の時かへり、典屬國（外國の使につきしたがへるものをつかさどる官）となる。ここは唐より吐蕃への使者をさしていふ。〔七〕 樓蘭 國名、新疆省の東南部、羅布淖爾の南、焉耆のあたりなり、漢の傅介子使者となり、樓蘭に至り其の王を斬り、還りて侯に封ぜらる、ここは吐蕃にあてていふ。〔八〕 煙塵 兵亂のちりやけむり。〔九〕 長望 とほくながめる。〔一〇〕 衰颯 意氣のおとろへたるさま。〔一一〕 摧顏 かほのしわののびぬさまなるべし。

【題義】 吐蕃の服從せざることを憂へたる作なり。

【詩意】 むらむらとをぐらくかさなり立ちたる山あり、その岩石だらけの谷間に孤立したこの秦州の城がある。ここは風は無いのにひとりでに雲が湧いてとりでを出で、夜でもないのに暗いから月がせきしよにさしかかつて照らしてをる。わが唐から吐蕃へでかけた使者はなんでかく歸るのがおそいのであらう、吐蕃の王を斬るつもりで出たのであるのにまだかへつてはこぬ。自分はただとほく煙塵をながめやるので、いまや自分の意氣はおとろへてまさに顏にしわをよせてしかめづらをしてゐるのみのことである。

〔八〕

聞道尋源使

聞道尋源使。從天此路廻。　聞道らく尋源の使、天從りして此の路より廻る、と。
牽牛去幾許。宛馬至今來。　牽牛、去ること幾許ぞ、宛馬、今に至るまで來る。
一望幽燕隔。何時郡國開。　一望、幽燕隔る、何の時か郡國開かれむ。
東征健兒盡。羌笛暮吹哀。　東征、健兒盡く、羌笛、暮吹哀し。

〔八〕

聞道らく尋源の使

【字解】〔一〕聞道　聞說に同じ、道は他人の言ふこと、「人のいふなきくに」の義、「きくならく」と訓す。〔二〕尋源使　漢の張騫がはなし、「荊楚歲時記」に見えたる後世の俗傳なり、騫、武帝の使となりて黃河の源をたづね遂に槎にのりてひと月ばかりな經て一處に至り織女を見る、また一丈夫が牛を牽きて河に水をのませなるを見る、よりてここはいづこと問ふに、それは嚴君平に問はれよと答へしといふ。〔三〕從天此路廻　甚だ無理な句とおもふ、意味は次の如くならん、從天とは黃河の源はたかく天につづくゆゑ、そこをさして天といふ、此路とは秦州の城邊の大道をさす、廻とは本土の方へもどるをいふ、天のやうな高い源地からこの路をへてもどつたといふ義なり。〔四〕牽牛　上述の牛を牽ける男をさす。〔五〕去幾許　去とは道程の距離につきいふ、（時間にていふとみるは非なり）幾許、みちのりどれほど、遠きをいふ。〔六〕宛馬　大宛國の名馬。〔七〕幽燕　幽州及び燕の地、直隸北部にて安祿山の根據とせし地方。〔八〕隔　道路隔絕するをいふ。〔九〕開　道路の塞がりがとけひらかるるをいふ。〔一〇〕東征　東は幽燕の地方をさす、征は征伐。〔一一〕健兒　つよいわかもの。〔一二〕羌笛　羌夷のふくふえ。

【題義】古代漢のころ遠國まで交通ひらけたるに、今日かへつて東方本土の道路ふさがれることをなげきたる作なり。

【詩意】きけば漢の張騫すなはち黃河の源をたづねにいつた使は、天の樣なたかいところからこの路をとほつて本土へもどつたのである。彼がであうた牛ひきの男などのゐた處と本土とはどれほどはなれてゐたか、さぞはるばるとはなれたところなのだらうが、西國大宛の名馬は今日になつてもあちらからやつてくるのである。ところがさかさまに本土の方はどうである、ひとたびながめやるに幽燕の地は全くここと隔絕してゐる、いつになつたら郡や國が交通ひらけるのであらうか、兵亂のためこの健兒たちも東方征伐のためにすつかりでつくしてしまひ、ここでは羌夷がふきならす夕ぐれの笛の音があはれにひびいてゐるのである。

〔九〕

今日明人眼

今日明人眼。臨池好驛亭。　今日、人眼明かなり、池に臨む好驛亭。
叢篁低地碧。高柳半天青。　叢篁、地に低れて碧に、高柳、天に半して青し。
稠疊多幽事。喧呼閱使星。　稠疊、幽事多し、喧呼、使星閱す。
老夫如有此。不異在郊坰。　老夫如し此有らば、郊坰に在るに異ならざらむ。

〔九〕

今日人眼明かなり

【字解】〔一〕明人眼　作者時時「眼明」の語を用ふ、めをさまさせるほどうつくしきをいふ。〔二〕驛亭　うまつなぎのやど。〔三〕稠疊　多く且つかさなる。〔四〕幽事　よき風景に關する事ども。〔五〕喧呼　人がやかましくよばはる。〔六〕聞使星　聞とは使者が聞事なかぞへたててみること、使星は使者、「晉書」天文志に流星天使也とみゆ。これは唐より吐蕃の方へゆく和好の使者なり。〔七〕老夫　作者自らいふ。〔八〕此　驛亭のながめをさす。〔九〕郊坰　邑外を郊、郊外を野、野外を林、林外を坰といふ、郊坰は別墅、隱居處といふほどの意に用ふ。

【題義】秦州の驛亭の風景のよきを見、その喧騷を氣まづくおもひてよめる作。

【詩意】今日こそは自分の眼もはつきりさえた、なせかといふと池に臨んで景色のよい驛亭のさまを見たからである。地面にひくくたれて竹むらが碧に立つてをり、天のなかほどにとどくかの樣に高い柳が青くしげつてをる。そのほかくさぐさの風景の事がらがあるが、いかにせんそれをひどく言ひののしりつつ使者の役人が詮議だてしてをる。自分がもしこのやうな境地をもつてゐるなら、野外の別莊にでも居るやうに靜かにながめてゐようものを。

〔一〇〕

雲氣接崑崙

雲氣接崑崙。涔涔塞雨繁。
羌童看渭水。使客向河源。
煙火軍中幕。牛羊嶺上村。
所居秋草靜。正閉小蓬門。

〔一〇〕

雲氣崑崙に接す

雲氣、崑崙に接す、涔涔として塞雨繁し。
羌童、渭水を看、使客、河源に向ふ。
煙火、軍中の幕、牛羊、嶺上の村。
居る所、秋草靜かなり、正に閉づ小蓬門。

【字解】〔一〕崑崙　山の名、黃河の出づる所。〔二〕涔涔　雨多き貌。〔三〕塞雨　とりでにふる雨、秦州の雨をいふ。〔四〕羌童　えびすのこども。〔五〕看渭水　水量の如何をみるなり。〔六〕使客　唐より吐蕃への使者。〔七〕河源　吐蕃の地をさす、唐の鄯州鄯城(今、甘肅省西寧州碾伯縣治)に河源軍を置きたり、ここは其の一地をさすに非ず。〔八〕煙火　炊事のけむり。〔九〕牛羊　民家の牧畜する所。〔一〇〕所居　作者の住處。〔一一〕蓬門　よもぎのしげれる家の門。

【題義】雨中の景事を敍す。

【詩意】この秦州の雨がしげしげとふつて、雲の氣が崑崙山の方までつづいてゐる。羌夷のこどもは水が急にではせぬかとて渭水をみにゆく、吾が朝廷からの使者は黃河の發源地の方へと向はんとしてゐる。軍中の幕營では炊煙がただようてをり、嶺上の村では牛や羊が放たれてゐる。このとき自分の住んでゐる處は秋の草が靜かに生えてをるばかりで、ちやうど小さなよもぎふの門を閉ぢたところである。

〔一一〕

蕭蕭古塞冷

蕭蕭古塞冷。漠漠秋雲低。

〔一一〕

蕭蕭として古塞冷かなり

蕭蕭として古塞冷かに、漠漠として秋雲低る。

黃鵠翅垂雨。蒼鷹饑啄泥。　黃鵠、翅、雨に垂れ、蒼鷹、饑ゑて泥に啄む。

薊門誰自北。漢將獨征西。　薊門、誰か北自りする、漢將、獨り西を征す。

不意書生耳。臨衰厭鼓鞞。　意はざりき書生の耳、衰に臨みて鼓鞞に厭かむとは。

【字解】【一】古塞　ふるきとりで、秦州の關塞をさす。【二】翅垂雨　翅は「つばさ」、垂るるものは「つばさ」なり。【三】薊門　關名、直隷順天府薊州、安祿山の興りし地、時に史思明の黨何據なり。【四】自北　南進する。【五】漢將　唐の將軍。【六】征西　吐蕃の方を征伐する。【七】不意　意外なことに。【八】書生　自己をさす。【九】臨衰　老衰になりかかつて。【一〇】厭　飽く、「いとふ」と訓ずべからず、結局「いとふ」義となるも直接「いとふ」と訓じては「不意」の二字用をなさず。【一一】鼓鞞　たいこ、こつゞみ、軍中の用ふる所のもの。

【題義】雨中寇亂をいたみて作る。

【詩意】まことにさびしく古いとりでがつめたく感じられ、秋の雲がひろひろとひくくはびこつてゐる。黃鵠は雨中にそのつばさを垂れて飛ぶ勢がなく、蒼鷹はうゑて泥のなかで餌をあさつてをる。このとき何者ぞ薊門の方面で北から南進せんとするものは。而して漢將は東伐をなさずして獨り西にむかつて吐蕃などを征する。自分ごとき書生の耳がいまの老衰にさしかかつてつゞみ太鼓の音にききあかうとは、ゆめにもおもはなかつたことである。

〔一二〕　〔一二〕

山頭南郭寺

山頭の南郭寺

山頭南郭寺。水號北流泉。　山頭の南郭寺、水は號す北流泉と。

老樹空庭得。清渠一邑傳。　老樹、空庭に得、清渠、一邑傳ふ。

秋花危石底。晚景臥鐘邊。　秋花、危石の底、晚景、臥鐘の邊。

俛仰悲身世。溪風爲颯然。　俛仰、身世を悲しむ、溪風も爲めに颯然。

【字解】【一】南郭寺　南のくるわにある寺。【二】北流泉　寺ちかくある泉とみゆ。【三】空庭得　字のままならば寺の空庭に於てこの老樹を得たりといふなり。「得」の字面白しとて賞美するものあり、然れども得、不得、は言はずとものことなり、之を喜ぶは宋人好奇者流のなすところなり。私に案ずるに得は特の音訛ならん、特は獨の義、ただ一本孤立せるをいふ。かくしてこそ「傳」の字とも對し得て妙なりといふべし。空庭特として見るべし。【四】清渠　きよき水のほりわり、卽ち北流泉なり。【五】一邑傳　一邑は秦州の全體をいふ、傳とは次より次へとそそぎつたふるをいふ。【六】晚景　晚暮の日影。【七】臥鐘　鐘樓なくして地上に橫はる鐘をいふ、以て寺のあれたるさまを見るべし。【八】俛仰　俯仰に同じ。【九】爲　吾がために。【一〇】颯然　さつとふく。

【題義】南郭寺のさまをのぶ。

【詩意】山の頭に在る南郭の寺、その寺のそばに北流泉とよばるる泉がある。寺の庭には人かげもなく老樹が一本孤立してをるのみだが、泉はほりわりで全地方にみちびかれてゐる。ころしも夕方で秋の花があぶなげな石のねもとであはれにさいてをり、地べたに橫はつてゐる鐘には夕ばえがさしかけ

てゐる、自分はそこで或は俯し或は仰いで一身のこと世間のことにつけて悲んでをると、たにまの風も心ありげに吾が悲みをたすけるかの樣にさつと吹き來るのである。

〔一三〕

傳道東柯谷(一)

傳道(二)東柯谷。深藏數十家。
對(三)門藤蓋瓦。映竹水穿(四)沙。
瘦地翻宜粟。陽(五)坡可種瓜。
船(六)人近相報。但(七)恐失(八)桃花。

〔一三〕

傳道す東柯谷

傳道す東柯谷、深く藏す數十家。
門に對して藤、瓦を蓋ひ、竹に映じて水、沙を穿つ。
瘦地、翻つて粟に宜しく、陽坡、瓜を種う可し、と。
船人近ろ相報ず、「但だ恐る桃花を失せむか」と。

【字解】〔一〕傳道　一般人がつたへいふ。〔二〕東柯谷　秦州の東南五十里にある谷の名、作者の姪佐はそのちかくに居りしなり。〔三〕對門　門のむかひに生えてゐること。〔四〕水穿沙　沙洲などとほりぬけて水がながれる。〔五〕陽坡　日あたりのよい坂地。〔六〕船人　せんどう。〔七〕但恐　此一句は船人の語。〔八〕失桃花　桃花は「桃花のある地」の意にて武陵桃源の仙鄕の義に用ふ、今は秋にて實際の桃花は無し、此語は船頭が早く東柯に住居せよとすすむるなり、作者蓋し卜居に心を労せしとみゆ。

【題義】他人が東柯谷の幽勝をほめしことを敍す。

【詩意】人人がつたへいふに、東柯谷といふところは、谷間に數十戶の家が藏されてをり、門前に生えてをる藤がのびて屋根瓦を蓋うたり、竹林の碧にうつろうて沙をとほして淸い水が流れてゐたり、土地はやせてゐるが却つて粟をそだてるに都合よく、日あたりの岡には瓜を種ゑることもできるとのことである。(これだけでもよささうな場所であるが)ちかごろ船頭がしらせてくれたことには、「早くあんないい場所に住居を定めないと、ともすると桃源の様な仙鄕を無くしてしまはれはせぬかとおもふ」といふことである。

〔一四〕

萬古仇池穴(一)

萬古仇池穴。潛通小(二)有天。
神(三)魚今不見。福(四)地語眞傳。
近接西南境。長懷十(五)九泉。
何時一茅屋。送老白雲邊。

〔一四〕

萬古仇池の穴

萬古、仇池の穴、潛かに通ず小有天。
神魚、今見えず、福地、語眞に傳ふ。
近く接す西南の境、長へに懷ふ十九泉。
何の時か一茅屋、老を送らむ白雲の邊に。

【字解】〔一〕仇池穴　階州成縣の西にある山池の名、秦州の南にあり、この詩にては西南といへり、よほどの奇勝とみえたり、「水經注」に曰く、仇池絕壁、峭峙孤險、登高望之、形若覆壺、其高二十餘里、羊腸蟠道、三十六廻、上有平田百頃、煮土成鹽、因以百頃爲號、山上豐水泉、所謂淸泉湧沸・潤氣上流者也、と。〔二〕小有天　山西省の王屋山の洞をいふ、其の洞は小有淸虛之

天の名あり、仇池は之と相通ずと稱せらる。【三】神魚　仇池穴には神魚あり、之を食へば仙となるといひつたふ。【四】福地　道家の書に福地・儀地あり、名山または洞府を以て之に充つ、凡そ天下に三十六洞天・七十二福地ありと稱す。【五】十九泉　仇池の山上には田百頃と泉九十九眼ありと稱す、九十九を省きて十九といへり。

【題義】仇池穴のことを想像してのぶ。

【詩意】仇池の穴は古來小有天の洞とひそかに通じてゐるとのことだ。その池にゐる神魚は今は見えないが、その場所が道書の謂ふ所の福地だといふはなしはほんたうにつたはつてゐる。この秦州は西南の境たる仇池とは近くつついてゐるので、自分はいつもそこに在るといふ九十九泉のことなどおもうてゐるのだ。いつになつたら一軒の茅屋をそこにかまへて、白雲の浮べるあたりで老いさきを送ることができるであらうか。

〔一五〕

未暇泛(一)滄海

未暇泛滄海。悠悠(二)兵馬間。
(三)塞門風落(四)木。客舍(五)雨連山。
(六)阮籍行(七)多興。(八)龐公隱不還。

〔一五〕

未だ滄海に泛ぶに暇あらず

未だ滄海に泛ぶに暇あらず、悠悠たり兵馬の間。
塞門、風、木を落し、客舍、雨、山に連る。
阮籍、行くゆく興多からむ、龐公、隱れて還らず。

東柯遂(九)疎(一〇)懶。休鑷(一一)鬢毛斑。
東柯、疎懶を遂げむ、鑷むを休めよ鬢毛の斑なるを。

【字解】【一】泛滄海　ひろうみにうかぶ、孔子が桴に乘りて海に浮ぶの意を用ふ。【二】悠悠　はるか、時間のうへにていふ。【三】塞門　秦州の關門。【四】落木　木の葉をおとす。【五】客舍　秦州の客寓、處は不明。【六】阮籍　魏の人、時世を憤り不意に車に乘じてでかけ途窮まれば慟哭してかへりしといふ、これはそれを轉用す。【七】行　ゆくゆくなり、將來につきていふ。【八】龐公　遺興五首の第二「昔者龐德公」の條にいだせり。【九】遂　とぐる。【一〇】疎懶　ぶしやう、暗に嵇康がことを用ふ、康は髮もくしけづらず沐浴もせざりしといふ、次の句を帶びていふ。【一一】鑷　はさみきる。

【題義】東柯に住むべく決意して作る。

【詩意】自分は海に泛びて遠くへ去つてしまふいとまはまだないので、長いあひだ兵馬のあひだにさまようてゐる。ここの關門では風が木の葉を落し、おのが寓居では雨が山山につづいてふりつつある。さて東柯にすまはうと決心したから、これからは途窮つて慟哭したといはるる阮籍（即ち自分）も興がおほいことだらうし、また龐德公（即ち自分）は妻子を攜へて山にかくれて世間へかへることはない。あくまで東柯で疎懶の本性をしとげるつもりであるから、びんの毛の白髮をはさみきることなどはよすがよい。（毛をはさむことさへもうつちやらかして疎懶をしようとおもふのである。）

〔一六〕

東柯好崖谷

〔一六〕

東柯は好崖谷

東柯好崖谷。不與衆峰羣。　東柯は好崖谷、衆峰と羣せず。

落日邀(一)雙鳥。晴天卷片雲。　落日、雙鳥を邀ふ、晴天、片雲卷く。

(二)野人矜(三)險絕。水竹會(四)平(五)分。　野人、險絕なるを矜る、水竹、會ず平分せむ。

(六)採藥吾將老(七)。兒童未遣(八)聞。　藥を採りて吾將に老せむとす、兒童にも未だ聞か遣めず。

【字解】【一】邀　日もて迎ふるなり。【二】野人　東柯の土人をさす。【三】矜　ほこる。【四】會　俗語「かならず」。【五】平分　土人を等分すること、（水と竹と牛牛といふ說は取らず）。【六】採藥　龐德公の意。【七】老　老を送るをいふ、隱居することなり。【八】遣　「して、せしむる」。

【題義】この詩は東柯谷を實地に檢査して決意せることをのぶ。

【詩意】東柯にきてみるとなるほどいい崖谷であつて、他の衆くの峰とはむれをなしてはゐない。太陽が落ちかからんとするとき二つの鳥がとび來るのをむかへてみる。晴れた天には一片の雲が卷かれた樣に浮いてゐる。土人はここの土地のすばらしく險阻なことをほこつてゐる、じつにさうだ、自分はここへ移つてきて皆皆とこの水竹の景色を平等に分けてもらふことにしよう。龐德公の樣に藥草をとりながらここで自分は老年を送らうとおもふ。ただこれは自分だけの決心でまだこどもらにも聞かせぬのである。

〔一七〕

邊(一)秋陰易夕

邊秋陰りて夕なり易し

邊秋陰(二)易夕。不復辨(三)晨光。　邊秋、陰りて夕なり易し、復た晨光をも辨せず。

(四)簷雨亂淋(五)幔。山雲低度牆。　簷雨、亂れて幔に淋り、山雲、低れて牆を度る。

(六)鸕鷀窺淺井。(七)蚯蚓上(八)深堂。　鸕鷀、淺井を窺ひ、蚯蚓、深堂に上る。

車馬何(九)蕭索。門前百草長。　車馬、何ぞ蕭索たる、門前、百草長し。

【字解】【一】邊秋　邊地の秋。【二】陰易夕　陰れるためはやく夕になる、夕時をいふ。【三】辨晨光　あさの日光をしりわける、これは朝につけていふ。【四】簷雨　のきのあめ。【五】淋幔　「まく」にしただる。【六】鸕鷀　「う」のとり。【七】蚯蚓　みみず。【八】深堂　奥ふかくひろきざしき。【九】蕭索　さびしきさま。

【題義】東柯谷の雨中山居のさまをのぶ。

【詩意】邊地の秋は夕は夕でくもりのためはやく夕暮れになりやすいし、朝は朝で夜が明けたからとてあしたの日光がしりわけられるわけではない。のきばにそそぐ雨はみだれて幔幕にしただり、山よりおこる雲はひくく土塀をこえつつある。鵜は淺い井に餌があるかとのぞき、みみずは奥のざしきまであがつてくる。訪ひくる車馬はなくてひつそりであり、門前にはたださまざまの草がせたかくのび

てをる。

〔一八〕

地僻秋將盡

地僻秋將盡。山高客(一)未歸。
塞雲多斷續。邊(二)日少光輝。
警急烽常報。傳聞檄(三)屢飛。
(四)西戎外(五)甥國。何得(六)迕(七)天威。

〔一八〕

地僻にして秋將に盡きむとす

地僻にして秋將に盡きむとす、山高くして客未だ歸らず。
塞雲、多く斷續す、邊日、光輝少し。
警急、烽常に報ず、傳聞す檄の屢〻飛ぶを。
西戎は外甥の國、何ぞ天威に迕ふことを得む。

【字解】〔一〕客　自己をさす。〔二〕邊日　邊地をてらす太陽。〔三〕檄　長さ二尺の木簡、軍を徴すしるしのもの。〔四〕西戎　吐蕃をさす。〔五〕外甥國　をひ分にあたる國、唐は景龍以來ときどき天子の姫宮を吐蕃へ嫁せしむ、よつて吐蕃は唐を舅（をぢさん）とし、唐は吐蕃を外甥（をひ）とみる。公文書にも舅・甥の稱を用ひたり。〔六〕迕　たがふ、そむく。〔七〕天威　天子の御威光。

【題意】客寓の身ながらに吐蕃が唐に從はぬことをうれへたる詩なり。

【詩意】このかたよつた土地に秋が盡きかけてゐる。自分は山が高くとりかこんでをるこんなところにまだ寓居してゐるのである。とりでにうかぶ雲はきれたりつづいたりしてゐるし、ここの太陽はひかりがうすくみえる。一刻も警備をいそがねばならぬことは烽火がいつもそれを知らせてくるし、軍隊徴發の檄もたびたび飛んでゐるといふことは人づてにきいてゐる。西戎たる吐蕃は我が唐にとつては甥の國であつて、どうしてお上の御威光にさからふことができようぞ、さからへるはずはないのであるが。

〔一九〕

鳳林戈未息

(一)鳳林戈未息。魚(二)海路常難。
(三)候火雲(四)峰峻。懸(五)軍幕(六)井乾(七)。
(八)風連西(九)極動。月(一〇)過北(一一)庭寒。
(一二)故老思飛(一三)將。何(一四)時議築(一五)壇。

〔一九〕

鳳林戈未だ息ます

鳳林、戈未だ息まず、魚海、路常に難し。
候火、雲峰峻しく、懸軍、幕井乾く。
風は西極に連りて動き、月は北庭を過ぎて寒し。
故老、飛將を思ふ、何の時か築壇を議せむ。

【字解】〔一〕鳳林　關の名、蘭州府河州の西に在りといふ。〔二〕魚海　岑參の詩に「洗兵魚海」の句あれば湖名なるべし、赤河州の西、吐蕃の境にありといふ。〔三〕候火　敵情をうかがふための火、「のろしび」なり。〔四〕雲峰　候火を擧ぐる地をいふ、火の高きたとへなりとの解は取らず。〔五〕懸軍　遠くより臨せ來れる軍、唐の軍なり。〔六〕幕井　幕營地の井。〔七〕乾　水量少き地に軍隊多く來る故井水つれに飲みほさるるなり。〔八〕風連二句　いろいろ事件をひきつけて說く解あれども取らず、單に節候をいふものとみる、かかる節候にはえびすが攻めよせるときなり。〔九〕西極　西のはて、吐蕃をさす。〔一〇〕月　月の光りをさす。〔一一〕北庭　唐には北庭都護府を置く、隴右道に屬す、今の新疆省土魯番の境に在りしといふ。〔一二〕故老　秦州地方の父老。〔一三〕飛將　漢の李廣、

右北平の太守となる、匈奴之を飛將軍と稱す。【一四】何時一句　故老の考へとしても作者の考としても並に通ず。【一五】築壇　韓信が故事、漢の高祖、信を大將に任ずるとき特別にたかき壇をきづきて任命せり。

【題義】吐蕃を主とし、西北邊の亂をうれへて、良將の任ぜられんことをおもふことをのぶ。

【詩意】鳳林關の方面ではまだ干戈がやまず、魚海の方面もこちらから攻めゆくには道路がいつもなんぎである。あちらの急をしらせるものみ役ののろし火はさがしい雲のゐる峰であげられるし、遠くから攻めてゆく官軍のやどる處はいつも井水はからからである。いまや時節は秋冬の交となつて、風は西極の地方につらなりて吹きだしたし、北庭の地を過ぎて來り照らす月の光は寒さを帶びてきてゐる。老人たちは漢の時の飛將軍李廣のやうな人がいま居たならばとそれを思慕してゐるが、いつになつたら朝廷でその大將を任命せらるるために壇をきづく御相談があるのであらうか。

〔二〇〕

唐堯眞自聖

唐堯眞自聖。野老復何知。

曬藥能無婦。應門亦有兒。

藏書聞禹穴。讀記憶仇池。

爲報鵷行舊。鷦鷯在一枝。

〔二〇〕

唐堯眞に自ら聖なり

唐堯、眞に自ら聖なり、野老、復た何をか知らむ。

藥を曬す能に婦無からむや、門に應ずるに亦兒あり。

書を藏する、禹穴ありと聞く、記を讀みて仇池を憶ふ。

爲めに報ず鵷行の舊に、鷦鷯は一枝に在り、と。

【字解】【一】唐堯　肅宗を比す。【二】自聖　仇氏は「自」を「みづから」とし聖ならざるもみづから聖とすととけり、君に對して非禮甚しき言といふべし、其說是に非ず、「おのづから」と訓ずべし、天然自然にの義。【三】野老　自己をさす。【四】禹穴　會稽の禹穴なり、必ず蜀に在るものととくは據る所なきの言なり、此句は陪客として用ひしもの。【五】記　舊記。【六】仇池　第十四首に出づ。【七】鵷行舊　朝廷に居る舊友をいふ、鵷行は鵷鷺の行なり、文官の行列のこと。【八】鷦鷯　みそさざい。【九】一枝　「莊子」（逍遙遊）に鷦鷯巢於深林、不過一枝、とみゆ。秦州の寓居をさしていふ。

【題義】秦州に隱棲せる近況を在京の舊友に報ずる作なり。

【詩意】昔の唐堯の如きいまの吾が君はまことに天然に聖明にておはす。自分ごときものは世間のことにつけてなにごとも知れるものではないので、かれこれ申すべきではない。藥をさらしてくれるには婦も居ないではないし、客がきたとき門でとりつぎするにはこどももゐる。禹が書を藏したといふ禹穴は珍らしいところにちがひないが、舊記をよむと自分の近所にも仇池といふ處があるのでその地のことをおもふのである。自分は都の在官の舊友諸君に御しらせする、自分の現在はみそさざいがただ一枝におちついて棲んでをるやうに求むる所は些少に在るのでこんなゐなかにひつこんでゐるのである。

月夜憶舍弟

（一）戍鼓斷（二）人行。（三）邊秋一雁聲。
（四）露從今夜白。（五）月是故鄕明。
（六）有弟皆分散。（七）無家問（八）死生。
（九）寄書長不達。況乃未休兵。

月夜、舍弟を憶ふ

戍鼓、人行斷ゆ、邊秋、一雁聲あり。
露は今夜從り白し、月は是れ故鄕のごとく明かなり。
弟有れども皆分散す、家の死生を問ふべき無し。
寄書、長く達せず、況んや乃ち未だ兵を休せしめざるをや。

【字解】【一】戍鼓　番兵等のならすつゞみ。【二】人行　ひとどほり。【三】邊秋　邊地の秋。【四】露從一句　白露の節に入るをいふ。【五】月是一句　仇氏は月明の色故鄕のごとしととく、鄙見は「故鄕にも亦明なるならん」の義、光を共にするの意なるべしとおもふ。【六】有弟　趙次公注に、このとき作者の弟一人は陽翟にあり、一人は濟州に在りといへり。【七】無家　家は家族をいふ、この時作者妻子をともなへるにより家はあることなれども、ここはひろく同族をこめてみる故に家無しといへり、蓋し東都（洛陽）の家についていふ。【八】死生　先方の人人の死生。【九】寄書　こちらからやりしてがみ。

【題義】明月のばんに、わがやの弟どもをおもひて作れる詩なり。乾元二年秋秦州にての作。

【詩意】番兵らがうちならすつゞみのおとはするが人どほりはとだえ、邊地の秋とて一つとぶ雁がねがきこゆる。今夜からはじめて白露の時節にはひるが、月のひかりは故鄕と同じやうなあかるさでさえてゐる。（鄙說、「月は是れ故鄕にも明ならん」、吾が頭をてらせる月は故鄕でも同じ樣にあかるくかがやいてゐるであらう。）弟はゐてもみなあちらこちらと散らばつて居り、その死んだか生きてゐるかを尋ぬべき家さへも無い。手紙をやつてもそれはいつまでもとどかぬし、彼等の安否がきにかかる。いやそればかりでない、まだ天下に於て騷亂がやまぬのである、吾が一家どころのさたではない。

（一）天末懷李白

涼風起天末。（二）君子意如何。
（三）鴻雁（四）幾時（五）到。（六）江湖（七）秋水多。
文章（八）憎命達。（九）魑魅（一〇）喜人過。
（一一）應共（一二）冤魂語。（一三）投詩（一四）贈（一五）汨羅（一六）。

天末にて李白を懷ふ

涼風、天末に起る、君子、意如何。
鴻雁、幾時か到らむ、江湖、秋水多し。
文章、命の達するを憎む、魑魅、人の過ぐるを喜ぶ、
應に冤魂と共に語るなるべし。詩を投じて汨羅に贈る。

【字解】【一】天末　天のはて、天涯といはんがごとし。李白と遠く相隔たるを以ての故に作者自己の居處秦州をさして天のはてといふ。【二】君子　德ある人、白をさす。【三】鴻雁　おほとり、かり、李白からのてがみをさす。【四】幾時　いつ。【五】到　作者の方へ到著する。【六】江湖　江や湖のある地、南方李白の居るところをさす。【七】秋水多　多は水量の多きをいふに非ずして、水面の多種なるをいふならん、秋はむしろ水減ずるものなればなり。【八】憎命達　命達とは運命が窮まることなく通ずること、文章の長じたる人は卻つて運窮に居るは文章は其の人の運命の通ずることをにくむかの如し。【九】魑魅　厲鬼なり。【一〇】喜人過　鬼は人がとほればそれをつかめて食す。【一一】應　旨解次の句までかける、予は上句のみにかけてみる。【一二】冤魂　屈原の魂、屈原は楚の襄王に斥けられ遂に汨羅の淵に身を投げて死せり。【一三】語　白がはなしをする。【一四】投詩　作者が投ずる。【一五】贈　作者が白におくる、漢の賈誼、長沙に至り弔屈賦を作りて屈原をとぶらふ、白も亦或は已に死せるならんとおもひてこの詩を汨羅に贈るといふなり。【一六】

汨羅　水の名、長沙府湘陰縣の北にあり。

【題義】秦州の天涯に居て李白のことを憶ひて作れる詩。乾元二年秦州にての作。

【詩意】天のはてともいふべき此處にすずかぜがたつた。あなたの今のこころはどんなであるか。あなたからの雁の信はいつこちらへつくことか、南方江湖の地方は秋の水も多種で潤いことだから。あなたの樣に文章のすぐれたものは却つて順境に居ることをきらはれる、文章なるものが人の運命の開けるのをにくんでゐるかの樣である。あなたの居る處にはびこつてゐる惡鬼どもは人がとほつてくれればよいと喜んでゐる。いまごろはあなたは無實の罪に死んだ屈原の魂をあひてにものがたりでもしてゐることであらうか。自分はあなたをおもひ詩を投げて汨羅の客ともいふべきあなたに贈るのである。

【餘論】天末、或は曰く、この語は李白の居る夜郎をさす、と。この說は標題を「天末のかた李白を懷ふ」とみるなり。一理あり、ただ詩の句ならば、しかみるもよろしからんも、詩題の文語としてはいかにや。涼風起㆓天末㆒、これも或說を用ふれば天末を李白の居處とみるべきなれども、標題已に作者の居處とみる故に、ここもまた作者自己の居處をさすものとみる。鴻雁幾時到、趙彥材の注には「作者自己の書がいつ白のもとにつくことやら」ととく、今取らず。應㆘共㆓寃魂㆒語㆖、投㆑詩贈㆓汨羅㆒、舊解「應」の字に二句を管せしめてみ、投㆑詩贈㆓汨羅㆒を李白の所爲となす。「應に寃魂と共に語り、詩を投じて汨羅に贈るなるべし、」とよむ。余は一句づつ切りてよむ。其の例は五律、奉㆑贈㆓王中允維㆒（卷六、上冊五四三頁にみゆ）の終り、窮愁應㆑有㆑作、試誦白頭吟なり、この句も舊解と鄙說と異れるが、鄙說によれば上句は王維についていひ、下句は作者自己についていへるなり、今「應共」二句も、上句は李白についていひ、下句は作者自己についていふとみる、因つて投㆑詩贈㆓汨羅㆒とは作者が斯篇を投じて汨羅の客ともいふべき李白に贈るといふ義ととるなり、死んだ屈原に與へるのに「贈」といひしは用字の妙なりなど歎美してゐる人（鍾惺・黃白山）もあれど、贈の字は死者に對しては本來無理きはまれり、生者に對してこそ始めて意義あり。因つて鄙說は、應㆘共㆓寃魂㆒語㆖、投㆑詩贈㆓汨羅㆒とよむ。

宿㆓贊(一)公房㆒。

【原注】贊、京師大雲寺主。謫(二)此(三)安置(四)。

贊公が房に宿す　【原注】贊は京師の大雲寺の主なり、此に謫して安置せらる。

杖(五)㆑錫何(六)來㆑此。秋風已颯然。　錫を杖きて何(時)此に來れる、秋風已に颯然たり。

雨荒深院菊。霜倒半池蓮。　雨には荒る深院の菊、霜には倒る半池の蓮、

放(七)逐寧(八)違(九)㆑性。虛空(一〇)不(一一)㆑離㆑禪。　放逐、寧ぞ性に違はむや、虛空、禪を離らず。

相逢成夜宿。隴月向人圓。　相逢うて夜宿を成せば、隴月、人に向うて圓なり。

【字解】〔一〕贊公　長安の大雲寺の僧なり、前已に卷四（上冊三八六頁）に大雲寺贊公房四首あり。あはせみるべし。このとき贊公赤秦州に來りなりしなり。〔二〕謫　罪せらるること。〔三〕此　秦州をさす。〔四〕安置　さしおかるること。〔五〕杖錫　錫は錫杖、「すず」にて作れる杖をいふ、僧の持つもの、「杖錫」の杖は「つゑつく」なり。〔六〕何　「何故に」とみる說あるも余は「何の時に」とみる、次の「秋風」の句は之に答ふる句なり。〔七〕放逐　「舊氏」の注に、房琯宰相をやめられんとせしとき杜甫上疏して之を爭ひ罪せられんとせり、贊公も赤琯が客にて謫せられて秦州に來りしものなりといふ、「琯が客なり」といふこと根據明かならずとのことなれども此に附記す、放逐は都からおひはらはれしをいふ。〔八〕寧　なんぞ。〔九〕違性　本性に背けることをなす。〔一〇〕虛空　趙彥材の注に放逐の地が空寂の處にあるを指すといへり、卽ち「莊子」（徐無鬼篇）の逃ニ虛空一者、聞ニ人足音一而喜　とあるの意、山谷の寂地をさして虛空といふ。〔一一〕不離禪　離の字去聲によむ、「去る」なり、禪は佛敎にて之を空門といふ、山谷の空は禪の空と一致するをいふ。〔一二〕隴月　甘肅省地方の月。

【題義】舊知たる大雲寺の僧贊公のへやをたづねてとまりしことをのぶ。乾元二年秦州にての作。

【詩意】あなたは錫杖をついていつここへ來られたか、もはや秋の風がさつと吹いてきた。奧にはの菊は雨中にあれてゐるし、池の面積半分ばかりの蓮は霜のためにたふれてゐる。あなたは放逐の身ながらに從來の本性をまもつてをられる、山間空虛の場所はやはりあなたにとつての安禪の地で不二なものである。こんなところでおあひしてとうとうとまりこむことになつたが、みればこの邊隴に懸つてをる月は我我に向つて圓にてりかがやいてゐる。

赤谷西崦人家

躋險不自安。出郊已淸目。　險に躋りて自ら安んせず、郊を出づれば已に目を淸うす。
溪廻日氣煖。逕轉山田熟。　溪廻りて日氣煖かに、逕轉じて山田熟す。
鳥雀依茅茨。藩籬帶松菊。　鳥雀、茅茨に依り、藩籬、松菊を帶ぶ。
如行武陵暮。欲問桃源宿。　武陵の暮に行くが如し、桃源を問ひて宿せむと欲す。

【字解】〔一〕赤谷　秦州の西南七十里にあり、中に赤谷川あり。〔二〕西崦　舊注に、崦嵫山は秦州の西五十里にあり、崦嵫また赤谷の西にあるゆゑ之を西崦といへり、と。之にては地理とあはぬ樣なり。恐らくはただ赤谷の西の山の義なるべし。〔三〕躋險　山のけはしきみちをのぼる。〔四〕淸目　眼がすめる心地す、「眼明」の義。〔五〕武陵、桃源　陶淵明が桃花源記に見えたるはなし。晉の太元中に武陵の漁夫が川をさかのぼりて洞穴の奧なる仙鄕にいたりしことをいふ。武陵は湖南省常德府に屬する縣なり。

【題義】秦州の赤谷の西の方の山にわけ入りて人家にやどらんとせしことをのぶ。乾元二年秦州の作。

【詩意】苦しさに不安ながら險阻な路をのぼつてあるいたが、郊を出てしまふと眼界がひろくさつぱりとした。溪流はぐりぐりめぐつて太陽の光はあたたかであり、こみちがうねうねかはりゆき山田の耕作物がよくみのつてゐる。ここに人家があり、雀などの鳥はかやぶきの屋根によりそうてさへづつてゐるし、まがき一帶には松だの菊だのが生えてゐる。ちやうど武陵の仙鄕の夕ぐれにあるいてゐる樣である、どこが桃源かひとつたづねてそこでとまらうかとおもふ。

西(一)枝村尋置草(二)堂地。夜宿贊公土(三)室二首

西枝村に草堂を置く地を尋ね、夜贊公が土室に宿す　二首

〔一〕

出郭眄細岑

郭を出でて細岑を眄る

出郭眄(四)細(五)岑。披(六)榛得微路。
『郭を出でて細岑を眄る、榛を披きて微路を得。

溪(七)行一(八)流水。曲折方屢渡。
溪行すれば一流水、曲折、方に屢渡る。

贊公湯(九)休徒。好靜心(一〇)跡素(一一)。
贊公は湯休の徒、靜を好みて心跡素なり。

昨枉(一二)霞(一三)上作。盛論巖(一四)中趣。
昨、霞上の作を枉ぐ、盛りに巖中の趣を論せり。』

怡(一五)然共攜手。恣意同遠步。
怡然、共に手を攜へ、意を恣にして同じく遠步す。

捫(一六)蘿澀先登。陟(一七)巘眩(一八)(一九)反顧。
蘿を捫りて先登するに澀り、巘に陟りて反顧するに眩す。

要求陽(二〇)岡煖。苦(二一)涉陰嶺(二二)沍(二三)。
求めむと要す陽岡の煖かなるを、渉るに苦しむ陰嶺の沍なるを。

惆(二四)悵老大藤。沈(二五)吟屈(二六)蟠樹。
惆悵す老大の藤に、沈吟す屈蟠の樹に。』

卜(二七)居意(二八)未展。杖(二九)策廻(三〇)(三一)且暮。
居を卜する意未だ展べず、策を杖きて廻れば且ど暮れむ

層(三二)巓餘落日。草(三三)蔓已多(三四)露。
層巓、落日餘るも、草蔓には已に露多し。』とす。

【字解】【一】西枝村　秦州の近郊にある地とみゆ。【二】草堂　くさや。作者の住家なり。【三】土室　穴居の室、この地方は土地乾燥せる故、崖壁をくりぬき區劃を設けて居宅となす。【四】眄　斜にみやる。【五】細岑　小なるみね。【六】披榛　はりはらをかきわける。【七】溪行　たににそうてゆく。【八】一流水　一すぢのたにがは。【九】湯休　湯惠休、六朝宋代の詩僧。【一〇】心跡　心と行ひと。【一一】素　かざりけなし、きぢのまま。【一二】枉　こちらへよこしてくれしこと。【一三】霞上作　いかなる詩篇か知らざれども、その中に「霞上」の語を用ひてある作なり。【一四】巖中趣　巖石の境地のおもむき。【一五】怡然　たのしきかたち。【一六】捫蘿　ひめかづらにつかまる。【一七】陟巘　まるみをおびたみねにのぼる。【一八】眩　まなこくらむ。【一九】反顧　ふりかへつてみる。【二〇】陽岡　日あたりのよきをか。【二一】苦渉　渉は「わたる」、蓋しこほれる溪をわたるなり、渉一に陟に作る、陟ならば嶺をのぼりゆくなり。【二二】陰嶺　北に面せるみね。【二三】沍　こほる。【二四】惆悵　うらむ貌。【二五】沈吟　うなりためらふ。【二六】屈蟠　をれまがり、わだかまる。【二七】卜居　よきすまひをうらなふ。【二八】意未展　おもふとほりにはまだならぬ。【二九】杖策　つゑをつく。【三〇】廻　土室の方へかへる。【三一】且暮　くれかかる。【三二】層巓　やまのかさなれるいただき。【三三】草蔓　路上のくさやつる。【三四】多露　ゆふべのつゆが多くおく。

【題義】秦州の近郊にある西枝村といふところで、自分のくさやを設くるための地面をたづねて夜になり、贊公の穴居の室にとまつたことをのべたる詩なり。乾元二年の秋冬の交の作。事は東柯谷に居を定めたる以後にあるならん。

【詩意】秦州の城郭を出て小さなみねを横ににらみながら、榛のやぶをかきわけつつほそい路をみつけてすすむ。溪がはにそうてゆくと水は一すぢであるが、それがをれまがつてゐるのでたびたびそ

れをわたることになる。吾が友贊公は昔の湯惠休のともがらで、人となり閒靜を好んで心も行ひもきちのままのお方である。昨日この人から「霞上」云云の詩篇を頂戴したに、中に盛に巖石の境地のおもしろいことが論じてあつた。』けふはそれで愉快にいつしよに手をたづさへて、意のままにともども遠くまであゆむのである。あるひはひめかづらにつかまつて先だちになつて登ることに尻ごみしたり、あるひはみねにのぼつてあとをふりかへつてみるに目まひしたりする。日あたりのいい岡のあたたかきを求めんとしては、なんぎしながら北むきのみねのこほるやうなつめたさをわたらざるを得ぬ。また、としふりて大きい藤のところでうらめしくなげいたり、根株のかがみわだかまつてゐる樹のところでうなつてためらうたりする。』それでもまだここにきめやうと決心するほどおもふ樣なよい場所にであはず、つゑをついてかへらうとすれば日ははや暮れかかつてくる、まだ落ちかかる太陽はかさなつたみねにのこつてはゐるものの、路ばたの草やつるにはすでに露がしとどに置いてゐる。』

〔二〕天寒鳥已歸

〔二〕天寒くして鳥已に歸る

天寒鳥已歸。月出山更靜。

天寒くして鳥已に歸る。月出でて山更に靜かなり。

土室延(一)白光。松門(二)耿(三)疏影(四)。

土室、白光を延く、松門、疏影耿たり。

躋攀倦日短。語樂(五)寄夜永。

躋攀、日の短きに倦む、語樂、夜の永きに寄す。

明(六)燃林中薪。暗(七)汲石底井。』

明は燃す林中の薪、暗には汲む石底の井。』

大師(八)京國(九)舊(一〇)。德業(一一)天機秉(一二)。

大師は京國の舊なり、德業、天機を秉る。

從來(一三)支許遊(一四)。興趣江湖迥(一五)。

從來、支許の遊び、興趣、江湖迥なり。

數奇(一六)謫關塞(一七)。道廣存(一八)箕潁。

數奇にして關塞に謫せらる、道廣くして箕潁を存す。

何(一九)知戎馬間。復接(二〇)(二一)塵事屛。』

何ぞ知らむ戎馬の間、復た塵事を屛くるに接せむとは。』

幽尋(二二)豈一路。遠色(二三)有諸嶺。

幽尋、豈に一路ならむや、遠色、諸嶺有り。

晨光(二四)稍朦(二五)(二六)朧。更越西南頂(二七)。』

晨光稍く朦朧たらば、更に越えむ西南の頂を。』

【字解】〔一〕延白光　延は内部へひきいれること、白光は月のしろきひかり。〔二〕松門　對立せる松の樹。〔三〕耿　ひかるかたち。〔四〕疏影　松が枝をとほしてさしくる疏散の月のひかり。〔五〕語樂　かたりてたのしむ。〔六〕明　明りを取るたいふ。〔七〕暗　暗處をいふ。〔八〕大師　贊公をうやまひていふ。〔九〕京國　みやこ、長安。〔一〇〕舊　宿老、としよりかぶ。〔一一〕德業　道德事業。〔一二〕天機秉　秉は「とる」、もつてをること、天機は天然の微妙なはたらき。〔一三〕從來　これまで、此は自己と贊公との舊交についていふ。〔一四〕支許遊　支は僧支遁、字は道林、許は許詢、晉の世の人、維摩經を講ずるとき支遁は法師となり、許詢は都

譯となりしといふ、ここは僧と俗人との交際をいひ、支を贊に、許を自己にあてていふ、必ずしも佛經を譯するをいふにはあらず。【一五】江湖迥　はるかなる江湖の地に在るがごとき興趣を抱く。【一六】數奇　「漢書」李廣傳にみゆ、李廣數奇、と。數の字を所角切、音サク、「しばしば」の義とみるものと、所具切、音ス、「かず」の義とみるものとあり。奇は奇偶の奇にて一三五七等は奇のかず、二四六八等は偶のかずなり、偶ならばよい運命とであふこと、奇ならばちぐはぐにてよい運命にであはぬことなり、李廣は敗軍せる故之を「奇ナリ」といへり。さて數奇の二字、前說は數「數」奇の義にて「奇」字のうへに「數」を略したものとみる考なり。後說はただちに數奇とみる考なり、兩說並に通ずるも文字の解は大に異なれり。漢書本文の解としては前說正しかるべし、何となれば數奇にて數奇の義は含むも、數奇だけにては「しばしば」の義存せざればなり。然れども此の詩に於ては作者は數奇を道廣と對せしめたる故に數奇の義を用ひしものとおもはる。故にここは後說を用ひおく。【一七】關塞　秦州のとりでをさす。【一八】存箕潁　存は箕潁之心をもつてをること、箕潁は箕山潁水、むかし許由・巢父、堯の天下を讓らるるを避けてそこにのがれし故事、世俗に超越する考をいふ。【一九】何知　意外にも。【二〇】接　接近すること、作者よりいふ。【二一】幽尋　おくふかくたづねる。【二二】廉事屛　廉事は俗世間の事、屛は「しりぞけ去る」こと、贊公の閒棲の境遇をさす。【二三】遠色　遠くのみれのいろ。【二四】晨光　よくあさのあさひのひかり。【二五】稍　すこしづつ、やうやく。【二六】朦朧　おぼろなる貌。【二七】頂　みれのいただき。

【詩意】　そらが寒くなつてもはや鳥はねぐらにかへつてしまひ、月があらはれて山はいままでよりもつと靜かである。土室の奧まで白いひかりがはひりこむ、入り口の松の木立ちにはまばらな月かげがかがやいてゐる。日のみじかいをりの山のぼりにはつかれたが、夜ながに託しておもしろく物語りをする。明りは何でとるかといへば林の中からもつてきた薪をもやしてとるし、くらがりでは石のそこからわきだす井の水を汲んでくる。（それを煎てお茶でものむのであらう）。』　あなたはみやこでの宿老で、道德事業に於て微妙なはたらきをもつてをられる。これまで自分とは支遁と許詢とのやうな交遊をせられ、江湖の遠きに在るが如き興趣をいだいてをられた。それが不幸にも命數がちぐはぐでこんなとりでの地にながされたまうたが、依然として道は廣大であつて超俗の心をもつてをられる。それがため意外にも自分はこの兵亂のなかで、ふたたび閒棲の御境遇にちかづくことができた。』　遠方の嶺の色をながめるとまだいろいろのみねがある、決しておくふかく尋ね入るには路が一すぢに限るわけではあるまい。あすのあさあけぼのちかくなつたならば、さらにまた西南方面のみねのいただきを越えてみませう。』

寄贊上人（一）

（二）一昨陪錫杖。卜鄰南山幽。
（三）年侵腰脚衰。未便陰崖（四）秋。
重岡北面（五）起。竟日（六）陽光（七）留。
茅屋買兼（八）土。斯焉心所求。』
近聞西枝西。有谷杉黍（九）稠（一〇）。

贊上人に寄す

一昨、錫杖に陪して、隣を卜す南山の幽なるに。
年侵して腰脚衰ふ、未だ便とせず陰崖の秋。
重岡、北面に起る、竟日、陽光留まる。
茅屋、買ふに土を兼ぬ、斯焉、心の求むる所なり。』
近ろ聞く西枝の西、谷有り杉黍稠し。

(一一)亭午頗和暖。石田(一二)又足收(一三)。　亭午、頗る和暖に、石田、又收むるに足る、と。
(一四)當期塞雨乾(一五)。宿昔(一六)齒疾瘳(一七)。　當期、塞雨乾く、宿昔、齒疾瘳ゆ。
徘徊虎穴(一八)上。(一九)面勢龍泓頭。』　徘徊せむ虎穴の上、面勢、龍泓の頭。』
(二〇)柴荊具(二一)(二二)茶茗。(二三)逕路通林丘。　柴荊、茶茗を具へ、逕路林丘に通ず。
與子(二四)成二老(二五)。來往亦風流。』　子と二老を成し、來往するも亦風流ならむ。』

【字解】【一】上人　一心に佛道を修むる人。【二】一昨　おととひ。【三】年侵　年月にくひこまれる。【四】陰崖　北むきのがけ。【五】北面　仇氏はその岡が南方にある義とす、蓋し面北或は北面の意ととりしなり。しかし岡が北に面するならば作者の謂はゆる陰崖と同樣にて、それは不可なり、この北面は單に北方をいふものにて西枝村よりして北方なるをいふならん。村の北に在るゆゑその南面が日光をとどむるなり。【六】覓日　一日ぢう。【七】陽光　太陽のひかり。【八】蘇土　土地をも蘇れて、土地とは居宅の地よりむしろ耕作すべき田地をさす。【九】桼　漆の古字、うるしの木。【一〇】獨　彙し。【一一】亭午　亭は高き貌、太陽の午位にあるとき高き故かくいふと。私に案ずるに亭は正の音轉ならん、亭午は正午なり。【一二】石田　石まじりの田地。【一三】收　穀物をとりいれる。【一四】當期　いまの時期。【一五】乾　かわく、雨のふらぬこと。【一六】宿昔　まへかたより。【一七】瘳　いゆ、なほる。【一八】虎穴・龍泓　其地の名所ならん、虎穴は洞、龍泓は淵。【一九】面勢　土地のむきかた、形勢、位置をいふ。【二〇】柴荊　しば、いばらのもん。【二一】具　具備する。【二二】茶茗　早く收むるを茶といひ、晩く收むるを茗といふと。【二三】逕路　こみち。【二四】子　贊公をさす。【二五】二老　二人の老人。

【題義】贊公にあたへて住居のことにつき相談せし詩。前詩より一日おきてあとの日に作る。

【詩意】おととひはあなたのおともをして、あなたとの隣りずまひをどこに定めようかとおもうて南方の山のおくふかいところをたづねた。自分は年のせゐであしこしが衰へてゐるので、秋の時節の北向きの崖などは都合がよくない。ところで村の北方にかさなりあうた岡がそびえてゐる、そこは一日いつぱい日光がさしてゐるところだ。土地ぐるみに茅屋をここに買ふならば、これぞ自分の心から求める所のものである。』ちかごろ聞くに、村の西の方に杉だの漆だのおほく生えてゐる谷があるさうで、そこは日中はよほどあたたかであり、やせちではあるが穀物もとれるとのことだ。(そこもいいとおもふ。)このせつはここの雨もふらぬし、齒痛みもこのごろなほつた。地勢は龍泓のほとりにのぞんでゐるところで、虎穴のあるあたりにぶらついてみようかとおもふ。』あなたのおすまひと林や丘をつきぬけてこみちがかようてをるし、しばのとぼそでお茶でもそなへ、あなたと二老翁といふ格で、おたがひゆききするのも亦風流なことであるとかんがへる。』

(一)太平寺泉眼(二)

太平寺の泉眼

(三)招提憑高岡。疏散(四)連草莽(五)。　招提、高岡に憑る、疏散、草莽に連る。
(六)出泉枯柳根。汲引(七)歲月古。』　出泉、枯柳の根、汲引、歲月古りたり。』

石間見海眼。天畔縈水府。　石間、海眼を見る、天畔、水府縈る。
廣深丈尺間。宴息敢輕侮。　廣深、丈尺の間、宴息にも敢て輕侮せむや。』
青白二小蛇。幽姿可時覯。　青白の二小蛇、幽姿時に覯る可し。
如絲氣或上。爛漫爲雲雨。　絲の如く氣或は上り、爛漫、雲雨と爲る。』
山頭到山下。鑿井不盡土。　山頭より山下に到るまで、井を鑿つに土を盡さず。
取供十方僧。香美勝牛乳。　取りて十方の僧に供す、香美、牛乳に勝る。』
北風起寒文。弱藻舒翠縷。　北風、寒文を起す、弱藻、翠縷を舒ぶ。
明涵客衣淨。細蕩林影趣。　明かに涵して客衣淨く、細かに蕩かして林影趣あり。』
何當宅下流。餘潤通藥圃。　何か當に下流に宅し、餘潤、藥圃に通じ、
三春濕黃精。一食生毛羽。　三春、黃精を濕し、一食、毛羽を生ずべき。』

【字解】【一】太平寺　秦州にある寺の名。【二】泉眼　泉のわきでる穴。【三】招提　寺の梵語（巻一、一頁をみよ）。【四】疎散　あたりのふさがつてならぬさまをいふ。【五】草莽　莽は草深きところをいふ。【六】出泉　わきでるいづみ。【七】汲引　くみとる、みちびく。【八】海眼　海に通じてゐる穴、蜀にかかる穴ありといふ。【九】天畔　天のそば、高地を形容していふ。【一〇】縈　めぐる、水がめぐつてゐること。【一一】水府　龍宮の類、ふかき泉をたとへていふ。【一二】宴息　宴、晏、同じ、やすらかに居る、息は休息。【一三】幽姿　山ふかきおもむきあるすがた。【一四】時覯　時として之を見る。【一五】如絲　氣のほそくのぼるさま。【一六】爛漫　ひろがるさま。【一七】盡土　地面のどんぞこまでほる。【一八】十方　八方もおなじ。【一九】寒文　さむさうな水紋。【二〇】弱藻　かよわき「も」のくさ。【二一】翠縷　みどりのいとすぢ、藻の形容。【二二】蕩　うごかす。【二三】林影趣　林木のかげのおもしろきさま。【二四】何當　何は何時、「當」の字末句までかかる。【二五】宅　宅をかまへること。【二六】下流　この泉の流るる所の下方の土地。【二七】餘潤　他の所をうるほしたのこりのうるほひ。【二八】藥圃　自家の藥草ばたけ。【二九】三春　春三月。【三〇】黃精　藥草の名、あるひは龍銜草ともいふ、之を服すれば身を輕くし壽をますといふ。【三一】生毛羽　わきに羽がはえて飛ぶ様になる、仙人になること。

【題義】秦州の太平寺の泉のでる穴をみて作れる詩。

【詩意】この寺は高い岡によつてゐて、前面がさへぎられてをらず、草野につらなつてをる。そこの枯れかかつた柳の根もとに湧きだしてゐる泉があり、可なり久しい年月以前から汲まれたり、引かれたりしてをる。』見れば、石の間に海眼ともいふべきものがあり、高地にこんな處があるのは、天上に龍宮を置いたといふ樣子である。廣き深さわづか一丈か一尺ほどのものであるが、ここへきて休息するものは、だれも決してこの泉を輕侮するものはない。』なぜかといへば、ここに靑と白の二匹の小蛇がゐて、その幽靜なすがたは時時見られる、その蛇のはたらきであらう、或は絲のやうなほそぼそとした氣がたちのぼつて、それがひろがつて雲や雨となるのである。』この山のうへから山の下の方へかけて井をほるものは、そんなにどんぞこまで地をほりさげず、淺井ですましてゐるのはこの泉のおかげである、この泉水を取つて諸方の僧侶に供へるに、その香ばしくうまいことは牛乳以上であ

る。』いま北風が吹いて泉面に塞さうな水紋がおこり、なよなよとした藻草が翠の糸すぢをのばしてゐる。自分の衣を水かがみにうつせば水は明かに影をひたして衣もきよらかにおもはれ、こまかなさざなみにただよはされるあたりの林木の影もおもしろい。』いつになつたら自分はこの泉の下流の方に居宅をかまへて、藥草ばたけにそのあまりのしめり氣をかよはせ、春にあたつて黃精の草にしめりをあたへ、そのくさを一どたべるや直ちにからだに羽が生えて飛べる樣になれるのであらうか。』

東樓

萬里流沙道。西行過此門。
但添新戰骨。不返舊征魂。
樓角凌風迴。城陰帶水昏。
傳聲看驛使。送節向河源。

東樓

萬里、流沙の道、西行、此の門を過ぐ。
但だ添ふ新戰骨、返らず舊征魂。
樓角、風を凌ぎて迴かに、城陰、水を帶びて昏し。
傳聲、看る驛使が、節の河源に向ふを送る。

【字解】〔一〕流沙　秦州雜詩第三をみよ。〔二〕樓角　城樓の一隅。〔三〕凌風迴　高きをいふ。〔四〕傳聲　驛使にかかる、驛使が先きぶれして人拂ひなどするなるべし。〔五〕看　作者または一般人がみるなり。〔六〕驛使　驛の役人なり。〔七〕送節　節は旅より吐蕃への使者が持つしるしのはた。〔八〕河源　黃河のみなもと、吐蕃の地をさす、秦州雜詩第十にも使客向河源とみゆ。

【題義】秦州城の東の樓門のところにて、吐蕃へゆく使者をみて作る。

【詩意】ここの道路は萬里の遠き流沙へ通ずる道で、我が唐から西へ行くほどのものはみなこの門をとほるのである。（こんども使者がゆくが）ただ新しき戰骨がふえるばかりで、これまでに征伐にでた人人のたましひはもどらずじまひである。樓の一隅は風をしのいではるかに高くそびえ、城の北の方は水を帶びてくらくみえる。ここへ人人が出て、驛の役人がさきぶれのこゑをさせて使節が吐蕃の方へゆくを見送るのを見るのである。

雨晴

天外秋雲薄。從西萬里風。
今朝好晴景。久雨不妨農。
塞柳行疎翠。山梨結小紅。
胡笳樓上發。一雁入高空。

雨晴る

天外、秋雲薄し、西從りす萬里の風。
今朝、好晴景、久雨、農を妨げず。
塞柳、疎翠行り、山梨、小紅結ぶ。
胡笳、樓上に發り、一雁、高空に入る。

【字解】〔一〕不妨農　なが雨も晴れしゆゑ收穫にさしつかへなきなり。〔二〕塞柳　とりでのある地のやなぎ。〔三〕行　つらなる。〔四〕疎翠　まばらにのこる翠條、多くの葉は黃ばんですでに落ち散りしなり。〔五〕樓上　すなはち東樓なるべし。

【題義】雨のはれしさまをのぶ。「東樓」と殆ど同時の作ならん。

【詩意】そらのかなたに秋の雲がうすくなり、西の方から萬里の風が吹いてきた。けさはまことに晴れの景色がよく、いままでなが雨だつたが農事にはさしつかへなくとりいれができる。なほみわたせばとりでの柳の樹はほんのまばらな翠を立てならべてをり、山の梨の實は小つぶの紅をかためてゐる。また城樓ではあしぶえの音がおこり、一匹の雁が高い空にとんではひるのがみえる。

寓目

一縣葡萄熟。秋山苜蓿多。
關雲常帶雨。塞水不成河。
羌女輕烽燧。胡兒掣駱駝。
自傷遲暮眼。喪亂飽經過。

寓目

一縣、葡萄熟す、秋山、苜蓿多し。
關雲、常に雨を帶ぶ、塞水、河を成さず。
羌女、烽燧を輕んじ、胡兒、駱駝を掣す。
自ら傷む遲暮の眼、喪亂飽くまで經過するを。

【字解】〔一〕苜蓿　うまごやし。〔二〕關雲、塞水　關も塞も秦州のそれをさしていふ。〔三〕不成河　このあたりの地勢は高くして四方に向つてくだる故に河を生ぜずといふ。〔四〕羌女　羌種族の夷女。〔五〕烽燧　烽は火をあぐ、燧は煙をあぐ、危急をしらす夜警のあひづなり。〔六〕掣　ひく、御するをいふ。〔七〕遲暮　晩暮、晩年をいふ。〔八〕喪亂　人の死すること、世のみだるること。

【題義】秦州にてふと見たることをよめり。乾元二年の作。

【詩意】縣全體に「ぶだう」がみのり、秋の山にも「うまごやし」がたくさん生えてゐる。せきしよの雲はいつも雨をおび、とりでの川は流れても河にはならない。羌女は烽燧をみても平氣でゐるし、胡兒は駱駝をひつぱつてゆく。（眼に看るものことごとく異様のものばかりだ。）自分は晩年のまなこで、あくまで世の喪亂を經過することをみるのをいたましくおもふのである。

山寺

野寺殘僧少。山園細路高。
麝香眠石竹。鸚鵡啄金桃。
亂水通人過。懸崖置屋牢。
上方重閣晚。百里見秋毫。

山寺

野寺、殘僧少なり、山園、細路高し。
麝香、石竹に眠り、鸚鵡、金桃に啄む。
亂水、人を通じて過ぎしむ、懸崖、屋を置く牢し。
上方、重閣の晚、百里、秋毫を見る。

【字解】〔一〕野寺　即ち題の山寺、瑞應寺なり。清一統志に瑞應寺は秦州東南麥積山上にあり、初、石巖と名づく、後秦の姚興重修して名を改む、隋の塔記尙存すといへり。〔二〕麝香　鹿の一種。〔三〕石竹　植物の名。〔四〕鸚鵡「あうむ」、秦州地方に多く產する鳥なり。〔五〕啄金桃　樹上に啄むをいふ。金桃銀桃は桃の稱名。〔六〕亂水　みだれて流るる水。〔七〕牢　堅牢なり。〔八〕上方　山寺の義なり、或はいふ、方丈山頂にあるをいふと。〔九〕重閣　かさなれる二かい。〔一〇〕百里　十里四方、凡そ一縣內をいふ。〔一一〕秋毫　獸毛は秋に至ればほそし。

【題義】秦州にて瑞應寺にあそびてよめる詩。乾元二年の作。

【詩意】この郊外の寺にはのこりの僧もすくない。その寺のにはに至るにほそい路が高くついてゐる。にはを見ると麝香は石竹のそばで眠つてゐるし、鸚鵡は金桃のうへでなにか餌を嘴でつついてゐる。山下の亂流は人がわたつてくるだけのゆとりはあるし、通路の懸崖には堅牢に家屋が設けられてある。山頂の方で二かいから日ぐれにみわたすと、十里四方はよくみえ秋のけすぢのほそさのものさへはつきりとみえる。

卽事

卽事

聞道花門(一)破。和親(二)事卻非。
聞道らく花門破れて、和親、事卻つて非なりと。

人憐漢(三)公主。生得渡(四)河歸。
人は憐む漢の公主、生きながら河を渡りて歸るを得たるを。

秋(五)思拋(六)雲髻。腰支(七)賸(八)寶衣(九)。
秋思、雲髻を拋ち、腰支、寶衣を賸す。

(一〇)羣凶猶索(一一)戰。回首意(一二)多違。
羣凶、猶戰ひを索む、首を回らせば意多く違ふ。

【字解】〔一〕花門破　花門は回紇をさす、破「破らる」とは乾元二年三月、回紇、郭子儀に從ひ相州城下に戰ひ、利あらずして西京に奔りしことをさす。〔二〕和親　唐とのなかよくせしことをいふ、肅宗は回紇の請により乾元元年七月、幼女寧國公主を回紇の毗伽闕可汗に嫁せしめたり、本卷「留花門」の詩の公主歌黃鵠の句を參看すべし。〔三〕漢公主　寧國公主をさす。〔四〕渡河歸　黃河をわたり、回紇の方より唐へかへるをいふ。公主は元年七月に嫁したるに、二年四月可汗死で、回紇その俗習にしたがひ公主を殉葬せしめんとす、公主は唐の禮によりて之を拒む、されど回紇の法により面を剺りて大に哭す、つひに子無き故を以て唐にかへることを得たり。〔五〕秋思　あきのものおもひ。〔六〕拋雲髻　雲の樣な黑髮のもとどりをなげすてる、枕席に心なきをいふ。〔七〕腰支　こしのつかへをいふ。〔八〕賸　剩とおなじ「あます」。〔九〕寶衣　寶玉をつづりし衣。〔一〇〕羣凶　賊徒史思明等をさす、乾元二年九月、史思明兵を分ち四道より河を渡る、李光弼東都を棄てて河陽を守る。〔一一〕索戰　唐の官軍にむかつて戰をもとむ。〔一二〕意多違　和親の本意と齟齬する。

【題義】回紇との和親成らず、その兵力をかりて賊軍を掃蕩せんとの初意の遂げざるを歎せし詩なり。乾元二年九月後の作。

【詩意】きくところによると回紇の軍は破られて、我が唐との和親のこともこれまでにくらべて却つてわるくなつたとのことだ。人人はみなお氣の毒におもうてゐる、姫宮樣（寧國公主）が生きながらへて黃河をわたつておもどりになり、ものおもひのために雲形のもとどりさへなげすてられ、さすがにおんこしのあたりにはうつくしい寶玉の衣をのこしてをられるそのおんありさまを。こんなわけで賊軍の多くのわるものどもはいまになつても官軍に向つて戰をもとめてゐる。往事をふりかへつてみると本意なきことばかり多いのである。

遣懷

懷を遣る

愁眼看(一)霜露。寒城菊自花。
天風隨(二)斷柳。客涙墮清笳。
水靜樓陰直。山昏塞(三)日斜。
夜來歸鳥盡。啼(四)殺後(五)棲鴉(六)。

愁眼、霜露を看る、寒城、菊自ら花さく。
天風、斷柳に隨ひ、客涙、清笳に墮つ。
水靜かにして樓陰直く、山昏くして塞日斜なり。
夜來、歸鳥盡く、啼殺す後棲の鴉を。

【字解】【一】看　この字霜露のみにかかるに非ず、次句までかかるものとみるべし。【二】隨斷柳　柳葉が風に隨ふといふべきを逆にいへるなり、斷柳はちぎれた柳の葉なり、その葉の飛びちるままに風の吹く痕が知らるるをいふ。【三】塞日　秦州の城塞をてらす太陽。【四】啼殺　非常に啼かしむる。【五】後棲　仲の鳥よりおくれてねぐらにやどる。【六】鴉　からす、暗に自己を比す。

【題義】秋暮のさまをのべたり。乾元二年秦州にての作。

【詩意】自分は愁ひを帶びた眼でみると已に霜露が置いて、ここのさむぞらの城で菊がひとりでに花さいてゐる。そら吹く風はちぎれてとぶ柳の葉のまにまに知らるるし、すんだ笳の音をきいては旅人としての涙がおちる。水は靜かにたたへてゐるので城樓のかげがまつすぐにうつつてをり、山はくらくなつてとりでを照らす太陽が西へかたむきかかつてゐる。夜にはひつてからは林にかへる鳥はすつかりゐなくなつたのに、ねぐらにかへりおくれた鴉だけが非常に啼きさけんでゐる。

天河(一)

常(二)時任顯(三)晦。秋至轉(四)分明。
縱被微雲掩。終能永(五)夜清。
含(六)星動(七)雙(八)闕。伴(九)月落(一〇)邊城。
牛(一一)女年年渡(一二)。何曾風(一三)浪生。

天河

常時、顯晦に任す、秋至れば轉た分明なり。
縱ひ微雲に掩は被るも、終に能く永夜清し。
星を含みて雙闕に動き、月に伴ひて邊城に落つ。
牛女、年年渡る、何ぞ曾て風浪生せむ。

【字解】【一】天河　あまのがは。銀河・絳河・河漢・銀漢・雲漢・星漢・天津・漢津等はみなその異名なり。【二】常時　ふだん、秋以外の時節をさす。【三】顯晦　はつきりみえたり、くらくしてみえなかつたり。【四】轉　うたた、いよいよ。【五】永夜　あきのよながぢう。【六】含星　星光を包容する、天河には凡そ三十有餘の星を含むといふ。【七】動　天河の光のはたらくをいふ。【八】雙闕　宮城の門の左右の小門。【九】伴月　月光とともに。【一〇】落　その方に向ひて傾く。【一一】牛女　牽牛星、織女星、この二星は七月七日の夕、一年に一回相會すと稱せらる。【一二】渡　織女星が烏鵲のわたせる橋をわたりて牽牛星の方へゆく。【一三】風浪　天河の風浪なり、他詩の用例をみるに作者は牛女のことを自己夫妻のことに比したり、ここも夫妻生活の平穩なるをいへるものならん。

【題義】あまのがはのさまをいひ、兼ねて自己夫妻の生活の感をのぶ。乾元二年秦州にての作。

【詩意】あまのがははふだんははつきりみえたりくらくてみえなかつたり勝手な樣子をしてゐるが、秋がくるといよいよはつきりしてくる。よしあるときはすこしの雲におほはれるとしても、結局はながい夜に於てすみわたるのである。その光は星の光をつつんで先づ都の宮城の門にはたらきだし、月

光とともにはるかかたよつたここの城の方にまで傾いてくる。この河には毎年毎年牽牛と織女が渡るとのことであるが、二者のわたるとき決して風浪などがおこつたことはない。（だから、かれらはつねにおだやかな會歡をとげるのである。）

初月

光細弦(一)初上。影斜輪(二)未安(三)。
微升古塞(四)外。已隱暮雲端。
河漢(五)不改色(六)。關山空自寒(七)。
庭前有白露。暗(八)滿菊花團(九)。

初月

光細くして弦初めて上る、影斜にして輪未だ安からず。
微しく升る古塞の外、巳に隱る暮雲の端。
河漢、色を改めず、關山空しく自ら寒し。
庭前、白露あり、暗に菊花に滿ちて團なり。

【字解】【一】弦初上　月の弦形がうはむきになる。【二】輪　みかづきの底邊半圓形をなすをいふ。【三】安　おちつく。【四】古塞　秦州のとりでをさす。【五】河漢　あまのがは。【六】不改色　月あかるくあればあまのがはの色はうすくなるけれども、月巳にかくるればあまのがはの色はもとのままなり。【七】寒　人のこころよりしていふ、月の有無は元來寒暖とは關係なし、ただ月かくれて暗くなればなにとなくさびしく寒きごとくにおもはるるなり。【八】暗　しらぬまに、それとなく。【九】團　露點のあつまりなるをいふ、漙と同じ意、菊花の形をいふに非ず。

【題義】みかづきをみてそのさまをよめり。乾元二年秦州にての作。以下「苦竹」に至る皆同期の作、一一言はず。

【詩意】みかづきは、その光が細くてこのときからその弦形の尖端がうはむきになる、しかしその姿はまだゆがんでゐて半圓形の底邊のあたりはおちつかぬさまだ。このつきかげはちよつとここのふるいとりでのそとにのぼりかけたとおもふと、はや夕ぐれの雲のはしにかくれてしまつてゐる。それであまのがはは依然としてその色をかへないし、あたりの山はいたづらに寒さうにのこつてをる。庭前をみればしらぬまに白露が菊の花のうへにしとどにおいてをる。

【餘論】此の詩肅宗のためにして作るといへる宋人の說あり。余の取らざる所なり。此篇のみならず、杜の詠物の諸作往往にして一一某は某のたとへ云云との解釋あり。讀者はその時機に應じてその然否を判斷して取捨すべきなり。

擣衣

亦知戍(一)不返(二)。秋至拭(三)清砧(四)。
已近苦寒(五)月。況經長別心。
寧辭擣衣倦。一(六)寄塞垣(七)深(八)。

衣を擣つ

亦知る戍の返らざるを、秋至りて淸砧を拭ふ。
巳に近し苦寒の月、況んや長別の心を經たるをや。
寧ぞ辭せむ擣衣の倦むことを、一に塞垣の深きに寄す。

用盡閨中力。君聽空外音。　用ひ盡くす閨中の力、君聽け、空外の音を。

【字解】〔一〕亦知　亦は今年もまたの意、知るは閨婦が知るなり。〔二〕戍　屯守するなり、ここはまもりにでかけてゐる人即ち夫をさす。〔三〕拭　ほこりをぬぐひさる。〔四〕淸砧　さつぱりしたきぬた、砧は衣をうつ臺石なり。〔五〕苦寒月　仲冬の頃をさす。〔六〕一寄　一は專一。〔七〕塞垣　とりでのいしがき、長城のあたりをさす。〔八〕深　奥地へいりこむことのふかきをいふ、遠いこと。〔九〕閨中力　婦人の力をいふ。〔一〇〕君　夫をさす。〔一一〕空外音　空外は天外の意、空の字平聲によむ。仇注に空の字を去聲とし、「通雅」を引きて空外、猶單外也、といひ、「漢書」張禹傳の久處單外を證とせり。單外とは侍衞單薄、露外之池、即ち護衞手薄にして外へむきだしの場所のことなり。これによれば空外は戍人の居る地を指さざるべからず、これは不都合なり、因つて余は之を取らず。

【題義】戍人の妻が衣をうつことをのぶ。その妻のこころを代りてのべたるさまなり。

【詩意】まもりにでてをる吾が夫はことしも返らぬのであるによつて、自分は秋がきたからきぬたを拂うて寒さの仕度をする。もはや苦寒の月にもまぢかいし、ましてながながわかれてゐる自分の心もちに於てをや。どうして衣をうつにつかれるぐらゐのことをいとはうや、そんなことはいとはず、ただただきものをしたてて奥まつた遠いとりでのところへやらうとおもふばかりである。このねやにすんでゐるかよわい女の力をせい一ぱいだして衣をうつのであるが、あなたはそらにつたはるそのおとをどうぞ心とめておききくださりませ。

【餘論】この詩の「亦知」を作者が「吾もまた知る」こととし、結句の「君聽」の君を一般人を指すとみるも通ずべし。これは作者の立場より詠じたる詩とみるなり。

歸燕（一）

不獨避霜雪。其如（二）儔侶（三）稀。　獨り霜雪を避くるのみならず、其れ儔侶の稀なるを如何せむ。

四時無失序（四）。八月自知歸（五）。　四時、序を失ふことなし、八月、自ら歸るを知る。

春色（六）豈相訪（七）。衆雛（八）還（九）識機（一〇）。　春色にも豈に相訪はむや、衆雛も還機を識る。

故巢（一一）儻（一二）未毀（一三）。會傍（一四）（一五）主人飛。　故巢儻し未だ毀たれずんば、會ず主人に傍ひて飛ばむ。

【字解】〔一〕歸燕　南へかへるつばめ、つばめは寒くなれば北より南へうつる。〔二〕如　如何に同じ。〔三〕儔侶　なかま。〔四〕失序　順序をまちがへる。〔五〕知歸　南へかへることを知る。〔六〕春色　明年の春げしきのとき。〔七〕豈相訪　來り訪はざるべきをいふ。〔八〕衆雛　多くのひな。〔九〕還　また、俗語。〔一〇〕識機　立ち去るべき時機をさとる。〔一一〕故巢　もとのす。〔一二〕儻　もしくは、萬一、ひよつとすると。〔一三〕毀　うちこはす。〔一四〕會　必ず、俗語。〔一五〕傍　そふ。

【題義】燕の南方へかへるをみて、つばめとなりてその心をよめり。疑ふらくは自己の秦州を立ち去るべきことを内心に決して詠じたるものならん。

【詩意】自分はここを立ち去らうとするのだが、霜や雪の寒さを避けるためばかりではない、なかまがだんだんすくなくなつてさびしいのをどうしてこらへられようぞ。四時の時節はまちがひなく順序

を追うてすぎ去るので、自分は八月となれば、ひとりでに南方へかへるべきであることを知るのである。いまここを去れば、明年の春げしきになつたとて、どうしてまたここをおとづれようぞ、ここにうまれた雛さへも、またいまが立ち去るべき時節であることをしりわけてゐる。しかしながら、ここのふる巣が萬一まだこはされずにゐるならば、後年には必ずまた主人のそばへやつて來てとぶであらう。

【餘論】舊解に春色豈相訪を問辭とせり。豈相訪を反語とせず問辭とするは不可解なり、また、かりに春色の句を問辭とせば、次の衆雛の句はその答辭とすべきなり、しかるに衆雛の句は敍事の句なりといふ、かかる章法の有りやう無し。故に余は之を取らず。

促織(一)

促織甚微細(二)。哀音何動人。
草根吟(三)不穩。牀下意(四)相親。
久客(五)得無涙(六)。故妻(七)難及晨(八)。
悲絲(九)與急管(一〇)。感激(一一)異天眞(一二)。

促織

促織は甚だ微細なり、哀音、何ぞ人を動かす。
草根、吟ずること穩かならず、牀下、意相親しむ。
久客、涙なきを得むや、故妻、晨に及び難し。
悲絲と急管と、感激、天眞に異なり。

【字解】〔一〕促織　蟲の名、「きりぎりす」の類。〔二〕微細　形につきいふ。〔三〕吟　むしのなくこと。〔四〕意　むしのこころもち。〔五〕久客　ながくよそにでてゐるたびびと。〔六〕得無涙　得は反語によむ、上に「焉」の字をいれてみる。〔七〕故妻　棄てられしつま、やもめの女をさす。〔八〕難及晨　たへがたきをいふ。〔九〕悲絲　悲しげな琴糸のおと。〔一〇〕急管　調の急なる笙笛のおと。〔一一〕感激　きく人の情をして感じ激せしむること。〔一二〕天眞　きりぎりすの天然ありのまま。

【題義】きりぎりすのなくねをききてそのものがなしさをよめり。

【詩意】きりぎりすはちつぽけな蟲であるが、そのあはれなねはどうしてこんなに人を感動させるのであらう。かの蟲は草の根もとでおちつかなげにないてをりだんだんねだいの下へとはひつてくるがその心は人に親しみを求めようとするかのやうである。このねをきいてはながいあひだ旅人たるものは涙なしにはをれぬし、かつて人妻であつたものはとてもよあけまでがまんしてきいてはをられぬ。絲竹の音のかなしさも人を感激させることはさせるが、とてもこの蟲の音の天眞なるとは同じ樣にみられぬ。

螢火

幸因腐草(一)出。敢近太陽(二)飛。
未足臨書卷(三)。時能點客衣。

螢火

幸に腐草に因りて出づ、敢て太陽に近づいて飛ばむや。
未だ書卷に臨むに足らず、時に能く客衣に點す。

随風隔(三)幔小。帶雨傍林微。　風に随ひて幔を隔てて小に、雨を帶びて林に傍ひて微なり。

十月清霜重。(四)飄零何處歸。　十月、清霜重し、飄零、何の處にか歸らむ。

【字解】【一】腐草　くさつたくさ。【二】敢近　反語によむ。【三】幔　まく。【四】飄零　おちぶれる。

【題義】ほたるのかぼそきひかりを見てよめり。

【詩意】ほたるは幸にもくさつた草のなかからうまれ出たのだ、そんなものが太陽に近づいて飛ぶなどといふことがどうしてできようぞ。まだ書物のそばをてらすだけの十分の光はないが、ときとしてたび人の衣のうへにちらととまるぐらゐのことはできる。また風に吹かれながらまくのそとで小さくひかつたり、雨をおびながら林にそうてかすかにみえたりはする。十月ともなるとさえた霜がおもくおくのであるが、そのころはこのほたるはおちぶれてどこへいつてしまふのであらうか。

【餘論】舊解に宦官李輔國をたとへたりといへり。若ししかく說くならば、初めの二句位は理窟もつけうべけんも、他の諸句は義を爲さず、譬喩とせば、むしろ自己の境遇をたとへたりと見るに如かず。

(一)蒹葭

蒹葭

摧折不(二)自守。秋風吹若何(四)。　摧折、自ら守らず、秋風、吹くも若何にせむ。

暫時花戴雪。(五)幾處葉沈波。　暫時、花雪を戴く、幾處か葉、波に沈む。

體弱春(六)苗早。叢長夜(七)露多。　體弱くして春苗早く、叢長うして夜露多し。

(八)江湖後(九)搖(一〇)落。亦恐歲(一一)(一二)蹉跎。　江湖、搖落に後るるも、亦恐る歲に蹉跎たらむことを。

【字解】【一】蒹葭　「あし」のくさ。【二】摧折　莖幹のくだけをれること。【三】自守　自己をしつかり保守すること。【四】吹若何　若何とはいかんともしがたし、自己の責任なりといふなり。浦氏は「將な風に歸す」といへるは「吹くはいかに」とみたるなり、今取らず。【五】幾處　いくばくの場所に於てか、疑問體なり、ただし多くの場所を意味す。【六】春苗　春のわかなへ。【七】夜露　夏についていふ。【八】江湖　南方の地をさす。【九】後　おくれる。【一〇】搖落　草木の葉のゆりおとされる。【一一】歲　としどしにの意。舊解は歲晚の義とす。【一二】蹉跎　つまづく貌、衰へゆくをいふ。

【題義】あしをみてその衰ふるをいふ。恐らくは亦自らを比せしものならん。

【詩意】この「あし」なるものはしつかり自己を保つことがないために、くだかれ折られるのであるから、秋風に吹かれたとてどうにもしかたがない。それは自分のせゐだ。穗をだすときちよつとは尾花が雪をいただいてゐるが、處處でその葉は波に沈んでゐる。この「あし」はその體質が弱くて早く春の苗がで、そのむらがりはせがたかく、夏には多く夜の露をうける。南方江湖の地ではこのくさは他の草木のおつるよりかおそいけれども、それは一時のことでやがてはとしどしにおちぶれ衰へるの

ではないかと氣づかはれるのである。

苦竹(一)

青冥(二)亦自守(三)。軟弱(四)強扶持(五)。
味苦夏蟲避。叢卑(六)春鳥疑(七)。
軒墀(八)曾不レ重。剪伐(九)欲レ無レ辭(一〇)。
幸近幽人(一一)屋。霜根結在レ茲(一二)。

苦竹

青冥にも亦自ら守る。軟弱強ひて扶持す。
味苦くして夏蟲避け、叢卑くして春鳥疑ふ。
軒墀、曾て重んぜず、剪伐も辭する無からむと欲す。
幸に近し幽人の屋、霜根、結んで茲に在り。

【字解】【一】苦竹　にがたけ、味のよからぬもの、醜竹なりといへり。【二】青冥　山中高處の氣の色をさす、竹色なりとの解は余之を取らず、（卷六の六〇八頁、馴青冥の句と對看すべし）。【三】自守　自己の性を守り保つ。【四】軟弱　やはらかによわし。【五】扶持　てだすけしてささへる。【六】叢卑　むらがり生えたところがたけひくし。【七】疑　竹林なるか否かをうたがふ。【八】軒墀　のきば、どえん、これは富貴の家をさす。【九】剪伐　「詩經」の甘棠篇にみゆ、きり、うちとる。【一〇】辭　辭退すること。【一一】幽人　しづかな場所にくらす人。【一二】茲　青冥の地をさす。

【題義】山中の苦竹をみてよめり。暗に自ら比す。

【詩意】このにが竹は山中青冥の氣のたなびく處に於ても自己の本性を保守し、軟弱ながらにそのすがたをむりにささへてゐる。さりながら味はにがいから夏の蟲もよけてたべないし、その叢生したところはせがひくいから春の鳥も疑うてやどりには來ぬ。富貴の家の緣さきなどはとんと之を尊重せぬ。ただもし用ひ處があつてつかはうとするものがあるならきりとられても辭退せず御用に立ちたいとおもうてゐる。幸に幽靜君子の家屋に近くあるので、かかる山ふかい場所に霜がれ時の根をかまへてをるのである。

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部 十八

309
65

始

續國譯漢文大成

文學部第十八册（第五帙の二）

杜少陵詩集　中の二

吉田徳[illegible]氏　寄贈本

309
65

杜少陵詩集卷八

除架(一)

架を除く

東薪(二)已零落。瓠(三)葉轉蕭(四)疏。　東薪已に零落す、瓠葉轉た蕭疏たり。

幸結白花了。寧辭青(五)蔓除。　幸に白花を結び了る。寧ぞ辭せむ青蔓の除かるるを。

秋蟲聲不去。暮雀意(六)何如。　秋蟲、聲去らず、暮雀、意何如。

寒(七)事今牢(八)落。人生亦有(九)レ初。　寒事今牢落たり、人生も亦初有り。

【字解】〔一〕架　たな。〔二〕東薪　たばれたたきぎ、「たな」をつくるため材料として用ひしもの。〔三〕瓠　ひさご、ふくべ。〔四〕蕭疏　まばら。〔五〕青蔓　あをい「つる」。〔六〕意何如　どんな心もちか、これもやはりしたはしくおもふならんといふなり。〔七〕寒事　さむぞらにあたりての事がら、即ち「たな」をとり去る等の事をさす。〔八〕牢落　さびし。〔九〕有初　詩經に靡レ不レ有レ初、鮮ニ克有ヒ終とみゆ、ここの初めは栞えしはじめをさす、初めありしといふはいま終りのふるはざるをいふなり。

【題義】ひさごの「たな」をとり去るとてよめり。以下「銅瓶」に至るまで、みな、秦州にての作なり。

【詩意】ひさごの「たな」をつくるために用ひた薪のたばはもはや零落し、ひさごの葉もいよいよまばらになつた。幸にも白い花を結んでしまつたうへは、青いつるはのぞかれてもかまはない。が、秋の蟲はこの「たな」のあたりから去らず鳴いてゐるし、夕ぐれの雀もここへ集まつてくるそのこころもちはどうだらう、（やはり「たな」に未練があるらしい。）秋枯れの仕事は今やさびしくなつた。人生もまた之と似たところがある。今は自分もふるはないのだが、これでもそのむかしさかえた初の時節も有つたのである。

廢畦（一）

秋蔬（二）擁（三）霜露、豈敢惜凋殘（四）。
暮景（五）數（六）枝葉、天風吹汝（七）寒。
綠霑（八）泥滓（九）盡（一〇）、香（一一）與歲時闌（一二）。
生意（一三）春如昨、悲（一四）君（一五）白玉盤（一六）。

廢畦

秋蔬、霜露に擁せらる、豈に敢て凋殘を惜まむや。
暮景、數枝葉、天風、汝を吹いて寒し。
綠は泥滓に霑されて盡き、香は歲時と闌なり。
生意、春昨の如し、悲む君が白玉の盤。

【字解】【一】廢畦　すたれたる畠のうね。【二】秋蔬　あきの野菜。【三】擁　かこまれる。【四】凋殘　しぼみ、そこなはれる。【五】暮景　ゆふ日のひかりにあたり。【六】數　三四ばかりなるをいふ。【七】汝　蔬をさす。【八】綠霑二句　蔬の衰容をいふ。【九】泥滓　滓もまた「にごる」なり、雨のための泥濁の水。【一〇】盡　綠色がなくなるなり。【一一】香　蔬のかをり。【一二】闌　たけなは、おとろふ、歲闌とはとしのすがれをいふ、香闌は香のおとろへるをいふ。【一三】生意　蔬の生氣ありしこと。【一四】悲　玉盤に盛らるるを得るの姿に非ざることについてかなしむなり。【一五】君　仇氏は君王とみ、浦氏は一定の人をさすなかれといへり。今仇氏に從ふ。【一六】白玉盤　白玉にて作りたる大皿、唐にては立春の節に白玉盤を以て細き生菜を盛りて羣臣に頒ち賜ふ。生菜は韮の菜なり。

【題義】すたれかかりしはたけのうねの野菜をみて、感をうつす。亦暗に自ら託するなるべし。

【詩意】秋の野菜が霜や露によりかこまれる樣になつた。時節がきたのであるからそのためにしぼみいたんだとて惜しいとはおもはぬ。が日ぐれのころわづかに三四枚の枝葉があるばかりで、そらから來る風がおまへを寒さうに吹いてをり、泥水にうるほされて綠の色はすつかり無くなり、蔬のすがれとともに香氣もすがれになつてしまうた。春のころ生き生きとしたきもちをもつてゐたことが、つい昨日の如くおもはれるが、君の白玉盤上に盛られるほどの姿を失つたことは悲しいことである。

夕烽

夕烽來不（一）近。每日報（二）平安。
塞上傳光小。雲邊落（三）點殘。

夕烽

夕烽來ること近からす、每日、平安を報す。
塞上、光を傳ふること小に、雲邊、落點殘る。

(四)照秦(五)通(六)警急。(七)過隴自(八)艱難。　秦を照らして警急を通ず、隴を過ぐるは自ら艱難。

聞道(九)蓬萊殿。千門立馬看。　聞道らく蓬萊殿、千門、馬を立てて看ると。

【字解】〔一〕不近　遠方よりするをいふ。〔二〕報平安　唐の價戍にては每日初夜に一炬の烽を放つ、之を平安火といふ、無事なしらすあひづなり。〔三〕落點　點は形小をいふ。〔四〕照秦　秦は關中、長安地方をいふ。〔五〕通　通報する。〔六〕警急　警戒、急迫。〔七〕過隴　烽火が隴西の地方を經過すること。〔八〕艱難　國事の艱難なるを報ずるをいふ、杜詩の「艱難愧深情」、「艱難昇長鼓」、艱難はみな國難をいふ、ここも同じ。浦氏の遼附照秦知警、則番兵過隴斯難、「杜臆」の失報有罪、誤報有罪、故日過隴艱難は、艱難二字を過隴に屬せしめてみる、其說是に非ず。〔九〕蓬萊殿　長安の殿名。

【題義】夕がた烽火のつたはるを見てよめり。

【詩意】夕方の烽火が遠方から傳へられて來て、每日平安無事を報じてくれる。その烽火はとりでの上に小さく光を傳へ、雲のあたりに一點の小光となつてきえのこる。この烽火が隴西の方から經過してくるときは國難の生ずるときであり、つぎつぎに東方へつたへられ關中の地方を照らして警急を通知するのである。であるから長安の蓬萊殿では、多くの門門に於て警備の士は馬を立ててこの烽火の樣子いかにとみまもつてゐるといふことである。

秋笛

秋笛

(一)清商欲(二)盡奏。(三)奏苦血霑衣。　清商、盡く奏せむと欲す、奏苦にして、血、衣を霑す。

(四)他日傷心極。征人白骨歸。　他日、傷心の極、征人、白骨歸る。

(五)相逢恐(六)恨過。(七)故作發聲微。　相逢ふ、恨の過ぎむことを恐る、故に發聲の微なるを作す。

(八)不見秋雲動。悲風(九)稍稍(一〇)飛。　見ずや秋雲動きて、悲風に稍稍に飛ぶを。

【字解】〔一〕淸商　すめる商調の音。〔二〕盡奏　曲を奏しつくすをいふ。〔三〕奏苦　苦とは聽く者をして心の苦しさをおぼえしむる如くなるをいふ。〔四〕他日　昔日ととく解あり、取らず、將來の異日をいふ。〔五〕相逢　聽者この吹笛の音にであふをいふ。〔六〕恨過　過は過度、極度なり。〔七〕故　故意。〔八〕不見　君不見に同じ。〔九〕稍稍　しだいに、すこしづつ。〔一〇〕飛　秋雲の飛ぶをいふ、風飛ぶとの解あるも取らず。

【題義】秋の笛のねをききてそのかなしきさまをよめり。

【詩意】笛が淸商の曲調をすつかり奏せんとしてゐる、その奏しかたはききてを心苦しくおもはせるほどであり血の涙がながれて衣をうるほすばかりである。異日出征者の白骨がかへるころにこの音をきいたらそれこそ傷心の極みであらう。この笛吹きはききてが之にであうたときに極度の恨みの情を催しはせぬかを氣遣うて、わざと微かな聲を出させてゐるのかとおもふが、見よ、この音に感じて悲風のために秋の雲もしだいに飛びつつあるではないか。

日暮

日暮風亦起。城頭烏尾訛(一)。　日暮れて風亦起る、城頭、烏尾訛く。
黄雲高未動。白水已揚波。　黄雲高くして未だ動かず、白水已に波を揚ぐ。
(二)羌婦語還笑。胡兒行且歌。　羌婦語り還笑ふ、胡兒行くゆく且歌ふ。
將軍別換(三)馬。夜出擁(四)雕(五)戈。　將軍、別に馬を換へ、夜出でて雕戈を擁す。

【字解】〔一〕訛　動く、一にいふ斜なりと。〔二〕羌婦、胡兒　降虜中の男女をいふ。〔三〕換馬　敵にみしられぬ様にと毛色のめだたぬ馬にのりかふるなり。〔四〕擁　持つをいふ。〔五〕雕戈　ほりものをしたほこ。

【題義】日ぐれに事件ありて將軍の警戒にいでゆくことをよめり。

【詩意】日ぐれに風が吹き起つて、城のうへにとまつてゐる烏の尾がうごいてゐる。黄ばんだ雲は高いところにゐてまだ動きださぬが、ひくい方では白い川水がはやくも波をあげてゐる。蠻人の女ははなしをしたり笑つたり、をとこはあるきながら歌をうたつたり、事も無げであるが、將軍は馬をのりかへて、りつぱなほこをもつて夜でかける。(なにごとかおこつたのだ。)

野望

清秋望不(一)極。迢遞起(二)層陰(三)。　清秋、望み極まらず、迢遞、層陰起る。
(四)遠水兼天淨。孤城隱霧深。　遠水を兼ねて天淨く、孤城隱れて霧深し。
(五)葉稀風更(六)落。山迥日初沈。　葉稀なるに風更に落ち、山迥に日初めて沈む。
獨鶴歸何晩。昏鴉已滿林。　獨鶴、歸る何ぞ晩き、昏鴉、已に林に滿つ。

【字解】〔一〕望不極　仇注に不能極遠也といへり。恐らくは非なり、仇氏によれば視界がゆきつまる義とするなり、それにては「遠水」の句をいかにするや、望不極は望無際の義、ながめのはてしなきをいふ。〔二〕迢遞　地に高低ありて且はるかなる貌。〔三〕層陰　いくへものくもり。〔四〕遠水二句　この二句は上三字下二字の句法を用ふ、遠水、天の淨きを兼れ、孤城、霧の深きに隱る、とよむも可なるも、遠水を兼れて天淨く、孤城隱れて霧深しとよむの簡明なるに如かず。他の例をあぐれば「積雪融城濕、宮雲去殿低」七言句にては、「黄宵香爐違伏枕、山城粉堞隱悲笳」の如き同句法なり。〔五〕葉稀　ひとりでに葉のすくなくなりしをいふ。〔六〕風更落　「風更に落す」と「落」の字を他動によむも可なれども葉を主とし落を自動とみたり。

【題義】野らの夕ぐれのながめをのべたり。

【詩意】すみきつた秋の遠望ははてしがないが、高低の地勢にはいくへかの夕ぐもりがおこりはじめた。それで遠方の水面とともに天もすつきりしてゐるが、この一つ城はだんだんかくれて霧がふかくたちこめた。それからたださへ稀になつた木の葉が風のためにいつそうふるはれて落ち、はるかなる山のかなたには太陽がやつと沈んでしまつた。このときひぐれのからすは、もはや林に一ぱいとまつ

たのに、どうして一匹の鶴だけは、こんなにおそくかへるのであらうか。（鶴は蓋し自己を比していふ。）

空囊

翠柏（一）苦猶食。明霞（二）高可餐。
世人共鹵莽（三）。吾道（四）屬艱難（五）。
不爨（六）井晨凍。無衣牀（七）夜寒。
囊（八）空恐羞澀（九）。留得一錢看（十）。

空囊
翠柏苦きも猶食す、明霞高きも餐す可し。
世人共に鹵莽なり、吾が道、艱難に屬す。
爨せずして井晨に凍り、衣無うして牀夜寒し。
囊空しくば恐らくは羞澀ならむ、一錢を留め得て看る。

【字解】【一】翠柏　みどり葉の柏、柏は「カヤ」、ここは「カヤ」の實をいふ。【二】明霞　あさの赤色のかすみ、仙人は之をたべる。【三】鹵莽　耕作の仕方のよいかげんなるをいふ、かりて人事につきいふ。【四】吾道　自己の理想とする道をいふ。【五】艱難　世路の險難。【六】爨　かしぐ、飯をつくるためかまどに火をたく。【七】牀　ねだい。【八】囊　さいふ。【九】羞澀　人に對しはにかむさま。【十】看　みまもる。

【題義】さいふのからにならんとするをよめり。

【詩意】苦くとも「かや」のみをたべる。手にとどきにくい朝霞もまたとつてたべることができる。自分の食物はそんなものだ。世間の人の行ふ所はみなよいかげんのことをしてをるが、自分はこの世路なんぎの時にあたつて自己の道を守らねばならぬことになつてをる。自分はめしをたかぬから井の水はあさこほつてゐるし、衣がないからねだいは夜さむい。さいふもからつぼであるが、まるきりからつぼでは人前もはづかしいから、一錢だけはのこしておいてみてゐるのである。

病馬

乘爾（一）亦已久。天寒關塞深（二）。
塵中老盡力（三）。歲晚病傷心（四）。
毛骨豈（五）殊衆。馴（六）良猶至今（七）。
物（八）微意（九）不淺。感動一沈吟（十）。

病馬
爾に乘るも亦已に久し、天寒くして關塞深し。
塵中に老いて力を盡くす、歲晚病みて心を傷ふ。
毛骨豈に衆に殊ならむや、馴良猶今に至れり。
物微なるも意淺からず、感動して一に沈吟す。

【字解】【一】爾　馬をさす。【二】深　おくまりたるをいふ。【三】塵中老盡力　馬につきていふ、上三下二の句法なり、盡力塵中老と同意。【四】歲晚病傷心　馬につきていふ、上三下二の句法、傷心歲晚病と同意、傷心は心臟を傷害せるをいふ。【五】豈殊衆　反語、多數の凡馬とあまりちがはぬ、特にすぐれた材力あるにはあらぬをいふ。【六】馴良　ならされてすなほなり、馬の德をいふ。【七】猶至今　昔からさやうであるが今日に至るもまたしかり。【八】物微　物は馬をさす、一病馬の如きは物としては微小言ふに足らぬほどのものなり。【九】意不淺　馬に對しての作者のこころもちはふかい。【十】沈吟　ためいきつく。

【題義】病める老馬をかなしみてよめり、暗に自己を比す。

【詩意】さむぞらにあたつて、せきしよとりでの奥まつたこの地方。自分がおまへに乘つたことも久しいものだ。おまへはせい一ぱいはたらいて風塵中に年よりになり、このとしのくれに心臟の病氣をしてゐる。おまへの毛なみや骨格が特別他の多くの凡馬とちがつてゐるのではないが、おまへのおとなしさは昔から今日までつゞいてゐる。一病馬のこと故たいしたものではないが、自分のこの馬に對するこころもちは淺くはないのであつて、この馬のために感動してもつぱらためいきつくしだいである。

蕃劍

致此自僻遠。又非珠玉裝。　此を致すは僻遠よりす、又珠玉の裝に非ず。
如何有奇怪。每夜吐光芒。　如何ぞ奇怪有りて、每夜、光芒を吐く。
虎氣必騰上。龍身寧久藏。　虎氣必ず騰上せむ、龍身寧ぞ久しく藏せむや。
風塵苦未息。持汝奉明王。　風塵未だ息まざるに苦しむ、汝を持して明王に奉せむ。

【字解】【一】致此　此は劍をさす、致すとはこちらへもちきたせしをいふ。【二】僻遠　遠きゐなか。【三】奇怪　あやしきこと。【四】光芒　芒はひかりのほさき。【五】虎氣　劍氣をいふ、「吳越春秋」に吳王闔閭死して劍とともに冢に葬りたるに、三日にして白虎がそのうへにうづくまりゐたるにより、その地を虎邱と曰ふとの話あり。【六】龍身　劍身をいふ、晉の雷煥が劍、龍に化したる話「豫章記」にみゆ。【七】苦　作者がこまるをいふ。【八】汝　劍をさす。【九】奉　獻ずる。【一〇】明王　明德ある君。

【題意】吐蕃よりつたはりし劍をみてよめり。

【詩意】このつるぎは、之をもつてきたのはゐなかの遠いところからであるし、また眞珠や玉のよそほひがしてあるものではない。しかるになんでふしぎなことがあつて、まいばんこれが光を吐きだすのか。必ずや劍氣はうへの方へとたちのぼりあらはれるであらう。劍身はどうしていつまでもかくされてゐようぞ。自分は兵亂の塵のまだやまぬのにこまつてをるから、おまへを明君にさゝげ亂塵をしづめていただきたいとおもふ。

銅瓶

亂後碧井廢。時淸瑤殿深。　亂後、碧井廢す、時淸かりしとき瑤殿深かりき。
銅瓶未失水。百丈有哀音。　銅瓶未だ水を失はず、百丈、哀音ありき。
側想美人意。應悲寒甃沈。　側に想ふ美人の意、應に寒甃の沈めるを悲しむなるべし。
蛟龍半缺落。猶得折黃金。　蛟龍半ば缺落す、猶得、折黃金。

【字解】【一】銅瓶　あかがねにて作りしつるべ。【二】碧井　みどりの水をたたへし井。【三】廢　つぶれしこと。【四】時淸

世の治まりしとき。【五】瑤殿　うつくしきごてん。【六】深　おくまりたるをいふ。【七】失水　水と別れること。【八】百丈　つるべなは。【九】哀音　ろくろ仕掛のなはにて水をつりあぐるおと。【一〇】側想　がはのものからおもふ。【一一】美人　宮女をいふ。【一二】寒甃沈　井の沈埋せるをいふ、甃はいしだたみの瓦をいふ。【一三】鮫龍　つるべの雕刻物。【一四】折黃金　折は「をれる」、黃金は鮫龍の材料として用ひたるもの。師民瞻の注に折を準折（わりびきして賣る）の義とし、楊愼の注に「折」は「當」（質におくこと）なりとせり。今從はず。

【題義】故宮の井に用ひられし銅のつるべをみてよめり。

【詩意】兵亂が起つてからこのかた水のいい宮中の井がつぶれてしまつた。世が太平であつたときにはその井はごてんのおくふかいところにあつたのだ。そのころはこのつるべはまだ水とはわかれず、つるべなはでくみあげらるるときあはれなおとをたててゐた。それが一朝井がなくなつたことだから自分が想像するにもと宮仕へした女官などのこころもちでは、さだめし寒石のいしだたみがうもれてしまつたことを悲んでゐることであらう。つるべの表面に黃金でこしらへた鮫龍の雕刻があるがそれは今は半分はおちこぼれ、その折れた破片だけはなほ得らるる。（別說によれば、しちにおけば金錢にかへうる。）

送遠（一）

帶甲（二）滿天地。胡（三）爲君（四）遠行。　帶甲天地に滿つ、胡爲れぞ君遠く行く。

親朋（五）盡一哭。鞍馬（六）去孤城（七）。　親朋盡く一哭す、鞍馬孤城より去る。

草木歲月晚（八）。關河霜雪淸。　草木歲月晚れ、關河霜雪淸し。

別離已昨日。因見古人情（九）。　別離已に昨日、因つて見る古人の情。

【字解】【一】送遠　遠くにゆくものを送る。【二】帶甲　よろひを身につけたるもの、武裝者。【三】胡爲　何爲に同じ、なんすれぞ、どうして。【四】君　行者をさす。【五】親朋　親戚朋友。【六】鞍馬　行者のくら、うま。【七】孤城　秦州の城をさす。【八】歲月晚　年末に近きをいふ、秋以後はみな歲晚といふ、必ずしも十二月をいふに非ず。【九】古人情　むかしの人の樣な厚い人情。

【題義】遠方にゆくべき人を送る詩なり。ただしこの詩は他人を送るに非ず、作者が自己を他人視して我と自己を送るために作りしものなり、而して詩意より推せば秦州出發の翌日、昨日の別れを回顧してつくりしものなり。乾元二年十月の作。此篇より以後の詩は編纂の次第に前後あり。

【詩意】世がみだれて武裝したものが天地に充滿してをる、こんなときおまへはなんで遠方へゆくのであるか。親戚や朋友が別れを惜しんでみな一たび慟哭する、その聲のなかにたびゆく人の鞍馬はひとつのはなれじろから立ち去つてしまつた。今や草も木も歲のくれにむかつてゐるときであり、せきしよの河には霜や雪がきよくおいてゐるときだ。かんがへるとあのやうにしてわかれたのはきのふのことである。それにつけて昨日別れを惜しんでくれた人人の厚いなさけごころがしのばれるのである。

送人從軍　【原注】時有吐蕃之役。

人の軍に從ふを送る　【原注】時に吐蕃の役あり。

(一)弱水應(二)無地。(三)陽關已近(四)天。
弱水應に地なかるべし、陽關已に天に近し。

今君度(五)砂(六)磧。(七)累月斷(八)人煙。
今君砂磧を度る、累月、人煙斷ゆ。

(九)好武寧(一〇)論命。(一一)封侯不(一二)計年。
好武、寧ぞ命を論せむ、封侯、年を計らず。

馬寒防(一三)失(一四)道。雪沒錦(一五)鞍(一六)韉。
馬寒うして失道を防げ、雪は沒せむ錦鞍韉。

【字解】【一】弱水　甘肅省甘州の山丹縣の西に發源し北流して縣西に逕し、又西北して張掖縣の北に逕し、又西北して肅州の高臺縣界に入る。【二】無地　舊注に「地の盡くる處ないふ」となせるも、恐らくは然らず、文字どほりに土地の無きところとみるべし、弱水とは沙地にて水が流れ來りて消えうせてしまふより起りし名なればなり。【三】陽關　甘肅省安西州治の西南百三十里にありし關の名。【四】近天　支那人は西北地勢高きゆゑに西北にゆくほど天に近しとかんがふ。【五】度　わたる。【六】砂磧　沙漠。【七】累月　いくつきも。【八】斷人煙　人里まれに炊煙なし。【九】好武　勇武を好む。【一〇】寧論命　生死をかへりみざるをいふ。【一一】封侯　軍功により侯爵に封ぜらるる。【一二】不計年　その遲きとはやきとを計較せざるをいふ。【一三】防　豫防する、しかせぬ樣にする。【一四】失道　みちをあやまつ、みちふみまよふ。【一五】雪沒　雪のふかきをいふ。【一六】韉　うまのしとね。

【題義】吐蕃のいくさありてそこへ從軍する人を送れる詩。乾元二年秦州にての作。

【詩意】弱水のあたりは沙ばかりで土地もないことだらうし、陽關のあたりは高くて天にも近いところであらう。そんなところをこえて君は沙漠地方をわたつてゆくのだが、そこへらは幾箇月も人里の煙がとだえてゐるであらう。君の如く武を好んでは生命のあるなしなどは論ずるところであるまいし、功をたてて侯に封せらるる時節にもとんぢやくはなからう。ただ時はさむぞらで雪は深く君ののつてゐる馬の錦の鞍のしきものをも沒せんばかりであらうから、馬の脚もさむくて道をまちがへてしまふかもしれぬ、そんなことの無い樣に氣をつけらるるがよいとおもふ。

示姪(一)佐　【原注】佐草堂在(二)東柯谷。

姪佐に示す　【原注】佐が草堂は東柯谷に在り。

多病(三)秋風落。君(四)來慰眼前。
多病にして秋風落つ、君來りて眼前に慰す。

自聞(五)茅屋趣。只想(六)竹林眠。
茅屋の趣を聞きしより、只だ想ふ竹林に眠らむことを。

(七)滿谷山雲起。侵(八)籬澗水懸。
谷に滿ちて山雲起り、籬を侵して澗水懸る。

(九)嗣宗諸子姪。早覺(一〇)仲容賢。
嗣宗が諸子姪、早く仲容が賢なるを覺ゆ。

【字解】【一】姪佐　作者の姪、名は佐、襄陽杜氏の系にして殿中侍御史㬊の子、官は大理正に終る。【二】東柯谷　卷七秦州雜詩に見えたり。【三】秋風落　卷五送楊六判官使西蕃詩にも送遠秋風落の句あり、落の字につき余は搖落の義か、高處より吹きおろす義かと疑を存しおけり。師氏の舊注に、七月秋風起、八月風高、九月風落といひ、落を衰減の意とせり。果して然るや。【四】君來慰

眼前　眼前君來慰と同義。君は佐をさす。【五】茅屋趣　佐が草堂のおもむき。【六】竹林　魏の嵆康、阮籍・阮咸・山濤・向秀・王戎・劉伶と親し、世に之を竹林の七賢といふ、この竹林は佐が家の竹林をさす。【七】澗谷二句　卽ち茅屋の趣なるものなり。【八】慰　高處にあるをいふ。【九】嗣宗　阮籍が字、作者籍を以て自ら比す。【一〇】仲容　阮咸が字、以て佐に比す。

【題義】東柯谷にある姪佐の草堂のおもしろさをきき、且つ佐が來訪して自分を慰めてくれることをうれしくおもひて作れる詩なり。乾元二年九月の作。

【詩意】秋風搖落の節に自分は病氣がちであるが、幸におまへは眼前に來て自分をなぐさめてくれる。自分はおまへの東柯谷の茅屋のさまがおもしろいと聞いてからは、おまへの家の竹林で眠りたいとばかりかんがへてゐる。おまへの家では谷いつぱいに山の雲がわきおこつたり、まがきの上を倰してまつさかさまに岩間の水が落ちてくるさうだ、さぞおもしろいことであらう。自分にはいろいろ姪どももゐるが、なかではまづ阮咸（卽ち佐を意味す）が賢いとおもはるるのである。

佐還山後寄三首

佐、山に還りて後寄す　三首

山晩黃雲合。歸(一)時恐(二)路迷(三)。
山晩れて黃雲合す、歸る時路迷はむことを恐る。

澗寒人(四)欲到。林(五)黑鳥應棲(六)。
澗寒くして人到らむと欲す、林黑くして鳥應に棲むなる「べし。」

野(七)客茅(八)茨小。田(九)家樹木低。
野客、茅茨小に、田家、樹木低し。

舊(一〇)諳疎(一一)懶叔。須(一二)汝(一三)故相攜。
舊しく諳んず疎懶の叔が、汝が故らに相攜ふるを須つ「ことを。」

【字解】【一】歸時　佐がかへるとき。【二】恐　作者がおそれる。【三】路迷　佐が路にまよふ。【四】人　佐をさす。【五】林黑　もりがまつくらになる。【六】棲　ねぐらにすむ。【七】野客　作者自らいふ。【八】茅茨　かやぶきのいへ。【九】田家　農家、作者自己の家をさす。【一〇】舊諳　久しく熟知す、佐がこころえてをるをいふ。【一一】疎懶　ぶしやうなをぢさん、佐に對して作者みづからいふ。【一二】須　必要とする。【一三】汝　佐をさす。

【題義】佐がその山居にかへりしのち、作者之に寄せたる詩なり。蓋し前篇示二姪佐一と同時の作ならん。

【詩意】山がくれがたになつて黃ばんだ雲がとざした。おまへがかへるときに自分はおまへがみちにまよひはせぬかと恐れた。岩間の水の寒く流るるところへおまへがやがてつかうとする、そのときもりはまつくろにくらくなつて鳥はみなねぐらにすんだことであらう。自分のかやぶきの家は小さく、まはりの樹木はせがひくい。おまへはそこにすんでゐるこのぶしやうもののをぢが、おまへがきをつけて手をひいてくれる必要のあるものだといふことをずつと以前からよくこころえてゐる。（それはこのをぢの心づよくおもふ點であるとの意。）

〔二〕

白(一)露黃(二)粱熟。分(三)張素(四)有期(五)。
白露に黃粱熟す、分張、素期あり。

已應春得細。頗覺寄來遲。　已に應に春き得て細なるなるべし、頗る寄せ來るの遲きを覺ゆ。
味豈同金菊。香宜配綠葵。　味豈に金菊に同じからむや、香は宜しく綠葵に配すべし。
老人他日愛。正想滑流匙。　老人、他日愛す、正に想ふ、滑、匙に流るるを。

【字解】【一】白露　白露の降るときをいふ。【二】黃粱　米の美なる種類。【三】分張　もと人の分別離居する義なり。原義はしかれどもここはそれにては通ぜず、作者は分配の義として用ひたるなるべし。黃粱を自分にわけてくれることをいふ。【四】素　ふだんから。【五】期　期限、約束。【六】金菊　黃色の菊。【七】綠葵　野菜の種名。【八】老人　自己をさす。【九】他日　平生をいふ。【一〇】正想　今日まさにおもふ。【一一】滑流匙　米のなめらかさがさじにながれつたはる。

【題義】黃粱を早くわけてくれぬかといひやる詩なり。

【詩意】しらつゆがおりる頃となつて黃粱がみのつた。それをわけてくれるとの約束はふだんから有つたのだ。もはや細かに臼でついたことだらうとおもふのに、たいへんよこしてくれるのがおそいやうにおもはれる。黃粱の味はとても菊などと同じくはないし、その香は綠葵に配合して煮るにふさはしい。自分はふだんからそれをすきこのんでゐるのだから、いまや待ちきれずあのぬめりが匙の尖から流れるのをおもひうかべてをる。

〔三〕

幾道泉澆圃。交橫落幔坡。　幾道泉圃に澆ぐ、交〻橫はる落幔の坡に。
葳蕤秋葉少。隱映野雲多。　葳蕤、秋葉少に、隱映して野雲多し。
隔沼連香芰。通林帶女蘿。　沼を隔てて香芰に連り、林に通じて女蘿を帶ぶ。
甚聞霜薤白。重惠意如何。　甚だ聞く霜薤の白きを、重ねて惠む意如何。

【字解】【一】幾道　いくすぢか。【二】交橫落幔坡　諸說あり。先づ鄙說をあぐ。交橫とは流泉がこもごもよこたはること、落幔の落は絡に同じ、落幔坡とは幔幕をからめ設けたるさかなり、幕をはるは日光をよけたり、鳥雀を防ぐ用に供するなり。落二幔坡一とよむ說あり、それにては橫の字と落の字と相使す。幔落レ坡とよみ、幔影が坡上におつるとなす說あり、對句よりすればこれも一說なり。また幔は實物に非ずして坡上の青翠の色なりととくあり。今皆取らず。【三】葳蕤　諸家多く司馬相如の封禪書により委頓（しだれる）の義にみる。今從はず、予は盛なる貌とする說をとる。【四】秋葉少　秋葉は諸家多く木葉とみる、取らず、蔬菜の葉すなはち薤葉とみるべきなり。少の字は王洙本に小に作る、從ふべし、秋葉小とは薤の葉の小さきをいふ、葉小なるは根大なるなり。【五】隱映　うつろひはゆる。【六】野雲　諸家多く實物とみる、余は蔬菜の叢生したるさまをたとへし辭とみる。【七】連香芰、帶女蘿　連帶の二字、上の雲多の意より來る、薤がつらなり、薤がおぶるをいふ。芰は三角、四角をもつ「ひし」、女蘿は「ひめかつら」。【八】薤　ラツキヤウ。【九】重惠　重ねてとは上の黃粱に對していふなり。【一〇】意　佐の意。

【題義】「らつきやう」をねだる詩なり。

【詩意】はたけに幾すぢかの泉水がそそがれ、その水が「まく」を張つたをかにこもごもながれる。それで「らつきやう」の葉は元氣よく盛であるがその形は小さく、地面にうつろうてゐる樣子は野のもの雲が多くひろがつたやうである。從つて沼をへだてては香ばしい芰につらなり、林を通じてはひ

めかつらの色にもつながつてをる。霜を經た「らつきやう」の根がまつ白にできたとよくきいてゐるが、黃粱のほかさらにそれをも惠まれるおぼしめしはあるまいか。

從人覓(一)小胡孫(二)許寄

人に從つて小胡孫を覓む、寄することを許さる

人說南州(三)路。山猿(四)樹樹懸。　人說く南州の路、山猿、樹樹懸ると。

擧家(五)聞若欬(六)。爲(七)寄小如拳(八)。　擧家、欬(欬)するが若くなるを聞かむとす、爲めに寄せよ「小拳の如くなるを。」

預(九)哂愁胡面(一〇)。初調(一一)見馬鞭(一二)。　預め哂ふ愁胡の面、初調、馬鞭を見む。

許求(一三)聽慧者(一四)。童稚(一五)捧應顚(一六)。　聽慧の者を求むるを許す、童稚捧げて應に顚するなるべし。

【字解】【一】覓　もとむ。【二】小胡孫　まめざる。【三】南州　秦州の南方の州。【四】山猿　猿は手長ざるなり、猿は猴の誤なるべしとの說あり。【五】擧家　一家全體。【六】若欬　欬は王洙本に欬に作る、從ふべし。欬はしはぶく、せきをすること。さるのなきごゑ之に似たり。【七】爲　わがためにの意。【八】拳　にぎりこぶし。【九】預　豫に同じ。【一〇】愁胡面　うれへをおびたる胡人のかほ。【一一】初調　はじめてならす。【一二】見馬鞭　見はさるがみるなり、さるをならすにむちをあてることもあるなり。【一三】許求　許は先方がゆるす、求はこちらがもとむるなり。【一四】聽慧者　りかうなかしこいさる。【一五】童稚　作者のこどもら。【一六】顚　よろこんで氣もくるふばかり。

【題義】人のところから豆ざるをもらはうとしたところ、先方はよこしてくれることを承知した。

【詩意】人のはなしによると、南方の州への道路には山ざるが樹ごとにぶらさがつてゐるといふことだ。我が家のものはみなそのさるのせきばらひする様なきごゑを聞きたいものだとおもうてゐる、どうかわれわれのためににぎりこぶしほどの小さいさるをよこしてもらひたい。あの澀面のさるがかひならされる當初には馬鞭をあてられるだらうとおもふと、いまからはやをかしく感ぜらるる。こちらはなるべく悧巧なやつをほしいといふのにあなたはそれを許諾してくださつた。うちのこどもらはさだめしさるをもつてくるほしきまでよろこぶことでありませう。

秋日阮隱居致薤三十束　【原注】隱居。名昉。秦州人。

秋日、阮隱居、薤三十束を致す　【原注】隱居、名は昉、秦州の人。

隱者(一)柴門內。畦蔬(二)遶舍(三)秋。　隱者、柴門の內、畦蔬、舍を遶りて秋なり。

盈筐(四)承露(五)薤(六)。不待致書(七)求。　盈筐、露薤を承く、書を致して求むるを待たず。

束比(八)青芻色(九)。圓齊玉筯頭(一〇)。　束は比す青芻の色に、圓は齊し玉筯の頭に。

衰年(一一)關鬲冷(一二)。味暖倂無憂(一三)。　衰年關鬲冷なり、味暖倂せて憂無し。

【字解】【一】隱者　隱居の人、阮昉をさす。【二】畦蔬　はたけのやさい。【三】舍　昉が屋舍。【四】盈筐　かごいつぱい。【五】承　うけてささげる。【六】露薤　つゆをおびた「にら」。【七】致書　作者から昉のかたへ手紙をやる。【八】東比一句　詩意

に生芻一束、其人如玉とみゆ。芻はほしたる草、青芻は刈りたての草をいふ。【九】圓　「にら」の根のまろきこと。【一〇】玉筯　玉にてつくりし「はし」。【一一】衰年　老衰の年。【一二】關鬲　關は關節、鬲は膈の假借字ならん、膈は胸膈、心臟と脾臟の間をいふ。【一三】味暖　あぢはひとあたたかさと、「にら」はその性、人の體溫をますものなりといふ。

【題義】秋の日に隱居の士阮昉といふ者が三十束の薤をよこしてくれたについておれいをいひやりし詩なり。阮昉は秦州の人なり。

【詩意】隱居の阮昉は柴のとぼそのうちにひつこんでゐるが、そのいへのめぐりにははたけの手づくりの野菜が秋の色を呈してゐる。自分はいま露ながらの薤を盛つたかごをもらつて之を手にささげることができた。これは自分が手紙を彼にやつて求めたわけでなく彼自身が親切にもよこしてくれたのである。「にら」の束はかりたての青草の色にもくらぶべく生生しいし、にらの根のまんまるさは白玉の箸の頭とおなじ様である。自分は老衰の年にあたつて關節だの胸膈だのが冷えるのだが、このにらがあれば食味のうへも保溫のうへもともに心配が無い。

秦州見勅(一)目薛(二)三璩〔據〕授司(三)議郎畢(四)四曜除監(五)察與二(六)子有故(七)遠喜遷(八)官兼述索(九)居凡三十韻

秦州にて勅目を見るに、薛三璩（璩は據に作るべし。）は司議郎を授けられ、畢四曜は監察に除せらる。二子と故あり、遠く遷官を喜び、兼ねて索居を述ぶ。凡そ三十韻なり

大(一〇)雅何寥(一一)濶。斯(一二)人尚典(一三)型。
大雅何ぞ寥濶なる、斯の人尚典型。

交(一四)期余潦(一五)倒。材(一六)力爾(一七)精(一八)靈。
交期余潦倒、材力爾精靈。

二子聲(一九)同日。諸(二〇)生困(二一)一經。
二子、同日に聲あり、諸生、一經に困す。

文章開突(二二)奧。遷(二三)擢潤(二四)朝廷。
文章、突奧を開く、遷擢、朝廷より潤さる。

舊(二五)好何由展。新詩更憶聽。
舊好何に由りてか展べむ、新詩更に聽かむことを憶ふ。

別來頭併(二六)白。相見眼(二七)終青。」
別來頭併せて白し、相見ば眼終に靑ならむ。』

伊昔貧皆(二八)甚。同(二九)憂歲(三〇)不寧。
伊れ昔貧皆同じ、同じく憂ふ歲の寧からざるを。

棲(三一)遑分(三二)半菽。浩(三三)蕩逐(三四)流萍。
棲遑、半菽を分つ、浩蕩、流萍を逐ふ。

俗(三五)態猶猜(三六)忌。妖(三七)氛忽杳(三八)冥。
俗態猶猜忌、妖氛忽ち杳冥。

獨(三九)慚投(四〇)漢閣。俱(四一)議哭(四二)秦庭。
獨り慚づ漢閣より投するを、俱に議す秦庭に哭するを。

還(四三)蜀秖無補。因(四四)梁亦固扃(四五)。
蜀に還る秖補ひ無く、梁に囚はる亦固より扃さる。

(四六)華夷相混合。宇宙一(四七)羶腥。　華夷、相混合す、宇宙、一に羶腥なり。

(四八)帝力收三(四九)統。天(五〇)威總四(五一)溟。　帝力、三統を收め、天威、四溟を總ぶ。

(五二)舊都俄望(五三)幸。清(五四)廟肅(五五)惟(五六)馨。　舊都俄に幸を望む、清廟、惟馨を肅しむ。

(五七)雜種雖高(五八)壘。長(五九)驅甚建(六〇)瓴。　雜種、壘を高くすと雖も、長驅、瓴を建つるよりも甚し。

(六一)焚香淑(六二)景殿。漲(六三)水望(六四)雲亭。　香を焚く淑景殿、水を漲らす望雲亭。

(六五)法駕初還日。羣(六六)公若會(六七)星。　法駕初めて還る日、羣公、會星の若し。

(六八)宮臣仍(六九)點染。杜(七〇)史正零(七一)丁。　宮臣仍點染す、杜史正に零丁たり。

(七二)官忝趨棲鳳。朝(七三)回歎聚螢。　官は忝うす棲鳳に趨するを、朝より回りて聚螢を歎す。

(七四)喚人看(七五)騕裹。不(七六)嫁惜(七七)娉婷。　人を喚びて騕裹を看せしむ、嫁せざるに娉婷を惜む。

(七八)掘獄知埋劍。提(七九)刀見發硎。　獄を掘りて埋劍を知り、刀を提げて發硎を見る。

(八〇)侏儒應共飽。漁(八一)父忌偏醒。　侏儒應に共に飽くなるべし、漁父、偏醒を忌む。」

(八二)旅泊窮(八三)清渭。長吟望(八四)濁涇。　旅泊、清渭を窮む、長吟、濁涇を望む。

(八五)羽書還似急。烽火未全停。　羽書還急なるに似たり。烽火未だ全く停らず。

(八六)師老貲(八七)殘寇。戎(八八)生及近(八九)坰。　師老いて殘寇に貲す、戎生じて近坰に及ぶ。

忠臣詞憤激。烈士涕飄零。　忠臣、詞憤激、烈士、涕飄零。

(九〇)上將盈邊(九一)鄙。元(九二)勳溢(九三)(九四)鼎銘。　上將、邊鄙に盈つ、元勳、鼎銘に溢る。

仰思調(九五)玉燭。誰定握(九六)青萍。」　仰いで思ふ玉燭調はむことを、誰か定めて青萍を握らむ。」

(九七)隴俗輕(九八)鸚鵡。原(九九)情類鶺鴒。　隴俗、鸚鵡を輕んず、原情、鶺鴒に類す。

秋風動(一〇〇)關塞。高(一〇一)臥想儀(一〇二)形。」　秋風、關塞に動く、高臥、儀形を想ふ。」

【字解】【一】勅日　勅命による任官の日次。【二】薛三騫　薛據は作者の友、上卷(一〇〇頁)を見よ。【三】司議郎　東宮の官屬にして侍從規諫し、啓奏を駁正し、東宮の記注を錄することを掌る。【四】畢四曜　畢曜は作者の友、上卷(五五九頁、五六三頁)を見よ。【五】監察　監察御史なり、百僚を分察し、州縣を巡按することを掌る。【六】二子　薛據・畢曜。【七】故　ふるき交り。【八】遷官　官職をうつされしこと。【九】索居　朋友とはなれさびしくくらしをること。【一〇】大雅　文章雅正の道。【一一】寥潤　さびしきさま。【一二】斯人　薛・畢をさす。【一三】典型　てほんとすべきかた。詩經に雖無老成人、尙有典型とみゆ。【一四】交期　交際契合のこと。【一五】潦倒　おちぶれる貌。【一六】村力　人物力量。【一七】爾　薛畢二人。【一八】精靈　人力以上のものあるをいふ。【一九】聲同日　聲は世間に名聲あること、このたびの任官をいふ。【二〇】諸生　仕官せざる多くの學者ども、暗に自己をさす。【二一】困一經　ひとつの經典を修學しつつそれがために困窮してをる。【二二】奚奥　室の西南隅を奥といひ、室の東南隅を奚といふ、ここは文章の奥ふかき道をたとへいふ。【二三】遷擢　うつしぬきんでられる。【二四】潤朝廷　朝廷の恩澤にうるほさるるをいふ。【二五】舊好　これまでのなかのよさ。【二六】併白　彼も我もともに白し。【二七】眼終青　眼青は魏の阮籍が

故事、籍は佳客を見れば青眼(くろめ)をなし、俗客を見れば白眼(にらみめ)をなしたりといふ。【二八】皆　彼我をこめていふ。【二九】同憂　同とは彼我をこめていふ。【三〇】歳不寧　安らかなる歳とては無し。【三一】栖遑　栖栖遑遑の略、せはしき貌。【三二】分牛萩　分とはわけてくらふこと、牛萩とは野菜に牛分萩(まめ)をまぜること、貧しくして食物に乏しき故なり。【三三】浩蕩　とりとめなき貌。【三四】遜流莽　莽はうきくさ、漂泊生活をいふ。【三五】俗態　世俗の人情のさま。【三六】猜忌　それみいむ、これは李林甫が賢人を退くるをさすといへり。【三七】妖氛　不吉の惡氣、安祿山の兵亂をさす。【三八】杳冥　とほくくらし。【三九】獨悔　作者自(みづか)らはづる。【四〇】投漢閣　漢の揚雄が故事、雄は甄豐といふ者の連累にて罪せられんとす、偶ま書を天祿閣の上に校す、獄吏の至るを見て閣上より身を投じほとんど死せんとす、これは作者賊軍の中に陷りしことをさしていふ。【四一】倶議　薛・畢等とともに相談する。【四二】哭秦庭　吳の軍が楚の都の郢に攻めこみしとき楚の忠臣に申包胥といふ者あり、秦の國にゆきて援兵をこひ七日のあひだ哭して遂にその援を得たり、これは或は援兵を回紇に求むるをさすとし、或は兵を諸節度使より徵(め)すことをさすとす、孰れにても通じうべし。【四三】還蜀紙無補　作者自己につきていふ、還蜀は漢の司馬相如が故事、相如は蜀の人、志を立てて鄕を出で富貴を得て還る、これ蓋し作者拾遺の官を授けられて羌村に歸りし當時の事をさしていへり、紙無補とは何等朝廷の事に補益なかりしをいふ。【四四】囚梁亦固扃　囚梁は漢の鄒陽が故事、陽は梁の孝王の爲めに獄に下され、獄中より上書す、此句薛・畢の二人がかつて賊軍のため洛陽に拘禁されしことを指すものならん、事實は不明なり。【四五】扃　戶のくわんぬきなり、戶をしめてそとへださぬ樣にすること。【四六】華夷　中土の人とえびす。【四七】一擬膻　專一になまくさし。【四八】帝力　肅宗皇帝の力。【四九】三統　天地人の三統、周・殷・夏の三曆をいふ、古來曆數は天子の掌る所とせらる。【五〇】天威　天子の威光。【五一】四溟　四海。【五二】舊都　長安。【五三】望幸　行幸をのぞむ、これは乾元元年十月に肅宗長安にかへりしことをさす。【五四】淸廟　唐の祖先の廟をさす。【五五】黨　餘黨にすること。【五六】惟馨　祭供をいふ、書經に黍稷非馨、明德惟馨とみゆ、祭に供ふる「きび」・「あは」よりも、その祭りをする人の明德がかんばしといふなり。【五七】雜種　安慶緖・史思明等をいふ。【五八】高桑　とりでを高くきづいてまもる。【五九】長驅　官軍がながみちをかけること。【六〇】其建瓴　「漢書」の高帝紀に高き地形に居て ひくき諸侯の地にむかつて兵を下すことをたとへて若居高屋之上建瓴水といへり、瓴水とは屋上の瓦溝の水をいふ、之を建つれば水は急流をなして下におつべし。【六一】焚香　天子を迎ふる用意なり。【六二】淑景殿　長安の西內(西の御所)安仁殿の後(北)に採絲院あり、院の西に淑景殿ありと。【六三】漲水　池水のみなぎる樣にすること。一說に漲は灑の誤字かといへり、灑水ならば水をそそぎてほこりをしづめることにて天子を迎ふる用意をなすなり。【六四】望雲亭　上卷(九三頁)にみゆ、この亭も西內にありといふ。【六五】法駕　法式によれる天子の車駕。【六六】羣公　すぐれし地位の諸官。【六七】會星　あつまれるほし、多きをいふ。【六八】宮臣　これは今の東宮の官屬たる司議郎薛璩を現官によりてさす、還駕の當時宮臣たるをいふにあらず。【六九】仍點染　點染とは賊塵にけがれしとみなされしをいふ、「囚梁」の句と同事實をさす。【七〇】柱史　柱下史の略、御史の官をいひ、畢曜をさす、これも現官によりて畢曜をさすものにて還駕の當時御史たりしをいふにはあらず、誤解する勿れ。【七一】零丁　おちぶれるさま。【七二】官忝一句　作者自己をいふ、趨は趨走すること、棲鳳は閣の名、含元殿の南に龍尾道をはさんで左右に棲鳳閣・翔鸞閣あり、これは作者拾遺の官たりしことをいふ。【七三】朝回一句　薛・畢二子について歎ずるなり、朝回は作者朝廷より退きかへること、薬餐は晉の車胤家貧しく燈火なきゆゑ夏は螢をあつめてそのあかりにより書を讀みたりとの事に本づく、薛・畢重く用ひられずなほ不遇の地にあるをいふ。【七四】喚人　他の人人をよびおこす。【七五】腰裊　日に千里をゆく神馬、薛・畢をたとへていふ。【七六】不嫁　よめいりせぬ。【七七】婷婷　女子のうつくしき貌、薛・畢を美人にたとへ、美しくありながらよめいり口なきを惜む。【七八】掘獄二句　此の二句現在はじめて二子任官されて材力あらはれしことをのぶ、掘獄埋劍は晉の雷煥が故事、吳の未だ亡びざりしときつれに紫氣ありて牛斗の間に見ゆ、張華、これを雷煥(孔章)に問ふ、煥いふ、寶物の精、豫章の豐城(縣の名)にありと、遂に煥を以て豐城の令となす、煥縣に至り獄を掘り二劍を得たり、その夕、牛斗の氣復た見えず。煥乃ち其一を留め、他の一を張華に進む。後ち華害に遇ふ、此の劍飛びて襄城の水中に入る、煥死なんとするや其の子を戒めつれに劍を以て自(みづか)ら隨へしむ、後ち其の子建安の從事となりて淺瀨を經たるに、劍忽ち腰間より躍り出づ、二龍の相蹯つて逝くを見るといふ、二子のあらはるること獄中の埋劍のほりいだされしが如し。【七九】提刀見發硎　「莊子」(養生主)に庖丁が十九年の間に數千の牛を解くにその刀刃若新發於硎とあり、硎は礪石(といし)なり、提刀の二字も同篇にみゆ、二子をとぎたての刀にたと

へていふ。【八〇】侏儒應共飽　二子の身のうへを想像していふ、「漢書」東方朔傳に侏儒飽欲レ死、臣朔飢欲レ死とみゆ、君主の玩弄物たる侏儒(一寸法師)は食物にたべあきて死なんとするに自己は飢ゑて死なんとすといふなり、此句二子をいふ、二子用ひらるゝと雖もわづかに侏儒の輩と共に飽食するならん。【八一】漁父忌偏醒　此句自己をいふ、漁父の事は屈原の「漁父辭」に本づく、屈原、衆人皆醉吾獨醒といへるに漁父は何ぞそのかすをくらひそのしるをすゝらざるといへり、偏醒は獨醒なり、作者自己直諫して容れられざるを偏醒といへり。【八二】旅泊二句　自己をいふ。【八三】窮涇渭　渭水の源をきはむ、秦州にあるをいふ。【八四】望濁涇　涇水にごりて長安に向つて流る、これ長安の方をのぞむをいふ。【八五】羽書　危急を報じ兵を徴すための檄文、長さ一尺二寸の木簡に鳥の羽を附す。【八六】師老　師は官軍、老とは駐屯日久しきをいふ。【八七】賚殘寇　賚とは相手にもとでを與へ力をそへるをいふ、殘寇は賊軍ののこりをいふ。【八八】戎生　いくさごとおこる。【八九】近坰　都の近郊をいふ。【九〇】上將　將軍の上級なるもの。【九一】邊鄙　かたよりし地方。【九二】元勳　大なるいさをし。【九三】溢　あふれる、ありあまるほど書きしるされる。【九四】鼎銘　かなへにほりつける銘文。【九五】調玉燭　「爾雅」に四時調、謂二之玉燭一とみゆ、陰陽の調和して氣候宜しきを得るをいふ。【九六】握青萍　青萍は劍の名、これ必ずしも實物の劍をさゝず、材能の利器をたとへていふ。【九七】隴俗　隴西地方の習俗、秦州をさすなり。【九八】輕鸚鵡　鸚鵡とは鸚鵡の賦を作る人才をさす、魏の禰衡といふもの鸚鵡賦を作れり、自己を比す。【九九】原情類鶺鴒　詩經(常棣篇)に鶺鴒在レ原、兄弟急難とみゆ、せきれいは水鳥なるに原野にありつれの居どころを失へば飛鳴してその同じたぐひを求む、その如く人その兄弟に對しては急難の場合には力をだして相援けあふ、原情とは在レ原の情をいふ、此句、作者の二子に於けるその情兄弟に於けるがごときものあるをいふ、但し彼よりたすけを求めんと欲するをいふなり。【一〇〇】噓　吹きいだしたるをいふ。【一〇一】高臥　枕をたかくしてふす。【一〇二】儀形　二子のすがたかたち。

【題義】作者秦州にて任官の目次を見たるに、薛據は司議郎を授けられ、畢曜は監察御史に除せられしことを知れり。しかるにこの二人は作者と舊交あるものなるを以て遠方ながら彼等が轉任せしを喜び、また兼ねて自己のさびしき生活をなしをることをのべ、つひに凡そ三十韻六十句のこの篇をなしたり。

【詩意】文章の正道はどうしてかくもさびしくなつたものか、それでもまだ吾が薛・畢二子の如きものあるために古來の法則とすべき型が存在してゐるといふべきものだ。諸君と交際はあるとはいへ自分はいまおちぶれてゐる、而して諸君はその材力に於て人力以上のものをもつてをられる。だから自分如きは諸生として一經に困窮してをるが、二子は同日に除任せられて聲名がなりひびく。二子は文章に於ては奧そこを開き、朝廷の恩澤にうるほうて他人よりもぬきんでて官を遷された。むかしながらのよしみを何に由つてのべることができようか、どうにかしてもつと諸君の近作でもあるなら聽きたいとおもふのだ。別れてからお互に頭は白くなつたが、面會がかなふなら以前にかはらず青眼を以て相對することであらう。』昔はお互に非常に貧乏であり、天下の安らかな歲のないのをともども心配した。さうしてせはしく奔走しながら豆の半分まざつた食物をわけてくらひ、とりとめもなく浮草のまにまに漂泊生活をした。そのうち世俗人情の常態として奸人にはそねみ忌まれ、兵亂の惡氣が忽ちはるかにとほく起る樣になつた。自分は漢の揚雄が閣上から身を投げて生命をたすからうとした樣に賊軍中を逃げまはつたことをはづかしくおもふが、どうにかして官軍のために援兵を得ようとしてもろともに相談して楚の申包胥が秦庭に哭した樣なことをしようとした。自分は司馬相如が官を得て蜀にかへつた樣に故鄕にもどつたが朝廷の事に對しては何等の補益とてはなく、諸君も漢の鄒陽が梁

に囚はれた樣に賊軍のためにかたく一室にとぢこめられた。かかる際に本土人とえびすどもはたがひにまじりあひ、天地の間全くなまくさ味のみとなつてしまつた。』このときわが肅宗皇帝は三統の歷數を手中にお收めになり、御威光は四海をおすべになることになり、長安の舊都では俄に行幸をおまちし、宗廟には祭祀のお供へ物を嚴肅にせられ、混血の夷種どもがいくらとりでを高くして防禦しても、官軍が長驅して攻めくだす勢は屋根のうへのとひの水をまつすぐにおとすよりもまだひどく、都の淑景殿では香をたき、望雲亭では池水をみなぎらせて還幸をお迎へする準備をした。かくの如くして正式の御行列がはじめて都へおかへりになつたときは、もろもろの高官たちはあだかもあつまれる星のやうに多くあつた。そのうちで今の東宮の臣たる薛君は嘗て賊軍にとらはれてその垢に染められ汚されてゐるものとみなされて榮達せず、今の御史たる畢君もそのときはちやうどおちぶれてをつた。自分はそのとき官は拾遺を忝くして棲鳳閣に趨走することができたが、朝廷からもどつていつも諸君が書生の頃の樣に螢を聚めて本を讀んでゐる如き困窮な境遇について歎息した。だから他人を喚起して千里の神馬とも稱すべき諸君を看せしめようとし、また諸君が娉婷たる美貌のもちぬしでありながら他へ嫁いらずにゐることを惜しくおもうてゐた。今や諸君ははじめてとりたてて官に任せられたから、あだかもかの豐城の獄を掘つて埋められてゐた劍が知らるるに至つたごとく、また刀を提げて見ればそれはといしからみがきたてのところをとりだしたかのごときものがあるのである。しかし諸君としてはまだ用ひられ方が十分ではない、定めし諸君は侏儒の徒とともに飽食してゐるぐらゐのことであらう。自分は依然として獨り醒めてをるので、昔の屈原の如く漁父から忌まれてをる。』さうして自分はたびぢに漂泊しつつ淸き渭水の源までもきはめてここの秦州へながれて來、長吟しながら諸君のゐる濁れる涇水のある長安の方をながめやる。今や兵亂のため徵兵の檄文は急である樣であり、危難を報ずるのろし火もまだすつかりやむにはいたらない。官軍は駐屯久しきにわたつて力がよわり賊の殘部に力をそへてやる結果となり、都の近郊にまでいくさごとがおこつてゐる。それで忠臣は憤激の辭をいだし、烈士は慷慨の淚をおとす。邊鄙の地には上將がたくさんをり、その大功は鼎の銘文にあふれるほどほめたたへられてゐるにはゐるが、自分は天を仰いでどうか四時陰陽調和して天下泰平である樣にとかんがへてをる、たれが材能の利器をにぎつて亂ををさめてくれるのであらうか。』自分のゐる隴西の習俗では鸚鵡の賦を作る禰衡の才あるものでもそれを輕蔑してゐる、古人は鶺鴒は原に在るときたがひに難に赴いてたすけるというてをるが、我我お互の情はそれに類してゐるとおもふ。このとりでにも秋風が動きそめた、それで自分は高臥しつつはるかに諸君のすがたを想望してゐるのである。』

寄(一)彭州(二)高三十五使君適・(三)虢州(四)岑二十七長史參三十韻　【原注】時患瘧病。

彭州の高三十五使君適・虢州の岑二十七長史參に寄す。三十韻

【原注】時に瘧病を患ふ。

(五)故人(六)何寂寞。今我獨(七)淒涼。　故人、何ぞ寂寞たる、今我、獨り淒涼。

老去(八)才雖盡。秋來興甚長。　老い去つて才盡くと雖も、秋來、興甚だ長し。

(九)物情尤可見。(一〇)詞客未能忘。　物情、尤も見る可し、詞客、未だ忘るる能はず。

海內(一一)知名士。(一二)雲端各(一三)異方。　海內、知名の士、雲端、各異方。

高岑殊(一四)緩步。(一五)沈鮑得(一六)同行。　高岑、殊に緩步す、沈鮑、同行を得。

(一七)意愜關飛動。(一八)篇終(一九)接混茫。　意愜ひて飛動に關し、篇終つて混茫たるに接す。

(二〇)擧天悲(二一)富駱。近代惜(二二)盧王。　擧天富駱を悲む、近代、盧王を惜む。

(二三)似爾官仍貴。(二四)前賢命可傷。　爾が似きは官仍貴し、前賢、命、傷む可し。

(二五)諸侯非(二六)棄擲。(二七)半刺已(二八)翺翔。　諸侯は棄擲せらるに非ず、半刺、已に翺翔す。

(二九)詩好幾時見。(三〇)書成無(三一)信將。』　詩好きも幾時か見む、書成つて信の將ゐるなし。』

(三二)男兒(三三)行處是。(三四)客子(三五)鬪身強。　男兒、行く處是なり、客子、身強を鬪はす。

(三六)羇旅推(三七)賢聖。(三八)沈綿(三九)抵咎殃。　羇旅、賢聖を推す、沈綿、咎殃に抵る。

三年猶(四〇)瘧疾。(四一)一鬼不(四二)銷亡。　三年、猶瘧疾、一鬼、銷亡せず。

(四三)隔日(四四)搜脂髓。(四五)增寒(四六)抱雪霜。　隔日、脂髓を搜る、增寒、雪霜を抱く。

(四七)徒然(四八)潛隙地。(四九)有靦屢(五〇)鮮粧。　徒然、隙地に潛む、有靦、屢鮮粧。

何太(五一)龍鍾極。於今(五二)出處妨。　何ぞ太だ龍鍾極まる、今に於て出處妨げらる。

(五三)無錢居帝里。(五四)盡室在(五五)邊疆。　錢の帝里に居るべき無く、室を盡くして邊疆に在り。

(五六)劉表雖遺恨。龐公至死藏。　劉表、恨を遺すと雖も、龐公、死に至るも藏す。

(五七)心微(五八)傍魚鳥。肉瘦怯(五九)豺狼。　心微にして魚鳥に傍ひ、肉瘦せて豺狼を怯る。

(六〇)隴草蕭蕭白。(六一)洮雲片片黃。』　隴草、蕭蕭として白く、洮雲、片片黃なり。』

(六二)彭門(六三)劍閣外。(六四)虢略(六五)鼎湖旁。　彭門、劍閣の外、虢略、鼎湖の旁。

(六六)荆玉簪頭冷。(六七)巴牋染(六八)輸光。　荆玉、頭に簪して冷に、巴牋、輸を染めて光る。

(六九)烏麻蒸(七〇)續曬。丹橘(七一)露應(七二)嘗。　烏麻、蒸して曬を續ぎ、丹橘、露に應に嘗むべし。
(七三)豈異(七四)神仙宅。俱兼(七五)山(七六)水鄉。　豈に神仙の宅に異ならむや、俱に兼ぬ山水の鄉。
(七七)竹齋(七八)燒藥竈。花(七九)嶼讀書(八〇)床。　竹齋、燒藥の竈、花嶼、讀書の床。
更得(八一)清新否。遙知(八二)對屬忙。』　更に清新を得るや否や、遙に知る對屬の忙しきを。』
(八三)舊官寧改(八四)漢。淳俗本歸(八五)唐。　舊官寧ぞ漢を改めむや、淳俗本唐に歸す。
濟世宜(八六)公等。安貧亦士常。　世を濟ふは公等に宜し、貧に安んずる亦士の常なり。
(八七)蚩尤終戮辱。胡(八八)羯漫猖(八九)狂。　蚩尤、終に戮辱せられむ、胡羯、漫に猖狂なり。
(九〇)會待妖(九一)氛靜。論(九二)文暫裹(九三)糧。』　會ず妖氛の靜なるを待ち、文を論ずるに暫く糧を裹まむ。』

【字解】【一】彭州　四川省の成都府彭縣。【二】高三十五使君適　使君は刺史の尊稱、高適は作者の親友已に屢〻見ゆ、適は蓋し乾元元年五月に彭州の刺史となる。【三】虢州　虢州は河南省陝州の靈寶縣なり。【四】岑二十七長史參　岑參は作者の親友、已に見ゆ、參は乾元二年四月に虢州の長史となる。【五】故人　舊友。【六】何寂寞　寂寞は我と音信の稀なるをいふ、仇注に何曾寂寞乎といひ反語と解し、官境の寂寞ならざる義となせるは余之を取らず。【七】淒涼　ものがなしきさま。【八】才　文才をいふ。【九】物情　人情勢力あるものにつき勢力なきものを去る輕薄のさまをいふ。【一〇】詞客　文辭をよくする人をいふ、高適岑參をさす。【一一】知名士　廣く文學の士をさす。【一二】雲端　天のはしをいふ。【一三】異方　方位をことにする。【一四】緩步　文場に於てゆつたりとあゆむ。【一五】沈鮑　宋の鮑照、梁の沈約、並に著名の文學者なり。【一六】同行　行は行列。【一七】意愜關飛動　意愜とは作者その意のままになりしときをいふ、飛動は文章の勢をいふ、關とはそれにあづかるをいふ。【一八】寫移　一篇できたはること。【一九】接混茫　接は接續すること、混茫は元氣のさま。【二〇】擧天　天下みな。【二一】富駱　富は富嘉謨、武功の人、適士に舉げらる、その文章、經術に本く、人爭うて之を慕ふ、駱は駱賓王、義烏の人、唐初四傑の一人なり。【二二】盧王　盧は盧照鄰、范陽の人、王は王勃、龍門の人、並に四傑中の人、富駱盧王みな初唐時代の名家。【二三】似爾　似は如の義、爾は高岑をさす。【二四】前賢　富駱等四人。【二五】諸侯　刺史の官をさす、刺史は州郡の長官にしてむかしの諸侯にあたる、これは高適についていふ。【二六】棄擲　天子からうちすておかれる。【二七】半刺　長史の官をさす、刺史の屬官には別駕、長史、司馬、あり、通じて之を上佐といふ、長史の任は刺史の半に居るといふ處より之を半刺といふ、これは岑參についていふ。【二八】翻翔　鳥の空に飛ぶごとく出世したことをいふ。【二九】詩　高岑の詩をいふ。【三〇】書　高岑が作者へ寄せる手紙をいふ。【三一】信將　信は信使にて手紙を持參する飛脚をいふ、將はもつてくることをいふ。【三二】男兒四句　この四句は連關して見るべし、男兒の句は羇旅の句に接し、客子の句は沈綿の句に接す。【三三】行處是　此語は不完全句なり、蓋し「是」の字の下に「羇旅」の如き語あるものと假定して見るべし、男兒たるもの生れおつるより四方の志を抱き、その行くところ皆是れ旅途ならざるは無きの意。【三四】客子　たびびと、旅途に在る者をさす。【三五】鬪身强　身體の强健を競ふべきものなるをいふ。【三六】羇旅　たびになること。【三七】賢聖　孔子墨子の徒をさす。【三八】沈綿　病にしづむこと。【三九】抵咎殃　抵は至なり、咎殃は「とが」、「わざはひ」、ここは病をさす。【四〇】瘧疾　おこり。【四一】一鬼　瘧鬼をいふ。【四二】銷亡　きえてなくなる。【四三】隔日　一日おき。【四四】搜脂髓　これは鬼が人體のあぶら、ずゐ、をさぐるをいふ。【四五】增寒　さむけをます。【四六】抱雪霜　これは人がかく感ずるをいふ。【四七】徒然　いたづらに。【四八】潛隙地　瘧を避くる方法なりといへり、だれも居らぬあき地にこつそりかくれる。【四九】有靦　面目といふ代りにこの二字を古典より切り取りて用ふ。詩經に「爲鬼爲蜮、有靦面目」とみゆ、靦は面目のみにくきさま、これは作者自己の面目のさまをいふ、或は云ふ、靦は慙づるさまにて上の徒然と對し、鮮粧するも効なきゆゑ之をはづるをいふと。【五〇】鮮粧　あざやかによそほふ、これ亦瘧を避くる方法にして顏面に畫きて、その容貌を易ふといへり。【五一】龍鍾　おちぶれる、しほれる、さまなり。【五二】出處妨　出仕・退處・ともに

さしつかへる。【五三】無錢居帝里　錢の下に「可」の字をはぶきていへり、帝里は都、長安をいふ。【五四】畫室　一家全體。【五五】遠徼　くにさかへ、秦州をさす。【五六】劉表、龐公　七卷遣興五首の第二首を見よ。【五七】心微　微は衰微をいふ。【五八】傍　ちかく居り親しむをいふ。【五九】豺狼　賓物と盜賊のたとへと倂用す。【六〇】隴草　隴地のくさ、秦州の草をいふ。【六一】洮雲　洮は洮水、秦州と近し。【六二】彭門　彭縣の西北三十里にある山の名、この句高についていふ。【六三】劍閣　四川省保寧府劍州の北にある山の名。【六四】虢略　左傳に東盡虢略とみえ、注に從河內而東盡虢界也とあり、これ虢略を地名とせざるなり、後漢郡國志に、陸渾西有虢略地とあるは地名とせるなり、杜詩之に本くか。陸渾は嵩縣の東北に在れば、地名の虢略にては地理にあはず作者はただ虢の地の意義として用ひしならん、再案、李兆洛は虢略の地は、靈寶縣南四十里にありとせり。此句は岑についていふ。

【六五】鼎湖　河南省陝州の閿鄉縣にある黃帝鑄鼎の處をいふ、閿鄉縣南三十五里に荊山あり、「史記」封禪書に黃帝採首山之銅、鑄鼎於荊山下、故名其處曰鼎湖とあるはその處なりとつたふ。古代或は山下に湖ありしならんか。これにより閿鄉縣は漢以來湖縣湖城縣等と稱せられしことあり。【六六】荊玉　「寰宇記」によれば荊山には美玉をいだすといへり、冠の簪のかざりに用ふと見えたり、この句岑をいふ。【六七】巴牋　巴は國名、蜀の東南、今の重慶府は周代の巴國なり、蜀の地方にてつくる紙を巴牋といへり、此句は高をいふ。【六八】翰　ふで。【六九】烏麻　くろいごま、虢州についていふ。【七〇】頻曝　しばしばさらすこと、ごまはたびたびむしてはさらすがよしといへり。【七一】丹橘　あかいみかん、此句は高の地についていふ。【七二】露　つゆの降るときをいふ。【七三】豈異　以下の六句は高岑を倂せていふ。【七四】神仙宅　宅は住む所をいふ。【七五】俱　高岑の居る兩地をいふ。【七六】山水鄉　佳山水のある地。【七七】竹齋　竹林にある書齋。【七八】燒藥爐　丹藥をにる火をたくかまど。【七九】花嶼　花のさきたる池中の小じま。【八〇】讀書床　本をよむだい。【八一】淸新　詩趣の淸らかにあたらしきこと。【八二】對屬　對は字句を相對してならべつくること、屬は文字をつづりあはすこと、唐人の詩、對句を重んずるによりかくいふ。【八三】舊官　もとからの官、刺史をさす、漢の武帝の元封五年に部の刺史十三人を置く、これ刺史の起原なり、此句は高をさす。【八四】淳俗本歸唐　此句は岑をさす、淳俗は淳良の風俗、唐は帝堯及び唐叔虞の唐をいふ、唐は今山西省平陽府翼城縣西にありし地、周の成王、叔虞を其地に封ず、後ち曲沃に遷りて晉と稱す、詩經には晉の詩のことを唐風と稱し、序(卽ち晉)には堯の遺風ありといへり。虢州はむかし晉の領地なりしを以て、さかのぼりて之を唐といへり。【八五】歸　そこへおちつくといふこと。【八六】公幹　高岑をさす。【八七】蚩尤　黃帝の時のわるもの、今以て賊軍に比す。【八八】胡羯　夷狄、安祿山・史思明等の黨をいふ。【八九】猖狂　みだらなる貌。【九〇】會　俗語「必す」【九一】妖氛　兵亂の惡氣。【九二】論文　文事を硏論する。【九三】裹糧　食物をふくろにつつむ、旅行の用意なり。

【題義】彭州の刺史たる高適と、虢州の長史たる岑參とに寄せた詩。作者はこの時瘧疾にかかりゐたり。乾元二年秋の作。

【詩意】わが舊友はなぜにさつぱりたよりをしてくれぬか。自分はいま獨りものがなしき思ひをしてをる。自分は年が老いかかつて文才は盡きてしまつたが、秋からかけて秋に對する興味はずゐぶんあるのである。世間の人情の輕薄さはこの際尤もうかがはれるが、文辭を善くするものは今に忘れられぬ。今や海內の知名の人人は、雲の端に於てそれぞれ方位を異にしてゐる。そのうちで高適と岑參とは殊に文場にゆつたりとあゆみ、むかしの鮑照や沈約とも同列たることができる。その意のままに作りなしたときはその作品は飛動の勢をもち、一篇成就しをへたときはそれを見るとあだかも宇宙の元氣に接續してゐるかの看がある。近代滿天下のものは富嘉謨・駱賓王・盧照鄰・王勃についてその不遇を悲み惜んでをるが、彼等にくらべると諸君はやはりその官は貴いのである、彼等前代の賢人の運命はきのどくなものである。高君は刺史であるから諸侯の身分で決して天子からうちすてられてゐ

るわけではなく、岑君は長史であるから刺史の半役ともいふべくすでに羽翼をなして天がけりつつあるものといへる。諸君はさだめしよい詩があるであらうがいつそれが見られよう、諸君は手紙をかいてくれるのであらうがそれをもつて來てくれる使は無い。』男兒たるものは到るところこれ旅路の身のうへであるが、たび人としてはむかしから聖人賢人さへもをらるるのである。また旅途に在るものは身體の强健を競はねばならぬものであるが、不幸にして自分はとがわざはひにぶつつかつて重き病にしづんでゐる。三年もたつのにまだ瘧疾であり、瘧の鬼がどうしてもきえてなくならぬ。その鬼めは一日おきに自分のからだのあぶらやずゐをさぐりだしてなめでもする樣であり、自分はさむけがましてがたがたふるへて雪か霜をだいてゐるかの感じがする。人のゐない處にかくれてゐると、なほるといふからやつてみるがむだである。また人のいふとほりこのみにくいかほにたびたび色彩をほどこしてもみるが効能はない。なんで自分はおちぶれの極點までなつたのであらう。今では出でて仕へることもならず、退いてじつとしてゐることもならぬ。都に生活してをられるほどの錢はなく、一家こぞつてかかるくにざかひへ來てゐるのである。劉表ともいふべき州の長官はのこりをしくおもふであらうが、龐德公を以て任ずる自分は決して出でて仕へず死ぬまでも藏れてゐるつもりである。壯心すでに衰へたから魚鳥を友としてそれにちかづき、肉のやせたからだであるから豺狼の害を受けはせぬかとおびえてゐる。ここでは秋の草は蕭蕭として枯れて白く、雲の色は一ひら一ひら黃ばんだ色を

呈してきた。諸君のゐるところはどうであらうか。』かんがへてみるに、高君の居る所の彭門は劍閣の外にあり、岑君の居る虢略（虢の地の義）は鼎湖のかたはらにある。岑君は頭上に簪するとき荊山の玉冷かなるべく、高君は筆を染むるとき蜀地の紙上光あることであらう。岑君の地では黑胡麻を蒸してたびたびさらしてたべられるだらう。高君の地ではあかいみかんが露のおりる節にうまく熟してそれをたべられることであらう。兩君の居るところは神仙の住む所とちがひはない、その地はともに佳山水の場所を兼ね有してゐる。竹林の書齋には丹藥を煮るかまどをすゑ、花さく小島には讀書の床をよこたへてをらるるであらう。以前にまして清新な詩を得られたかどうか。自分ははるかに諸君が對句をつくるに忙しいことだらうと想像してをる。』高君は漢代以後改易なき刺史の官を 辱 くしてをられる。岑君は本來聖賢の居た唐國の官となつてをられる、淳良の俗は本來當然そこにおこるべきである。時世をすくふの一事は諸君にふさはしきことである、貧賤に安んじてをることは士たるものの常であつて自分はそれである。いま胡羯の夷種は漫にみだらなふるまひをしてゐるが、蚩尤にも比すべき彼等は結局戮辱せらるるであらう。自分はかならず兵亂の惡氣が靜になるのを待つて、諸君と文辭を細論するために、しばらく食糧持參ででかけるであらう。』

寄岳州賈司馬六丈・巴州嚴八使君・兩閣老五十韻

岳州の賈司馬六丈・巴州の嚴八使君・兩閣老に寄す。五十韻

衡岳啼猿裏。巴州鳥道邊。　衡岳は啼猿の裏、巴州は鳥道の邊。

故人俱不利。謫宦兩悠然。　故人俱に利あらず、謫宦兩ながら悠然たり。

開闢乾坤正。榮枯雨露偏。　開闢、乾坤正しく、榮枯、雨露偏なり。

長沙才子遠。釣瀨客星懸。　長沙、才子遠く、釣瀨、客星懸る。

憶昨趨行殿。殷憂捧御筵。　憶ふ昨、行殿に趨し、殷憂、御筵を捧げしを。

討胡愁李廣。奉使待張騫。　討胡、李廣愁へ、奉使、張騫を待つ。

無復雲臺仗。虛修水戰船。　復た雲臺の仗なし、虛しく修む水戰の船。

蒼茫城七十。流落劍三千。　蒼茫、城七十、流落、劍三千。

畫角吹秦晉。旄頭俯澗瀍。　畫角、秦晉に吹かる、旄頭、澗瀍に俯す。

小儒輕董卓。有識笑苻堅。　小儒、董卓を輕んず、有識、苻堅を笑ふ。

浪作禽塡海。那將血射天。　浪りに禽の海を塡するを作す、那ぞ血を將て天を射るや。

萬方思助順。一鼓氣無前。　萬方、助順を思ふ、一鼓、氣、前を無みす。

陰散陳倉北。晴曛太白巓。　陰は散ず陳倉の北、晴は曛ず太白の巓。

亂麻屍積衞。破竹勢臨燕。　亂麻、屍、衞に積み、破竹、勢、燕に臨む。

法駕還雙闕。王師下八川。　法駕、雙闕に還り、王師、八川に下る。

此時霑奉引。佳氣拂周旋。　此の時、奉引に霑ふ、佳氣、拂うて周旋す。

貔虎開金甲。麒麟受玉鞭。　貔虎、金甲開き、麒麟、玉鞭を受く。

侍臣諳入仗。廐馬解登仙。　侍臣、入仗を諳んじ、廐馬、登仙を解す。

花動朱樓雪。城凝碧樹煙。　花は動く朱樓の雪、城には凝る碧樹の煙。

衣冠心慘愴。故老淚潺湲。　衣冠、心慘愴、故老、淚潺湲たり。

哭廟悲風急。朝正霽景鮮。　哭廟、悲風急に、朝正、霽景鮮なり。

月分梁漢米。春給水衡錢。　月に分つ梁漢の米、春には給す水衡の錢。

內蘂繁於纈。宮莎軟勝綿。　內蘂は纈よりも繁く、宮莎は軟くして綿に勝れり。

恩榮同拜手。出入最隨肩。　恩榮同じく拜手す、出入最も肩を隨ふ。

晩著華堂醉。寒重繡被眠。
轡齊兼秉燭。書枉滿懷牋。』
毎覺昇元輔。深期列大賢。
秉鈞方咫尺。鎩翮再聯翩。
禁掖朋從改。微班性命全。
青蒲甘受戮。白髮竟誰憐。
弟子貧原憲。諸生老伏虔。
師資謙未達。鄉黨敬何先。
舊好腸堪斷。新愁眼欲穿。
翠乾危棧竹。紅膩小湖蓮。
賈筆論孤憤。嚴詩賦幾篇。
定知深意苦。莫使衆人傳。
貝錦無停織。朱絲有斷絃。

晩には著す華堂の醉、寒には繡被を重ねて眠る。
轡齊しくして兼ねて燭を秉り、書は枉ぐ滿懷の牋。』
毎に覺ゆ元輔に昇らむことを、深く期す大賢に列せられむと。
秉鈞方に咫尺、鎩翮再び聯翩たり。
禁掖、朋從改まり、微班、性命全し。
青蒲甘んじて戮を受く、白髮竟に誰か憐まむ。
弟子、原憲貧しく、諸生、伏（服）虔老ゆ。
師資、謙して未だ達せずとす、鄉黨敬すること何ぞ先きにする。
舊好、腸、斷ゆるに堪へたり、新愁、眼、穿たれむと欲す。
翠は乾く危棧の竹、紅は膩なり小湖の蓮。
賈筆、孤憤を論ず、嚴詩、賦すること幾篇ぞ。
定めて知る深意の苦しめるを、衆人をして傳へしむること莫れ。
貝錦、停織無く、朱絲、斷絃あり。

浦鷗防碎首。霜鶻不空拳。
地僻昏炎瘴。山稠隘石泉。
且將棋度日。應用酒爲年。
典郡終微眇。治中實棄捐。
安排求傲吏。比興展歸田。
去去才難得。蒼蒼理又玄。』
古人稱逝矣。吾道卜終焉。
隴外翻投跡。漁陽復控弦。
笑爲妻子累。甘與歲時遷。
親故行稀少。兵戈動接連。
他鄉饒夢寐。失侶自迍邅。
多病加淹泊。長吟阻靜便。
如公盡雄俊。志在必騰騫。』

浦鷗、碎首を防ぐ、霜鶻、空拳あらず。
地僻にして炎瘴昏く、山稠くして石泉隘し。
且く棋を將て日を度るならむ、應に酒を用ひて年を爲するべし。
典郡、移に微眇なり、治中、實に棄捐せらる。
安排、傲吏を求め、比興、歸田を展ぶ。
去去、才、得難し、蒼蒼、理又玄なり。』
古人、逝矣を稱す、吾が道、終焉を卜す。
隴外、翻つて跡を投す、漁陽、復た弦を控く。
笑ふ、妻子に累せらるるを爲すを、甘んじて歲時と遷る。
親故行くゆく稀少なり、兵戈動もすれば接連す。
他鄉、夢寐饒し、侶を失して自ら迍邅なり。
多病、淹泊を加ふ、長吟、靜便を阻せらる。
公が如きは盡く雄俊なり、志、必ず騰騫（騫）するに在らむ。』

【字解】【一】岳州賈司馬六丈　岳州は今の湖南岳州府、賈司馬は賈至なり、作者至が汝州にゆくを送る詩あり、(卷六の五二九頁)乾元二年三月九節度の師相州に敗るるや至は汝州より襄鄧に奔れり、その罪によりて岳州の司馬に貶せられたり、六は排行、丈は年長者に對する敬稱、丈人の略語。【二】巴州嚴八使君　巴州は四川の重慶府、嚴八使君は嚴武なり、八は排行、使君は刺史の敬稱、武は房琯が事に坐せられ乾元元年六月に巴州の刺史に貶せられたり。【三】閣老　賈は中書舍人、嚴は給事中、之を敬して稱す(上卷卷五、四五四頁をみよ)。【四】衡岳　湖南省衡州府衡陽縣にある名山、名山をあげて賈至の居る岳州を表す。【五】啼猿　猿啼をいふ。【六】巴州　嚴武の居る地をいふ。【七】鳥道　鳥のかよふみち、山の高き處をさす、巴州は山地なればかくいふ。【八】故人　舊友賈嚴をさす。【九】不利　身に利福なきこと。【一〇】謫官　つみせられて官途に仕へてなる。【一一】兩　二人ともに。【一二】悠然　はるかなる貌、我とは遠くへだたりてなるをいふ。【一三】開闢乾坤正　肅宗が天下を整頓されしことをいふ、開闢はくらやみをひらくこと、正とは今まで賊亂ありて天地ゆがみまがれるをととのへてまつすぐになほすをいふ。【一四】榮枯雨露偏　偏はかたよる、一方へ多くかかるをいふ、榮枯は人の身のうへの二面をいふ、亂をさまりてのち人によりて榮えるものあり、枯れてしぼむものあり、榮ゆるは雨露を多くうくるに由り、枯るるは雨露をすこしくうくるに由る、賈嚴の二人が官を貶せらるるは枯の側(がは)なり。【一五】長沙才子遠　漢の賈誼が故事、賈誼は洛陽の才子と稱せられしが文帝に罪せられて遠く長沙へながされたり、今同姓の故事を借りて賈至がことをいふ。【一六】釣瀨客星懸　後漢の嚴光、字は子陵が故事、光は光武帝の友人にて一夜帝と共に臥し足を帝の腹に加ふ、太史、客星・帝座を犯すこと甚だ急なりと奏せりと、光は天上にては客星に當る人なり、光は帝に仕へず浙江嚴州府桐廬縣の富春山に隱れて釣を垂れたり、其の釣りし處を嚴陵瀨といふ、釣瀨は嚴陵瀨をさす、此句また同姓の故事を借りて嚴武がことをいふ。【一七】憶昨　作者往年のことを追憶す。【一八】趨行殿　趨は朝廷に於ける歩容なり、すこしくあゆみをはやめこまたにあるく、行殿は天子の御旅の御所、これは肅宗の鳳翔の行在所をさしていふ。【一九】殷憂　さかんなるうれひ。【二〇】捧御筵　むしろをささぐといふは拾遺の官となりおそば近く仕へしことをいふ。【二一】討胡愁李廣　胡は安祿山の賊軍をさす、李廣は漢の武帝の時の名將、今借りて哥舒翰にあつ、愁とは翰賊のために敗れしを以てしかいへり。【二二】奉使待張騫　張騫は漢の武帝の時使者となりて始て西域諸國との交通を開きし人、奉使とは使命を奉するをいふ、此句は唐より回紇吐蕃へ使者をやりて援兵を求めしをいふ。【二三】無復雲臺仗　雲臺は宮中の高き臺殿をさしていふ、仗は儀仗、儀式にあたりてたてならぶるほこはたの類、仗無しとは或は云ふ、行在所のことなれば昔日の盛なる仗なきをいふと、又或は云ふ、玄宗の出奔せしをいふと、今前說に從ふ。【二四】虛修水戰船　漢の武帝雲南地方を伐たんとして其地に滇池ありときき長安に昆明池をうがちて水戰を習はす、虛修とはむだに船の用意をなせしをいふ、此の句或は云ふ、長安に兵備をしながら賊軍に破られしをいふと、又或はいふ、戰船は吐蕃にそなふるなりと、今前說に從ふ。【二五】蒼茫　茫漠たる貌、ひろく見さかひのつかぬさま。【二六】城七十　戰國の時、燕が齊を攻めて七十餘城を取りしこと、借りて祿山が河北二十餘郡を陷れしことに充つ。【二七】流落　ちりぢりになること。【二八】劍三千　趙の文王、劍を喜び、劍客の來る者三千餘人ありしといふこと「莊子」に見ゆ、借りて官軍の武士にあつ、或は云ふ、此句「越絕書」に見えたる吳王闔閭が故事を用ふ、闔閭虎邱に葬らる、扁諸の劍三千あり、流落は散落の義、三千の劍が散落すとは長安の陵墓が發掘され土中の劍が人間にいづるをいふなりと。これも一說なれども今從はず。【二九】蚩角　彩色したるつのぶえ、官軍のふきならすもの。【三〇】秦晉　陝西省、山西省の地。【三一】旄頭　星の名、また昴といふ、妖星にして兵亂の象ありといふ。【三二】俯澗瀍　俯とは俯して下を照らすをいふ、澗瀍は洛陽附近にありて洛水にそそぐ二つの川の名。澗水は新安縣の南白石山より出で東南流して洛に入り、瀍水は穀城縣の北山より出で東して偃師縣を過ぎて洛に入る。【三三】小儒　作者自らいふ。【三四】董卓　後漢末長安に入りて暴行をなせし者、卓のち呂布に殺さる。【三五】有識　識見あるもの、作者暗に自ら比す。【三六】苻堅　東晉の時長安地方に據りし夷狄、堅はのちに姚萇に殺さる、董卓・苻堅は安祿山・史思明に比す。【三七】浪作　みだりになす、作者謙遜してかくいふ。【三八】銜塡海　赤帝の女、東海に溺れて死す、化して鳥となる、精衛と名づく、この鳥西山の木石を取りて海をうづめんとす、事は「山海經」に見ゆ、蓋し鳥の意は海をうづむることによりて自己を溺らしたるものを絕滅せんとするなり、此句は作者賊軍を絕滅せんとの念を抱きしかもその實效なきをいふ。【三九】那將血射天　那は「何ぞ」なり、とがむる言葉なり、將血は「血囊をもて」の義、むかし殷の天子に帝乙といふものあり、偶人(にんぎやう)をつくりて天神といひ、之と博し(かけごと)天神に代りて之を爲す、天神勝たざれば革の囊に血を盛り仰いで之を射、之を天を射ると稱せしといふ、事は「史記」殷本紀に見ゆ、此句は賊軍が無法にも唐の天子に向て弓をひくこと

をあてていふ。【四〇】萬方 諸地方の人々。【四一】助順 順は義理にしたがふもの、即ち官軍をさす、賊軍は逆なり。【四二】一鼓氣無前 「左傳」に夫戰勇氣也 一鼓作ㇾ氣 とみゆ、一鼓とはひとたび進軍の太鼓をうちならすこと、氣は勇氣、無前は眼中に敵を無視すること。【四三】陰散 陰は陰氣。【四四】陳倉北 陳倉は陝西鳳翔府寶雞縣の古名、陳倉の北とは鳳翔の地方をさす。【四五】晴曛 太陽の晴れたる光りのにほふをいふ。【四六】太白 山の名、鳳翔府郿縣に屬す、武功縣の南にあたる、鳳翔近地の名山をあぐ。【四七】亂麻 多きさま。【四八】屍積衞 屍は賊軍のしかばね、衞は衞州、乾元元年郭子儀兵を引いて河をわたり、東して獲嘉に至り賊將安太清を破り、更に衞州を圍み、衞州に來援せる賊將安慶緒が軍七萬を破る。【四九】破竹勢 洗兵行（上卷卷六、六三一頁）を見よ、官軍の猛勢をいふ。【五〇】燕 祿山の根據地范陽地方をさす、むかしの燕國の地なり。【五一】法駕 天子の正式のおのりもの、肅宗の長安への還幸は至德二載十二月にあり。【五二】雙闕 宮城正門の左右の小門。【五三】王師 官軍。【五四】下八川 下とは八川の流る地方へ降りてきたことをいふ、行在所は鳳翔にありてその地形高し、故に「下る」といふ、八川は關中の八つの川、（上卷卷五、五〇六頁を見よ）。【五五】霑 君のめぐみの露にうるほふ。【五六】奉引 前導して車を引くこと、作者拾遺として肅宗に扈從して長安にかへれり。【五七】佳氣 めでたき氣、帝王勃興の氣をいふ。【五八】拂 こちらが佳氣を拂ふなり。【五九】周旋 立ちながら身體を一回轉せしむること、（體操の「まはれ右」のごとし）、朝廷に於ける動作の樣子なり、或は云ふ、氣がめぐりて散ぜざるなりと、又、賈嚴とともに同仕回翔する義ともみらるべし、今姑に取らず。【六〇】貔虎 猛獸の名、護衞の武士をいふ、詩經に如ㇾ虎如ㇾ貔の句あり。【六一】開金甲 開は蓋し耀光のあらはれいづるをいふ、金はかねにて作りしよろひ、或は云ふ、開は解きはなつことにて此句は將士休息するをいふと。今從はず。【六二】騏驎 天子の御馬をいふ。【六三】受 むちをあてらるること。【六四】玉鞭 玉にてかざりしむち。【六五】侍臣 おそばの臣。【六六】諳入仗 諳はそらでおぼえてゐること、入仗は儀仗の列内にはひること。【六七】舞馬 おうまやのうま。【六八】解登仙 舊注に黃帝が飛黃といふ馬に乘じて仙となりさりしとの「淮南子」にある話を引き、玄宗の舞馬が回復されしこととけり、（玄宗百匹の馬に舞を教へ杯をくはへて壽をたてまつらしめたり、その馬祿山の軍に奪はれ洛陽にもちゆかれしが二京をとりもどせし後また復舊せり。）しからば「登りて仙たらしむることを解す」と訓ずべく、また登仙二字は天子の事に屬す、これ上句八仗二字が直に侍臣の事に屬すると異なり、鄙見は登仙二字は舞馬に直屬するものかとおもふ、しからば黃帝・舞馬等のことをいふに非ずして、今まで他所にありし馬がこのたび宮城に入りこみ來ることをさして登仙といへるものかと考ふ、宮城を人間に對して天上と看做していふなり。【六九】花動 花杖のゆるるさまならん。【七〇】朱樓雪 雪は花をたとへていふ。【七一】衣冠 諸臣をさす、此句より「朝正」の句まで四句連關してみるべし、衣冠二句は哭廟の句についていひ、朝正の句の賓として用ふ。【七二】慘愴 ものがなしくいたむ。【七三】故老 人民の老者をいふ。【七四】潺湲 水の流るるおと。【七五】哭廟 唐の太廟は賊軍に焚かれたり、郭子儀長安を回復するや神主（ゐはい）を大內の長安殿に移す、肅宗は古禮に從ひ素き服をき三日間廟に向ひて哭されたり。【七六】朝正 正月元日に參朝すること、乾元元年正月元日戊寅の日に玄宗（時に上皇たり）は宣政殿に出御ありて肅宗に受命傳國の寶（印）を授けられたり。【七七】霽景 はれたる日光。【七八】月分 毎月分給。【七九】梁漢米 四川・湖北の地方の年貢米、祿米としてたまはるなり。【八〇】水衡錢 水衡は官名、稅を主どる、漢の時、財用を司るものに司農・少府・水衡の三あり、少府・水衡は天子の私藏をつかさどる。【八一】內蘂 宮苑內のはな。【八二】纈 彩綢をくくりて織物のかざりとする仕方なり。【八三】宮莎 莎は一に香附子ともいひ莖は三稜に似、根のぐるりに毛多き草なりといふ。【八四】恩榮 恩寵榮譽。【八五】同拜手 賈嚴と同じく敬禮拜受する、賈至は時に中書舍人、嚴武は給事中たり。【八六】出入 朝廷へではひりする。【八七】隨肩 一歩おくれてついてゆくこと。【八八】著帶 帶をおびること。【八九】華堂 宮中のうつくしき堂。【九〇】繡被 ぬひとりのかいまき。【九一】耕齊 たづなをそろへて馬をすすめる。【九二】秉燭 ひるより遊びつづけて夜になりてともし火をとる。【九三】書枉 書は手紙、枉とはこちらへよこしてくれること。【九四】滿懷牋 牋は手紙の文をかきたる紙をいふ、懷に滿つとは多きをいふ。【九五】每覺 覺は知るといふほどの意。【九六】昇元輔 賈嚴が大臣宰相の地位にのぼること。【九七】列大賢 賢人の居るべき位に列する、これも賈嚴についていふ。浦氏は「每覺」四句を賈嚴を指すとするの誤なるをいひ、之を房琯をいふとなせり、今從はず。【九八】秉鈞 詩經に秉二國之鈞一とみゆ、宰相は國中の均衡をたもつものなり、ここは宰相の地位をさしていへり。【九九】咫尺 まぢかくにあること。【一〇〇】鎩翮 たちばねをそこなはれる、賈嚴の罪により謫せられしを鳥にたとへていふ。【一〇一】聯翩 ともに羽をつらねてとぶ。【一〇二】禁掖 宮禁の掖門、ここは諫官等の出入する

門なり。【一〇三】朋従改　ともだちがかはる。【一〇四】微班　微小な位、作者その左拾遺の地位をさしていふ。【一〇五】性命全　無事にいきる。【一〇六】青蒲甘受戮　青蒲は青色の蒲席をいふ、これは天子の臥床の下敷きにするもの、むかし漢の元帝が太子を易へんとせしとき史丹といふもの直ちに天子の臥内に入り青蒲のうへに伏して泣諫せしと、此句は作者房琯が事について強諫せしことをいふ、戮は誅戮。【一〇七】白髪　自己の老容。【一〇八】弟子二句　自己を比していふ、弟子は孔子の弟子なるをいふ。【一〇九】原憲　貧を以て有名なり。【一一〇】諸生　書生。【一一一】老伏虔　伏は服字の音訛なるべし、服虔は後漢の儒者、左氏傳の解を作りしを以て知らる、顧炎武の説に、漢に尚書を傳へたる濟南の伏生あり、伏生名は勝なり、伏虔は伏勝の誤用ならんと、余按ずるに杜甫何ぞ此誤をなさん、後人傳寫にあたり、服が伏に訛せしならんのみ。【一一二】師資　師となり、もとでとなるもの、老子に善人不善人之師、不善人善人之資、とみゆ。【一一三】謙未遂　作者自らなほ師資あるの地に至らずと謙遜す。【一一四】郷黨　周圍の人人をさす。【一一五】歎何先　郷に於ては年長者を敬して先きとす、此句作者學徳なくして先づ敬せらるるを怪むなり。【一一六】舊好　ふるき時のなかのよさ、此句「舊好を懐ひては」の意。【一一七】新愁　今日のうれひ、「新愁をいだいては」の意。【一一八】眼欲穿　眼に穴があきさう、賈厳の居る地を見つめるをいふ。【一一九】翠乾　みどりの色かわいて生色うすし。【一二〇】危棧竹　あぶなげなかけはしの竹、舊説に蜀道の棧は竹を編みてつくる、この竹は編竹をいふと。余は棧道の通路に叢生せる竹をさすものと考ふ、此句厳の居地についていふ。【一二一】紅膩　膩はあぶらぎること、此句賈の居地についていふ。【一二二】賈筆　筆は文章をいふ。【一二三】孤憤　一人のいかり、韓非は孤憤の篇を著はす。【一二四】定知二句　賈厳二人についていふ。【一二五】深意　詩文にふくめたるおくふかきこころ。【一二六】傳　傳播せしむること。【一二七】貝錦四句　傳播せしむることの危險なるわけをいふ、貝錦は詩經（巷伯篇）に萋兮斐兮、成二是貝錦一とあるに本く、萋斐は文章ある貌、貝錦は貝の錦紋なり、女工彩色の絲を集めて錦文を織成す、讒人が他人の過ちをよせあつめて罪を構成することそれと似たり。【一二八】無停綫　織ることをとどむるなし、断えず織るをいふ。【一二九】朱絲有斷紘　宋の鮑照が句に直如二朱絲繩一とあり、朱絲繩は琴絃なり、杜句は之を借用して、絃直なれば断絶することあるをいふ。【一三〇】浦鷗二句　連關してみるべし。【一三一】防碎首　猛鳥に首をくだかれぬ樣にふせぐ必要あり。【一三二】霜鶻　霜おくころの鶻、法を執る官吏をたとへていふ。【一三三】不空拳　むだなこぶしなし、必ず他の鳥を搏撃するをいふ。【一三四】地僻　此句賈の地をいふ、僻はかたよりたること。【一三五】昏炎瘴　炎熱の氣、惡しき水蒸氣におほはれてくらし。【一三六】稠　おほし。【一三七】隘石泉　石や泉のためにその地形せばまりたるをいふ。【一三八】且將棋二句　二人に通じていふ、將棋は棋をうつことによりての意。【一三九】度日　時日を經過する。【一四〇】隔年　一年をわたること。【一四一】典郡　郡をつかさどるもの、刺史の官をいふ、これ厳をさす。【一四二】微眇　地位の小なること。【一四三】治中　官職の名、晉の時、州に別駕・治中・從事あり、隋唐以後治中を改めて司馬といふ、賈をさす。【一四四】棄捐　朝廷からすておかるるをいふ。【一四五】安排　「莊子」（大宗師）に安レ排而去化、乃入二於寥天一一とあり、排に安んずるとは造物の推排（かはるがはるおしのけること）を甘んじておちついてゐることなり、安排二句は二人を通じていふ。【一四六】求傲吏　傲吏たるを求むるなり、傲吏は人に屈せずゐばつてゐる吏なり、莊周嘗て漆園の吏となる、楚の威王之を聘して丞相となさんとす、周、使者に謂つて曰くすみやかに去て我を汚すことなかれ、と。晉の郭璞の詩に漆園有二傲吏一とあり。【一四七】比興　たとへを以て景物に托して思ひをのぶる方法をいふ。【一四八】展歸田　田園に歸らんとの情をのぶる、後漢の張衡に歸田の賦あり。【一四九】去去　其人去て留まらざらんとするをいふ。【一五〇】才難得　人才は得ることかたし。【一五一】蒼蒼　天の色をいひ、天をさす。【一五二】理又玄　玄はおくふかきをいふ、老子に玄之又玄、衆妙之門とあり。【一五三】古人二句　此二句、上句は賈厳についていひ、下句は自己についていふ、上を結び下を起す。【一五四】稱逝矣　穆生が故事。漢の高祖の時、楚の元王、穆生を敬禮し常に生がために醴を設く、次に王戊が位に即くや醴を設くることを忘る。生曰く、可二以逝一矣と、遂に病と謝して去る。【一五五】吾道　無形の道を云ふ。【一五六】卜終焉　身を終るの地をトす。【一五七】隴外　秦州をさす。【一五八】翻　反つて。【一五九】投跡　あしあとをいれる、ふみこんで來りしをいふ。【一六〇】漁陽　范陽なり、史思明その地に反す。【一六一】控弦　ゆみづるをひく、弓をいるをいふ。【一六二】笑　作者みづからわらふ。【一六三】爲妻子累　爲二妻子所一レ累の義、妻子の係累を受くること。【一六四】與歳時遷　時は四時、一歳四時のうつるままにうつる。【一六五】親故　親戚故舊。【一六六】行　ゆくゆく、だんだん。【一六七】兵戈　武器、兵亂をいふ。【一六八】接連　場所的につづくをいふ。【一六九】他郷　秦州をいふ。【一七〇】饑夢寐　親故を憶ふゆゑにゆめみること多し、寐はいぬること。【一七一】失侶　なかまを失ふ。【一七二】迍邅　行いて進まざる貌、失

意のさま。【一七三】淹泊　一處にひさしくとまつてゐる。【一七四】長吟　聲をながくひきて吟ずる、歎息の詩をうたふなり。【一七五】阻靜便　謝靈運の始寧墅詩に、「拙疾相倚薄、還得靜者便」とあり、靜便は幽靜を好む者の都合よきことをいふ、阻はじやまされること。【一七六】如公　公は賈嚴二人をさす。【一七七】雄俊　をゝしくすぐれたり。【一七八】志　二人の志。【一七九】騫鸞　鸞の字前に鸞の語を用ひ一たび押韻せり、ここに再び用ふ可からず、蓋し作者は鶱を用ひしならん、鶱は鳥のあがることなり、騫は馬のあがることなり。

【題義】岳州の司馬賈至と巴州の刺史嚴武とに寄せたる詩なり。乾元二年秦州にての作。

【詩意】賈君の居る衡岳のある地方は猿のなきごゑのうちにあり、嚴君の居る巴州は高く鳥の通ひ路のあたりにある。我が舊友たる兩君はともにしあはせが無くてはるかなる地方にながされて役人をしてをられる。今や兵亂後、天地がたてなほされたのに朝廷のめぐみの露のかかりぐあひによつて榮枯のちがひができ、才子たる賈君は賈誼の如く長沙の遠きに居られ、嚴君は嚴光が客星たりし如く釣瀨の上に高くひかりをはなつてをられる。』おもふに前年自分は肅宗皇帝の行在所にでむいて出仕し、國事について心配しながら御筵をささげておそばちかく仕へまつつた。その頃は胡賊を討伐して結果のよからぬため李廣（哥舒翰）の如き名將もうれへ、外國に對しては援兵を乞ふの使命をもちゆく張騫が待たるることであつた。儀式の際にもとても以前のやうな儀仗をごてんにならべることは無く、舟いくさの用意はしたもののそれはむだにをはつて都は攻めおとさるる樣になつた。茫漠たる地方にわたつて味方の城は七十も賊にうばはれ、三千の劍士もちりぢりに散じ、角ぶえは秦晉の地方に吹きならされ、旄頭は澗瀍の水の上を俯して照らしてゐる。我我小儒若くは有識のものは、董卓・苻堅の徒（安・史に比す）がいかに亂暴をなさうともたかがしれたものだと輕蔑し嘲笑しつつ、及ばずながら精衞の鳥が海水をうづめんとする誠忠のまねをなし、なんで彼等逆賊が血嚢を作つて天神を射る如きことをするのかとあやしんだ。果して各地方は官軍を助けんことをおもひ、一たび鼓をうつや味方の勇氣ふるひおこつて前面に敵あるをみとめぬほどであり、陳倉の北には陰氣消散し、太白山のいただきは晴れ晴れしい日色がにほふ樣になり、衞では賊軍敗北して屍はみだれし麻のごとく積もり、味方は破竹の勢を以て燕にさしかかるに至つた。かくて吾が君（肅宗）の正式の車駕は長安の宮闕に還幸になり、官軍は關中八水の流域に下つてきた。自分はこのときありがたくも車駕の御先導の任にくははり、おめでたい勃興の氣のただようてゐるなかをうちはらひつつ起居ふるまうた。また貔虎の如くつよい警護の武士はよろひのひかりを日光にかがやかせ、麒麟の御馬は玉鞭をあてられてすすむ。近侍の諸臣は心得て儀仗にはひり、多くのお馬のむれもお伴をして宮城へとのりこんできた。朱樓のあたりに動く花をみれば雪のごとく、城邊の碧樹にはあを煙がじつとうかんでゐる。吾が君は先づ宗廟に對して哭禮を行はせられたがそこにはものがなしい風が急に吹き、百官は心かなしみ、父老はたきつせのごとく涙をながしたが、元日の參朝にははれわたつた日の光があざやかにかがやいて、いかにも太平の象があらはれた。官吏に對して毎月粱漢の地からたてまつた米を分けてくだされ、

春にあたつては水衡の内帑金を支給しくだされる。御苑の花蘂は纈紋よりもしげくうるはしく、莎草は綿よりもやはらかさうに生えてゐる。そこへ我等は同じ樣の恩榮を荷うて、肩さがりに伴行して出入りし、晩には華堂で醉にひたり、寒ければともに繡のかいまきを重ねて眠つた。また日中は馬をならべたづなをそろへてあそんで、さらに夜まで燭をとつてあそびつづけ、懐に一ぱいになるほどの手紙さへももらつて諸君と親しく交はつた。』自分のかんがへでは諸君は大臣宰相の地位にのぼるであらうとおもひ、必ず諸君は大賢の居るべき地位に列するだらうとまちまうけた。しかるに國鈞をとる宰相の地位にもうすこしといふ距離の處で、諸君は鳥のたちばねをそがれてふたたび一しよに飛び出すことになつた。自分は禁中の掖門のそばでまつたく友達がかはつてしまひ、つまらぬ官位に於て無事にいのちをとりとめた。吾が君をお諫め申したときは青蒲の席に於て滿足して誅戮を受けるつもりであつたのだ、いきのこつてはみたがだれがこのしらが首を氣の毒がつてくれるものがあらうか。自分は孔子の弟子原憲のごとく貧しく、後漢の諸生服虔のごとく老いてゐる。他人の師資となるほどの地に達したものでないと謙遜してをるのに、何故か鄕黨の人人は自分を先きに敬うてくる、これは愧ぢいる次第である。諸君とのむかしのよしみをおもふと 腸がちぎれる樣であり、このごろの愁のところでは、眼に孔があくほど諸君の方のみながめやられる。嚴君の地にある棧道では竹も翠に生色が無くはえてゐるだらう。賈君の地にある小湖では蓮花がさいて紅色があぶらぎつてゐるであらう。賈君は文章をつくつて孤憤を論じ、嚴君また幾篇の詩をつくりなしたか。兩君ともそれを作るにおくそこの意をいためたこととおもふが、さやうなものは決して一般の人人に傳播せしめたまふなよ。讒人は女工のやうにたえず貝錦の紋を織りつつあるものであり、朱き琴絲もまつすぐなれば斷ちきれるものである。秋の鵠は他の餌物をうつにむだの拳をつかはぬものだ、だから水上の鷗は首をうちくだかれぬ樣に用心することが大切だ。賈君の處は炎瘴の氣がもやもやしてゐるだらう。嚴君の處は山だらけで石泉のみで地面が窮屈であらう。兩君は棋や酒で日や年をすごしてゐることだらう。一郡の長官ではつまりちつぽけなものだ。一治中の職ではすてられてあると同じだ。それになるがままに運命に身をまかせ莊周の樣な傲吏の生活を求め、比興の辭に託して歸田の思をのべられる。諸君の如き者が去つてはふたたび諸君の如き才は得ることがむつかしい、じつに天道といふものはその理が深くてわからぬものだ。』むかし漢の穆生は可二以逝一矣というた。諸君はそれだ。自分はいまや此に終焉の地を卜しつつある。因つて隴外のこんなところまではひりこんできたが、漁陽の地方ではまた弓づるをひいて逆賊がおこりだした。自分は妻子にほだされつつあることををかしくおもひながら時間の經過するままにおしうつつてゐる。親戚故舊はだんだんすくなくなるし、兵亂のみはともすれば地つづきにつらなつてゆく。他鄕のそらで夢みばかり多く、友だちなしでは失意のさまであるのもあたりまへのことだ。おまけに多病のためますますこんなところにながとうりうをするし、いたづらに長吟

しつつ樂隱居の生活をじやまされてをる。しかしながら諸君等はともに雄俊の人たちであるから、諸君の志は必ず猛鳥駿馬のごとくまひあがりをどりあがるに在ることであらう、自分などはお話にならぬ。』

寄張十二山人彪三十韻　張十二山人彪に寄す　三十韻

獨臥嵩陽客。三違潁水春。　獨り臥す嵩陽の客、三たび違ふ潁水の春。

艱難隨老母。慘澹向時人。　艱難、老母に隨ひ、慘澹、時人に向ふ。

謝氏尋山屐。陶公漉酒巾。　謝氏、山を尋ぬる屐、陶公、酒を漉する巾。

羣凶彌宇宙。此物在風塵。　羣凶、宇宙に彌る、此の物、風塵に在り。

歷下辭姜被。關西得孟鄰。　歷下、姜被を辭す、關西、孟鄰を得。

早通交契密。晚接道流新。　早く交契を通すること密に、晚に道流に接する新なり。

靜者心多妙。先生藝絕倫。　靜者、心、妙多し、先生、藝、絕倫なり。

草書何太古。詩興不無神。　草書、何ぞ太だ古なる、詩興、神無くんばあらず。

曹植休前輩。張芝更後身。　曹植、前輩休む、張芝、更に後身あり。

數篇吟可老。一字賣堪貧。　數篇、吟じて老す可し、一字、賣(買)へば貧なるに堪へたり。

將恐曾防寇。深潛託所親。　將恐、曾て寇を防ぐ、深く潛みて所親に託す。

寧聞倚門夕。盡力潔飧晨。』　寧ぞ聞かむや倚門の夕、力を盡す潔飧の晨。』

疎懶爲名誤。驅馳喪我眞。　疎懶、名に誤らるるを爲す、驅馳、我が眞を喪ふ。

索居尤寂寞。相遇益愁辛。　索居尤も寂寞、相遇うて益〻愁辛。

流轉依邊徼。逢迎念席珍。　流轉、邊徼に依る、逢迎、席珍を念ふ。

時來故舊少。亂後別離頻。　時來つて故舊少く、亂後、別離頻なり。

世祖修高廟。文公賞從臣。　世祖、高廟を修む、文公、從臣を賞す。

商山猶入楚。渭水不離秦。　商山、猶楚に入る、渭水、秦を離れず。

存想青龍祕。騎行白鹿馴。　想を存す青龍の祕なるに、騎行す白鹿の馴るるに。

耕巖非谷口。結草卽河濱。　巖に耕すは谷口に非ず、草を結ぶは卽ち河濱。

肘後符應驗。囊中藥未陳。　肘後、符、應に驗あるなるべし、囊中、藥、未だ陳ならず。

(七九)旅懷殊不(八〇)愜。(八一)良覿(八二)眇無因。
自古皆悲恨。浮生有(八三)屈伸。
(八四)此邦今尙武。何處且依(八五)仁。
鼓角(八六)凌天籟。關山(八七)倚月輪。
(八八)官壕羅(八九)鎭磧。(九〇)賊火近(九一)洮岷。
(九二)蕭瑟(九三)論兵地。(九四)蒼茫(九五)鬭將辰。
(九六)大軍(九七)多處所。(九八)餘孽尙(九九)紛綸。
(一〇〇)高興知龍鳥。斯文起獲麟。
(一〇一)窮秋正(一〇二)搖落。回首望(一〇三)松筠。

旅懷、殊に愜はず、良覿、眇として因無し。
古自り皆悲恨あり、浮生、屈伸あり。
此の邦、今武を尙ぶ、何の處にか且仁に依らむ。
鼓角、天籟を凌ぐ、關山、月輪に倚る。
官壕、鎭磧に羅る、賊火、洮岷に近し。
蕭瑟たり論兵の地、蒼茫たり鬭將の辰。
大軍、處所多し、餘孽(孼)尙紛綸たり。
高興、龍鳥なるを知る、斯文、獲麟に起らむ。
窮秋、正に搖落す、首を回らして松筠を望む。

【字解】【一】 張十二山人彪　山人は仕へざる人をいふ、「唐詩紀事」によれば、張彪は蓋し潁水洛水の間（河南登封縣の地方）に生れし隱者にして、天寶の末に母を奉じて亂を避けたり、と。彪が北遊遺孟雲卿詩にいふ、善道居貧賤、潔服蒙塵埃、行行無定心、壞坎難歸來、慈母憂疾疹、家室念栖栖、と。又神仙の詩にいふ、長老思養壽、後生笑寂寞、五穀非長年、四氣乃靈藥と。以て其の人となりを知るべし。【二】 獨臥　世人とはなれてひとり退き居ること。【三】 嵩陽客　彪をさす、嵩陽は嵩山の南なり、嵩山は河南登封縣治の東北にあり、東峰を太室、西峰を少室といふ、相去ること十七里、五岳の一にしてその中岳なり。【四】 三違　違はそむきて逢はざるをいふ、三たびたがふは三年を經るをいふ。【五】 潁水春　潁水は少室山に出で東南して淮水に入る、潁水春は彪の故鄕の春をいふ。【六】 艱難　國難、世難。【七】 老母　彪の母。【八】 慘澹　ものがなしきさま。【九】 時人　世間の人人。【一〇】 謝氏　宋の謝靈運。【一一】 尋山屐　靈運は登山を好み特別の木屐を製し、上るときはその前齒を去り、下るときはその後齒を去りしといふ。【一二】 陶公　陶淵明。【一三】 漉酒巾　にごりざけをこす頭巾、淵明は頭巾で酒をこしまたそれを平氣でかぶり居たりと。【一四】 羣凶　安祿山・史思明等多くのわるもの。【一五】 彌宇宙　天地間いつぱいにひろがる。【一六】 此物　上句の屐と巾とをうけていふ、但し實際は彪其人を意味す。【一七】 風塵　世上のちりほこり、山から俗界へでてきたことをいふ。【一八】 歷下　山東省濟南府。【一九】 辭姜被　後漢の姜肱、繼母に事へて孝、兄弟四人、同一布被に寢ぬ、被は「かいまき」、姜肱を彪に比す、姜被を辭すとは彪にいとまをつげ別れしをいふ、蓋し作者、往年歷下に在りて彪を識り、そこにて別れしものとみゆ。【二〇】 關西　補注には潼關以西とし華州を指すなるべしといへり。余は朱注により隴關以西とし、秦州をさすものとみる。「兵車行」の未休關西卒の關西と同じ、（上卷卷二、一一六頁を見よ）。【二一】 得孟鄰　孟鄰は孟氏のとなりなり、孟子の母、その子を敎育せんために三たび居を遷して隣をえらべり、彪、母を奉ずるにより之を孟子に比す、孟鄰は彪とのとなりあひをいふ、此句蓋し秦州にてまた彪と隣居するに至りしをいふ。【二二】 早通　「唐詩紀事」に引けるは早を且に作れり。【二三】 交契　彪とのまじはり、ちぎり。【二四】 密　親密。【二五】 晚　あとには、おそく。【二六】 接　接近。【二七】 道流　道家の敎を奉ずる人人。【二八】 新　接の字へかかる、「最近には」の意。【二九】 靜者　幽靜を好む人、彪をさす。多妙　藝道の奧妙に通達する所多し。【三〇】 先生　彪をさす。【三一】 草書　はしりがきの書體。【三二】 古　ふるめかし。【三三】 詩興　詩の興趣。【三四】 神　人間わざとおもへぬ力。【三五】 曹植　建安時代魏の第一流の詩人。【三六】 休　そのことのやまつてしまふをいふ。【三七】 前輩　先輩に同じ。【三八】 張芝　後漢時代、弘農の人にして草聖と稱せられし人。【三九】 後身　生れかはり。【四〇】 數篇　彪が作れる詩四五篇。【四一】 吟可老　他人之を吟じ樂しみて以て老を終るに足るべきをいふ。【四二】 一字　彪が草書の一字。【四三】 賣堪貧　賣は古本及び「唐詩紀事」に引けるにはみな買に作る、從ふべし。彪が草書は一字千金ともいふべくいと貴きものなれば、他人もし之を買ふときはその人は貧なるに十分なり、との意。「賣りて貧なるに堪

へたり」にては義をなさず。【四四】拵恐　詩經（小雅谷風）に拵恐拵懼、維予與女とあり、恐懼は厄難勤苦の事に遭ふをいふ、ここは上の「拵恐」二字を切り取りて借用せるまでなり、賊鋒にあひて恐懼するなり。【四五】曾　かつて、まへかた。【四六】防寇　逆賊の鋒を豫防するをいふ。【四七】託　身をよせる。【四八】所親　したしむ所のもの、親類縁者のたぐひ。【四九】寒閨　「なんぞきかんや」反語なり、きいたことがない。【五〇】倚門夕　夕倚門を逆にいへるなり、齊の王孫賈の母、その子が家を出でて晩に來るときは門に倚りて望むといへり、戰國策にみゆ、此句は甫は母にかく心配をかけしことなきをいふ。【五一】盡力　ほねをおること。【五二】潔飧晨　これも韻字の都合にて晨飧潔をおきかへていへり、晉の束晳が補亡詩の「南陔」に孝子が親につかふることをのべて、馨爾夕膳、潔爾晨餐といへり、飧は餐と通ず、食事のこと、潔は清潔にすること。【五三】疎懶　ぶしやう、以下作者自らいふ。【五四】爲名誤　爲名所誤の略、名聲のため世間へひきだされ一身の處置をあやまる。【五五】羈驂　東西にかけめぐる。【五六】喪我眞　おのれの本姓、ありのままのところをうしなふ、虛僞の生活をせねばならなくなりしをいふ。【五七】索居　親友とちりぢりになつてゐる。【五八】相遇　彪とであふ。【五九】悲辛　うれはしくまたつらし。【六〇】流轉　處處を轉轉してうつる。【六一】依邊徼　徼は木柵にてつくれる界、邊徼は邊境をいふ、秦州の地をさす、依は依託。【六二】逢迎　むかへて逢ふこと、逢はそへ字にて義かろし。【六三】席珍　禮記（儒行篇）の語、（上卷卷三、二五四頁をみよ）、「席上の珍」なり、珪璋の如き美玉をさす、これを彪にたとへていふ。【六四】時來　昇平の時節の到來してから、下の亂後に對し辭をあやなしていへるなり。【六五】故舊　ふるなじみの人人。【六六】別離頻　このわかれのなかに今回の彪とのわかれをふくめていへり。【六七】世祖　後漢の光武帝の廟號。【六八】修　修繕。【六九】高廟　漢の高祖の廟、光武は建武二年正月に高祖の廟を洛陽に立てたり、此一句は肅宗が乾元元年四月に九廟落成して神主を迎へて新廟に入れしことをいへり。【七〇】文公賞從臣　「左傳」（僖公廿四年）にみゆ、晉の文公本國を出で諸國をさまよひ國にかへるに及びて從者を賞す。肅宗の至德二載十二月、玄宗に蜀に從ひしもの及び肅宗に靈武に從ひし諸臣に封爵を加へしことをいふ。【七一】商山猶入楚、渭水不離秦二句　諸家定說なし、余は彪が身のうへについていへるものと考ふ、商山は陝西商州治の東南九十里にあり、漢の四皓の隱れし地、渭水は周の太公望が釣りを垂れし水、この二隱者の事を以て彪にあてていふ、入楚、不離秦、の楚・秦は唐にあてていふ、二句の意は君（彪）が隱るるにふさはしき商山も渭水もふたたび我が唐の手に歸したりとの義ならんか、（又案、商山一句は彪についていひ、入楚とは山の秦に屬せざるをいひ、彪が帝力を享けざるをいへるか、また渭水の句の秦は長安をさし、作者が長安を慕ふの意を寓せるか、かく見るときは商山・渭水の句にて彼我を分敍し、後の旅懷・良覿の句に至りまた收束せりとも考へ得べし、暫く疑を存す）。【七二】存想青龍祕　雲笈七籤の「老君存思圖」なる道書に、凡行道時所存、濟且、思青雲之氣、匝滿齋室、青龍獅子備守前後といへり。存想は思想をそこにとどむること、青龍祕とは青龍が齋室の前後をまもりをるものと考ふるなどの神祕的なることをいふ。【七三】騎行　のりてあるく。【七四】白鹿馴　馴は「なれる」、白鹿は仙人ののるものなり。【七五】耕巖非谷口　上卷（卷一、四四頁の鄭谷の解をみよ）、漢の鄭樸字は子眞、長安の南、谷口に居り、巖石の下に耕す、「揚子法言」にみゆ。此句は彪の隱るる地長安近くに非るをいふ。【七六】結草卽河濱　神仙傳に、河上公は其の姓氏を知らず、漢の文帝の時、公草を結びて庵を河濱に爲くり、老子を讀む、文帝駕して往て之に詣る、と。無論道家者流のつくりばなしなれどもかく言ひつたへらる。河は黃河、此句は彪の隱るるところ洛陽近くなるをいふ。【七七】肘後符應驗　晉の葛洪、金匱藥方一百卷・肘後要急方四卷を著す、肘後は手許をいふ、符は醫療のまじなひのふだ、驗はききめのしるし。【七八】陳　ふるびる。【七九】旅懷　作者客中のおもひ。【八〇】愜　かなふ、きにあふ。【八一】良覿　親友と相見るは良覿なり。【八二】渺無因　はるかにしてあふによしなし、浦氏は此語あるによつて秦州にて過ふと爲すことの不都合なることを論ぜるも、これは別後の將來をさしていふことなれば毫も不都合なし。【八三】屈伸　一身のかがむとのびると、なほ窮通といはんがごとし、ここは楽散を主とし、楽を伸、散を屈とみる。【八四】此邦　秦州をさす。【八五】依仁　仁人にたよりて生活すること、仁人は彪をさす、この依仁は「論語」の里仁の意のごとし。【八六】凌天鎭　そらふくからかぜをもしのぐ、高くのぼるをいふ。【八七】倚月輪　仇氏は倚を人がよることとし、「月を仰ぎて鄉關を望む」の義とせり、楊注に「地勢の高きを言ふ」といへるは關山が倚るとみるなり、秦州雜詩に不夜月臨關とあれば楊說可ならん。【八八】官壕　官軍が防禦のためにほりたる「ほり」。【八九】羅　羅列。戍磧　戍は戍兵の屯所、磧は沙漠。【九〇】賊火　吐蕃の賊のあぐる焚掠の兵火。【九一】洮岷　洮州、岷州、並に隴西の地。【九二】蕭瑟　さびしきさま。【九三】論兵地　用兵を論ずる地方、いづれの地をさすやは明かならず、疑

ふらくは隴西秦州の近地をさす、浦氏は華州以東とし、作者等がかつて棄り談ぜし處をさすといへり、余はしか信ぜず。【九四】蒼茫　はっきりせぬ貌。【九五】闘將辰　辰は時、韻字の都合にて辰の字を用ひしも時といふも殆ど大差なし、闘將は諸將敵味方にてあひたたかふをいふ。【九六】大軍　官軍をいふ。【九七】多處所　その居る場所多くあり、これはひろく遠方の諸地へかけていふ。【九八】餘孽　蟲豸の妖を孽といふ、凶賊ののこりのものをいふ。【九九】紛綸　みだれたる貌、多くあるをいふ。【一〇〇】高興知禽鳥、斯文起獲麟二句　諸家定說なし、鄙見をいはん、高興は杜甫が心中におこす高興、「北征」の青雲動ニ高興一の高興、（上卷卷五四八二頁）知禽鳥とは、作者邊地に局促しをるは籠中の鳥に似たることを知るをいふなり、斯文の句は彪につけていふ、斯文は彪が著述をさす、起は筆をそこからおこしはじむるをいふ、獲麟は孔子春秋を著はすに西狩獲レ麟にて筆を止めしことをさす、杜預の左傳の序に、孔子が筆を獲麟の句に絕ちしは感じて起りし所なるも、因より終りを爲す所以なり、といへり。孔子が獲麟に感ぜしは、麟が其の出づべき時に非ずして出でたるを傷めるなりといはる、故に孔子は獲麟に感じて筆を起せしも亦そこにて止めたり、彪も必ずや孔子のごとく獲麟に感じて筆を起すならん」、此二句或は二句ともに張についていふとし、或は二句ともに作者自らいふとし、或は上句を張をいひ下句は自己をいふとするなど諸說あり。【一〇一】窮秋　秋のすゑ。【一〇二】搖落　木の葉ゆられおつ。【一〇三】望松筠　彪が隱居をのぞむなり、筠は竹色なるも竹をいふ、松筠卽ち松竹の意、裡面には晚節を保つの比意をもふくむ。

【題義】河南地方の隱遁者で、また孝子である張彪にやつた詩である。作者は張彪とは以前山東省の濟南府であうたことのあるのであるが、さらに之と秦州でおちあひ、しばらく隣りすまひをし、さてまた彼が河南の方へかへつたので、それにこの詩を寄せたのである。乾元二年の秋、秦州に於て別後まもなき時の作であらう。

【詩意】君は嵩山の陽にひとり臥して起たず隱居してゐた人であるが、鄕里にある潁水の春にはすでに三たびあはずにゐる。さうして國難の際に老いたる母のおともをして孝養をなし、世間の人に對してはものがなしきおもひを抱いてをる。本來君は謝靈運の山のぼりの足駄をつけ、陶淵明のどぶろくをこす頭巾でもかぶつてゐるべき人なのだが、いかにせん逆賊どもが天地にはびこつてゐるので、その足駄その頭巾も俗界の風塵のなかに陷つてをるのである。自分は歷下（濟南）で君とわかれたが、いま關西の地（秦州）でまた君と隣りすまひをすることができた。早くから親密な交際を通じたのであるが、最近にはまた幸にも君の如き道家の道を汲むものにちかづくことができた。幽靜を好む君は藝道の妙奧を多く心にもつてをり、その藝たるや絕倫のものである。君の草書はどうしてあんなに古めかしいのであるか、君の詩興には鬼神の助けが無いとはしない。君の詩に對しては曹植も先輩たる資格がなくなり、君の草書は張芝の後身といつてもよろしい。君の詩四五篇あればそれを吟じてたのしみながら老を送ることができ、君の草書はその一字を買ふならばその人は貧なるに十分である。君はこれまで亂世恐懼のうちに逆賊の難を避け、人目をくぐつて親類緣者をたよつてをられた。その間よく老母に事へ、王孫賈のごとく歸りがおそいため夕に母親を門によりながら待たせて心配をかけたことをきいたこともなく、せいいつぱいの力をだして母の晨餐を清潔にととのへられた。』自分はぶしやうものであるのになまじ名聲のあることのために身を誤られて世間へとびだし、東西にかけずりめぐつて自分の本性のありのままを失うてしまつた。親友とちりぢりになつての生活は尤もさびしい

ものであるが、君とであうてみるとこれまたますますうれひ・つらさをますばかりである。自分は處處轉轉してこの秦州の邊境に身を託してをるので、珪璋の如き席上の珍たる君をお迎へしたく思うてゐるのである。が殘念なことには太平の時節到來したにかかはらずふるなじみの人人はごく少く、兵亂以後はただ諸人との別離のみがしきりである。今や我が天子はむかし光武帝が高祖の廟を修めたごとく祖先の廟を改修せられ、むかし晉の文公が逃亡のとき隨從した諸臣を賞せられたごとく羣臣に賞をおこなはれた。四皓の隱れた商山、太公望の釣りを垂れた渭水、みな我が唐に歸した。君が隱居の地は回復された。君が想ひは靑龍室を守る道敎の祕密の處に存し、君の軀はまさに馴れたる白鹿に騎りて遊行せんとする、君が巖石のもとに退耕せんとする處は鄭子眞のごとく長安ちかき谷口ではなく、君が草を結びていほりせんとする處は河上公のなせしごとく洛陽に遠からざる黃河のほとりであるであらう。君は醫藥の書を肘にかけ、その作るところの療病の符は必ずや治癒に效驗があるであらう、君が囊中にたくはふる藥はまたふるびたりとはせぬであらう。自分は旅中のおもひをいだいてことに氣にあはぬことばかりだ、せめて君でも居てくれたらばとおもふのに、君との會合はかけはなれてなすよしもない。』悲恨といふものは今にはじめず古からあるものだが、いかにもこの浮世には一屈一伸、聚散離合あるは免れぬところである。この地方（秦州）はいま武事ばかりたつとんでをる、どこをたづねたならば君の如き仁人によりそふことができるだらうか。鼓角のおとは天籟をもしのぎ、關塞を設けた山はたかく月に倚つてゐる。官軍の防禦用の壕は屯兵所・沙漠に多くならんでをり、洮州・岷州に近く賊虜の焚掠の火がせまつてをる。凡そ用兵を論ずる附近地方は蕭瑟とさびしく、諸將あひたたかふの時、勝敗の數蒼茫としてはつきりせぬ。このほか安・史の殘黨もまだ紛綸と多くみだれ、官軍の大部隊も多くの處にあつめられてゐる。自分は心には高興をいだいて身をかへりみれば籠のなかの鳥にすぎぬことを知つてゐる。君は孔夫子のごとく獲麟に感じて著述の筆をそこからおこすことであらう。いま秋のすゑ木の葉のゆられおつるときにあたり、自分はふりかへつて君の居られる松竹の宅の方をながめやるのである。』

寄李十二白二十韻

昔年有狂(一)客。號爾(二)謫(三)仙人。
筆落驚(四)風雨。詩成泣鬼神。
聲名從此大。汨(五)沒一朝伸。
(六)文彩承殊(七)渥。流(八)傳必絕倫。
(九)龍舟移棹(一〇)晩。(一一)獸錦奪袍新。

李十二白に寄す。二十韻

昔年、狂客有り、爾を謫仙人と號す。
筆落つれば風雨驚き、詩成れば鬼神泣く。
聲名、此從り大に、汨沒、一朝に伸ぶ。
文彩、殊渥を承く、流傳するは必ず絕倫なり。
龍舟、棹を移すこと晩く、獸錦、奪袍新なり。

白(一二)日來(一三)深殿。青(一四)雲滿(一五)後塵。
乞(一六)歸優詔許。遇(一七)我宿(一八)心親。
未負幽(一九)棲志。兼全寵(二〇)辱身。
劇(二一)談憐(二二)野逸。嗜酒見(二三)天眞。
醉(二四)舞梁(二五)園夜。行歌泗(二六)水春。』
才(二七)高心不展。道(二八)屈善(二九)無鄰。
處(三〇)士禰衡俊。諸(三一)生原憲貧。
稻(三二)粱求未足。薏(三三)苡謗何頻。
五(三四)嶺炎蒸地。三(三五)危放逐臣。
幾(三六)年遭鵩鳥。獨(三七)泣向麒麟。
蘇(三八)武元還漢。黃(三九)公豈事秦。
楚(四〇)筵辭醴日。梁(四一)獄上書辰。
已(四二)用當時法。誰將此(四三)議陳。

白日、深殿に來る、青雲に後塵滿つ。
歸るを乞うて優詔許さる、我に遇うて宿心親しむ。
未だ負かず幽棲の志に、兼ねて全うす寵辱の身。
劇談、野逸を憐む、嗜酒、天眞を見る。
醉舞す梁園の夜、行歌す泗水の春。』
才高くして心、展べず、道屈して善、鄰無し。
處士、禰衡俊に、諸生、原憲貧なり。
稻粱求むる未だ足らず、薏苡、謗何ぞ頻りなる。
五嶺、炎蒸の地、三危、放逐の臣。
幾年か鵩鳥に遭へる、獨泣、麒麟に向ふ。
蘇武、元漢に還る、黃公、豈に秦に事へむや。
楚筵、醴を辭せし日、梁獄、書を上りし辰。
已に當時の法を用ふ、誰か此の議を將て陳せむ。

老(四四)吟秋(四五)月下。病起暮(四六)江濱。
莫(四七)怪恩(四八)波隔。乘(四九)槎與問津。』

老いて吟ず秋月の下、病起す暮江の濱。
怪む莫れ恩波の隔たるを、槎に乘じて與めに津を問はむ。』

【字解】【一】狂客　賀知章をいふ。太子賓客賀知章は四明の人、自ら四明狂客と號す。【二】爾汝、李白をさす。【三】謫仙人　罪によりて天上より下界へ流しくだされた仙人、賀知章は紫極宮に於て李白を一見して謫仙人なりと評せしといふ。【四】驚風雨　快速なるをいふ。【五】汨沒　浮沈の意ならんといふ、但しここは沈の意を主とせり、沈淪といふほどの義に用ふ。【六】文彩　白の文章のあやあること。【七】殊渥　特別にあつい御恩、翰林供奉に任ぜられし類をさす。【八】流傳　世間へつたはる作物、清平調の詩の類をさす。【九】龍舟　天子のおふね、頭に龍の飾りあり。【一〇】移棹晩　舟をこぎうつさずにしばらくまつてをる。玄宗白蓮池に泛びて白を召し序を作らしめんとせしとき白は已に翰苑に於て酒を被りなりしかば高力士に命じて白を扶けて舟にのぼらしめしといふ。【一一】歎錦奪袍新　「新に歎錦袍を奪ふ」の義。錦袍はにしきのうはぎ、歎はその模様がらなり、則天武后が龍門に幸せしとき從臣に詩をつくらせ先きにできたものに錦袍を賜はらんといふ、東方虬先づ成り、袍を賜はる、宋之問が詩つぎに成る、尤も工なり、因て虬より袍を奪ひて之問に賜はりしといふ、李白に關しかかる逸事は傳はらざるも蓋し類似の事ありしなるべし。【一二】白日　まひるなか。【一三】來深殿　白は奥ふかき宮殿までやつてくる。【一四】青雲　白の居る高き地位をさす。【一五】滿後塵　白の車後の塵を拜するもの、卽ち白に追隨する文士が多くあること。【一六】乞歸　白、故郷にかへらんことを玄宗にこふ。高力士の讒言によるなり。【一七】遇我　我とは作者みづからいふ、杜甫が李白に遇へるは、白の乞歸後、卽ち天寶三載にあり。【一八】宿心　平生からもつてゐた心。【一九】幽棲志　山林生活の念。【二〇】寵辱身　老子に寵辱若ゝ驚とあり、人は君寵をうけて榮ゆるときあり、またそれを失うて辱めらるるときあり、故に之をいましむべきをいふ、白は早く退きし故に辱にあふことすくなし。【二一】劇談　はげしくものがたる。【二二】憐野逸　白が杜甫の野逸をあはれむなり、野逸は田野に逸居するなり。【二三】見天眞　杜甫が白の天眞なるを

見るなり。【二四】辭舞二句　李杜共同のしわざなり。【二五】梁園　漢の時、梁の孝王のつくりしもの、今河南歸德府城東にありと。【二六】泗水　山東兗州府にあり、杜甫が李白・高適・と梁宋に遊びしは天寶三載にあり、李杜魯齊の地方にありしは明年四載にあり。【二七】才高六句　諸家六句共に白のことをいふとなす、愚案ずるに彼我を分敍せるなり、才高此句は白をいふ。【二八】道屈　道の行はれざるをいふ、此句自らいふ。【二九】善無鄰　善道を行ひながら鄰をなすものなし、孔子の德必有レ鄰の語の反對。【三〇】處士禰衡俊　白をいふ、處士は在野の士、禰衡は後漢末の文學者。【三一】諸生原憲貧　自らいふ、原憲は孔子の門人。【三二】稻粱求未足　此句自らいふ、生活に足るだけの食糧なし。【三三】薏苡謗何頻　白をいふ、薏苡は「ジュズコダマ」、後漢の馬援、交趾を征し、薏苡の種を載せてかへる、人之をそしりて人から賄賂にもらつた明珠大貝をもちきたれりといふ、白の讒せらるる之に似たり。【三四】五嶺　以下四句白をいふ、五嶺は廣東の北部に於て東西に走れる山脈、大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽これなり、白の流されし夜郎は（貴州省遵義府桐梓縣西二十里の地なりと）五嶺の西北にあたり可なりへだたりたれども大體のところにて名山をあげしなり。【三五】三危　山の名、甘肅安西州燉煌縣東南二十里にあり、山に三峰あるを以て三危といふ、むかし舜は三苗の種族を三危に竄（投棄すること）したり、白の夜郎に流さるるそれと似たり。【三六】幾年遭鵩鳥　幾年とはいくばく年を歸ば、「やがて」の意、漢の賈誼長沙に謫せられ三年にして鵩飛びて舍に入る、誼傷みて鵩賦をつくる。【三七】獨泣向麒麟　きりんに向つてひとりでなく、孔子の春秋（哀公十四年）に西狩獲レ麟といひ、公羊傳には、そのとき孔子は反レ袂拭レ面、涕沾レ袍曰、吾道窮矣、かくいうたと記せり、李白もその道の窮まれるをなげきて泣くなり。【三八】蘇武元還漢　漢の蘇武は匈奴に使し十九年にして漢に還り、匈奴に降らず、李白の唐室にそむかざるは蘇武に似たり。【三九】黃公豈事秦　黃公は夏黃公、商山の四皓の一人、秦末亂を避けて出でず、李白が永王璘の叛軍に從はざるは黃公の秦につかへざると似たり。【四〇】楚筵辭醴日　漢の穆生が故事、楚の元王、穆生がため醴を設く、元王の孫戊の時にいたり醴を設くることを忘る、穆生つひに去る。此の句は穆生が自發的に醴を辭したりといふなり、これ李白は永王璘が僞官を受けざりしとの意に用ひしなり。【四一】梁獄上書辰　漢の鄒陽、梁の孝王の爲めに獄に下さる、獄中より書をたてまつりて之を諫む、これ李白は鄒陽のごとく永王璘の惡事をいさめしをいふ。【四二】已用當時法　當時法とはその時の刑法をいふ、至德元年永王璘が軍丹陽に敗れ、白は宿松に奔る、坐せられて潯陽の獄に繫がる、明年二載宋若思によつて囚を釋かれその參謀にめさる、此句は刑にふれしことをいふ。【四三】此義　楚筵・梁獄二句の事實、即ち白は璘にくみする者には非りしとの意見をいふ。【四四】老吟二句　白のことをいふ、李白は乾元二年には六十一歲なり。【四五】秋月下　此句によりてこの詩の秋作られしことを知る。【四六】暮江濱　江は揚子江、薛仲邕が李白年譜を案ずるに、白は一たび獄より出だされしが、乾元元年璘が事に汙されしに坐せられて夜郎に流さるることとなり、乾元二年に途中にてまた恩命により放還せられ、同年三月には瞿唐峽を下り、潯陽にて酒病にかかり、江夏の地に居りてさらに下江せり、この江濱は作者未だそれらの事情を知らず漠然と江をさせるなり。【四七】莫怪　白に向つていふ。【四八】恩波隔　天子の恩澤の波からとほくはなれてなる。【四九】乘槎與問津　作者の希望をのぶ、宋之問が明河篇の終りに、明河可レ望不レ可レ親、願得レ乘レ槎一問レ津とあり、むかし海べに人あり、年年八月に浮べる槎ありて來る、その人之に乘じてつひにあまの河に至る、と。事は張華が博物志にみゆ。宋之問が詩は槎に乘りてあまの河に至りその津を問ひたしといへるなり、杜詩は其の用語を借りたれども意は同じからず、杜は天上に至りて天の河のわたりばをたづね、李白のためにその寃を訴へたしといへるなり。「與」は俗用にて「爲めに」と同じ。

【題義】　玄宗の第十六子に永王、名は璘なる者あり、天寶十五歲玄宗蜀に幸するや、璘を以て山南東路及嶺南黔中江南西路四道節度採訪等使・江陵郡大都督となす、璘、江陵に至りて江淮の租賦を收め、將士數萬人を召募す、十二月ほしいままに舟師を領して東下して廣陵に赴く、吳郡採訪使李希言なるもの、璘を尊敬せざりしの故を以て激怒し、且屢〻肅宗の命を奉せず、丹徒の太守閻敬之を殺す、李白は永王の軍事に參預せり、白は之を脅迫に由ると稱すと雖も、實に其の形迹あるを免れず、白は之によりて璘が失敗するや、璘が罪に坐せられ、夜郎に流さるるに至れり、白は夜郎に赴かんとして程に就きしに、赦命ありて乾元二年三月には已に瞿唐峽を下れり。此詩は蓋し乾元二年秋作者秦州に

ありて、白の恩赦の事を明知せざりし時に作れるものならん。詩は多く白のために辯護を費せり。

【詩意】前年四明の狂客(賀知章)なるものがあつて、おまへを謫仙人だと名づけた。おまへは詩文をつくるに紙の上に筆が落ちれば風雨さへ驚くかとおもはるるほど快速であるし、詩が成就してみると鬼神さへそれに感じて泣くほどである。それによつておまへの名聲は大きくなり、これまでの沈淪の身がにはかにのびだすことになつた。さうしておまへの文彩は天子の特別のあつい御寵愛をうけ、世間につたへられる作物も必ず絶倫のものであつた。あるときは天子が舟あそびをされるときわざわざ棹をとどめておまちになつたり、他人にくれるはずの獸錦袍をあらたに奪ひかへしておまへにおさづけになるといふほどであつた。おまへはまひるなかにも奥ごてんにではひりする、おまへの居る高き位のところには追隨する後輩の士が充滿してゐた。それが事に由つておまへはお暇をいただいて故郷へかへりたいと願ひいで、優詔を以てそれを許されて朝廷からさがつた。それでおまへは自分とであふことができ、かねての心からおたがひに親しむ様になつた。おまへは官をやめたから幽棲の志にも負かないし、兼ねて古人が寵をうけてもまた辱めをうけることもあるといつたおのれのからだをはづかしめず全うすることができた。おまへは自分とはげしくかたりあうて、自分の閒散な在野のすがたをきのどくがつてくれ、酒をたしんでのむところに天眞のさまがうかがはれる。かくて我我はあるひは梁園の夜に醉うて舞うたり、泗水の春にはあるきながら歌うたりした。』おまへは才が高いのに心はのびずにゐる。自分は道を十分おこなひ得ず善を行ひながら隣りとなつてくれるものがない。おまへは處士禰衡のごとく人にひいでたものであり、自分は諸生原憲のごとく貧しいものである。自分は食糧さへ十分に求められぬ。おまへはなんで馬援が「じゆずこだま」を人から眞珠をもつてきたといはれた樣に、ありもせぬことにしきりにそしりをうけるのであらうか。おまへは五嶺地方のむしあついところで、むかしの三苗のやうに三危山へ放逐されたと同じ樣なものである。おまへはいく年めに不吉な鵩鳥にであうて漢の賈誼のやうになるのか、おまへは孔夫子が麒麟を見て「吾が道窮せり」といはれた樣に獨りで泣いてゐるだらう。漢の蘇武は匈奴へ降らず漢へもどつた、秦の夏黃公は秦に事へず商山にかくれてゐた、おまへの潔白忠誠な心は蘇武だ、夏黃公だ。穆生は楚王戊の醴を辭退した、鄒陽は獄中から梁の孝王を諫める書を上つた、おまへは穆生だ、鄒陽だ、なんで永王璘の無法な好遇をうけたり逆謀にくははつたりするものか。それにかかはらずおまへは當時の刑法を施行されて流しものにされたのだが、だれがいま上にのべた樣な意見を陳べたてるものはないのであらうか。おまへは年老いて秋の月のてるしたで詩を吟じつつあるであらう、おまへは夕ぐれの揚子江のほとりで病みあがりのすがたをしてゐるであらう。おまへはむかしの榮華時代にひきくらべて今なんでこんな僻地に居て天子の恩澤の波とかけはなれてゐるのかなどと不思議がるな。自分はおまへのために昔のある男がした樣に槎に乗つてあまのがはらへゆきそこでわたりばをたづねて天帝のところへゆき、

おまへのむじつのつみを訴へてやらうとおもうてをる。』

所思　【原注】得台(一)州司戸虔消息(二)。

思ふ所　【原注】台州の司戸虔が消息を得たり。

鄭(三)老身仍竄(四)。台(五)州信(六)始傳。　鄭老、身仍竄せらる、台州、信始めて傳ふ。

爲(七)農山澗曲。臥病海雲邊。　農と爲る山澗の曲、病に臥す海雲の邊。

世已疏(八)儒素。人(九)猶乞(一〇)酒錢。　世已に儒素を疏んず、人猶酒錢を乞ふ。

徒(一一)勞望(一二)牛斗。無(一三)計斷(一四)龍(一五)泉。　徒に牛斗を望むに勞す、龍泉を斷するに計無し。

【字解】〔一〕台州司戸虔　上卷（卷五、五一四頁をみよ）。〔二〕消息　たより。〔三〕鄭老　虔をさす。〔四〕竄　ながしものにされる。〔五〕台州　浙江省台州府、虔の居處。〔六〕信　たより、信書。〔七〕爲農二句　虔の近況、信書によりて知りし所。〔八〕疏儒素　疏はうとんずる、素は質素、ぢみなこと、儒素は儒者のぢみな行ひ。〔九〕人　作者嘗て虔に贈る詩に「頼有蘇司業、時時乞酒錢」といへり、人は蘇源明をさすならん。〔一〇〕乞　あたふること、借用なり、「こふ」義に非ず。〔一一〕徒勞　作者がむだに骨折るをいふ。〔一二〕望牛斗　牛・斗は星座の名、台州の地は牛斗の分野にあたる。〔一三〕無計　てだてなし。〔一四〕斷　斫（きる）なり、ただしここは土壌をきりけづることにて、劍を掘り取るをいふ。〔一五〕龍泉　むかし歐冶子がつくりたる三本の鐵劍の一の名、もと龍淵といふ、唐は淵の字を諱みて泉の字にかへたり、龍泉は單に劍の代りとして用ふ。牛斗・龍泉・の二句は雷煥（孔章）が牛斗を射る劍氣を見て豐城の獄にて劍をほりだせし故事（本卷「蕃劍」の詩の每夜吐光芒句下の注を見よ）を用ひたり。

【題義】作者の親友鄭虔は至德二載十二月に台州へ貶せらるることになり、乾元元年に台州に至りたり、この詩は始めて虔より台州からの手紙を得て思ふ所をのべたり。仇氏は單復が編によりて之を此に置きたり。

【詩意】鄭虔老人は、その身はいまなほ流しものにされてをり、その台州からのたよりがこのたび始めて自分のところへ傳へられた。それによると、老人は山澗のみくまりで農となり、海べの雲うかぶあたりに病に臥してゐるとのことである。世間の人人は老人の樣な儒者をうとんじるが、いまだに老人に酒錢をあたへてくれる人はあるのである。自分は、いたづらに牛斗のあたりに劍氣が貫くのをながめてゐるばかりで、その劍を地下からほりだしてやるてだてはもたぬのである。なげかはしきことだ。

別贊(一)上人

贊上人に別る。

百(二)川日(三)東流。客(四)去亦不息(五)。　百川日に東流す、客の去ることも亦息まず。

我生苦飄(六)蕩。何時有終極。　我が生、飄蕩に苦しむ、何の時か終極有らむ。

贊公釋門老(七)。放逐(八)來(九)上國。
(一〇)還爲世塵嬰(一一)。頗帶憔悴(一二)色。
(一三)楊枝晨在手。豆子(一四)雨已熟(一五)。
(一六)是身如浮雲。安可限南北。』
(一七)異縣逢舊友(一八)。初欣寫胸臆(一九)(二〇)。
(二一)天長關塞(二二)寒。歲暮(二三)饑凍逼。
野風吹(二四)征衣。欲別向曛黑(二五)。
馬嘶思故櫪(二六)。歸鳥(二七)盡斂翼(二八)。
(二九)古來聚散地。宿昔(三〇)長荊棘(三一)。
相看俱衰年(三二)。出處(三三)各努力(三四)。』

贊公は釋門の老、放逐せられて上國より來る。
還世塵に嬰らるるを爲す、頗る帶ぶ憔悴の色。
楊枝晨に手に在り、豆子雨(兩び)已に熟す。
是の身は浮雲の如し、安んぞ南北を限る可けむ。』
異縣、舊友に逢ふ、初めて欣ぶ胸臆を寫すを。
天長うして關塞寒く、歲暮、饑凍に逼らる。
野風、征衣を吹く、別れむと欲すれば曛黑に向ふ。
馬嘶いて故櫪を思ふ、歸鳥盡く翼を斂む。
古來、聚散の地、宿昔、荊棘長ず。
相看るに倶に衰年なり、出處、各、努力せむ。』

【字解】【一】贊上人　已に屢々見ゆ。【二】百川　多くの川。【三】東流　支那の川は地形上つひに東にながれる。【四】客去　客は自らいふ。【五】息　やむ、停止。【六】飄蕩　ひるがへりうごく。【七】釋門老　佛敎界の長老。【八】放逐　房琯が事に坐せられて逐はれしものといふ。【九】來上國　來は秦州へきたこと、上國は京師長安をいふ。【一〇】還　また。【一一】嬰　つなぐ、ひつかかる。【一二】憔悴色　やつれたかほいろ。【一三】楊枝晨在手　佛典を引きて說く解あるも今取らず、これ送別のとき楊柳の枝を手折り綰れて記憶のしるしとする唐人の習俗をいへるのみ、蓋し乾元元年の春作者長安にて贊と別れしなり。【一四】豆子　まめのみ。【一五】雨已熟　雨の字古本兩に作れるあり、兩をよろしとす、兩は兩回をいふ、豆が二回熟すとは乾元元年の秋と二年の秋との二熟をいふ。【一六】是身二句　一般的にいふ。【一七】異縣　秦州。【一八】舊友　贊。【一九】寫　外部へぶちまけるをいふ。【二〇】胸臆　むねのなかのおもひ。【二一】天長　都ととほきをいふ。【二二】關塞　秦州にあるとりで。【二三】歲暮　時に十月なり、秋以後はすべて歲暮と稱す。【二四】吹征衣　たびする者のころも、作者まさに成州同谷に赴かんとするなり。【二五】曛黑　たそがれどき。【二六】故櫪　もと居たうまやのふみ板。【二七】歸鳥　林にかへるとり。【二八】斂翼　つばさをすぼめる、とばぬこと、自己が外方へでだすのとは反對なるをいふ。【二九】古來聚散地　古來は舊來といふほどの意、聚散は贊及び諸友と或は聚合し或は離散せしこと、聚散の地とは京師の地をさす。【三〇】宿昔　隔夕を宿といひ、三日を昔といふ、短時日間をいふ。【三一】長荊棘　いばら・からたちがせたかくのびる、兵亂のため荒れたるをいふ。【三二】衰年　老衰のとき。【三三】出處　出づると居ると、進退の義。【三四】努力　つとめること、身を誤らぬやうにする。

【題義】乾元元年十月、作者秦州にも居ること能はず南して成州の同谷へゆかんとして贊上人に別れを告ぐる詩なり。

【詩意】さまざまの川水は日日東に流れつつあるが、自分もまた旅客として甲地から乙地へと去り移つてやまぬのである。自分の生活はこまることにおちつきなくただよはされてのみゐるが、これはいつはてしがつくことであらうか。贊公は佛門の長老であらせられ、罪によりて都から放逐されて此地(秦州)へ來られた。ここでもまた世俗の風塵にかかりたまうたかして、すこぶるやつれたかほつきをしてをられる樣である。自分はあしたに楊柳の枝を手折つてお別れをしたとおもうてゐるのに、はや

ここへこられて豆が二度もみのる時日がすぎてゐる。このからだは浮き雲のやうにただよはされてゐるものだ、どうして必ず南へとぶとか北へとぶとか方角を定めることができませうぞ。』自分は見知らぬ地方（秦州）であなたといふ舊友にであうて、はじめて遠慮なく思ふことを吐き出せるとよろこんだ。ところがここは都からは遠くてとりでの地が寒く、歲暮にのぞんでうゑこごえるの目にせまられてをる、（だからこの地を立ち去らうとするのである。）あなたにお別れせんとするときはたそがれになりかかつてをる。野らの風はわたくしの旅衣をさむく吹く。林にかへる鳥はみんなつばさをすぼめて飛ぶものはなく、馬のいななきさへ住みなれたもとのうまやのふみ板をこひしたふかのごとくである。我我一身上の事ばかりではありませぬ。むかしお互にあうたりわかれたりした都の地方をごらんなさい。二三日のうちに荒れはてて荊棘がのびてゐるではありませぬか。おたがひみたところでともども老衰の年になつてをりまする、どうかめいめい進退の節をあやまらぬやうにつとめようではありませぬか。』

(一)兩當縣吳(二)十侍御江(三)上宅　兩當縣の吳十侍御が江上の宅

(四)寒城朝煙淡。山谷落葉赤。　寒城、朝煙淡し、山谷、落葉赤し。

(五)陰風千里來。吹汝(六)江上宅。　陰風、千里より來る、吹く汝が江上の宅。

(七)鵾雞號(八)杻渚。日色傍(九)阡陌。　鵾雞、杻渚に號ぶ、日色、阡陌に傍ふ。

借問持斧(一〇)翁。幾(一一)年長沙(一二)客。　借問す持斧の翁、幾年ぞ長沙の客。

哀哀失木(一三)狖。嬌(一四)嬌避弓(一五)翮。　哀哀たり失木の狖、嬌嬌たり避弓の翮。

(一六)亦知故鄉樂。未敢思宿(一七)昔。』　亦知る故鄉の樂しきを、未だ敢て宿昔を思はず。』

昔在鳳(一八)翔都。共通金(一九)閨籍。　昔、鳳翔の都に在り、共に金閨の籍を通ず。

天子猶蒙(二〇)塵。東(二一)郊暗(二二)長戟。　天子も猶蒙塵、東郊、長戟暗し。

(二三)兵家忌間(二四)諜。此(二五)輩常接(二六)跡。　兵家、間諜を忌む、此の輩常に跡を接す。

(二七)臺中領(二八)舉劾。君必(二九)愼剖(三〇)析。　臺中、舉劾を領す、君必ず剖析を愼む。

不忍殺無(三一)辜。所以分黑(三二)白。　無辜を殺すに忍びず、所以に黑白を分てり。

(三三)上官權(三四)許與。失(三五)意見遷斥。　上官權に許與す、意を失ひて遷斥せらる。

(三六)朝廷非(三七)不知。閉(三八)口休(三九)歎息。　朝廷、知らざるに非ず、口を閉ぢて歎息するを休む。

(四〇)仲尼甘旅(四一)人。向(四二)子識損(四三)益。』　仲尼、旅人を甘んず、向子、損益を識る。』

(四四)余時忝ニ(四五)諍臣一。(四六)丹陛實(四七)咫尺。(四八)相看受ニ(四九)狼狽一。(五〇)至ㇾ死難ㇾ塞ㇾ責。(五一)行邁心(五二)多ㇾ違。(五三)出ㇾ門(五四)無ニ與適一。於ㇾ(五五)公負ニ(五六)明義一。(五七)惆悵頭(五八)更白。』

余時に諍臣を忝うす、丹陛、實に咫尺。相看て狼狽を受く、死に至るも責を塞ぎ難し。行邁、心、違ふこと多し、門を出づれば與に適ふものなし。公に於て明義に負けり、惆悵、頭更に白し。』

【字解】【一】雨當縣　唐の時漢中府鳳州に屬せり、今秦州に屬し、州治の東南にあたれり、成州よりすれば東にあたる。【二】江上宅　江は嘉陵江。【三】哭十侍御　侍御史吳郁なり、何處の人なるや明ならず、詩によれば罪せられて此地に在りし者なり。【四】塞城　冬の雨當縣城。【五】陰風　北より吹く陰氣なかぜ。【六】汝　吳郁。【七】鶤雞　タウマル、オホニハトリ。【八】枉渚　まがりたるなぎさ。【九】阡陌　田野の南北・東西にわたれるみち。【一〇】持斧翁　吳郁をさす、漢の武帝の末に繡衣の御史暴勝之といふもの使となり斧を持して盜賊を逐捕す、郁は侍御史なるゆゑ持斧翁といへり。【一一】幾年　いくとせ。【一二】長沙客　漢の賈誼長沙に貶謫せらる、今借用して吳郁をさしていふ。【一三】失木狖　狖は「くろざる」、しし鼻にて尾の長さ四五尺ありといふ、失木狖は木からはなれたるさるをいふ、吳その地位を失ひしをいふ。【一四】矯矯　あがる貌。【一五】避弓翮　翮は鳥のたちばね、ここは雁をいふ、雁は蘆の葉を銜みて飛び以て弓を避く、此の句吳の罹害を避くるをたとふ。【一六】亦知　吳も亦常人のごとく之を知る。【一七】宿昔　過去の時をいふ。【一八】鳳翔都　肅宗の鳳翔の行在所をいふ、鳳翔府扶風縣に在りし。【一九】金閨籍　名籍を金馬門に通じおく、仕官すること、已に屢ゝ見ゆ。【二〇】蒙塵　よそへ出奔せられ居りしこと。【二一】東郊　長安、洛陽二京の東の野外。【二二】暗長戟　長きほこをふるふ者におほひかぶされてくらくなつてゐる。【二三】兵家　兵法家。【二四】間諜　敵方へいれてあるしのびのもの、まはしもの。【二五】此輩　間諜をさす。【二六】接跡　ひききりなしに多くあること。【二七】臺中　御史臺のうち、臺は御史の役所の名。【二八】領舉劾　領は支配すること、舉劾は審なるを推舉し罪あるを彈劾するなり、劾はかんがへきはむる義なり。【二九】君　吳をさす。【三〇】剖析　解剖し分析する、こまかな點をしらべること。【三一】無辜　罪なきもの、舊解に良民にして間諜なりと疑はるるものあり、吳その無罪を辨ずるなりといへり。余案ずるに問題の被疑者が良民なるや否は詩句だけにては明ならず、敵の間諜が入りこみて甲なる觀官が實國・內應等の事ありと言ひふらしたる時にも甲は被疑者たるべく、而して侍御史は其の無罪を主張し得べけん、上官が他人を誣ひんとするは一の良民に對するよりも寧ろこの甲の場合のごときが多からん、余は吳侍御の場合は甲の場合なりと假定して此詩をとく。【三二】分黑白　正邪曲直を區別す。【三三】上官　吳のうはやく。【三四】權許與　かりに吳の說をみとめ贊成する。【三五】失意　吳、上官の意を失ふ。【三六】朝廷　朝廷の大臣等。【三七】非不知　事情を知らぬにあらず、知つてはゐるがそのまま棄ておきて吳を救はうとせぬをいふ。【三八】閉口　吳がなにもいはぬこと。【三九】休歎息　吳がさとりてなげきもせぬこと、朝廷非不知・閉口休歎息の二句はもと仲尼甘旅人・向子識損益二句の下にありしものなるを、仇氏は樊晃本によりて之をここに引きあげて置きたるなり、一說に朝廷二句を「損益」の下におき、朝廷非ㇾ不ㇾ知閉ㇾ口休ニ歎息一とよませ、「朝廷はおまへの心事を知つてくれてゐるのであるからおまへはだまつてゐてなげくな」と慰安する義なりとせり。【四〇】仲尼二句　吳の悟りきつたさまをたとへていふ。仲尼は孔子の字。【四一】旅人　孔子はつねに東西に奔走したびびとの生活をなせり。【四二】向子　後漢の向長、字は子平、易を讀みて損・益・の卦に至り喟然として嘆じて曰く吾已に富の貧に如かず、貴の賤に如かざるを知る、但未だ死の生に何如なるやを知らざるのみと。【四三】識損益　上にみゆ。【四四】余　作者。【四五】諍臣　天子をいさめる官、左拾遺をいふ。【四六】丹陛　あかぬりの殿陛、（ごてんのなかの臺のきざはし）。【四七】咫尺　八寸一尺、まぢかのこと。【四八】相看　うちみつつ。【四九】受狼狽　狼狽はうろたへる貌、狼狽を受くるとは吳が罪せられて地方へ出ればならぬ樣になりしことの結果を見るに至りしをいふ。【五〇】至死　いのちを失ふにいたるとも。【五一】行邁　みちをゆくこと。【五二】心多違　この違の字詩經に離去の義に用ふると同じからず、違背の義なり、心多違は心に背くことのみ多きをいふ。【五三】出門　自家の門外へいづること。【五四】無與適　無ㇾ與ニ我意ニ適者ㇾをいふ、おもしろからぬことばかり。【五五】公　吳をさす。【五六】明義　顯明なる義理、友人を救ふべきことの當然をいふ。【五七】惆悵　うらむ貌。【五八】頭更白　本來白き頭が自責の念のためいつそうしろくなる。

【題義】乾元二年十月、作者秦州を去り、成州同谷に赴かんとす。舊說には作者その途中に兩當縣を經過して吳侍御が宅によぎりたりといへり。余は果して然りとも信ずる能はざるも、しばらく之に依る。又舊說には吳侍御は時に長沙にありて兩當縣の宅は主人不在なりしものなりといへり。これ本詩の「幾年長沙客」を實句とみなし譬喩と見ざるの誤なり。余は作者わざわざ吳侍御をたづね、面のあたり陳謝したる作なりとみるものなり。

【詩意】冬ぞらの縣城に朝の煙がうすくういてをり、谷間に落ちる葉の色が赤くみえる。いま遠くからつめたい風がやつてきて、おまへのかはぞひの宅のところを吹いてゐるのだ。それまがつたみぎはには陽雞がなきさけんでゐる、田野のたてよこの路に日の光がさしそへてゐる。誠みにおたづねする、侍御史たる君はここへながされものになつていくとせになるるのか、と。おまへはたとへばあはれにも木からはなれた狖の樣なものであり、弓矢を避けて高く飛びあがつてゐる雁の樣なものだ。おまへとてもこんなところに居るより故鄕の方がいくら樂しいかは知つてゐるのだが、おまへは昔のことは思はうとはしないのだ。』むかし鳳翔の行在所に居たときは、我我は共に名籍を宮門に通じて仕官をした。その頃は天子さへ賊のために逃げ出しあそばされて、兩京の東の野外は長戟で暗くなつてゐた。兵法家の道では敵の間諜といふことをいみきらふのだが、いつもそんな奴等がひききりなしにはひつてゐた。（その奴等はどんなことをたくらむかしれたものでない。）このをり君は御史臺で善人を擧げ惡人を彈劾することを掌り、あくまで用心して事件の內容を微細にしらべてゐた。そのため或る嫌疑のあつた人物があつたが、無罪の人なのだからそれを殺すには忍びないで、はつきり黑白を辨別してやつた。君の長官はうはべはかりに君の意見に贊成したが、君はその長官のごきげんをそこねてとうとう官位をしりぞけてゐなかへうつされることになつた。朝廷でもその眞相はわかつてゐないではなかつたが君のためにどうともしてはくれぬ。君はそれでもだまつて口を閉ぢてなげきもせぬ。あだかも孔夫子が東西に奔走する旅人たるを甘んじ、向子平が損益の卦を讀んで富貴貧賤の道理をさとつてゐたとおなじ樣な態度でゐた。』自分はその時左拾遺の官をかたじけなうしてをり、天子の殿陛のまぢかくお仕へまをしたのである。しかるにこのさまをみてゐながら君が地方へ遷謫される樣なさわぎを見るに至つたことは、なんとも申譯のないことで死にいたるとも自己の責をふさぐことはできぬのである。自分はこれから旅路にでかけるのであるが心にかなはぬことが多いのだ、門外に一歩出れば自分の氣にかなふことはすこしも無いのだ。あなたに對してはしかく明明白白の義理にさへそむいてをる、これをおもへばうらめしくおもはれてたださへ白い頭が一層白うなる樣なきもちがする。』

發秦州(一) 【原注】乾元二年自秦州赴同谷縣(二)紀行。

秦州より發す 【原注】乾元二年秦州より同谷縣に赴くとき行を紀す。

我衰更懶拙(三)。生事(四)不自謀。　我衰へて更に懶拙なり、生事自ら謀らず。
無食問樂土(五)。無衣思南州(六)。　食無うして樂土を問ひ、衣無うして南州を思ふ。」
(七)漢源十月交(八)。天氣如涼秋。　漢源十月の交、天氣、涼秋の如し。
草木未黃落(九)。況聞山水幽。　草木未だ黃落せず、況んや山水の幽なるを聞くをや。
(一〇)栗亭名更嘉。下有良田疇(一一)。　栗亭名更に嘉し、下に良田疇あり。
充腸多薯蕷(一二)。崖蜜(一三)亦易求。　腸に充つるに薯蕷多く、崖蜜亦求め易し。
(一四)密竹復冬筍(一五)。清池(一六)可方舟(一七)。　密竹には復冬筍あり、清池、舟を方す可し。
雖傷旅寓遠。庶(一八)遂平生遊。」　旅寓の遠きを傷むと雖も、庶はくは平生の遊を遂げむ。」
(一九)此邦俯要衝(二〇)。實恐人事稠(二一)。　此の邦、要衝に俯す、實に恐る人事の稠きを。
(二二)應接非本性。登臨(二三)未銷憂。　應接、本性に非ず、登臨未だ憂を銷せず。
谿谷無異石(二四)。塞田(二五)始微收(二六)。　谿谷、異石無く、塞田始めて微しく收む。
豈復慰老夫(二七)。惆然(二八)難久留。」　豈に復た老夫を慰めむや、惆然、久しく留まり難し。」
日色隱孤戍(二九)。烏啼滿城頭(三〇)。　日色、孤戍に隱れ、烏啼きて城頭に滿つ。
中宵驅車去。飲馬寒塘(三一)流。　中宵車を驅り去り、馬に飲ふ寒塘の流れ。
(三二)磊落星月高。蒼茫(三三)雲霧浮。　磊落、星月高く、蒼茫、雲霧浮ぶ。
大哉乾坤內。吾道(三四)長悠悠(三五)(三六)。」　大なる哉乾坤の內、吾が道長く悠悠たり。」

【字解】【一】秦州　甘肅省秦州。【二】同谷縣　甘肅省階州の成縣なり、成縣はもと西康州治たり、唐の貞觀の初には成州に屬せしめ、廢康州の同谷縣を兼れ領す、天寶の初同谷郡とし、乾元の初復成州となす、作者いま同谷縣といふときは當時かく稱せしとみゆ、位置は秦州の殆ど正南にあたれり、九域志には秦州から成州まで西南二百六十里とあり。【三】懶拙　ぶしやうにて世わたりべた。【四】生事　くらしむきのこと。【五】樂土　安樂なところ。【六】南州　南方の地方。【七】漢源　漢水の發源地。成縣には東河源と南河源ありてともに飛龍峽に入りて嘉陵江に注ぐ、而して嘉陵江は即ち漢水の上流の名なり。【八】十月交　詩經の「十月之交」の毛傳には交を日月の交會ととけり、ここは蓋し十月十一月の際をさせるものならん。【九】黃落　きばんでおちる。【一〇】栗亭　隋時の縣の名、成縣の東五十里にあり、秦州を去ること百九十五里。【一一】田疇　穀の田を「田」、麻の田を「疇」といふ。【一二】薯蕷　やまのいも。【一三】崖蜜　蜜蜂ががけにてつくる「みつ」。【一四】密竹　こんではえた竹。【一五】冬筍　冬できるたけのこ。【一六】清池　池の名は詳ならず。【一七】方舟　方は二つならべること。【一八】庶　庶幾、ねがはくは。【一九】此邦　秦州をさす。【二〇】俯要衝　俯は臨のごとし、要衝は交通の要路をいふ。【二一】人事稠　世俗の事務多し。【二二】應接　うけこたへをする、【二三】登臨　その地の山に登り水に臨みしてあそぶこと。【二四】異石　非凡の形狀をした石。【二五】塞田　とりでのある地の田。【二六】微收　すこし收穫がある。【二七】老夫　自ら稱す。【二八】惆然　氣のぬけた貌。【二九】孤戍　孤立せる屯兵所。【三〇】城頭

秦州の城のうへ。【三一】寒塘　冬のつつみ。【三二】磊落　ばらばらにはなれてある貌。【三三】蒼茫　はつきりせぬ貌。【三四】吾道　有形の道路をいひ、裏面には履みおこなふみちの義もあらん。【三五】長　ながく、とこしへに、常とも通ず、つねにの意。【三六】悠悠　はるかなる貌。

【題義】作者秦州にも居ることができなくなり、乾元二年の十月に秦州から出發して成州同谷縣に赴いた、その途中の紀行をかいたのが以下十二首で、是はその第一首である。作者時に四十八歳。同谷に赴いた理由は詩のなかにみえてゐる。

【詩意】自分は老衰しかかつてからこれまでよりも一層ぶしやうで世わたりべたになり、くらしむきのことなど自分で工夫しなくなつた。いまや食物が無いからどこか安樂にくらせる土地はないかと人にたづね、衣が無いからあたたかい南方の地方のことをおもふのである。』漢水の發源地（即ち同谷の地方）は十月十一月のあはひにも、天氣がすずしい秋のやうで、草木も黄ばんで落ちぬといふことであり、ましてそこには山水の幽邃なものがあると聞いてをる。栗亭などといふといかにも栗の產地らしくいい名であり、その下には良い田地がある、やまのいもが澤山あつて腹に十分つめこむことができるし、崖に產する蜂蜜もたやすく求められる。竹の密林には冬の筍があり、すんだ水をたたへた池には舟をならべて遊ぶこともできる。旅寓としては遠すぎるといふ缺點はあるが、どうかあちらへ往つてひごろの遊びを遂げたいとおもふのである。』ここの秦州は交通の要路にのぞんでゐて、俗事が多すぎることを恐れるのである。雜多の人間に應接することは自分の本性でもなく、ここでは山水に登臨してみても自分の憂を銷すには足らぬのである。谷をのぞいても奇妙な石がみらるるでなく、とりでのある田地からはやつとすこし收穫ができた樣の始末だ、これではどうして自分を慰めることができよう、自分は生計の手段がこんなであるためぼんやりとしてしまひ、とてもここにはながくとどまつてゐるわけにゆかぬのである。（それだからここを立ち去るのだ。）』さて出發すると、太陽の色はさびしい屯兵所のあたりにかくれてしまひ、城頭にはいつぱい烏が啼いてゐる。よなかに車を驅りだして、冬のつつみの流れで馬に水をのませる。頭上は散亂して星や月が高くかがやいてゐる、前面には雲や霧がたちこめてはつきりとは見えぬ。ああ大なるかな天地の內、吾がゆくべき道程は永久に悠悠ときはまりなく前面によこたはつてゐる。』

赤（一）谷

天寒霜雪繁。遊（二）子有ㇾ所ㇾ之。（三）
豈（四）但歲（五）月暮。重（六）來未ㇾ有ㇾ期。（七）』
晨發赤谷亭。（八）險艱方自ㇾ茲。（九）

赤谷

天寒くして霜雪繁し、遊子、之く所あり。
豈に但歲月の暮るるのみならむや、重ねて來らむこと未「だ期あらず。』
晨に發す赤谷の亭、險艱方に茲自りす。

(一〇)亂石無改轍。我車已載(一一)脂。　亂石、改轍無く、我が車已に載ち脂さす。
山深苦多風。落日童(一二)稚飢。　山深くして多風に苦しむ、落日、童稚飢う。
(一三)悄然村(一四)墟迥。煙(一五)火何由追(一六)。』　悄然たり村墟の迥なるに、煙火何に由りて追はむ。』
(一七)貧病轉零落。故鄉不(一八)可思。　貧病轉た零落す、故鄉、思ふ可からず。
常恐死(一九)道路。永爲(二〇)高人嗤。』　常に恐る道路に死して、永く高人に嗤はるゝを爲さむ」とを。』

【字解】【一】赤谷　明一統志に赤谷は秦州の西南七里にあり、中に赤谷川ありと、是ならん。【二】遊子　たびびと、自己をさす。【三】之　ゆく。【四】豈但二句　かかる故に心さびしとの意をふくめたり。【五】歲月暮　十月末の頃なればとしくれかかるといふなり。【六】重來　二度・ここへくる。【七】期　時期。【八】亭　旅客のやすみば。【九】茲　此地をいふ。【一〇】亂石無改轍「北征」の石戴古車轍と同意、石亂れたちてそれがみな同一のわだちをいただいてゐる、但し我よりいふときは亂石のための故に別途を取らずそのおなじ石みちをゆくことをさす。【一一】載脂　詩經の語、すなはちあぶらさす、車のくさびにあぶらをくれること。【一二】童稚　こどもら。【一三】悄然　しよんぼり、心さびしき貌。【一四】村墟　村の廢墟、「むら」をいふ。【一五】煙火　村人のたく炊煙をさす。【一六】追　それにおひつく、そこまで達するをいふ、「追」は「煙火」を支配する動詞なり。【一七】貧病　貧乏と病氣とにより。【一八】不可思　故鄉は勝手に思うてもよいわけであるが、今は思ふことさへできない、とは悲慘の極なり、蓋し故鄉已に攙殘せられ歸るべき見込みも絕えたればなり。【一九】死道路「論語」の語、みちばたにのたれ死にする。【二〇】爲高人嗤　爲二高人所一嗤の略、高人は德のたかい人、嗤は「わらふ」。

【題義】同谷紀行の第二首にして秦州を發して最初のかかりの難場所たる赤谷といふ處をとほるときの詩なり。

【詩意】天が寒く霜雪がしげくおく、このときたびびとたる自分は一地をさしてゆくのである。歲のくれかかるといふためばかりではない、ここは二度くるといふときもありはすまい。（とおもふと悲しいのである。）』日の出のころ赤谷の亭から出發する、道路の險艱はここからはじまるのである。石の亂れ立つ路だがその同じわるいみちを車をはしらせ、自分の車にははやたびたびあぶらをさす。山はふかくなつて風の多く吹くのにこまるところへ、日も落ちかかつてこどもらはひもじがる。村さとをながめるとずつと遠方にある、どうしたらあんなところまで追ひつけようか、など心ぼそくおもふ。』自分は貧乏と病氣によつていよいよますますおちぶれた。今は故鄉のことは思ふことさへかなはぬ。いつも自分は途中でのたれ死にをして、高德ある人のものわらひになりはせぬかときづかうてをる。』

鐵堂峽(一)

鐵堂峽

山風吹遊子。(二)縹緲乘險(三)絕。　山風、遊子を吹く、縹緲、險絕に乘ず。
(四)硤形藏(五)堂隍。(六)壁色立精(七)鐵。　硤形、堂隍を藏す、壁色、精（積）鐵立つ。

徑(八)摩(九)穹蒼蟠。石與(一〇)厚地裂。
修(一一)纖無垠(一二)竹。嵌(一三)空太始(一四)雪。』
威(一五)遲哀(一六)壑底。徒(一七)旅慘不悅。
水寒長冰橫。我馬骨正折。
生涯抵(一八)弧矢。盜(一九)賊殊未滅。
飄(二〇)蓬踰(二一)三年。回首肝肺熱。』

徑は穹蒼を摩して蟠り、石は厚地と裂く。
修纖なり無垠の竹、嵌空なり太始の雪。』
威遲たり哀壑の底、徒旅、慘として悅ばず。
水寒くして長冰橫はる、我が馬、骨正に折る。
生涯、弧矢に抵る、盜賊殊に未だ滅せず。
飄蓬、三年に踰ゆ、首を回らせば肝肺熱す。』

【字解】【一】鐵堂峽　秦州の西南六十五里許の處にある峽の名、峽は山隋夾水曰峽とありて、山かひのこと。【二】標緲　氣運りてかすかにみゆるさま。【三】險絕　絕險と同じ、絕ははなはだしきをいふ。【四】峽形　峽は峽と別字なるも同義に用ひたり、或は寫訛か。【五】藏堂隍　堂はたかいざしき、隍は「城のからぼり」をいふ、山體を堂とみ、豁谷を隍とみたるならん、ここの峽の形はここに堂と隍とを藏するがごとし、余往年嘗て此句に別解を取れることあるも今此に訂正す。【六】壁色　山の崖壁のいろ。【七】精鐵　精の字本來積に作る從ふべし、仇氏此句五字みな入聲の字のみにて讀むに順ならずとて精の字に從へるも、余は積の字に從ふ。【八】摩　こする、接近の甚しきをいふ。【九】穹蒼　弓なりに彎曲せるあをぞら。【一〇】厚地　大地をいふ。【一一】修纖　修は脩の通借、ながし、纖はほそし。【一二】無垠　はてしなし、廣がりをいふ。【一三】嵌空　うつろなる貌、玲瓏といふの類、余嘗て「空にはめこむ」義とし峰頂の雪をさすと考へたり、案ずるにこれ谿底に存する雪のさまをいふ、次の「哀壑」へかかる語なり、今訂正す。【一四】太始雪　天地のはじめ以來とけぬ雪。【一五】威遲　道のうねうねするさま。【一六】哀壑　あはれをもよほすたに。【一七】徒旅　行旅のなかま、作者の一行のものをさす。【一八】抵弧矢　抵は「あたる」、弧矢は易繫辭の弧矢之利、以威天下を用ふ、弧矢は弓矢、官軍の武力をさす、「あたる」とはそのときにぶつつかりしをいふ。【一九】盜賊　賊軍をさす。【二〇】飄蓬　秋のよもぎの葉のひるがへるごとく身の轉轉してあるくをいふ。【二一】踰三年　天寶末よりかぞへて今年は三年以上になる。

【題義】同谷紀行の第三首。鐵堂峽經過のときの作。

【詩意】山の風が旅人たる自分を吹く。自分は空氣のかすかにつらなつてゐる非常な險阻なところをのぼつてゆく。この山かひの形は堂のそばに空堀をほつてある樣なさまで、かたへの絕壁の色は堆積した鐵が立てられてる樣だ。山のこみちはあをぞらを摩するほどに高くわだかまつてをる。石は大地と共につんざかれたりしてゐる。峽側にはながくほそい竹林が際限もなくつづいたり、ひくい處には太古以來とけぬ雪がすきとほる樣にきれいに橫はつてゐる。』かくしてうねりくねつてさびしいたにの底の方へくだると、一行皆のものはものがなしくぶきげんになる。谷川の水は寒くしてながい氷塊などがあり、之にふるれば我我の馬は骨が折られるほどである。自分の生涯は盜賊がおこつて官軍がそれを討伐するため弓矢をうごかすの時にあたつた。不幸にして盜賊どもはまだほろびぬ。もはや飄泊生活を送ること三年以上にもなる、首をめぐらしてこんなことをかんがへるとうれひのあまり肝や肺が火のやうにあつくなるのをおぼゆるのである。

鹽井（一）

（二）鹵中草木白。青者官（三）鹽煙。
（四）官作既有程。（五）煑鹽煙在川。
汲井歲（六）（七）搰搰。（八）出車日（九）連（一〇）連。
（一一）自公斗（一二）三百。轉（一三）致斛（一四）六千。
君子愼（一五）止足。小人苦喧（一六）闐。
（一七）我何良歎嗟。物理固自然。

鹽井

鹵中、草木白し、青き者は官鹽の煙なり。
官作既に程有り、鹽を煑れば煙、川に在り。
井を汲むこと歲に搰搰たり、車を出だすこと日に連連たり。
公自りす斗に三百、轉致す斛に六千。
君子、止足を愼む、小人、喧闐なるに苦しむ。
我何ぞ良に歎嗟せむ、物理固より自ら然り。

【字解】【一】鹽井　しほをくみ取る井なり、元和郡國志に曰く、鹽井は成州長道縣の東三十里に在り、水、岸と齊し、鹽緣めて甘美、之を食すれば氣を破る、鹽官の故城は縣の東三十里に在り、嶓冢（山の名）の西四十里に在り、相承けて煑ることを營む、味、海鹽と同じ、と。長道縣は今の鞏昌府西和縣にあり、成州よりは西北にあたる、以て鹽井の位置を知るべし。【二】鹵　鹽分を含んだ地をいふ。【三】官鹽煙　官製のしほをやくけむり。【四】官作　官の作業。【五】程　定めの課程、製鹽額の進度。【六】歲　一歲のうち。【七】搰搰　力を用ふる貌。【八】出車　できたしほを積んだ車を出すこと。【九】日　日日。【一〇】連連　ひきつづく貌。【一一】自公　官から拂ひさげること。【一二】斗三百　一斗につき三百錢。【一三】轉致　拂ひさげをうけた商人が需用者へうつし賣ること。【一四】斛六千　一石につき六千錢、卽ち一斗につき六百錢にして倍の利得をとる。【一五】愼止足　謹愼して止まり足ることをつとむ。老子に知レ止可二以不一レ殆とあり、蠡𢡟の詩に達人知二止足一とみゆ。【一六】喧闐　やかましくさわぐ、鹽價のたかきについて不平の聲多きをいふ。【一七】我何一句　自己をとがめたる語、實は深くなげくなり。

【題義】同谷紀行の第四首。鹽井をすぎて鹽商の暴利をむさぼるをなげきたる詩なり。

【詩意】鹽分をふくんだ地方は草木の葉まで白くみえてゐるが、そこに青青とたちのぼるのは官製のしほをやくけむりである。官業には一日の製鹽額のきまりがある、それでせつせとしほをにるので煙が川のうへまで橫はるのである。年中骨を折つて井から鹽をくみだし、毎日ひききりなしにできた鹽を車につんではつみいだす。官から受けだす價は一斗三百錢だが、人民に轉送される時には一斗六百錢になる。君子たるものは足ることを知つて暴利をむさぼらぬ樣にせねばならぬ。さうでないと細民たるものは喧騷を極めてしかたのないものだ。かくいうたとてむだごとだのになんで自分はそれをなげくのであるか。細利を爭ふことは物ごとの道理に於てあたりまへのことではないか。

寒峽（一）

（二）行邁日（三）悄悄。山谷勢多（四）端。
（五）雲門轉（六）絕（七）岸。積（八）阻霾（九）天（一〇）寒。
（一一）寒硤不可（一二）度。我實衣裳單。

寒峽

行邁、日に悄悄たり、山谷、勢、多端なり。
雲門、絕岸轉ず、積阻、天寒に霾る。
寒硤、度る可からず、我實に衣裳單なり。

況當仲冬交。泝(一三)沿增波瀾。　況んや仲冬の交に當り、泝沿、波瀾を増すをや。
野(一四)人尋煙語。行(一五)子傍水餐。　野人、煙を尋ねて語り、行子、水に傍うて餐す。
此生免荷(一六)殳。未敢辭路難。　此の生、殳を荷ふことを免る、未だ敢て路の難きを辭せず。

【字解】【一】寒峽　峽の名か、單に寒天の峽をいふか不明。【二】行邁　ゆきゆく。【三】悄悄　心のうれふるさま。【四】多端　一樣ならざるをいふ。【五】雲門　雲の橫はれる門、卽ち絕岸をさす。【六】轉　步につれてかはるをいふ。【七】絕岸　きつたての崖岸。【八】積阻　積みかさなりたる險阻の地。【九】霾　つちの雨ふる。【一〇】天寒　さむぞら。【一一】寒硤　題の寒峽と同じ。【一二】度　わたる、こゆること。【一三】泝沿　或は水をさかのぼり、或は水にそふ。【一四】野人　附近に住む農民。【一五】行子　旅行するもの、自己の一行をさす。【一六】荷殳　「伯兮」の詩に伯也執殳、爲王前驅とみゆ、殳は一丈二尺のほこなり、荷殳とは兵役に從事するをいふ。

【題義】同谷紀行の第五首。寒峽のさまと、經過の感想をのぶ。

【詩意】日日旅行をつづけてゆくと心がものがなしくなる、それは山や谷のありさまがますますさまざまになつてくるからだ。雲の門ともみまがふ樣なきつたての岸がうつりかはつてゆくし、さむぞらのをりからいくへもの險阻のところに土の雨がふつたりする。自分はうすい衣裳をきてをるのだ、かやうな寒い山あひはなかなかこすことがむつかしい。そのうへ十一月頃のこととて谷川にそうたりさかのぼつたりすると波もよけいにおこるのである。かかるところで田野の人人は煙のなかで相手をたづねて話をしてゐるのもあるし、また自分等は川べりで食事を取つたりする。なかなか難儀なことではあるが、すでに此の世に於て自分は武器をになうて兵役に從ふ苦しみから免れてゐる自分である、それをおもへば道路の難儀をするぐらゐのことは辭退する所ではない。

法(一)鏡寺

身危適(二)他州。勉(三)強終勞苦。
神(四)傷山行深。愁(五)破崖(六)寺古。
嬋(七)娟碧蘚(八)淨。蕭(九)摵寒籜(一〇)聚。
回(一一)回山根水。冉(一二)冉松上雨。
洩(一三)雲蒙(一四)清(一五)晨。初(一六)日翳(一七)復吐(一八)。
朱(一九)甍半光炯(二〇)。戶牖粲(二一)可(二二)數。
拄(二三)策忘前(二四)期。出(二五)蘿已亭(二六)午。
冥(二七)冥子規(二八)叫。微(二九)徑不(三〇)敢取。

法鏡寺

身危くして他州に適く、勉強するも終に勞苦なり。
神は傷む山行の深きに、愁は破る崖寺の古りたるに。
嬋娟として碧蘚淨く、蕭摵として寒籜聚る。
回回たり山根の水、冉冉たり松上の雨。
洩雲、清晨に蒙ふ、初日翳はれて復た吐かる。
朱甍半ば光炯、戶牖、粲として數ふ可し。
策に拄へられて前期を忘る、蘿を出づれば已に亭午なり。
冥冥、子規叫ぶ、微徑、敢(復)取らす。

【字解】〔一〕法鏡寺　寺の名、所在不明、ただこれ似秦州にあるならんといへり。〔二〕適　ゆく。〔三〕勉強　苦ないとふまじとつとむるなり。〔四〕神　精神。〔五〕愁破　なぐさめらるること。〔六〕層寺　法鏡寺をさす。〔七〕嬋娟　うつくしき貌。〔八〕辭　ぜにごけ。〔九〕蕭摵　さびしきさま。〔一〇〕箨　竹のかは。〔一一〕回回　紆回のさま。〔一二〕冉冉　次第に生ずるさま。〔一三〕洩雲　山よりもれ出づる雲。〔一四〕蒙　おほひかぶさる。〔一五〕淸晨　はれたあさ。〔一六〕初日　出そめの太陽。〔一七〕翳　雲のかげにせらるること。〔一八〕吐　雲からはきだされる。〔一九〕朱甍　あかきいらか。〔二〇〕烱　かがやく。〔二一〕燦　きらめくさま。〔二二〕可數　一一かぞへることができる。〔二三〕拄策　つゑに身をささへられる、つゑをつくこと。〔二四〕前期　將來の旅程期限。〔二五〕出蘿　蘿はひめかつら、松柏にはひかかるものなり、蘿の一字にて寺林をさす。〔二六〕亭午　正午。〔二七〕冥冥　くらがりのさま。〔二八〕子規　ほととぎす。〔二九〕微徑　ほそいこみち、この寺へはひるみち、蓋し寺は通路よりこのこみちをとほりていりこむなるべし、寺より出づればこの徑はふたたびとほることなし。〔三〇〕不敢（復）取　敢は「あへて」、おしきつての義、復は「ふたたび」の義、孰れにても通ずるも余は「復」の字よろしかとおもふ、取とは取徑、卽ち「この徑に由る」をいふ。

【題義】同谷紀行の第六首。法鏡寺のさまをのぶ。

【詩意】自分は一身の安危にせまられて他の州へゆくのであるが、骨折りごとだとおもふまいとはするがつまり骨折り仕事である。あまりに山みちをふかくはひるので精神はいたむが、にはかに崖のところに古寺がみえたので愁のこころがうち破られた。みれば庭前に青ごけがきよらかにしきつめてある、竹の皮が風に吹きよせられてゐる。山の下の水はうねつて音をたてて流れ、松の上からはぽつりぽつり雨がふりそそぐ。すがすがしいあしたながらに峰からわきでた雲がおほひかぶさつてゐたが、かげつた初日がまたによつきり吐きだされた。いままでうすぐらくあつた朱のいらかも半分はきらきらとみえ、戸や牖も明かに幾枚とかぞへられるやうになつた。景色にみとれて杖をついたままうつかりゆくさきの旅程をもうち忘れてゐたが、氣がついて寺林の蘿蔭からたちでるともうまひるどきだ。くらがりのところで子規がなきさけぶ。この寺への小みちは今度がとほりはじめでまたとほりをさめなのである。

（一）青陽峽

(二)塞外苦厭山。(三)南行道彌惡。
岡巒相(四)經亙。雲水(五)氣(六)參錯。
(七)林迴(八)硤角(九)來。(一〇)天窄壁面削。
(一一)磎西五里石。奮怒向我落。
仰看(一二)日車側。俯恐(一三)坤軸弱。
(一四)魑魅嘯有風。霜霰(一五)(一六)浩漠漠。
(一七)昨憶(一八)踰隴坂。高秋視(一九)吳嶽。

青陽峽

塞外、苦だ山に厭く、南行すれば道彌〻惡し。
岡巒、相經亙す、雲水、氣、參錯す。
林迴に硤角來り、天窄くして壁面削る。
磎西、五里の石、奮怒、我に向ひて落つ。
仰いで日車の側くを看、俯して坤軸の弱からむことを恐る。
魑魅嘯いて風有り、霜霰、浩として漠漠たり。
昨、憶ふ隴坂を踰えしとき、高秋、吳嶽を視き。

東笑蓮華卑。北知(二〇)崆峒(二一)薄(二二)。　東、蓮華の卑きを笑ひ、北、崆峒の薄るを知る。
(二三)超然侔壯觀。已謂殷寥廓。　超然、壯觀を侔しくす、已に謂へらく寥廓に殷ると。
(二四)突兀猶(二五)趁人。及(二六)茲歎(二七)(二八)冥漠。　突兀として猶人を趁ふ、茲に及びて冥漠なるを歎ず。

【字解】【一】靑陽峽　秦州の南路にあたれる峽の名、所在不明。【二】塞外　秦州地方をさす。【三】南行　同谷をさして南にゆく。【四】紆亙　たてにはへ、よこにわたる。【五】氣　雲水の氣。【六】參錯　いりまじる。【七】林　峽角の林。【八】峽角　峽角に同じ、峽の一隅をいふ。【九】來　こちらが進むことなれども峽角を主にしていふ。【一〇】天窄　絕壁のひまよりながむる故に天はせまし。【一一】磎　谿と同じ、たに。【一二】日車側　日車は太陽をいふ、古傳說に太陽は車にのりてはしると考へらる、側は「かたむく」。【一三】坤軸弱　坤軸は地軸、現今といふ所の地軸とちがひ大地をささふる柱軸なり、弱とはこの厚地を載せるに力のたらぬこと。【一四】魑魅　人面獸身の山怪。【一五】浩　大なる貌。【一六】漠漠　ひろくよこたはる貌。【一七】昨憶　一に「憶昨」に作る、往月のことを追憶す、これは長安より秦州へ赴くときのことなり。【一八】隴坂　鳳翔府隴州西北にある大坂。【一九】吳嶽　鳳翔府汧陽縣西にある山。【二〇】蓮華　卽ち華山、陝西西安府華陰縣にあり。【二一】崆峒　甘肅省平涼府の西にある山。【二二】薄　迫る、接近すること。【二三】超然侔壯觀・已謂殷寥廓　總解の句なり、余は倒叙とみる、故に二句前後置きかへてみるべし、「已謂」の句は過去に接し、「超然」の句は現在を倂記す、已謂とは隴坂をこえたときもはやさやうにかんがへたといふなり、殷寥廓は吳嶽を主としていふ、殷は「當る」と訓ず、史記天官書の衡殷＝南斗」の「索隱」宋均が注に殷當也といへり、寥廓とは大空のひろきすがたをいふ、超然は衆山をたかく拔くさま、侔壯觀とはこの峽にて衆山をみおろす壯大なながめと、隴坂にて吳嶽を視しときのながめとが匹敵しひとしきをいふ。【二四】突兀　つきたつさま、吳嶽の姿をいふ。【二五】猶趁人　今なほ我につきまとひ來る。【二六】及茲　茲とは現在の時をさす。【二七】歎　感歎する。【二八】冥漠　天道造化の力の不可測をいふ、冥晴茫漠としてはつきりせぬなり。

【題義】同谷紀行の第七首。靜陽峽の狀を寫し、兼ねて往月隴坂をこえしときのさまと對照してのべたり。

【詩意】塞外秦州のあたりから旣に山にはあきあきするほどであつたが、同谷に向つて南行すると道路はいよいよわるい。岡や小山がたてよこにつらなつて、雲水の氣が互に相まじはる。遠くに峽角の林がみえるとやがてそれが自分の方へくる。斷崖の壁面は削るがごとくそそりたち天もせばめられてみえる。谿の西側およそ五里の間、巖石は怒つて我に向つて落ちんとしてゐる。仰ぎみれば太陽は早くかたむくかと疑はれ、俯して地にのぞめば地軸もこの險阻を載せるには力が足らぬかときづかはれる。風の鳴るのは魑魅が嘯くのであらう。霜や霰さへ吹かれてひろく敷かれてゐる。往の月に自分は隴坂を踰えたとき、秋ふかく吳嶽を視たことがあるが、あの時は、東は華山を卑しと笑ひ、北は崆峒山と相迫るをおぼえた。その時はやいかにも吳嶽は大空に當つた雄姿を逞しくしてをるものだと感じたが、この峽までできてもまた其の壯觀兩者匹敵してゐる。卽ちかの吳嶽の突兀たる姿が現になほ我我をおひ來りつつあるので、是に於てか我我は造化の力の不可測なるを感歎せざるを得ぬ。

(一)龍門鎭　　龍門鎭

(二)細泉(三)兼(四)輕冰。(五)沮洳(六)棧道濕。　細泉と輕冰と、沮洳、棧道濕ふ。

不辭辛苦行。迫此短景(七)急。　辭せず辛苦して行くを、此の短景の急なるに迫る。
(八)石門雲雪隘。(九)(一〇)古鎭峰巒集。　石門、雲雪隘ぐ、古鎭に峰巒集まる。
(一一)旌竿暮慘(一二)澹。風水(一三)白刃(一四)澀。　旌竿、暮に慘澹たり、風水に白刃澀る。
(一五)胡馬(一六)屯成皐。(一七)防虞此(一八)(一九)何及。　胡馬、成皐に屯す、防虞、此、何ぞ及ばむ。
嗟爾(二〇)遠戍人。山寒夜中泣。　嗟、爾、遠戍の人、山寒くして夜中に泣かむ。

【字解】【一】龍門鎭　甘肅階州成縣の東にありといへり、鎭は戍兵の屯する所なり。【三】細泉　ほそくながれるわきみづ。【四】輕冰　うすくして浮べるこほり。【五】沮洳　しめりけのある地。【六】棧道　かけはしをわたした道路。【七】短景　日かげみじかし、十一月なれば日はやくくる。【八】石門　龍門の地形石壁立ちて門の如くなれるなり。【九】隘　其處をせまくする。【一〇】古鎭　卽ちこの鎭所。【一一】旌竿　はたざを、鎭所にあるもの。【一二】慘澹　あたりの氣象ものがなし。【一三】白刃　戍卒の帶ぶる刀のしらは。【一四】澀　しぶる、さびて光らぬなり。【一五】胡馬　賊軍をさす。【一六】屯成皐　屯は「たむろする」、あつまること、成皐は漢時の縣名、今河南開封府汜水縣西北にあたり、洛陽の東方にあり、乾元二年九月に安祿山が將史思明、東京（洛陽）を陷れて齊・汝・鄭・滑四州に及ぶ、成皐は鄭州のあたりなり。【一七】防虞　賊軍をふせぎ、賊に備へる心くばりをする。【一八】此　龍門鎭の軍隊をさす。【一九】何及　おひつかぬ。【二〇】遠戍人　この鎭の戍卒等をさす、遠とは成皐方面とかけはなれしをいふ。

【題義】 同谷紀行の第八首。龍門鎭を過ぎてその戍卒をあはれむ作。

【詩意】 薄冰を帶びた細い泉が、じくじく流れだして棧道がしめつてゐる。そこを十一月の日脚のつまつて早く日のくれる時節に、辛苦をものともせずあるいてゆく。門形をなしてゐる石壁のところは雲や雪にふさがれてをり、その場所は峰巒が集中してゐるところである。鎭所の樣子をみると旌竿の色も夕暮にあたつて憂ひの色をふくんでをり、風に鳴る水流で戍卒がとがんとしてゐる白刃も光がない。いま胡賊の兵馬は遠く成皐のあたりに屯してゐる、それをふせぐにはこんな場所に鎭があつても間にあふことではあるまい。ああ汝等鎭をまもる人人よ、定めし山の中は寒くして夜なかに泣いてゐることであらう。まことに氣の毒なものだ。

(一)石龕　　石龕

熊羆咆(二)我東。虎豹號我西。　熊羆、我が東に咆え、虎豹、我が西に號ぶ。
我後鬼長嘯。我前(三)狨又啼。　我が後には鬼、長嘯し、我が前には狨又啼く。
天寒昏無日。山遠道路迷。　天寒くして昏れて日無く、山遠くして道路迷ふ。
驅車石龕下。(四)仲冬見(五)虹霓。　車を驅る石龕の下、仲冬、虹霓を見る。
伐竹者誰子。悲歌上(六)雲梯。　竹を伐る者は誰が子ぞ、悲歌して雲梯に上る。
爲官採美箭。(七)五歲供(八)梁(九)齊。　官の爲めに美箭を採り、五歲、梁齊に供す。

（一〇）苦云直（一一）幹盡。無以應提（一二）攜。　苦に云ふ直幹盡きて、以て提攜に應ずる無しと。
（一三）奈何漁（一四）陽騎。（一五）颯颯驚（一六）蒸黎。　奈何ぞ漁陽の騎、颯颯として蒸黎を驚かすや。

【字解】【一】石龕　龕は石室なり、かかるものあるによりて其地の名とせるならん、所在不明。【二】呴　ほゆ。【三】狨　猿猴のたぐひにて金色の尾を有すといふ。【四】仲冬　十一月。【五】虹霓　共に「にじ」のこと、明暗の差あり。【六】雲梯　たかいはしご。【七】五歲　天寶十四載安祿山反してより乾元二年までなり。【八】梁　河南地方。【九】齊　山東地方。【一〇】苦云　苦とはこまつた様子をすること。【一一】直幹　まつすぐなみき。【一二】提攜　射手が手にてもつこと。【一三】奈何二句　詩人の語。【一四】漁陽騎　漁陽は祿山の根據地、今の直隸順天府地方、これ賊騎をさす。【一五】颯颯　風の吹く貌。【一六】蒸黎　人民のこと、「無家別」を見よ。

【題義】同谷紀行の第九首。山中の竹きりを見て世亂をいためる作。

【詩意】東には熊や羆がほえる、西には虎や豹がさけぶ。うしろには山鬼がうそぶく、前には狨がなく。（おそろしいことだ。）そらは寒く、たそがれて日は沒してしまひ、山みちとほくして道路にゆきまよふ。あだかも石龕のもとに車を驅りたててくると仲冬であるのに「にじ」がみえる。（時ならぬことだ。）このときどこのものかしらぬが、悲しき歌をうたひながらたかいはしごにのぼつて竹を伐つてゐるものがある、これは政府のためにりつぱな箭竹をとつて五年のあひだ梁・齊の地方へ供給してゐるのだ。そのものにきくとこまつた樣にして、「もうまつすぐな竹のみきはなくなつて、兵卒のもちものに應ずることができぬ」といふのだ。ああ、なんであの漁陽の叛騎らは風の吹きまくる如く人民を驚かすのであらうか。

（一）積草嶺　【原注】同谷界。

　　　積草嶺　【原注】同谷の界なり。

連峰積（二）長陰。白日遞隱見。　連峰、長陰積めり、白日遞に隱見す。
（三）颼颼林響交。（四）慘慘石狀變。　颼颼として林響交はり、慘慘として石狀變ず。
（五）山分積草嶺。（六）路異鳴（七）水縣。　山は分る積草嶺、路は異なり鳴水縣。
旅泊吾（八）道窮。（九）衰年歲（一〇）時倦。　旅泊、吾が道窮す、衰年、歲時に倦む。
卜居尙百里。（一一）休駕投（一二）諸彥。　居を卜するは尙百里、駕を休めて諸彥に投ぜむ。
（一三）邑有（一四）佳主人。情如已會面。　邑に佳なる主人有り、情、已に會面するが如し。
（一五）來書語（一六）絕妙。遠（一七）客驚深（一八）眷。　來書、語、絕妙なり、遠客、深眷に驚く。
食（一九）蕨不（二〇）願餘。茅（二一）茨眼（二二）中見。　蕨を食うて餘を願はず、茅茨、眼中に見ゆ。

【字解】【一】積草嶺　原注に同谷の界なりとあり、詩中に卜居尙百里とあれば、この嶺は秦州と成州との界に在りて同谷を距ること百里手前のところとみゆ。【二】長陰　長距離にわたるくもり。【三】颼颼　風のおとのさま。【四】慘慘　おそろしきさま。【五】

山分　このみれにて二地のわかれめとなるをいふ、謂はゆる分水嶺なり。【六】路異　わかれぢのこと。【七】鳴水　縣の名、陝西廣中府略陽縣の西にあり。【八】吾道窮　道とは有形の道路をさす。【九】衰年　老衰のとしごろをいふ。【一〇】歳時　一歳四時、旅行でくらす一年をいふ。【一一】休駕　車駕を休息させる、おちつくをいふ。【一二】投諸彦　投はとびこんでゆくこと、諸彦とは同谷の地になる衆くの賢人たち、舊知の人人をさす。【一三】邑　同谷縣。【一四】佳主人　よき主人、同谷の縣宰なるべし。【一五】來書　先方からよこしたてがみ。【一六】語絶妙　非常にいい文句。【一七】遠客　遠方の客、自己をさす。【一八】深眷　先方がふかくめをかけてくれること。【一九】饘　ぜんまい、粗食をいふ。【二〇】不願餘　餘とはそれ以外の事をさす。【二一】茅茨　自己の住むべき同谷の屋舎のかやぶきのやれ。【二二】眼中見　實際見ゆるにはあらず、心眼にてみとむるなり。

【題義】同谷紀行の第十首。いよいよ秦州のみをさめとなる積草嶺と稱する分水嶺での作。

【詩意】峰つづきていつまでもくもりがつづく、そのひまから太陽が見えたり、隱れたりする。がさがさと風がふいて林中のさまざまのひびきがいりみだれてきこえ、であふ所の巖石の形狀は刻刻恐ろしげなすがたにかはる。ここの嶺が同谷との分水嶺であり、ここの路は鳴水縣への通路とべつべつになるところだ。ここで自分の旅路もゆきつまりだ、この老衰では一年通じての旅にはあきあきする。ここから同谷の新住宅まではまだ百里ある、そこへついたら早く車をおろして知りあひの諸君の處へとびこまう。あの土地にはよい主人がゐて自分を迎へてくれる、逢はぬさきからこころもちだけはもはや面會した樣な氣がする。先ごろよこしてくれた手紙の文面では何といふ親切ないいことばがかいてあつたであらう、遠方の客たる自分はただただそれほどまでこちらを愛してくれるのかと驚くばかりだ。自分は饘でもたべて飢がしのがれさへすればいいのでそのほかのことを願ふのではない、はやそこに眼前にかやぶきの屋根がみえてゐるやうだ。

泥功山

朝行青泥上。暮在青泥中。
泥濘非一時。版築勞人功。
不畏道途遠。乃將汨沒同。
白馬爲鐵驪。小兒成老翁。
哀猿透却墜。死鹿力所窮。
寄語北來人。後來莫怱怱。

泥功山

朝に行く青泥の上、暮に在り青泥の中。
泥濘、一時に非ず、版築、人功を勞す。
畏れず道途の遠きを、乃ち將に汨沒同じからむとす。
白馬、鐵驪と爲り、小兒、老翁と成る。
哀猿、透なるも却つて墜つ、死鹿、力の窮する所。
語を寄す北來の人に、後來、怱怱たる莫れ。

【字解】【一】泥功山　同谷縣西二十里にある山なりと。【二】青泥　青色のどろ。【三】泥濘　ぬかるみ。【四】非一時　つねにかくの如くなるをいふ。【五】版築　版は定規、築は土をきれでつきかためること。【六】人功　人力をいふ。【七】汨沒同　同汨沒に同じ、汨沒とはしづむこと、同とは一行のものもろともにの義。【八】鐵驪　まつくろのうま、泥にけがさるるをいふ。【九】成老翁　これも顔面のよごれてかく見ゆるをいふならん。或はいふ、小兒の輕捷なるも老翁の遲鈍に化するをいふと。【一〇】透　智慧のあるをいふならん。【一一】死鹿　鹿の死するをいふ。【一二】北來人　北方よりくる人。【一三】後來　我より後に來るにあたりて

は。【二】忽忽　せはしく輕率なるさま。

【題義】同谷紀行の第十一首。泥功山の泥途のさまをのべたる作。

【詩意】朝も青い泥のうへをあるく。日ぐれになつても青い泥の中にをる。ここのぬかるみは只今かぎりのことでなくいつものことで、版築の人力をわづらはしてゐるのである。自分は道の遠いことははばからないが、やがて皆もろともにぬかるみにおちこんでしまひはせぬかと氣づかふのである。ここでは白馬がくろうまにかはり、こどもも老人同様になる。はしこい猿もすべつておち、鹿も力つきては死んでしまふ。こんな場所だから北方からくる人人にまうす、あとからくるにはここをうつかりとほつてはなりませぬぞよ。

鳳凰臺（一）　【原注】山峻人不至高頂。

鳳凰臺　【原注】山峻しくして、人、高頂に至らず。

（二）亭亭鳳凰臺。北（三）對西康州（四）。　亭亭たり鳳凰臺、北、西康州に對す。

（五）西伯今寂寞（六）。鳳聲亦悠悠（七）。　西伯、今寂寞たり、鳳聲、亦悠悠たり。

山峻（八）路絕蹤（九）。石林（一〇）氣高浮。　山峻しくして路、蹤を絕つ、石林、氣高く浮ぶ。

（一一）安得萬丈梯。爲（一二）君上（一三）上頭。　安んぞ萬丈の梯を得む、君が爲めに上頭に上らむ。

恐有無（一四）母雛。飢寒日啾啾（一五）。　恐らくは無母の雛有りて、飢寒、日に啾啾たらむ。

我能剖（一六）心血。飲啄（一七）慰孤愁（一八）。　我能く心血を剖きて、飲啄、孤愁を慰せむ。

（一九）心以當竹實（二〇）。炯（二一）然無外求（二二）。　心は以て竹實に當てむ、炯然、外に求むること無し。

血以當醴泉（二三）。豈徒比清流（二四）。　血は以て醴泉に當てむ、豈に徒に清流に比するのみならむや。

（二五）所重王者瑞（二六）。敢辭微命休（二七）。　重んずる所は王者の瑞なればなり、敢て辭せむや微命の休するを。

坐看綵翮長（二八）。擧意（二九）八極周（三〇）。　坐に看む綵翮長じて、擧意、八極に周からむ。

自天銜（三一）瑞圖。飛下十二樓（三二）。　天自り瑞圖を銜みて、飛び下らむ十二樓。

圖以奉至尊（三三）。鳳以（三四）垂鴻猷（三五）。　圖は以て至尊に奉じ、鳳は以て鴻猷を垂れ、

再光（三六）中興業。一洗蒼生憂（三七）。　再び中興の業を光にし、蒼生の憂を一洗せむ。

（三八）深衷正爲（三九）此。羣盜（四〇）何淹留（四一）。　深衷、正に此が爲めなり、羣盜、何ぞ淹留するや。

【字解】【一】鳳凰臺　山の名、同谷の東南七里にありと。【二】亭亭　高き貌。【三】北對　北方は對しむいてゐる。【四】西康州　唐の武德の初、同谷に西康州を置く。貞觀中に廢せらる、今古名を用ひ同谷をさす。【五】西伯　周の文王をいふ、文王は殷の紂

王のとき西伯なり、西伯は西方諸侯のとりしまり役。【六】寂寞　さびしきさま。【七】悠悠　年代の遠くへだたるをいふ、文王の時には鳳、岐山に鳴く、今それよりはるか年代を經たり。【八】峻　けはし。【九】蹤　人のあしあと。【一〇】石林　石柱のむれ。【一一】安得　希望なり。【一二】爲君　君とは一般人をさす。【一三】上上頭　上頭は山上の頂上。【一四】無母雛　母なきたゞの鳳凰のひな。【一五】啾啾　鳥のなくこゑ。【一六】剖心血　心臟の血をたちわりてだす。【一七】飲啄　のませ、ついばませる。【一八】孤愁　母親なきひなのさびしきうれひ。【一九】心　心臟。【二〇】當竹實　竹の實のかはりとする。鳳凰は「竹實ニ非レバ食ハズ醴泉ニ非レバ飲マズ」と稱せらる。【二一】炯然　かゞやく貌、心中の光明なさま。【二二】無外求　他に何等の求むる所なきなり。【二三】當醴泉　上に見ゆ、醴の泉の代りにする。【二四】比清流　清流は鶵の飲む者なり、今鳳凰の場合に借り用ふ。【二五】所重　我が之を重んずるわけは。【二六】王者瑞　帝王たる者の瑞祥とするものなるが故なり。【二七】微命休　自己のつまらぬ生命の終ること。【二八】綵翮長　鳳雛のうつくしきたちばれがのびる。【二九】擧意　鳳雛生長して高く舞ひあがる意をいだく。【三〇】八極周　八方のはてをすつかりとびめぐる。【三一】銜瑞圖　めでたき圖書をくちばしにくはへてくる、「春秋元命苞」に黃帝玄扈（石室の名）ニ洛水ノ上ニ坐シ大司馬容光等ト臨觀ス鳳凰圖ヲ銜ミテ帝ノ前ニ置ク黃帝再拜シテ圖ヲ受クとみゆ。【三二】十二樓　漢書郊祀志下に武帝の時、「方士言フモノ有リ、黃帝の時五城十二樓ヲ爲リ以テ神人ヲ執期（地名）ニ候ツ、名ケテ迎年ト曰フ、ト。」みゆ。【三三】至尊　最上の尊者、天子をいふ。【三四】鳳以　案ずるに上句に「圖以」とあり、此句に「鳳以」といふ、鳳は圖と對立せしむべきものに非ず、「鳳」は何等かの誤字ならんとおもはるれど暫く原文に據る。【三五】垂鴻猷　大なるはかりごとを垂れる、垂れるとは後後までものこすをいふ。【三六】光　光輝あらしむる、大ならしむる。【三七】蒼生　人民。【三八】深衷　心中の奧底、ふかきこころ、鳳雛をそだてて上述の如くせしめんとの念慮をさす。【三九】爲此　此とは上述の次第をさす。【四〇】羣盜　賊軍をさす。【四一】淹留　ひさしくとどまる、數年にわたりて退散せざるをいふ。

【題義】 同谷紀行の第十二首。鳳凰山の鳳雛を想像してのべたり。鳳雛が何を指すやに就ては、或は肅宗の長子廣平王俶（後に代宗となる）を除かんとせしことを指すといひ、或は房琯・張鎬等の賢相の排斥されんとするを指すといひ、明かならず。恐有㆓無母雛㆒とて假定的に言ひなせるを以て之を見れば、それとさすものはなくとも單に自己の理想をのべしやも知れざるなり。

【詩意】 高いかな彼の鳳凰臺は。北のかた西康州と相對してゐる。周の文王西伯の樣な聖人も今はです、鳳凰の聲も長く聞かれぬのである。この山はけはしくして人の足跡もたえ、石林のうへに浮べる氣が高くみえるばかりだ。もし萬丈もある梯があるなら、絕頂までのぼつてみたいものだ。そこにはともすると母親をうしなうた鳳の雛がゐて、毎日ちうちうないて飢寒を訴へてゐるかもしれぬ。さうなら自分は自分の心臟の血をゑぐりだして、これを飲ませ啄ませてその可憐なみなしごの雛のうれひをなぐさめてやらう。我が心臟をば竹の實に代用し、專心はぐくんでやらう、そのほかに欲求はない。又我が血はそれを醴泉に代用してのませてやらう、單に淸き流れの水をのませてやるぐらゐのことではない。こんなに鳳凰を重んずるわけはそれが帝王の瑞祥であるからだ。この物のためには自分の微微たる生命が終つたとていとふところではない。かくそだててやれば雛にはゆくゆくいろどられた羽がのびて、その舞ひあがるこころはつひに八方のはてまでくまなくめぐつて、天からめでたい圖書をくはへて、十二樓のところへ飛んでおり、その圖をば萬乘の天子にささげたてまつり、鳳彼自身は偉大なる謀をのちのちまでのこし、唐の中興の業をふたたび光輝あらしめ、天下の人民の憂ひを一洗してしまふであらう。自分が此山をみて深き念慮をいだくのは此事のためなのである。ああ彼の

窶がれる盜賊どもはなんで長くいつまで退散せぬのであるか。

乾元中寓居同谷縣作歌七首(一)

乾元中、同谷縣に寓居し、歌を作る　七首

有(二)客有客字子美。　客有り客有り字は子美、
白頭亂髮垂過耳。　白頭亂髮垂れて耳を過ぐ。
歲(三)拾橡(四)栗隨狙(五)公。　歲、橡栗を拾うて狙公に隨ふ、
天寒日暮山谷裏。　天寒く日暮る山谷の裏。
中(六)原無書(七)歸(八)不得。　中原、書無うして歸り得ず、
手脚凍皴(九)皮肉死(一〇)。　手脚凍皴、皮肉は死す。』
嗚呼一歌兮歌已哀。　嗚呼一歌す、歌已に哀し、
悲風爲我從天來。』　悲風我が爲めに天從り來る。』

【題義】作者乾元二年十一月に同谷に到著して十二月に蜀に入れり。同谷に寓居せるは、わづかに一箇月のみ。寓居中の作、凡そ七首あり。これ其の第一なり。客居貧苦のさまをいへり。

【詩意】ここに子美と字する旅人がゐるが、その男は頭は白く亂れた髮が垂れて耳よりもさがつてゐる。彼は山谷のうちで天寒く日の暮るるをりから、猿廻はしのあとにくつついて橡實や栗をひろうてゐる。ことしにはじめぬことながら。彼はその故鄕たる中原の方からは手紙もなく樣子が知れぬから歸ることもならず、手や脚は凍えしわだつて皮膚も肉もひからびてゐる。』ああここに第一歌をうたふ、この歌聲は頭初からすでにあはれであり、天もそれに感ずるか自分のために天から悲しさうな風が吹いてくる。

【字解】【一】同谷縣　甘肅省秦州の西南にあたれる階州成縣の地是なり、唐にては成州といひ同谷縣に治所をおく、秦州をさること二百六十五里なり。【二】客　たびびと、寓居の身ゆゑかくいふ。【三】歲　歲歲。【四】橡　とちのみ。【五】狙公　さるまはし。【六】中原　黃河の河南省を流るる地方、洛陽附近をさす。【七】書　書信。【八】歸不得　不レ得レ歸の義。【九】皴　しわだつ。【一〇】死　乾枯の甚しきをいふ。

〔二〕

長(一)鑱長鑱白木柄(二)。　長鑱、長鑱、白木の柄、
我生託子(三)以爲命(四)。　我が生、子に託して以て命と爲す。
黃(五)獨無苗山雪盛。　黃獨、苗無く、山雪盛なり、
短衣數(六)挽不掩(七)脛。　短衣數、挽けども脛を掩はず。
此(八)時與子空(九)歸來。　此の時子と空しく歸り來る、

【字解】【一】長鑱　ながい犂鐵なり。【二】柄　すきの「え」。【三】子　「おまへ」「すき」をさす。【四】命　生命。【五】黃獨　一に「黃精」に作る、藥草の名。【六】數　挽　たびたびひつぱる。【七】掩脛　掩は掩遮の義、おさへてかぶせること、脛は「はぎ」。【八】此時　歸

男呻女吟四壁靜。(一〇)(一一)　男呻、女吟、四壁靜なり。』

嗚呼二歌兮歌始放。(一二)　嗚呼、二歌す、歌始めて放つ。

閭里爲我色惆悵。(一三)(一四)(一五)　閭里、我が爲めに、色惆悵す。』

り來るときをいふ。【九】空歸　黄獨を掘りとる能はずむだにかへる。【一〇】男呻女吟　男女は家族中のそれぞれをいふ、呻吟はうめきうなる。【一一】四壁靜　靜は靜立にてさびしく立つてゐるをいふ、四壁は四方のかべ、貧しきゆゑ室中は空虚にてかべのみ立てるをいふ。【一二】放　ほしいままにうたふこと。【一三】閭里　閭は里の門、閭里にて近隣の人人をいふ。【一四】色　顔色。【一五】惆悵　うらめしき貌。

【題義】飢餓のさまをいへり。

【詩意】長い鐵の頭のついた白木の柄の犂よ。自分の生活はおまへをたよつて生命の親としてゐるのだ。山中の雪は盛につもつて黄獨の苗はみつからず、つんつるてんの短い衣を著て、いくらひつぱつても脛をかくすことはならぬ。このときおまへとから手でうちへもどつてくると、四方の壁だけがひつそり立つてゐるところで、家族の男女等は飢餓にくるしんでうなつてをる。』ああ、ここに二度めの歌をうたふ、はじめてきままに歌ひだす、これをきいては近所の人たちも自分のためにうらめしげなかほつきをしてくれる。

〔二二〕

有弟有弟在遠方。(一)　弟有り弟有り遠方に在り。

三人各瘦何人强。(二)　三人各〻瘦せたり、何人か强なる。

生別展轉不相見。(三)　生別展轉、相見ず、

胡塵暗天道路長。(四)　胡塵、天に暗うして道路長し。

東飛駕鵝後鶖鶬。(五)(六)　東に飛ぶは駕鵝、後には鶖鶬、

安得送我置汝傍。(七)(八)(九)　安んぞ我を送つて汝が傍に置くことを得む。

嗚呼三歌兮歌三發。　嗚呼三歌す、歌三び發す、

汝歸何處收兄骨。(一〇)　汝歸るも何の處にか兄が骨を收めむ。』

【字解】【一】弟　作者の弟四人あり、穎・觀・豐・占・是なり、うち占は作者に從つて蜀に入る。【二】三人　占を除きたる他の三人。【三】展轉　各地をうつりあるく、洛陽より長安、長安より秦州・同谷とかはりゆく。【四】胡塵　祿山叛軍の兵馬のちり。【五】駕鵝　雁のたぐひ野鵝なり。【六】鶖鶬　禿鶖なりといへり。【七】安得　希望の辭。【八】送我　鳥によりて送らるるなり。【九】汝　三弟をさす。【一〇】收兄骨　兄とは自己をさす、收骨とは自己の死後の事にいひ及ぶなり。

【題義】弟をおもうてつくる。

【詩意】自分には弟がある、かれらはみな遠方に居る。彼等三人どれもやせたものであるがそのうちでだれが强健であるであらうか。兵亂の塵が天をくらくするばかりで、彼等とのあひだの道路は長い、隨つて自分は彼等とはいきわかれをして、各地をうつりあるいて面會せずにゐるのである。東には駕鵝が飛び、うしろには鶖鶬が飛んでゐるが、どうしたらその鳥に送られて汝等の傍へ置いてもらふことができるのだらう。』これで自分の歌は三度めである。逢はぬうちに自分は死ぬかもしれぬ。

おまへは歸つて來たところで、どこでわたしの骨をひろつてくれるのであらうか。（自分の死に場所は豫測できぬ。）

〔四〕

有妹有妹在鍾離。
良人早歿諸孤癡。
長淮浪高蛟龍怒。
十年不見來何時。
扁舟欲往箭滿眼。
杳杳南國多旌旗。
嗚呼四歌兮歌四奏。
林猿爲我啼清晝。

〔四〕

妹有り妹有り鍾離に在り、
良人早く歿して諸孤癡なり。
長淮浪高うして蛟龍怒る、
十年見ず、來るは何の時ぞ。
扁舟往かむと欲すれば箭、眼に滿つ、
杳杳南國、旌旗多し。』
嗚呼四歌す、歌四たび奏す、
林猿我が爲めに清晝に啼く。』

【字解】【一】妹　作者の「元日寄韋氏妹」詩（上巻三七〇頁）に近聞韋氏妹、遠在漢鍾離、郎伯殊方鎭、京華舊國移、とある妹なり。【二】鍾離　安徽省鳳陽府臨淮縣。【三】良人　をつと、即ち韋某をいふ。【四】諸孤癡　孤とは遺兒をいふ、癡は稚くして知なきをいふ。【五】長淮　淮水をいふ、鳳陽は淮水の南にあり。【六】蛟龍　以て盜賊の人を害する者に比す。【七】來　妹がこちらへくること。【八】往　こちらから妹の方へゆく。【九】箭滿眼　眼中見る所は弓箭のみ。【一〇】杳杳　はるか。【一一】南國　淮水地方をいふ。【一二】多旌旗　旌旗は軍隊の用ふるもの、其の多きはどこも軍隊ばかりなるをいふ。【一三】四奏　四たびその歌曲を奏でる。【一四】清晝　まひるなか。

【題義】妹をおもふ作。

【詩意】鍾離には妹がゐる。彼の女はその夫は早くなくなり多くの遺兒はまだ智慧づかぬ。淮水のあたりは風浪が高く蛟龍の恐るべきものが怒りつつある。自分は十年も彼女と面會せぬがいつ彼女はこちらへ來ることができよう。こちらから小舟に乘つて往かうかとおもへば見わたすかぎり弓箭ばかりであり、はるばるとほい南國の方も軍隊の旗ばかりたくさんある。』ああ我が歌はこれで四たびめを奏するのである。これをきいては林の猿も自分に同情してまひるながら啼きたてる。

〔五〕

四山多風溪水急。
寒雨颯颯枯樹濕。
黃蒿古城雲不開。
白狐跳梁黃狐立。
我生何爲在窮谷。
中夜起坐萬感集。

〔五〕

四山風多くして溪水急なり、
寒雨颯颯として枯樹濕ふ。
黃蒿の古城、雲開けず、
白狐は跳梁、黃狐は立つ。
我が生何爲れぞ窮谷に在る、
中夜起坐して萬感集る。』

【字解】【一】颯颯　はたはた風のあふる貌。【二】蒿　よもぎ。【三】古城　同谷縣城。【四】跳梁　はねくりまはる。【五】窮谷　ゆきつまつたたに、同谷の地をいふ。【六】起坐　一起一坐。【七】魂招不來歸故鄕　諸說多し、鄙說をのぶ、魂を招くことは屈原・宋玉等の賦に見ゆ、生き靈をよびもどすことなり、

嗚呼五歌兮歌正長。　嗚呼五歌す、歌正に長し、
魂招不來歸故鄕。(七)　魂招けども來らず故鄕に歸らむ。』

杜甫自身の詩にも「翦紙招我魂」、「老魂招不得・南方實有未招魂」等の句あり、本句の意は離散せる魂は之を招くと雖も來らざれども願くは之を招きよせて共に故鄕に歸らんと欲すといふに在らんか、一說には「魂已に自己に先ちて故鄕に歸れり、故に之を招くと雖も來らず」ととく。これは「魂招けども來らず故鄕に歸りぬ」とみるなり。

【題義】窮谷に居るさびしさより歸鄕の念をうごかすことをのぶ。

【詩意】四方の山には多く風が吹いて溪川の水が急に流れ、冬の雨が風にあふられて枯れた樹木がうるほされる。黃色いよもぎのはびこつた古城には雲がとざし、白狐ははねてとび黃狐はつつ立ちあがる。自分の生涯はなにとてかかる窮谷にをらねばならぬのか、夜なかに起きてみても坐つてみてもただ千萬無量の感が集り來るのである。』これで第五歌であるが、その歌ふ聲やながい。からだを離れた魂は招いたとて來はせぬが自分はそれをよび迎へてともに故鄕にかへりたいとおもふ。』

〔六〕

南(一)有龍兮在山湫(二)。　南に龍有り、山湫に在り、
古木巃嵷(三)枝相樛(四)。　古木巃嵷、枝相樛す。
木葉黃落(五)龍正蟄(六)。　木葉黃落、龍正に蟄す、
蝮蛇(七)東來水上游(八)。　蝮蛇東來、水上に游す。
我行怪此(九)安敢出(一〇)。　我行いて此を怪む、安んぞ敢て出でむ、
拔劍欲斬(一一)且復休。』　劍を拔き斬らむと欲して且復た休す。』
嗚呼六歌兮歌思(一二)遲。　嗚呼六歌す、歌思遲し、
溪壑爲我廻春姿(一三)。』　溪壑、我が爲めに春姿を廻へさむ。』

【字解】〔一〕南　同谷縣東南の萬丈潭をさすといへり、潭のことは次篇に出づ。〔二〕山湫　即ち龍のすむ「ふち」。〔三〕巃嵷　いかめしくしげりあふ貌。〔四〕樛　枝のまがり垂下するさま。〔五〕黃落　きばみておつる。〔六〕蟄　穴ごもりする。〔七〕蝮蛇　「まむし」、龍は君に比し蛇は賊に比すといへり、しかし龍を自己に比し蛇を他の小人に比したるやも知れざるなり、「萬丈潭」の龍は自己らしければなり。〔八〕游　遊の音借ならん、あそぶ。〔九〕此　蝮蛇のさまをさす。〔一〇〕出　居處より外へでる。〔一一〕斬　蛇をきる。〔一二〕歌思　歌想なり。〔一三〕廻春姿　春時の姿を回復する、冬なればこそ龍は蟄す、春になれば穴より出づ、故に春の來らんことをねがふなり。

【題義】山湫の龍についての感をのぶ。

【詩意】南方の山の「ふち」に龍がゐる。そこは古木がいかめしくしげりあひ、枝がたがひに垂れさがつてゐる。木の葉は黃ばんで落ちたので龍はちやうどあなごもりをした、そこへまむしへびが東の方からやつてきてふちの水の上にあそんでゐる。自分はでかけてはみたもののこんなふしぎなさまを見てはどうしてでかけられようぞ、劍をぬいてそのへびを斬らうかともおもうたがまたやめてしまつた。』ああこれは第六歌である、六歌となると歌想もはやくはでてこぬ。願ふところは溪壑が自分の

ために早く春のすがたを回復してくれることだ。そんなら龍もまたでかけることができるだらう。』

〔七〕

男兒生不成名身已老。
三年飢走荒山道。
長安卿相多少年。
富貴應須致身早。
山中儒生舊相識。
但話宿昔傷懷抱。
嗚呼七歌兮悄終曲。
仰視皇天白日速。

〔七〕

男兒生れて名を成さず、身已に老ゆ、
三年飢走す、荒山の道。
長安の卿相、少年多し、
富貴には應に須らく身を致すこと早かるべし。
山中の儒生は舊相識、
但宿昔を話すれば懷抱を痛ましむ。』
嗚呼七歌す、悄として曲を終ふ、
仰いで皇天を視れば白日速なり。』

【字解】〔一〕三年　至德二載より乾元二年まで。〔二〕荒山　あれはてた山。〔三〕卿相　卿や宰相。〔四〕致身　致とは富貴の地位へ身をもつてゆくこと。〔五〕山中儒生　舊說にいふ、同谷山中の友、たとへば李銜の如きをさす、と。余は作者自己をいふものと考ふ。〔六〕舊相識　ふるくからのしりあひ、これは自己と長安卿相とのあひだがらをいふ。〔七〕但話　話はだれかとはなしするなり、舊說によれば作者が儒生と話するなり。〔八〕宿昔　むかしの事がら。〔九〕懷抱　胸中をいふ。〔一〇〕悄　しよんぼり、心のひきたたぬ貌。〔一一〕終曲　曲はこの七歌の曲。〔一二〕速　走ることのすみやかなこと、時間の早くすぎること。

【題意】長安卿相の榮達と自己晚年の不遇とを對比して感慨をのべたり。七律の「同學少年多不賤」と同意ならん。

【詩意】自分は男兒でありながら生れてから功名を成しとげることができぬうちに年とつてしまひ、三年の間あれはてた山の中の道路を飢餓に驅られて走つてゐる。長安の卿相はとみれば彼等は多くは少年のともがらである。してみれば人たるものは早く我が身を富貴の地位に致さねばならぬものであらう、老いてはだめだ。この山中の儒生たる自分ももとは彼等富貴の人人とはしりあひのものなのだが、二者のへだたりはどうだ。だからただむかしばなしをしさへすれば自分は胸のうちがかなしくなるのである。』ああ第七歌、これでさびしく曲を終るのである。うへをむいて大空をながめると太陽はどんどん早くはしりゆく、歎息すべきではないか。』

萬丈潭　〔原注〕同谷縣作。

青溪含冥寞。神物有顯晦。
龍依積水蟠。窟壓萬丈內。
跼步凌垠堮。側身下煙靄。

萬丈潭　【原注】同谷縣にて作る。

青溪、冥寞を含む、神物、顯晦有り。
龍は積水に依りて蟠る、窟は壓せらる萬丈の內。
跼步、垠堮を淩ぎ、身を側てて煙靄より下る。

(一二)前臨(一三)洪濤寬。(一四)却立(一五)蒼石大。
山危(一六)一徑盡。岸絶(一七)兩壁對。
(一八)削成(一九)根虛無。(二〇)倒影(二一)垂(二二)澹瀩。
(二三)黑知(二四)灣澴底。(二五)清見(二六)光烱碎。
(二七)孤雲(二八)到來深。飛鳥(二九)不在外。
高蘿成(三〇)帷幄。寒木(三一)壘(三二)旌旆。
遠川曲通流。(三三)嵌竇(三四)潛(三五)洩瀨。
(三六)造幽無人境。發興自我輩。
告歸遺恨多。將老斯遊(三七)最。
(三八)閉藏(三九)脩鱗蟄。(四〇)出入(四一)巨石礙。
(四二)何當(四三)炎天過。快意(四四)風雲會。

前みて洪濤の寬なるに臨む、却立すれば蒼石大なり。
山危くして一徑盡き、岸絶えて兩壁對す。
削成、虛無に根す、倒影、澹瀩たるに垂る。
黑は知る灣澴たる底、淸は見る光烱碎くるを。
孤雲、到來深し、飛鳥、外に在らず。
高蘿、帷幄を成す、寒木、旌旆を壘（疊）す。
遠川曲りて流を通じ、嵌竇潛みて瀨を洩らす。
幽に造る無人の境、興を發するは我輩よりす。
歸を告ぐる遺恨多し、將に老いむとして斯の遊最なり。
閉藏、脩鱗蟄す、出入、巨石に礙へらる。
何か當に炎天に過ぎりて、快意、風雲に會すべき。

【字解】【一】萬丈潭　同谷縣東南七里にあり。【二】青溪含冥寞　青溪は青色の水をたたへし溪、潭は溪の或る部分に在るならん、冥寞は冥漠に同じからん、蓋し天をいふ、含とはそれを容れるをいふ、この青色の溪水は上、天をひたしいれてをるといふなり、孟浩然が詩句に「涵虛混太淸」とあるに近き義ならん。或は含を合に作れり、然らば青溪合冥漠なるべし、青溪の水この潭に會合して茫漠としてなるをいふ、今含字に從ひて說く。【三】神物　不思議なもの、龍をいふ。【四】顯晦　あらはれるとかくれると。【五】積水　潭につもれる水。【六】窟　いはや、龍の住む穴。【七】萬丈　崖壁の高さをいふ。【八】跼步　せぐくまりてあゆむ。【九】淩塤塿　塤塿は水のそばの岸壁なり、淩とはそれをのぼること。【一〇】側身　身をかたへによせかける。【一一】下煙霧　けむりもやの間よりしたへとくだる。【一二】前　前進。【一三】洪濤寬　潭面のさま。【一四】却立　一步しりぞきて立つ。【一五】蒼石　即ち岸壁これは壁の實質によりていへり。【一六】一徑　即ちこの潭へかよふこみち。【一七】兩壁　潭側に對立せる岸壁あるならん。【一八】削成　けづり成されたるもの、岸壁のさまをいひて岸壁その物をさす。【一九】根虛無　虛無は潭水の深きをさす、根とは根がはえた様にそこに深くつき入れるをいふ。【二〇】倒影　壁のさかしまに水にうつるかげ。【二一】垂　水面に落ちてゐること。【二二】澹瀩　淸くたたへたる貌。【二三】黑　深水のくろずみたる色。【二四】灣澴　水のまがり、あつまりてながるるさま。【二五】淸　水のすめること。【二六】光烱　ひかりかがやくこと。【二七】孤雲　一片のくも。【二八】到來深　到來とはこの潭上へ來ること、深を一に倒に作れり、倒來ならば雲さかしまにうへより下へ垂れ來るをいふ、深とは水面までよほどの距離あるをいふ。【二九】不在外　壁高きを以て飛ぶ鳥もその以內にあるといふなり。【三〇】帷幄　帷はよこにはる「まく」、幄はうへにはる「まく」、共に幕をいふ。【三一】壘　或は疊に作る、いづれにしてもたたみあぐること。【三二】旌旆　「はた」。【三三】嵌竇　「あな」。【三四】潛　地下をもぐる。【三五】洩瀨　はやせとなりて流るる水をもらす。【三六】造幽　幽邃なる場所に至る、この幽と無人境とは同一物なり、無人の境たる幽處に至るをいふ。【三七】最　最上のおもしろきあそび。【三八】閉藏　とぢこもる。【三九】脩鱗　長身なるうろこある生物、龍をさす。【四〇】出入　自己がここへ往來すること、舊說龍についていふとなり、然れども龍は巨石ぐらゐにその進退をさまたげらるべきものに非ず。【四一】巨石　上の蒼石大の蒼石なるべし。【四二】何當　何は「何時」なり。【四三】炎天　夏時をいふ。【四四】風雲　或は雲を雨に作る。

【通義】同谷縣にある萬丈潭にあそびて龍のことに感じて作る。龍は暗に自己を比せるならん。

【詩意】青溪の水が冥漠なる大空をひたしいれてをる。ここに住む神物にもあらはれるときとかくれ

てをるときとがある。いまはそのかくれてをる時である、すなはち龍はこのたんとつもつてゐる水に依つてとぐろまいてゐるのである。その住むいはやは萬丈の石壁の内に壓せられて奥底にある。自分はそこへ達するためにせぐくまりながらあるいて岸の崖をのぼり、また身體を片方へよせながら煙靄の間から下方へとくだる。さてくだつてまへへすすみでてはおほなみのひろらかにうごいてゐるところにさしかかつてみ、またひとあしさがつては偉大な蒼色の石壁をせおうて立つ。ここにては危險な山の一すぢみちが盡き、左右兩方に岸壁が對立してをる。その削り成された岸壁は虛無なる水に深く根ざし、そのさかしまにうつる影はきよくたたへた水面に落ちこんでをる。どすぐろいのを見ればそれは水が諸種の方向に流るる水をあつめた底であることがわかるし、その清らかさは水面のきらきらしたひかりの碎くるのを見ればわかる。一片の雲がここに浮び來れば直下水面までその深さ知られぬほどであり、鳥が飛ぶとしてもそれは周圍の絕壁以外にはいでない。附近の高くはえた蘿は幕の狀をなし、冬がれの木は旌をつみかさねた樣である。遠方の川もまがりながらここへ流れを通はしてをり、どこぞに穴があつてそこをくぐつてこのふちの水がはやせをもらしてゐる。自分はこの無人の境地たる幽邃の場所に來て之を見て大に興をおこす、これ我輩によつて始めて然るのである。ここからかへらうとするにあたつてはのこりをしいことが多い、老年にさしかかつてはこんなおもしろい遊びはほかにない、これが第一である。いま龍はここにかくれてをる。ここへ出入往來するには巨大なる岸壁のさまたげがある。（或は龍は石にさまたげられてここにあなごもりしてをる）いつか夏にあたつてここへたづねきて、こころもち愉快に龍が風雲をまき起すのにであふことができようぞ。

杜少陵詩集　卷九

發同谷縣　【原注】乾元二年十二月一日自(一)隴右赴(二)成都紀行。

同谷縣より發す　【原注】乾元二年十二月一日隴右より成都に赴くとき行を紀す。

(三)賢有不(四)黔突。(五)聖有不(六)煖席。　賢に突を黔にせざる有り、聖に席を煖にせざる有り。

況我飢愚人。焉能尙(七)安宅。　況んや我飢愚の人をや、焉んぞ能く尙宅に安んせむ。

始來(八)茲山中。(九)休駕喜地僻。　始めて茲の山中に來り、駕を休めて地の僻なるを喜ぶ。

奈何迫(一〇)物累。一歲(一一)四行役。　奈何ぞ物累に迫られて、一歲に四たび行役するや。

(一二)忡忡去(一三)絶境。(一四)杳杳更遠(一五)適。　忡忡として絶境を去り、杳杳更に遠く適く。

(一六)停(一七)驂龍潭雲。廻首(一八)虎崖石。　驂を停む龍潭の雲、首を廻らす虎崖の石。

臨(一九)歧別(二〇)數子。握手淚再滴。　歧に臨みて數子に別る、手を握りて淚再び滴る。

(二一)交情無舊深。(二二)窮老多(二三)慘慼。　交情、舊深無し、窮老、慘慼多し。

平生懶拙意。偶値棲遁跡。
去住與願違。仰慚林間翮。

平生懶拙の意、偶ま棲遁の跡に値ふ。去住、願と違ふ、仰いで林間の翮に慚づ。

【字解】【一】隴右　秦州・同谷みな隴右の地なり。【二】成都　四川省成都府。【三】賢　賢人、墨子をいふ。【四】黔突　かまどを黑色にくすべる、飯を炊ぎつづくるをいふ。【五】聖　聖人、孔子をいふ。【六】煖席　むしろをあたたかにする、同じ席にながくすわること。「淮南子」に墨子無黔突、孔子無煖席とみゆ、墨子も孔子もつねに東西に奔走して世の人を救はんとせし故、同じかまどを長く煖いたり、同じ席に長く坐りしこと無しといふなり。【七】安宅　宅におちついてをる。【八】茲山中　同谷の山中。【九】休駕　車駕を休息させる。【一〇】物累　妻子衣食のわづらひ。【一一】四行役　作者今年春洛陽より華州にかへり、華州より秦州にゆき、冬は秦州より同谷に、同谷より更に成都にゆかんとす、これ四たび行役するなり。【一二】忡忡　うれふる貌。【一三】絕境　かけはなれた場所、同谷をいふ。【一四】杳杳　はるばる。【一五】適　ゆく。【一六】停驂　驂はそへうま、二頭の馬の外にかはり馬がも一匹あるなり、停は「とどむ」、急に立ち去りかねるさまなり。【一七】龍潭　即ち萬丈潭なるべし。【一八】虎崖　寄贊上人詩に徘徊虎穴上とある虎穴かといへる說あるも恐らくは然らず、これ同谷の地に別に虎崖と稱するものあるなるべし。【一九】岐　わかれみち。【二〇】數子　同谷の交友三四の人人。【二一】交情無舊深　仇注に不必舊交深契也とときたるも今取らず。仇氏は數子を以て新交とみなして新交にても可なり、必しも舊交の要なしと解するなり、余は數子即ち舊交とみる、これは成都に赴かんとするに際して成都著後の友は新交となり、同谷にての友は舊交となると考ふればなり、無舊深とは同谷を去りては、また今日の如き舊交の深きもの有らずといへるなり。【二二】窮老　困窮衰老。【二三】慘慼　ものがなしきうれひ。【二四】懶拙　ぶしやう、よわたりのへた。【二五】値　あふ。【二六】棲遁跡　棲遁の地といふほどの意。【二七】去住　ここを去ると、ここにとどまると。【二八】願　住まるが本願なり。【二九】林間翮　翮は鳥のたちばね、以て鳥そのものをさす、鳥は林中に在りて其所を得たり、人卸てしからず。

【題義】作者同谷に來りしが、ここにも居る能はずして乾元二年十二月一日つひに同谷より出發して南のかた成都へ赴かんとす、その旅中のさまをうつして本篇以下凡そ十二首の紀行詩をなす。これ其の第一首なり。居住の安定を得ざるの情をのべたり。

【詩意】賢人のなかにも墨子の如くかまどをくすべらす暇なきものがあり、聖人のなかにも孔子の如く坐席のあたたかであるひまがないものがある。まして自分のやうな飢にかられ且愚なるものは、どうして自分の宅におちついてゐることができようぞ。自分ははじめてこの同谷の山中へ來てここで車をやすめ、土地の邊鄙なのを喜んでをつたのだ。しかるになんで事物のわづらひに迫られて、一年のうちに四回もたびをせねばならぬのであるか。自分はうれはしくこのかけはなれた場所を去つて、はるばるともつと遠いところへゆくのである。驂をとどめて龍潭の雲をながめたり、ふりかへつて虎崖の石をながめたり、心はあとへひかれるのである。いよいよわかれ路のところで三四の人人と別れをつげ、手を握りかはしてふたたび淚をながす。ゆくさきではこの人人たちとの交りほどの情愛はあるまいとおもふと、窮老の身にとつてはつらいうれひが增さることである。ふだんからぶしやうで世わたりのへたな自分のこころでは、偶然この地の樣な遁棲にいい場所にであうていいぐあひだとおもうてゐたのに、去住につけて自己の本願とちがふことになつた、それで仰いでは林中に得意がほしてゐる鳥に對してもはづかしく感ずるのである。

木皮嶺(一)

首路(二)栗亭(三)西。尙想(四)鳳凰村。
季冬(五)攜童稚。辛苦赴(六)蜀門。
南登木皮嶺。艱險不易論。
汗流被我體。祁(七)寒爲之暄(八)。
遠岫(九)爭輔佐(一〇)。千巖自崩奔(一一)。
始知五嶽(一二)外。別有他山尊。
仰干(一三)塞大明(一四)。俯入(一五)裂厚坤(一六)。
再聞虎豹鬪。屢踢(一七)風水昏。
高(一八)有廢閣道(一九)。摧折如斷轅(二〇)。
下有冬青林(二一)。石上走長根。
西崖特秀發(二二)。煥(二三)若靈芝(二四)繁。
潤(二五)聚金碧(二六)氣。清無沙土痕。
憶觀崑崙(二七)圖。目擊(二八)玄圃(二九)存。
對此(三〇)欲何適。默傷垂(三一)老魂。

木皮嶺

首路、栗亭の西、尙想ふ鳳凰村。
季冬、童稚を攜へ、辛苦、蜀門に赴く。
南、木皮嶺に登る、艱險、論じ易からず。
汗流れて我が體に被る、祁寒之が爲めに暄なり。
遠岫爭うて輔佐す、千巖自ら崩奔す。
始めて知る五嶽の外、別に他山の尊き有るを。
仰ぎ干せば大明を塞ぎ、俯して入れば厚坤裂く。
再び聞く虎豹の鬪ふを、屢風水の昏きに踢す。
高きには廢れし閣道あり、摧折、斷轅の如し。
下に冬青の林有り、石上に長根走る。
西崖は特に秀發、煥として靈芝繁きが若し。
潤は聚む金碧の氣、清、沙土の痕無し。
憶ふ崑崙の圖を觀しことを、目擊して玄圃存す。
此に對して何くに適かむと欲する、默して垂老の魂を傷ましむ。

【字解】【一】木皮嶺　同谷より東南にあたり、今秦州徽縣の西十里に在り。【二】首路　はじめてのみち。【三】栗亭　「發秦州」にみゆ。【四】鳳凰村　村の名、鳳凰臺の附近にあるなるべし。【五】季冬　十二月。【六】蜀門　卽ち劍門。【七】祁寒　はげしきさむさ。【八】暄　あたたか。【九】遠岫　遠山、岫は穴のあるやま。【一〇】輔佐　この嶺のてだすけをする。【一一】崩奔　崩落と解するが古義なり、しかしここは亂れて走る形勢をいふかと考ふ。【一二】五嶽　東は泰山、西は華山、南は霍山、北は恒山、中央は嵩山、これを五嶽といふ。【一三】仰干　干とは「凌ぐ」といふほどの意ならん、自己がのぼりゆくことならん。【一四】大明　日をいふ、日の光のこと。【一五】俯入　自己が俯して下方へはひりこむ、山路をくだるをいふ。【一六】厚坤　大地。【一七】踢　せぐくまる。【一八】高　高處。【一九】閣道　棧道。【二〇】斷轅　たちきれたながえ、車のかぢ棒。【二一】冬青　モチの木、アヲキの類。【二二】秀發　ひいであらはるる。【二三】煥　かがやく貌。【二四】靈芝　仙草。【二五】潤　うるほひあり。【二六】金碧　黃金碧玉。【二七】崑崙　仙山なり。【二八】目擊　ひとめみたままで。【二九】玄圃　縣（懸）圃ともいふ、屋上庭苑なり、崑崙山に在りとせられし靈苑。【三〇】此　現に見る靈境をさす。【三一】垂老魂　老いかかつた自己のたましひ。

【題義】成都紀行の第二首。木皮嶺をすぎて靈境のさまをのぶ。

【詩意】已にすぎた鳳凰村のことなどおもひながら、行程の第一路たる栗亭の西の方をとほる。この冬の季にこどもらをたづさへて、なんぎしながら蜀門の方へと赴くのである。南方この木皮嶺に登る、そのみちのなんぎなことはなかなか口ではいふことがむつかしい。汗はからだにながれ、嚴寒の候もそれがためにあたたかく感ぜられる。遠方の山は爭うてこの嶺をたすけるかの如く、多くの巖石もき

まりなく亂れ走つてゐる。ここで始めて五嶽の外にも別に尊い他の山のあることがわかる。仰ぎのぼればこの山勢は日の光をも塞がんとし、俯してくだればこの山勢は大地を裂けるが如くである。一度ならず虎豹のたたかふをきき、しばしば風水の氣のくらきあたりに身をかがめる。高いところには今は無用になつた棧道がある、それはくだけてちぎれた車の桛棒のやうになつてゐる。下の方には冬青の林があり、その長い根は石の上を走つてゐる。西方の崖は特別にたかくあらはれをり、なにか生えてゐるのはかがやいて靈芝かなぞがしげつてゐる如くにみえてゐる。そのうるほひをふくんださまは黄金碧玉の氣が聚つてゐるためであらう、淸らかですこしも沙や土の痕さへない樣である。まへに崑崙山の圖を觀たことを記憶してゐるが、いまのあたり玄圃の靈苑が存在してゐるのである。こんな靈境に對しながら自分はここをはなれてどこへゆかうとするのであるか、かくかんがへるとただだまつて年老いかかつた心をいためるばかりである。

(一)白沙渡

(二)畏途隨(三)長江。(四)渡口下絶岸。
(五)差池(六)上舟楫。(七)杳窕入(八)雲漢。

白沙渡

畏途、長江に隨ひ、渡口、絶岸を下る。
差池して舟楫上る、杳窕、雲漢に入る。

天寒荒野外。日暮中流半。
(九)我馬向北嘶。(一〇)山猿飲相喚。
水清石(一一)礧礧。沙白灘(一二)漫漫。
(一三)迴然洗愁辛。多病一(一四)疎散。
高壁(一五)抵(一六)嶔崟。洪濤越(一七)淩亂。
臨風獨回首。(一八)攬轡復三嘆。

天は寒し荒野の外、日は暮る中流の半。
我が馬、北に向つて嘶く、山猿飲みて相喚ぶ。
水淸くして石礧礧たり、沙白くして灘漫漫たり。
迴然、愁辛を洗ふ、多病一に疎散なり。
高壁、嶔崟たるに抵り、洪濤、淩亂たるを越ゆ。
風に臨みて獨り首を回らす、轡を攬りて復た三嘆す。

【字解】【一】白沙渡　渡の名、同谷から南行して始めて嘉陵江をわたらうとする處の渡の名だといふこと。嘉陵江は陝西鞏昌府の鳳縣から源を發して東して兩當・略陽を經、東谷等の水をあつめ四川省内を流通して揚子江に合する水である。【二】畏途　おそるべきみち。【三】長江　嘉陵江をさす。【四】渡口　渡口に於てするをいふ。【五】差池　たがひちがひのさま、楫をあやつる貌。【六】上　上流へのぼること。【七】杳窕　おくふかくはるか。【八】雲漢　あまのがは、川をたとへていふ。【九】我馬　舟にある馬なり。【一〇】山猿　岸の山手のさる。【一一】礧礧　石のつみかさなれる貌。【一二】漫漫　ひろきさま。【一三】迴然　はるか。【一四】疎散　きえうせるさま。【一五】抵　至る。【一六】嶔崟　けはしき貌。【一七】淩亂　なみのみだるるさま。【一八】攬轡　たづなを手中に收めとる、陸行するをいふ。

【題義】成都紀行の第三首。白沙渡のさまをのぶ。

【詩意】畏るべき途を嘉陵江にくつついてあるき、ここの渡りばに於て絶壁の岸をくだる、それから

舟にのつてかたみに楫をつかうて上流へとのぼり、おくふかくあまのがはらの如き水面へはひつてゆく。荒野のそとは天の色寒く、川のなかほどで日はくれた。舟中の我が馬は北をむいていななく。山の猿は水を飲みながらよびかはしてゐる。水はすみきつて石はつもつてをり、沙は白く灘はひろく横はつてゐる。之をみて心地とほく平生のうさつらさはすつかり洗ひ去られた樣であり、さまざまの病氣も全く散りうせた樣である。さてみだれたつた大なみのところをふみこえて、けはしき高い岸壁へとのぼる、ここで風にのぞんで獨りふりかへつてみ、また旅行をつづくることかとたづなを手にしながらいくたびもなげく。

水會渡(一)

山行有常程(二)。中夜尚未安(三)。
微月沒已久。崖傾路何難。
大江(四)動我前。洶(五)若溟渤(六)寬。
篙師(七)暗理楫(八)。歌笑輕波瀾。
霜濃木石滑。風急手足寒。
入舟已千憂。陟(九)巘仍萬盤(一〇)。
迴眺(一一)積水(一二)外。始知衆星乾(一三)。
遠遊令(一四)人瘦。衰疾(一五)慙(一六)加餐。

水會渡

山行、常程有り、中夜尚未だ安んせず。
微月、沒する已に久し、崖傾きて路何ぞ難き。
大江我が前に動く、洶として溟渤の寬なるが若し。
篙師、暗に楫を理む、歌笑、波瀾を輕んず。
霜濃にして木石滑に、風急にして手足寒し。
舟に入れば已に千憂、巘に陟れば仍萬盤。
迴眺す積水の外、始めて知る衆星の乾くを。
遠遊、人をして瘦せしむ、衰疾、加餐に慙づ。

【字解】【一】水會渡　これ嘉陵江が略陽をすぎて東谷等の水をあつむる處ならんといふ。略陽は縣名、今陝西漢中府に屬す。【二】常程　きまつた旅程、途中宿處なければそのある處までは必ず進まねばならぬ。【三】安　おちついてゐること。【四】大江　嘉陵江。【五】洶　水のわきたつ貌。【六】溟渤　ひろうみ。【七】篙師　水竿をあやつる船頭。【八】理楫　かひをうまくつかふ。【九】陟巘　やまにのぼる、舟よりあがつてからのことなり。【一〇】萬盤　みちがいくうねりにもまがりくれる。【一一】迴眺　ふりかへつてみる。【一二】積水　江の水量の多きをいふ。【一三】衆星乾　水に泛んでゐるときは水面廣ければ水と天とくつつき星も水のなかにひたされし如く見ゆる、今山路にかかつてから見れば星はやはり水から離れてゐる、それを「乾く」といへるなり、「濕める」の反對。【一四】令人瘦　勞苦のためなり。【一五】衰疾　老衰、疾病。【一六】慙加餐　加餐の語に對してはづ、古詩に、思君令人瘦、努力加餐飯とあり、瘦せぬ樣に御飯を多くたべようといふなり。

【題義】成都紀行の第四首。水會渡のさまをのぶ。

【詩意】山路をゆくに日程がきまつてゐるから、夜なかでもおちついてゐるわけにゆかぬ。かすかな月の光もとつくに沒してしまひ、崖は傾いて路はひどくわるい。ところがここまでくると前面に大きな江水がうごいてゐて、浪がわきたちひろうみの大なるごとくである。船頭はくらがりにうまく棹を使ひ、波など平氣で笑うたり歌うたりしてゐる。舟からあがつて陸をゆくと霜がこまやかに置いて木

の根巖角がなめらかであり、風はつよく吹いて手足がつめたい。渡り舟に入つたときから心配は多くあつたが、山にのぼればやはり幾曲りの曲り道があつてくるしい。やうやう多くの川水のところから遠くうへへ出てみると、星と空とが元來別別であることがわかる。遠くへ旅することは人を瘦せさすものだ、古人は瘦せぬためには加餐せよとすすめてをるが自分の如き衰疾のものは加餐もできさうにないのでその語に對してはづるのである。

(一)飛仙閣

(二)土門山行(三)窄。微徑(四)緣秋毫。
(五)棧雲(六)闌干峻。(七)梯石結構(八)牢。
萬壑(九)敧疎林。(一〇)積陰帶(一一)奔濤。
寒日(一二)外(一三)澹泊。(一四)長風(一五)中怒號。
(一六)歇鞍在(一七)地底。始覺(一八)所歷高。
(一九)往來(二〇)雜(二一)坐臥。人馬同疲勞。
(二二)浮生有(二三)定分。飢飽豈可逃。
嘆息謂妻子。我何(二四)隨(二五)汝曹。

飛仙閣

土門、山行すれば窄し、微徑、秋毫に緣る。
棧雲、闌干として峻しく、梯石、結構牢し。
萬壑、疎林敧き、積陰、奔濤を帶ぶ。
寒日、外に澹泊、長風、中に怒號す。
鞍を歇めて地底に在り、始めて覺ゆ歷る所の高きを。
往來雜はりて坐臥す、人馬同じく疲勞す。
浮生、定分あり、飢飽豈に逃る可けむや。
嘆息、妻子に謂ふ、我、何ぞ汝が曹を隨ふるやと。

【字解】〔一〕飛仙閣　閣は閣道すなはち棧道なり、飛仙閣は漢中府略陽縣東南四十里にありといふ、蜀の棧道は、唐の時、三泉縣（漢中府羌寧縣治）から利州（四川保寧府廣元縣治）までに橋といひ閣といふもの合せて一萬九百八十間あり、其他の險阻を保護する欄干四萬七千一百三十四間ありといふ。飛仙閣は、三泉よりさらに北に在るが如し。〔二〕土門　土壁門の形をなす。〔三〕窄　みちの間隔のせばまること。〔四〕緣秋毫　秋の毛すぢほどのほそさの小みちによる。〔五〕棧雲　棧道のくも。〔六〕闌干　さかんなる貌。〔七〕梯石　階段に用ふる石。〔八〕牢　かたし。〔九〕敧　傾斜する、直立せざるをいふ。〔一〇〕積陰　あつみのあるくもり氣。〔一一〕奔濤　溪流のおと。〔一二〕外　我が居處の外圍。〔一三〕澹泊　光りうすき貌。〔一四〕長風　とほく吹きわたる風。〔一五〕中　我が居處を中心とする内圍。〔一六〕歇　やすませる。〔一七〕地底　山より下りたる溪邊をいふ。〔一八〕所歷　すでにとほつてきた場所。〔一九〕往來　道を往來する旅人。〔二〇〕雜　雜居する。〔二一〕坐臥　主として自己の一行の態度をいふ。〔二二〕浮生　人生。〔二三〕定分　きまつた分限、運命の差をいふ。〔二四〕隨　ともにつれてゐる。〔二五〕汝曹　汝等。

【題義】成都紀行の第五首。飛仙閣のさまをのぶ。

【詩意】山路をゆくと崖が門の樣になつてとほるところがせばまつてをり、そこを秋の毛すぢほどの小みちによりそうてゆく。棧道の雲はさかんにけはしく立ちのぼり、階段をなす石はそのくみたてなかなかしつかりしてゐる。多くの壑ではまばらな林が斜めに生えてをり、厚みをもつたくもり氣は溪流の奔りゆく濤の音を帶びてをる。我が居處の外圈では冬の日が光うすくさし、内圈では遠くから吹きわたる風が怒號してゐる。それから下の方へくだつて地の底の樣なところに鞍をやすませる、このときはじめていままでとほつて來た所がなるほど高い所だつたと氣がつく。我我の坐臥してゐる處へ

他の往來のものもわりこんでくる。人も馬も同じやうにつかれてゐる。人生にはめいめいの運命の定めがある、飢ゑる飽くといふことはどうしてのがれることができやうぞ。自分は歎息しながら妻子にむかつていふ、なんで自分はおまへたちをしたがへてこんな旅をつづけるのであるか、と。(つまり飢寒に驅られてのことに外ならぬのである)。

五盤(一)

五盤雖云險。山色佳有餘。
仰凌棧道細。俯映(二)江木疏。
地僻無網罟(三)。水清反多魚。
好鳥不妄飛。野人半巢居(四)。
喜見淳樸俗。坦然心神舒。
東郊(五)尙格鬭(六)。巨猾(七)何時除。
故鄕(八)有弟妹(九)。流落(一〇)隨丘墟(一一)。
成都萬事好。豈若歸吾廬。

五盤

五盤、險なりと云ふと雖も、山色、佳餘り有り。
仰いで棧道の細なるを淩ぐ、俯して江木の疎なるに映す。
地僻にして網罟なく、水淸くして反つて魚多し。
好鳥妄りに飛ばず、野人半巢居す。
喜び見る淳樸の俗、坦然として心神舒ぶ。
東郊尙格鬭す、巨猾何の時か除かむ。
故鄕、弟妹あり、流落、丘墟に隨ふ。
成都、萬事好きも、豈に吾が廬に歸るに若かむや。

【字解】【一】五盤　嶺の名、また七盤嶺といふ、盤とはまがる義、邦語に幾まがりといふ類なり、此嶺は四川保寧府廣元縣の北百七十里にありといふ。【二】映　棧道がとほく之にうつろふをいふ。【三】罟　うをとるあみ。【四】巢居　鳥のごとく樹木のうへに居を結びてすむ。【五】東郊　洛陽の郊外。【六】格鬭　うちあひたたかふ。【七】巨猾　大なるわるもの、史思明輩をさす。【八】故鄕　洛陽附近をさす。【九】弟妹　同谷七歌に見えたるものなり、弟は濟州に、妹は鍾離にあり。【一〇】流落　おちぶれる。【一一】丘墟　兵亂に殘破されたる「なか」や、畠のあと。

【題義】成都紀行の第六首。五盤嶺をすぎて弟妹をおもふ。

【詩意】この五盤嶺はみちはわるいといふものの山の景色はなかなかよろしい。自分等は仰いでは細い棧道をのぼり、俯して下をみれば江邊に樹木がまばらに生えてゐるのに對するのである。ここは土地は邊鄙で人智がひらけぬから魚をとる網すらなく、水は淸らかであるがかへつて魚は多くゐる、よい鳥がゐて人を見ても驚かずやたらに飛んだりせず、ところの百姓は半分以上は樹上生活である。こんな淳良質樸の風俗を見ては自分は大にうれしく、心は平になり十分のびのびしたきもちになつた。ただおもへば洛陽の東の方ではまだ格鬭をつづけてゐる、いつになつたら史思明等の惡黨の巨魁が除かれるのであらうか。あの故鄕の方面には弟も妹も居る、彼等はおちぶれて廢殘した邱やとりでのあとなどにそうてさまようてゐることであらう。自分のゆくさきの成都は萬事がよいとしたところで、自分はやつぱり故鄕の自分のいへにかへつた方がよいとおもふのである。

(一)龍門閣

(二)清江下龍門。絶壁無尺土。　清江、龍門を下る、絶壁、尺土なし。
長風(三)駕高浪。(四)浩浩自太古。　長風、高浪に駕す、浩浩、太古よりす。
危途(五)中(六)縈盤。仰望垂(七)線縷。　危途、中ごろ縈盤す、仰ぎ望めば綫縷垂る。
滑石攲誰鑿。(八)浮梁(九)裊相(一〇)拄。　滑石攲いて誰か鑿てる、浮梁、裊として相拄ふ。
目眩(一一)隕雜花。(一二)頭風(一三)吹過雨。　目眩みて雜花隕ち、頭風ふきて過雨を吹く。
(一四)百年不敢料。一墜那得取。　百年敢て料らず、一墜那ぞ取ることを得む。
飽聞經(一五)瞿塘。足見(一六)(一七)度大庾。　飽くまで聞く瞿塘を經るを、見るに足る大庾を度るを。
終身歷艱險。恐懼從此數。　終身、艱險を歷む、恐懼此從り數へむ。

【字解】【一】龍門閣　保寧府廣元縣の嘉陵江のほとりにありといふ。この棧道は岸壁と江水とにかけてわたせしものなること詩によりてうかがはる。【二】清江　嘉陵江。【三】駕　風がなみのうへに乘る。【四】浩浩　大なる貌。【五】中　半途をいふ。【六】縈盤　めぐりわだかまる。【七】綫縷　いとすぢ。【八】浮梁　水中にうかべて立てられしはしら。【九】裊　たをやか。【一〇】拄　ささへる。【一一】隕雜花　めから火花がちるやう。【一二】頭風　あたまから風がおこる。【一三】吹過雨　これはたとへなり、とほりあめが風にふきつけらるるやう。【一四】百年　人の一生涯をいふ。【一五】瞿塘　峽の名、四川夔州府にあり、水の險阻を以てきこゆ。【一六】度　わたる、すぎること。【一七】大庾　嶺の名、江西省南安府大庾縣にあり、山路の險をいふ。

【題義】成都紀行の第七首。龍門棧道の危險をのぶ。

【詩意】嘉陵江の清流がここで眞倒落しにくだる、岸の絶壁には一尺の土もない。下には遠く吹く風が高浪に乘つて、大むかしからかく吹きつつあるらしい。あぶなげな途が途の半ほどにうねうねしてゐるが、そこからうへを仰いでみるとうへの途はいとすぢが垂れた樣に懸つてゐる。すべつこい石が傾斜してゐるがそれにはだれが穴をあけたものだらう、その穴と水底とにかけてならべたはしらはたがひにささへてはゐるもののなよなよとしてゐる。こんな處をとほると、目はくらやんで種種の花がみだれおちる樣であり、頭には風が吹いて雨を吹きつけられる樣なぞつとする感じが起る。百年の生命もどうなるかわからぬ。一度墜ちたらどうして取りあげることができよう。瞿唐峽の險はあきるほど聞いてゐるし、大庾嶺をわたる險もここで想見することができる。自分は生涯險阻なところを經過することであらうが、その恐ろしいとおもふ手始めはここからかぞへそめるであらう。

(一)石櫃閣

季冬(二)日已長。山晩半天赤。　季冬日已に長し、山晩れて半天赤し。
(三)蜀道多(四)早花。江間饒(五)奇石。　蜀道、早花多し、江間、奇石饒し。
石櫃(六)曾波上。(七)臨虛蕩(八)高壁。　石櫃、曾(層)波の上、虛に臨みて高壁を蕩かす。

(九)清暉(一〇)回羣鷗。暝色帶遠客。　清暉に羣鷗回り、暝色、遠客を帶ぶ。

(一一)羇棲負幽意。感嘆向(一二)(一三)絶跡。　羇棲、幽意に負く、感嘆、絶跡に向ふ。

信甘(一四)孱懦嬰。不獨凍(一五)餒迫。　信に甘んず孱懦に嬰るを、獨り凍餒に迫らるるのみにあらず。

(一六)優游謝(一七)康樂。放(一八)浪陶(一九)彭澤。　優游す謝康樂、放浪す陶彭澤。

吾衰未自由。謝(二〇)(二一)(二二)爾性所適。　吾衰へて未だ自由ならず、爾が性の適する所に謝す。

【字解】【一】石櫃閣　廣元縣北二十五里にありといふ。【二】日已長　けだし已に冬至をすぎしなり。【三】蜀道　蜀（四川省）へ通ずる道。【四】多早花　氣候の暖かきためなり。【五】儵　おほし。【六】曾波　層波に同じ。【七】臨虛　虛は水面をさす。【八】蕩　うごかす。【九】清暉　水面の日の光りをいふ。【一〇】回　飛びめぐる。【一一】羇棲　たびにすむ。【一二】幽意　風景に親しむの意。【一三】絶跡　かけはなれたところ、成都をさす。【一四】孱懦　身體のかよわきこと。【一五】凍餒　こごえ、うゑる。【一六】優游　ゆつたりたのしむ。【一七】謝康樂　晉の謝靈運、康樂公に封ぜらる、山水の遊びをなし詩賦に長ぜり。【一八】放浪　きままにくらす。【一九】陶彭澤　彭澤縣令陶潛、陶淵明なり。【二〇】謝　遜謝の義、それに讓る、劣るをいふ。【二一】爾　謝と陶とをさす。【二二】性所適　謝靈運の遊名山志に、山水性分之所適とみゆ、性分のにあひたること。

【題義】成都紀行の第八首。石櫃閣のさまと所感とをのぶ。

【詩意】冬の季とてもはや日がながくなり、山はくれがたになつたがそらが半分赤くある。蜀道は暖かで早ざきの花が多く、江には奇妙な石がたくさんある。この石櫃閣はいくへもの波の上にあつて、それが水面にのぞんでたかい岸壁を波上にゆらつかせてゐる。水上では夕日がひかつてむれたる鷗がとびめぐり、陸ではくらがりの色が遠くゆく旅人をつつんでゆく。自分はたびですまねばならぬ身分でしづかに風景をもてあそぶの意をはたすことができず、歎聲をもらしつつ成都の様なかけはなれた地へ向ふのだ。これといふも身體のよわいからであつて、ただこごえ、うゑ、に迫まられてゐるためばかりではない。それは自分の覺悟してゐることだ。むかし謝靈運は山水の間にゆつたりとあそび、陶淵明は田園の間にきままにくらした。自分は老衰してまだ自由な生活を爲すことはできぬから、諸君が性のむいた所に向つて生活したのに對しては餘ほど劣つてゐる。

(一)桔柏渡

桔柏渡

(二)青冥寒江渡。駕(三)竹爲長橋。　青冥たり寒江の渡、竹を駕（架）して長橋と爲す。

竿濕煙(四)漠漠。江永風蕭蕭。　竿濕ひて煙漠漠たり、江永くして風蕭蕭たり。

(五)連笮動(六)嫋娜。征(七)衣颯(八)飄(九)颻。　連笮動いて嫋娜たり、征衣、颯として飄颻たり。

急流鴇(一〇)(一一)鶂散。絶岸黿(一二)鼉驕。　急流、鴇鶂散じ、絶岸、黿鼉驕る。

(一三)西轅自茲異。東(一四)逝不可要(一五)。　西轅、茲自り異なり、東逝、要む可からず。

高(一六)通荊(一七)門路。闊會滄(一八)海潮。　高は通ず荊門の路に、闊は會す滄海の潮に。
孤(一九)光隱顧眄。遊(二〇)子悵(二一)寂寥。　孤光隱れて顧眄す、遊子、悵として寂寥たり。
無以洗(二二)心胸。前登但山(二三)椒。　以て心胸を洗ふ無し、前みて登るは但だ山椒のみ。

【字解】【一】桔柏渡　保寧府昭化縣の東北三里にあり、嘉陵江と白水と合流する處なり。【二】青冥　あをくくらし、水のさま。【三】駕竹　駕は架に作るべし、わたすこと。【四】漠漠　ひろがる貌。【五】連笮　ひきはへたる竹の索橋。【六】嫋娜　しなやかなるさま。【七】征衣　たびごろも、自己の衣をいふ。【八】颯　風にあふられるさま。【九】飄颻　ひるがへるさま。【一〇】鴇「しぎ」、雁に似てあとあしなし。【一一】鷁　水鳥なり。【一二】黿鼉　大がめ。【一三】西轅　車のかぢ棒を西にむけること、西南に向つて陸行するをいふ。【一四】東逝　川の水が東にながれ去ること。【一五】要　むりにひきとめること。【一六】高、闊　この二字は山勢水勢をいふ、高は荊門に、闊は滄海にかかる字。【一七】荊門　山の名、湖北荊州府にあり、この江水は南流して長江に入り東して荊州に達す。【一八】滄海　ひろきうみ、揚子江口の東海をいふ。【一九】孤光隱　孤光とは一片の川光をいふ、ここをすぐれば陸路となり、しばらく川と別るるなり、故に「隱る」といふ。【二〇】遊子　たび人、自己をいふ。【二一】悵　うらむ貌。【二二】洗心胸　洗は水の縁語なり。【二三】山椒　山の頂を冢と曰ひ、また椒とも曰ふ。

【題義】　成都紀行の第九首。桔柏渡のさまをいひ、水と別れんとする情をのぶ。

【詩意】　このわたり場は水の色が青くくらくみえる、そのうへに竹をわたして長い橋がかけてある。橋の竹竿はしめつて煙がひきはへてをり、長き水面を風がさびしく吹きわたる。橋をわたればひきはへた竹のなはばしがなよなよとうごき、旅ごろもは風にあふられてふはふはひるがへる。流れが急で鴇だの鷁だのがとび散り、きつたてのきしべには大がめなどが威張つてゐる。ここから西の方成都へゆくみちがはつきりわかれる。東流する嘉陵江の水はとどめようとしてもだめだ。その水は高く荊門の路にも通じ、闊く滄海の潮にもであふのである。江水の白き光が隱れるので自分は左右をふりかへつてみる、さうして自分はうらめしくさびしさを感ずる。この水にわかれては胸のけがれを洗ふべき何物もない、前面に進んで登るべきはただ山の頂ばかりである。

劍(一)門

劍門

惟天有設(二)險。劍門天下壯。　惟天、險を設くる有り、劍門は天下の壯なり。
連山抱西南。石角皆北向。　連山、西南を抱く、石角皆北に向ふ。
兩(三)崖崇(四)墉倚。刻(五)畫城郭狀。　兩崖、崇墉倚り、刻畫、城郭の狀あり。
一夫怒臨關。百(六)萬未可傍(七)。　一夫怒つて關に臨めば、百萬未だ傍ふ可からず。
珠(八)玉走(九)中原。岷(一〇)峨氣悽愴(一一)。　珠玉、中原に走る、岷峨、氣悽愴たり。
三(一二)皇五(一三)帝前。雞犬各相放(一四)。　三皇五帝の前、雞犬各〻相放つ。
後(一五)王尚(一六)柔遠。職(一七)貢道已喪(一八)。　後王、柔遠を尚ぶ、職貢、道已に喪はる。

至ㇾ今英雄人。高視(一九)見(二〇)(二一)二霸王一。
幷呑(二二)與二割據(二三)一。極力(二四)不二相讓一。
吾將ㇾ罪二(二五)(二六)眞宰一。意欲ㇾ鏟(二七)(二八)二疊嶂一。
恐此復(二九)偶然(三〇)。臨ㇾ風默惆悵。

今に至つて英雄の人、高視、霸王たるを見る。
幷呑と割據と、極力、相讓らず。
吾將に眞宰を罪せむとす、意、疊嶂を鏟らむと欲す。
恐る此れ復偶然らむことを、風に臨みて默して惆悵たり。

【字解】【一】劍門 四川保寧府劍州劍門縣界にあり、大劍山また梁山ともいふ。其北三十里に小劍山あり、晉の張載が劍閣銘をつくりしも此處なり。【二】設險 易坎卦に、天險不ㇾ可ㇾ升也、地險山川丘陵也、王公設ㇾ險以守二其國一とみゆ。【三】兩崖 左右のがけ。【四】崇墉倚 高き城壁の相倚るがごとし。【五】刻畫 いろいろとしくみすること。【六】百萬 百萬人の敵。【七】傍 そばへちかづく。【八】珠玉 蜀地の產物。【九】走中原 中原は支那洛陽地方をいふ、走とは運び去らるるの速なるをいふ、上たるものの誅求によつてもち去らるるなり、一本に「珠玉」の句の前に川嶽儲二精英一、天府興二寶藏一の二句ありとのことなれども未だ依據を詳にせず、よりて從はず。【一〇】岷峨 岷山、峨眉山、前者は成都の西にあり、後者は西南にあり。【一一】悽愴 うれはしき貌。【一二】三皇 伏羲・神農・燧人とするは白虎通の說。【一三】五帝 黃帝・顓頊・帝嚳・堯・舜。【一四】各相放 かつてにあひはなつ、（或は各を莫に作る、莫相放ならば中原と蜀と交通なかりしをいふ。）【一五】後王 後世の帝王。【一六】尙 たふとぶ。柔遠「尙書」（舜典）に柔ㇾ遠、能ㇾ邇とみゆ、柔遠は遠方の民をなでやすんずること、ここはむしろ姑息手段にて手なづけんとする義に用ひたり。【一七】職貢「周禮」に制二其職一、各以二其所一ㇾ能、制二其貢一、各以二其所一ㇾ有とみゆ、地方の官に在る者は其の才能によりて職に居り、其の土地の有する所のものを以て貢とするをいふ。【一八】道 職貢の道。【一九】高視 うへをむく、威張りて人もなげのさま。【二〇】見 作者（或は一般人）が見るなり。【二一】霸王 英雄人が霸となり王となること、高視の句は我見二其高視而爲一二霸王一の意。【二二】幷呑 蜀より進んで他の地をあはせのむこと。【二三】割據 蜀の地内のみにてその地をきき取りてよりばとしてをること。【二四】不相讓 他のもの（多くは中央權力者）と讓らず。【二五】罪 罰すること。【二六】眞宰 造物主。【二七】鏟 けづりとる。【二八】疊嶂 かさなつた山。【二九】此 英雄割據の事をさす。【三〇】偶然 ふと實現して自己の豫想のごとくなる。

【題義】成都紀行の第十首。劍門の險を見て英雄の此地に割據せんことをおそるる意をのぶ。

【詩意】天にも險阻を設けるといふことがある、劍門の險は天下の壯觀である。西南の方は連山がだきかかへてをり、石の角はみな北にむいてをる。左右の崖は高い城壁のやうに相倚つてをり、複雜なしくみは城郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりつくことはできぬ。今やこの蜀の地方から珠玉の寶がどしどし中原の方へでだすため、岷山峨山もその寶なきためかかなしさうな氣色をおびてきた。三皇五帝などの大むかしには蜀は蜀だけでよく治まり雞や犬もめいめいはなち飼ひにして爭ひもなかつたのである、ところが後世の王はこの土地を手なづけようとしたが、職は其人の才能に應じ、貢物はその土地の有るものに應じてだすといふ古代の道はなくなつてしまつた。いまに至るまで英雄たるものは威張つて霸王となるものがある。彼等は幷呑するか割據するかいづれにしても極力抗爭して中央の權力者に對して讓らない。自分はむしろ造物主を罰しこの疊なはる山山をけづりとつてしまはうかとおもふ。自分の想像がふと中りはせぬかときづかはれるので風に臨んでだまつて心をいためてをる次第である。

鹿頭山(一)

鹿頭何亭亭(二)。是日(三)慰飢渴。
連山西南斷。俯見千里豁。
遊子出京華(四)。劍門不可越(五)。
及茲(六)險阻盡。始喜原野濶。
殊方(七)昔三分(八)。霸氣(九)曾間發(一〇)。
天下今(一一)一家。雲端失雙闕(一二)。
悠然(一三)想揚馬(一四)。繼起(一五)名硉兀(一六)。
有文(一七)令人傷。何處(一八)埋爾骨。
紆餘(一九)脂膏地(二〇)。慘澹(二一)豪俠窟(二二)。
仗鉞(二三)非老臣(二四)。宣風(二五)豈專達(二六)。
冀公(二七)柱石(二八)姿。論道(二九)邦國活。
斯人(三〇)亦何幸。公鎭(三一)踰歲月(三二)。

鹿頭山

鹿頭何ぞ亭亭たる、是の日飢渴を慰む。
連山、西南に斷ゆ、俯して千里の豁なるを見る。
遊子、京華を出づ、劍門、越ゆ可からず。
茲に及んで險阻盡く、始めて喜ぶ原野の濶なるを。
殊方昔三分す、霸氣曾て間發す。
天下今一家、雲端、雙闕を失す。
悠然、揚馬を想ふ、繼起、名硉兀たり。
有文人をして傷ましむ、何の處にか爾が骨を埋むる。
紆餘たり脂膏の地、慘澹たり豪俠の窟。
鉞に仗る老臣に非ずんば、風を宣する豈に專達せむや。
冀公、柱石の姿、道を論じて邦國活す。
斯人亦何の幸ぞ、公鎭して歲月を踰ゆ。

【字解】【一】鹿頭山　四川綿州德陽縣治の北三十里にあり、南の方成都をさること百五十里、此地に至りて平野を望む。【二】亭亭　高き貌。【三】是日　山にかかつた日をさす。【四】京華　みやこ。【五】不可越　越ゆることができぬほどであつた。【六】茲　此山をさす。【七】殊方　ちがつた方位の土地。【八】三分　三國の時代、魏・呉・蜀・對峙せしをいふ。【九】霸氣　霸者の氣。【一〇】間發　まじはりておこる、はさまつてでる。【一一】今　唐の時。【一二】失雙闕　雙闕とは蓋し劍門の如き天險をたとへていふ、(或は曰く霸王天子の宮殿に擬して造る所の闕なりと)失とは無くなること、有れどもなきが如し。【一三】悠然　はるか。【一四】揚馬　前漢の司馬相如・揚雄、並に蜀の產みたる大文學者なり。【一五】繼起　揚馬についで起れる人人、案ずるにこれは陳子昂・李白・が輩を想ひ浮べたるか。【一六】硉兀　石のあやふき貌。【一七】有文　文才あるをいふ。【一八】何處一句　葬所さへ知れざるを怪むなり、案ずるに他人に就ていへるも、自己不遇の感うちにひそむなるべし。【一九】紆餘　廣遠の貌。【二〇】脂膏地　あぶらのながれる地、豐饒なるをいふ。【二一】慘澹　ものがなしきさま、豪俠のはびこるをうれふるなり。【二二】窟　いはや、すみかをいふ。【二三】仗鉞　まさかりをつく、誅罰の權を附與せられてあること。【二四】老臣　年老いたる臣。【二五】宣風　天子の德風をのべつたへる。【二六】專達　獨斷にてゆきわたる樣にする。【二七】冀公　裴冕をいふ、至德二載十二月に右僕射裴冕は冀國公に封ぜられ、乾元二年六月に成都尹に拜し、劍南西川節度使に充てらる。【二八】柱石　國家の柱となりどだいいしとなる。【二九】論道「尙書」(周官)に茲惟三公、論道經邦、燮理陰陽とみゆ、論道とは道德に關することを論ずるなり。【三〇】斯人　斯民に同じ、蜀地の民をいふ。【三一】公鎭　公は冀公、鎭はしづめの役として來りしをいふ、節度使として來任せしこと。【三二】踰歲月　上に記せしごとく裴冕は六月來りし故十二月にては半歲ばかりになる、月はこえたるも歲はいまだこえず、こえんとするときなり。

【題義】成都紀行の第十一首。はじめて平地を見たるうれしさと、蜀の古の文學者をおもふことと、裴冕がことに言ひ及べり。

【詩意】鹿頭の山がたかく秀でてゐる、ここへきてけふはじめて饑渴の苦をなぐさめることができた。

なぜといふに連山は西南に於てとだえ、下をみると千里の野がひろびろとみえわたる。自分はみやこをでて、劒門の險阻は越ゆることができぬほどであつたが、ここまで來て險阻がなくなり、やつと原野のひろいのをうれしくおもふ。この蜀の特別地方はむかしは三分割據の時代もあり霸者の氣がときとしてまじはり出でたが、今や天下は一家の如く統一となり、劒門の雙闕も雲間にあるにはあるがその存在を失うたと同じことになつた。自分はそれにつけて蜀からうまれたむかしの司馬相如・揚雄などをはるかにおもふ、そして彼等に繼いで蜀からでた人人もその名は高い、ただ文才あることは往往不幸をともなふので文才あるといふことが我我をして心をいたましめる、汝等有名の文學者はどこにその骨を埋めてをるか、それさへはつきりせぬではないか。(自分もそれに似てはゐぬか、の意ならん)いつたい蜀の如き廣遠なる豐饒の地、また我我をしてかなしませるほど豪俠の盛なるところ、かかる地はここに刑罰の權をにぎるものは老臣を要する、老臣でなければどうして獨斷を以て天子の德風を宣布し通達せしむることができよう。幸にも冀國公裴冕は國家の柱石たる姿をもつて、細事には關せず大道を論じ正されるので唐の國家も之がために活きるのである。だから蜀の人民はなんといふ幸福であらう、この公が來任されてあまたの年月をこえんとしてゐるではないか。

(一)成都府

(二)翳翳(三)桑楡日。照我(四)征衣裳。
我行山川異。忽在天一方。
但逢新人民。(五)未卜見故鄉。
(六)大江(七)東流去。(八)遊子日月長。
(九)曾城塡(一〇)華屋。季冬樹木蒼。
喧然名都會。吹簫(一一)間(一二)笙簧。
(一三)信美(一四)無與適。側身望(一五)川梁。
鳥雀夜各歸。中原杳茫茫。
初月出不高。衆星尙爭光。
自古有羇旅。我何苦哀傷。

成都府

翳翳たり桑楡の日、我が征衣裳を照す。
我行きて山川異なり、忽ち天の一方に在り。
但だ逢ふ新人民、未だ卜せず故鄉を見るを。
大江東に流れ去る、遊子、日月長し。
曾城、華屋塡む、季冬、樹木蒼たり。
喧然たり名都會、吹簫、笙簧に間はる。
信に美なれども與に適する無し、身を側てて川梁を望む。
鳥雀夜各〻歸る、中原、杳として茫茫たり。
初月出づる高からず、衆星尙光を爭ふ。
古より羇旅あり、我何ぞ苦みて哀傷せむ。

【字解】〔一〕成都府　四川省の都會なり。〔二〕翳翳　日のかげるさま。〔三〕桑楡　日の落つる方位、西方。〔四〕征衣裳　たびごろも。〔五〕未卜一句　故鄕を見うる時期はいつかとうらなはぬ、その時期あらざればなり。〔六〕大江　岷江。〔七〕東流去

大江の水は東に流れ去る、成都にて江は見えず、歳月の去ることをたとへていふ。【八】日月長　時久しく過ぎしこと。【九】曾城　曾層同じ、かさなれるしろ、成都の城。【一〇】華屋　りつぱないへ。【一一】間　雜はること。【一二】簧　簧は笙の舌。【一三】信美　王粲が登樓賦に、信美而非吾土兮、曾何足以少留とあり、荊州は景美なるも留まるに足らずといへり、其語を借用す。【一四】無與適　吾が意と適する（氣にいる）ものなきをいふ。【一五】望川梁　梁は舟橋、之をわたりて故鄕にかへりたしとおもふなり。

【題義】成都紀行の第十二首。紀行の最終にして蓋し成都に入らんとして作る。

【詩意】うすぐらく西方にかげつた夕日が自分の旅衣を照らす。だんだん別な山や川をたびして忽ち天のはてへきた。であふものはめなれぬ人民であつて故鄕へはいつかへれるとみこみもつかぬ。日月は大江の水の東に流れ去る樣に去つてかへらぬ、自分が旅にでてからはなかなか久しくなる。成都のかさなつた城にはりつぱな家屋が充滿してをり、冬の季に樹木が蒼蒼としてゐる。さすが名高い都會とてにぎやかで簫を吹く音が笙の音にいりまじつてきこえる。まことによい場所ではあるが自分の氣にいつたものとてはない、だから身をそばだてて川の舟ばしのある方をながめやる（あはよくばそれにのつて故鄕へかへりたい）。夜になつて鳥雀はそれぞれねぐらへかへつた、中原の地方ははるかに茫茫としてどこだかわからぬ。あまり高くもなく新月が出た。たくさんの星がそれと光を爭うてゐる。まことにさびしい景色だ。（自分のこのときの胸中やいかに）。しかし旅するといふことは今にはじめぬ、むかしからあることなのだ、自分だけがひどくかなしむべきことではなからう。

贈杜二拾遺　高適

【題義】作者成都に來りて浣花溪の一寺に寓居せしとき、親友高適が彭州の刺史として近地にありて詩をおくりくれしにより之に返事せし作なり。高適の詩は左の如し。

酬高使君(一)相贈(二)

古寺(三)僧牢落(四)。空房客(五)寓居。　　高使君が相贈るに酬ゆ

故人(六)供祿米。鄰舍與園蔬。　　古寺、僧牢落たり、空房、客寓居す。

雙樹(七)容(八)聽(九)法。三車(一〇)肯載書。　　故人、祿米を供し、鄰舍、園蔬を與ふ。

草玄(一一)吾豈敢。賦或似相如(一二)。　　雙樹、法を聽くことを容し、三車、肯て書を載す。

草玄吾豈に敢てせむや、賦は或は相如に似む。

【字解】【一】高使君　彭州の刺史高適、使君とは刺史の敬稱なり。【二】相贈　詩をおくりくれしこと。【三】古寺　作者初めて成都に到着して浣花溪の一寺に寓居す。【四】牢落　おちぶれるさま。【五】客　自己をさす。【六】故人　舊知の人、高適をさす。【七】雙樹　娑羅雙樹、この木は四方各一雙の枝をいだすといふ、釋迦は雙樹の間にて法を說きしといふ、寺なればこの木を用ひたり、實にその木あるにあらず。【八】容　ききいれること。【九】聽法　法は佛法。【一〇】三車　昔、惠施は五車の書を載せしといふ、三といふは少量なるをいふ、（一說に法華經にいふ所の牛車羊車鹿車の三車なりと、又一說に唐の尉遲窺基といふ僧が前車に經論、中車に自己、後車に妓女食饌を載せしことを用ふと、今皆取らず）。【一一】草玄　前漢の揚雄が故事、雄哲學を好みて太玄經を起草す。【一二】相如　漢の武帝の時の文豪司馬相如。

傳道招提客。詩書自討論。佛香時入レ院。僧飯屢過レ門。聽レ法還應レ難。尋レ經勝欲レ翻。草玄今已畢。此後更何言。

【詩意】古寺で僧もさびしいによつて、そのあきべやに自分は寓居してゐる。そこへ舊知の友は俸祿の米をわけて供給してくれるし、となりの家のものははたけでできた野菜をめぐんでくれる。ここへ自分はすこしばかりの書物を車にのせてはこびこみ、また雙樹のあひだで坊さんが說法をするのをきくことをもゆるされてきく。太玄經を起草するなどのことは自分の敢てよくする所ではないが、賦を作ることならば司馬相如に似ることはできるかもしれぬ。

(一)卜レ居　　居を卜す

(二)浣花溪水水西頭。　浣花溪水、水の西頭、

(三)主人(四)爲卜林塘幽。　主人爲にトす林塘の幽なるを。

已知(五)出レ郭少二塵事一。　已に知る郭を出でて塵事少きを、

更有(六)澄江銷二客愁一。　更に澄江の客愁を銷するあり。

無數(七)蜻蜓齊上(八)下。　無數の蜻蜓齊しく上下し、

一雙(九)鸂鶒對沈浮。　一雙の鸂鶒、對して沈浮す。

東行萬里堪(一〇)乘レ興。　東行萬里、興に乘ずるに堪へたり、

須レ向二山陰(一一)一入(上)小舟。　須らく山陰に向つて小舟に上るべし。

【字解】【一】卜居　住居のよしあしをうらなひてさだむ。【二】浣花溪　溪は成都の西郭外にあり、一に百花潭ともいふ。【三】主人　自らいふ。【四】爲卜　爲めにとは自己のためにといふこと。【五】出郭　くるわをはなれること。【六】澄江　即ち錦江、澄は水のすめるをいふ。【七】蜻蜓　とんぼ。【八】上下　のぼり、くだる。【九】鸂鶒　をしどり。【一〇】乘興　次の山陰の句をみよ。【一一】山陰一句　晉の王獻之が故事、獻之字は子猷、山陰(今浙江省紹興府)に居り、雪夜忽ち剡溪にありし戴安道を憶ひ舟に乘じてゆく、旣に門にいたりて返る、人其故を問ふに曰く、吾、本、興に乘じて行く、興盡きて返る、と。

【題義】成都の浣花溪に住居を定めしことをのぶ、題二草堂一詩に、經營上元始とあれば此詩は到著の翌春上元元年の作なり。

【詩意】浣花溪の水の流るるその西のほとり、そこに自分は林塘の幽邃なところをトして住居ときめた。そこはくるわをはなれてゐて俗事がすくないことはわかつてゐるうへに、自分のたびの愁をけしてくれるきれいな江もある。そのあたりにはたくさんの「とんぼ」がそろつてのぼりくだりをしてをるし、一對のをしどりはむきあつて浮きつ沈みつしてゐる。更に興に乘ずれば東のかた萬里の遠くまでもゆくにさしつかへはない、機をみて小舟にのつて山陰地方にまででかけるべきである。

(一)王十五司馬弟。出レ郭相訪。遺二營草堂一貲(二)。

王十五司馬弟、郭を出でて相訪ひ、草堂を營む貲を遺る

客裏何(四)遷次。江邊正寂寥。　客裏何ぞ遷り次るや、江邊正に寂寥なればなり。

(五)肯來尋(六)一老。(七)愁破是今朝。　肯て來つて一老を尋ぬ、愁破るるは是れ今朝なり。

憂我營(八)茅棟。攜錢過(九)野橋。　我が茅棟を營むを憂へて、錢を攜へて野橋に過ぎる。

他鄕唯表(一〇)弟。還往莫辭勞。　他鄕唯だ表弟あるのみ、還往、勞を辭すること莫れ。

【字解】〔一〕王十五司馬弟　司馬の職にある王姓の從弟。〔二〕遺　貽と同じ、おくる。〔三〕貲　たから、金錢なり。〔四〕遷次　うつりてやどる、ひきこす。〔五〕肯來　わざわざくる。〔六〕一老　作者自己をさす。〔七〕愁破　胸のうちのはれやかになるをいふ。〔八〕茅棟　かやぶきのむね。〔九〕野橋　けだし萬里橋をさす。〔一〇〕表弟　とししたのいとこ。

【題義】司馬の官にある從弟の王某が郭から出かけて訪問し來り、自分が草堂をつくるかねをおくつてくれた。上元元年浣花溪の草堂を營みしときの作。

【詩意】自分は客中になんでこんなところへひきこしたか、それはこの江邊がひつそりとしていいからだ。こんなところへお前はわざわざこの老人をたづねてくれた、けふは自分もむねのなかがはれやかである。おまへは自分がこのかやぶきの家をこしらへるのにかねが無からうかと心配して、錢をもつて橋のそばのここへ立ちよつてくれた、まことにありがたいことである。他鄕に於てはたのみにするものはただおまへあるのみだ、どうか往來する難儀などいとはぬ樣にねがひたい。

蕭八明府實(一)處覓(二)桃栽(三)　蕭八明府實が處より桃を覓めて栽す

奉乞(四)桃栽一百根。　桃栽一百根を乞ひ奉る、

春前爲送浣花村。　春前爲に送れ浣花村。

(五)河陽縣裏雖無數。　河陽縣裏、無數なりと雖も、

(六)濯錦江邊未滿園。　濯錦江邊、未だ園に滿たず。

【字解】〔一〕蕭八明府實　縣令の職にある蕭實、明府は縣令の敬稱。〔二〕覓　もとむ。〔三〕栽　うゑること。〔四〕桃栽　「栽するに足るべき桃」の義。〔五〕河陽縣　晉の潘岳、河陽の縣令となり花をうゑたり、今借りて蕭實が管轄する縣をいへり、實際の地は何といふ縣なるか明ならず。〔六〕濯錦江　卽ち錦江。

【題義】某縣の縣令蕭實なる人のところから桃の苗木をもとめる詩なり。

【詩意】桃の苗木百本おねがひいたすが、自分のためにどうか春のおそくならぬうちにそれを浣花の村へ送つていただきたい。あなたの支配せらるる縣內ではその苗木は無數にあるであらうが、わたくしのこの江邊ではまだ園にいつぱいにはなりませぬ。

從韋二明府(一)續處覓(二)綿竹(三)　韋二明府續が處從り綿竹を覓む

(四)華軒藹藹他年到。　華軒藹藹、他年到る、

【字解】〔一〕韋二明府續　縣令

綿竹亭亭出縣高。　綿竹亭亭、縣を出でて高し。
江上舍前無此物。　江上舍前、此の物無し、
幸分蒼翠拂波濤。　幸に蒼翠、波濤を拂ふを分て。

韋續、詩中の句によるに續は嘗て綿竹縣の縣令となり、いまは成都に居るものとみゆ。【二】綿竹　綿州の綿竹縣の紫巖山より產する竹なり。【三】華軒　うつくしき車、韋續の乘りもの。【四】騶騎　從者などのむらがり多きさま。【五】他年　いつの年かわからぬがかつての年をさす。【六】到　綿竹縣にゆきしこと。【七】亭亭　たかきさま。【八】出縣　縣は縣の官舍をいふならん。【九】江上舍前　錦江のほとり、草堂のまへ。【一〇】此物　綿竹をさす。【一一】蒼翠拂波濤　竹の風に吹かるる形容、竹の梢がうごけばみどりの波濤風に吹きはらはるるに似たり。

【題義】蕭續といふ縣令のところから綿竹をもとむる詩。

【詩意】あなたはかつてりつぱな馬車にのつてたくさんのともをつれ綿竹縣へゆかれたことがある、そのとき縣舍のうへに綿竹がたかくしげつて出てゐたでありませう。わたくしの住居のところにはそいつが有りませぬ、どうぞみどりの波濤が風に吹き拂はるるやうなみごとなやつを分けていただきたい。

憑何十一少府邕覓榿木栽　何十一少府邕に憑りて榿木を覓めて栽す

草堂塹西無樹林。　草堂塹西、樹林無し、
非子誰復見幽心。　子に非ずんば誰か復た幽心を見む。
飽聞榿木三年大。　飽くまで聞く榿木三年大なりと、
與致溪邊十畝陰。　與に致せ溪邊十畝の陰。

【字解】【一】憑　よる、おかげをかうむる。【二】何十一少府邕　縣の尉官何邕、少府は尉の敬稱、時に何邕は利州綿谷縣の尉たりといふ。【三】榿木　榿は「ハゲシバリ」といふ木。【四】塹　ほり。【五】子　何邕をさす。【六】幽心　作者自己の幽邃を愛するこころ。【七】與致　與は「爲めに」なり、致とはこちらへおくりこすこと。【八】溪邊　溪は浣花溪。

【題義】縣尉何邕の世話で「はげしばり」の木をもとめた詩。

【詩意】わたしの草堂の「ほり」の西の方には樹木のはやしがない。あなたでなければだれがわたしの幽邃をめづる心を知つてくれるものがあらう。三年ごし大きくなつてゐる「はげしばり」があなたの方にあることはよつくきいてゐる。どうぞわたしのためにこのかはべりの十畝の樹陰をおくつてください。

憑韋少府班覓松樹子栽　韋少府班に憑りて松樹子を覓めて栽す

落落出羣非欅柳。　落落、羣を出づるは欅柳に非ず、
青青不朽豈楊梅。　青青不朽なるは豈に楊梅ならむや。

【字解】【一】韋少府班　縣尉韋班、班は涪江縣の尉ならんと。【二】松樹子　松の苗木。【三】落落　獨

欲存老蓋千年意。　存せむと欲す老蓋千年の意、

爲覓霜根數寸栽。　爲に霜根數寸なるを覓めて栽せしめよ。

【字解】…立のさま。【四】羣　樹木のむれ。【五】欅柳　「けやき」。【六】楊梅　「やまもも」。【七】老蓋　老いたる車のかさ、松の枝葉のしげりたる貌。【八】爲　我がために。【九】霜根　霜を經たる根、松苗をさす。

【題義】韋班をたのんで松苗をもとめうる詩。

【詩意】落落と獨立して樹羣をぬきでてゐるものは「けやき」ではない、（松だ）。青青として朽ちざる色を示してゐるものは「やまもも」ではあるまい、（松だ）。わたしは後日成長の後は車のかさの如く千年も枯れぬ樣な松の精神を保存したいとおもふ、だからあなたはその松苗の二三寸ばかりの霜根をわたしのためにもとめてうゑる樣にさせてもらひたい。

又於韋處乞大邑瓷盤

又韋が處に於て大邑の瓷盤を乞ふ

大邑燒瓷輕且堅。　大邑の燒瓷輕く且堅し、

扣如哀玉錦城傳。　扣けば哀玉の如し、錦城傳ふ。

君家白盌勝霜雪。　君が家の白盌は霜雪に勝れり、

急送茅齋也可憐。　急に茅齋に送らば也可憐ならむ。

【字解】【一】韋　韋班。【二】大邑　縣の名、邛州に屬す。【三】瓷盤　やきもののおわん。【四】哀玉　かなしげな玉のおと。【五】錦城　錦官城、即ち成都の城の名。【六】茅齋　すなはち草堂の書齋。【七】也　俗語なり、「亦」に同じ。【八】可憐　その器の愛すべきをいふ。

【題義】また韋班がところから大邑燒きの陶器のお椀をもらふためにやつた詩。

【詩意】大邑で燒く陶器は輕くて堅い。之をたたくとかなしげな玉の樣なおとをだすとここの城ちうでの評判だ。あなたのいへにある白盌は霜雪よりもまさつてしろい。おほいそぎでわたしのところへ送つてくださるならばまことに珍重するに足るものだとおもひます。

詣徐卿覓果栽

徐卿に詣りて果を覓めて栽す

草堂少花今欲栽。　草堂花少し、今栽せむと欲す、

不問綠李與黃梅。　綠李と黃梅とを問はず。

石筍街中却歸去。　石筍街中に却つて歸り去る、

果園坊裏爲求來。　果園坊裏爲に求め來る。

【字解】【一】詣　いたる、宅へゆきしこと。【二】徐卿　其名詳ならず、作者「徐卿二子歌」あり、同一人ならん。【三】果　果樹なり、即ち詩中の李と梅なり。【四】綠李　黃梅　綠といひ、黃といふは果實の色をいふ。【五】石筍街　作者歸りみちに通過する街の名。【六】果園坊　徐卿が居る所、第三句と第四句とは倒敍法を用ふ。【七】

露　自己のために。

【題義】　徐卿といふ人のところへでかけていつて果樹をもとめてうゑたことをのぶ。

【詩意】　わたしの草堂では花が少いからいまうゑようとおもふ。綠の實がなる李でも黃い實がなる梅でもどれでもかまふことはない。それで自己のためにあなたの居る果園坊までさがしに來たのだが、これから石筍街をとほつてうちへもどつてゆく。

堂成

背郭堂成蔭白茅。
緣江路熟俯青郊。
榿林礙日吟風葉。
籠竹和煙滴露梢。
暫止飛鳥將數子。
頻來語燕定新巢。
旁人錯比揚雄宅。
懶惰無心作解嘲。

堂成る

背郭、堂成りて白茅に蔭はる、
緣江路熟して青郊に俯す。
榿林日を礙ふ風に吟ずる葉、
籠竹煙に和す露を滴らす梢。
暫く止まる飛鳥は數子を將ゐ、
頻りに來る語燕は新巢を定む。
旁人錯つて比す揚雄が宅、
懶惰にして解嘲を作るに心無し。

【字解】【一】背郭　くるわを負ふこと。【二】蔭　おほふ、「かや」をかぶせて屋根を葺きしをいふ。【三】緣江　かはぞひ。【四】路熟　往來になれしこと。【五】俯　みおろすこと。【六】青郊　青き草のある野外。【七】礙日　日光をさへぎる。【八】籠竹　竹の種類の名、節のあひだ八九すありと。【九】和煙　煙をおぶること。【一〇】將　率ゐること。【一一】語燕　さへづるつばめ。【一二】旁人　よその人。【一三】錯比　まちがへてなぞらへる。【一四】揚雄宅　漢の哀帝の時雄は隱れて太玄經を起草せり、人玄の尙白きを嘲るものあり、因つて「解嘲」を作る。【一五】解嘲　上をみよ。

【題義】　草堂のできしことを詠ず。上元元年春暮の作なるべし。

【詩意】　城のそとくるわをせ負うて白い茅で屋根をかけた堂ができあがつた。江ぞひのかよひなれた路にあたつて青い野原をみおろすことができる。はげしばりの林は日光をさへぎつてその葉は風に鳴つてをるし、籠竹の露を滴らす梢は煙をもおびてをる。しばしきてとまる烏は三四の雛をつれてをり、ちやくや鳴きかはしてしきりにやつてくる燕はここに新しき巢を置いておくことにした。わきの人はまちがへてこの宅を揚雄の宅に比べるものがあるが、さういはれても自分はなまけもので「解嘲」を作らうといふ心ももたぬ。(そのままにしておく)。

蜀相

丞相祠堂何處尋。
錦官城外柏森森。

蜀相

丞相の祠堂何の處にか尋ねむ、
錦官城外、柏、森森たり。

【字解】【一】蜀相　蜀漢の丞相諸葛亮、字は孔明をいふ。【二】丞相　諸葛亮をいふ、後漢の建安廿六

映(七)レ堦碧草自春色。　堦に映する碧草は自ら春色、

隔(八)レ葉黄鸝空好音。　葉を隔つる黄鸝は空しく好音。

三顧(九)頻繁(一〇)天下計(一一)。　三顧頻繁なるは天下の計、

兩朝(一二)開濟(一三)老臣(一四)心。　兩朝開濟するは老臣の心。

出師(一五)未(一六)レ捷身先死。　出師未だ捷たず身先づ死す、

長使(二)英雄(一七)涙滿(一)レ襟。　長く英雄をして涙襟に滿たしむ。

年蜀の劉備帝位に即き、諸葛亮を以て丞相・錄尙書事となす。【三】祠堂　やしろ、廟なり、諸葛亮の廟は成都の西北二里にあり、劉備が廟の西にありと。【四】錦官城　成都の西城の名、織錦の官を置くによりて名づくといふ。【五】柏「はく」の木。【六】森森　たちならぶさま。【七】堦　堂のきざはし。【八】黄鸝　うぐひすの類。【九】三顧　亮がなほ隆中に臥せしとき、劉備は三たびまで之を其の草廬に往き訪れたり、これを三顧といふ。【一〇】頻繁　繁一に煩に作る、頻繁も頻煩もしげきこと、三たびも訪ふとはしげきことなり。【一一】天下計　此語は不完全句なり、「天下を安んずるの計を定めんがためなり」といふほどの意、此句は劉備のがはより立てていふ。【一二】兩朝　先主劉備と、其子後主劉禪との二代をいふ。【一三】開濟　此の二字について明解を下せしものあるを聞かず、或は開レ基濟レ美の義とし、或は開レ物濟レ務の義とするも、晉の劉琨傳の琨忠亮開濟、司馬璋傳の性開濟好レ施、袒宣傳の開濟篤素、等の用例によれば唐時の慣例として人の性格を寫すに「開濟」なる語ありしがごとし、疑らくは開レ懷濟レ事の義ならんか、暫らく之によりてとく。【一四】老臣　亮をさす。【一五】出師　蜀の建興五年亮軍をひきゐて北のかた漢中に駐まり魏を伐たんとす、發するにのぞみ後主に對し出師表をたてまつる。【一六】未捷身先死　亮後ち又大衆を盡くして斜谷より出で武功の五丈原に據り司馬懿と渭水の南に對陣すること百餘日、建興十二年陣中に卒す。【一七】英雄　後世の英雄をいふ。

【題義】成都の諸葛亮の廟に謁して作る。

【詩意】蜀の丞相諸葛孔明の祠堂は何處にたづぬべきか、それはほかならぬ錦官城外の柏樹の森森とたちならんだところがそれである。來てみればきざはしに映うてゐる碧の草はおのづから春の色を呈してをるが、葉かげにさへづるうぐひすはいたづらによいねいろにないてゐるばかり、其の人は見えぬのである。むかし蜀の先主がしげしげと三たびまでこの人を草廬のうちに顧みたといふは天下を安んずるの計を定めたいためばかりであつたのであり、親子二代の君に對してかくすところなく胸のうちをひらいて仕事をなしたといふはまつたくこの老臣の心がらからでたことである。しかるにせつかく魏を伐たんとの軍隊を出しながらまだかちいくさとならぬうちに自分のからだがさきに死んでしまはれた。これはまことに殘念至極のことであつて、永久に後世の英雄をして涙を襟もとに滿たさしむる次第である。

梅雨(一)

梅雨

南京(二)犀浦(三)道。四月熟(二)黄梅(四)(一)。　南京、犀浦の道、四月、黄梅熟す。

湛湛(五)長江(六)去。冥冥細雨來。　湛湛として長江去り、冥冥として細雨來る。

茅茨疎易(レ)濕。雲霧密難(レ)開。　茅茨、疎にして濕ひ易く、雲霧、密にして開け難し。

（七）竟日蛟（八）龍喜。盤（九）渦與（一〇）岸迴。　竟日、蛟龍喜ぶ、盤渦、岸と迴る。

【字解】〔一〕梅雨　梅のみのなるころふるあめ、「つゆのあめ」。〔二〕南京　成都をいふ、至德二載成都府を改めて尹を置き東西二京になぞらへ南京と號す。〔三〕犀浦　縣の名、成都の一部、浣花溪は犀浦縣に屬す。〔四〕黃梅　梅のきばんだ實。〔五〕湛湛　水のたたへしさま。〔六〕長江　錦江の水。〔七〕竟日　ひいつぱい。〔八〕蛟龍　水中の動物。〔九〕盤渦　うづまき。〔一〇〕與岸迴　岸の勢にしたがつてめぐる。

【題義】草堂のつゆのさまをのぶ、上元元年四月の作。

【詩意】南京の犀浦縣の吾が居宅の道では四月に梅のみが熟する。このときの江の水は湛湛とたたへて流れ去り、くらつぽくこまかな雨がふつてくる。吾が家のかやぶきのやねはまばらであるから濕りやすく、雲や霧は濃くとざして開けがたい。一日ぢう喜んでゐるものは水中の蛟龍であり、水面のうづまきは岸勢にしたがつて回轉しつつある。

爲農　　農と爲る

（一）錦里煙（二）塵外。江（三）村八九家。　錦里、煙塵の外、江村、八九家。

圓荷浮小葉。細麥落輕花。　圓荷、小葉浮び、細麥、輕花落つ。

卜宅從茲老。爲農去（四）國賒（五）。　宅を卜して茲れ從り老いむ、農と爲つて國を去ること賒なり。

遠慚（六）勾漏令。不得問（七）丹砂。　遠く勾漏の令に慚づ、丹砂を問ふことを得ず。

【字解】〔一〕錦里　錦官城の里、即ち浣花溪の地をさす。〔二〕煙塵　烽煙風塵、これは故鄉京洛の兵馬のことをいふ、下の「去國賒」の意なり。〔三〕江村　浣花村をいふ。〔四〕去國　京洛をはなるる。〔五〕賒　はるか。〔六〕勾漏令　晉の葛洪が故事、洪、勾漏に丹砂を出だすときき其地の令となる、勾漏縣は勾漏山の下にあり、勾漏山は安南に在り。〔七〕問丹砂　上にみゆ。

【題義】農民となつて住むことをのぶ、上元元年春の季の作。

【詩意】この錦里は兵馬のちりからかけはなれたところで、江ぞひの村八九軒の家があるばかりだ。みわたせば圓い荷は小さい葉を水面にうかべてをり、細かな麥の實からは輕らかな花が落ちる。自分はここに居宅を卜してこれからここでくらさうとおもふ、まことにはるばる故鄉からはなれた處に農民となつたものだ。ただ自分が遠いむかしの勾漏の縣令にはづかしくおもふことは丹砂いかにと問ふことができぬことだ。（丹砂が得らるるならば大にながいきをすることもできるであらうのに）。

（一）有客　　客有り

（二）患氣經時久。臨（三）江卜宅新。　氣を患へて時を經ること久しく、江に臨みて宅を卜する新なり。

（四）喧卑方避俗。疎（五）快頗宜（六）人。　喧卑方に俗を避く、疎快頗る人に宜し。

有客過茅宇。呼兒正葛（七）巾。　客有り茅宇に過る、兒を呼びて葛巾を正す。

自鋤稀菜甲。小摘爲情親。　自ら鋤けば菜甲稀なり、小しく摘むは情親の爲なり。

【字解】【一】有客　此篇の題「有客」と次篇の「賓至」とは名目いれちがひになり居たりしを仇氏「草堂本」によりて正したり。【二】患氣　肺氣の病をわづらふ。【三】臨江　江は錦江。【四】喧卑　やかましくいやし、俗居のさま。【五】疎快　世事とほざかりてかつてに氣もちよくして居ること。【六】宜人　自己にとりてつがふよし、人といふはひろくいへるのみ。【七】葛巾　くずの纖維もて織りし頭巾。【八】菜甲　甲とは野菜のでたての「くき」をいふ。【九】小摘　すこしばかりつむ。【一〇】情親　こころやすい人、即ち来客をさす。

【題義】ふと來客ありしことをよめり。

【詩意】自分はながらく肺の病氣をしてゐるが、このごろ江のそばにあらたに居宅を卜した。ちやうどやかましくいやしい世俗を避けることができ、きままに世ばなれてゐるところは自分にとつてぐあひがよろしい。かかるところへお客が茅ぶきの家へたづねてくれたので、こどもを呼んで葛の頭巾をかぶりなほす。客にそなへるものは手づくりの野菜だ。それは自分が鋤いてつくつたので心立ちは稀れではあるが、こころやすのお客であるからすこしばかり之を摘んでさしあげるのだ。

賓至（一）

（二）幽棲地僻經過少。（三）　幽棲地僻にして經過少し、
（四）老病人扶再拜難。（五）　老病人扶けて再拜難し。
豈有文章驚海內。（六）　豈に文章の海內を驚かす有らむや、
（七）漫勞車馬駐江干。（八）（九）　漫に勞す車馬の江干に駐まるを。
竟日淹留佳客坐。（一〇）　竟日淹留、佳客坐す、
（一一）百年麤糲腐儒餐。（一二）　百年麤糲、腐儒餐す。
不嫌野外無供給。　野外供給無きを嫌はずんば、
乘興還來看藥欄。（一三）　興に乘じて還た來つて藥欄を看よ。

賓至る

【字解】【一】賓至　これもお客が來たことをいふ。「有客」と「賓至」とは偶然と故意とのちがひありなどいふは拘泥の見ならん。【二】幽棲　ひつこんですむ。【三】經過　たちよる人をさす。【四】老病人扶　上の幽棲地に對すれば老病人とつづくかとおもふ、老病人とは作者自己をさす、扶とは他人から手でささへてもらふこと。【五】再拜　客を二度禮拜する。【六】文章　自作のそれ。【七】漫勞　いたづらにわづらはす、客が虚名にまどはされて來たと謙遜していふ。【八】車馬　客のそれ。【九】江干　干はほとり。【一〇】佳客　來客をほめていふ。【一一】百年　生涯。【一二】麤糲　あらくついた米、一斛の粟を六斗につくが糲なりと。【一三】藥欄　藥草畠のてすり、作者病身なれば圃にかかるものあるなり。

【題義】お客の來りしにつけてのぶ。

【詩意】自分が幽棲してゐる土地はかたよつたところで立ちよつてくれる人はすくない。また年よりで病氣もちの自分はわきのものに扶けてもらうてもお客におじぎするのは困難だ。お客は或は自分の文章をしたうて來訪されたかしらぬが、どうして自分には海內を驚かすほどの文章があらうや。じつにわざわざこの江べりのところへ車馬をとどめてくださつたことはむだなご苦勞と申すほかはない。しかしお客さまは日いつぱいここにゐのこつておすわりくださる。腐儒たる自分はいまにはじめずあ

らくついた米をたべてをる。(客もともにそれを食するならん)。野外のことゝて格別おそなへするものは無いが、それをおひとひなくば、お氣のむいたときまたおいでになつて庭の藥草ばたけのところをごらんねがひたい。

狂夫(一)

萬里橋(二)西(三)一草堂(四)。
百花潭(五)水卽滄浪(六)。
風含翠篠(七)娟娟淨。
雨裛(八)紅蕖(九)冉冉(一〇)香。
厚祿(一一)故人書斷絕(一二)。
恒飢(一三)稚子色(一四)凄涼(一五)。
欲塡(一六)溝壑惟疎放(一七)。
自笑狂夫老更狂。

狂夫

萬里橋西の一草堂、
百花潭水卽ち滄浪。
風を含みて翠篠、娟娟として淨く、
雨に裛まれて紅蕖、冉冉として香し。
厚祿の故人、書斷絕、
恒飢の稚子、色凄涼。
溝壑に塡せむと欲するも惟疎放なり、
自ら笑ふ狂夫老いて更に狂するを。

【字解】【一】狂夫 病的のきちがひには非ず、道に向て進取するものをいふ、詩題は末句の語をとりて命じたり。【二】萬里橋 錦江にかかれる橋の名。【三】西 この詩には西とあり、「懷錦水居止」詩には橋南とあり、正しくは西南に位するならん。【四】草堂 作者の諸詩句によりて察すれば、草堂の位置は成都の背郭、碧雞坊外、萬里橋西南、百花潭卽浣花溪の西北に在り。【五】百花潭 卽ち浣花溪。【六】滄浪 青色の水をいふ、滄浪之水清兮、可以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可以濯吾足の滄浪なり、「尙書」(禹貢)によれば漢水より東に在る水名なりとのことなれども今從はず、ここは自己の足をあらふべき水、隱退の處として用ひたり。【七】篠 しのだけ。【八】裛 つつむ。【九】蕖 芙蕖なり、「はすのはな」。【一〇】冉冉 次第に生ずる貌。【一一】厚祿故人 大官となつて多くの俸祿をもらつてゐる舊知の友人、指す人あるならんも何人と知りがたし、舊注裴冕となせども余は高適が緊かとおもふ、高適に對しては救ひを求めし詩あればなり。【一二】書斷絕 これはたまたまこのとき書信がとだえしなるべし。【一三】恒飢稚子 いつもうゑてゐるこども。【一四】色 顏色。【一五】凄涼 かなしげ。【一六】塡溝壑 みぞやたにゝはまりこんでそれをうづめる。のたれ死にすること。【一七】疎放 世とうとくし、きままにする。

【題義】自己の狂態をあざけりて作れる詩。

【詩意】萬里橋の西に一の草堂がある。そのそばにある百花潭の水はすなはち自分にとつては滄浪の水で隱退の場所である。みわたせば翠色の篠竹は風を含んで娟娟とうつくしく淨らかであり、雨のうるほひにつつまれてゐる紅の蓮の花はつぎつぎにかをつてゐる。ときにこのごろは厚祿をもらつてゐた舊友からの手紙はとだえ、いつもひもじがつてゐるこどもの顏色はいよいよかなしげにみえてゐる。こんなわけで自分はいまにもどぶへはまつてのたれ死にしさうになつてゐるのにただただ世ばなれてかつてきままにしてゐる。これは元來狂夫であるこの自分は年がよつてもう一層狂氣じみてきたのかと、自分ながらをかしくなる。

田舍(一)

田舍

田舍清江曲。柴門古道旁。　田舍、清江の曲、柴門、古道の旁。
草深迷(二)市井。地僻懶(三)衣裳。　草深くして市井迷ひ、地僻にして衣裳に懶し。
(四)楊柳枝枝弱。枇杷對對(五)香。　楊柳、枝枝弱く、枇杷、對對香し。
(六)鸕鷀西日照。曬(七)翅滿(八)漁梁。　鸕鷀、西日に照され、翅を曬して漁梁に滿つ。

【字解】〔一〕田舍 農家なり、自宅をさす。〔二〕市井 むかしは二十五畝を一井とし、そこに市を爲くり交易す、因て交易の地を市井といふ。〔三〕衣裳 體裁よく著こなすことについていふなるべし。〔四〕楊柳 やなぎ、楊を一に榛に作る、榛柳は前に見えたり。〔五〕對對 これは果實の房の相對してなつてゐるをいふならん、「對對」を或は「樹樹」に作る。〔六〕鸕鷀 「う」のとり。〔七〕曬翅 はれを日光にさらしてほす。〔八〕漁梁 うをとる「やな」。

【詩意】清らかな江の曲にある百姓家。古びた道路のそばに立つ柴の門。ここは草深くしげつてどこが市井の地やらわからず、あまりにかたゐなかできまりきつて著物をきるさへものうくおもふ。みれば楊柳は枝ごとになよなよとしてをり、枇杷の實は一對一對香しくみのつてゐる。「う」のとりは西日に照されて、「やな」にたくさんたかつてはねをさらしてゐる。

江村(一)

江村

清江一曲抱村流。　清江一曲、村を抱きて流る、
長夏江村事事幽。　長夏江村、事事幽なり。
自去自來梁(二)上燕。　自ら去り自ら來る梁上の燕、
相親相近水中鷗。　相親み相近づく水中の鷗。
老妻畫紙爲棊(三)局。　老妻紙に畫きて棊局を爲り、
稚子敲(四)針作釣鉤(五)。　稚子針を敲いて釣鉤を作る。
(六)但有故人供祿米。　但故人の祿米を供する有り、
[多病所(七)須惟藥物]　[多病須つ所は惟藥物、]
(八)微軀此外更何求。　微軀此の外更に何をか求めむ。

【字解】〔一〕江村 かはぞひのむら。〔二〕梁 はり。〔三〕棊局 ごばん。〔四〕敲針 すぐなる針をたたいて曲げるなり。〔五〕釣鉤 つりばり。〔六〕但有故人供祿米 仇氏は「文苑英華」により此句を用ひたれども諸本みな「多病所須惟藥物」に依る、余は之に從ふ。〔七〕所須 須は「まつ」、いりようとする。〔八〕微軀 つまらないからだ、謙遜していふ。

【題義】居村の生活のさまをのぶ。

【詩意】きよらかな錦江が一まがりまがつて村をかかへて流れてゐる。このかはぞひの村では日ながの夏には事ごとに幽靜なものばかりだ。すなはち梁のうへにはひとりでに燕がいつたりきたりしてゐるし、水のなかの鷗はおたがひに親しみ、おたがひに近づきあうてゐる。家では老妻は紙に線をひいて棊局をこしらへ、こどもは針をたたきまげてうをつりばりを作る。いま病身の自分のいりようとするものは藥品のたぐひばかりであつて、その以外のものは自分のからだにとつて何も求むるものとて

はない。

(一)江漲

江漲る

江漲柴門外。兒童報急流。　江漲る柴門の外、兒童、急流を報ず。

下牀高數尺。倚杖沒中洲。　牀を下れば高きこと數尺、杖に倚れば中洲沒せり。

(二)細動迎風燕。輕搖逐浪鷗。　細かに動く風を迎ふる燕、輕く搖ぐ浪を逐ふ鷗。

漁人縈(三)小楫。容易拔(四)船頭。　漁人、小楫を縈ひ、容易に船頭を拔く。

【字解】【一】江　錦江。【二】細動・輕搖「動」・「搖」は仇氏は水のうごくことにみたり。余は鳥のさまとみる。細動は燕がこまかにうごくこと、輕搖は鷗がかろくゆらぐこと、燕は水に關係なきがごとくなれども然らず、これ大水のうへの燕の水にふれんばかりにひくくとぶさまをいへるなり。【三】縈　水に流されぬ樣に繩にてまとふをいふならん。【四】拔船頭　拔とは舟人の用語にて「回らす」ことなりと、或は捩に作る、捩はれぢらすこと。

【題義】江水のみなぎりしさまをのぶ。

【詩意】柴門の外で江水がでてきた。こどもらは水の流れが急になつたとしらせてくる。之をきいてねだいからおりるとはや二三尺もみづかさが高くなり、そとへでて杖に倚つてみるとはや中洲がかくれてみえぬ。風を迎へて飛ぶ燕は細かに動いてゐるし、浪をおうておよぐ鷗はかろらかにゆらいでゐる。れふしたちは小さな楫を繩でくくりつけて、やすやすと船の頭をむけかへてゆく。

(一)野老

野老

野老籬邊江(二)岸迴。　野老の籬邊、江岸迴る、

柴門不(三)正逐(四)江開。　柴門正しからず江を逐うて開く。

漁人網集澄(五)潭下。　漁人の網は集まる澄潭の下、

(六)估客船隨(七)返照來。　估客の船は返照に隨つて來る。

(八)長路關(九)心悲(一〇)劍閣。　長路關心、劍閣を悲しむ、

(一一)片雲何事傍(一二)(一三)琴臺。　片雲何事ぞ琴臺に傍ふ。

(一四)王師未報收(一五)東郡。　王師未だ報せず東郡を收むるを、

(一六)城闕秋(一七)生畫(一八)角哀。　城闕秋生じて畫角哀し。

【字解】【一】野老　田野の老人、自己をさす。【二】江岸迴　江は錦江、迴はまがつてゐるをいふ、清江一曲抱村流の一曲とおなじ。【三】不正　江岸まがれる故に門の形も一直線にあらざるをいふ。【四】逐江　江のまがつたすがたにしたがうての意。【五】澄潭　水のすみたるふち、卽ち百花潭をさす。【六】估客　商人をさす。【七】隨返照來　返照は夕日のてりかへし、返照に隨て來るとは舟を泊せんとの意よりして來るなり。【八】長路　故鄕を去ることの遠きをいふ。【九】關心　氣にか

【原注】至德二年、陷成都、爲南京、故得稱城闕。

かゝること。【一〇】悲劍閣　劍閣によりて隔てらるゝを悲しむなり。【一一】片雲　此句敍景にして倂れて自己の身況をたとへたり、片雲はよるべなきひとひらの雲。【一二】傍　そふ。【一三】琴臺　司馬相如の故迹、別に「琴臺」の作あり、其餘下をみよ、臺は浣花溪の北にありといふ。【一四】王師　官軍。【一五】收東郡　東郡は洛陽以東の諸郡をさす。乾元二年九月に東京及び濟・汝・鄭・滑

の四州皆賊に陷り、上元元年六月、田神功、史思明が兵を鄭州に破りしも、東京の諸郡は未だ收復さるるにいたらず。【一六】城闕　成都の城闕、闕は宮門についていふことばなれども、成都は南京にのぼされ都としての取りあつかひを受くるゆゑかくいふこと作者の自注にみゆ。【一七】秋生　秋になること。【一八】畫角哀　畫き飾りたる角ぶゑの音かなし。

【題義】成都に客寓して賊の平がざるため故郷にかへり得ざるのさびしさをのべたり。

【詩意】自分の家の籬のほとりでは錦江の岸がまがつてゐる、だから柴の門もまがつた江の形のままに折れまがつて開かれてある。みれば魚をとる人人の網は澄潭のところに集つてをるし、流れを下つてくる商人の船も夕日のてりかへしとともに泊りすべくやつてくる。故郷まで道路のとほいことは氣がかりであつて劍閣にへだてられてゐることはことに悲しいのである。琴臺の方をみると一片の雲が之によりそうてゐるがなんでそんなところによりそうてゐるのか、そのこころもちがわからぬ。（なんで自分もその雲のやうにこんな土地へきてゐるのか）。官軍が東方の諸郡をとつたといふしらせはまだない、ただここの城の門闕には早くも秋が生じて軍隊の吹きならす角ぶえのねがあはれにきこゆる。

雲山（一）

雲山

京洛（二）雲山外。音書（三）靜（四）不來。　京洛、雲山の外、音書、靜にして來らず。

神交（五）作賦客（六）。力盡（七）望鄉臺（八）。　神は交はる作賦の客、力は盡く望鄉臺。

衰疾（九）江邊（一〇）臥。親朋（一一）日暮迴（一二）。　衰疾、江邊に臥す、親朋、日暮に迴る。

白鷗元水宿（一三）。何事有餘哀。　白鷗元水宿す、何事ぞ餘哀有る。

【字解】【一】雲山　雲のある山。【二】京洛　長安・洛陽。【三】音書　故鄉からのたより。【四】靜　ひつそり、おとさたなきをいふ。【五】神交　精神相交る。【六】作賦客　司馬相如をさす。【七】力盡　氣力なきなり。【八】望鄉臺　成都縣北九里に在り、隋の蜀王秀の築きし所なりといふ。【九】衰疾　老衰・疾病。【一〇】江邊　江は錦江。【一一】親朋　親戚朋友。【一二】迴　かへり去るをいふ。【一三】水宿　水邊にとまる、鷗を以て自家の況にたとへていへり。

【題義】第一句の雲山の二字をとりて題とせしまでなり。客寓のさびしさをのぶ。

【詩意】長安洛陽は遠く雲山のかなたにあつて、故鄉からのたよりはひつそりとしてちつとも來ぬ。吾が精神はいたづらに此地のうんだ賦家たる司馬相如とゆきかようてをるが、ここの望鄉臺に於て故鄉をながめるために氣力は盡きはてた。自分はこのかはべりで衰疾でうちふし、親戚朋友らは日が暮れるとみなもどつていつてしまふ。水邊をみれば白い鷗が宿つてゐる、彼は水に宿るが本性であるのに、なぜか知らんがあはれにたへきれぬ樣なさまがみえる。（自分もこの「かもめ」に似てゐるとの意。）

遣興

興を遣る

干戈猶未定。弟妹各何之。　干戈猶未だ定らず、弟妹各何くに之く。
拭涙霑襟血。梳頭滿面絲。　涙を拭へば襟を霑す血なり、頭を梳れば滿面の絲。
地卑荒野大。天遠暮江遲。　地卑くして荒野大に、天遠くして暮江遲し。
衰疾那能久。應無見汝期。　衰疾那ぞ能く久しからむ、應に汝を見る期無かるべし。

【題義】 客寓のものおもひをやりしことをのぶ。

【詩意】 いくさがまだ平定せぬ。弟や妹はそれぞれどこへゆきしことやら。涙をぬぐうてみれば襟もとをうるほすは血の涙であり、頭をくしでとかせば白髮がぬけおちてかほぢうにふりかかる。家のそとをながめると、地面は卑く平で荒れた野はらが大きく横はり、天は遠くつらなつて夕ぐれの江はゆるくながれてゐる。自分の老衰疾病ではとてもこの世にながく生きてゐることはあるまいから、おまへたち（弟妹をさす）に面會する時期は無いであらう。

遣愁

愁を遣る

(一)養拙(二)蓬爲戶。(三)茫茫(四)何所開。　拙を養ひて蓬を戶と爲す、茫茫何の開く所ぞ。
(五)江通(六)神女館。(七)地隔望鄉臺。　江は通ず神女館、地は隔つ望鄉臺。
漸惜容顏老。無由弟妹來。　漸く惜む容顏の老ゆるを、弟妹の來るに由無し。
兵戈與人事。回首一悲哀。　兵戈と人事と、首を回せば一に悲哀なり。

【字解】 【一】養拙　世わたりべたなもちまへを養ふ。【二】蓬爲戶　貧居の樣子。【三】茫茫　ひろびろとしてはつきりせぬ貌。【四】何所開　戶の前にはいかなるものが開きいだされるか。【五】江　揚子江。【六】神女館　巫山の神女の廟をさす、廟は夔州府巫山縣治の西北二百五十步にありと。【七】地隔望鄉臺　地は夔州の地をさす、望鄉臺は成都に在り、前の「雲山」の詩にみえたり。

【題義】 夔州客寓のさびしさをのぶ。夔州時代の作。

【詩意】 自分はもちまへの拙なところを養うて蓬のくさを戶にしてをる、その戶を開けて茫茫たる前面になにがひらきだされるか、といふと江の水は神女の館に通じ、地ははるかに望鄉臺をへだててをる。自分はだんだんおのれのかほつきの年老いゆくのを惜むばかりで、弟や妹がこちらへ來るてだては無い。いくさごとといひ、骨肉間の人事といひ、首をめぐらしてみればただただかなしくおぼゆるのみのことである。

【餘論】 仇氏は此篇を成都の作とし舊編夔州に置きたるを非とせり。しかしながら成都の作とせば、「江通」の江は錦江なり、錦江にて江は巫山縣の神女館に通ずとは何の意ぞや。又仇氏は地隔望鄉臺は即ち力盡望鄉臺なりといへるが、大意はそれにてよろしきも、成都の作とせば地隔望鄉臺は地と望鄉臺とを同一視し、隔とは京洛に對して隔たるの義とみざる可からず。これ文法の慣例上不可なり、

上句の江と館とは別物なり、下句に於ても地と臺とは別とみるが常例なり、仇氏之を同視せんとするは無理なり、仇氏又曰く、夔州にありては作者峽を出でんことを思ひをるに何ぞさかのぼつて望鄕臺のことを言はんや、と。これ然らず、江通・地隔の二句は第二句の何所開を承けて來る、故に一は夔州の下流の神女館をあげて且つそれとなく妹に想到し、一は上流の望鄕臺をあげてややひろく鄕を望むの意を喚び起せしなり、かくして漸惜以下下半の結をなせり、決して不自然といふべからず。舊編によりて之を夔州の詩中に置くに如かず。

杜鵑行

杜鵑行

古時杜宇稱望帝。魂作杜鵑何微細。跳枝竄葉樹木中。
掎伴嘈捩雌隨雄。毛衣慘黑貌憔悴。衆鳥安肯相尊崇。
隳形不敢栖華屋。短翮惟願巢深叢。穿皮啄朽觜欲禿。
苦飢始得食一蟲。誰言養雛不自哺。此語亦足爲愚蒙。
聲音咽咽如有謂。號啼略與嬰兒同。口乾垂血轉迫促。
似欲上訴於蒼穹。蜀人聞之皆起立。至今相效傳微風。
迺知變化不可窮。豈思昔日居深宮。嬪嬙左右如花紅。

古時杜宇望帝と稱す、魂杜鵑と作る何ぞ微細なる。枝に跳り葉に竄る樹木の中、掎伴嘈捩雌雄に隨ふ。毛衣慘黑貌憔悴、衆鳥安んぞ肯て相尊崇せむ。隳形敢て華屋に栖まず、短翮惟深叢に巢くはむことを願ふ。皮を穿ち朽に啄み觜禿せむと欲す。苦飢始めて一蟲を食することを得。誰か言ふ雛を養ふに自ら哺せずと、此の語亦愚蒙と爲すに足れり。聲音咽咽謂ふ有るが如く、號啼略嬰兒と同じ。口乾き血を垂れて轉た迫促、上りて蒼穹に訴へんと欲するに似たり。蜀人之を聞きて皆起立す、今に至つて相效ひて微風を傳ふ。迺ち知る變化窮むべからざるを。豈思はんや昔日深宮に居り、嬪嬙左右花の如く紅なりしことを。

此篇「文苑英華」に刻作司空曙といひ、注して「又見杜甫集」といへり。仇氏は蔡本の之を夔州の詩の內に置きたるを「蜀人聞之」の語ありとて成都の作にひきあげたり。余案ずるに「蜀人聞之」の語ありとて成都の詩たるの證となすに足らざるのみならず、杜の作なるや否やも疑問なり。余は寧ろ他人の作のまぎれこみしものとおもふ。詩また見るに足らず、故に釋せず。

題壁上韋偃畫馬歌

壁上の韋偃が畫馬に題する歌

(二)韋侯別我有(三)所適。　韋侯我に別れて適く所有り、
知我憐(四)渠畫無敵。　我が渠が畫の敵無きを憐むを知りて、
戲(五)拈(六)禿筆(七)掃(八)驊騮。　戲れに禿筆を拈りて驊騮を掃ふ、
(九)歘見(一〇)騏驎出東壁。』　歘ち見る騏驎の東壁に出づるを。』
一匹(一一)齕草一匹嘶。　一匹は草を齕み一匹は嘶く、
坐看(一二)千里(一三)當霜蹄。』　坐に看る千里、霜蹄に當るを。』
(一四)時危(一五)安得眞(一六)致此。　時危くして安んぞ眞に此を致して、
與人同生亦同死。』　人と生を同じくし亦死を同じくするを得む。』

【字解】【一】韋偃　京兆の人にして蜀に寓居す、馬を畫くを以て名あり、偃或は鶠に作る。【二】韋侯　韋偃をさす。【三】有所適　どこぞへ旅行せんとするなり。【四】渠　「かれ」偃をさす。【五】拈　ひねる、取り弄ぶをいふ。【六】禿筆　毛さきの坊主になつたふで。【七】掃　かきなぐること。【八】驊騮　駿馬。【九】歘　忽ち。【一〇】騏驎　千里の馬。【一一】齕　かむ。【一二】千里　千里の遠地。【一三】當霜蹄　霜蹄とは秋のひづめ、秋は馬ごとに元氣よし、當は時間のうへにてぶつつかる意なるべし、ちやうどいま霜蹄で踏みつつあるをいふ（或は適當する、霜蹄にふさはしいといふ義にもみらるべし）。【一四】時危　時世安穩ならず。【一五】安得　希冀の辭、下句までかかる。【一六】致此　「此」は馬をさす、我はこちらへ招きいたす。

【題義】韋偃が旅行せんとするとき馬を畫いてくれた、それを壁上にかけてみて、之に題した詩。

【詩意】韋君は自分に別れてどこぞへゆかうとしてゐる、自分は彼が畫では敵するもの無いほど名人であることを愛してゐる、彼もそのことを知つてゐるので自分のために戲れにはげちよろけの筆をひねつて驊騮のさまをかきなぐつてくれた。にはかに東壁の上に騏驎の名馬があらはれ出たのをみとめる。』その一匹は草をたべてをり、一匹はいなないてをる。いまちやうど霜をおびた蹄で千里の地を踏みつつあるの姿がそのままみられるのである。』いま世がまだ太平にならぬ時だ、ほんたうにこんな名馬を招きよせて騎り手といつしよに戰場で生死させることができぬものだらうか、できるならどうかさうしてみたい。』

戲題王宰畫山水圖歌(一)　王宰が畫ける山水の圖に戲れに題する歌

十日畫一水。　十日に一水を畫き、
五日畫一石。　五日に一石を畫く。
(二)能事不受相(三)促迫。　能事、相促迫するを受けず、
王宰始肯留(四)眞跡。　王宰始めて肯て眞跡を留む。
壯哉(五)崑崙(六)方壺圖。　壯なる哉崑崙方壺の圖、
挂(七)君高堂之(八)素壁。』　君が高堂の素壁に挂く。』

【字解】【一】王宰　蜀の人にして能く蜀の山を畫くといふ。【二】能事　能力を發揮すること、繪畫のことをさす。【三】促迫　さいそくする、日限をいそぐなり。【四】眞跡　眞の筆のあと。【五】崑崙　仙山。【六】方壺　海中の三山を三壺といふ、方丈を方壺、蓬萊を蓬壺、瀛州を瀛壺といふ、壺といふはその

巴陵洞庭日本東。　巴陵洞庭、日本の東、

赤岸水與銀河通。　赤岸の水は銀河と通ず。

中有雲氣隨飛龍。　中 雲氣の飛龍に隨ふ有り。

舟人漁子入浦溆。　舟人漁子、浦溆に入る、

山木盡亞洪濤風。』　山木 盡く亞ぐ洪濤の風に。』

尤工遠勢古莫比。　尤も遠勢に工なり、古 も比する莫し、

咫尺應須論萬里。　咫尺應に須らく萬里を論ずべし。

焉得幷州快剪刀。　焉んぞ幷州の快剪刀を得て、

剪取吳松半江水。』　剪取せむ吳松半江の水を。』

形、上廣く中狹く下方(しかく)なればなりと。【七】君　王宰をさす。【八】巴陵　今の湖南岳州府。【一〇】洞庭　湖の名、巴陵の西にあり。【一一】赤岸　山の名、揚州江都縣にあり。【一二】銀河　あまのがは。【一三】中有　中とは畫面の中央とおぼしき處をいふ、この一句は巴陵・赤岸の二句をまとめたる句にて單句なり。【一四】舟人　せんどう。【一五】漁子　れふし。【一六】入浦溆　溆もまた「うら」なり、風怒り濤壯なるを以て舟人漁子等みなうらにはひるなり、此句と次の「山木」の句は側敍なり。【一七】山木　山に生じたる樹木。【一八】亞　つぐ、畫面にていひ、山木が下方にあり、濤が上部にあるをいふ。【一九】洪濤風　風、おほなみを吹くさまをいふ。【二〇】遠勢　遠方をながめた景色。【二一】咫尺　畫幅の面積。【二二】萬里　即ち遠景。【二三】幷州　今の山西省の地、切れものの出るところ。【二四】快剪刀　きもちよくきれるたちものかたな。【二五】剪取　この二字はこの畫幅についていふとみゆ、畫面に松江に似たところあるによりその部分をきつてとりたいといふなり、これ題に「戲れに」とある所以なり。【二六】吳松　吳地の松江、松江は禹貢の三江の一、松江府の南四十五里にあり、作者嘗て吳に遊び其地の風景を思ひて忘れず、因つて斯の言を發せり。

【題義】　王宰のかいた山水の圖をみて戲れに之に題した詩。

【詩意】　十日かかつて或る水をゑがく、また五日かかつて或る石をゑがく、かくゆつくりしてその仕事に他人からせつかれなければそこで始めて王宰は自分の眞の筆のあとをのこすのである。いやなんと壯なものではないか、君のざしきのしらかべにかけてある崑崙・方壺の圖は。』　巴陵の洞庭の水から日本東海の水、それに赤岸山あたりの水、それが銀河の水とあひ通じてかかれ、中央部にはそらとぶ龍について雲氣のわきたつてるところがある。また山の樹木は下方にあつてその上方にはすばらしく風だつたおほなみがかかれ、舟人・漁子等はみな浦わににげこんでをる。』　君は遠景をゑがくことには尤もたくみで古人にも比ぶべきものがない、山水の圖はかくあるべきで咫尺のせまいうちに於て萬里の形勢あるや否やを論ずべきである。君のゑはあまりにうまいから、自分はどうかして幷州のよくきれるたちものがたなで松江の水に似たところの半分ほどをきり取つてしまひたいとおもふが、どうだ。』

戲爲韋偃雙松圖歌　　戲れに韋偃が雙松の圖の歌を爲る

天下幾人畫古松。　天下幾人か古松を畫く、

【字解】【一】韋偃　前にみえた

（三）畢宏已老韋偃少。　畢宏は已に老い韋偃は少し。
（四）絕筆長（五）風起纖（六）末。　筆を絕てば長風、纖末より起る、
（七）滿堂動（八）色嗟神妙。』　滿堂色を動かして神妙と嗟す。』
兩株慘裂苔蘚皮。　兩株慘裂す苔蘚の皮、
（九）屈鐵交（一〇）錯迴（一一）高枝。　屈鐵交錯して高枝迴る。
（一二）白摧朽骨龍虎死。　白なることは朽骨摧けて龍虎死し、
（一三）黑入太（一四）陰雷雨垂。』　黑なることは太陰に入りて雷雨垂る。』
松根胡（一五）僧憩寂（一六）寞。　松根の胡僧は寂寞たるに憩ふ、
（一七）龐眉皓（一八）首無（一九）住著。　龐眉皓首、住著無し。
（二〇）偏袒右肩露（二一）雙脚。　右肩を偏袒して雙脚を露はす、
（二二）葉裏松子僧前落。』　葉裏松子は僧前に落つ。』
韋偃韋偃數相見。　韋偃韋偃、數〻相見る、
我有一匹好東（二三）絹。　我に一匹の好東絹有り。

り。【二】雙松　二本の松樹。【三】畢宏　天寶中の御史にして善く古松をゑがくといはる、宏はのちに大曆二年に給事中となり、京兆少尹・左庶子等の官となれり、古松に於ては古風を變ずと稱せらる。【四】絕筆　筆を止めること、かき了る。【五】長風　遠く吹くかぜ。【六】纖末　松の葉ずゑをいふ。【七】滿堂　滿堂の人。【八】動色　色は顏色、動色は驚いて色をかへること。【九】屈鐵　まがつたくろがね、枝の形容。【一〇】交錯　まじはる。【一一】迴　囘曲するをいふ。【一二】白　松樹皮の色【一三】黑　囘枝の色。【一四】太陰　積陰なり、極北の地を太陰といふと。【一五】胡僧　西域より來た外國僧。【一六】寂寞　松樹のはえた場所をさす。【一七】龐眉　ふさふ

重之不減錦（二四）繡段。　之を重んずる減せず錦繡段。
已令拂（二五）拭光凌（二六）亂。　已に拂拭せしめて光凌亂たり、
請君放（二七）筆爲直（二八）幹。』　請ふ君筆を放つて直幹を爲れ。』

さしたまゆ。【一八】皓首　しらがあたま。【一九】無住著　行除きまりなし。【二〇】偏袒　かたはだぬぐ。【二一】露　あらはす、はだしのこと。【二二】葉裏　地につもつてゐる葉のなか。【二三】東絹　或は曰く關東の絹なり、或は曰く鵞溪の絹なりと、鵞溪は梓州鹽亭縣にあり、成都の東にあたる。【二四】錦繡段　張衡が四愁詩のなかの語、段は一くぎりをいふ。【二五】拂拭　ほこりをはらひぬぐふ。【二六】凌亂　みだるる貌。【二七】放　ほしいままにする。【二八】直幹　まつすぐなみき。

【題義】　韋偃が二本の松の樹を畫いたのをみて戲れにその歌をつくる。偃が屈曲した松をたくみに畫いたのをみてまつすぐな幹をかけといふは戲れなり。

【詩意】　いま天下に古松をよくかくものは幾人あるか、畢宏は年よりになつたし、韋偃はわかい、この二人ぐらゐのものか。偃がかき了ると松の葉ずゑから遠く吹く風がおこつてくる、之をみて一座の人人はみなかほ色をかへて神妙と歎美する。』　その松は二株あつて苔むした皮がむごたらしく裂け、高い枝が下へまがつてかがめた鐵がたがひにまじはつてゐる。苔皮のさけた幹は白くてたとへば朽ちた骨がくだかれて龍虎が死んでゐるかのごとく、鐵の様な枝のさがつてまじはり黑くなつてゐるところはたとへば積陰中に入つて雷雨が垂れさがつてゐるかの様である。』　松の根もとに胡僧がをり、ひ

つそりしたところにやすんでゐる。その僧はしらがあたまでふさふさした眉をもち、住所不定の僧の樣だ。かれは右の肩の方をかたはだぬぎになり、左右ともはだしである。僧の前には葉のなかに松ばつくりが落ちちつてゐる。』韋君よ、自分はあなたとたびたびかほをあはせてゐる、懇意なあひだがらだ。自分は錦繡の織物にもまけず大切にしてゐるいい東絹を一匹もつてゐる、その絹はほこりをはらはせてきらきらひかる樣になつてゐる。どうぞ筆にまかせてまつすぐな松の幹をかいていただきたい。

(一)北鄰　　北鄰

(二)明府豈(三)辭滿。(四)藏身方(五)告勞。　明府豈に滿を辭せむや、身を藏して方に勞を告ぐ。

(六)青錢買野竹。(七)白幘(八)岸(九)江皐。　青錢、野竹を買ひ、白幘、江皐に岸く。

愛酒晉(一〇)山簡。能詩(一一)何水曹。　酒を愛す晉の山簡、詩を能くす何水曹。

時來訪(一二)老疾。(一三)步屧到(一四)蓬蒿。　時に來つて老疾を訪ふ、步屧、蓬蒿に到る。

【字解】〔一〕北鄰　北どなりにすんでゐる人のことをいふ。〔二〕明府　縣令の敬稱、黃鶴の注に蓋し王明府かといへり、案するに其人縣令にして官を辭し閒居せしものならん。〔三〕豈辭滿　反語によむ、「盈滿を待ちて始て之を辭するに非る」をいふ、出典は謝靈運の辭滿豈多秩に本く、謝詩は漢の邴曼容が故事を用ふ、曼容は官に在るに六百石に滿つるを待たずして之を辭す、盈滿を戒めて之を辭するは祿秩の多少によらぬことなりといふが謝詩の意なり、杜句亦同義なり。（一說に豈辭滿と疑問に讀ますものあり、亦通ず）〔四〕藏身　退隱する。〔五〕告勞　公事勞苦なりと告げて之を辭するをいふ。〔六〕青錢　青色の銅錢。〔七〕白幘　幘は頭髮をおほふ「づきん」の類。〔八〕岸　かたむける、幘をうしろざまにかぶりて額をあらはすなり。〔九〕江皐　皐は下を水の流れてゐる「をか」。〔一〇〕山簡　山濤の子、永嘉三年に襄陽の長官となり酒にのみふける。〔一一〕何水曹　梁の詩人何遜、遜は天監中に建安王の水曹行參軍兼記室となる、因て何水曹とも何水部ともいふ。〔一二〕老疾　自分の老と疾。〔一三〕步屧　ざうり。〔一四〕蓬蒿　よもぎふのやど、後漢の張仲蔚が故事、作者その自宅をさす。

【題義】北鄰にすめる某氏のことをのぶ。

【詩意】あなたは縣令ぐらゐで辭職されたのだから盈滿なるを待つて之を辭したわけではなく、早く隱居するのが目的でいまや勞を告げて退棲してをられる。さうして錢をだして野生の竹を買つたり、江ぞひのをかで白いづきんをゆがめてかぶつたりしてをられる。あなたは酒を愛することは晉の山簡のごとく、詩のできることは梁の水曹何遜のごとくである。そのおかたが時にはわたくしの病氣をおたづねくだされ、ざうりばきでいぶせき宿へおこしになる。（ごしんせつありがたいことにおもひまするの意）

(一)南鄰　　南鄰

(二)錦里先生(三)烏角巾。　錦里先生、烏の角巾、

【字解】〔一〕南鄰　南となりに

園收芋栗不全貧。　園に芋栗を收む、全く貧ならず。
慣看賓客兒童喜。　賓客を看るに慣れて兒童喜び、
得食堦除鳥雀馴。　堦除に食するを得て鳥雀馴る。
秋水纔深四五尺。　秋水纔に深し四五尺、
野航恰受兩三人。　野航恰も受く兩三人。
白沙翠竹江村暮。　白沙翠竹、江村の暮、
相送柴門月色新。　相送れば柴門、月色新なり。

朱山人から送つてもらふ。【一〇】柴門 杜家の柴門。

【題義】南鄰の某氏を往訪せしことをしのぶ。

【詩意】南鄰の錦里先生朱山人は隱者のすがたで黑い方形の頭巾をかぶつてゐる。そのはたけには芋や栗がとれるから全く貧乏だといふわけではない。お客ずきとみえてその家のこどもらも賓客をみなれてわたしが訪問すればよろこんでをり、いつもきざはしのそばで餌をやるものか雀などもたべものがたべられるとおもつて人になれてをる。秋の江水がやつと四五尺のところへ二三人ぐらゐのれる野

すむ人のことをいふ、朱山人なる者なり、舊解は作者南鄰へ往訪せる詩ととく、作者別に「過南鄰朱山人水亭」詩あり。【二】錦里先生 錦里は錦江の里、即ち浣花村、先生は朱山人。【三】烏角巾 黑色の方形の頭巾。【四】不全貧 不一に未に作る、是なるに似たり。【五】賓客 杜甫。【六】兒童 朱家のこども。【七】堦除 朱家のきざはし、どえん。【八】野航 航はふね。【九】相送

舟をうかべる、その舟で白沙翠竹といふありさまの江ぞひの村の夕ぐれに送られてくるとちやうど柴門のところに月のひかりが新にあらはれでた。

【餘論】右は舊解によつて說けり。然れども余常に疑ふ、此の篇果して作者が朱山人を往訪せる詩なりやと。余はむしろ朱山人が作者の家へ來訪せしを送る詩ならんと考ふるものなり。他人の貧不貧を論ずるも妙なものなり。終りの「相送柴門」は「柴門相送」と同じことにて、もし送られて柴門に到著せしならば「送到柴門」などあるべきところなり、「柴門相送」とせば柴門から送りだす義と解すべきに似たり。

來訪の作とする立場より一解を試むべし。

【字解】【二】錦里先生 作者自己をさす、陶淵明が自ら五柳先生と稱し、白樂天が自ら醉吟先生と稱する類。【五】賓客 朱山人をさす。【六】兒童 杜家の兒童。【七】堦除 杜家の堦除。【九】相送 作者が朱山人を送る。【一〇】柴門 柴門不正逐江開の柴門。

【詩意】錦里先生ともいふべき自分は黑い方形の頭巾をかぶり隱者のすがたをしてをる。自分ははたけに芋や栗がとれるからまるつきりの貧乏ではない。子どもはお客をみなれてゐるので客をみては喜ぶ、雀などもいつもきざはし近くで物がたべられるからよく人になれてをる。秋の江水がやつと四五尺、そこへ二三人のれる野舟をうかべる、白沙翠竹の江村の夕ぐれにその舟をうかべて客を送らうと

するとちやうど柴門のところへ新に月があらはれでた。

過南鄰朱山人水亭　南鄰朱山人が水亭に過る

相近竹參差。相過人不知。　相近くして竹參差たり、相過れども人知らず。
幽花欹滿樹。細水曲通池。　幽花欹いて樹に滿つ、細水曲りて池に通ず。
歸客村非遠。殘樽席更移。　歸客、村遠きに非ず、殘樽、席更に移す。
看君多道氣。從此數追隨。　看る君が道風多きを、此れ從り數追隨せむ。

【題義】この篇は作者が南鄰の朱山人の水邊の亭によぎりしことをしのぶ。舊編は廣德二年作者成都に復歸せしときの作とす。仇氏は類を以て此に置きたるなり。

【詩意】我が家と君の家とは近くあつて生えてをる竹さへたがひちがひになつてをる。そこをとほつて訪問しても知る人もない。君が家にきてみると幽邃な花はいつぱい樹について橫に咲いてをり、ほそい水の流れが曲つて池に通じてをる。自分はやがてかへらうとおもふが遠い村へかへるわけではないので、のみのこしの樽を前にまた席をかへてのみなほす。つらつらみるに君は道家の氣象を多くそなへた人だ、自分はこれからたびたび來て君にしたがつてあそぶであらう。

因崔五侍御寄高彭州(一)一絕　崔五侍御に因りて高彭州に寄す一絕

(三)百年已過半。(四)秋至轉飢寒。　百年已に半を過ぐ、秋至つて轉た飢寒なり。
(五)爲問彭州牧。(六)何時救急難。(七)　爲に問へ彭州の牧、何の時か急難を救はんやと。

【字解】〔一〕崔五侍御　侍御史崔某。〔二〕高彭州　彭州刺史高適。〔三〕百年一句　この詩上元元年秋の作なるべし、時に作者四十九歲なり、已過半とはいひすぎたる語なり。〔四〕秋至　秋來れば穀みのりてつがふよかるべき時節なり。〔五〕爲問　わがために問へ。〔六〕牧　民をつかさどる官をいふ、刺史をさす。〔七〕急難　さしせまつた飢寒のなんぎ。

【題義】崔侍御にたのみて高適へ衣食の世話をしてくれとたのみやる詩。

【詩意】自分は百年の半分以上（實は然らず）をすぎた。秋がきたにかかはらずいよいよ飢寒にせまつてをる。わたしのために彭州の長官に「いつこのなんぎを救うてくれるか」とたづねていただきたい。

奉簡高三十五使君(一)　高三十五使君に簡し奉る

當代論才子。如公復幾人。　當代、才子を論せば、公が如き復幾人ぞ。
驊騮開(二)道路。鷹隼(三)出風塵。　驊騮、道跡開く、鷹隼、風塵を出づ。

（四）行色秋將晚。交情老更親。　行色秋將に晩れむとす、交情老いて更に親し。
（五）天涯喜相見。（六）披豁對（七）吾眞。　天涯、相見て、披豁吾が眞に對するを喜ぶ。

【字解】【一】高三十五使君　使君は刺史の敬稱。【二】開道路　すすむべき道路が前面にひらけたるをいふ。【三】鷹隼一句　たとへなり。【四】行色　たびだちの時の樣子。【五】天涯二句　この二句實境にあらず、會後のことを想像していふなり。【六】披豁　胸襟をひらく。【七】對　高適が對するなり。

【題義】高適に寄せた詩。詩によれば適榮任せるに似たり、彭州より蜀州に轉せしをいふか、疑ふらくは作者まさに適を訪はんとせしときの作なるべし。」作時詳ならず。

【詩意】現代に於て才子はと論ずるならば君の如きものは幾人あらうぞ。いま君は榮轉したので驊騮の前に千里の道路が開かれたごとく、鷹や隼が風塵からぬけだした樣なものだ。吾が旅立たんとする今は秋がくれかけてをる。お互の交情は年老いていつそうしたい。今から想像してみてうれしいことは天のはてで面會して、君が胸をひらいてちがねのままの僕のすがたに對してくれることだ。

和裴迪登新津寺寄王侍郎。（一）（二）（三）【原注】王時牧蜀（四）

裴迪が新津の寺に登りて王侍郎に寄するを和す【原注】王は時に蜀に牧たり。

（五）何恨倚山木。吟詩秋葉黃。　何の恨か山木に倚りて、詩を秋葉の黃なるに吟ず。
蟬聲集古寺。鳥影度寒塘。　蟬聲、古寺に集まり、鳥影、寒塘を度る。
風物悲遊子。（六）登臨憶侍郎。（七）　風物、遊子を悲ましむ、登臨、侍郎を憶ふ。
（八）老夫貪佛日。（九）隨意宿僧房。（一〇）　老夫、佛日を貪る、隨意に僧房に宿せむ。

【字解】【一】裴迪　詩人にして王維の親友なり。【二】新津寺　新津は縣名、成都府に屬し、その西南にあり。【三】王侍郎　侍郎の官の王某、其人未詳。【四】牧蜀　蜀州の刺史たるをいふ。【五】何恨　何の恨あつてか。【六】遊子　裴迪をさす。【七】侍郎　王侍郎。【八】老夫二句　自己の意をのぶ。【九】佛日　佛德を日にたとふ、金光明經に佛日大悲、滅一切闇の語ありと。【一〇】僧房　新津の寺中のへやをいふ。

【題義】裴迪が新津の寺にのぼりて侍郎王某に寄せたる詩の意を和してつくる。王は時に蜀州の長官たり。

【詩意】（此篇の解余自信なし。臆見をのぶ。）あなたは如何なる恨みあつてか山の木に倚つて、秋の葉の黃ばんだところで詩を吟ぜられるのか。またそこでは多くの蟬のこゑがふる寺にあつまり、寒い色をしたつつみのうへを鳥の影がとほる。そんな景色があなたを悲しくさせ、そのうへ高い處へのぼつたにつけて王侍郎のことなどおもひだされた。あなたの恨みはそんなことのためであらう。このおやぢはあなたとはちがひ、佛の日の光をひどく愛してゐるから、意のままに僧房にとまりこんで佛の敎でもきくでありませう。

贈(一)蜀僧閭丘師兄　【原注】太常博士均之孫。

蜀僧閭丘師兄に贈る　【原注】太常博士均の孫なり。

(二)大師(三)銅梁(四)秀。(五)籍籍(六)名家孫。
大師は銅梁の秀なり、籍籍たり名家の孫。

嗚呼(七)先博士。(八)炳靈(九)精氣奔。』
嗚呼、先博士、炳靈、精氣奔る。』

惟昔(一〇)武皇后。(一一)臨軒(一二)御(一三)乾坤。
惟昔武皇后、軒に臨みて乾坤を御す。

(一四)多士盡儒冠。(一五)墨客(一六)靄(一七)雲屯。
多士盡く儒冠、墨客、靄として雲屯す。

當時(一八)上紫殿。(一九)不獨卿相尊。
當時、紫殿に上るもの、獨り卿相の尊きのみならず。

世傳(二〇)閭丘筆。(二一)峻極逾(二二)崑崙。
世に傳ふ閭丘が筆、峻極、崑崙に逾ゆと。

(二三)鳳藏(二四)丹霄暮。龍去(二五)白水渾。
鳳藏れて丹霄暮れ、龍去つて白水渾る。

(二六)青熒(二七)雪嶺東。(二八)碑碣舊製存。
青熒たり雪嶺の東、碑碣、舊製存す。

(二九)斯文散都邑。高價越(三〇)璵璠。
斯文、都邑に散ず、高價、璵璠に越ゆ。

(三一)晚看(三二)作者意。妙絕與誰論。』
晚に看る作者の意、妙絕、誰と論せん。』

(三三)吾祖詩冠古。(三四)同年蒙(三五)主恩。
吾が祖、詩古に冠たり、同年、主恩を蒙る。

(三六)豫章(三七)夾日月。歲久(三八)空深根。』
豫章、日月を夾む、歲久くして空しく深根あり。』

(三九)小子(四〇)思疏闊。豈能(四一)達詞門。
小子、思疏闊なり、豈に能く詞門に達せむ。

(四二)窮秋一揮涙。(四三)相遇即(四四)諸昆。
窮秋一たび涙を揮ふ、相遇へば即ち諸昆なり。

我住(四五)錦官城。(四六)兄居(四七)祇樹園。
我は住す錦官城、兄居、祇樹の園。

地近慰旅愁。往來當(四八)丘樊。
地近くして旅愁を慰む、往來、丘樊に當る。

(四九)天涯歇(五〇)滯雨。(五一)稉稻臥不翻。
天涯、滯雨歇み、稉稻、臥して翻らす。

漂然(五二)薄遊倦。始與(五三)道侶敎。
漂然、薄遊倦む、始めて道侶と敎くす。

(五四)景晏步(五五)脩廊。(五六)而無車馬喧。
景晏れて脩廊に歩す、而も車馬の喧しき無し。

夜闌接(五七)軟語。(五八)落月如金盆。』
夜闌にして軟語に接す、落月、金盆の如し。』

(五九)漠漠世界黑。(六〇)驅驅爭奪繁。
漠漠、世界黑く、驅驅、爭奪繁し。

惟有(六一)摩尼珠。可照(六二)濁水源。』
惟摩尼の珠有り、濁水の源を照す可し。』

【字解】【一】贈蜀僧閭丘師兄　蜀の僧閭丘某なり、師は僧を尊びていふ、兄は年長者としていふ、この僧は閭丘均が孫なり、均は成都の人にして文章を以て稱せられ、景龍中に安樂公主の薦により太常博士に拜せらる、公主誅せらるゝや均も坐せられて循州の司倉に

陞せられて卒す。【三】大師　僧を尊びていふ。【四】銅梁　山の名、涪江の南に在り、土地の名山なあぐ。【五】秀　山川の秀氣をあつめたる人物。【五】鏘鏘　世人のうはさにのぼるさま。【六】名家孫　閭丘均の孫なるをいふ。【七】先博士　均をさす、先は先世。【八】炳靈　かゞやいた神靈。【九】精氣奔　精氣はすぐれた氣、奔とは傳はるをいふならん。【一〇】武皇后　則天武后。【一一】臨軒　軒は殿陛のてすりをいふ、朝廷の玉座にのぞまるゝを臨軒といふ。【一二】御　支配すること。【一三】乾坤　天地、世界。【一四】多士　多くの美士。【一五】墨客　文士。【一六】藹　むらがる貌。【一七】雲屯　くものあつまるがごとく多くあつまる。【一八】上紫殿　りっぱなごてんにのぼる。【一九】不獨　それに限らぬをいふ。【二〇】閭丘筆　均が文章、文と筆と對するときは、韻をふむを文といひ、ふまざるを筆といふ。【二一】峻極　たかくけはしきことのきはみ。【二二】崑崙　山の名。【二三】鳳藏、龍去　この二語は均が歿せしをいふ。【二四】丹霄暮　あかきそらも夕暮の如くくらくなる。【二五】白水渾　東京賦に龍飛二白水一の語あり、庾信が齊襄王碑に鳳沈二丹穴一、龍亡二黒陂一の語あり、杜詩の二句は意を取りて黒陂を白水とせしまでなり、丹霄も白水も君の居らるゝ附近をさしていふ、渾は「にごる」、二句、均歿して朝廷光彩なきをいふ。【二六】青熒　あをくかゞやく、碑文の光輝をいふ。【二七】雪嶺東　雪嶺は雪山、松州嘉城縣東にある高山、その東とは蜀の地をさす。【二八】碑碣　碣は天然石のはかじるし、碑は身分ある人に、碣は仕官せざる者に用ふ、開元中に均は高僧弘忍が塔碑の文を作りしをいふ、又蜀の牛頭山下、瑞聖寺の磨崖碑の文を撰せりといふ。【二九】斯文　均が文章。【三〇】璵璠　美玉なり。【三一】晩看　作者自己の晩年に於て之を看るをいふ。【三二】作者意　均の文の作家としての意趣。【三三】吾祖　作者の祖父杜審言。【三四】同年　均と同じ年時に於て。【三五】主恩　主は武后。【三六】豫章「くす」の木の類、審言の材の大をたとへていふ。【三七】爽日月　爽は「はさむ」、樹の高大なるをいふ。【三八】空深根　根のみは深いが幹枝がしげり大きくならぬをいふ、孫としての自己の振はざるをいふ。【三九】小子　わかもの、作者謙遜していふ。【四〇】思蘇渕　詩思綿密ならず。【四一】逢詞門　文章のいりくちに逢する。【四二】窮秋　あきのすゑ、この僧にであひし時節をいふ。【四三】相遇　僧とあふ。【四四】諸昆　昆は後嗣、子孫をいふ、諸昆は蓋し爆從兄弟の關係のごとくなるをいふ。【四五】錦官城　成都の西城。【四六】兄　僧をさす。【四七】紙樹園　須達長者、園を施し、祇陀太子樹を施して佛の說法の處とす、之を祇樹園といふ、略して祇園といひ、また須達の別名給孤獨を取りて給孤獨園といふ、ここは寺のことに用ふ。【四八】窟丘　樊　丘は「をか」、樊は「まがき」、蓋し田野村落の地にあたるをいふ。【四九】天涯　蜀地をさす。【五〇】滯雨　ながあめ。【五一】秔稻　うるしね。【五二】薄遊　しばらくあそぶ。【五三】道侶　道德のとも、僧をさす。【五四】景晏　日のくるゝこと。【五五】僧廊　長い廊下。【五六】而無車馬喧　陶淵明が句なり。【五七】軟語　しづかなはなし、佛典の語。【五八】落月　曉月をいふ。【五九】漠漠　ひろくつらなる貌。【六〇】擾擾　人人の争ひ走るさま。【六一】摩尼珠　圓覺經に見ゆ、清淨なる珠、蓋し法性の圓明透徹塵垢に染まざるをたとへていふ。【六二】濁水源　人間界汚濁の源。

【題義】　蜀の僧閭丘某に贈れる詩。某は均が孫にして、均は作者の祖父杜審言と同じく武后に仕へし人なり。

【詩意】　あなたは銅梁山川の秀氣の集つてうまれた人で、やかましい名家の孫だ。ああ先世の太常博士のかゞやいた神靈から精氣が奔りだして傳はつたものだらう。』　昔武皇后は玉座のてすりのところにのぞまれて天地を支配された。時に多くの美士があつたがそれは皆儒冠をつけた人人であり、文士は雲のあつまるやうに多くあつた。そのころ紫殿にのぼつたものは卿相などの尊い人人には限らなかつた。世に傳ふる所では閭丘君の「筆」といはば、その高いことは崑崙の山にもこえるほどだというたものだ。君が沒してからは鳳がかくれて丹きそらが暮れ、龍が去つて白水がにごつた樣に朝廷もにはかに光彩を失つてしまつた。雪嶺の東に於ては君の碑碣の文の舊製がかゞやいてのこつてゐる。その文章が都邑に散ずるとその高價なことは璵璠の美玉にまさるほどだ。自分は晩年にはじめて

作家たる君の意趣を看たが、その妙絶なることは何人と之をかたりあはうか、かたるべき人もない。』わたしの祖父審言は詩は古人にもまさつてゐたが、君とは同じ年に武后から御恩をうけた。彼の材の巨大さは「くす」の木が日月を夾めるがごとくであつたが、歳月久しくしていたづらに根が深くはつてゐるだけで幹や枝はしげらぬ。』自分は詩思が綿密でないからどうして文章の入り口にも達することができよう。ただ窮秋にあたつて一たび感動して涙をふるふのは兄弟の様なあなたにであうためにほかならぬ。わたしは錦官城に住んでゐる、あなたは祇園の寺に住んでをられる、ところが近いのでたびの愁をなぐさめることができ、往來するにも路が村落の地方にあたつてをる。この地で長雨もやみ、うるしねは臥したままうごかぬ。自分はただよへる生活をして他郷に遊ぶことにあきてゐるのではじめて道德の友と交りをあつくする様になつた。日がくれて長廊下をあるくがすこしも車馬のやかましいおとは無い。夜たけなはになつてしづかな話しに接してゐるといつしか夜もあけ落ちかかる月は黃金の盆のやうになつてゐる。』他の世界は漠漠としてまつくらで、俗人はかけずりまはつて名利の爭奪をしげくやつてをる。このとき俗界の濁つた水の源を照すことのできるものは、ただあなたのもつてをられる摩尼の珠があるばかりである。』

泛溪(一)

(二)落景下高堂。進(三)舟泛迴(四)溪。
誰謂築居小。未(五)盡喬(六)木西。
遠郊信荒僻。秋色有餘凄。
(七)練練峰(八)上雪。纖纖雲表霓。
童戲左右岸。罟(九)弋畢(一〇)提攜。
翻倒荷芰亂。指(一一)揮徑路迷。
得魚已割鱗。採(一二)藕不洗泥。
人情逐(一三)鮮美。物(一四)賤事(一五)已暌。
吾郤(一六)靄(一七)暝姿。異(一八)舍雞亦棲。
蕭條欲何適。出(一九)處庶可(二〇)齊。
衣上見(二一)新月。霜中登(二二)故(二三)畦。
(二四)濁醪自初熟。東(二五)城多鼓(二六)鼙。

溪に泛ぶ

落景に高堂より下り、舟を進めて迴溪に泛ぶ。
誰か謂ふ築居小なりと、未だ盡さず喬木の西。
遠郊信に荒僻なり、秋色、餘凄有り。
練練たり峰上の雪、纖纖たり雲表の霓。』
童は戲る左右の岸、罟弋畢く提攜す。
翻倒して荷芰亂れ、指揮して徑路迷ふ。
魚を得て已に鱗を割く、藕を採つて泥を洗はず。
人情、鮮美を逐ふ、物賤しければ事已に暌く。』
吾が郤、暝姿靄たり、異舍、雞亦棲む。
蕭條何くに適かむと欲する、出處庶はくは齊しくすべし。
衣上、新月を見る、霜中、故畦登る。
濁醪自ら初めて熟す、東城に鼓鼙多し。』

【字解】【一】溪　浣花溪。【二】落景　日影の落ちかかるとき。【三】進舟　進は行進せしむること。【四】迴溪　まがつてなるたに川。【五】未盡　盡つくさざるをいふ。【六】喬木　宅邊のそれをさす。【七】練練　しろきさま。【八】峰　雪山をさす。【九】罟弋　うをとりあみ、鳥とりの射ぐるみ。【一〇】畢　ことごとく、こどらがみな。【一一】指揮　こどものうちのだれかがさしずする。【一二】藕　はすね。【一三】逐鮮美　あたらしくうつくしきもののあとをおひかけまはす。【一四】物賤　鱗をさき、泥を洗はざれば魚も藕も賤しくなる。【一五】事已睽　こどもらはそれを賣るつもりなり、物賤しくなれば賣れず、これその事已に情理にそむくなり。【一六】靄　ぼんやりする。【一七】暝姿　ひぐれのすがた。【一八】異舍　他人のいへ。【一九】出處　出づると處るとを。【二〇】齊　同じ様にみる、これ處（隱退）してゐても出（仕官）てなるとおなじこころでゐるをいふ。【二一】霜中　しもふりしなかに。【二二】登　耕作物のみのること。【二三】故畦　ふるきあぜ。【二四】濁醪　にごりざけ。【二五】初熟　新しくできる。
【二六】東城　成都の城は浣花の居の東にあり、故に東城といふ。

【題義】浣花溪に舟をうかべしことを記す。卜居後はじめて上流に棹させしなり。

【詩意】夕日のかたむくころざしきからおりて舟をすすませて、まがつてゐる溪川にうかんでみる。ここ自分のすまひは小さいとだれがいふのか、喬木のある西の方面はまだみきはめぬのではないか。ここの野外はほんたうに草ふかくかたよつてゐて秋景色は十分のつめたさをもつてをる。雪山の雪はまつしろく、またほそぼそと雲のうへの霓があらはれてゐる。』溪川の左右の岸には子供らがたはむれてゐる、彼等はみんなうをとりあみ、鳥とりの射ぐるみをたづさへてゐる。彼等にひつくりかへされて荷や菱はみだれ、餓鬼大將がさしずはするもののみちをまようたりする。魚を得ればその鱗を割きとつたり、蓮根をとつては泥もあらはぬ。人のこころはうつくしいものを逐ふものだ、しかるにこどもらはかく物のねうちをさげてしまつてはあてにしてゐることがはづれてしまふのである。』自分の村も夕ぐれの姿がぼんやりしてきた。他人のいへでも雞がはやねぐらにすんだ。自分はさびしくもどこへゆかうとおもふのか、ひつこんでゐるのも出てつかへるのもおなじことにみらるるではないか。きもののうへに新月の光がさす、霜のなかではたけのうねの作物がみのつてゐる。にごりさけもひとりでにできた。遺憾なのは東城に太鼓やこつづみの音の多くて騒亂のやまぬことだ。

出郭

郭を出づ

霜露晚淒淒。高天逐望低。
霜露、晚に淒淒たり、高天、望を逐うて低る。

遠煙鹽井上。斜景雪峰西。
遠煙は鹽井の上、斜景は雪峰の西。

故國猶兵馬。他鄉亦鼓鼙。
故國猶兵馬、他鄉亦鼓鼙。

江城今夜客。還與舊烏啼。
江城、今夜の客、還舊烏と啼く。

【字解】【一】淒淒　つめたし。【二】逐望低　ながむるままにひくくさがるがごとし、露おりてながめをくらくするなり。【三】遠煙　遠方の煙、煙はしほをたくけむり。【四】斜景　ななめにさす日光。【五】雪峰　雪山なり。【六】故國　洛陽。【七】江城　成都、錦江にそひたる城。【八】客　自己をさす。【九】與舊烏啼　の意、與二舊烏一啼と訓ず、人には號、泣、などいひ啼とはいはざるし作者は啼の字を用ふ。

【題義】成都の城中より郭をでてゆふべに草堂の方へかへりしことをのぶ。

【詩意】夕方霜や露がつめたく置く、あたりをながめると、ながめにつれて天がたれさがる樣にくらくなる。遠方にみゆる煙、それは鹽井の上にたちのぼるけむりである。雪峰の西にはいり日のひかりが斜めにさしてゐる。故國洛陽の方にはまだ兵馬がさわいでゐるし、他鄉たるここにもまた太鼓、つづみのおとがやまぬ。今夜この江城の旅人（自分）はただやつばりまへまへからの烏とともに啼くより外にしかたがない。

恨別　別を恨む

（一）洛城一別四千里。　洛城一別、四千里、

（二）胡騎長驅（三）五六年。　胡騎長驅す五六年。

（四）草木變衰行（五）劍外。　草木變衰して劍外に行き、

兵戈（六）阻絶老（七）江邊。　兵戈阻絶して江邊に老ゆ。

（八）思家步月淸宵立。　家を思ひ月に步して淸宵に立ち、

憶弟看雲白日眠。　弟を憶ひ雲を看て白日に眠る。

聞道（九）河陽近乘勝。　聞道らく河陽近勝に乘ずと、

（一〇）司徒急爲破（一一）幽燕。　司徒急に爲に幽燕を破れ。

【字解】【一】洛城　洛陽の城。【二】胡騎　安祿山の騎兵。【三】五六年　天寶末安祿山の亂起りしより上元元年までにて五六年なり。【四】草木變衰　宋玉が「九辯」の語、變衰とは色かはりおとろへること、秋の時節をいふ。【五】劍外　劍門の外、蜀をさす。【六】阻絶　中間の道路をへだてらるること。【七】江邊　錦江のほとり。【八】思家・憶弟　家と弟とは洛陽及其東方に在り。【九】河陽近乘勝　上元元年三月に李光弼、賊安太淸を懷州城下に破り、夏四月又史思明を河陽の西渚に破る。【一〇】司徒　李光弼をいふ、至德二載李光弼は檢校司徒となる。【一一】幽燕　幽州と燕、ともに直隷の北部にして賊軍の根據地なり。

【題義】故鄉の家族との別れ久しきを恨みてつくれり。

【詩意】洛陽の城と別れてから四千里の遠くにある。賊軍がとほく驅けて攻めよせてから五六年になる。自分は草木の色かはり衰ふる秋にあたつて劍門のそとなる蜀にさまよひ、いくさごとにじやまされて錦江のほとりにくらしてゐる。家を思うては月下に步してはれたよるに立ち、弟をおもうては雲をみながらまひるなか眠つたりする。きくところによると河陽の地方では官軍がちかごろ勝ちかけたさうであるが、どうか司徒（李光弼）は我がために急に進んで幽燕の地方をうち破つてもらひたい。

（一）散愁二首　愁を散ず　二首

（二）久客宜旋（三）旆。（四）興王未（五）息戈。　久客宜しく旆を旋すべし、興王未だ戈を息めず。

蜀星陰見少。江雨夜聞多。　蜀星陰りて見ゆること少く、江雨夜聞くこと多し。

百萬傳深入。寰區望匪他。　百萬深く入るを傳ふ、寰區望むこと他に匪ず。
司徒下燕趙。收取舊山河。　司徒、燕趙を下して、收取せよ舊山河。

【字解】【一】散愁　うれひのこころをちらす。【二】久客　ながくなつたたびびと、自己をさす。【三】旋旆　はたをかへす、故郷へもどること。【四】興王　中興の君、肅宗をさす。【五】息戈「ほこ」を休息させる、いくさをやめること。【六】百萬　多くの官軍。【七】深入　賊境へふかくはひりこむ。【八】寰區　天下【九】望匪他　望むことはほかのことでない、卽ち次の司徒二句はその說明なり。【一〇】司徒　李光弼。【一一】燕趙　ともに直隸の北部、賊の據る所。【一二】舊山河　もと唐の朝廷に屬せし山河。

【題義】官軍の勢よきにより氣ばらしのためにつくりし詩なり。

【詩意】自分といふ長長のたびびとははやく故鄕へはたをかへすのがよいのだが、中興の君におかせられてまだいくさをやめさせることができずにおいでになる。蜀の星は陰つてよくみえることはすくないし、江の雨は夜に聞くことが多い。傳ふる所によれば多くの官軍は敵境へふかくいりこんださうだが、天下の望む所はほかのことではない、ただ司徒李光弼が燕趙の地を下して朝廷の舊山河を取つてしまふことそのことだ。

〔二〕

聞道幷州鎭。尙書訓士齊。　聞道らく幷州の鎭、尙書、士を訓すること齊しと。
幾時通薊北。當日報關西。　幾時か薊北に通じて、當日、關西に報せむ。
戀闕丹心破。霑衣皓首啼。　闕を戀ひて丹心破れ、衣を霑はして皓首啼く。
老魂招不得。歸路恐長迷。　老魂招き得ず、歸路恐らくは長く迷はむ。

【字解】【一】幷州鎭　山西省太原府をいふ、ここはもと李光弼の鎭所なりしが光弼は河陽の方へやられてあとは王思禮之に代れり。【二】尙書　王思禮をさす、乾元二年七月兵部尙書・路潞節度使・霍國公・王思禮を以て太原尹を兼れしめ北京留守に充つ、（北京は太原をいふ）。【三】齊　ひとし、ととのふこと。【四】薊北　薊は薊州、燕の地。【五】當日　その日、薊北に通ずる日をさす。【六】關西　函谷關の西、關西・關中は長安をさす。

【詩意】きけば幷州の鎭所では王尙書は士卒を訓練せらるることがよくととのうてゐるとのこと。いつになつたら賊の根據地薊州の北の方まで道路が通ずることができて、その日之を長安の都へ報知することになれるだらうか。自分は都の御所をこふるために丹き心もうちこはれ、淚は衣をうるほして白髮あたまながらになきつつある。この老の魂は招かうとしても招けず、故鄕のかへり路に永久にまようてゐるであらう。（これ早く薊北に通せんことを待つ所以なり）。

建都十二韻

都を建つ十二韻

蒼生未蘇息。胡馬半乾坤。　蒼生未だ蘇息せず、胡馬、乾坤に半なり。
議在雲臺上。誰扶黃屋尊。　議は雲臺の上に在り、誰か黃屋の尊を扶けむ。

建都分(七)魏闕。下詔闢(八)荊門。　都を建てて魏闕を分つ、詔を下して荊門を闢く。
恐失(九)東人望。其如(一〇)西極(一一)存。　東人の望を失はむことを恐るるも、其れ西極の存するを如せむ。
時危當雪(一二)恥。計大(一三)豈輕論。　時危くして當に恥を雪ぐべし、計大なり豈輕しく論せむや。
雖倚(一四)三堦正。終愁萬國翻(一五)。　三堦の正きに倚ると雖も、終に愁ふ萬國の翻らむことを。
牽(一六)裾恨不死(一七)。漏網(一八)辱殊恩(一九)。　裾を牽く恨らくは死せざりしを、網より漏らす殊恩を辱なうす。
永負漢庭哭(二〇)。遙憐湘水魂(二一)。　永く負く漢庭の哭、遙に憐む湘水の魂。
窮冬客江劍(二二)。隨事(二三)有田園(二四)。　窮冬、江劍に客たり、隨事、田園有り。
風(二五)斷青蒲節。霜埋翠竹根。　風は斷つ青蒲の節、霜は埋む翠竹の根。
衣(二六)冠空穰穰(二七)。關輔(二八)久昏昏(二九)。　衣冠空しく穰穰たり、關輔久しく昏昏たり。
願枉長安日(三〇)。光輝照北原(三一)。　願はくは長安の日を枉げて、光輝、北原を照らさむ。

【字解】【一】建都　新に都を建設するをいふ、史によるに至德二載に蜀郡を南京とし、鳳翔を西京とし、西京(長安)を中京とす。上元元年九月改めて南都を荊州に置き荊州を以て江陵府となす。二年九月鳳翔の西都及び江陵の南都の號を罷め、寶應元年に復た建つ。此詩は上元元年荊州を南都とするときの作なり。荊州を南都と建つることは時の荊州刺史呂諲なるものの建議に本く。作者は之に反對の意見をのべたるなり。【二】蒼生　人民。【三】蘇息　よみがへり、休息する。【四】胡馬　賊軍の兵馬。【六】雲臺　後漢の時たてたる宮中の高臺、ここは朝廷をさす。【六】黃屋尊　天子の尊きをいふ、黃屋は天子の乘らるる車蓋のうら黃絹にて張るを以て之に乘る天子をもさす。【七】分魏闕　分とは分設すること、魏闕は高き宮門、荊州を都とするは中央の宮闕を分つと似たり。【八】闢荊門　闢とは新天地をはじめひらくをいふ、荊門は山の名、荊州にあり、名山を借りてその地を示す。【九】失東人望　東人とは荊州の人をいふ、これは荊州を都とせぬときの場合にはかくの如しといふことなり。【一〇】如　如之何と同じ。【一一】西極　成都をさすといひ、長安をさすといひ說區區たり、余は鳳翔をさすならんと考ふ、これ鳳翔は西京とせられ、のちに上元二年には荊州の南都とともに罷められ二者對するによりかく考ふるなり、作者は長安のことは「北極」といふを例とす。【一二】雪恥　はぢをそそぎきよめる、賊軍にうちまけたるはぢなり。【一三】計大　都を建つることは大計なり。【一四】倚三堦正　三堦は泰堦なり、天に泰堦といふ星座ありて上中下の三堦より成る、三堦平等なれば天下太平なりといふ、正は平正にてその位正しきをいふ、「三堦の正に倚る」は蓋し肅宗の政治をとりなしてほめていふ、太平のおかげによるとはいふものの意ならん。【一五】翻　みだるるをいふ。【一六】牽裾　作者拾遺の官として天子の裾をひきて强諫するをいふ、房琯がことにつき諫めしをさす、魏の辛毗といふもの文帝を强諫し、帝起ちて內に入らんとせしときその裾を引きたる故事あり。【一七】死　諫めて死するなり。【一八】漏網　罪をゆるさるること、「漢書」刑法志に網漏吞舟之魚」の語あり。【一九】殊恩　特別のごおん。【二〇】漢庭哭　漢の賈誼國事をうれへて痛哭す。【二一】湘水魂　楚の屈原懷王をいさめ、湘水のほとりに流され、襄王のとき汨羅の淵に身を投じて死せり、賈・屈・を以て自ら比す。【二二】江劍　江は錦江、劍は劍閣、蜀をさす。【二三】隨事　隨便のごとし。【二四】田園　浣花溪草堂の居をさす。【二五】風斷二句　節物をいひかれてたとへを寓す。【二六】衣冠　朝廷の官員をいふ。【二七】穰穰　多き貌。【二八】關輔　關中の三輔、輔は都のたすけとなる地、今日いふ大都會の郡部の類、長安の三輔は扶風・馮翊・京兆これなり。【二九】昏昏　日色くらし、賢智者なきをいふ。【三〇】長安日　長安をてらす太陽。【三一】北原　河北の地、卽ち賊史思明の據れる地方をさすといへり。

【題義】荊州に南都を建つることに就き反對意見をのべたる詩。詳は「字解」の條をみよ、上元元年九月以後の作。

【詩意】 賊の兵馬は天下の半分にもひろがつて、人民は安息を得ない。このとき雲臺のうへで建都の議論がなされるが、そもそも何人が天子の尊嚴をおたすけいたすのであるか。』 きけば詔を下して荊門の地方をひらいて、都を建てて宮門の分所を置かれるとのことである。もしそれをやめるならば東方荊州の人人の失望は氣の毒なこととはおもふけれども、すでに西京（鳳翔）といふものがあるのをどうするか、そんなにいくつもいくつも都を置くには及ぶまい。いまは時世危險な際である、ただこれまでの恥をそそぐべきであつて、都をあらたに設けるなどの大なる計は容易に論ずべきではなからう。もしそんなことをすれば それは御政道の正しきによるとはいへ、天下萬國がひつくりかへりはせぬかと心配するのである。』 自分はさきに房琯が事についてお諫めしたとき辛毗のごとくお裾をひつぱつてむりにお諫めして死ねばよかつたのであるが、僥倖に刑罰の網からゆるされて特別のご恩にあづかつた。賈誼が漢廷に哭した樣にならぬのは申譯がないが、屈原の樣に湘水の魂と化するは氣のどくなことである。いま冬がれの時節にこの蜀の地に客となり、ともかくも田園までもつてゐる、その田園では青い蒲の節は風に吹きちぎられ、翠の竹の根は霜に埋められてゐて、甚だみるかげもない。』 自分のみるところでは長安の官員どもはただやたらに多いばかり、都の附近の地は昏昏として日の光もささぬかの樣である。どうぞ長安をてらす日の光をむりにも向けかへて、河北の地方を照らすやうにしてもらひたいものである。南方に都を新設するなどは急務ではない。

村夜(一)

風色蕭蕭暮。(二)江頭人不行。
(三)村春雨外急。(四)隣火夜深明。
(五)胡羯何多難。樵漁寄此生。
(六)中原有兄弟。萬里正含(七)情。

村夜

風色、蕭蕭として暮る、江頭、人行かず。
村舂、雨外に急に、隣火、夜深に明かなり。
胡羯何ぞ多難なる、樵漁に此の生を寄す。
中原に兄弟有り、萬里正に情を含む。

【字解】【一】村夜　江村の夜。【二】江頭　錦江のほとり。【三】村舂　むらびとの米つきのおと、水車を用ひてつくなり。【四】隣火　となりの家の火。【五】胡羯　安祿山・史思明が黨。【六】中原　洛陽地方。【七】含情　じつとおもひをむねのうちにもつ。

【題義】 江村の夜のさまと兄弟を思ふ情とをのぶ。

【詩意】 あたりの樣子がさびしくひがくれた。かはのほとりにとほる人もない。雨のふるなかとほくに水車の音がきこえ、夜もふけたのにとなりの家ではあかりがまだついてゐる。なんで賊軍らは難儀を多くおこすか、自分はしばかりや、れふしのあひだに生涯をよせてゐる。みやこの方には兄弟どもがゐる。それについて遠くのことをかんがへじつとふさぎこんでゐる。

寄楊五桂州譚(一)

【原注】因州參(二)軍段子之任。

楊五桂州譚に寄す　【原注】州の參軍段子が任に之くに因る。

五（三）嶺皆炎熱。宜人獨桂（四）林。　五嶺は皆炎熱なり、人に宜しきは獨り桂林のみ。
梅（五）花萬里外。雪（六）片一冬深。　梅花、萬里の外、雪片、一冬深し。
聞此（七）寬（八）相憶。爲（九）邦復好（一〇）音。　此を聞いて相憶を寬にす、邦を爲むる復好音。
江（一一）邊送（一二）孫楚。遠附（一三）白（一四）頭吟。　江邊、孫楚を送る、遠く附す白頭吟。

【字解】【一】楊五桂州譚　桂州の刺史楊譚。【二】參軍段子　楊譚が部下の官たる段某、段は成都より桂州へ赴任するなり。【三】五嶺　廣東・廣西の北にある五つの嶺、始安・越城・臨賀・大庾・騎嶺、是なり。【四】桂林　卽桂州、今の廣西省桂林府。【五】梅花　大庾嶺最も梅を以て名あり、桂林に關しては少しく遠すぎるも之を用ふ。【六】雪片　嶺南には雪なし、ただ桂林には之ありと、冬雪あれば夏になりても他所より涼しき地なること知るべし。【七】此　梅あり、雪ありとのことをさす。【八】寬相憶　おもふこころなくつろがす。【九】爲邦　桂州を治むること、其地の長官たることをさす。【一〇】好音　よきたより、蓋し楊より書信ありしをさす。【一一】江邊　錦江のほとり。【一二】送孫楚　孫楚は晉の石苞が參軍なり、今楊を石苞とみなし、段子を孫楚にあてていへり。【一三】附　托すること。【一四】白頭吟　此の詩篇をさす。

【題義】桂州の刺史楊譚のところへ、その參軍たる段某が赴任するにつけて寄せたる詩。

【詩意】五嶺地方はどこも炎熱で、人體によろしいのは桂林ばかりである、そこは萬里の遠くに在つて梅の花あり、冬ぢう雪も深いといふことである。この話をきいて自分もいくらかあなたを憶ふこころをくつろげ得たのであるし、そんな場所で長官になつてゐるといふことはまことにいいおたよりをきくことである。ここでそちらへ參軍がゆかれるのを送るによつて、この拙吟を依托してやる次第である。

西（一）郊

時出碧（二）雞坊。西郊向草堂。　時に碧雞坊を出で、西郊より草堂に向ふ。
市（三）橋官（四）柳細。江路野梅香。　市橋、官柳細に、江路、野梅香し。
傍（五）架齊書（六）帙。看題（七）檢（八）藥囊。　架に傍ひて書帙を齊へ、題を看て藥囊を檢す。
無（九）人覺來往。疏懶意何長。　人の來往を覺る無し、疏懶、意何ぞ長き。

【字解】【一】西郊　成都の城西の野外。【二】碧雞坊　成都城の西南の坊の名。【三】市橋　城の西南四里にありといふ。【四】官柳細　官でうゑた柳の條ほそし。【五】傍架　架は「本だな」。【六】帙　書衣なり。【七】題　標題。【八】檢　しらべる。【九】無人覺來往　人の己の來往を知らざるをいふ。（仇氏は此解を曲說として「人跡の來往を見ざるを謂ふ」とときたるがそれこそ曲說なるべし。）往とは草堂より城中へでかけしをいふ、來とは今城中より草堂へもどり來るをいふ、此詩は歸來を主としてのべたり。

【題義】城中を出で西郊より草堂にもどり來れることをのぶ。上元元年冬の作ならんといふ。

【詩意】自分は時として碧雞坊から出て西郊を經て草堂へと向ふ、途すがら市橋では柳がほそぼそと垂れてをり、かはぞひの路には野梅の花がにほうてゐる。草堂につけば書架のそばへよりそうて帙を

とゝのへたり、標題を看ながら藥嚢をしらべたりする。往きもかへりもだれもそれに氣がつかぬ。こんな生活はぶしやうな氣もちがのんびりとしてまことによろしい。

和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄

裴迪が蜀州の東亭に登りて客を送り早梅に逢ひて相憶うて寄せらるるに和す

東閣官梅動詩興。　東閣の官梅、詩興を動かす、
還如何遜在揚州。　還何遜が揚州に在りしが如し。
此時對雪遙相憶。　此の時、雪に對して遙に相憶ふ、
送客逢春可自由。　客を送り春に逢ふ、自由なる可し。
幸不折來傷歲暮。　幸にも折り來つて歲暮を傷しめず、
若爲看去亂鄉愁。　若爲看去つて鄉愁を亂らむ。
江邊一樹垂垂發。　江邊の一樹、垂垂として發す、
朝夕催人自白頭。　朝夕人を催して自ら白頭ならしむ。

【字解】【一】裴迪　前にみゆ。【二】蜀州　成都府崇寧州の地、成都の西百里にあり。【三】東閣　東亭をさす。【四】官梅　官のうゑしうめ。【五】動詩興　迪がうごかすなり。【六】何遜在揚州　梁の何遜天監六年揚州の刺史建安王偉が記室として之に從つて揚州にあり、早梅詩を作る、中に枝横卻月觀、花遶凌風臺の句あり。【七】對雪遙相憶　迪がこちらを憶ふをいふ。【八】送客逢春　迪をいふ。【九】可自由　迪を許するなり、心の自由を得たるならんといふなり。【一〇】折來　梅を折りてこちらへ贈つてくれるをいふ。【一一】傷　こちらが心をいためる。【一二】若爲　いかでか。【一三】看去　折來の梅花をみるをいふ。【一四】亂鄉愁　みれば思鄉の愁心をみだる。【一五】江邊　錦江のほとり。【一六】垂垂　枝がしだれて咲くさま。【一七】發　梅花のひらくをいふ。【一八】催人白頭　梅花をみればまた一年をすごすかと感ず、これ花、人の老をうながすに似たり。

【題意】裴迪が蜀州の東亭にのぼつて人を送り、そのとき早咲きの梅花をみたので、自分を憶うて詩をよこしてくれた。その詩に和して作つた詩。上元元年冬の作。

【詩意】あなたは東閣の官梅をみて詩興をうごかした。ちやうどむかし何遜が揚州に居たときのことによく似てゐる。そのときあなたは雪に對して自分のことをおもうてくれたが、旅立つ人を送りながら春げしきにであうたなんぞはさだめし心もくつろいだことゝおもはれる。自分はそれとちがひしあはせとあなたがその梅の枝を折つてよこしてくれぬので歲暮を傷まずにすんだのである、よこされたら最後どうしてそんな花を看て思鄉の愁心をみだすことができよう。ここのかはべりにも一本梅があつてしだれてさいてゐるが、それをみるとあさゆふわたしをうながして白があたまにさせるのではないかとおゝはるるのである。

暮登四安寺鐘樓寄裴十迪

暮に四安寺の鐘樓に登り裴十迪に寄す

暮倚高樓對雪峰。　暮に高樓に倚りて雪峰に對す、

【字解】【一】四安寺　新津縣南

（四）僧來不語自鳴鐘。　僧來つて語らず自ら鐘を鳴らす。
（五）孤城返照紅將斂。　孤城の返照、紅將に斂まらむとす、
近市浮煙翠且重。　近市の浮煙、翠且重なる。
多病獨愁常（六）闃寂。　多病獨愁常に闃寂、
（七）故人相見未（八）從容。　故人相見るも未だ從容たらず。
知君苦思緣詩瘦。　知る君が苦思、詩に緣りて瘦せたるを、
太向（九）交游萬事慵。　太く交游に向つて萬事慵し。

二里にある寺の名、新津縣は今成都府に屬す、唐の時は蜀州に屬せり。【三】鐘樓　かねつきだう。【三】雪峰　新津縣東南五里修覺山のうへの山なりといふ、余おもふに雪山をいふに非るか。【四】僧來一句　僧の無頓著なるさまをみるべし。【五】孤城　新津縣城をいふ。【六】闃寂　さびし。【七】故人　迪をさす。【八】從容　ゆつたり、おちつきゆつくりはなしすること。【九】交游　ともだち、自己をさす、此句迪の來訪なきをうらむ意あり。

【題義】夕ぐれに四守寺の鐘つきだうにのぼつて裴迪に寄せた詩。作者上元二年には時時蜀州に往來せりといふ、此詩は新津にての作。

【詩意】自分は夕ぐれに高樓に倚つて雪峰に對してゐると、寺の僧が來てものもいはずひとりで鐘をつきならす。城の夕ばえの紅の色はなくなりかけてゐるし、近い市場の煙は翠いろさへ重なつてをる。自分は多病であり、ひとり愁へていつもさびしがつてゐる、あなたとは面會はしてもまだゆつくりとはなしあはないのだ。あなたは苦しんでかんがへるあまり詩のために瘦せてはゐるが、あんまり友だちなかまに向つて萬事ぶしやうをしてゐるやうだ。（ちとあそびにおいでなさらぬか、の意。）

寄贈王十將軍承俊

王十將軍承俊に寄贈す

將軍膽氣雄。臂懸兩角弓（一）。　將軍、膽氣雄なり、臂に懸く兩角弓。
（二）纏結青（三）驄馬。出入（四）錦城中。　纏結す青驄馬、出入す錦城の中。
時危未（五）授鉞。勢屈難爲功。　時危くして未だ鉞を授けられず、勢屈して功を爲し難し。
（六）賓客滿堂上。（七）何人高義同。　賓客、堂上に滿つ、何人か高義同じき。

【字解】【一】角弓　角にてかざりしゆみ。【二】纏結　馬の裝飾物をまとひ、むすぶ。【三】驄馬　青白馬。【四】錦城　成都の城。【五】授鉞　賊を征伐する權能を與へられる、鉞は「まさかり」。【六】賓客　將軍のお客分の人人。【七】何人高義同　高義は將軍の友義の高きこと、作者に對し禮を厚くしてもてなしくれることをさす、何人同とは自分と同じほどに將軍の高義を受くるものは殆ど他にはあるまいといふなり、將軍の厚誼を感謝する語なり。

【題義】將軍王承俊によせおくつた詩。將軍は成都に在り、作者は何の地にありしときのことか詳ならず、或は浣花村より城中へおくりしか。仇氏は青城に在りしときの作なりといへるも其の證なし。

【詩意】王將軍はきもだま氣象が雄雄しくて肩には二つの角弓をぶらさげ、青馬を飾つてそれにまたがつて錦城の中に出入りしてをる。いま時世は危險なときであるのに將軍はまだ鉞を天子から授けられて征伐の權を委ねられず、勢のびずして功をたてることはむつかしい。（惜しいことだ。）將軍の堂上には賓客はいつぱいあるが、だれが自分と同じほど將軍の高義をうけるものがあらうか。（自分には特別に厚くしてくださる、ありがたいことだの意。）

奉酬李都督(一)表丈(二)早春作　　李都督表丈が早春の作に酬い奉る

力疾(三)坐清曉。來詩(四)悲早春。　疾を力めて清曉に坐す、來詩、早春を悲む。
轉添愁伴客(五)。更覺老隨人。　轉た愁の客に伴ふを添へ、更に老の人に隨ふを覺ゆ。
紅入桃花嫩(六)。青歸(七)柳葉新。　紅は桃花に入りて嫩かに、青は柳葉に歸して新なり。
望鄉應未已(八)。四海尙風塵。　望鄉應に未だ已まざるなるべし、四海尙風塵。

【字解】〔一〕李都督　其人未だ詳ならず。〔二〕表丈　いとこの關係ある人にて且年長者とみえたり。〔三〕力疾　病みながらむりに起きあがること。〔四〕來詩　李からよこした詩、卽ち早春の作。〔五〕客、人　ならびに自己をさす。〔六〕嫩　やはらか、みづみづし。〔七〕歸　ひとへにその方へと赴くをいふ、早春なれば青色は他の樹葉よりも先づ柳葉の方へゆくといふなり。〔八〕應未已　舊解に單に自己の望鄉の念がやまぬといふ樣にいへるは恐らくは未だ其意を得ず、此語は李の意をおしはかりて暗に自己もこれに贊同せしのみ、應の字は推測の辭なり。

【題意】年長のいとこ李都督が早春の詩をみせてくれた、それにこたへた作。

【詩意】自分は病氣なのにむりに起きてはれたあさにすわつてゐた。そこへあなたの詩が來たがそれをみると早春のさまをみて悲んでをられる。このお作はいよいよ愁をまして自分に伴はしめ、これまでよりもつと老がわが身にくつついてきたことを感じさせるのである。なるほど紅の色は桃の花に入りてみづみづしく、青色は先づ柳の葉の方へかたむいて新しくみえてはきたが、故鄉をながめおもはるる念はおやみにはならぬことであらう、なぜならば天下はまだ兵馬の塵だらけであるから。（自分も御同樣である、との意。）

題新津(一)北橋樓(二)　　新津の北の橋樓に題す

望極(三)春城上。開筵(四)近鳥集。　望は極まる春城の上、筵を開いて鳥集に近し。
白花簷外朶。青柳檻前梢。　白花、簷外の朶、青柳、檻前の梢。
池水觀(五)爲政。廚煙(六)覺遠庖(七)。　池水に爲政を觀、廚煙に遠庖を覺ゆ。
西川(八)供客眼(九)。惟有此江郊(一〇)。　西川、客眼に供するは、惟此の江郊有り。

【字解】【一】新津　縣の名、今成都府に屬す、唐には蜀州に屬せり、成都の西南にあり。【二】橋樓　橋のほとりの樓。【三】望極　はてしなく遠くをのぞむ。【四】近鳥巣　場所が樹木の上にありて高きをいふ。【五】觀爲政　この時は縣令が酒宴をひらきしなり、因つて政治のことをいふ、爲政は政治の仕方をいふ、觀はその善きをみるをいふ。【六】府煙　くりやのけむり。【七】遠庖「禮記」(玉藻)に君子遠庖廚の語あり、臺所は殺生を爲す故に君子は之をとほくにおく。【八】西川　蜀の西部をいふ。【九】客眼　旅客のまなこ、自己の眺望をいふ。【一〇】江郊　かはぞひの野はら。

【題義】新津縣の北の橋のほとりの樓にて縣令の酒宴にあづかりて作れる詩。

【詩意】高い樹木の鳥の巣に近いところで筵を開いて、春の城の上で際限なき遠望をはせる。のきのそとの枝には白い花がついてをり、てすりの前の柳は梢が青くみえる。池の水は清らかであつて、之によつて縣の政治も濁らぬことがみられる、臺所の煙がのぼるが、これも經典の本文どほりまぢかにはない。蜀の西部で旅客の眼に供して佳なるところは、ただここの江郊だけだ。

遊修覺寺(一)

野寺江天豁。山扉花竹幽。

修覺寺に遊ぶ。

野寺、江天豁なり、山扉、花竹幽なり。

詩應(二)有神助(三)。吾得及(四)春遊。

詩應に神助有るなるべし、吾春遊に及ぶことを得たり。

徑石相縈帶(五)。川雲自去留。

徑石相縈帶す、川雲自ら去留す。

禪枝(六)宿衆鳥。漂轉(七)暮歸愁。

禪枝、衆鳥宿す、漂轉、暮歸愁ふ。

【字解】【一】修覺寺　新津縣治の東南五里に修覺山あり、山に修覺寺あり。【二】詩應二句　連絡してみるべし、前句自ら誇るにあらず、風景のすぐれしをいふなり。【三】神助　鬼神のたすけ。【四】及春遊　「及」とはおひつく、まにあふ。【五】縈帶　帶のごとくめぐる、紆曲したみちに處處に點點とあるをいふ。【六】禪枝　寺の樹木の枝。【七】漂轉　漂泊流轉の生涯。

【題義】新津縣の修覺寺にあそびて作れる詩。上元二年の春の作。

【詩意】この野外の寺のところは江のうへをおほふ天がひろらかである。近づくとその扉には花や竹が幽邃に生じてゐる。自分はしあはせと春の遊びにまにあふことができたのであるから、ここで詩を作れば鬼神の助を得らるることであらう。近くにはうねつたこみちに石が處處に點在し、遠くでは川上の雲がひとりでにゆききしてゐる。こんなけしきをながめるうちもはやお寺の樹の枝に多くの鳥がとまる時刻になつた。流轉生涯の自分は暮れがたに歸らうとすればうれひのこころが生ずる。

後遊(一)

後遊

寺憶曾遊處。橋憐再渡時。

寺は憶ふ曾遊の處、橋は憐む再渡の時。

江山如(二)有待。花柳更無(三)私。

江山、待つ有るが如し、花柳更に私無し。

野潤(四)煙光薄(五)。沙暄(六)日色遲(七)。

野潤ひて煙光薄く、沙暄にして日色遲し。

客愁全爲滅。捨此復何之。　客愁全く爲に滅す、此を捨きて復何くにか之かむ。

【字解】【一】後遊　のちのあそび。前詩修覺寺の遊びを敍す、此詩は後の再遊を敍す。【二】有待　吾を待つをいふ。【三】無私　利己心なし、だれにでも其の美しさをかつてにみせてやる。【四】野潤　潤は水蒸氣をふくむをいふ。【五】煙光薄　謂はゆる「はるぐもり」にて氣象がぼやけてみゆるなり。【六】沙暄　これは熱の方からいふ、日光きつく照らす故に江邊の沙あたたかなり。【七】日色遲　日の永きをいふ、「遲」とは太陽の行くことがおそく感ぜらるるをいふ。

【題義】修覺寺に二度めにあそべる詩。

【詩意】またあそびにきた。寺をみればなるほどまへにあそんだ場所だなとおもひ、橋を渡ればまたいまわたるのかと愛憐の情がおこる。江や山をみると自分がくるのを待つてゐてくれた樣であり、花も柳も私心をもたずにきままに自分に其の美を賞玩させてくれる。野はらはうるほひをおびて煙の光薄く、川べりの沙はあたたかにして日脚もおそくあるくげなり。これをながめたためにたびのうれひは全く滅せられた。こんないいけしきのところをおいてはまたどこにゆかうか、ゆけるものではない。

絶句(一)漫興(二)九首　絶句漫興　九首

〔一〕

眼(三)見客愁愁(四)不醒。　眼に見る客愁愁へて醒めざるを、

無(五)賴春色到江(六)亭。　無賴の春色、江亭に到る。

卽(七)遣花開深造(八)次。　卽ち花をして開かしむるも深く造次なり、

便敎鶯語太(九)丁(一〇)寧。　便ち鶯をして語らしむるも太だ丁寧なり。

【字解】【一】絶句　詩體の名、古體詩の四句一解をきりとりたる形なるより名づく、押韻・平仄に一定の規則あり、但杜の絶句は往往歴律を守らざるものあり。【二】漫興　率然興に乘じて作れるが故にかくいへり。【三】眼見　眼前に見ること明明白白なるをいふ、「見」の字の主辭は次句の「春色」ならん、これは第三首の熟知の「知」の字の主辭が次句の「燕子」なるとおなじのべかたなるべし。【四】愁不醒　愁ひのうちにひたりて醉へるがごとし。【五】無賴春色　無賴は無聊賴ことにてあてにならぬ義、無賴漢といへばあてにならぬ男、卽ち「ごろつき」なり、春景色を無賴といふは之を罵る辭なり、「ろくでなしの」といはんがごとし。春を罵るは眞に之をきらふに非ず、自己が愁の中に在るに春がそれを知らぬかほにやつてくるが心にくしといふなり、讀者よろしく作者内面の切情をくみとるべし、他の諸篇にても往往春色に惱まさるる意をのべたり。【六】江亭　錦江のほとりの草堂の亭。【七】遣、敎　並に「して、せしむる」。二動詞の主辭は略されたる「春」なり。【八】造次　倉遽の貌、だしぬけ。【九】太　はなはだ、あんまりに。【一〇】丁寧　ていねい、くどし。

【題義】興にふれてふとつくりたる絶句。上元二年春浣花の草堂にての作。

【詩意】ろくでなしの春景色は自分がたびの愁にひたつて醉うてゐるのを眼前に見て知りながら吾が江亭へやつて來た。彼春色はりつぱな花をさかせるにしてもひどくだしぬけであり、いくら鶯にさへづらせるにしてからがあまりにくどいではないか。畜生め。

〔二〕

手種桃李非無主。　手づから種うるの桃李、主無きに非ず、
野老牆低還是家。　野老牆低きも還是れ家なり。
恰似春風相欺得。　恰も似たり春風の相欺り得たるに、
夜來吹折數枝花。　夜來吹き折る數枝の花。

【題義】春風の家宅侵入を責む。

【詩意】自分が手づから種ゑた桃や李は主がないわけでない、自分といふ主がある。このおやぢの家の牆は低いにはひくいがそれでも自分の家にちがひない。それになんだ、ゆうべからかけて二三本花の枝が吹き折られてしまつた、まるで春風めに侮辱されたやうなもんだ。

【字解】【一】非無主　主人あるをいふ、主人は自己。【二】家　吾が家にして他の闖入を許さざるものなるをいふ。【三】欺得　欺は侮るをいふ、俗語、欺得にてこちらがあなどらるるをいふ。

〔三〕

熟知茅齋絕低小。　茅齋の絕だ低小なるを熟知して、
江上燕子故來頻。　江上の燕子故に來ること頻りなり。
銜泥點汙琴書內。　泥を銜みて點汙す琴書の內、
更接飛蟲打著人。　更に飛蟲を接して人を打著す。

【字解】【一】熟知　よく知つて、「知」の主辭は「燕子」。【二】茅齋　かやぶきの書齋。【三】絕　甚だ。【四】燕子　つばめ。【五】故　故意。【六】點汙　ぽちぽちけがす。【七】琴書　こと、ほん。【八】接　ひきつれてくる。【九】打著　かほなどにぶつつかる。

【題義】燕をののしる。

【詩意】江べりのつばめは自分の茅ぶきの書齋が非常に低く小さいのをよく知つてゐてわざとしきりにやつてくる。さうして泥をくはへてきては琴や書物のあたりをよごしたり、そのうへ飛びまはる蟲までひきつれてきて人にぶつつからせてゐる。

〔四〕

二月已破三月來。　二月已に破れて三月來る、
漸老逢春能幾回。　漸老春に逢ふ能く幾回ぞ。
莫思身外無窮事。　思ふ莫れ身外無窮の事、
且盡生前有限杯。　且つ盡せ生前有限の杯を。

【字解】【一】破　殘りすくなになる。【二】漸老　しだいに老いかかる身。【三】有限杯　いくらのんだところがその量に限りのある酒。

【題義】酒飲むべきをいふ。

【詩意】二月も終りかけ三月がくる。老いゆく我が身は春に逢ふとしてもいくたびあへるものか。だから一身外のはてしない事をかんがへるな、それよりまあまあいのちのあるうちに飲めるだけの酒をのみつくせ。

〔五〕

腸斷江春欲盡頭。
杖藜徐步立芳洲。
顚狂柳絮隨風舞。
輕薄桃花逐水流。

〔五〕

腸は斷ゆ江春盡きんと欲する頭、
藜を杖き徐步して芳洲に立つ。
顚狂の柳絮は風に隨つて舞ひ、
輕薄の桃花は水を逐うて流る。

【字解】【一】欲盡頭 欲盡際といはんがごとし。【二】藜 あかざ。【三】芳洲 くさばなの咲いてゐる中洲。【四】顚狂 みだれくるふ。【五】柳絮 やまぎの花。【六】輕薄 うはき、操守なき。

【題義】桃柳をののしる。

【詩意】江の春がなくなりかけたころには春のゆくのをかなしんで腸がちぎれるやうだ。それであかざのつゑをついてそろそろあるいて花さく中洲に立つてながめる。するとみだれくるうた柳のはなは風のまにまに舞ひちり、うはきらしい桃の花は水の流れをおうて流れていつてしまふ。

〔六〕

懶慢無堪不出村。
呼兒日在掩柴門。
蒼苔濁酒林中靜。
碧水春風野外昏。

〔六〕

懶慢堪ふる無く村を出でず、
兒を呼び日に在りて柴門を掩はしむ。
蒼苔濁酒、林中靜に、
碧水春風、野外昏し。

【字解】【一】懶慢 ぶしやう。【二】無堪 事物に處するに堪ふるものなし、不才無能をいふ。【三】日在 日日在家の意、日在或は自在に作る、自在は「きままに」の意。【四】蒼苔一句 宅中のさま。【五】碧水一句 隔江の遠野のさま。【六】昏 蓋し野潤煙光薄の煙光薄の義ならん。

【題義】無能獨酌の意をいふ。

【詩意】自分はぶしやうで、ものごとに堪へる才能の無い男だから村からそとへはいでず、毎日家にばかりゐてこどもを呼んで柴門をとざさせてゐる。蒼苔のしいた庭に濁酒をのんでゐると林の中はいと靜であり、碧水をわたつて春風が吹いて遠い野はらの方はくらくみえてゐる。

〔七〕

糝徑楊花鋪白氈。
點溪荷葉疊青錢。
筍根雉子無人見。
沙上鳧雛傍母眠。

〔七〕

徑に糝はる楊花は白氈を鋪き、
溪に點ずる荷葉は青錢を疊む。
筍根の雉子は人の見る無く、
沙上の鳧雛は母に傍うて眠る。

【字解】【一】糝 雜はるなり、亂雜に散つてゐること。【二】點 ぽちぽちとあること。【三】疊 青葉に高低あり、故にかさなりて見ゆるをいふ。【四】筍 たけのこ。【五】雉子 きじの子。【六】鳧雛 こがも。

【題義】春暮の景を列擧せり。

【詩意】こみちに亂雜に散つてゐる楊の花は白い毛氈をしいた樣であり、溪がはにぽちぽち浮き出し

た荷の葉は青色の銅錢をたたみあげた樣だ。たけのこの根もとに雉がゐるが人からは見えぬ樣にしてをるし、かはらの沙のうへにはこがもが母鳥によりそうてねむつてゐる。

〔八〕

舍西柔桑葉可拈。(一)
江畔細(二)麥復纖纖。(三)
人生幾何春已夏。
不放(四)香醪(五)如蜜甜。(六)

〔八〕

舍西の柔桑、葉拈る可し、
江畔の細麥復纖纖たり。
人生幾何ぞ、春已に夏なり、
放たず香醪、蜜の如く甜きを。

【字解】〔一〕拈　つまみとる。〔二〕細麥　麥の穗のほそきをいふ。〔三〕纖纖　「細」の字の形容、ほそぼそ。〔四〕放　手からはなす。〔五〕香醪　かんばしきにごりさけ。〔六〕甜　あまし。

【題義】時過ぎ易きにより酒をのむをいふ。

【詩意】家の西の方のはたけの桑は葉が柔かであるからつみとつてもよろしい。かはべりのはたけの麥の穗もまたほそぼそとでてきてをる。こんなに春がもはや夏にかはりかけてゐるのをみれば人生はどれだけの時間あるのか、いくらもあるまい。だから自分は蜜のやうにあまいにごりさけを手から放さずのんでゐる。

〔九〕

〔九〕

隔戸楊柳弱嫋嫋。(一)
恰似十五女兒腰。
誰(二)謂朝來不作(三)意。
狂風挽(四)斷最長(五)條。

戸を隔つる楊柳弱くして嫋嫋たり、
恰も似たり十五女兒の腰に。
誰か謂ふ朝來、意を作さずと、
狂風挽き斷つ最長條。

【字解】〔一〕嫋嫋　たをやか、なよなよ。〔二〕誰謂　だれがしかいふか、さはいはせじとの意。〔三〕作意　狂風が意を作すなり、意を作すとは女兒の腰を愛するの念を興すなり、舊解は取らず。〔四〕挽斷　ひつぱりてちぎる。〔五〕最長條　いちばんながい枝。

【題義】風、柳條を折りしにより風に向ひて戲言をなす。

【詩意】戸外の楊柳はかよわくなよなよとして枝をなびかせてゐる。その姿はちやうど十五歲ばかりのをんなの兒の腰つきに似てゐる。けさからかけて風もヒョンな意をおこしたものか、くるひだした風がいちばん長いえだをひきをつてしまつた。

客至　【原注】喜崔(一)明府相過。

客至る　【原注】崔明府が相過るを喜ぶ。

舍南舍北皆春水。
但見羣鷗日日來。

舍南舍北皆春水、
但見る羣鷗の日日來るを。

【字解】〔一〕崔明府　某縣の縣令崔某なり、作者の舅氏なりとの說あれどいかがにや。〔二〕花徑　花

花徑不曾緣客掃。　花徑曾て客に緣りて掃はず、
蓬門今始爲君開。　蓬門今始めて君が爲に開く。
盤餐市遠無兼味。　盤餐、市遠くして兼味無く、
樽酒家貧只舊醅。　樽酒、家貧にして只舊醅あり。
肯與隣翁相對飮。　肯て隣翁と相對して飮まむや、
隔籬呼取盡餘杯。　籬を隔てて呼取して餘杯を盡さしむ。

【題義】崔明府がたづねてくれたことを喜んで作つた詩。

【詩意】吾が家は南も北もみな春の水で、たくさんの「かもめ」が毎日やつてくるのをみるばかりである。花の散りしくこみちもお客があるために掃除したことはないのであるが、けふはめづらしくよもぎふの門を君のためなればこそ開いたのである。ここは市場が遠いから皿の食物に幾種類もの御馳走はないし、家が貧しいから樽の酒もてづくりのふるものだ。われわればかりよりもとなりのおぢいさんもなかまにしてさしむかへで飮むおつもりはありませぬか。かくいうて籬越しにおぢいさんを呼んでのこりの酒杯をのみほさせる。

のちりしくこみち。【三】蓬門 よもぎのしげれる門。【四】盤餐 大皿の食物。【五】兼味 いく種類ものごちそう。【六】舊醅 ふるくからつくりこんだにごりさけ。【七】呼取 翁を呼ぶをいふ、取の字は意輕し。

遣意二首　意を遣る　二首

〔一〕

囀枝黃鳥近。泛渚白鷗輕。　枝に囀りて黃鳥近く、渚に泛びて白鷗輕し。
一逕野花落。孤村春水生。　一逕、野花落ち、孤村、春水生ず。
衰年催釀黍。細雨更移橙。　衰年、黍を釀すを催す、細雨更に橙を移す。
漸喜交游絕。幽居不用名。　漸く喜ぶ交游の絕ゆるを、幽居、名を用ひず。

【字解】【一】催 せきたてること。【二】釀黍 きびを用ひて酒をかもす。【三】移橙 だいだいをうつしかへてうゑる。【四】交游 人との交際。【五】名 他人から名譽を得ること、名譽。

【題義】おもひをやる。うさばらしに作つた詩。

【詩意】黃鳥は近く枝にさへづり、白鷗は輕く渚に泛んでゐる。一すぢのこみちに自然にさいた花が落ちちり、さびしい村には春の水がふえてきた。自分は老衰になりかけてせつせと黍で酒をつくりこみ、こさめのふるときには橙の木など移植する。こんなことをしてくらすので、だんだん友だちの交際がなくなるのをうれしくおもふ樣になつてゐる。このわびずまひに名譽などはいらぬものだ。

〔二〕

簷影微微落。津流脈脈斜。　簷影、微微として落ち、津流、脈脈として斜なり。

野船明細火(四)。宿鷺起圓(五)沙(六)。　野船、細火明かに、宿鷺、圓沙に起つ。

雲掩初弦月。香傳小樹花。　雲は掩ふ初弦の月、香は傳はる小樹の花。

隣人有美酒。稚子夜能賒(七)。　隣人、美酒有り、稚子夜能く賒る。

【字解】【一】落　地上によこたはるをいふ。【二】津流　浣花の溪流をさす。【三】脉脉　一すぢ一すぢに。【四】細火　小火。【五】起　起立してゐること。【六】圓沙　まろき沙はら。【七】賒　かけで買ふ。

【題義】草堂春夜のさまをのぶ。

【詩意】日がくれかかるので簷の影がすこしづつすこしづつ地上に落ちる。わたりばの水流は一すぢ一すぢに斜にながれてゐる。民船には小さい火があかるくともつてをり、とまつてゐる鷺は圓形の沙はらに起つたままでをる。みか月は雲におほはれ、ちさい樹にさいた花からくらがりの香がつたはつてくる。となりにはうまい酒をもつてゐるものがをるので、こどもが夜ではあるがいつてとつてきてくれる。

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部 十九

309
65

始

吉田徳郎氏　寄贈本

續國譯漢文大成

文學部第十九册（第五帙の三）

杜少陵詩集　中の三

309
65

杜少陵詩集　卷十

漫成二首

(一)野日(二)荒荒白。(三)春流(四)泯泯清。
(五)渚蒲(六)隨地有。村徑(七)逐門成。
只作(八)披衣慣。常從(九)漉酒生。
眼邊無(一〇)俗物。多病(一一)也(一二)身輕。

漫成　二首

野日、荒荒として白く、春流、泯泯として清し。
渚蒲、地に隨つて有り、村徑、門を逐うて成る。
只披衣に慣るるを作す、常に漉酒に從りて生く。
眼邊、俗物無し、多病なるも也身輕し。

【字解】【一】野日　田野を照す太陽。【二】荒荒　すこしく不明なる貌。【三】春流　春の川のながれ。【四】泯泯　ささにごりの貌。【五】渚蒲　みぎはにはえた「がま」。【六】隨地　どこにでも。【七】逐門　門の形勢につれての義。【八】披衣　披は手にてかきわけて著ること、これは人を訪はんとてなり、陶淵明が詩の相思則披衣、言笑無已時、の意を用ふ。【九】漉酒　淵明は頭巾にてにごりさけを漉して、またその頭巾をかぶりしといふ、是は同志にして酒を愛するものをいふならん。【一〇】俗物　俗人をいふ。【一一】也　「亦」に同じ、俗語なり。【一二】身輕　飄然と家からでかけることをいへり。

【題義】そぞろにふとできあがりたる詩なり。上元二年春成都浣花溪の草堂に居りしときの作。

【詩意】 野らをてらす太陽はうすぼんやりと白く、春の水流はささにごりしながら清らかである。みぎはの蒲は到る處に有るし、門のある所のままに村のこみちができてをる。自分は陶淵明の樣に頭巾で酒をこしてくれるものがあるおかげで生きてをるのであり、ただそんな人のところへ著物をはおつてゆくになれてゐるのである。そこでは眼のそばにすこしも俗人がをらぬ、だから多病な自分も身輕にそこへたづねゆく次第である。

〔二〕

江皐已仲春。花下復清晨。
仰面貪看鳥。囘頭錯應人。
讀書難字過。對酒滿壺頻。
近識峨嵋老。知余懶是眞。

〔二〕

江皐已に仲春、花下復清晨なり。
仰面鳥を看るを貪り、囘頭錯つて人に應ず。
書を讀むに難字過す、酒に對して滿壺頻なり。
近ごろ識る峨嵋の老、余が懶是れ眞なるを知る。

【字解】【一】江皐　皐は水流をおびたる岡、浣花溪のあたりをいふ。【二】仲春　二月。【三】清晨　はれたあさげ。【四】仰面　うへをむく。【五】貪　むさぼる、熱中すること。【六】囘頭　ふりむく。【七】錯　まちがふ。【八】應　返答する、挨拶する。【九】難字過　難解の字にあへばそれをやりすごす、あまりに詮索せぬこと、異說は皆之を取らず。【一〇】滿壺頻　頻とは之を傾むくることしきりなるをいふ。【一一】近識　近來しりあひになる。【一二】峨嵋老　「原注」に東山隱者とあり、峨嵋山に隱れてゐる老人とみゆ。【一三】知　老人が知るなり。【一四】懶是眞　ぶしやうがもちまへ。

【詩意】 江ぞひの岡ももはや二月になり、花の樹蔭も清きあしたである。あまり熱心に空とぶ鳥をみてゐたので、人からものを言ひかけられてとんちんかんの返事をしてゐる。書物を讀みかけるとむつかしい字はほつておくし、酒にむかふときはなみなみあふれた壺もしきりと傾けつくす。近來峨嵋山の老隱士をみしつたが、その男は、わしはぶしやうなところがもちまへなのだといふことを知つてくれた。

春夜喜雨

好雨知時節。當春乃發生。
隨風潛入夜。潤物細無聲。
野徑雲俱黑。江船火獨明。
曉看紅濕處。花重錦官城。

春夜雨を喜ぶ

好雨、時節を知り、春に當つて乃ち發生す。
風に隨つて潛に夜に入り、物を潤して細にして聲無し。
野徑雲俱に黑く、江船火獨り明なり。
曉に紅濕ふ處を看れば、花は重し錦官城。

【字解】【一】知時節　春になれることを知りてふる。【二】潛　音たてぬこと。【三】雲俱黑　雲黑く雨も亦くろし。【四】火　船夫のたく火。【五】紅　花のくれなゐ。【六】重　雨にぬれるゆゑにしほたれておもさうにみえる。【七】錦官城　成都の城をいふ。

【題義】 春の夜、雨のふりしことをよろこびて作る。上元元年春の作なるべし。

【詩意】よい雨がさすがにふるべき時節だと心得がほに春にあたつてふりだした。その雨は風のまにまに音をもたてずにそのまま夜までふりつづき、さまざまの物をしめらせはするが、こまかなきりさめですこしもふるこゑはせぬ。雨の色は野らのこみちに雲とともに黒ずんでみえるが、江にういてゐる船のあたりは、その焚き火だけがあかるくみえる。曉にもなつて、それは錦官城で花がしほたれてゐるところなのである。いづくぞとながめると、紅の色のしめつてゐるあたりなのである。

春水

三月桃花浪。江流復舊痕。
朝來沒沙尾。碧色動柴門。
接縷垂芳餌。連筒灌小園。
已添無數鳥。爭浴故相喧。

春水

三月、桃花の浪、江流復舊痕。
朝來、沙尾沒す、碧色、柴門に動く。
縷を接して芳餌を垂れ、筒を連ねて小園に灌ぐ。
已に添ふ無數の鳥、爭ひ浴して故らに相喧し。

【字解】【一】桃花浪　桃花のさくとき出る水のなみ。【二】復舊痕　水かさがふえて舊水位のところまでくる。【三】沙尾　沙洲のすゑ。【四】碧色　江水の色。【五】柴門　自家の門。【六】接縷　綫のすぢをつなぐ、釣綫にするなり。【七】芳餌　いいにほひのゑさ。【八】連筒　かけひの竹つつをつなぐ、(釣車の竹筒なりとの說あれどもそれにては灌小園の語とにあはぬ)。【九】園　はたけ。【一〇】無數鳥　鳥は「さぎ」なるべし。【一一】故　ことさらに、わざと。

【題義】春の出水のことをのべたり。前詩と同年の作。

【詩意】三月桃花水の浪がおこり、江の流れももとの水痕のところまで水かさがふえてきた。朝から かけて中洲の沙のしつぽはかくれて、碧の色が我家の柴門のあたりに動いてきた。それで自分は絲すぢをつないで釣竿で餌を垂れたり、竹筒をなん本もつらねて江水を引いて小さなはたけに水をそそぐ。また早くもかぞへきれぬほどたくさんの水鳥がやつてきて、爭うて浴してわざとがやがやさわぎたててゐる。

江亭

坦腹江亭暖。長吟野望時。
水流心不競。雲在意俱遲。
寂寂春將晚。欣欣物自私。
故林歸未得。排悶强裁詩。

江亭

江亭の暖なるに坦腹して、長吟す野望の時。
水流れて心競はず、雲在り意俱に遲し。
寂寂春將に晚れむとす、欣欣物自ら私す。
故林歸る未だ得ず、悶を排し强ひて詩を裁す。

【字解】【一】坦腹　腹を平にして仰ぎ臥す。【二】江亭　江のほとりの亭、江は錦江、浣花の江亭をいふ。【三】長吟　ながくこゑを引いて吟ずる。(この詩を吟ずるをいふ。)【四】野望　田野をながめる。【五】不競　心の流るるにまかせて之と爭はず。【六】雲在　雲がひとりでに存在してゐる。【七】遲　おそし、ゆつたりとしてゐる。【八】物自私　私とは自己の生を遂げつつあるをいふ。

【九】故林　故郷の園林。【一〇】歸未得　未ㇾ得ㇾ歸に同じ。【一一】排悶　心中のもだえをおしのける。【一二】裁　つくること。

【題義】浣花草堂の江邊の亭の春の心もちをのべたり。前詩と同年の作。

【詩意】江べりの亭のあたたかなところに仰臥して、長吟しながら野らをながめるとき、水はかつてに流れてゐるが我が心は之と爭ふつもりもなく、雲はひとりでに橫はつてゐるが我がこころはそれとともにゆつたりとしてゐる。しづかに春はくれかかつてゐる。どの物をみても彼等はうれしさうに自己の生活をとげつつある。このとき自分はまだ故鄉の林へかへることができぬ。それで心中のもだえをおしのけんがためにむりにこの詩をつくるのである。

早起

春來常早起。幽事頗相關。
帖石防隤岸。開林出遠山。
一丘藏曲折。緩步有躋攀。
童僕來城市。瓶中得酒還。

早起

春來常に早く起く、幽事頗る相關す。
石を帖して隤岸を防ぎ、林を開きて遠山を出す。
一丘、曲折を藏す、緩步、躋攀有り。
童僕、城市より來る、瓶中酒を得て還る。

【字解】【一】幽事　しづかなしごと、次の帖石・開林等のことをさす。【二】相關　そのことにかかりあふ。【三】帖石　石をたたみあげる。【四】隤岸　江岸のくづれること。【五】開林　しげつた林をきりひらく、枝などすかすなり。【六】出　あらはれいでしむること。【七】一丘　自己の園丘をいふ。【八】曲折　路のをれまがること。【九】緩步　ゆつくりあるく。【一〇】躋攀　よぢのぼること。【一一】童僕　しもべ。【一二】來城市　成都のまちからもどりくる。

【題義】庭仕事のため早く起きしことをのぶ。前詩と同年の作。

【詩意】春からこのかた自分はいつも早く起きる。それは庭仕事にかかりあふためである。すなはち石をたたんで江岸のくづれるのを防いだり、林の枝をすかして遠方の山を見える樣にあらはしだす。ただ一つの丘であるが折れ曲つた路があり、ゆつくりあるくとよぢのぼつたりするところもある。ちやうど城の方からしもべがもどつた、彼は瓶のなかに酒を得てかへつてきたのである。（それをのんで庭のさまでもながめよう。）

落日

落日在簾鉤。溪邊春事幽。
芳菲緣岸圃。樵爨倚灘舟。
啅雀爭枝墜。飛蟲滿院遊。
濁醪誰造汝。一酌散千愁。

落日

落日、簾鉤に在り、溪邊、春事幽なり。
芳菲なり岸に緣る圃、樵爨す灘に倚る舟。
啅雀、枝を爭うて墜ち、飛蟲、院に滿ちて遊ぶ。
濁醪誰か汝を造れる、一酌、千愁を散せしむ。

【字解】【一】簾鉤　すだれを卷きあげてとめておくかぎ。【二】溪邊　溪は浣花溪。【三】春事幽　春事とは下の四句のこと、幽

は幽靜。【四】芳菲　花がかんばしくにほふ。【五】緣岸圃　江岸によりそうたはたけ。【六】樵爨　しばきをかりてごはんをたく。【七】倚灘舟　はやせによつてゐる舟。【八】啅　とりのさわぐこゑのさま。【九】爭枝　多くのものが一つの枝にとまらんとする。【一〇】院　おくには。【一一】醪　にごりさけ。【一二】汝　濁醪をさす。

【題義】草堂の春の夕ぐれのさまをのぶ。上元二年の作か。

【詩意】すだれの鈎に夕日のひかりがさしてきて、溪邊の春げしきは幽靜である。すなはち江岸にそうたはたけには草花がにほひ、はやせによつて泊つてゐる舟では柴刈りしてごはんをたいてゐる。庭先きでは同じ枝にとまらうとして多くの雀ががやがやいひながら墜ち、奥庭ちう蟲がとんで遊んでゐる。之をながめて自分は酒をのむ。いつたいにごりさけはだれがこしらへたものか、感心な物をこしらへたものではある。それを一どくんでのめば千萬の心配ごとがみなちりうせるではないか。

可惜

可惜（惜む可し）

花飛有底急。老去願春遲。
花は飛ぶこと底の急か有る、老い去つては春の遲からむことを願ふ。

可惜歡娛地。都非少壯時。
惜む可し歡娛の地、都て少壯の時に非ず。

寛心應是酒。遣興莫過詩。
心を寛うするは應に是れ酒なるべし、興を遣るは詩に過ぐるは莫し。

此意陶潛解。吾生後汝期。
此の意、陶潛解す、吾が生汝が期に後る。

【字解】【一】底　何に同じ、俗語なり。【二】春遲　遲とは早くすぎぬことをいふ。【三】歡娛地　うれしくたのしむべき場所、即ち春をいふ。【四】非少壯時　老年なるをいふ。【五】寛心　心をくつろげる。【六】此意　詩酒によりて自己を慰むることをさす。【七】解　さとる。【八】吾生　自己の生れしとき。【九】汝期　汝は陶潛をさす、期は生存せし時期。

【題義】老年春にあへることをのぶ。上元二年の作か。

【詩意】いかなる急用があつて花ははやく飛び散るのか。老の身にとつてはなるたけ春がゆつくりしてゐてくれるのをのぞんでゐるのだ。本來ならばおもしろをかしくすごすべき處であるが、少壯の時でなく老衰の時であるのが惜しいことだ。今の身では心をくつろげるものとては酒だらうし、興をやるには詩にこしたものはない。このこころもちはむかし陶淵明が知つてゐた。自分の生れ樣が彼よりおそまきなことは殘念なことである。

獨酌

獨酌（獨酌）

步屧深林晚。開樽獨酌遲。
步屧、深林晚る、樽を開きて獨り酌むこと遲し。

仰蜂粘落絮。行蟻上枯梨。
仰蜂、落絮に粘し、行蟻、枯梨に上る。

薄劣慚眞隱。幽偏得自怡。
薄劣、眞隱に慚づ、幽偏、自ら怡しむことを得。

本無軒冕意。不是傲當時。
本軒冕の意無し、是れ當時に傲るならず。

【字解】〔一〕步屧　草履なはきて散步するないふ。〔二〕仰蜂　うへなむいてゆくはち」。〔三〕粘　ねばりつく。〔四〕落絮　おちくる柳の花、絮の字或は蘂に作る。〔五〕行蟻　行列をなす「あり」。〔六〕枯梨　梨の枯木。〔七〕淳芳　才德なきこと。〔八〕眞隱　まことの隱遁者。〔九〕幽偏　住地の幽靜にしてかたよりたること。〔一〇〕自怡　他人にかかはらず自己のみたのしみます。〔一一〕軒冕意　仕官富貴の意ないふ、軒は馬車、冕は「かんむり」、貴人の用ふるものなり。〔一二〕傲當時　時世に對してゐばる、隱者は世俗を卑しとし自己を高しとする。

【題義】春一人にて酒をのむことをのぶ。上元二年の作か。

【詩意】草履ばきでぶらぶらしてゐるうちに深い林も夕ぐれになり、酒樽を開いてひとりでゆつくりのむ。みれば蜂がうはむきになつてゆくと柳の花が落ちてきてそれにねばりつき、蟻は行列をなして梨の枯木にはひのぼつてゐる。自分ごとき才德なくつまらぬものは眞の隱遁者に對してはづかしくおもふのであり、ただこんな幽靜なかたよつた場所を得て自分ひとりでたのしめるといふだけのことである。自分には本來高位高官にならうなどの意は無いので、眞の隱者のやうに當世に對してゐばるなどといふわけのものではない。（自分の無能がすなはち隱者らしくさせてゐるだけのことだ。）

徐(一)步

整(二)履步(三)青蕪。荒(四)庭日欲(五)晡。　履を整へて青蕪に步す、荒庭日晡ならむと欲す。

芹(六)泥隨(七)燕觜。蘂(八)粉上蜂(九)鬚。　芹泥、燕觜に隨ひ、蘂粉、蜂鬚に上る。

把酒從(一〇)衣濕。吟詩信(一一)杖扶。　酒を把つて衣の濕ふに從せ、詩を吟じて杖の扶くるに信す。

敢論才見忌。實有醉如愚。　敢て才の忌まるるを論せむや、實に醉うて愚の如くなる有り。

【字解】〔一〕徐步　そぞろあるき。〔二〕整履　はきものをきちんとはく。〔三〕青蕪　青いくさはら。〔四〕荒庭　くさだらけのにには。〔五〕晡　たそがれ。〔六〕芹泥　「せり」のどろ。〔七〕隨燕觜　つばめのくちばしにくはへらるるないふ。〔八〕蘂粉　花粉ないふ、蘂粉一に花蘂に作る。〔九〕鬚　ひげ。〔一〇〕從、信　みな「まかす」義なり。〔一一〕衣濕　さけをこぼすためにうるほす。〔一二〕杖扶　つゑにたすけらるること。

【題義】自宅の園にぶらつきしことをのぶ。上元二年春の作ならん。

【詩意】はきものをきちんとはいて青い草はらにぶらつくと庭ははや日がくれかけてゐる。さうして燕のくちばしのまにまに芹の泥はくはへてゆかれ、蜜をすふ蜂のひげには花蘂の粉がふりかかる。こんな樣子をみながら自分は酒杯を手にとつて衣がぬれてもかまはず、詩を吟じながら杖のたすけるままにあるく。自分の才が他人から忌まれてこんな境遇に居るのだなどとは決していふまい。ただただ醉うて愚人の如くなつてゐるといふのが實際である。

寒食（一）

寒食江（二）村路。風（三）花高下飛。　寒食江村の路、風花高下に飛ぶ。
汀（三）煙輕冉（四）冉。竹（五）日淨暉（六）暉。　汀煙輕くして冉冉たり、竹日淨くして暉暉たり。
田（七）父要（八）皆去（九）。隣家問（一〇）不（一一）違。　田父要ふれば皆去る、隣家問れば違はず。
地偏相（一二）識（一三）盡。雞犬亦忘（一四）歸。　地偏にして相識り盡す、雞犬も亦歸ることを忘る。

【字解】【一】寒食　冬至節のうち一百五・六・七日を寒食といふ。【二】江村　浣花村。風花　風をうけたる花びら。【三】汀煙　みぎはのけむり。【四】冉冉　次第に生ずるさま。【五】竹日　竹林をてらす太陽。【六】暉暉　かがやくさま。【七】田父　ひやくしやう。【八】要　こちらを招きむかへる。【九】去　こちらが先方へでかけてゆく。【一〇】問　問遺なり、こちらの樣子ききに品物をおくつてくれること。【一一】不違　贈つてくれた意に從ひ之を受くるをいふ。【一二】偏　かたよる。【一三】相識盡　盡相識の意、みんなしりあふ。【一四】忘歸　仙家にゆくも自家の樣におもひかへることをわする。歸を一に機に作る、忘機とは世間のからくりのこころをもたぬをいふ。

【題義】寒食の節のさまをのぶ。上元二年浣花溪にての作。

【詩意】寒食の節の江ぞひの村の路では、風に吹かるる花びらが高くひくく飛びかはす。みぎはの煙はかろらかに次第にのぼり、竹林を照らす太陽はきよらかにかがやきわたる。たとへ農夫でもきてくれといふものがあれば自分はみなそこへでかけてゆく、となりどうしでおくりものをもつてきてくれればありがたくそれをうける。地がかたゐなかであるからみんなしりあひのなかで、鷄や犬までもよそのうちへでかけていつてもどるのを忘れてゐる樣なありさまである。

石鏡（一）

蜀王將此鏡。送（二）死置空山。　蜀王此の鏡を將て、死を送りて空山に置く。
冥（三）寞憐香（四）骨。提（五）攜近（六）玉顏。　冥寞、香骨を憐み、提攜、玉顏に近からしむ。
衆（七）妃無（八）復嘆。千（九）騎亦虛還。　衆妃復嘆ずること無く、千騎亦虛しく還る。
獨有傷（一〇）心石。埋（一一）輪月（一二）宇間。　獨り傷心の石有り、輪を埋む月宇の間。

【字解】【一】石鏡　成都の北角に武擔といふ塚あり、塚上に厚五寸、徑五尺の石あり、瑩徹にして鏡の如し、是即ち此詩の詠ずる所のものなり。傳によるに武都山に大丈夫あり化して女子となる美にして艶なり、蓋し山の精なり、蜀王之を納れて妃となす、いくばくもなく妃死す、王、五丁をつかはし武都にゆき土を擔ひ塚を作らしむ、廣さ數畝、高さ七丈、石鏡を以て其の門に表す、即ち武擔の石鏡なりと。【二】送死　死せる妃を葬送するなり。【三】冥寞　死のさまをいふ。死すればくらくはつきりせぬ境遇に在り。【四】香骨　美しき妃の骨。【五】提攜　この石鏡をもつてゆくこと。【六】近玉顏　死者の肉體のそばへおいたこと。【七】衆妃　他の多くの王妃たち。【八】無復嘆　これは死者を送りて哭し了るをいふ。【九】千騎　葬送の行列にたてる多くの騎兵。【一〇】傷心石　看る人をしてその心をいたましむる石、即ち石鏡をさしていふ。【一一】埋輪　輪とは石鏡の圓形をさす。【一二】月宇　月の世界、石鏡の圓きを月にみたて、その横はる場所を月の世界にみたてて言を設けたり。

【題義】成都の石鏡の古迹を見てよめり。此篇と次の「琴臺」の詩は竝に上元二年の作。

【詩意】むかし蜀の王はこの石鏡をもて、死んだ妃を葬送してそれをだれも居らぬ山に置いた。美しい妃が死んでさびしからうとおもうて、この石のかがみをもつていつてうつくしい顏のそばへ立ててやつた。葬儀はすんで送りに來た多くの妃等も哭禮を了つてもはやなげきのこゑをやめ、多くの騎馬の兵もいたづらに墓のところからもどつてしまつた。さうしてただこの人のあはれを催させる石だけが月の世界ともいふべきこの山間にその圓形を埋めてをるのである。

琴臺(一)

茂陵(二)多病後。尙愛卓文君(三)。
酒肆(四)人間世(五)。琴臺日暮雲(六)。
野花(七)留(八)寶靨(九)。蔓草(一〇)見羅裙(一一)。
歸鳳求凰(一二)意。寥寥(一三)不復聞。

琴臺

茂陵多病の後、尙愛す卓文君。
酒肆人間の世、琴臺日暮の雲。
野花、寶靨を留め、蔓草、羅裙を見る。
歸鳳求凰の意、寥寥として復聞かず。

【字解】【一】琴臺　成都城外の浣花溪に近きところにあり。漢の司馬相如の遺迹なり、相如未だ榮達せざりしとき家貧なり、卓王孫といへる富人の女文君のやもめなるを琴歌にことよせていどみけるに、文君夜にげて相如がもとにゆく、つひに臨邛といふ處にいたり、酒肆をはじめ文君は壚(へつつい)にて酒を賣り、相如はそのそばにて食器などをあらひ居たり。相如はのち出世して高官となり、また多病の故を以て官をやめ茂陵といふところに居れり。【二】茂陵　漢の武帝の陵の名、相如そこに居りしを以て相如をさしていへり。【三】卓文君　相如が妻。【四】酒肆　さかや。【五】人間世　相如等の在世中をいふ、此句過去をいふ。【六】琴臺日暮雲　此句現在をいふ、仇氏之をも過去のこととせるは從ひがたし。【七】野花　臺のあたりの野生の花。【八】留　いまもむかしのさまをのこす。【九】寶靨　靨はエクボのことなれどもここは唐時の慣用により花鈿（頰にあてる花かざし）の義とす。【一〇】蔓草　はびこれる草、これは色にていふ。【一一】羅裙　うすぎぬのはかま、文君のつけしもの。【一二】歸鳳求凰　相如が文君をいどみたりといへる琴歌に、鳳兮鳳兮歸二故鄕一、遨遊二四海一求二其凰一とあり、鳳（雄）が四海にあそんで凰（雌）をもとめてゐるがあてもないから故鄕へかへらう、といへるなり、詩は歌辭を切りとりて用ひたり。【一三】寥寥　さびしき貌。

【題義】琴臺について懷古の情をのべたる詩なり。

【詩意】司馬相如は多病の後までもまだ卓文君を愛してゐた。そのわかいころには俗界で夫婦ともかせぎで酒肆までひらいたのであるが、今やこの琴臺にきてみるとただ日暮の雲がさびしくよこたはつてをる。野生の花をみると、それはありしむかしの卓文君の花かざしがのこつてをるかの樣であり、はびこれる草の色には文君のうすもののはかまの色がうかがはれる。しかし相如がうたうた歸鳳求凰のこころもちはたえてふたたびきくことはできぬ。

春水生二絕(一)

二月六夜春水生。

春水生す　二絕

二月六夜、春水生す、

【字解】【一】春水生　生とはあ

門前小灘(二)渾欲平。　門前の小灘渾て平ならむと欲す。
鸕(三)鶿鸂(四)鶒莫(五)漫喜、　鸕鶿鸂鶒、漫りに喜ぶこと莫れ、
吾與汝(六)曹倶(七)眼明。　吾、汝が曹と倶に眼明なり。

もたにわきでてきたことをいふ。【二】灘 はやせ。渾 すべて。【三】鸕鶿 「う」のとり。【四】鸂鶒 をしどりの類。【五】莫漫喜 やたらによろこぶな。【六】汝曹 なんぢら。【七】眼明 眼力分明にしてよく之を知るをいふ。

【題義】 春のでみづがしたことについてのぶ。上元二年春の作。

【詩意】 二月六日の夜に春のでみづがして、わがやの門の前の小さいはやせはすつかり平にならんばかりになつた。うだのをしどりだのにいふが、おまへたちはこの水のましたのをみてやたらにうれしがるなよ。吾吾もおまへたちとおなじくはつきりと水がでてきて喜ぶべきことをこころへてゐるのである。

〔二〕

一夜水高二(一)尺强、　一夜水高し二尺强、
數日不可更禁(二)當。　數日更に禁當す可からざらむ。
南市津頭有(三)船賣、　南市津頭に船の賣る有り、
無錢卽買(四)繫籬旁。　錢の卽ち買ひて籬旁に繫ぐべき無し。

【字解】【一】二尺强 二尺あまり。【二】禁當 俗語「こらへる」、不可禁當とは「とてもたまらぬであらう」の義。【三】有船賣 賣らる

べき船あること。【四】買 船をかふこと、船を買はんとするは草堂の沒せんことを恐るるなりとの仇氏說は恐らくは當らず、これ舟遊を試みんと欲するのみ、作者水を恐るる念なきこと次の「短述」をみても知るべし。

【詩意】 ひとばんのうちに水かさが二尺あまりたかくなつた。二三日したらもつとたまらぬくらゐますことであらう。南市のわたりばに賣りものに出てゐる船はあるが、それを買うてわがやのまがきのそばにつないでおけるだけの錢の無いのが遺憾だ。

江(一)上值(二)水如(三)海勢聊短(四)述　江上水の海勢の如くなるに値ひ聊か短述す

爲人性(五)僻耽佳句、　人と爲り性僻にして佳句に耽る、
語不驚人死不休。　語人を驚かさずんば死すとも休せず。
老去詩篇渾漫(六)與、　老い去つて詩篇渾て漫與なり、
春來花(七)鳥莫深愁。　春來花鳥深く愁ふること莫れ。
新添(八)水檻供垂釣、　新に水檻を添へて垂釣に供し、
故(九)著浮(一〇)槎替(一一)入舟。　故より浮槎を著けて入舟に替ふ。

【字解】【一】江上 錦江のほとり。【二】值 であふ。【三】如海勢 さかんなさまをいふ。【四】短述 八句の詩でのべしが故に短といふ。【五】性僻 僻は「かたよる」。【六】漫與 漫如・漫然といふに同じ、とりとめもなくふとつくること。與の字を或は興に作る。【七】花鳥莫深愁 作者に造化の工を奪ふの力あ

れば花鳥も恐怖し愁ひをいだくならん、因つて愁ふるな用ひざるをいふ。一說に「花鳥ニモ深ク愁フルコトナカレ」とし、花鳥の二字を副詞とみ、愁の字を作者にかけてみる、而して莫₌深愁₋とは苦吟愁思することなかれの義なりととく、今從はず。

(一二)焉(一三)得思如陶(一四)謝手。　焉んぞ思ひ陶謝の如くなる手を得て、

令(一五)渠(一六)述作與同遊。　渠をして述作せしめて與に同遊せむ。

【八】水檻　檻は板にてつくりしてすり。【九】故　ふるくから。【一〇】浮槎　うかべたるいかだ。【一一】替入舟　替は代なり、いかだを以て舟に乘るにかへる。【一二】焉得　希望をいふ。【一三】思　文學上の藻思。【一四】陶謝　陶淵明、謝靈運。【一五】渠「かれ」、俗語なり。【一六】述作　文辭をつくること。

【題義】江のほとりで海の水の勢のやうに水がましてくるのにであうたので、聊かこの短篇を作つた。上元二年春の作。

【詩意】自分は人となりかたよつた性質でただよい詩句を作ることにふけつて、人を驚かす樣な語を吐きだすまでは死んでも休まないといふ風であつた。ところが年よつてからは作りだす詩篇はただ漫然とよむのであつて深刻なところがうせた。だから春かけて花や鳥も深く心配するには及ばぬよ。もとから水邊にはいかだをつないで舟に乘るのにかへてゐるが、この水につれて自分は水ばたにてすりを新に設けて釣りを垂れる用に供する。こんなとき文藻の豐富な陶謝の如き文筆の手を得て彼等をして名篇を作らせてともにあそんだならばいかにおもしろからうかとかんがへるのである。

水檻遣心二首　水檻にて心を遣る　二首

(一)去郭軒(二)楹敞。(三)無村眺望賒。(四)　郭を去つて軒楹敞なり、村無くして眺望賒なり。

澄江平少岸。幽樹晚多花。　澄江平にして岸少く、幽樹晚に花多し。

細雨魚兒出。微風燕子斜。　細雨に魚兒出で、微風に燕子斜なり。

城中十萬戶。此地兩三家。　城中は十萬戶、此の地は兩三家。

【字解】【一】去郭　城のくるわからはなれる。【二】軒楹　のき、はしら、家の建物をいふ。【三】敞　かちりとしてゐるさま。【四】賒　はるか。

【題義】前詩に見えたる水檻なり、そこであたりをながめてうさばらしをせしことをのぶ。

【詩意】ここは城郭からはなれて我が家のさまもからりとあかるい。村落とてもないからとほくまでながめられる。江はすんで平らで岸もなく、幽靜な樹にはくれにあたつて花がたんとさいてゐる。また小さめに魚の兒がうかびだし、そよふく風につばくらがななめに飛びわたる。城中は十萬戶といふが、ここはただ人家が二三軒あるばかりである。

〔二〕

(一)蜀天常夜雨。江(二)檻已朝晴。　蜀天常に夜雨る、江檻已に朝晴なり。

葉潤林塘密。衣乾枕席清。

不堪衹老病。何得尙浮名。

淺把涓涓酒。深憑送此生。

葉潤ひて林塘密に、衣乾いて枕席清し。

堪へず衹老病なるに、何ぞ得む尙浮名あるを。

淺く涓涓たる酒を把つて、深く憑りて此の生を送る。

【字解】〔一〕蜀天　蜀のそら、作者の居る成都地方の天をいふ。〔二〕江檻　即ち水檻。〔三〕密　樹木のしげりあふをいふなら ん。〔四〕衣乾　ながあめなればしめつた衣をきてをりしならん、いまそのかわけるをよろこぶなり。〔五〕淺把　すこしばかり手に する。〔六〕涓涓　すこしのさま。〔七〕深憑　この深くは心からいふ、憑はたよること。〔八〕送此生　くらすこと。

【詩意】蜀の天はいつも夜あめがふる、ところが我が水檻はけふは朝はれた。みると木の葉がしめつて、林やいけのあたりがしげりあひ、きものもかわいて枕席のあたりもさつぱりとしてゐる。自分はただ老病であるのさへたへきれぬ、どうして空虛な名譽などをもとめる必要があらうぞ。ただひとしづくばかりの酒を少し手にして、それに深くたよつてこの生涯を送つてゐるのだ。

江漲

江發蠻夷漲。山添雨雪流。

大聲吹地轉。高浪蹴天浮。

江　漲

江は發す蠻夷の漲、山は添ふ雨雪の流れ。

大聲、地を吹いて轉じ、高浪、天を蹴つて浮ぶ。

魚鼈爲人得。蛟龍不自謀。

輕帆好去便。吾道付滄洲。

魚鼈人に得らるるを爲す、蛟龍も自ら謀らず。

輕帆好し去ること便なり、吾が道滄洲に付す。

【字解】〔一〕江漲　錦江のみなぎり。〔二〕江發　この江は發源地の江をさすなるべし、發とはそこからおしだすをいふ。〔三〕蠻夷漲　蠻夷の境に於ける漲なり。〔四〕山　江の通過する地方の山山をいふ。〔五〕雨雪流　雨水、雪とけの水のながれ。〔六〕吹地轉　風の如く地面を吹きながらうつりゆく。〔七〕蹴天　たかくうちあげるさま。〔八〕鼈　すつぽんの類。〔九〕爲人得　爲ニ人所ニ得の略。〔一〇〕不自謀　自己の身の安全を謀るを得ざるをいふ。〔一一〕輕帆　はやく走る舟をいふ。〔一二〕吾道付滄洲　滄洲は海上の仙境なり、付は附託なり、吾道は自己のふみゆく道程をいふ、一句の意は前途は仙境に託せんといふなり。

【題義】錦江のみなぎりしことをのぶ。上元二年の作。

【詩意】江の源からは蠻界の增水をみなおしだし來り、その通過する山山からはさらに雨水や雪どけの水の流れを添へてながす。だからすばらしい水聲が地面を吹いてうつりゆき、高い浪は天を蹴んばかりたかく浮ぶ。魚もすつぽんも人につかめられるし、蛟龍の樣な不思議なはたらきを有するものでも身の安全を謀ることができぬ。之について自分はおもふ、吾が前途は海上の神仙境に託さうと考へるので、輕帆をとばしてはやくそこへ去つた方が都合がよい、と。

朝雨

朝　雨

涼氣曉蕭蕭（一）。江雲亂レ眼飄。　涼氣曉に蕭蕭たり、江雲眼を亂して飄る。
風鳶（二）藏二近渚（三）一。雨燕（四）集二深條（五）一。　風鳶、近渚に藏し、雨燕、深條に集る。
黃綺（六）終辭レ漢。巢由（七）不レ見レ堯。　黃綺終に漢を辭す、巢由、堯を見ず。
草堂（八）樽酒在。幸得レ過二清朝（九）一。　草堂樽酒在り、幸に清朝を過すことを得。

【字解】【一】蕭蕭　しづかにさびしき貌。【二】風鳶　風に吹かるる「とび」。【三】近渚　そばのなぎさ。【四】雨燕　雨をうけたつばめ。【五】深條　しげみの小枝。【六】黃綺　漢の初に居た商山の四皓と稱する四人の老人の中の人、夏黃公と綺里季とをいふ。【七】巢由　巢父、許由なり、巢父は許由が堯から天下を讓られんとしたことをきゝて之をせむ。由乃ち清冷の水にいたりて其の耳を洗ひたりと。二人共に隱者なり。【八】草堂　浣花の草堂をさす、これは草堂を以て世外の境に比するなり。【九】清朝　さつぱりとしたあさ。

【題義】草堂の朝雨のをりのことをのぶ。上元二年の秋の作。

【詩意】あかつきにしづかにすずけがおこり、江の雲がめさきをみだりてとんでゐる。鳶は風をおそれてそばのなぎさにかくれ、燕は雨にぬれるをきらうて木深き小枝に集つてゐる。むかし夏黃公や綺里季はつまり漢に仕へず之を辭した、また巢父・許由の輩は堯といふ聖君を見ずに隱遁してゐた。自分も或はそんな人のなかまらしい。この草堂には酒樽があるによつて幸にその酒をのんでこのあしたをすごすことができるのである。

晚晴

晚　晴

村晚驚風（一）度。庭幽過雨（二）霑。　村晚れて驚風度る、庭幽にして過雨に霑ふ。
夕陽薰二細草一。江色映二疏簾一。　夕陽に細草薰る、江色、疏簾に映ず。
書亂誰能帙（四）。杯乾自可レ添（五）。　書亂れて誰か能く帙せむ、杯乾きて自ら添ふ可し。
時聞（六）有二餘論（七）一。未レ怪（八）老夫潛（九）。　時に聞く餘論有るを、未だ怪まず老夫の潛。

【字解】【一】驚風　つよき風。【二】度　渡に同じ。【三】過雨　とほりあめ。【四】帙　書衣なり、そのなかに收めるをいふ。【五】添　酒をつぎそへる。【六】時聞　聞とは自他ともにきくなり。【七】餘論　潛夫の論をさす。【八】未怪　怪とは自他ともに怪むなり。【九】老夫潛　老夫は作者自らさす、後漢の王符、隱居して書を著はし時世を諷す、之を「潛夫論」といふ、作者自ら王符に比するなり、「末尾の二句、仇氏之を解きて「時聞二外人之論一、未三嘗怪二此一潛夫一也」といへるは余之を取らず。仇説は論も怪も共に之を外人に屬せしめたるなり。

【題義】草堂の晚に晴れしことをのぶ、前詩「朝雨」とあれば殆ど同日の晚晴なるべきか。

【詩意】村がくれかけてはげしい風がやつてきた。さうして庭はしづかにとほりあめにうるほされた。夕日のてるところ細かなくさばななどがかをり、江水の碧がめあらなすだれにうつろふ。讀みさしの書物はみだれてゐるがだれがそれを帙のなかにとりかたづけてくれう、杯がのみほさるればそれは自分の手でつぎそへる。このおやぢはひそんで隱居はしてゐるが時として時世を論ずることあるを聞

くであらう。してみればこのおやぢはひそんでゐるとしてもなにも不思議があるにはあたるまい。

高枏

枏(一)樹色冥冥(二)。江邊一(三)蓋青。
近根開藥圃(四)。接(五)葉製茅亭。
落(六)景陰(七)猶合(八)。微風韻(九)可聽。
尋常絕(一〇)醉困(一一)。臥此(一二)片時(一三)醒。

高枏

枏樹色冥冥たり、江邊一蓋青し。根に近く藥圃を開き、葉に接して茅亭を製す。落景にも陰猶合し、微風にも韻聽く可し。尋常絕だ醉困するも、此に臥すれば片時に醒む。

【字解】【一】枏　楠なり、樹の名、草堂の傍にあり、杜詩屢〻この樹に言及べり。【二】冥冥　くらつぽし。【三】一蓋　蓋は車のかさ、樹形傘狀をなすなり。【四】藥圃　藥草のはたけ。【五】接葉　接は接近。【六】落景　夕日のひかり。【七】陰　樹のかげ【八】合　領すといふの類なり。【九】韻　樹葉の風になるおと。【一〇】絕　甚。【一一】醉困　わるゑひ。【一二】此　樹下をいふ。【一三】片時　しばらくのま。

【題義】草堂のそばの高い楠樹のことをよめり。上元二年の作。

【詩意】楠の樹がくらくしげつて、江邊に青く車の傘の樣な形をして立つてゐる。自分はその根もとにちかく藥草ばたけを設け、またその葉にくつつくばかりにかやぶきの亭をこしらへた。この樹は夕日のときにもかげがとざしあひ、そよふく風にも葉のおとがおもしろくきかれる。ふだん酒をのんで非常にわるゑひしたときでも、この樹のところでねころぶとすぐにそれがさめてしまふ。

惡樹(一)

獨遶虛齋(二)徑(三)。常持小斧柯(四)。
幽(五)陰成頗雜(六)。惡木剪(七)還多。
枸杞(八)因(九)吾有(一〇)。雞棲(一一)奈汝(一二)何。
方知不材(一三)者。生長漫婆娑(一四)。

惡樹

獨り遶る虛齋の徑、常に持す小斧柯。幽陰成る頗る雜なり、惡木剪れば還多し。枸杞因つて吾が有とす、雞棲汝を奈何せむ。方に知る不材の者、生長するも漫に婆娑たるを。

【字解】【一】惡樹　わるい木。【二】虛齋　だれも居ぬ書齋。【三】徑　こみち。【四】斧柯　斧は「をの」、柯は斧の柄なり、斧柯にて「をの」をさす。【五】幽陰　ふかき樹のかげ。【六】雜　錯雜すること。【七】剪　きる。【八】枸杞　樹の名、千年をふれば根形狗に似る、之を食すれば身輕しと。【九】因　剪伐するによつて。【一〇】吾有　吾が所有とす。【一一】雞棲　樹名、一に皂莢樹といふとぞ、これは惡木なり。【一二】汝　雞棲樹をさす。【一三】不材　よい材木でないもの。【一四】婆娑　舞ふ貌。

【題義】庭中の惡木をきりはらふことをのぶ。上元二年の作。

【詩意】ひとりで書齋のそばのこみちをめぐりながら、自分はいつも小さな斧を手にもつてゐる。だいぶさまざまなこかげができた。惡い木はきつてもきつてもなかなかきりつくせぬ。これでやつと枸

杞の木は自分のものになつたが、「雞棲」などいふやつはどうしたものだらう。これでみるとやくざな樹は生長してみたところで、いたづらにがさがさ風にうごかされてゐるだけのことである。

江畔獨步尋花七絶句　江畔獨り步して花を尋ぬ七絶句

〔一〕

江上被花惱不徹。　江上花に惱まされ徹せず、
無處告訴只顛狂。　告訴するに處無く只顛狂す。
走覓南隣愛酒伴。　去りて南隣愛酒の伴を覓むれば、
經旬出飲獨空床。　經旬出飲して獨り空床のみ。

【原注】解斯融吾酒徒

【字解】〔一〕江畔　詩中の「江上」も同じ、錦江のほとりをいふ。〔二〕被惱不徹　なやまされきらぬ、妻しもつとなやまされたしといふことならん。〔三〕告訴　ものたらぬこころもちを他人につげるなり。〔四〕顛狂　くるひまはる。〔五〕走覓　はしりてもとめる、是即ち狂態なり。〔六〕愛酒伴　さけずきのつれ、即ち注にみえたる斛斯融なる人。〔七〕經旬　十日にわたりて。〔八〕出飲　よそへでかけてのむ。〔九〕空床　主人の居らぬれだい。

【題義】江のほとりをひとりあるいて花をたづねてつくつた詩。上元二年の作なるべし。

【詩意】自分は江べりで花になやまされきらず、もつとなやまされたいとおもうたが、そのことをだれにいふべきばしよもないのでただくるひまはつてゐる。それで走つて南鄰の酒のみなかま（斛斯融）は居ぬかとさがしてみたところ、彼は十日あまりも飲みにでかけてゐてただあいたねだいばかりのこつてゐた。

〔二〕

稠花亂蘂裹江濱。　稠花亂蘂、江濱を裹む、
行步攲危實怕春。　行步攲危、實に春を怕る。
詩酒尚堪驅使在。　詩酒尚驅使せらるるに堪へて在り、
未須料理白頭人。　未だ白頭の人を料理するを須ひず。

【字解】〔一〕稠花　多くの花。〔二〕亂蘂　みだれた花蘂。〔三〕裹　兩岸をかこむをいふ。〔四〕行步攲危　あるきつきがかたむき、あやふい。〔五〕怕春　あしもとのあぶないのも春のためなれば春をおそろしといふなり。〔六〕倘　春をおそれはするがそれでもなほ。〔七〕堪驅使　詩酒に驅使せらるることにたふるなり。〔八〕在　自己の身が存在すること、「在」の字の文法上の主辭は次句の「白頭人」なり。〔九〕料理　俗語なり、始末する、「かたづけてしまふ」などの義、ここは生命を終了せしめる意に用ひたり。〔一〇〕白頭人　自己をさしていふ。

【詩意】多くの花、みだれた花蘂が江のほとりをつつみかこんでゐる、それをながめあるく自分の足つきはちどりあしのあぶなげであつて春をおそろしいものとおもふ、しかしながらそれでもまだ自分は詩や酒におひつかはれるには十分で存在してをるのである、まだこのしらがのおやぢをくたばらせてしまふ必要はないぞ。

〔三〕

江深竹靜兩三家。
多事紅花映白花。
報答春光知有處。
應須美酒送生涯。

江深く竹靜なり兩三家、
多事なり紅花、白花に映ず。
春光に報答するは知んぬ處有るを、
應に須らく美酒、生涯を送るべし。

【字解】【一】多事　よけいなこと、おせつかい、などの義。【二】報答春光知有處　吾知有處於報答春光の義、報答はあいさつすること、春光ははるげしき、處はばしよのことなれどもここは手だてないふ、手だてとは即ち次の句にいふ所是なり。【三】美酒　うまきさけをのむこと。

【詩意】このあたりは江水ふかく竹林しづかにして二三軒の家があるばかりだ。それにくれなゐの花が白い花にうつろうたりしてゐるのはなんといふよけいなことだ。この春げしきにあいさつするには自分はその手だてを心得てをる。それは外ではない、うまい酒をのんでこの生涯を送ることである。

〔四〕

東望少城花滿煙。
百花高樓更可憐。
誰能載酒開金盞。
喚取佳人舞繡筵。

〔四〕

東少城を望めば花滿煙なり、
百花の高樓更に憐む可し。
誰か能く酒を載せて金盞を開き、
佳人を喚取して繡筵に舞はしめむ。

【字解】【一】少城　小城なり、即ち成都の西南の城にして錦官城。【二】花滿煙　煙が花にみつるをいふ、花に「滿てる煙」あるをいふ。【三】百花高樓　百花のなかにある高樓、城内にあるそれをいふ。【四】載酒　酒を車にのせてはこびこむ。【五】金盞　黃金でかざつたさかづき。【六】佳人　美人。【七】繡筵　ぬひをしたむしろ、末二句は城内富貴の人に聚むなり。

【詩意】自分の家から東のかた少城をながめると花にいつぱい煙がみちてゐる。その百花のなかの高樓こそいかにけしきがよからうかとうらやましくおもはれるのである。だれが自分のためにそこへ滿載した酒をもつてきて金の盃を開き、美人をよんでそのうつくしいむしろで舞をさせて見せてくれるであらうぞ。（そんなひとがほしいの義。）

〔五〕

黃師墖前江水東。
春光懶困倚微風。
桃花一簇開無主。
可愛深紅愛淺紅。

〔五〕

黃師が墖前、江水の東、
春光懶困、微風に倚る。
桃花一簇開いて主無し、
深紅を愛す可きや淺紅を愛すべきや。

【字解】【一】黃師墖　墖は塔に同じ、黃師塔とは黃姓の法師の墓なり。【二】懶困　だるいこと。【三】一簇　ひとむらがり。【四】無主　野生にして所有者なきをいふ。【五】愛深紅　「愛」のうへに「可」の字をたしてみるべし。

【詩意】黃法師の墓の前、江水の東の方、そこではは るげしきにうたれてからだもだるくなりそよふく風によつてひとやすみする。みると桃の花がひとかたまりあるじもなくかつてに咲いてゐる。その花の紅色はこいのが愛すべきかうすいのが愛すべきか、いづれもとりどりにうつくしくさいてゐる。

〔六〕

（一）黃四娘家花滿（二）蹊。　黃四娘が家、花蹊に滿つ、
千（三）朶萬朶壓枝低。　千朶萬朶枝を壓して低る。
（四）留連戲蝶時時舞。　留連せる戲蝶は時時舞ひ、
（五）自在嬌鶯恰（六）恰啼。　自在の嬌鶯は恰恰として啼く。

【詩意】黃四娘が家では花がこみちにさきみちてゐる。千朶も萬朶も枝をおしつける樣にさいてゐる。そこを去ることを知らず居つづけてゐる所の戲れてゐる蝶も時時には舞ひだし、ふしおもしろく自由にうたふあいらしい鶯はほうほうとなきたててゐる。

【字解】【一】黃四娘　村婆の名。【二】蹊　こみち。【三】朶　はなのついたえだ。【四】留連　そこにつづけて居る。【五】自在　歌喉の自由なるをいふならん。【六】恰恰　こゑのさまなるべし。

〔七〕

（一）不是愛花卽欲死。　是れ花を愛するならずんば卽ち死せむと欲す、
只恐花盡老（二）相催。　只恐る花盡きて老相催さむことを。
（三）繁枝容易紛（四）紛落。　繁枝は容易に紛紛として落つ、
（五）嫩蘂商（六）量細（七）細開。　嫩蘂は商量して細細に開け。

【字解】【一】不是愛花卽欲死　花を愛することができるからこそいきてをるのだ、さもなければ死んだ方がましだとおもふ。いひかふれば自分はいのちがけで花を愛してゐるのだといふなり。【二】老相催　老いがせまつてくる。【三】繁枝　花のたくさんさいてゐるえだ。【四】紛紛　みだるる貌。【五】嫩蘂　わかいくわずゐ。【六】商量　他と相談すること、ひとりぎめにせずにの意。【七】細細　すこしづつ。

【詩意】自分はいのちがけで花を愛してゐるのだ。ただきづかはれるのは花が無くなつて老が身にせまつてくることだ。たんと花のついてゐる枝は紛紛と落ちるのは已むを得ぬが、わかい花ずゐはかつてにさかずにかんがへてすこしづつさいたがよからうとおもふ。

（一）進艇　艇に進む

（二）南京久（三）客耕南（四）畝。　南京の久客、南畝に耕す、
（五）北望傷神坐北牕。　北望傷神、北牕に坐す。
晝引老妻乘小艇。　晝は老妻を引いて小艇に乘じ、
晴看稚子浴淸江。　晴れては看る稚子の淸江に浴するを。
俱飛蛺蝶元相（六）逐。　俱に飛ぶ蛺蝶元相逐ふ、
（七）竝蔕芙（八）蓉本自雙。　竝蔕の芙蓉本自ら雙ぶ。
（九）茗飮蔗（一〇）漿攜所有。　茗飮蔗漿、有る所を攜ふ、

【字解】【一】進艇　艇はほそながき舟、進とはこちらが舟のなかへはひること。【二】南京　成都ないふ。【三】久客　ながくゐる仙鄕人自己をさす。【四】南畝　うねを南向きにせしはたけ。【五】北望　北方は長安洛陽の在る方位にして作者の故鄕の在る所。【六】相逐　おひつおはれつ。【七】竝蔕　蔕は帶なり、「へた」、花のなりぶしをいふ、

瓷罌（一一）無謝（一二）玉爲缸（一三）。　瓷罌も玉を缸と爲すに謝する無し。

〜〜並蒂とは一個より二つのなりぶしがでてさくなり。【八】芙蓉「はすのはな」、蛺蝶は暗に子供を比し、芙蓉は暗に自家夫妻を比す。【九】茗飲　おちや。【一〇】蔗漿　さたうきびのしる、所有　ありあはせのもの。【一一】瓷罌　すえもののかめ。【一二】無謝　不讓の意。【一三】缸　「もたひ」、「かめ」の類。

【題義】妻と小舟にのりしことをのぶ。上元二年の作。

【詩意】南京たる成都にながくたびびとの身となつてゐる自分は南畝に耕してをり、北方故鄕の方がしたはしさにそちらをながめて心をいためながら北の方のまどにすわつてゐる。晝はとしとつた妻をみちびいてこぶねにのり、晴れたそらのもとでこどもらがすんだ水の江でゆあみしてゐるのをながめる。ともどもに飛ぶ胡蝶はもとよりおひつおはれつしてをり、「へた」をならべた二つのはすの花は本來一對をなしてゐる。（我我家族もその蝶やはすに似てゐる。）舟のなかへはお茶でも砂糖のしるでもあるにまかせてもつてゆく。それを盛つたすえもののかめは富貴の家の玉のもたひにくらべてもひけをとらぬものである。（貧賤にして一家まどゐのたのしみあるは富貴の家にまさるをいふ。）

一室（一）

一室他鄕（二）遠。空林（三）暮景（四）懸。　一室、他鄕に遠し、空林、暮景懸る。

正愁聞塞笛（五）。獨立見（六）江船。　正に愁へて塞笛を聞く、獨立して江船を見る。

巴蜀（七）來多病。荊蠻（八）去（九）幾年（一〇）。　巴蜀に來つて多病なり、荊蠻に去るは幾年ぞ。

應同王粲宅（一一）。留（一二）井峴山前。　應に王粲が宅の、井を峴山の前に留むるに同じくするなるべし。

【字解】【一】一室　全家をいふ。【二】他鄕遠　蓋し不完全なる句なり、他鄕に寓して故鄕と遠きをいふ。【三】空林　さびしき林、草堂の林をいふ。【四】暮景　夕日。【五】塞笛　とりでの番兵のならすふえ。【六】見江船　荊州へゆかんことをおもふによる。【七】巴蜀　蜀をいふ、巴はつけていへるのみ。【八】荊蠻　荊州府江陵縣の地方、作者峽を下りてそこに赴かんとの志ありしなり。【九】去　ゆくこと。【一〇】幾年　何年といふにおなじ。【一一】王粲宅　魏の王粲、漢末の亂を避けて南方にゆく、湖北省襄陽縣西二十里峴山坡下に粲が宅あり、宅前に井あり、人之を仲宣井（仲宣は粲があざな）といふとぞ。【一二】留井峴山　上にみゆ。

【題義】全家蜀を去りて荊州にゆかんとの意をのぶ。上元二年の作なるべし。

【詩意】一家他鄕にありて故鄕と遠くへだたり、さびしい林に夕日がかかつてゐる。このとき自分はちやうど心配しながら番兵の吹きならす笛の音をきき、ひとりで立ちながら江をくだる船をみてをる。自分はここへきてから病氣がちである、いつになつたら荊州の方へゆけるのであらう。むかし王粲は襄陽に寓居してその井がのちまで峴山の前にのこつてゐるといふが、自分が荊州に寓居したら、それと同じやうなことになるのであらう。

所思(一)

苦憶荊州醉(二)司馬。【原注】崔吏部漪
(三)謫官樽酒定常開。
(四)九江日落醒(五)何處。
(六)一柱觀頭眠幾回。
可ㇾ憐懷(七)抱向ㇾ人(八)盡。
欲ㇾ問₌平安₋無₌使來₋。
故憑₌錦(九)水₋將(一〇)(一一)₌雙淚₋。
好過瞿唐(一二)灔澦堆。

所思

苦だ憶ふ荊州の醉司馬、
謫官樽酒定めて常に開かむ。
九江日落ちて醒むる何れの處ぞ、
一柱觀頭眠ること幾回ぞ。
憐む可し懷抱人に向つて盡くす、
平安を問はむと欲すれども使の來る無し。
故に錦水に憑りて雙淚を將かしむ、
好し過ぎよ瞿唐灔澦堆。

【字解】【一】所思　心中に思ふ所の人のことをいふ。【二】醉司馬　原注によれば吏部の某官たりし崔漪なり、漪は平涼節度使杜鴻漸が判官としてかつて肅宗の中興につきはかる所ありしといふ、のち吏部に用ひられてさらに荊州へ司馬としてながされしとみゆ。醉とは酒ずきにていつもゑひてあるをいふ。【三】謫官　つみせられながされた官吏として。【四】九江　洞庭のことなりと、洞庭には沅漸元辰敍酉澧資湘の九水が合すといふ、今の江西省の九江にては荊州と地理あはず。【五】醒　さむること、ただきむるは醉後のことなればじつは醉をいふなり。【六】一柱觀　松滋縣の東、丘家湖の中にありといふ、むかし宋の臨川王劉義慶、荊州の長官たりしとき羅公洲に大なる觀（てら）を立ててただ一本の柱を用ひしといふ、荊州の名所をあげしなり。【七】懷抱　作者のむねのうち、こころ。【八】人　司馬をさすならん、（或は曰く向人とは他人にむかつて崔の消息をとふなりと。）【九】錦水　即ち錦江。【一〇】將　もちゆかしむのこと。【一一】雙淚　左右の眼からでるなみだ。【一二】瞿唐灔澦堆　瞿唐は峽の名、四川省夔州府にあり、その峽口に灔澦石あり、堆は即ち石なり、その石が水量を示す標準となる、灔澦如ㇾ馬、瞿唐莫ㇾ下、灔澦如ㇾ象、瞿唐莫ㇾ上の語あり。

【題義】心中思ふ所の人あるをいふ。上元二年の作。

【詩意】自分は荊州の醉ばらひの崔司馬のことを非常におもふのである。彼はながしものにされて、そこではきまつていつも樽の酒をひらいてゐることだらう。洞庭に日の落つるとき彼はどこに醉をさましたか。一柱觀などで彼はなんべん醉うてねむつたか。自分のこころもちはかくすところなくすつかり彼に向つてはきだしてをる。かほどしたしいのだが、彼の平安であるや否やを問ひたくおもふのに彼の方からは使がこぬのである。しかたがないから自分は意を用ひてこの錦江の水によつて我が兩眼の淚をもつていつてもらはうとおもふ、どうかこの水が無事に瞿唐峽灔澦堆の難場所をとほつてくれる樣にいのる。

聞₌斛(一)斯六官未ㇾ歸

斛斯六官未だ歸らずと聞く

(二)故人南(三)郡去。去索(四)作(五)碑錢。
本(六)賣ㇾ文爲ㇾ活。翻令₌室(七)倒懸₋。
(八)荊扉深₌蔓草₋。土(九)銼冷₌疎煙₋。

故人、南郡に去り、去つて索む作碑の錢。
本文を賣りて活を爲す、翻つて室をして倒に懸らしむ。
荊扉、蔓草深く、土銼、疎煙冷なり。

（一〇）老罷休二無賴一。（一一）歸來省二（一二）醉眠一（一三）。　老罷、無賴なるを休めよ、歸來、醉眠を省けよ。

【字解】【一】斛斯六官　斛斯六は前に「南鄰愛酒伴」とありし融かといへり、六は排行、官は官人の義にて、當時俗に人をかくよぶ習はしありしか。【二】故人　しりびと。【三】南郡　江陵府。【四】索　もとむ。【五】作碑錢　碑文を作つたためにお禮としてもらふぜに。【六】賣文　碑文をかいて錢を受くるは文を賣るなり。【七】室倒懸　倒懸は人をさかさまにつるすこと、苦甚だし、室は家室、これ一家生計の苦痛をいふ。【八】荆扉　いばらであんだとびら、斛斯が家のさま。【九】土銼　銼は瓦鍋（どなべ）なりといふ。【一〇】老罷　老いて百事をやむること。【一一】無賴　あてにならぬこと、錢を得ては家をよそに酒をのみあるくは倚賴すべからざる人物なり。【一二】省　省誡。【一三】醉眠　ねふることをいふ。

【題義】斛斯六といふ人のところをたづねたところ、まだ家へもどらぬといふことだ。それにつけてつくつた詩。上元二年の作。

【詩意】わがしりびとである君は南郡の方へでかけた。それは碑文を作る禮金を得るためだとのことだ。文を賣つてくらしを立てるのが本來の目的であるのに、かへつて一家をして倒懸の苦しみにおちいらしめてをる。卽ち自分がきてみるといばらの扉のそばには草がふかくはびこり、土鍋にはうすい煙が冷によこたはつてゐる、（ごはんもめつたにたかぬらしい）。君の樣に年とつて萬事をやむべき年齡ではあまり放埓なことをすることをやめて、家へかへつてきてゐひねをすることをはぶく樣にした方がよいとおもふのである。

赴（一）青城縣一出二成都一寄（二）陶・王二少尹（三）一

青城縣に赴くとき成都を出で陶・王の二少尹に寄す

老被二樊籠（四）役一。貧嗟二出入（五）勞一。　老、樊籠に役せらる、貧にして出入に勞するを嗟す。

客情（六）投二異縣（七）一。詩態（八）憶二吾曹（九）一。　客情、異縣に投す、詩態吾が曹を憶ふ。

東郭（一〇）滄江（一一）合。西山（一二）白雪高。　東郭、滄江合す、西山、白雪高し。

文章差（一三）底病（一四）。回首（一五）興（一六）滔滔（一七）。　文章底の病をか差さむ、首を回して興滔滔たり。

【字解】【一】青城縣　青城山あるにより取て縣の名とす、唐にては蜀州に屬せり、成都より西、灌縣の南にあり。【二】陶王　二人の姓。【三】少尹　尹の下役、成都は南京となりし故に尹をおく。【四】樊籠　かき、かご、人事の拘束をたとへていふ。【五】出入　家門より出入りする。【六】客情　たびごころ。【七】異縣　青城をさす。【八】詩態　詩のさまについて。【九】吾曹　わがともがら、陶・王をさす。【一〇】東郭　蜀州（今、崇寧州）の東のくるわ、そこには二水合流す、浦氏の說に成都より西に向ひてゆくゆゑ成都をさして東郭といふといへり、今從はず。【一一】滄江　ひろいかは。【一二】西山　卽ち雪嶺。【一三】差　癒す。【一四】底病　何病なり、朱注に差底病を差ヲ底ノ病ヲとよませ、如何なる缺點に於てまちがつてをるか、とときたり、今從はず。【一五】回首　成都の方をむきかへる。【一六】興　詩興なり。【一七】滔滔　水の盛にながるるさま、詩興のわくさまをたとふ。

【題義】青城縣に赴かうとして成都から出てから、陶・王の二人の少尹に寄せた詩。蓋し生活に逐はれてでかけしなり。上元二年の作。

【詩意】自分は年とつて人事のためにおひつかはれ、貧乏なために家から出たりはひつたりといふなんぎをせねばならぬことをなげかはしくおもふ。いまたびのこころもちをいだいて他縣に身を投じようとするにあたつて、詩のすがたのことについて諸君のことをおもふのである。今ここの東郭ではひろい江が二すぢ合流して、西山は白雪をいただいて高くそびえてみえる。文章といふものはそれでどんな病氣がなほせるか、文章でなほせる病氣はないが、（蓋し貧乏も其の一ならん）諸君の方をふりかへりながら詩興が滔滔とわきおこるのをおぼゆる。

(一)野望(二)因過(三)常少仙。

野望因つて常少仙に過る

野橋齊渡馬。秋望轉悠哉。　野橋齊しく馬を渡す、秋望轉た悠なる哉。

竹覆青城合。江從(四)灌口來。　竹は青城を覆ひて合し、江は灌口從り來る。

入(五)村樵徑(六)引。嘗(七)果(八)栗皺開。　村に入れば樵徑引く、果を嘗めて栗皺開く。

落盡(九)高天日。(一〇)幽人未遣回。　落ち盡くす高天の日、幽人未だ回らしめず。

【字解】〔一〕野望　のらにてながめる。〔二〕因　そのついでに。〔三〕常少仙　常徴君のことならん、常は縣の尉にして任に在る、縣尉の敬稱を少府といひ、また漢の梅福、尉となり神仙となりしより之を仙尉といふにより、少府仙尉を略して少仙といへるか。〔四〕灌口　山の名、彭州（今、彭縣）の導江縣の西北にあり。〔五〕村　常少仙の居地。〔六〕引　こちらへ手びきする。〔七〕果　くだもの。〔八〕栗皺　皺は「しわ」或は皴に作るべしといへり、皴は皮のひびなり、いづれにしても栗の皮をいふ、これは常少仙のもてなすもの。〔九〕高天　あきのそらはたかし。〔一〇〕幽人　幽静なすまひをしてゐる人、即ち主人常少仙。

【題義】野らでけしきを見ながら、ついでに常少仙のところへたちよつたことをのぶ。上元二年秋、青城にての作。

【詩意】野川の橋でふたりでそろうて馬をわたす、あきのながめはいよいよはるけくみゆる。竹は青城の方をおほうてとざし、江の水は灌口の方から流れてくる。村にはひるにきこりのこみちにみちびかれてひとりでに常君の宅へつく、そこでは常君がもてなしてくれる栗の實をたべてその皮をむく。そらの日は落ちてまつたく日がくれてしまつたが、わびずまひをしてゐる主人はまだ自分をかへしてはくれぬ。

(一)丈人山

丈人山

自爲青城客。(二)不唾青城地。　青城の客と爲りしより、青城の地に唾せず。

爲愛丈人山。(三)丹梯近(四)幽意。　丈人山の、丹梯幽意に近きを愛するが爲なり。

(五)丈人祠西(六)佳氣濃。　丈人祠西、佳氣濃なり、

緣ㇾ雲擬ㇾ住最高峰。　雲に緣り住せむと擬す最高峰。
掃ニ除白髮一黃精在。　白髮を掃除するには黃精在り、
君看他時冰雪容。」　君看よ他時冰雪の容を。」

【字解】【一】丈人山　青城縣西北三十二里にあり。「玉匱經」と稱する道敎の書によれば、黃帝、五岳を遍歷して青城山を封じて五岳丈人となし、第五大洞寶仙九室之天となせしといふ。【二】不唾　佛典「智度論」に不ㇾ唾ニ僧地一の語ありといふ、作者佛典の事を道敎の地に用ひしなり、唾せざるは之を尊敬するなり。【三】丹梯　あかきはしご、山崖をいふ。【四】幽意　幽靜のこころもち。【五】丈人祠　山神を祭りし祠なるべし。【六】佳氣　山のよき氣。【七】緣雲　高きをいふ。【八】掃除　はらひのぞく。【九】黃精　藥草の名。【一〇】君　一般人をさす。【一一】他時　後日をいふ。【一二】冰雪容　冰雪はただの白くうつくしきさまなり、「莊子」に藐姑射之山、有ニ神人一焉、肌膚若ニ冰雪一、綽約若ニ處子一とみゆ。

【題義】青城縣の丈人山のことをのぶ。上元二年の作。

【詩意】自分は青城に寓居の身となつてから青城の地には唾を吐かぬ。それはここに丈人山があつてその山崖は幽靜のこころもちをうるに近いものがあるからだ。』山神の祠の西の方は山の氣がことに濃にうつくしい。だから自分は雲によつていちばんたかい峰に住まふかとまちかまへてゐる。しらがをとりのぞいてわかがへるには黃精といふ藥草もある。諸君よ、どうぞ後日自分が仙人のやうな氷雪にも似た容貌となるのを看てくれたまへ。』

寄ニ杜位一　杜位に寄す

近聞寬法離ニ新州一。　近聞く寬法、新州を離ると、
想見歸懷尙百憂。　想ひ見る歸懷尙百憂なるを。
逐客雖ニ皆萬里去一。　逐客皆萬里に去ると雖も、
悲君已是十年流。　悲む君が已に是れ十年流さるるを。
干戈況復塵隨ㇾ眼。　干戈況んや復塵、眼に隨ふ、
鬢髮還應ニ雪滿ㇾ頭。　鬢髮還應に雪、頭に滿つるなるべし。
玉壘題ㇾ書心緒亂。　玉壘、書に題すれば心緒亂る、
何時更得ニ曲江遊一。　何の時か更に曲江に遊ぶことを得む。

【原注】位京中宅近西曲江

【字解】【一】杜位　作者前に位宅守ㇾ歲詩あり、位は李林甫が壻なり、林甫は天寶十一載十一月に卒したれば位の貶官は必ず十二載に在り、十二載より上元二年までは九年なるも詩には十年といひ成數をあげたり、位このとき新州より江陵に移されしなり。【二】寬法　法をゆるやかにする、刑罰をゆるめられしをいふ。【三】新州　唐には嶺南道に屬す、廣東地方なり。【四】歸懷　北にかへるこころ。【五】逐客　中央から放逐された人。【六】十年流　上にみゆ、實は九年なり、流は流謫。【七】塵隨眼　みるところみな塵埃。【八】玉壘　山の名、灌縣西北二十九里にあり、灌縣は乃ち唐の導江・青城の二縣の地。【九】題書　手紙にうはがきをかく。【一〇】曲江　長安にあり、位が宅の西の近いところに曲江あり。

【題義】杜位が新州から江陵へ移されしについて寄せたる詩。上元二年青城にての作。

【詩意】ちかごろきくと君は刑罰をゆるくされて新州を離れたさうだ。自分は君の北歸のこころはそれでもまたさまざまの心配をもつてゐるだらうと想像するのだ。苟くも中央から放逐されたものは皆萬里の遠くへいつたのではあるが、君はこれではや十年も流されてゐるといふは悲むべきである。まして干戈起つてみるところどこも塵埃であり、君が鬢髮はこれまたかしらに雪をいただいてゐることであらう。この玉壘山の在る土地で君にやる手紙のうはがきをかくと心のいとがみだれる。いつ、もいちど君が宅のそばの曲江であそぶことができるであらうか。

送裴五赴東川

裴五が東川に赴くを送る

故人亦流落。高義動乾坤。　故人亦流落す、高義、乾坤を動かす。

何日通燕塞。相看老蜀門。　何の日か燕塞に通せむ、相看て蜀門に老ゆ。

東行應暫別。北望苦銷魂。　東行應に暫く別るるなるべし、北望苦だ魂を銷せしむ。

凜凜悲秋意。非君誰與論。　凜凜秋を悲むの意、君に非ずんば誰と與にか論せむ。

【字解】【一】裴五　其名は詳ならず。【二】東川　蜀の東部、潼川の地方。【三】故人　裴をさす。【四】高義動乾坤　裴は必ず時世を濟ふの志を抱く、故にかくいふ。【五】通燕塞　燕は范陽の地、祿山の起りし地、時に史朝義未だ平がず、故に道路通ぜず、塞は「とりで」。【六】蜀門　蜀をいふ。【七】北望　故鄉の方をのぞむ。【八】凜凜　ぴりつとするさま。【九】悲秋　志士は秋にあたりてことに之を悲む。

【題意】裴某が東川の地方に赴くを送る詩。上元二年成都にての作。

【詩意】君の高義は天地をも動かすものであるが、わが舊知の人である君もまたここにおちぶれてゐるか。おたがひかかる蜀の地で年を經てをるが、いつになつたら燕の地のとりでの方へ道路が通じうるのであらう。君が東に行くのはすこしの別れだとおもふが、北の方をながめては自分はいたくこころをいためるのである。この、秋を悲しむきびしいこころもちは、君でなければかたりあふことはできぬ。

送韓十四江東省覲

韓十四が江東に省覲するを送る

兵戈不見老萊衣。　兵戈には見ず老萊が衣、

嘆息人間萬事非。　嘆息す人間萬事非なるを。

我已無家尋弟妹。　我已に家の弟妹を尋ぬべき無し、

君今何處訪庭闈。　君今何の處にか庭闈を訪ふ。

黃牛峽靜灘聲轉。　黃牛峽靜にして灘聲轉じ、

〰〰〰〰〰〰〰〰

【字解】【一】韓十四　其名詳ならず。【二】江東　今の江寧の地方【三】省覲　兩親におめみえにゆく。【四】兵戈　兵亂をいふ。【五】老萊衣　むかし楚の老萊子、親につかへて孝行あり、年七十にして身に五

白馬江(八)寒樹影稀。 白馬江寒くして樹影稀なり。
此別應須各努力(九)。 此の別應に須らく各努力すべし、
故鄕(一〇)猶恐未同(一一)歸。 故鄕猶恐る未だ同歸せざらむ。

彩の衣をつけて嬰兒のまねして親の側に戯れて其の歡を求むと。【六】庭闈 闈は奥むきの小門、庭闈は親のござる所をいふ。【七】黄牛峽 峽の名、夷陵州（今湖北宜昌）の西九里にあり、高崖の間に石あり、人の刀を負ひて牛を牽くがごとし、人は黒く牛は黄なり、行く者謠つて曰く、朝發黄牛、暮宿黄牛と、蓋し水路回轉するをいふなり。【八】白馬江 崇慶州東北十里にあり、仇氏は此詩を成都の作に入れたるも此句によれば蜀州にての作ならん、崇慶州は唐の蜀州なり、白馬江は手近の水をあげ、黄牛峽は前程の峽をあげたるなり。【九】努力 自愛すること。【一〇】故鄕 蓋し洛陽をさす、韓も赤洛陽の人なり。【一一】同歸 韓とおなじくかへる。

【題義】 同鄕の人韓某がその親を江東の方へ見舞にゆくを送る詩。上元二年蜀州にての作ならん。

【詩意】 世が世ならば老いて五彩の衣をつけて其の親に孝行をなす老萊子のごときものを見るべきであるが、いまは兵亂のためにそれを見ることができぬ。なげかはしくも人間萬事ことごとく非である。わたしは、弟や妹を尋ぬべき家をうしなつてゐる。君は御家庭をいづれの地に訪問されようとするのであるか。君がゆくときこの白馬の江水は寒うして樹のかげもしだいにみえなくなり、更に進めば黄牛峽の谷あひしづかに灘聲しだいにうつりゆくことであらう。このたびのわかれはおたがひにからだを大切にすべきである、なんとなれば我我はまだ故鄕に一緒にかへれるといふ見込みもないのであるから。

柟樹爲風雨所拔歎　柟樹風雨の拔く所と爲るの歎き

倚江柟樹(一)草堂(二)前。 江に倚る柟樹、草堂の前、
古老相傳二百年。 古老相傳ふ二百年と。
誅(三)茅卜居總爲(四)此。 茅を誅し居を卜するは總て此れが爲なり、
五月髣髴(五)聞寒蟬(六)。 五月髣髴、寒蟬を聞く。
東南飄風動地至。 東南飄風、地を動かして至る。
江翻石走流雲氣。 江翻へり石走りて雲氣流る。
幹排雷雨猶力爭(七)。 幹雷雨を排して猶力爭す、
根斷(八)泉源豈天意(九)。 根泉源に斷ゆ豈に天意ならむや。
(一〇)滄波老樹性所愛。 滄波老樹、性の愛する所、
浦上童童(一一)一青蓋(一二)。 浦上童童たり一青蓋。
野客頻留懼(一三)雪霜。 野客頻に留まりて雪霜を懼る、
行人不過(一四)聽竽籟(一五)。 行人過ぎず竽籟を聽く。

【字解】【一】柟樹 前に「高柟」の詩あり、同じ樹なり。【二】草堂 浣花溪の草堂。【三】誅茅 かやをきる、屋根をふくため。【四】爲此 此は樹をさす。【五】髣髴 さもにたり。【六】寒蟬 ひぐらし、樹葉の鳴るおとをたとへていふ。【七】力爭 ぬかれまじと骨をりてあらそふ。【八】斷泉源 大地のそこの水のあるところと緣がきれる。【九】豈天意 不自然なるの稀をいふ。【一〇】滄波老樹 錦江の波とこの老柟樹と。【一一】童童 こもれる貌ならん。【一二】青蓋 蓋は車蓋、からかさ。【一三】懼雪霜 雪霜をおそるるもの、之を樹陰に避く。【一四】不過 ゆきすぎず、たちとまるをいふ。【一五】竽籟 竽は笙の

虎（一六）倒龍顚委榛棘（一七）（一八）。　虎倒龍顚、榛棘に委す、
淚痕血點（一九）垂胸臆。　淚痕血點して胸臆に垂る。
我有新詩何處吟。　我新詩有るも何の處にか吟せむ、
草堂自此無顏色。」　草堂此より顏色無からむ。」

【題意】風雨のために枏樹がぬかれたについての歎きをのぶ。上元二年成都の作。

【詩意】草堂の前に江に倚つて枏樹がある、古老のいひつたふる所では二百年からたつた樹だといふ。自分が茅をきり住居をトしたのはすべて此の樹あるがためである、樹葉の鳴るさまは五月にあたつてはやひぐらしをきくかのおもむきがある。』ところへ東南から吹きまく風が大地をうごかしてやつてきて、江水はひるがへり、石はとばされ雲氣ははしる、樹の幹は雷雨をおしのけて拔けまいとあらそふ、けれどもつひに根は地のそこと緣がきれた、これはよもや天のおぼしめしではなからう、偶然の不幸である。』江のうらべにこんもりとそびえた一の靑い傘。その波と樹とは自分のたいへん愛するものであつた。自分ばかりでなく野人も雪や霜をおそれてはしきりにこの樹の下へとどまり、みちゆく人もとほりすぎずにたちとまつて笙の音のやうなこゑをきいたものである。』いまやそれが龍虎がぶつたふれた棵に榛棘のあひだにねてゐる、それをみると自分はなみだのあとが血のやうにぽとぽとむねのところに垂れおちる、この樹が無くなつてはわが草堂も全く顏色をなくしたものであつて、これからは新しい詩ができてもどこでそれを吟じたものだらう。吟ずる場所がない。』

たぐひ、竽籟はそのおと、樹聲なたとふ。〔一六〕虎倒龍顚　虎の如く倒れ龍のごとくひつくりかへる、樹のぬけた形容。〔一七〕委　ゆだね、れてゐること。〔一八〕榛棘　はり、からたち。〔一九〕血點　血は淚の血、樹の拔けしを悲むため。

茅（一）屋爲秋風所破歌　茅屋、秋風の破る所と爲る歌

八月秋高風怒號。　八月秋高くして風怒號す、
卷我屋上三（二）重茅。　我が屋上三重の茅を卷く。
茅飛渡江（三）灑（四）江郊。　茅飛びて江を渡り江郊に灑ぐ、
高者挂罥（五）長林梢（六）。　高き者は挂罥す長林の梢、
下者飄轉沈塘坳（七）。』　下き者は飄轉して塘坳に沈む。』
南村群童欺（八）我老無力。　南村の群童我が老いて力無きを欺り、
忍（九）能對面（一〇）爲盜賊。　忍んで能く對面に盜賊を爲す。

【字解】〔一〕茅屋　草堂の茅屋〔二〕三重茅　三重にふきたるかや。〔三〕江　錦江。〔四〕灑　あめのそそぐやうにふりそそぐ。〔五〕挂罥　かかる。〔六〕長林梢　たかい木の林のこずゑ。〔七〕塘坳　いけのくぼみ。〔八〕欺　あなどる、俗語なり。〔九〕忍　むごく。〔一〇〕對面　めんとむかつて。〔一一〕脣焦口燥　くちびるこげ、口かわく、のどをからしてさけぶこと。〔一二〕呼不得　もはやさけべぬ。〔一三〕俄頃　し

公然抱茅入竹去。
(一一)脣焦口燥呼(一二)不得。
歸來倚杖自嘆息。』
(一三)俄頃風定雲墨色(一四)。
秋天漠漠(一五)向昏黑(一六)。
(一七)布衾多年冷似鐵。
(一八)嬌兒惡臥(一九)踏裏(二〇)裂。
(二一)牀頭屋漏(二二)無乾處。
雨脚如麻未斷絶。
自經喪亂(二三)少睡眠。
(二四)長夜沾濕(二五)何由徹(二六)。』
(二七)安得廣廈(二八)千萬間(二九)。
大庇(三〇)天下寒士(三一)倶歡顏。
風雨不動安如山。
鳴呼何時眼前突兀(三二)見此屋(三三)。
吾廬獨破受凍死亦足。』

公然茅を抱きて竹に入り去る、
脣焦げ口燥き呼び得ず、
歸來杖に倚つて自ら嘆息す。』
俄頃風定まりて雲墨色、
秋天漠漠、昏黑に向ふ。
布衾多年、冷、鐵に似たり、
嬌兒惡臥、踏裏に裂く。
牀頭、屋漏れて乾ける處無し、
雨脚麻の如く未だ斷絶せず。
喪亂を經し自り睡眠少し、
長夜沾濕、何に由りてか徹せむ。』
安んぞ得む廣廈千萬間、
大に天下の寒士を庇ひて倶に歡顏、らむ。
風雨にも動かず安きこと山の如くな
鳴乎何の時か眼前突兀此の屋を見む。
吾が廬獨り破れて凍死を受くるも亦足れり。』

ばらくして。【一四】墨色　くろきこと。【一五】漠漠　ひろきこと。【一六】昏黑　たそがれのくらさ。【一七】布衾　ぬののかいまき。【一八】嬌兒　嬌は驕につくる、驕兒はやんちやのこども。【一九】惡臥　ねぎやうぎあしきこと。【二〇】踏裏　ふみつけるあひだにひきさく。【二一】牀　ねだい。【二二】屋漏　やれがもる。【二三】喪亂　人の死すること、世のみだるること。【二四】長夜　よなが。【二五】沾濕　うるほふ。【二六】徹　長夜へかかる辭、徹は通なり、徹二長夜一とは夜をひとばんとほしてすごすこと。【二七】安得　希望の辭、安如山までかかる。【二八】廣廈　ひろき大屋根。【二九】千萬間　千間萬間のひろさ、間とは柱と柱とのあひだをいふ。【三〇】庇　おほふ。【三一】寒士　凍寒にあうてなる貧乏しもの。【三二】突兀　たかくそびゆる貌。【三三】此屋　千萬間の廣廈をさす。

【題義】草堂のかやぶきの屋根があきかせにうちこはされたことをのべた詩。上元二年秋の作。

【詩意】八月秋のそらたかく風が怒りほえ、草堂のやねの三重ぶきの茅を吹きまくつた。かやは江をとびわたつて江ぞひののはらに雨のやうにふりそそぐ。その高いものは高い林のこずゑにひつかかり、ひくきものはひるがへりころがつていけのくぼみに沈む。』南の村のこどもらは自分が年よつて力の無いのをばかにして、むごくも面とむかつてどろぼうをはたらき、公然と茅をだいて竹林のなかへにげいる。こちらはいくらさけんでもくちびるはこげ、口はかわいて、もはやさけぶことはできぬ。それでしかたなくなくまたもどつてきて杖に倚つてためいきつくばかりである。』やがて風はしづまり、雲はすみ色となり、秋の天いつたいにくれがたになりかけた。自分は布のかいまきをもつてをるがな

がねんそれをつかつてゐるので鐵の樣につめたい。そのうへあばれもののこどもがねぎやうぎわるくそれを踏んでひきさいてしまつた。ねだいのほとりはやねがもつてかわいたところもない、それに雨あしは麻のやうにふりしきつてたえまもない。喪亂以來自分はねむることがすくないのであるがこんなしめりをうけてはこのながよをどうしてとほしてすごすことができようか。』どうしたら千萬間もあるひろいやねの家を得て、天下の貧乏ものをそれでおほひ、みんながうれしいかほをしてゐることができ、いくら風雨があつても安泰なること山のやうにあることができるであらう。ああいつ眼前にたかくこの樣ないへを見ることができるであらう。それを見ることができさへしたら、自分のいほりだけはうちこはされてこごえ死にのめにであうても滿足である。』

石筍行(一)

君不見益州(二)城西門。
陌(三)上石筍雙高蹲(四)。
古來相傳是海眼(五)。
苔蘚蝕盡波濤痕。
雨多往往得瑟瑟(六)。
此事恍惚(七)難明論。
恐是昔時卿相冢。
立石爲表(八)今仍存。』
惜哉俗態好蒙蔽(九)。
亦如小臣(一〇)媚至尊。
政化(一一)錯迕(一二)失大體(一三)。
坐看傾危(一四)受厚恩。
嗟爾(一五)石筍擅虚名(一六)。
後來(一七)未識(一八)猶駿奔(一九)。
安得壯士擲天外。
使人不疑見本根(二〇)。』

石筍行

君見ずや益州城の西門、
陌上石筍雙びて高く蹲す。
古來相傳ふ是れ海眼なりと、
苔蘚、蝕し盡す波濤の痕。
雨多くして往往、瑟瑟を得、
此の事恍惚、明に論じ難し。
恐らくは是れ昔時卿相の冢、
石を立て表と爲し今仍存するならむ。』
惜しい哉俗態、蒙蔽を好む、
亦小臣の至尊に媚ぶるが如し。
政化錯迕、大體を失ひ、
坐ら傾危を看て厚恩を受く。
嗟爾石筍、虚名を擅にす、
後來未だ識らず猶駿奔す。
安んぞ壯士を得て天外に擲ち、
人をして疑はずして本根を見せしめむ。』

【字解】【一】石筍行　たけのこの化石をよめるうたなり、成都城の西門に二個の石筍あり、その北筍は長さ一丈六尺、まはり九尺五寸、南筍は長さ一丈三尺、まはり一丈二尺、南筍は公孫述の時折れたりといふ。

【二】益州城　益州は蜀の古名。【三】陌　街路。【四】蹲　うづくまる。【五】海眼　石筍の附近二三尺の處は毎年夏六月に大雨あれば陥りて土穴をなし深さ測られず、俗に之を「海の眼」なりと稱す。【六】瑟瑟　碧珠なり、雨ののち石筍の傍には必ず青黄の小珠を得といふ。【七】恍惚　ぼんやり。【八】表　はかじるし。』【九】蒙蔽　眞相をおほひかくすこと。【一〇】小臣媚至尊　つまらぬけらいが天子にこびる。【一一】政化　政治敎化。【一二】錯迕　まちがふ。【一三】失大體　要を得ぬ。【一四】傾危　國家の勢がたむきあやふし。【一五】爾　汝、石筍をさす。【一六】虚名　海眼にして瑟瑟を世得べしなどのこと。【一七】後來　後の人。【一八】未識　眞相をしらぬ。【一九】駿奔　長くはしり赴く、詩經の「淸廟」篇の語。【二〇】本根　石筍の根本、實相。

成都の石筍をみてよめり、宦者李輔國のことをいへりとの說あるも然るや否やを知らず、文字通りに解しおくべし。上元二年の作。

【詩意】諸君見よ、益州城の西門には街路のうへに石の筍が一對高くうづくまつてゐる。ここはむかしから「海の眼」だといひつたへ、その筍の波濤のあとはこけがすつかり腐蝕してゐる、雨の多くふるときにはここでは往往瑟瑟といふ珠を得るといふ。しかしかかることはとりとめもないことではつきり論ずることはむつかしい。自分の考では多分むかしの卿相の塚であり、そのうへに石を立ててはかじるしとしたものが今なほ存在してゐるのであらう。』をしいことには世俗のさまはとかく眞相をかくすことをこのむもので、たとへばつまらぬ臣下が天子にこびてその耳目を蔽ふやうなものである。彼等臣下どもは政化がまちがつて要點を失うても、自分だけ天子の厚恩を受けて國家の勢の傾き危くなるのを平氣でみてゐる。ああこの石筍もその實のそはぬ名聲をほしいままにしてゐるので、後の世のものがそれをしらずにやたらにここへはせあつまるのである。自分はどうか壯士をやとうてこの石を天外にはふりだし、人人をして疑ふことなくその根本の正體を見させたいとおもふ。』

石犀行（一）

石犀行

君不見秦時蜀太守（二）。
刻石立作五犀牛。
自古雖有厭勝法（三）。
天生江水（四）向東流。
蜀人矜誇（五）一千載。
泛溢（六）不近張儀樓（七）。
今日灌口（八）損戶口（九）。
此事或恐爲神羞（一〇）。
修築隄防出衆力。
高擁木石當清秋。
先王作法皆正道。
詭怪（一一）何得參人謀。
嗟爾五犀不經濟（一二）。

君見ずや秦時、蜀の太守、石を刻して立てて五の犀牛を作す。
古より厭勝の法有りと雖も、
天、江水を生じて東に向つて流れしむ。
蜀人矜誇す一千載、
泛溢、張儀が樓に近かずと。
今日灌口、戶口を損す、
此事或は恐る神の羞と爲らむことを。
隄防を修築して衆力を出し、
高く木石を擁して淸秋に當る。
先王、法を作す皆正道なり、
詭怪何ぞ人謀に參するを得む。
嗟爾五犀、經濟あらず、

【字解】【一】石犀行　石で作つた犀のうた。秦の孝文王の時、李冰を以て蜀の太守とす、冰、石犀五頭を作りて水の精を厭すと、晉の常璩の華陽國志に犀牛一は府中市橋門にあり、一は淵の中にありといへり。唐のころ幾個存せしや明ならず「立作五犀牛」の五を三に作れる本ありといふ、之によりて余が想像をいはば「五犀牛」の五は五を正しとせん、後の「嗟爾五犀」の五は或は三の訛かも知れず、果して然らば三犀を失ひて二犀を餘せしかとおもはるれど確ならず。【二】秦時蜀太守　上にみゆ。【三】厭勝法　まじなひの法。【四】江水　錦江の水。【五】矜誇　ほこりほこる。【六】泛溢　江水あふれること。【七】張儀樓　成都の少城（西城）は張儀の築きし所なり

缺（一三）訛只與長川逝。　缺訛只長川と逝く。

但見元氣（一四）常調和（一五）。　但見る元氣常に調和すれば、

自免洪濤恣凋瘵（一六）。　自ら洪濤、凋瘵を恣にするを免る。

安得壯士提天綱（一七）。　安んぞ壯士を得て天綱を提げ、

再平（一八）水土犀奔茫（一九）。　再び水土を平げて犀は奔茫。

といふ。【八】灌口 山の名、彭州導江縣西北二十六里にあり、上元二年の七月にながあめあり八月に至りて止む、灌口に損害あり。【九】戸口 人家人口。【一〇】神靈 石犀の神靈の恥辱。【一一】詭怪 あやしきこと、まじなひの法をいふ。【一二】不經濟 經レ國濟レ民の能力あらざるをいふ。【一三】缺訛 訛は形のかはることをいふならん。【一四】元氣 天地間に流行する大氣。【一五】調和 陰陽よくととのふ。【一六】凋瘵 しぼむ、やむ、民力なつからすこと。【一七】天綱 天の大つな、無形には政治の大本をいふ。【一八】平水土 洪水なき様にする。【一九】犀奔茫 奔茫の語未だ詳ならず、茫洋の地に奔り赴かしむる義ならんか。

【題義】 成都の石犀を見てよめるうた。上元二年秋の作。

【詩意】 諸君見よ、秦の時に蜀の太守（李冰）が石を刻んで石の犀牛五個を作つて立てた。それを以て彼は洪水をしづめるまじなひとしたのだ。なるほど古くからまじなひの法はあるが、天は江の水を生じて東方にながれしめてゐる。蜀の人たちはこの犀牛によつて一千年も洪水は張儀の樓に近づかぬとほこつてゐたが、今日は灌口に洪水があつて人家人口を害うた、このことは神の恥辱になるおそれがある。』それで淸秋のときに當つて木や石をかかへこみ、多人數の力をだして隄防を修築する。古代の賢い王が法をこしらへたのはみな正しい道ばかりだ、まじなひなどいふあやしいことがどうして人のはかりごとのなかにくははることができよう。汝五個の犀牛の如きものはさつぱり經レ國濟レ民の力のないものだ、缺けてとほく流るる川の水とともにどこへかいつてしまふがよい。天地間の元氣さへ調和するならばひとりでに洪水が民力をつからすことから免れさすことができるものだ。どうか壯士を得て天の大綱を提げてふたたび洪水を治めて、犀のやうなものはゆくへ不明になつてしまうた方がよいとおもふ。

杜鵑行（一）

君不見昔日蜀天子。　君見ずや昔日蜀の天子、

化爲杜鵑似老烏。　化して杜鵑と爲りて老烏に似たり。

寄巢（二）生子不自啄。　寄巢子を生みて自ら啄まず、

羣鳥（三）至今爲（四）哺（五）雛。』　羣鳥今に至るまで爲に雛に哺す。』

雖（六）同君臣有舊禮。　君臣に同じく舊禮有りと雖も、

骨肉（七）滿眼身（八）羈孤（九）。　骨肉滿眼、身羈孤なり。

【字解】【一】杜鵑行 ほととぎすの歌なり。杜鵑については次の傳說あり。「成都記」なる書に曰く、杜宇、亦杜主ともいふ、天より降りて望帝と稱す。稼穡を好み人に敎へて農を務めしむ。時に荊州の人鼈靈といふもの死し、其の屍流れを泝りてのぼり汶山の下に至り復た生き望帝を見る、望帝因つて以

業(一〇)工竄(一一)伏深樹裏。　業に工に竄伏す深樹の裏、
四月五月偏號呼。　四月五月偏に號呼す。
其聲哀痛口流血。　其の聲哀痛、口、血を流す、
所訴何事常區區(一二)。　訴ふる所何事ぞ常に區區たり。
爾(一三)豈摧(一四)殘始發憤。　爾豈に摧殘せられて始めて發憤するか、
羞帶羽(一五)翮傷形(一六)愚。　羽翮を帶ぶるを羞ぢ形の愚なるを傷む。
蒼(一七)天變化誰料得。　蒼天變化誰か料り得む。
萬事反(一八)覆何(一九)所無。　萬事反覆何の無き所ぞ。
萬事反覆何所無。　萬事反覆何の無き所ぞ。
豈(二〇)憶當(二一)殿羣臣趨。　豈に憶はむや殿に當つて羣臣の趨せしことを。

て相となす、號して開明といふ、たまたま巫山、江をふさぎ、人、洪水にあふ、開明ためにうがちて流れを通ぜしむ、大功あり、望帝因つて其の位を以て之にゆづる。のち望帝死す、其の魂化して鳥となる、名けて杜鵑といふ。亦子規ともいふ。と。之によれば杜鵑はむかしの蜀の君の化してなりたるものなりといふなり。之につき宋の鮑照に行路難の詩あり、曰く 愁思忽而至、跨馬出國門、擧頭四顧望、但見松柏荆棘鬱蹲蹲、中有一鳥名杜鵑、言是古時蜀帝魂、聲音哀苦鳴不息、羽毛憔悴似人髡、飛走樹間啄蟲蟻、豈憶往日天子尊、念此死生變化非常理、中心惻愴不能言 と。杜詩は殆ど之を祖とせり。【二】寄巣 自己の寄寓する巣、他鳥の巣。【三】羣鳥 他の多くのとり。【四】爲 杜鵑のために。【五】哺雛 ほととぎすのひなに餌をやる。【六】同君臣 杜鵑と羣鳥との關係が君臣ににてゐる。【七】骨肉滿眼 眼前多くの骨肉はあるが。【八】身 ほととぎすのからだ。【九】羇孤 たびの身、ひとりの身。【一〇】業工 已巧と同じ。【一一】竄伏 かくれふす。【一二】區區 くだくだしくつまらなし。【一三】爾 汝、杜鵑をさす。【一四】摧殘 くだかれ、そこなはれる、羽毛などにつきいふ。【一五】羽翮 翮はつばさのうらにあるたちばね。【一六】形愚 おろかな、みすぼらしき様子。【一七】蒼天 あをぞら、天の理をいふ。【一八】反覆 ひつくりかへる。【一九】何所無 無いものなし。【二〇】豈憶 意外といふこと。【二一】當殿羣臣趨 往日の事をいふ、當殿は殿前に當つての義、趨とは小走りをする禮容なり。

【題義】 ほととぎすのうたなり。ほととぎすが昔嘗て天子でありながら今は見るかげもなき姿となれしことをいたむ意を述べたり。上元元年の七月に宦者李輔國兵力を以て脅かして上皇（玄宗）を宮中より西内に移したてまつり、侍從高力士、舊の宮仕への人等を遠ざけ、仙媛・玉眞等の姫宮をも他所へうつす、詩は是等のことについて意を寓したるものなりといへり。或は然らん。但し一一何は何のたとへなどせんぎすべからず、大體玄宗の失位をのべしものとみるべし。上元二年の作ならん。

【詩意】 諸君みたまはざるか、むかしの蜀の天子が今は變化して杜鵑となつて年ふけた鳥に似たものとなつてゐる。さうして寄寓してゐる巣で子を生みながらそれをじぶんで物をくはへてきて養ふことをせす、他の多くの鳥どもがいまも彼のために雛に餌をやつてをる。』杜鵑と羣鳥との關係は君と臣との様でむかしながらの禮があつてそこはゆかしいが、杜鵑の身はみわたすかぎり骨肉はありながら身はひとりぼつちの旅の身の上となつてをる。彼ははやたくみに深き樹木のしげみのなかにかくれ、四月五月のころは尤もよくなきさけぶ、その聲はいたくかなしげで口からは血を流してをる、いかなることを訴へてゐるかとみるといつもつまらぬくだくだしいことをいうてゐる。ほととぎすよ、汝は

いま自分のからだがくだきそこなはれたのではじめて憤りの念をおこしたのか、羽やたちばねはもつてゐるがそれがかへつてはづかしく、また自己の形態のおろかさうなのをかなしんでゐるかの樣である。』天理の變化不測なことはたれがそれを推しはかることができよう。ものごとのひつくりかへることはこれまた有らざるなきものであつて、なんでも一定とはゆかぬものだ。このみすぼらしいほととぎす、これがありしむかしには、そのごてんの前で羣臣が小走りをして尊敬をしてゐたものであるとはだれがかんがへることができようぞ。』

逢（一）唐興劉（二）主簿弟（三）

唐興の劉主簿弟に逢ふ

分手開元（四）末。連年絕尺書（五）。
（六）江山且相見。戎（七）馬未安（八）居。
（九）劍外官（一〇）人冷（一一）。關（一二）中驛騎（一三）疎（一四）。
輕舟下吳會（一五）。主簿意何如。

手を分つ開元の末、連年、尺書絕ゆ。
江山且相見る、戎馬に未だ居を安んせず。
劍外、官人冷なり、關中、驛騎疎なり。
輕舟、吳會に下らむ、主簿意何如。

【字解】【一】唐興　縣の名、今、四川省潼川府蓬溪縣治、成都の東にあたる。【二】劉主簿　主簿の官にある劉某。【三】弟　自己より年少者なるをしたしみていふ。【四】開元　玄宗の年號。【五】尺書　一尺の紙のてがみ。【六】江山　蜀地のそれをいふ。【七】戎馬　兵亂をいふ。【八】安居　おちついて住居する。【九】劍外　劍門のそと、蜀をいふ。【一〇】官人　おやくにん、これは縣令、その屬官、などをさしていふ隋唐間の俗語なりといふ、劉は主簿なれば官卑し。【一一】冷　さびし。【一二】關中　長安地方、東に函谷關、南に武關、西に散關、北に蕭關をひかへたり。【一三】驛騎　しゆくつぎのうま、てがみをもち來るものをいふ。【一四】疎　まばら。【一五】吳會　吳門・會稽、今の江蘇省蘇州府、浙江省紹興府。

【題義】唐興縣の劉主簿にであうたので感をのべたり。けだし劉が成都に來れるならん。上元二年の作。

【詩意】君とは開元の末に手を分つたが、あれからひきつづき手紙もたえてゐた。いまふとこんなばしよでおめにかかるが、自分は兵亂のためにまだおちついてすまふことができずにゐる。君もこんな劍門外の地ではかばかしからぬ官に居られる樣だし、自分もまちどほしくおもつてゐる長安とのたよりの驛馬のまれなのにこまつてゐる。小舟をうかべてこれから江南の地方へくだらうかとおもふが、君のおかんがへはいかがでござるか。

敬簡（一）王（二）明府

敬みて王明府に簡す

（三）葉縣郎官宰。（四）周南太史公。
（五）神仙才有數（六）。流（七）落意無窮。
（八）驥病思偏（九）秣。鷹秋怕（一〇）苦籠。

葉縣郎官の宰、周南の太史公。
神仙、才、數有り、流落、意窮り無し。
驥病みて思ふは偏に秣なり、鷹秋にして怕る苦だ籠。

（一一）看君用（一二）高義。恥（一三）與（一四）萬人同。　看る君が高義を用ふる、萬人と同じきを恥づることを。

【字解】【一】簡　てがみをやる。【二】王明府　王は王潛、唐興縣の縣令、明府は縣令の敬稱。【三】葉縣郎官宰　縣令の故事なり。二重に用ひ、王潛がことをいふ、後漢の王喬、葉縣の令となり、神術あり、卽ち古の仙人王子喬のうまれかはりなりと、後漢の明帝のとき湖陽公主、その子のために郎（官名）を求む、明帝曰く、郎官は、上、列宿に應ず、出でては百里に宰たり、と。王潛は郎官よりいでて縣令となりしとみえたり。【四】周南太史公　此句は自己をさす、司馬遷が父太史公司馬談周南に留滯して漢家封禪の事にあづかるを得ず、周南とは洛陽地方をいへり、これは作者成都に留滯せるゆゑその事のみをとりて太史公に比せしなり。【五】神仙　此句王潛をいふ。【六】數　定數、命數。【七】流落　おちぶれる、此句自己をいふ。【八】驥病二句　自己をいふ。【九】思偏秣　偏思秣といふべきを倒にいへり。【一〇】怕苦籠　苦怕籠といふべきを倒さにいへり。【一一】看君　看は作者がみるなり、君以下二句は王潛についていへり。【一二】用高義　自己の貧窮を救うてくれることをさす。【一三】恥　王潛がはづるなり。【一四】與萬人同　凡人同樣なること。

【題義】唐興縣の縣令王潛にやつたてがみ。作者は潛がため別に唐興縣客館記なる文を撰したり。詩は上元二年秋の作ならん。

【詩意】葉縣の郎官出身の長官といふべきあなた。周南に留滯してゐる太史公ともいふべきわたくし。あなたは神仙の如く、その才に定命をもつてうまれてこられた。わたくしはおちぶれてゐるそのこころもちはさいげんなくあはれである。千里の馬も病んではその思ふ所はただただ秣のうへにあるし、鷹は秋にあたつてはなはだ籠のなかにおかれることをおそれてゐる。わたくしはあなたがわたくしに對しては特別に高義を施してくれられることと信じてゐる。あなたはきつと義を施すに當りて凡人と同樣であることを恥としてをられることとおもふ。

重簡王明府

重ねて王明府に簡す

（一）甲子（二）西南異。冬來只（三）薄寒。　甲子、西南異なり、冬來只薄寒。

江雲何夜盡。蜀雨幾時乾。　江雲何の夜か盡きむ、蜀雨幾時か乾かむ。

（四）行李須（五）相問。（六）窮愁豈有（七）寬。　行李須らく相問ふべし、窮愁豈に寬なる有らむや。

君聽鴻雁響。（八）恐致（九）稻粱難。　君聽け鴻雁の響、恐らくは稻粱を致すこと難きならむ。

【字解】【一】甲子　一歲のめぐりをいふ。【二】西南　蜀の地をさす、都よりいふ。【三】薄寒　うすいさむさ。【四】行李　行理と同じ、使者のこと。【五】相問　こちらをたづれること。【六】窮愁　逆境に居るうれひ。【七】寬　くつろぐこと。【八】恐　作者がおそれる。【九】粱　よきこめ。

【題義】前に手紙をやつたがききめがなかつたものか、二どめに王潛にやつたてがみ。食糧をめぐんでくれといふなり。上元二年冬の作。

【詩意】西南の地方は歲のめぐりあひも北方とちがひ、冬からかけてただうすざむである。江にみえてゐる雲はいつの夜になつたらつきるのか、ここの雨はいつになつたら乾くのであるか。あなたからもはやおたづねのお使ひがきてもよいはずとおもふ、わたくしのうれひはいつとてくつろいだためし

とてはござりませぬ。鴻雁のなくねをおききくだされ。恐らく彼の鳥も稻粱のたべものを得ることがむつかしいというてないてゐるのでござりませう。

百憂集行（一）

百憂集行

憶年十五心尙孩（二）。　憶ふ年十五心尙孩なり、

健如黃犢（三）走復來。　健、黃犢の如く走りて復た來る。

庭前八月梨棗（四）熟。　庭前八月、梨棗熟す、

一日上樹能千迴。　一日、樹に上ること能く千迴す。

卽今倏（五）忽已五十（六）。　卽今倏忽已に五十、

坐臥只多少行立。　坐臥只多く行立少し。

强將笑語供主人（七）。　强ひて笑語を將て主人に供す、

悲見生涯百憂集。　悲み見る生涯、百憂の集るを。

入門依舊四（八）壁空。　門に入れば舊に依つて四壁空し、

【字解】〔一〕百憂集行　百憂の集まることをかなしめるうた。本文中の「百憂集」の三字をとりて題とす。〔二〕孩　げら笑ひするこども。〔三〕犢　こうし。〔四〕棗　なつめ。〔五〕倏忽　たちまち。〔六〕五十　上元二年辛丑、作者五十歳なり。〔七〕主人　世話になる人、上元二年三月より十一月まで崔光遠成都尹たり、主人は崔光遠をさす、光遠無學にして作者之と相合はざりしもののごとし。〔八〕四壁空　四方の壁のみありて他になにものもなし。

老妻覩我顏（九）色同。　老妻我を覩て顏色同じ。

癡（一〇）兒不知父子禮。　癡兒は知らず父子の禮、

叫怒索飯啼門東（一一）。　叫怒、飯を索めて門東に啼く。

【九】顏色同　どちらも心配さうなかほをしてゐること相同じ。【一〇】癡兒　ちゑづかぬこども。【一一】門東　庖廚の門は東にありといふ。

【題意】さまざまの心配ごと一身に集ることをなげくうたなり。上元二年の作。

【詩意】おもひおこす十五歳ばかりのころ自分は心がをさなくて、身の達者なことは黃色の小うしの如くあちらへ走つてはまたこちらへかけてきた。八月にはにはさきに梨やなつめの實が熟する、すると一日に千たびぐらゐはその樹に平氣でのぼつた。』がいまはたちまち已に五十の老人となつて、坐したり臥したりすることは多いが、あるいたり立つたりすることは少くなつた。そしてむりに笑ひばなしをすることを土地の主人にささげてをるが、わが生涯には實にさまざまの心配事が集つてゐるのを悲みながら見るのである。』わがやの門內に入つてみれば四方の壁が立つてをるばかり無一物である、老いたる妻はわが顏を見るが、我も彼の女もただ同じ樣に心配さうなかほつきしてゐるばかりである。我我のこの心をも知らずに頑是ないこどもは親子の禮をもわきまへず、怒りさけんでごはんをせがんでだいどころの門の東の方でなきたててゐる。』

徐(一)卿二子歌

君不見徐卿二子生絶(二)奇。
感(三)應吉(四)夢相追(五)隨。
孔子釋氏親(六)抱送。
竝是天上麒(七)麟兒。
大兒九齡色淸(八)徹。
秋水爲神玉爲骨。
小兒五歲氣(九)食牛。
滿堂賓客皆回(一〇)頭。
吾知徐(一一)公百(一二)不憂。
積(一三)善袞(一四)袞生公侯。
丈夫生兒有如此二雛者。
異時(一無此二字)名(一五)位豈肯卑(一六)微休。

徐卿の二子の歌

君見ずや徐卿の二子生れて絶奇なり、
感應して吉夢相追隨す。
孔子釋氏親ら抱き送る、
竝に是れ天上の麒麟兒なり。
大兒は九齡、色淸徹、
秋水を神と爲し玉を骨と爲す。
小兒は五歲、氣牛を食ふ、
滿堂の賓客皆頭を回らす。
吾知る徐公百憂へず、
積善袞袞、公侯を生む。
丈夫、兒を生む、此の二雛の如き者有り。
異時名位豈に肯て卑微にして休まむや。

【字解】〔一〕徐卿　西川兵馬使徐知道をいふか、卿は敬稱、其名は詳ならず。〔二〕絶奇　はなはだ非凡。〔三〕感應　靈氣に感じ應ぜらるる。〔四〕吉夢　母體懷姙のよきゆめ。〔五〕追隨　ひきつづく、卽ち下の孔氏釋氏云云のこと。〔六〕親抱送　孔子・釋氏がそれぞれみづからそのこどもを抱いて送つてくれた。〔七〕麒麟兒　梁の徐陵年數歲なりしとき家人たづさへて寶誌上人に謁す、上人その頂をなでて曰く天上の石麒麟なりと、徐卿が子ゆゑ徐陵の故事を用ひたり。〔八〕淸徹　すみわたる。〔九〕氣食牛　「尸子」に曰く、虎豹之駒、雖未成文、已有食牛之氣」と。〔一〇〕回頭　ふりかへつてみる。〔一一〕徐公　徐卿。〔一二〕百不憂　百事につけて心配なし。〔一三〕積善　善行をつむ。〔一四〕袞袞　絶えざる貌。〔一五〕名位　名譽官位、二雛のそれをさす。〔一六〕卑微　いやしく、かすか。

【題意】徐氏の二人の小兒を見て之をほめたたへて作れる歌。上元二年の作。

【詩意】諸君見られよ、徐君のふたりの子供は生れながら非常なものである。すなはちこの子供は靈氣に感じてひきつづきよき夢が結ばれたのである。孔子が先づ長男を抱き送り、つぎに釋氏が次男を抱き送つてくれたのだ。だからふたりとも天上の麒麟兒といふべきものだ。』大きな兒はここのつで顏色すきとほり、秋の水を精神とし玉を骨としてをる樣にみえ、小さい方の兒は五歲だがはや牛を食はんとする虎豹のやうな氣をふくんでゐる、それで一堂のおきやくたちはみんなふりむいてこの子供の方をながめるのである。』わたしは徐君はもはや何等の心配ごとがないものとおもふ、なぜならば君は善行をつまれてたえずつづいて公侯となるべきものをうみだされたのである。丈夫たるもの已にこのふたりのこどもの樣な兒を生んだうへは、このこどもの將來うくる名譽官位はどうしてつまらぬ

ところでやむことがあらうぞ、必ず顯赫たる地位にのぼるにきまつてゐる。

戲作花卿歌（一）（二）

戲れに花卿の歌を作る

成都猛將有花卿。
成都の猛將、花卿有り、

學語小兒知姓名。（三）
學語の小兒も姓名を知る。

用如快鶻風火生。（四）（五）
用、快鶻の如く風火生ず、

見賊惟多身始輕。（六）
賊を見る惟多ければ身始めて輕し。

綿州副使著柘黃。（七）（八）（九）
綿州の副使、柘黃を著く、

我卿掃除卽日平。（一〇）（一一）（一二）
我が卿掃除して卽日に平ぐ。

子璋髑髏血模糊。（一三）（一四）
子璋の髑髏血模糊たり、

手提擲還崔大夫。（一五）（一六）（一七）
手づから提げ擲還す崔大夫。

李侯重有此節度。（一八）（一九）
李侯重ねて此の節度有り、

人道我卿絕世無。（二〇）
人は道ふ我が卿、絕世無し。

既稱絕世無。
既に絕世無しと稱す、

天子何不喚取守東都。（二一）
天子何ぞ喚び取つて東都を守らしめざる。

【字解】【一】戲作　戲れの意は末の二句にあり、表面すこぶる花卿をほめしに似たれども其實然らず、故に「戲」といふ。【二】花卿　花驚定（驚一に敬に作る）がこと。上元二年四月、梓州の刺史段子璋反し、東川節度使李奐を綿州に襲ひ、自ら梁王と稱し、黃龍と改元し、綿州を以て黃龍府となし、百官を置く。五月、成都尹崔光遠、將花驚定を率ゐ、攻めて綿州を拔き、子璋を斬る。これ本詩にのぶる所の事なり。驚定は子璋を誅せしのち大に東蜀を掠めたり、天子、光遠が軍を戢むる能はざるを怒りて之を罷む。驚定はかかる惡將なれども詩は子璋の反を平げし點についてのみいへるなり。【三】學語小兒　はじめてはなしのけいこをするこども、幼兒をいふ。【四】快鶻　快ははやきこと、鶻は「たか」のたぐひ。【五】風火　風にあふられる火、勢の猛なるをいふ。【六】惟多始身輕　賊が多ければやつと身をかろくはたらかす。【七】綿州副使　副使は節度使の副使をいふ、段子璋は梓州の刺史なれども副使を領して綿州に據りて反したるにより之を綿州副使とよべるならんか。【八】著　つく、きること。【九】柘黃　天子の御衣の色、柘は或は赭に作るべしといへり、赭は赤と黃とのまざりの色。【一〇】我卿　花卿をさす、我とは之を親しむ辭なり。【一一】掃除　騷亂をはききよめる。【一二】卽日　叛のあつたそのひ。【一三】髑髏　むくろ。【一四】模糊　もちやもちや。【一五】手提　むくろをひつさげる。【一六】擲還　なげうちてかへす、主將のところへやる。【一七】崔大夫　崔光遠。【一八】李侯　侯は敬語、東川節度使李奐をいふ。【一九】重有　李奐は反亂起りて成都に奔り、亂平ぎてまた綿州へもどる、よつて「重れて有す」といふ。【二〇】人道　一般の人人がいふ。【二一】守東都　東都は洛陽なり、時に賊史思明洛陽に據れり、かく言ふことが本意からいふのでなき故に「戲れ」といふなり。

【題義】成都の武將花驚定なる者が綿州の反亂を平げしことをほめて戲れに作りたる歌なり。上元二年の作。

【詩意】成都のつよい大將に花卿といふのがある。彼の姓名はやつとことばをあやつるこどもでも知つてをる。彼は之を用ふればすばやい鶻の如くうごき、そのはげしきことは風にあふらるるほのほの生ずるごとくである。賊を見てもあひてが多いときはじめて身がるにはたらきだす。このたび綿州の

副使と稱する段子璋が謀反して天子の御衣と同色のきものをきたときに我が花卿はそのさわぎをはききよめてその日のうちに之を平らげてしまつた。』彼は血のもちやもちやしたたる子璋のむくろを手づから提げて之を主將たる崔大夫のもとへなげうちかへした。之がため一度は逃げだした綿州の李節度もふたたび節度の職を有するに至り、人人は我が花卿のごときものは世にたえて無きものだといふてゐる。(以下が戲意なり)そんなに世に無い武將だといふならば、天子におかせられてはなぜに彼を喚びとつて東都洛陽をお守らせにならぬのであるか。お守らせになつたがよろしからうものを。(ほめながらあざわらひしなり)

贈花卿

錦城絲管日紛紛。
半入江風半入雲。
此曲祇應天上有。
人間能得幾回聞。

花卿に贈る

錦城の絲管日に紛紛たり、
半は江風に入り半は雲に入る。
此曲祇應に天上に有るなるべし、
人間能く幾回か聞くことを得む。

【字解】【一】花卿　前詩の花驚定なり。【二】錦城　錦官城、成都の少城。【三】絲管　いとたけのおと。【四】紛紛　おとのみだれたつさま。【五】入江風　清さをいふ。【六】入雲　高さをいふ。【七】祇　只。【八】天上有　天上の仙人界に有るもの。【九】能得幾回聞　いくたびきけるものか、めつたにきけぬ。

【題意】花驚定武功を恃みて驕り天子の用ひらるる如き音樂を爲したるにより、作者この詩を作りて之を諷したるなり、とは舊說の言ふ所なり。余が疑ふ所は、諷したるものならばこれも戲贈花卿といふべきにしかいはざること是なり。或は一時の興をうたひしに止まるものに非ざるか。上元二年の作。

【詩意】錦官城の絲竹の音は毎日にぎやかにおこる。その音は半は江風に入りて淸く、半は雲中に入りて高し。かかる曲は天上界の有たるべきものであるであらう、どうして人間界でなんべんもきくことのできるわけのものではないのである。

少年行二首

莫笑田家老瓦盆。
自從盛酒長兒孫。
傾銀注玉驚人眼。
共醉終同臥竹根。

少年行　二首

笑ふ莫れ田家の老瓦盆、
自ら從す酒を盛りて兒孫を長ずるに。
銀を傾け玉に注ぐ人の眼を驚かすも、
共に醉ひ終に同じ竹根に臥するに。

【字解】【一】田家　農家。【二】老瓦盆　年數を經た瓦の鉢。【三】從　まかす。【四】長　生長。【五】傾銀注玉　銀樽を傾け玉杯にそそぐ。【六】共醉　彼も我もともによふ。【七】臥竹根　竹の根もとに醉臥す。

【題意】少年に示すためにつくりたるうた。この第一首は貴族子弟に貧家の樂みを語るなり。上元二

年夏の作。

【詩意】諸君はこの農家につかひふるした瓦の鉢をわらひたまふな。この鉢でもそれに酒をもつてのみながら兒や孫を生長させてゆくにさしつかへはないものでござるぞ。諸君は酒をのむとき銀の樽を傾け、玉の杯についでのまれる、その器のうるはしいことは衆人の眼を驚かすに足る。しかし諸君も自分もともによへば結局は同じ樣に竹の根もとに臥てしまふにかはりはないではないか。

〔二〕

(一)巢燕引雛(二)渾去盡。
(三)江花結(四)子(五)也(六)無多。
(七)黃衫年(八)少來宜(九)數。
(一〇)不見堂前(一一)東逝波。

〔二〕

巢燕、雛を引きて渾て去り盡す、
江花は子を結びて也多無し。
黃衫の年少來ること宜しく數すべし、
見ずや堂前東逝の波を。

【字解】〔一〕巢燕　すごもりのつばめ。〔二〕渾　すべて。〔三〕江花　かはべりの樹の花。〔四〕子　實。〔五〕也　亦。上句の去盡に對して、亦といふ。〔六〕無多　花多からぬをいふ。〔七〕黃衫　きいろのうはぎ、貴族子弟のきもの。〔八〕年少　少年に同じ。〔九〕數　たびたび。〔一〇〕不見　君不見乎に同じ。〔一一〕東逝波　波とは水流をいふ、水は東方に向つてながれゆく、支那にて水流は時間のすぎ去るにたとふ。

【題義】少年に向つて行樂をすすむるうたなり。

【詩意】巢ごもりのつばめは雛をひきつれてみんな去つてしまつた。江べりの花も大抵實をむすんでのこつてゐる花はいくらもない。時間はこんなにはやくたつ。黃衫を著た少年らよ、わたしのところへたびたびあそびに來なさるがよい。わが家の前の東に流れ去る水の波をごらんなさい。わかい時はつかのまだ。今のうちにたのしみなさい。

贈虞(一)十五司馬

(二)遠師(三)虞祕監。今喜識(四)玄孫。
(五)形象(六)丹青逼。(七)家聲(八)器宇存。
(九)淒涼憐(一〇)筆勢。(一一)浩蕩問(一二)詞源。
(一三)爽氣(一四)金天豁。(一五)清談(一六)玉露繁。
(一七)佇鳴(一八)南嶽鳳。欲化(一九)北溟鯤。
(二〇)交態知(二一)浮俗。(二二)儒流不(二三)異門。
(二四)過逢(二五)連客位。日夜倒芳樽。
(二六)沙岸風吹葉。雲江月上軒。

虞十五司馬に贈る

遠く虞祕監を師とす、今喜ぶ玄孫を識るを。
形象、丹青に逼る、家聲、器宇存す。
淒涼、筆勢を憐む、浩蕩、詞源を問ふ。
爽氣、金天豁なり、清談、玉露繁し。
鳴かむと佇つ南嶽の鳳、化せむと欲す北溟の鯤。
交態、浮俗を知る、儒流、門を異にせず。
過逢、客位に連り、日夜、芳樽を倒す。
沙岸風葉を吹く、雲江月軒に上る。

百年嗟已半。四座（二七）敢辭喧（二八）。
書籍（二九）終相與。青山隔故園（三〇）。

百年嗟已に半なり、四座敢て喧しきを辭せむや。書籍終に相與にせむ、青山、故園を隔つ。』

【字解】【一】虞十五司馬　司馬の官にある虞某。【二】遠師　師とは其の書法を師とすること。【三】虞秘監　虞世南なり、世南は餘姚の人、唐の太宗の朝に秘書監となり永興縣子に封ぜらる、世南に五絶あり、其の第四は文詞、第五は書翰（文字をかくこと）なり。歿後太宗勅して其像を凌煙閣にゑがかしむ。【四】玄孫　虞司馬は世南五代の孫にあたる。【五】形象　虞司馬のかたち。【六】丹青　畫にかかれたる虞世南。【七】家聲　虞氏一家の評判。【八】器宇　其人の人物器量。【九】淒涼　ものがなしきさま、世南の書法漸く世に絶えんとすればなり。【一〇】筆勢　即ち書翰。【一一】浩蕩　大なる貌。【一二】詞源　文詞の生ずる淵源。【一三】爽氣　さわやかな氣象。【一四】金天澹　秋のそらのすみわたるごとくひろし。【一五】清談　俗塵のけがれなきはなし。【一六】玉露叢　白玉の露のこぼるるごとくしげし。【一七】佇　待つ。【一八】南嶽　衡山なり。【一九】北溟鯤「莊子」に北溟有魚、名曰鯤、化爲大鵬」とみゆ、「爽氣」以下四句は司馬をほめていふ。【二〇】交態　人人の交際するさま。【二一】浮俗　輕薄な世俗。【二二】儒流　學者のなかま。【二三】不異門　互に交通して一家の如くなるをいふ。【二四】過逢　虞家に至り之にあふこと。【二五】連客位　おきやくとしての席につらなる。【二六】沙岸二句　浣花溪附近のさま。【二七】四座　一座滿座に同じ。【二八】喧　かまびすし、にぎやかなること。【二九】書籍終相與　後漢の蔡邕、王粲が年少にして文才あるを愛し「吾が家の書籍文章は盡くまさに之に與ふべし」といひしといふ。しからば「與」の字「あたふ」とよむべきに似たるも相與とあれば「あひともにする」義なり、通借の義なり、故事に拘泥すべからず。【三〇】故園　兩京をいふ。

【題意】司馬虞某にあひて之に贈れる詩。上元二年の作。

【詩意】自分は書法では遠く秘書監虞世南公を師としたものであるが、今公の玄孫にあたるあなたをしつたことはうれしいことである。あなたのかたちは畫にある公にせまつてをり、さすが評判のおいへがらであなたにはそのお家すぢだけの器量がそなはつてゐる。わたしは祕監公の筆法がすたれかかつてをるのをあはれにおもひ、またあなたについて御先代の文詞の淵源する所をおたづねする。あなたは氣象さわやかにして秋の天のひろきがごとく、はなし俗氣なくして白玉の露のこぼるるに似たり、あなたは機を得て鳴かんとする南嶽の鳳鳥のごとく、まさに大鵬に化せんとする北溟の鯤の樣なものである。』我我は世間の交際ぶりに於て輕薄な世俗がどんなものであるかを知つてをる。この間に於て我が家とあなたの家とは同じく儒家の流れであり門をことにしたものではない。その縁故からかあなたにおあひして自分はその賓客としての座席につらなり、日となく夜となくかんばしき酒樽を飲み倒してゐる。このとき川の沙しく岸では風が樹の葉を吹き、雲のよこたはる江では月がでてのきばへとさしかかる。ああ自分はもはや百年の半に達した、この一座に於てのんでにぎやかにし豪興をきはむることは辭する所ではない。而して終局のところは故郷にかへつて書籍でも流通して讀みたいとおもふが、遺憾ながら青山がとほく故園をへだてていまは急にかへることはできぬ。』

病柏

有柏生崇岡（一）。童童（二）狀（三）車蓋。

病柏

柏有り崇岡に生ず、童童、車蓋に狀たり。

(四)偃蹇龍虎姿。主(五)〔正〕當風雲(六)會。　偃蹇たり龍虎の姿、主〔正に〕風雲の會に當る。
(七)神明依(八)正直。故(九)老多再拜。　神明、正直に依る、故老多く再拜す。
豈知千年根。中(一〇)路顏色壞。』　豈に知らむや千年の根、中路、顏色壞る。』
(一一)出非不得地。(一二)蟠據亦高大。　出づること地を得ざるに非ず、蟠據亦高大なり。
(一三)歲寒忽無(一四)憑。日夜(一五)柯葉改。　歲寒忽ち憑る無し、日夜、柯葉改まる。
丹鳳領九雛。哀鳴翔其外。　丹鳳、九雛を領し、哀鳴其の外に翔ける。
(一六)鴟鴞(一七)志意滿。養子穿穴內。』　鴟鴞、志意滿つ、子を養ふ穿穴の內。』
(一八)客從何鄉(一九)來。佇立久(二〇)吁怪。　客何の鄉より來れる、佇立して久しく吁怪す。
靜求(二一)元精理。(二二)浩蕩難(二三)倚賴。』　靜に元精の理を求むるに、浩蕩として倚賴し難し。』

【字解】【一】崇岡　たかいをか。【二】童童　こんもりとした貌。【三】狀　似たり。【四】偃蹇　うれる貌。【五】主當　主の字正に作れる本あり、從ふべし。【六】風雲　風や雲のであふなり、樹色の陰森たるをいふ。【七】神明　神の力。【八】正直　樹木のまつすぐなこと。【九】故老　としより。【一〇】中路　なかほど。【一一】出　生出。【一二】蟠據　わだかまり、よる。【一三】歲寒　年末、冬がれ。【一四】無憑　たよるところなし。【一五】柯　えだ。【一六】鴟鴞　ふくろふのたぐひ。【一七】志意滿　得意。【一八】客　たび人、自己をさす。【一九】佇立　たたずむ。【二〇】吁怪　なげきあやしむ。【二一】元精理　宇宙間の元氣の道理、天道の理。【二二】浩蕩　大なる貌、とりとめなきさまをいふ。【二三】倚賴　たよりとする。

【題義】柏樹のやめるものを詠ず、けだし「古柏行」のごとく暗に自己の境遇を比す。上元二年秋以後の作。この病柏・病橘・枯椶・枯柟は殆ど同時の作なるべし。

【詩意】たかい岡に柏の樹がはえてゐて、それがこんもりして車の傘のやうだ。そのうねりくねつた姿は龍か虎のやうであつて、ちやうど風雲の生ずる機會にであうたのだ。さうしてその樹のまつすぐなところへ神明の力ものりうつつたので、老人たちも多くこの樹を見ては再拜したものである。『ところが意外にもこの千年の根が中途で顏つきがくづれてしまつた。』この樹の生ひ出した場所は不適當であつたのでなく、生長して蟠據したことも高大であつたが、冬枯れになつて忽ちたよるところをうしなひ、日となく夜となく枝や葉がこれまでとはかはつてわるくなつてきた。鳳凰は九つのひなをひきつれて、かなしげに鳴いてこの樹のそとにかけつてゐる、之に反して鴟鴞の惡鳥は得意になつて穿たれた穴の內で子をやしなつてをる。』どこともなくたびびとがやつてきた、彼はこの樹のところにたたずんで久しくふしぎがりなげいた。つらつら天道の理をたづねてみると、こんなことでは天道もとりとめなくあまりあてにならぬものである。』

病橘(一)

羣橘少生意。雖多亦(二)奚爲。　羣橘、生意少し、多しと雖も亦奚をか爲さむ。

惜哉結實小。酸澀如棠梨。　惜しい哉結實小なり、酸澀、棠梨の如し。
剖之盡蠹蝕。采掇爽所宜。　之を剖けば盡く蠹蝕す、采掇宜しき所に爽ふ。
紛然不適口。豈只存其皮。　紛然口に適せず、豈只其皮を存するのみならむや。
蕭蕭半死葉。未忍別故枝。　蕭蕭たり半死の葉、未だ枯枝に別るるに忍びず。
玄冬霜雪積。況乃廻風吹。　玄冬、霜雪積む、況んや乃ち廻風の吹くをや。』
嘗聞蓬萊殿。羅列瀟湘姿。　嘗て聞く蓬萊殿、羅列す瀟湘の姿。
此物歲不稔。玉食失光輝。　此物、歲に稔らざれば、玉食、光輝を失ふと。
寇盜尚憑陵。當君減膳時。　寇盜尚憑陵たり、君が減膳の時に當る。
汝病是天意。吾愁罪有司。　汝が病むは是れ天意なり、吾は愁ふ有司を罪せむことを。
憶昔南海使。奔騰獻茘支。　憶ふ昔南海の使、奔騰、茘支を獻す。
百馬死山谷。到今耆舊悲。』　百馬、山谷に死す、今に到つて耆舊悲む。』

【字解】【一】橘　みかんの樹。【二】羣橘　多くの橘樹。【三】奚爲　何爲に同じ、無用なるをいふ。【四】棠梨　「やまなし」のたぐひ。【五】剖　さく。【六】蠹蝕　むしくひ。【七】采掇　とる。【八】爽　差ふなり、爽所宜とはとつてもよくないといふなり。【九】不適口　うまくない。【一〇】豈只存其皮　舊解に皮を橘實の皮とし藥品に入れ用ふなどととけるが恐くは通ぜず。皮は橘樹の皮をさし、樹の病容をいふ。此句は下句の「半死葉」へかかる句なり。【一一】玄冬二句　節候を敍したるなり。【一二】蓬萊殿　長安の殿の名。【一三】羅列　つられる。【一四】瀟湘姿　瀟湘は湖南にある川の名、その地方美橘を産す。【一五】此物　橘をさす。稔みのる。【一六】玉食　天子の御食物。【一七】寇盜　安・史の逆賊等。【一八】憑陵　邪氣のさかんなる貌。【一九】減膳　天子は國家に災あれば自己を節し膳部の品かずをへらす。【二〇】汝　橘をさす。【二一】罪有司　橘を地方から貢獻すべきによい橘が無きときはかかりの役人が罰せられる。【二二】南海使　以下は唐の楊貴妃が茘支を好みて蜀の涪州より子午谷をへて驛馬にてそれを長安へとりよせしことをいふ。南海使とは唐の事にはあらず、後漢の和帝の時、南海（今の廣東地方）よりしゆくつぎにて龍眼・茘支をたてまつりしことあり、それをひとつことにして言ひなしたり、實は唐のことをいふなり。【二三】奔騰　驛馬がはしりをどりあがる、大いそぎにて馬をかけさすをいふ。【二四】茘支　龍眼肉に似た果實。【二五】百馬　多くの馬。【二六】耆舊　老人。

【題義】橘樹の病めるものについてよめり。

【詩意】多くの橘樹がみな生き生きしたこころもちがすくない。これではいくら多くあつたところでどうなるものか、やくにたたぬ。をしいことにむすぶ實は小さくて、すつぱく、しぶいことはやまなしに似てゐる。それをわつてみるとみんなむしくひで、せつかくとつてもぐあひがわるい。どれもどれも口にはあはぬ。こんな實のなる樹が今は樹に皮がくつついてゐる。皮ばかりでない、さびしげな半死の葉もまだもとの枝に別れるに忍びぬといつたやうにくつついてゐる。その時は冬の霜雪が積つたときで、そのうへ吹きまはす風が吹きつつあるころなのであるのに。』自分はかつて聞いてゐる、蓬萊殿では南方の瀟湘の地方で產した橘のすがたがならべられる、この物がみのりのわるい歲には

天子の御食物もひかりを失ふのありさまだといふことを。今や盜賊等がまだはびこつてをり、天子が御膳部を減せらるべき時節にあたつてゐる。このをり汝橘樹が病氣にかかつたのは天のおぼしめしである、ただ自分はそれがためよい橘の實がたてまつられず、かかりの役人が罰せられはせぬかと心配するのである。（それはあまりにむごいことだ。）いまもおもひだすが、まへがた南海の使が馬をはしらせて茘支をたてまつつたことがある、そのときはしゆくつぎのたくさんの馬が途中の山や谷でのたれ死にをした、いまもなほ老人たちはそのことをいひだしては悲んでゐるのである。（獻上物のために吏民をくるしませてはならぬ。）』

枯椶

蜀門多椶櫚。高者十八九。
其皮割剝甚。雖衆亦易朽。
徒布如雲葉。青青歲寒後。
交橫集斧斤。凋喪先蒲柳。』
傷時苦軍乏。一物官盡取。
嗟爾江漢人。生成復何有。
有同枯椶木。使我沈嘆久。
死者卽已休。生者何自守。』
啾啾黃雀啄。側見寒蓬走。
念爾形影乾。摧殘沒藜莠。』

枯椶

蜀門、椶櫚多し、高き者は十八九。
其皮割剝甚し、衆しと雖も亦朽ち易し。
徒に雲の如き葉を布く、青青たり歲寒の後。
交〻橫はりて斧斤を集む、凋喪、蒲柳に先つ。』
傷む時の軍乏に苦み、一物も官盡く取ることを。
嗟爾江漢の人、生成復何か有る。
枯椶の木に同じき有り、我をして沈嘆すること久しから「しむ。」
死せる者は卽ち已に休せり、生者は何ぞ自ら守らむ。』
啾啾として黃雀啄む、側に寒蓬の走るを見る。
念ふ爾が形影乾きて、摧殘せられて藜莠に沒せむことを。』

【字解】【一】蜀門　蜀の地をさす。【二】椶櫚　「しゆろ」の木。【三】十八九　十中の八九。【四】割剝　さきはぐ。【五】衆　樹の多きこと。【六】布　敷に同じ。【七】如雲葉　ひろがつた葉をいふ。【八】歲寒　冬がれ。【九】交橫　葉影がみだれよこたはるをいふ。【一〇】集斧斤　をの、まさかりがこの樹に向つて集められる。【一一】凋喪　しぼみ、うしなはれる。【一二】蒲柳　かはやなぎ。【一三】傷　作者が心中にいたむ。【一四】時　時世をいふ。【一五】軍乏　軍需の缺乏。【一六】江漢　蜀の地をさす。【一七】生成　耕作してでかした物をいふ。【一八】同枯椶木　このしゆろがきりとらるるとおなじやうに物をとりあげられる。【一九】沈嘆　しづみなげく。【二〇】死者　死んだ人。【二一】生者　生存してゐる人。【二二】自守　守とは維持してゆくをいふ。【二三】啾啾　とりのなくこゑのさま。【二四】啄　物をついばむ。【二五】寒蓬　冬がれのよもぎの葉、「啾啾」二句は黃雀の居る場所をいふ、卽ち下の藜莠といふとおなじ、仇注に雀啄椶毛云云といへる說は余之を取らず。【二六】爾　しゆろをさす。【二七】藜莠　あかざ、わるいくさ。

【題義】かれた「しゆろ」の樹についてよめり。人民の誅求されることをあはれむなり。

【詩意】蜀の地には「しゆろ」が多く、高きものが十中に八九である。その皮はひどくはがれる、それ

で樹は多くてもすぐに朽ちやすい。冬枯れののちに雲の如くひろがつた葉を青青と敷いてはゐるが、そのみだれた葉影に向つて斧や斤が集中され、蒲柳にさきだつてこの樹はしぼみなくなつてしまふ。』自分は心にいたむ、今の時世は非常に軍需の缺乏してゐるときで、一物たりとも官がみな取りあげてしまふ。ああ、なんぢ江漢の流るる蜀地の人民よ、汝等は自分の手で作りあげた物とてはどんなものをもつてゐるか、なにもあるまい、恐くはこの「しゆろ」の運命と同じものが有るであらう。このことが自分をして久しくなげかしめる所以である。こんなことでは死んだ人はそれで終つたとして、まだ生きのこつてゐる人はなにによつて自己を維持してゆくことができようか。』地上で黃雀がちやくちやとなきながら物をついばんでをる。念ふになんぢ「しゆろ」は形影が乾いてしまひ、摧きそこなはれて藜や莠のなかに倒れておちこんでしまふことであらう。

枯柟

楩（一）柟（二）枯崢嶸（三）。鄉黨（四）皆莫記（五）。
不知幾百歲。慘慘（六）無生意。

枯柟

楩柟枯れて崢嶸たり、鄉黨皆記する莫し。
知らず幾百歲なるを、慘慘として生意無し。

上枝摩蒼天。下根蟠厚地。
巨圍（七）雷霆拆（八）。萬孔（九）蟲蟻萃（一〇）。
凍雨（一一）落流膠（一二）。衝風（一三）奪佳氣（一四）。
白鵠（一五）遂不來。天鷄（一六）爲愁思。
猶含棟梁具（一七）。無復霄漢志（一八）。
良工（一九）古昔（二〇）少。識者（二一）出涕淚。
種楡（二二）水中央。成長何容易。
截（二三）承（二四）金露盤（二五）。裊裊（二六）不自畏（二七）。

上枝は蒼天を摩す。下根は厚地に蟠る。
巨圍、雷霆拆く、萬孔、蟲蟻萃る。
凍雨、流膠を落す、衝風、佳氣を奪ふ。
白鵠遂に來らず、天鷄爲に愁思す。』
猶含む棟梁の具、復霄漢の志無し。
良工、古昔少し、識者、涕淚を出す。
楡を種う水の中央、成長何ぞ容易なる。
截りて金露盤を承けしむ、裊裊として自ら畏れず。』

【字解】【一】楩　くぬぎ。【二】柟　「くす」のたぐひ。【三】崢嶸　たかき貌。【四】鄉黨　鄉黨の人人。【五】記　記憶する。【六】慘慘　みじめ。【七】巨圍　大なるまはり。【八】拆　さく。【九】萬孔　多くのあな。【一〇】萃　あつまる。【一一】凍雨　夏のにはかあめ。【一二】流膠　膠は樹液をいふ。【一三】衝風　はげしいかぜ。【一四】佳氣　よい氣象。【一五】白鵠　しろいおほとり。【一六】天鷄　きじの類。【一七】棟梁具　むなぎ、はり、のうつは。【一八】霄漢志　あをぞら、あまのがはら、をしのぐ志。【一九】良工　よいだいく。【二〇】古昔　むかし、この樹の枯れし時をさす。【二一】識者　この樹の材能を知れるもの。【二二】楡　「にれ」。【二三】截　「にれ」をきる。【二四】承　それでうけさせる。【二五】金露盤　銅で作つた天露をうける大たらひ、漢の武帝神仙の說を信じて仙人の承露盤を作り銅柱を建ててそのうへにおく。【二六】裊裊　なよなよとした貌。【二七】不自畏　自己の弱さ

なおそろゝを知らざるなり。

【題義】かれた「くす」の木のことをよめり。けだし「くす」を以て自ら比す。

【詩意】楩柟の樹が枯れながらもたかくたつてをる。いつかれたのか鄕黨の人人もおぼえてゐぬ。もうなん百年たつか、みじめにも全く生き生きとした意がない。』上の枝はあをぞらをこすり、下の根はあつい大地にわだかまつてゐたが、その大きなまはりの幹は雷霆にさかれ、多くの孔には蟻むしなどがあつまつた。にはか雨は樹のやにしるを落してしまひ、はげしく吹く風は佳い氣象を奪ひとつてしまつた。それで白鵠も來ぬし、天鷄もそのために愁へてをる。』が、まだ棟梁たる器はもつてゐるものの、ふたたび霄漢をしのぐ樣な志は無い。むかしこの樹を知る良工はなかつた、たまに眼識あるものはこの樹を見てなみだをながして之に同情した。』「くす」は材能がありながらこんなだが、楡はどうだ。楡は之を水のまんなかにうゑればたやすく生長する。それを截り、それで銅製の承露盤を承けささへさせる。すると厚顏にも楡はなよなよとしたすがたでとても盤をささへきれぬにきまつてゐる技量でありながらおそるる色もなくその任をなさうとしてゐる。』

不(一)見

不見李(二)生久。佯(三)狂眞可哀。　李生を見ざること久し、佯狂、眞に哀む可し。

世人皆欲殺(四)。吾意獨憐才(五)。　世人皆殺さむと欲す、吾が意獨り才を憐む。

敏(六)捷詩千首。飄(七)零酒一杯。　敏捷、詩千首、飄零、酒一杯。

匡(八)山讀書處。頭(九)白好歸(一〇)來。　匡山讀書の處、頭白好し歸り來れ。

【字解】〔一〕不見　首句の不見李生の不見の二字をとる。〔二〕李生　李白なり、白、夜郞に流されてのちの消息を詳にせず、作者因つて之をおもふ。〔三〕佯狂　いつはりて狂人のまれする。〔四〕殺　白を殺す。〔五〕才　白の才。〔六〕敏捷　すばやし。〔七〕飄零　おちぶれる。〔八〕匡山　白は蜀の綿州彰明縣青蓮鄕の人、縣南に大匡山あり、白の書を讀みし處なりといふ、（一說に彰明縣の匡山には非ずして九江の匡廬山、卽ち廬山のことをいふとなせり。）〔九〕頭白　李白の老いたるをいふ。〔一〇〕歸來　匡山へかへつてこい。

【題義】久しく李白を見ざるによりその身のうへをおもうて作る。上元二年の作ならん。

【詩意】自分は久しく李白にあはぬ。白は狂人のまねをしてをるがじつにきのどくなものである。世間の人は彼をねたんで之を殺さうとまでしてをるが、自分だけは彼の才を愛してをる。彼は詩才すばやくて忽ち千首の詩をつくりだす、それがおちぶれてはただ一杯の酒にうれひをやる。匡山にはむかし書を讀んだところがある。老境となつてははやくそこへ立ちかへつてくるがよいとおもふ。

草(一)堂卽(二)事　草堂卽事

荒村(三)建子(四)月。獨樹(五)老夫(六)家。　荒村、建子の月、獨樹、老夫の家。
雪裏江船渡。風前竹徑斜。　雪裏、江船渡り、風前、竹徑斜なり。
寒魚(七)依密藻(八)。宿雁聚圓沙。　寒魚、密藻に依り、宿雁、圓沙に聚る。
蜀酒禁(九)愁得。無錢何處賖(一〇)。　蜀酒愁に禁へ得、錢無くして何の處にか賖らむ。

【字解】〔一〕草堂　浣花溪の草堂。〔二〕卽事　事につけてそのままのぶ。〔三〕荒村　くさふかき村、浣花村をいふ。〔四〕建子月　肅宗の上元二年九月、詔して上元の號を去りて元年と稱し、十一月を以て歲の首とし、月は北斗の柄の建つ所の辰を以て名とす。建子月の壬午朔日に天子朝賀を受くること元旦の儀のごとし。〔五〕獨樹　一本木。〔六〕老夫　自己をいふ。〔七〕寒魚　ふゆのうを。〔八〕密藻　しげつた水草。〔九〕禁　當の義。〔一〇〕賖　かけ買ひする。

【題義】浣花の草堂にてをりにふれてよめる詩。上元二年十一月の作。

【詩意】時はくさふかき村の建子の月。處は一本木の立つてゐるこのおやぢの家。みれば雪のふるなかに江船がとほり、風の吹くところに竹林のこみちが斜についてゐる。うをは寒さをよけるためにしげつてゐる藻によりそひ、ゆうべからとまつてゐる雁は圓形の沙はらに聚つてゐる。このとき蜀の酒をのめば心配ごとに抵抗するに足るのであるが、錢が無くてはどこで買はう樣もない。

徐九少尹見過(一)(二)

徐九少尹過らる

晚景(三)孤村僻。行軍(四)數騎來。　晚景、孤村僻なり、行軍、數騎來る。
交新徒有喜。禮厚愧無才。　交り新にして徒に喜び有り、禮厚くして才無きを愧づ。
賞靜憐雲竹。忘歸步月臺。　靜を賞して雲竹を憐み、歸るを忘れて月臺に步す。
何當(五)看花蘂(六)。欲發(七)照江梅(八)。　何か當に花蘂を看るべき、發かむと欲す照江の梅。

【字解】〔一〕徐九少尹　少尹徐某なり、成都は南都として都のあつかひをうくる故に府の長に尹が一人、次に少尹が二人おかれた。この詩題には少尹とあつて詩の本文には行軍とあるはその時兵亂のため臨時に兼れしならんといふ。〔二〕見過　よりみちしてくれた。〔三〕晚景　ゆふ日のひかり。〔四〕行軍　行軍司馬の官、徐少尹をさす、事は上にみゆ。〔五〕何當　何は「何ノ時」をいふ。〔六〕花蘂　梅の花をいふ。〔七〕發　開く。〔八〕照江梅　草堂に江にのぞんだところに梅樹あるなり、花さけば江水にうつろふゆゑに照江といふ、末二句は梅花のころまたおいでなさいとのさそひなり。

【題義】成都府の少尹徐某がたづねてくれたについてよめり。上元二年冬の作。

【詩意】夕日のさすころ浣花の孤村はかたよつてゐるのに徐君のおともをして行軍司馬の二三の騎兵がやつてきた。君とはちかごろの交際であるが自分は非常に喜ばしくおもひ、ただその喜びにむくゆることのできないのを氣にしてをる。君は自分に對して禮遇を厚くしてくれるが自分は之に應ずるだけの才の無いのをはづかしくおもうてゐる。君は草堂の景色の靜なのを賞しては雲のよこたはる竹を愛し、家にかへることを忘れては月をながめる臺のうへをあるいたりする。わが草堂の江ぞひの梅も

やがてひらかうとするが、君はいつまたその花を見にきてくださるだらうか。

(一)范二員外邈・(二)吳十侍御郁・特(三)枉駕。(四)闕展待。聊寄此作

范二員外邈・吳十侍御郁・特に駕を枉ぐ。展待を闕く。聊か此の作を寄す

暫往(五)比隣去。空聞(六)二妙歸。　暫く比隣に往き去る、空しく聞く二妙の歸るを。

(七)幽棲誠(八)簡略。(九)衰白已(一〇)光輝。　幽棲誠に簡略なり、衰白已に光輝あり。

野外貧家遠。村中(一一)好客稀。　野外、貧家遠く、村中、好客稀なり。

(一二)論文或(一三)不媿。重肯(一四)款柴扉。　論文或は媿ぢざらむ、重ねて肯て柴扉を款かむや。

【字解】〔一〕范二員外邈　員外は官人の稱。〔二〕吳十侍御郁　侍御史吳郁。作者さきに「吳侍御江上宅」の詩あり。〔三〕枉駕　わざわざたづねてくれる。〔四〕展待　接待する義ならん。〔五〕比隣　隣家をいふ。〔六〕二妙　晉の衞瓘、索靖、倶に草書を善くす、時人之を二妙と號す、ここは范吳の二人をさす。〔七〕幽棲　草堂をいふ。〔八〕簡略　不在なりし故に客に對する禮、疎略なり。〔九〕衰白　自己の老境をいふ。〔一〇〕光輝　先方が來てくれたは自己にとりひかりをそへる。〔一一〕好客　よき賓客。〔一二〕論文　文章のことについて評論する。〔一三〕不媿　先方の期待に對してはぢぬ、自任する所あるなり。〔一四〕款　たたく。

【題義】范邈・吳郁の二人がわざわざたづねてくれたところ、よそへ往つてゐてもてなしの禮をかいたによつてこの詩をつくつてそれを先方へやつた。上元二年の作。

【詩意】自分はちよいと近所へでかけていつた。ところが家へもどつてみればはやおふたりのれきれきがおかへりになつたとのことだ。このわびすまひでは諸君に對しまことに簡略にすぎた、しかしこのおやぢにとつてはじつにひかりをそへたのである。この貧乏家は野外にあつて遠く、村中にはよいお客はめつたにない。もし文章について論せらるるならば或は諸君に媿ぢぬかもわからぬ、どうかもう一度わが柴のとびらをおたたきくださるおつもりはありませぬか。

(一)王十七侍御掄許攜酒至草堂。奉寄此詩。便請邀(二)高三十五使君同到

王十七侍御掄・酒を攜へて草堂に至るを許す。此の詩を寄せ奉り、便ち高三十五使君を邀へて同じく到らむことを請ふ

(三)老夫臥穩朝慵起。　老夫、臥穩にして朝起きるに慵し、

(四)白屋寒多暖始開。　白屋、寒多くして暖にして始めて開く。

江鸛(五)巧當幽徑浴。　江鸛巧に幽徑に當つて浴す、

隣雞還過短墻來。　隣雞還短墻を過ぎ來る。

【字解】〔一〕王十七侍御掄　侍御史王掄。〔二〕高三十五使君　蜀州の刺史高適、使君は刺史の敬稱、適はこのころ何かの事について成都へできてゐたものとみえる。〔三〕老夫　自己をさす。〔四〕白屋　白茅もて

（六）繡衣屢許攜家醞。　繡衣屢〻許す家醞を攜ふるを、
（八）皂蓋能忘折野梅。　皂蓋能く忘れむや野梅を折ることを。
戲假霜威促山簡。　戲れに霜威を假りて山簡を促し、
須成一醉習池迴。　須らく一醉を成して習池を迴るべし。

ふきたるやれの家。【五】鶴　こうのとり。【六】繡衣　御史のきるきもの、王侍御をさす。【七】家醞　てづくりのさけ。【八】皂蓋　くろいろの車蓋、漢制に二千石（地方の長官）は皂蓋、朱、兩幡とみゆ、高適をさす。【九】能忘　能の字反語によむ。【一〇】折野梅　自宅の梅を折りにくるをいふ。【一一】霜威　御史の威をいふ、御史刑罰の權あるにより之を霜の草木をからすに比す、これ王侍御をさす。【一二】山簡　晉の時襄陽を督せし人、襄陽に習氏あり、土豪にして園池あり、山簡つれに池上に至りてあそぶ、之を高陽池とよべりと。【一三】習池　習家の池なり、上にみゆ、これ作者自家の池をあてていへり。

【題義】侍御史王掄が酒をもつて草堂へくることを承諾してゐたについて、此の詩をやり、高適をもついでによんで一しよにきてもらひたいといひやつた詩。上元二年冬成都での作。

【詩意】自分はおだやかに臥てゐられるので朝は起きるのがものうく、この貧乏家屋は寒さが多いから、日がのぼつてあたたかになつてからやつと開くのである。みれば江の鸛がこみちにあたつたところで巧に澣みしてをり、となりの雞もまたひくいかきねをこしてこちらへやつてくる。繡衣を著てゐる王君、君はてづくりの酒をもつてくることをたびたび自分に約束した。皂蓋の車にのつてゐる高君もよもやわしのうちへ野梅を折りにくることを忘れはすまい。これはじようだんながらどうか御史の御威光をかりて山簡ともいふべき高適をうながして、わたしのところで一醉して習池のあたりをめぐるべきではござらぬか。

（一）王竟攜酒。（二）高亦同過。共用寒字

王竟に酒を攜ふ、高亦同じく過る、共に寒の字を用ふ

臥病荒郊遠。通行小徑難。　臥病、荒郊遠し、通行、小徑難し。
（三）故人能（四）領客。攜酒重相看。　故人能く客を領す、酒を攜へて重ねて相看る。
自愧無（五）鮭菜。空煩（六）卸馬鞍。　自ら愧づ鮭菜無きを、空しく煩はす馬鞍を卸すを。
移樽勸（七）山簡。頭（八）白恐風寒。　樽を移して山簡に勸む、頭白恐らくは風寒ならむ。

【原注】高每云、汝年幾小、且不必小於我、故此句戲之。

【字解】【一】王　王掄。【二】高　高適。【三】故人　舊友、王掄をさす。【四】領客　客をひきつれる、客は高適をさす。【五】鮭菜　魚、野菜。【六】卸　おろす。【七】山簡　前詩にみゆ。高適をさす。【八】頭白　適が老いたるをいふ、「原注」の意は、適がふだん作者を年よりといひなれるによつて、作者はこの詩に於て適を老なりといひてたはぶれしなり。

【題義】前詩の結果、王掄はとうとう酒をもつてき、高適もともにやつてきた。みなが「寒」の字をつかつて詩を作つた。卽ちこれである。此詩「風寒」と「寒」の字を用ひたり、王・高もまた然りし

なり。

【詩意】自分の臥てゐるくさむらの野外は城から遠い。自分のところへくるには小みちはとほるにもなんぎである。こんなところへわが舊友（王）はお客（高）をつれて酒をもつてまたやつてきた。自分のところには鮭菜のもてなしの無いことは愧かしい。いたづらに諸君に馬鞍をおろさせただけのことである。時に酒だるを處處に移して高適にすすめる。おまへは年よりで頭が白いから多分風がつめたく感ずるであらう、と。

陪李(一)七司馬。皂(二)江上観造竹橋。即日成。往來之人。免冬寒入水。聊題短(三)作。簡李(四)公

李七司馬に陪し、皂江の上に竹橋を造るを觀る。即日成る。往來の人、冬寒に水に入るを免る。聊か短作を題し、李公に簡す

伐竹爲橋結(五)構同。　竹を伐り橋と爲す結構同じ、
褰(六)裳不渉往來通。　裳を褰げて渉らず往來通ず。
天(七)寒白鶴歸華表。　天寒くして白鶴、華表に歸り、
日落青(八)龍見水中。　日落ちて青龍、水中に見ゆ。
顧(九)我老非題(一〇)柱客。　顧ふ我が老いて題柱の客に非ざるを、
知君(一一)才是濟(一二)川功。　知る君が才是れ濟川の功。
合(一三)歡却笑千(一四)年事。　合歡却つて笑ふ千年の事、
驅(一五)石何時到海東。　驅石何の時か海東に到らむ。

【字解】【一】李七司馬　蜀州の司馬李某。【二】皂江　一に鄙江といひ新津縣にありといふ。【三】短作　この八句の詩をさす。【四】李公　李司馬。【五】結構同　木にてかまへたるものと同じ。【六】褰裳不渉　「不褰裳而渉」とかくべきを上のごとくかけるなり、これまではもすそをかかげてかちわたりする必要ありしに、今はしかせず。【七】天寒一句　「異苑」にみえたるはなし。晉の太康二年の冬大に寒ゆる、南洲の人、二白鶴の橋下に語るを見る、曰く、今茲の寒さは堯の崩ぜし年に減ぜざるなりと、是に於て飛び去る。華表は「とりゐ」のことなるが、ここは橋柱の義として用ひたり。【八】青龍　橋影の水にうかぶかたちをたとへていふ。【九】顧　顧み念ふなり。【一〇】題柱客　漢の司馬相如が故事。相如蜀を去り長安にゆかんとするとき橋柱に題して高車駟馬に乘らずんばふたたびここを過ぎずといへり。ここは出世する義でなく柱に題して橋の成れる頌文でも作ることの義に用ひしなるべし。【一一】君　李をさす。【一二】濟川功　尙書の「說命」に「若濟巨川、用汝作舟楫」とみゆ、橋をかけしことなれば川をわたすの功ありといふなり。【一三】合歡　橋の成れるを祝して主客ともによろこぶこと。歡の字一に觀に作る、合觀は主客ともにこの橋の成れるをみることなり。【一四】千年事　千年まへの昔のこと、即ち次句のこと。【一五】驅石一句　「齊地記」といふ書に、秦の始皇石橋を作り、海を過ぎて日の出づる處を觀んと欲す、神人あり、能く石を驅りて海に下す、石の去ること速ならざれば神之を鞭つ、石皆血を流す、といへる話あり。こんな話はあるがその石が海東に到る時節は有るまじ、といふなり。

【題義】李司馬のともをして皂江のほとりで竹の橋を造るのをみた。橋はその日のうちにできた。往來の人は冬の寒いときにも水にはひらなくともよくなつた。それで聊かこの短い詩を題して李君のと

ころへてがみ代りにやつた。上元二年の冬、蜀州にての作。

【詩意】このたび竹をきりとつて橋をこしらへたが、竹橋でもそのしくみは木の橋と同じことである。これでもすそをかかげてかちわたりする必要もなく往來が通じたのである。さて橋ができてみると昔ばなしの樣に天の寒いとき白い鶴がおりてきて柱のところで話することもあらう。夕日の落つるころには橋のかげがうつつて青い龍が水中にあらはれたかとみまがふ樣なこともあらう。かへりみて念ふに橋のおいはひの詞でものぶべきであるが自分は年老いてむかし橋柱に題したといふ司馬相如のごとき文才あるものではない。しかし君は大才をもつてじつに川をわたすの功をたてられたことはわかつてゐる。いまとなつてはみんなが橋をみてうちよろこび、昔の秦の始皇の話などをばからしいといふて笑ふ、それはなんで石を驅りたてて海へやつてそれで橋を作らうとしたところで、その石が海の東までゆきつく時節はあるまい、といふのである。この竹橋はそんなこと以上なのである。

觀作橋成月夜舟中有述(一)還呈李司馬

橋を作りて成るを觀る。月夜舟中述ぶる有り。還りて李司馬に呈す

把(二)燭橋成夜。迴(三)舟客(四)坐時。　燭を把る橋成るの夜、舟を迴らす客の坐する時。
天高雲去盡。江迴月來遲。　天高くして雲去り盡し、江迴にして月來ること遲し。
衰(五)謝多扶(六)病。招邀(七)屢有期(八)。　衰謝多く病を扶く、招邀屢〻期有り。
異(九)方成此興。樂罷不無悲。　異方此の興を成す、樂み罷みて悲み無くんばあらず。

【字解】〔一〕述　詩をつくりしこと。〔二〕把燭　ともし火をとつて夜まで宴する。〔三〕迴舟　舟をもどすこと。〔四〕客　すなはち作者。〔五〕衰謝　謝もまた衰へ凋むこと。〔六〕扶病　病體を人手によつてたすけてもらふ。〔七〕招邀　まねきむかへる。〔八〕期　時期。〔九〕異方　他郷。

【題義】竹橋を作りてそれのできあがるのを觀て、祝宴に、月夜舟のなかで詩をつくつたが、かへつてからまたこの詩を作つて李司馬にたてまつつた。

【詩意】橋ができあがつた夜に燭火をとつて宴をした。さうして舟中にすわりながらもどらうとした。その頃は天が高く雲はすつかりなくなり、江の水面はるかに月はなかなかでてこない。自分は老衰のもので多くは病體を人にたすけられてでかけるのであるが、たびたびお招きにであひ、まことにありがたくおもふ。ただ他郷でこの樣なおもしろさをすると、樂みがすんでからとかく悲みのこころが無いわけにはゆかぬ。

李(一)司馬橋成。承(二)高(三)使君自成都回(四)

李司馬の橋成る。承く高使君成都より回ると

（五）向來（六）江上（七）手（八）紛紛。　向來、江上、手紛紛たり、
三日功成事出羣。　三日、功成る、事羣を出づ。
已傳（九）童子騎青竹。　已に傳ふ童子、青竹に騎り、
總擬橋東待（一〇）使君。　總て橋東に使君を待たむと擬す。

【字解】【一】李司馬橋　まへの竹橋をいふ。【二】承　てがみをもらつたこと。一本にこの承の字なし、有るも可、無きも可。【三】高使君　高適。【四】回　蜀州へもどつてくる、作者蜀州にての詩なり。【五】向來　さきごろから。【六】江上　色江のほとり。【七】手　工人の手。【八】紛紛　みだるる貌、多きをいふ。【九】童子騎青竹　青竹とは竹馬をいふ、故事あり、後漢の郭伋、并州の牧と爲り、始めて并州にいたりて管内をめぐり河西の美稷に至りしに、童兒數百竹馬に騎りて之を迎へ曰く、使君到るときき喜ぶ、故に來り迎ふと。【一〇】使君　高適をさす。

【題意】李司馬の竹橋ができあがつた。このとき高使君が成都からもどるといふことをきいた。上元二年冬、蜀州にての作。

【詩意】さきごろから江のほとりで橋をつくる人夫等の手が紛紛と多くはたらかされたが、三日で功が成り、その事たる拔羣のできである。はやくもこどもたちが竹馬にのつて、みんなこの橋の東でこんどおかへりになる長官高君をお待ちしようとまちかまへてゐるといふことだ。（司馬の功をさらに刺史へ歸せしめたるなり。）

（一）入奏行。贈（二）西山檢察使（三）竇侍御　入奏行、西山檢察使竇侍御に贈る

竇侍御。　竇侍御は、
（四）驥之子。　驥の子にして、
鳳之雛。　鳳の雛なり。
年未三十（五）忠義倶。　年未だ三十ならず忠義倶なり、
（六）骨鯁絕代無。　骨鯁、絕代無し。
（七）炯如（八）一段清冰出萬壑。　炯として一段の清冰、萬壑より出で、
置在（九）迎風露寒之（一〇）玉壺。　置かれて迎風露寒の玉壺に在るが如し。
（一一）蔗漿（一二）歸廚（一三）金盌凍（一四）。　蔗漿、廚に歸して金盌凍る、
（一五）洗滌煩熱足以寧（一六）君軀（一七）。　煩熱を洗滌して以て君軀を寧んずるに足れり。

【字解】【一】入奏行　竇某が朝廷にいつて敵情を奏上するのを送るうた。【二】西山檢察使　臨時におかれた官名、西山の地方を檢察する使者、西山は即ち雪嶺、吐蕃の境に接するを以て其地方を檢察するとみゆ、ただその職は糧食を運ぶにあり。【三】竇侍御　侍御史竇某、侍御史でありながら檢察使となりしなり。【四】驥之子、鳳之雛　年わかくすぐれたるをいふ。【五】忠義倶　忠と義とをあはせて有す。【六】骨鯁　骨鯁とは魚の骨をのどにたてることなり、忠臣は君の耳に逆ふ言をなす、故に之を骨鯁にたとふ。【七】炯　かがやくさま。【八】一段　一かたまり。【九】迎風露寒　ともに漢の宮殿内の館の名なり。【一〇】玉壺

(一八)政用疎通合(一九)典則。
(二〇)戚聯豪貴(二一)耽文儒。』
(二二)兵革未(二三)息人未(二四)蘇。
天子亦念(二五)西南隅。
(二六)吐蕃(二七)憑陵氣頗(二八)麤。
(二九)竇氏檢察(三〇)應時須。
運糧(三一)繩橋(三二)壯士喜。
(三三)斬木火井(三四)窮猿呼。
(三五)八州(三六)刺史思(三七)一戰。
(三八)三城(三九)守邊却可圖。
此行入奏計未小。
(四〇)密奉聖旨(四一)恩宜殊。』
(四二)繡衣春當(四三)霄漢立。

政、疎通を用ふるは典則に合す、
戚、豪貴に聯りて文儒に耽る。』
兵革未だ息まず人未だ蘇せず、
天子亦念ふ西南の隅。
吐蕃憑陵、氣頗る麤なり、
竇氏檢察、時の須めに應ず。
糧を繩橋に運べば壯士喜び、
木を火井に斬れば窮猿呼ぶ。
八州の刺史、一戰を思ふ、
三城、邊を守る、却つて圖る可し。
此の行、入奏、計未だ小ならず、
密に聖旨を奉ず、恩宜しく殊なるべし。』
繡衣春霄漢に當つて立つ、

玉でつくつたつぼ。【一二】蔗漿 さたうきびの汁。【一三】歸厨 だいどころにもちきたさるをいふ。【一四】凍 こほる、つめたきをいふ。【一五】洗滌煩熱 あつくるしさをあらひそそぐ。【一六】寧 やすんずる。【一七】君軀 天子のおからだ。【一八】政用疎通 政のしかたが上下人情のよくかよひとほる樣にすること。【一九】典則 古代の法則。【二〇】戚聯豪貴 權勢富貴の家と親戚の關係がつながつてゐる。【二一】耽文儒 文學の儒者の爲す事をひどく愛する。【二二】兵革 兵亂のこと。【二三】息 やむ。【二四】蘇 よみがへる。【二五】西南隅 蜀の地方。【二六】吐蕃 西鄙の夷種。【二七】憑陵 惡氣の盛なる貌、【二八】麤 大なること。【二九】竇氏 竇侍御【三〇】應時須 須は需要なり、時の人がいりようとする所に應じた。【三一】繩橋 竹又は藤のなはにて吊るしたはし、茂州汶川縣の西北にありと、吐蕃への通路にあたる。【三二】壯士 兵卒。【三三】斬木火井 火井のある地方に於て樹木をきりひらく、木をきるは道路を通ずるなり、火井は鹽井にて火を投ずれば水もゆといふ、蓬州にありといふ。【三四】

(四四)綵服日向(四五)庭闈趨。
(四六)省郎(四七)京尹必(四八)俯拾。
(四九)江花未落還成都。』
江花未落還成都。
肯訪(五〇)浣花老翁無。
爲君(五一)酤酒(五二)滿眼酤。
與(五三)奴白飯馬青(五四)芻。』

綵服日に庭闈に向つて趨す。
省郎京尹必ず俯して拾はむ、
江花未だ落ちず成都に還らむ。』
江花未だ落ちず成都に還らむ、
肯て浣花の老翁を訪はむや無や。
君が爲に酒を酤ひ滿眼酤ひ、
奴には白飯を與へ馬には青芻。』

窮猿呼 木をきられては「さる」もこまつてなく。【三五】八州 松維恭蓬雅黎姚悉の八州。【三六】刺史 州の長官。【三七】一戰 吐蕃に對して一どたたかふ。【三八】三城 松維保の三州の城。【三九】守邊 吐蕃と接したくにさかひを守る。【四〇】密奉聖旨 天子のおほせごとをひそかにうけて出かけてきたこと。【四一】恩宜殊 入奏の後は天子の御恩寵が特別に加はるであらう。【四二】繡衣 御史の服。【四三】霄漢 あをそら、あまのがは、朝廷の高き地をさす。【四四】綵服 孝子の服。(本卷の送韓十四江東省覲詩をみよ)。【四五】庭闈 家庭。(同上詩をみよ。)【四六】省郎 本省の郎官。【四七】京尹 京都の長官。(浦氏は之を必ず成都尹の官をさすとせり)。【四八】俯拾 之を得るの容易なるをいふ。【四九】江花 江邊の花、之を荷の花とする說あるも從はず。【五〇】浣花老翁 自己をさす。【五一】酤酒 酤は酒を買ふなり。【五二】滿眼酤 仇氏は滿眼は滿斛なり、酤は一宿酒なり、とせり。別說に蜀の酒は竹筩にもる、筩の上部綱にてつるすため孔をうがつ、之を眼といふ、滿眼とは孔のところまで酒をみたすをいふと、余は滿眼の

字義は仇氏に從ふ、滿眼酤の酤字は上の酤酒の酤とおなじく「酒を買ふ」義とみる、一宿酒とはみなさず。【三三】奴　めしつかひ。

【三四】芻　わら、青芻は青いくさ。

【題義】侍御史で西山檢察使として蜀へ來てゐた竇某が朝廷へ報告のためかへるので、それに贈つた詩。寶應元年春の作なるべし。

【詩意】竇侍御は千里馬の子、鳳皇のひなともいふべき人で、年は三十にならぬが忠義を兼ねた人であり、その骨つぽいことは世に絶えて無い。君はたとへば萬壑の間から一かたまりのきれいな冰をだして、それを迎風・露寒等の館の玉壺のなかに置いた樣にかがやいてゐる。この冰塊があれば臺所にもちきたされた砂糖汁の金盌もつめたく凍り、天子がそれをおのみになればあつくるしさを洗ひさつてそのおからだをやすらかにすることができるのである。君は熱を洗ふ冰である。君は政をするのに人情を疎通させる方法を用ひてをるのは古法に合したものである。君は權貴の家と親戚であるにかかはらず學者好きである。』いま天下にいくさがやまず人民がよみがへるに至らぬので、天子も西南地方（蜀）のことをお念ひになつた。吐蕃の勢力が強く其の氣が大きくこちらをも侵略せんとしてゐる、このとき竇君がこちらを檢察されたのは時の需用に應じたものだ。だから君が繩橋方面へ糧食を運べば兵卒も喜び、火井の地方に樹木をきりひらけば猿もなきかなしむ。また八州の刺史たちもこれならば吐蕃と一戰してもよいとおもひ、或は三城の方面もそこを吐蕃に對して守るといふこともくはだてることができるのである。君が此の行、中央に入つて天子に奏上されることは共計たる小なるものではない、すでに仰せをうけてこられたのであるから報告の結果は天子の君に對する御恩寵は特別なものがあるであらう。』君はいま繡衣をつけて春、霄漢のごとく高き朝廷に於て立たれる、また老萊子の如き五綵の服をつけて御兩親の庭門に向つておもむかれる。定めし本省の郎官、京都の長官の地位は俯して地上の物をひろふごとくたやすく得らるるであらう。』成都へかへられたときにはこの江べりの花がまだ落ちぬうちにまたこの成都へおかへりになるであらう。そしてここの浣花溪のおやぢをおたづねくださるおぼしめしがありますか。わたくしはおたづねくださるそのときには眼前あふるるばかり多くの酒を買ふでありませう。それからあなたのしもべには白いご飯をたべさせてやり、あなたの馬には靑い草をたべさせてやりませう。』

得二廣（一）州（二）張判官叔卿書一。使還。以レ詩代レ意

廣州の張判官叔卿が書を得たり。使還るとき、詩を以て意に代ふ

鄕（三）關胡（四）騎滿。宇（五）宙蜀（六）城偏（七）。

鄕關、胡騎滿つ、宇宙、蜀城偏なり。

忽得炎（八）州信（九）。遙從二月（一〇）峽一傳。

忽ち得たり炎州の信、遙に月峽より傳ふ。

雲深驃騎幕。夜隔孝廉船。
却寄雙愁眼。相思淚點懸。

雲は深し驃騎の幕、夜隔たる孝廉の船。
却つて寄す雙愁眼、相思、淚點懸る。

【字解】【一】廣州　廣東にあり、唐にては中都督府をおく。【二】張判官叔卿　都督の判官たる張叔卿、叔卿は魯人、作者の「雜述」・舊唐書の李白傳にみゆ。【三】鄉國　長安・洛陽をさす。【四】胡騎　安・史の賊騎。【五】宇宙　天地。【六】蜀城　成都。【七】偏　かたよる。【八】炎州　熱帶地方、廣州をさす。【九】信　てがみ。【一〇】月峽　明月峽なり、蜀の三峽の始。【一一】驃騎幕　張判官の居處をいふ、驃騎は驃騎將軍、漢時の官名、霍去病之に任ぜらる、今廣州の都督をさす、判官は都督の屬官なれば幕といふ、都督の幕府に參するをいふ。【一二】孝廉船　孝廉は科目の名、孝廉の科に擧げられたる人を孝廉といふ、一故事あり、張憑といふもの丹陽尹劉惔に謁して留まり宿し明日船にかへる。しばらくして惔、張孝廉が船をもとめしめ、召して之と同じく載す、時の人之を榮とす、と。今同姓の故事を用ひ張叔卿が船をさして孝廉船といへり。此句によるに張或は明月峽のあたりに船を泊して使を以て書を作者によせしものか、身、廣州に在るには非るべし。【一三】雙愁眼　愁をおびたる左右のめ。【一四】淚點　なみだのぼちぼち。【一五】懸　まなこにぶらさがる。

【題意】廣州都督府の判官張叔卿のところから使ひが手紙をもつてきた。使ひがかへるとき自分はこの詩を作つて返事の意をのべるに代へた。（多分張は三峽の入りくちのあたりから使ひをだしたものとみえる。）

【詩意】自分の故鄉の方はいま賊軍がみちてゐる。天地のうちで自分のゐる蜀の城（成都）はかたよつたところだ。そこへにはかに熱帶地方からの手紙を得た。それははるかに蜀の東なる明月峽の方から傳はつてきた。君の居る驃騎將軍の幕府は雲がふかくとざしてゐる。君の乘つてゐる孝廉の船は夜にあたつて遠くへだたつてゐる。それでこの詩をやらうとおもうて左右のわが愁をふくんだ眼を君の方へむけると相思の情がわいてきて淚のしづくがぶらさがるのである。

魏十四侍御就敝廬相別

魏十四侍御敝廬に就きて相別る

有客騎驄馬。江邊問草堂。
遠尋留藥價。惜別倒文場。
入幕旌旗動。歸軒錦繡香。
時應念衰疾。書疏及滄浪。

客有り驄馬に騎り、江邊に草堂を問ふ。
遠く尋ねて藥價を留め、別を惜しみて文場に倒る。
入幕、旌旗動き、歸軒、錦繡香し。
時に應に衰疾を念ひて、書疏、滄浪に及ぶべし。

【字解】【一】魏十四侍御　侍御史魏某。【二】敝廬　草堂をいふ。【三】相別　わかれること、魏は何のためにどこへゆくのかさらに知れず、第五句に入幕とあればどこぞの幕僚として赴くものとみゆ。【四】騎驄馬　桓典が故事、御史をいふ、巳に屢みゆ。【五】留藥價　藥の代だといふて金錢をおいていつてくれること。【六】倒文場　文章のにはに於て醉ひ倒れること。仇注に意氣傾倒於文場とあれど通ぜず、楊注に傾倒其詩章などいへどいよいよ通ぜず、余は愚見を持す。或は倒を到とし、到文場にて草堂へ來たことをいふとす、しかし上に問草堂といひ、遠尋といひ、更に到文場といふはくどし。【七】入幕　武官の幕府にはひる。【八】旌旗動　はたをたててゆくなり。【九】歸軒　故鄉の方へかへる車。【一〇】錦繡香　仇氏は御史は繡衣をきるゆゑ錦繡といふといへる

もこれは衣錦歸郷の意を用ひしものならん。【二】衰疾　老衰、疾病、自己のさま。【三】書疏　てがみ。【三】滄浪　浣花溪をさす、作者の句に百花潭水卽滄浪とあり。

【題意】侍御史魏某が自分のいほりへわざわざいとまごひにきてくれた。寶應元年草堂にての作。

【詩意】驄馬にのつたお客さまが江のほとりに我が草堂をたづねてきた。遠くからたづねて來て藥を買ふ代金を置いていつてくれ、別れを惜みては文章のにはに於て醉をつくしてよひたふれる。（まことにその親切なことをよろこぶ）君は幕に入るために ゆくので已に旌旗がうごきだし、また故郷へかへる車には錦繡の衣がかんばしくにほうてゐる。前途君はしかく出世しても、時としては衰疾の境にあるこのおやぢを念うて、この滄浪ともいふべき浣花溪へまで手紙をよこしてくれるがよろしい。

贈別何邕(一)

何邕に贈り別る

生死論交地(二)。何由見一人。
生死、交地を論ずるは、何に由つてか一人を見む。

悲君隨燕雀(三)。薄宦(四)走風塵。
悲む君が燕雀に隨ひ、薄宦、風塵に走るを。

綿谷(五)元通漢(六)。沱江(七)不向秦(八)。
綿谷元漢に通ず、沱江、秦に向はず。

五陵(九)花滿眼。傳語(一〇)故鄉春。
五陵花眼に滿つ、傳語せよ故鄉の春。

【字解】【一】何邕　作者前に贈何十一少府邕覓榿木栽詩あり。【二】交地　交際の境地。【三】燕雀　小さき鳥、凡人にたとふ。【四】薄宦　つまらなき仕途。【五】綿谷　縣の名、四川保寧府廣元縣。【六】漢　漢は秦漢の漢、長安をさす、蒼州に漢水とす故に紛紛の語を愛せり、今取らず。【七】沱江　郫縣の西にあり。【八】秦　咸陽をさす、長安附近。【九】五陵　長安にあり「哀王孫」をみよ。【一〇】傳語　作者の語を故鄉の春につたへる、上の五陵花滿眼が傳語の內容なり。

【題意】何邕に別るるとて之に贈りたる詩。舊注に嚴武を送りて綿州に至りしときの作とせり、ただ必ずしも綿州にありしときの詩たる證を見ず。

【詩意】交際の境地を生死不變といふまでにとくものは今の世では一人たりとも之あるを見ぬのである。（ただ君に於て之を見るのみだ。）かほどの君が燕雀の樣な凡鳥にくつついてひくい役人として風塵のうちに奔走してゐるとは悲しむべきことである。君は綿谷をとほつて都の方へゆくがあの路はもと長安の方へ通じてゐる路だ。しかし遺憾ながらここの沱江の水は秦に向つては流れぬ。（だから自分は都へはかへれぬのだ。）五陵の花が自分の眼に十分見えつつある、それほど故鄉を思うてゐると故鄉の春にことづてしてくれたまへ。

絕句(一)

絕句

江邊(二)踏青(三)罷。回首見旌旗(四)。
江邊、青を踏み罷む、首を回らせば旌旗を見る。

風起(五)春城暮。高樓(六)鼓角(七)悲。　風起つて春城暮る、高樓、鼓角悲しむ。

【字解】【一】絶句　五言、又は七言の四句の詩なり。これは五言。【二】江邊　錦江のほとり。【三】踏青　春のわかくさをふむ、野外に散歩するなり。【四】旌旗　はた、軍事に用ふるもの。【五】春城　春の成都の城。【六】高樓　城樓なり。【七】鼓角　太鼓つのぶえ。

【題義】絶句の形にてのべたる詩。兵亂のさまを悲しみたり。時に吐蕃の亂あり。寶應元年成都の作。

【詩意】かはべりにわか草をふみをはつて、ふとかうべをめぐらしてみると旗がみえる。風が吹きおこつていま城がくれになりかけてをる、さうして城樓のたかいところで太鼓やつのぶえの悲しげなおとがしてゐる。

贈別鄭鍊(一)赴襄陽(二)　　鄭鍊が襄陽に赴くに贈り別る

戎馬交馳(三)際。柴門(四)老病身。　戎馬交〻馳する際、柴門、老病の身。

把君詩過日(五)。念此別驚神(六)。　君が詩を把つて日を過し、此の別を念ひて神を驚かす。

地濶(七)峨眉(八)晩。天高峴首(九)春。　地濶にして峨眉晩れ、天高くして峴首春なり。

爲(一〇)於耆舊(一一)內。試覓姓龐(一二)人。　爲めに耆舊の內に於て、試に姓龐なる人を覓めよ。

【字解】【一】鄭鍊　事迹詳ならず。【二】襄陽　湖北省にあり。【三】戎馬交馳　此時、史朝義、晉州を陥れ、羌の渾奴剌、梁州を陥る、また河東・河中・軍皆亂る。故に戎馬こもごも馳すといふ。【四】柴門　草堂の門。【五】過日　時を費すをいふ。【六】驚神　神は精神。【七】地濶　先方まで遠きをいふ。【八】峨眉　眉州にある山の名、蜀の名山をあぐ、自己の居る處なり。【九】峴首　山の名、襄陽にあり、鄭がゆく所の名山をあぐ。【一〇】爲　吾がための意。【一一】耆舊　老人、晉の習鑿齒、「襄陽耆舊傳」をあらはす。【一二】姓龐人　後漢の龐德公なり、德ありて襄陽の鹿門山に隱居す、巳に屢〻見ゆ。

【題義】鄭鍊が襄陽へゆくにつけて別るるとき贈りたる詩。寶應元年浣花草堂にての作。

【詩意】兵馬があちこちこもごもはせてをるとき。柴門で老いかつ病んでゐるこのからだ。ただ君が詩を手にして日をすごしてをる、それに忽ち別れねばならぬとは、どうしてわが精神を驚かさずにゐられよう。彼我の地とほくはなれて峨眉の山はくれかけてゐる。天高くしてみやれば峴首の山はいま春になつてゐる。君があちらへゆきついたならば老人たちの內に、龐といふ姓の人がゐるかゐぬかを試みにたづねてみてくださらぬか。（もしゐるなら自分もその人とともにそこに隱居しよう。）

重贈鄭鍊絶句　　重ねて鄭鍊に贈る絶句

鄭子將行罷使臣(一)。　鄭子將に行かむとして使臣を罷む、

囊無一物獻尊親(二)。　囊に一物の尊親に獻ずる無し。

【字解】【一】罷使臣　地方の長官、其の他天子の命をうけてでてゐる官はみな使臣なり、鄭鍊何の官に

江山路遠羈離日。　江山路遠し羈離の日、
裘馬誰爲感激人。　裘馬誰か感激の人たる。

ありしや詳ならず。〔二〕尊親　親御さん。襄陽に老親住むとみえたり。〔三〕江山路遠　襄陽と蜀との間についていふ。〔四〕羈離　鄭の身のうへをいふ、たびびとの身、故郷から離れてゐる身。〔五〕裘馬　輕裘な衣、肥馬に乘れる人。〔六〕誰爲　誰とは自己以外何人かの意。〔七〕感激人　鄭が廉潔に對して感動して之を憐むの人。

【題義】前詩を贈りしのち、重ねて鄭に贈れるなり。

【詩意】鄭君は使臣の任をやめてこれからたびだたうとするのである。ところでその嚢中には親御さんにたてまつるべき何物をももたぬのである。まことに廉潔このうへもなき人だ。君がたびびとたるのとき前途幾多の江山をへてゆくのであるが、彼の肥馬輕裘の人人はいつたいそのうちのだれが君の行に感激する人なのであるか。（彼等の中には恐らく感激する人は無からう。ただ自分の様な貧寒の儒のみが感激してゐるのである。）

江頭五詠　　江頭の五詠

〔一〕丁香　　〔一〕丁香

丁香體柔弱。亂結枝猶墊。　丁香、體柔弱なり、亂結、枝猶墊る。
細葉帶浮毛。疎花披素艶。　細葉、浮毛を帶ぶ、疎花、素艶披く。
深栽小齋後。庶使幽人占。　深く栽す小齋の後、庶はくは幽人をして占めしめむ。
晩墮蘭麝中。休懷粉身念。　晩に蘭麝の中に墮つるも、粉身の念を懷くを休めよ。

【字解】〔一〕江頭　錦江のほとり。〔二〕五詠　五物を詠じたるなり、丁香以下のもの是なり。〔三〕丁香「ちやうじ」。〔四〕亂結　丁子の枝ないだすや葉のうへに釘の如きもの三四分の長さに生ず、之を結といふ。〔五〕枝猶墊　猶の字は上句の柔弱へかかる辭なり、墊は下へさがること。〔六〕小齋　ちさき書齋。〔七〕庶　れがはくは。〔八〕幽人　自己をさす。〔九〕占　占有。〔一〇〕晩墮二句　自己のことを托していふ。〔一一〕蘭麝　ともににほふもの。〔一二〕粉身念　雞舌香は郎官之を口にふくむ。その香、丁子に似たり、因て之を丁子香ともいふ、粉身とは香の縁語なり、身を粉にくだくこと。

【題義】錦江のほとりの草堂にあるもの凡そ五種につきてよめる詩なり。第一は丁香なり。寶應元年の作。

【詩意】丁香はその體は柔弱なものであるが、それでもなほ亂結せる枝が下へとたれる。その細い葉は浮いてる毛を帶びてゐるし、まばらな花はしろいつやつやしさをひらいてゐる。この樹を小さな書齋のうしろにうゑて、どうか幽靜な人に占有せしめたいとおもふ。ただここに注意するが、晩年に蘭麝の香のやうな貴いもののなかに墮ちこんだとしても、おのが身を粉にしてまで他のためにつくさう

などといふ念慮をもつてはならぬ。」

〔二〕 麗春

百草競春華。麗春應最勝。

少須顏色好。多漫枝條賸。

紛紛桃李姿。處處總能移。

如何此貴重。却怕有人知。

〔二〕 麗春

百草、春華を競ふ、麗春應に最も勝るなるべし。

少ければ須らく顏色好かるべし、多ければ漫に枝條に賸る。

紛紛たり桃李の姿、處處總て能く移る。

如何ぞ此れ貴重なる、却つて怕る人の知る有らむことを。

【字解】〔一〕麗春　仙女蒿・長春花・虞美人花等の名あり、罌粟の別種なり。〔二〕春華　はるのはなやかさ。〔三〕少　花のすこしくさくこと。〔四〕顏色　花の色。〔五〕多　花の多くさくこと。〔六〕枝條賸　枝のうへにあまりすぎる。〔七〕桃李姿　姿の字諸本枝に作る、仇氏枝を誤字なりとして姿に改めたり、然れども改むる要なし、余は枝の字に從ふ。〔八〕能移　之を移植してもよくそだつ。〔九〕如何此貴重　これも仇氏が改めたるなり、舊本には如何此貴重（重は種に作るべしといへり）・稀如此貴重・などに作れり、今、仇氏によりて説く、此とは麗春をさす、「なんでこの物が貴重さるるか」の意。〔一〇〕却怕有人知　これは上句の理由なり、怕とは麗春がおそるるなり、麗春は桃李に似ず他人に知らるることをおそる。

【詩意】百草が春のはなやかさを競うてゐるが、そのうち最も勝つたものは麗春であらう。麗春の花はすくなければその色が好いはずであり、多ければ枝にあまつてぐあひがよくない。紛紛たる凡俗の色を有する桃李の枝はどこにでも移しうゑればよくつく、麗春は移植がきかぬ。すなはち如何なる理由で麗春は貴重さるるかといふと、麗春はうるはしさを他人に知られるのをおそれるといふゆかしさがあるためだ。

〔三〕 梔子

梔子比衆木。人間誠未多。

於身色有用。與道氣相和。

紅取風霜實。青看雨露柯。

無情移得汝。貴在映江波。

〔三〕 梔子

梔子、衆木に比するに、人間誠に未だ多からず。

身に於て色用有り、道と氣相和す。

紅は取る風霜の實、靑は看る雨露の柯。

情無く汝を移し得たり、貴は江波に映ずるに在り。

【字解】〔一〕梔子　「くちなし」。一に薝蔔花といふ。高さ七八尺、二三月に白き花を生ず、花はみな六出す、甚だ芬芳あり、夏秋に實を結ぶ、生のとき青く、熟すれば黄なり、中の仁は深紅なり。〔二〕色有用　その色を取て帛紙を染むべし、故に有用といふ。〔三〕氣相和　梔子は五内の邪氣、胃中の熱氣を治むといへり。一に相和を傷和に作る、これは梔子の性冷にて之を食すれば氣をそこなふを以て之をいふと。今は相和によりて說く。〔四〕風霜實　秋の實をいふ。〔五〕雨露柯　春の枝をいふ。〔六〕移　移植。〔七〕貴　之を貴ぶ所以をいふ。〔八〕映江波　江波にうつろふ。

【詩意】「くちなし」は他の多くの木にくらべると、人間界ではあまり多くない木だ。人の身にとりて

は此物はその色が有用であるし、之を天地の道よりしてみれば人體の氣を調和さすことのできるものである。風霜に結ぶ實にはその紅なるを取り、雨露を帶ぶる枝に於てはその青きをみる。自分はただ無心におまへを移植したので、貴しとする所はおまへが江波にうつるさまのうつくしいことに在る。

〔四〕

鸂鶒（一）

故使籠寬（二）織。須知動損毛。　故に籠をして織を寬にせしむ、須らく知るべし動けば毛を損するを。

看雲猶悵望。失水任呼號。　雲を看て猶悵望す、水を失して呼號するに任す。

六翮（三）曾經剪。孤飛卒未高。　六翮曾て剪らるるを經たり、孤飛卒に未だ高からず。

且無鷹隼慮（四）。留滯（五）莫辭勞。　且つ鷹隼の慮り無し、留滯、勞を辭する莫れ。

【字解】〔一〕鸂鶒　をしどり。〔二〕寬織　めをあらく織る。〔三〕翮　たちばね。〔四〕鷹隼慮　たか・はやぶさ・におそはれる心配。〔五〕留滯　じつとしてとどまる。

【詩意】自分は「をしどり」を飼ふのにわざと籠の目をあらく織らせた、なぜならば密にしておけばそのなかで動くときとりが毛をいためるからだ。かごのなかではとりは雲をみてはうらめしくながめてゐるし、水をはなれたから悲んでなきさけぶが、さけぶがままにさせておく。六枚のたちばねはまへに剪られてしまつたから、ひとり飛びで、たかくとぶわけにゆかぬ。きのどくではあるが、まあまあ鷹や隼におそはれる心配がない、そこがとりえだから、とりよ、汝はゆつくりこのかごのなかにとどまつてなんぎすることをいとふなよ。

〔五〕

花鴨（一）

花鴨無泥滓（二）。堦前每緩行。　花鴨、泥滓無し、堦前每に緩行す。

羽毛（三）知獨立（四）。黑白太分明。　羽毛、獨立するを知る、黑白太だ分明なり。

不覺羣心（五）妬。休牽衆眼驚。　覺らず羣心の妬むを、衆眼の驚きを牽くことを休めよ。

稻粱霑（六）汝在。作意（七）莫先鳴（八）。　稻粱、汝を霑して在り、作意、先づ鳴くこと莫れ。

【字解】〔一〕花鴨　「かも」。〔二〕泥滓　滓は「かす」、泥水のよごれないふ。〔三〕羽毛　羽毛のきれいなことによりての義。〔四〕知獨立　獨立は鳥がひとりで立つてゐること。〔五〕羣心・衆眼　他の多くの鳥の心、眼。〔六〕霑汝在　在の字の主辭は上の稻粱なり。〔七〕作意　みづから發意する。〔八〕先鳴　他鳥よりもさきに鳴く、鳥の鳴くは食を求むるなり。

【詩意】花鴨はどろ水のよごれがなくて、いつもきざはしの前にゆつくりとあるいてゐる。その羽毛は黑と白とが非常にはつきりしてゐるから、ひとりで立つてゐてもぢきにそれと知らるる。彼は他の

鳥たちが心で妬んでゐることにきづかずにゐるが、決して他鳥の眼（注目）をひくやうなことをしてはならぬぞ。十分潤澤に稻粱のたべものがあることだによつて、自分と發意して他のものよりさきに聲をだしてはいけないよ。

野望

西山白雪三城戍。南浦清江萬里橋。
海內風塵諸弟隔。天涯涕淚一身遙。
惟將遲暮供多病。未有涓埃答聖朝。
跨馬出郊時極目。不堪人事日蕭條。

野望

西山の白雪、三城の戍、
南浦清江の萬里橋。
海內の風塵に諸弟隔たり、
天涯涕淚、一身遙かなり。
惟遲暮を將て多病に供す、
未だ涓埃の聖朝に答ふる有らず。
馬に跨り郊を出で時に目を極むれば、
堪へず人事の日日に蕭條たるに。

【字解】【一】野望　原野にて眺望する。【二】西山　雪嶺なり。【三】三城　松・維・保・三州の城、吐蕃の侵入に對して備へのしろなり。【四】戍　兵をとどめてまもる。【五】南浦　浣花溪は成都の南にあたる。【六】清江　水のきよきかは、錦江なり。【七】萬里橋　草堂の東にあり。【八】風塵　兵馬のちりをいふ。【九】諸弟隔　羣弟は濟陽其他にあり。【一〇】涕淚　自己なみだをもよほすをいふ。【一一】一身　自己單獨のからだ。【一二】遲暮　晩年をいふ。【一三】涓埃　ひとしづく、ほこり、少しばかりをいふ。【一四】聖朝　聖朝の恩澤をいふ。【一五】郊　西郊。【一六】極目　十分目をはせてながめる。【一七】人事　民情なり、兵亂のため人民多く凋敝す。【一八】蕭條　さびしきさま。

【題義】野外にいでてながめしときの感じをのぶ。寶應元年成都草堂にての作。

【詩意】西山は白雪をいただいてその近くには三城の戍がおいてある。ここは成都の南浦、清江にかけたる萬里橋のそばである。いま天下兵馬の塵がおこつて多くの弟どもは遠くへだたつてをり、自分は天のはてにただひとりぼつちをる、これなみだのたねである。自分は晩年の時期を病氣に向つてささげてゐるばかりで、水ひとしづくほこり一つぶほども聖朝の御恩に答へたてまつつたことはない。ここに馬にまたがつて郊外からいで時時ながめてみると、人民の生計衰へて日日さびしくなりゆくのすがたあるにはたへられぬ。

畏人

早花隨處發。春鳥異方啼。
萬里清江上。三年落日低。
畏人成小築。褊性合幽棲。

人を畏る

早花、隨處に發く、春鳥、異方に啼く。
萬里、清江の上、三年、落日低る。
人を畏れて小築を成す、褊性、幽棲に合す。

門(一〇)徑從(一一)榛草。無心待(一二)馬蹄。　門徑、榛草に從す、馬蹄を待つに心無し。

【字解】【一】長人　他人をはばかること、第五句の二字をとりて題とす。【二】早花　早くさく花。【三】隨處　どこででも。【四】異方　他鄕をいふ、この成都の地をさす。【五】三年落日低　わかりにくき句なり、「毎日毎日夕日を送つて三年を經た」といふ義なり、と。作者乾元二年に成都に入りて寶應元年春に至て三年なり。【六】小築　小屋をたてること。【七】褊性　かたくなな性質。【八】合　にあふ。【九】幽棲　しづかなわびずまひ。【一〇】門徑　門より通ずるこみち。【一一】從榛草　「はり」の木や草の生ずるにまかす。【一二】待馬蹄　貴人の騎つてくる馬の蹄をまつ。

【題義】人をはばかつて草堂にわびしくくらすことをのぶ。

【詩意】早ざきの花がどこにでもさきだし、かはつた土地ながら春の鳥は啼いてゐる。自分は萬里のとほくでこの淸らかな錦江のほとりで、三年のあひだ夕日のひくく落つるのを見た。ここで他人をはばかつて小さな家屋をきづいた。それは自分のかたくなな性質がかかるわびずまひとにあふからだ。門のそばのこみちには榛や草がかつてにはやしてある。どうせ自分は貴人の馬蹄がいつくるかなどと待つこころは無いのである。

屛跡三首

屛跡　三首

衰(一)年甘(二)屛跡。幽(三)事供高(四)臥。　衰年、屛跡を甘んず、幽事、高臥に供す。

鳥下竹根行。龜開萍(五)葉過。　鳥は竹根に下りて行き、龜は萍葉を開いて過ぐ。

年荒(六)酒(七)價乏。日(八)併園(九)蔬課(一〇)。　年荒にして酒價乏し、日を併せて園蔬を課す。

獨(一一)酌甘泉歌。歌長擊樽破。　獨り甘泉を酌みて歌ふ、歌長くして樽を擊ちて破る。

【字解】【一】衰年　老衰の時期。【二】屛跡　屛は「しりぞくる」、跡は行跡、わが行跡を世間からひつこめること。【三】幽事　しづかなことがら、卽ち鳥龜課蔬などの事。【四】高臥　枕を高くして臥すること。【五】萍　うきぐさ。【六】荒　作がらのわるしきこと。【七】酒價　酒の代金、酒かひ錢。【八】日併　一日に二三日分の仕事をする、併は倂のごとし。【九】園蔬　はたけの野菜つくり。【一〇】課　仕事の分量をわりつけてする、仇氏は此句を上句と連絡せしめ蔬を賣りて酒錢を得んとするなりといへるが、余はしかおもはず、二句各〻一意ならん。【一一】獨酌甘泉歌　甘泉はうまき水なり、酒なき故に水を飮むなり、このままにとくときは次句の「擊樽」は水をつめたたるをうつものとみなさざる可らず、不自然ならずや。一本に此句を獨酌酣且歌に作れりといふ。是よろしきに非るか。

【題義】浣花の草堂に人まじらひをせずひつこんでをることをのぶ。これその第一首なり。寶應元年の作。

【詩意】自分は老衰の年にあたつて滿足してひつこみ、自己の高臥の境に對してはしづかな事がらを以てささげてをる。すなはち庭をみれば、鳥は竹の根もとにおりてきてあるいてをり、龜は萍の葉をかきわけて過ぎてゆく。年がらが凶作で酒かひ錢は乏しく、はたけ仕事の日課を增してはたらく。酒はのめぬから水をのんで歌ひ、(或は、「ひとりで酒をくみながら醉ひがまはればうたひだす、」)歌のこゑ長くしてつひに樽をうちわるに至る。

〔二〕

用拙存吾道。幽居近物情。
桑麻深雨露。燕雀半生成。
村鼓時時急。漁舟箇箇輕。
杖藜從白首。心跡喜雙清。

〔二〕

拙を用て吾が道を存す、幽居、物情に近づく。
桑麻、雨露深く、燕雀半生成す。
村鼓、時時急なり、漁舟、箇箇輕し。
杖藜、白首に從す、心跡、雙清を喜ぶ。

【字解】【一】用拙　世わたりべたなことを以て。【二】存吾道　自己の主義をたもつ。【三】幽居　しづかな生活。【四】物情　事物の精神、卽ち下の桑麻以下の事がら。【五】藜　あかざ。【六】心跡　心と行跡とふたつ。【七】雙淸　心と行跡とふたつながら汚れぬ。

【詩意】自分は世わたりべたなままで自己の主義をたもつてをる、それでしづかな生活をして事物のこころそのものに近づいてをる。桑や麻は雨露のめぐみをふかくうけて生長し、燕や雀も半分は生育して巣立つた。村の太鼓はときどきせはしさうに鳴るし、すなどりの舟はひとつびとつ輕げにういてゆく。こんなさまをみながらあかざの杖をつき、あたまが白くならうと頓著せず、ただ心と行とがともに汚れに染まぬことをうれしくおもうてをる。

〔三〕

晩起家何事。無營地轉幽。
竹光團野色。舍影漾江流。
失學從兒懶。長貧任婦愁。
百年渾得醉。一月不梳頭。

〔三〕

晩く起く家何の事かある、營む無くして地轉幽なり。
竹光、野色に團たり、舍影、江流に漾ふ。
失學、兒の懶なるに從す、長貧、婦の愁ふるに任す。
百年渾て醉ふことを得む、一月頭を梳らず。

【字解】【一】晩起　晏起に同じ、あさおそくおきること。【二】家何事　わがこの隱居の家ではいかなる仕事があるか、仕事はべつにない、だからおそくおきてもさしつかへなしといふなり。【三】無營　爲すことなし。【四】竹光團野色　諸家の解一ならず、余は鄙見をのぶ、團は團欒、卽ち倚竹檀欒の義ならん、こんもりとかたまつてゐるさまをいふ、野色は副詞として用ひしものにて「田野の色よこたはるところにおいて」の義ならん。【五】舍影　草堂のかげ。【六】失學　學業を怠るをいふ。【七】長貧　いつもびんばふ。【八】婦　つま。【九】百年　生涯。【一〇】得醉　希望。

【詩意】我が家は仕事もないからあさはおそくおきる。またなすこともないから土地はいよいよしづかである。みれば田野の色よこたはるところに竹林のひかりこんもりとみえ、江のながれは草堂のかげがただようてゐる。こどもはぶしやうで學業を怠るがそのままにしてあり、いつもびんばふでつまは心配してゐるがこれもそのままにしてある。ひとつきぢう頭にくしをいれぬほどで、ただ生涯醉ひどほしにゐたいものだとおもうてゐる。

少年行(一)

少年行

馬上誰家白面郎(二)。　馬上誰が家の白面郎ぞ、

臨階(三)下馬坐人牀(四)。　階に臨み馬より下りて人の牀に坐す。

不通姓氏(五)麤豪(六)甚。　姓氏を通せず麤豪甚し、

指點(七)銀瓶(八)索(九)酒嘗。　銀瓶を指點して酒を索めて嘗む。

【字解】〔一〕少年行　少年のことをよんだうた。〔二〕白面郎　かほのしろいわかもの。〔三〕階　さかやのきざはし。〔四〕人牀　他人の家のいす。〔五〕不通姓氏　だれそれと姓名をなのらぬ。〔六〕麤豪　細愼ならざるをいふ。人も無げなる大ざつぱなふるまひ。〔七〕指點　あれと指ざしする。〔八〕銀瓶　銀でこしらへたさかがめ。〔九〕索　もとむ。

【題義】貴族の子弟の酒屋にて傲慢ちきに酒をのむさまをうたへり。寶應元年の作。

【詩意】馬にうちのつたどこの家のわかものかしらぬが、きざはしのそばで馬からおりてどつかと椅子に腰かけた。それから大ざつぱな樣子でどこのだれとも名のらず、「あれをくれ」というて銀のさかがめを指ざしして酒をもとめてのんでゐる。

卽事(一)

卽事

百寶(二)裝(三)腰帶。眞珠(四)絡(五)臂鞲(六)。　百寶、腰帶に裝ひ、眞珠、臂鞲に絡ふ。

笑時花近(七)眼。舞罷錦(八)纏頭。　笑ふ時花眼に近し、舞ひ罷みて錦頭に纏ふ。

【字解】〔一〕卽事　眼前ふれた事につきそのままのべる。〔二〕百寶　さまざまのたからもの、金・玉の類。〔三〕裝　かざりつける。〔四〕眞珠　しんじゆ。〔五〕絡　まとふ、からめる。〔六〕臂鞲　臂衣なり、鷹狩りする者がひぢのところへつける衣なり、舞妓もかかるものを著けしとみゆるなり。〔七〕花近眼　舞者花の枝を手にしてまひ、花を自己の眼のほとりに近づける義ならん。（仇氏解に「笑容掬すべきに比す」といへるは「眼もとに花のさきこぼるる」といふ樣の意とみたるものか）〔八〕錦纏頭　纏頭は「かつけもの」、歌舞を爲すもの褒美として人より錦綵を受くれば之を頭上にいただく、之を纏頭といふ、引出物の類。

【題義】歌妓の舞ふをみてその事がらをよめり。寶應元年の作。

【詩意】腰のまはりの帶にはくさぐさの寶をかざりつけ、臂衣にもまた眞珠をたくさんまとうてをる。かかるいでたちで舞ふのであるが、彼の舞妓が笑ふときは花枝を眼のほとりにちかづけて愛らしく、舞ひがすめば褒美にもらつた錦を頭にまとうてひきさがる。これもまたうつくしい。

奉酬(一)嚴公(二)寄題(三)野亭之作

嚴公が野亭に寄せ題せしの作に酬い奉る

拾遺(四)曾奏數(五)行書。　拾遺曾て奏す數行の書、

懶性從來(六)水竹居。　懶性、從來、水竹に居る。

奉引(七)濫(八)騎沙(九)苑馬。　奉引濫りに騎る沙苑の馬、

【字解】〔一〕酬　返事する。〔二〕嚴公　嚴武、武は上元二年十二月、成都尹となる。〔三〕寄題野亭之作　嚴武が杜甫に先づあたへたる

幽棲眞(一〇)釣錦江魚。
謝(一一)安不倦登臨(一二)費。
阮(一三)籍焉(一四)知禮法疎(一五)。
枉(一六)沐旌(一七)麾出城府(一八)。
草(一九)茅無(二〇)徑欲敎(二一)鋤。

幽棲、眞に釣る錦江の魚。
謝安倦まず登臨の費、
阮籍焉んぞ知らむ禮法の疎なるを。
枉げて沐す旌麾、城府を出づるに、
草茅、徑無し、鋤しめむと欲す。

詩をさす、其辭は題義に載す。【四】拾遺 作者往年左拾遺となる。【五】數行書 拾遺の官として諫書を天子にたてまつりしなり。【六】水竹居 水竹のある處に住居する。【七】奉引 天子の道路の案内をする、これは主として肅宗のおともをして鳳翔より長安にかへりしことをさす。

【八】濫 みだりに、謙遜していふ辭。【九】沙苑馬 沙苑は「沙苑行」の詩にみえたり、沙苑馬は沙苑で養成された馬、官馬をさす。【一〇】眞釣 眞とは本來懶性の人物ゆゑ、その性にそむかず、の義。【一一】謝安 晉の謝安、東山の別墅に遊宴を恣にす、以て嚴武に比す。【一二】登臨費 費は金錢を費すこと、謝安しばしば肴膳に百金を費せしといふ、登臨は登山臨水なり。但、費の字は不倦に對して接續よろしからぬ樣なり、一本に賞に作れるあり、余は賞に從ふ、賞は山水を賞愛することなり。【一三】阮籍 魏の人、禮法の士をにくむ。【一四】焉知 疎なるも疎なることを知らず。【一五】疎 簡略なること。【一六】枉沐 枉とは謙遜していふ。沐とはその恩にひたるをいふ。【一七】旌麾 嚴武のはたさしもの。【一八】城府 成都の城、やくしよ。【一九】草茅 くさ、かや。【二〇】無徑 草茅生ひしげりてこみちもなし。【二一】敎 せしむる、俗語なり。

【題義】嚴武が草堂へ詩をよこしてくれたにつけてそれに返事するために作つた詩。寶應元年の作。嚴武の詩は左の如し。

寄題杜二(一)錦江野亭(二)。　嚴武

漫向江(三)頭把(四)釣竿。　懶(五)眠沙(六)草愛風(七)湍。　莫倚(八)善題(九)鸚鵡(一〇)賦。
何(一一)須不著鵕鸃(一二)冠。　腹中書籍幽(一三)時曬(一四)。　肘(一五)後醫方靜處看。
興(一六)發會(一七)能馳駿馬。　終當直到使(一八)君灘。

杜二が錦江の野亭に寄せ題す　嚴武

漫りに江頭に向つて釣竿を把る、懶にして沙草に眠り風湍を愛す。善く鸚鵡の賦を題するに倚ること莫れ、何ぞ鵕鸃の冠を著けざるを須ひむ。腹中の書籍幽時に曬し、肘後の醫方は靜處に看る。興發せば會ず能く駿馬を馳せ、終に當に直に使君灘に到るべし。

【嚴武の詩字解】【一】杜二 杜甫をさす。【二】錦江野亭 草堂をさす。【三】江頭 錦江のほとり。【四】把釣竿 杜の隱居生活をいふ。【五】懶 杜のぶしやうなこと。【六】沙草 沙上のくさ。【七】風湍 風聲をおびたるはやせのおと。【八】倚 たよりにする、誇る義となる。【九】題 つくること。【一〇】鸚鵡賦 後漢の禰衡、章陵の太守黄射がところにてこの賦を作る。【一一】何須 そんな必要なし。【一二】鵕鸃冠 雉のはねにてかざりしかんむり、漢の時、侍中の官のかむりしもの。【一三】幽時 しづかなとき。【一四】曬 さらす、むしぼしする、郝隆といふもの七月七日に腹中の書をさらすなりといひて仰臥せりといふ。【一五】肘後醫方 肘にかくる醫術の書、晉の葛洪、肘後急要方四卷をあらはす。【一六】興發 此より二句は武自らいふ、發はおこること。【一七】會 必ず俗語なり。【一八】使君灘 浣花溪の近傍にかかる名の灘ありしならんといふ。

【嚴武の詩意】おまへはそんなことをせずともよいのに江頭に釣竿を把つたり、ぶしやうもので沙はらの草に眠たり、風になるは

やせの香を愛したりしてゐる。鵰術のごとく鶺鴒の賦をよくつくれるといふてもそんなことをたのむな。あくまで鵷鷺の冠を著けぬ（仕官せざるをいふ）といふて頑張つてゐる必要がどこにある。おまへはしづかなときに腹のなかの書物を虫ぼしたり、てぢかな醫術の心得の本などを靜な處で看てゐる。自分は興がおこつたならば必ず駿馬をとばしてすぐおまへのそばの使君灘までゆかうとおもうてゐる。

【詩意】自分は拾遺としてかつて四五行の諫書をたてまつつたこともあるが、元來がぶしやうもので水竹の在る所にすむべきものである。かつては御先導をつとめふつつかながら沙苑の官馬にものつたが、わびずまひをして本性どほりほんたうに錦江の魚を釣つてくらす樣になつた。謝安にも比すべき君は山水に登臨して之を賞愛することに倦まないが、阮籍みた樣なこの自分は高官のものに對しても禮法が疎略だかどうかも心得てはゐぬ。ただかたじけなくも君はお伴をつれて城から出てこられるといふことだから、草茅に沒したこみちを鋤で手入れをさせてお待ちしようとおもふ。

杜少陵詩集　卷十一

（一）嚴中丞枉（二）駕見（三）過　【原注】嚴自東川除西川、勅令兩川都節制。

嚴中丞駕を枉げ過ぎらる　【原注】嚴東川より西川に除せらる。勅して兩川都て節制せしむ。

（四）元戎小（五）隊出（六）郊坰。　元戎小隊、郊坰に出づ、
問柳尋花到野（七）亭。　柳を問ひ花を尋ねて野亭に到る。
（八）川合東西瞻（九）使（一〇）節。　川、東西を合し、使節を瞻る、
地分南（一一）北任流（一二）萍。　地、南北を分つ、流萍に任す。
（一三）扁舟不獨如張翰。　扁舟獨り張翰の如くなるのみならず、
（一四）皁帽還應似管寧。　皁帽還應に管寧に似たるなるべし。
寂寞江（一五）天雲霧裏。　寂寞江天、雲霧の裏、
何人道有少（一六）微星。　何人か道ふ少微星有りと。

【字解】【一】嚴中丞　御史中丞嚴武なり、肅宗の長安を收むるや嚴武を以て京兆少尹・兼御史中丞となす、史思明が亂ありしを以て官にゆかざるに出だされて綿州刺史とせられ劍南の東西兩川節度使を兼ね、御史中丞をも兼ぬ。東川節度使は梓州に治す、西川は成都に治す、作者の注によれば武は東川より西川にうつりて兩川を節制せしものにして寶應元年のことなるべし。【二】枉駕　のりものをまげてわざわざくまじき

處にくるをいふ。【三】見過　浣花の草堂へきてくれた。【四】元戎　大なる軍事のこと、「詩經」にみゆ、いま軍事をひきゐる人にあて嚴武をさしていへり。【五】小隊　わづかな人數の部隊。【六】出郊坰　城から野外へ出かけたこと、野外を郊、郊外を林、林外を坰といふ。【七】野亭　草堂。【八】川合東西　東川・西川の二區域を合すること。【九】瞻　こちらが仰ぎみること。【一〇】使節　天子の使者としてのはた、節度使は天子より軍治民治の權力をゆだねらるるを以て使節といふ。【一一】南北　南は成都、北は長安、洛陽、此句は自己についていふ。【一二】流萍　ながるるうきくさ、飄泊のさまをたとへていふ。【一三】扁舟張翰　晉の張翰洛陽に至り齊王冏に仕へ時事の非なるを見て故鄕呉中の蓴菜鱸鱠を憶ふといひて歸れり、扁舟の故事は無けれども呉にかへるにはいづれ舟にのるなり。【一四】皂帽管寧　魏の時、管寧仕へず、亂をさけて遼東に居り、常に皂き帽・布の襦・袴をつけゐたりと。【一五】江天雲霧　江は錦江、雨多きゆゑ雲霧といふ。【一六】少微星　星座の名、少微四星は太微の西にあり、士大夫の位なり、一に處士星と名く、仕官せぬ隱者にかたどる、自己をたとへていふ。

【題義】御史中丞の嚴武が自分の草堂へわざわざたづねてくれた。嚴武は東川から西川へうつたのであつてしかも兩川をすべて管轄せよとの勅命をうけて來任したのだ。寶應元年の作なるべし。

【詩意】節度使が配下の小部隊をつれて城内から郊外へ出かけて、ここの柳、かしこの花とさぐりながらわしの草堂までやつてきた。我我は彼が天子の使節として東西兩川を統べるのを仰ぎみるのであるが、自分自身は土地の南北のけじめはあるがうき草のただよふままに生活してゐるのである。自分は扁舟歸鄕の思をうごかしてゐることが張翰の樣であるばかりでなく、亂を避けて世から離れてゐることはまた皂幅を遼東につけてゐた管寧に似てゐることであらう。まことにさびしい錦江の天の雲霧のうちに處士の徵象たる少微星があるとはだれがいふのか。おまへなればこそそんな星あることを知つてくれるのである。

遭田父泥飲美嚴中丞

步屧隨春風。村村自花柳。
田翁逼社日。邀我嘗新酒。
酒酣誇新尹。畜眼未見有。
迴頭指大男。渠是弓弩手。
名在飛騎籍。長番歲時久。
前日放營農。辛苦救衰朽。
差科死則已。誓不舉家走。
今年大作社。拾遺能住否。
叫婦開大瓶。盆中爲吾取。
感此氣揚揚。須知風化首。

田父が泥飲嚴中丞を美するに遭ふ

步屧、春風に隨ふ、村村自ら花柳。
田翁、社日に逼る、我を邀へて新酒を嘗めしむ。
酒酣にして新尹を誇る、畜眼未だ有るを見ずと。
頭を迴して大男を指す、渠は是れ弓弩手なり。
名は飛騎の籍に在り、長番、歲時久し。
前日放たれて農を營む、辛苦、衰朽を救ふ。
差科、死せば則ち已まむ、誓つて家を擧つて走らず。
今年大に社を作す、拾遺能く住まらむや否やと。
婦を叫び大瓶を開かしめ、盆中に吾が爲めに取る。
感ず此の氣の揚揚たるに、須らく知るべし風化の首なるを。

(三三)語多雖雜亂。說尹終(三四)在口。』　語多くして雜亂なりと雖も、尹を說いて終に口に在り。』

(三五)朝來偶然出。自卯(三六)將及酉。(三七)　朝來、偶然に出でたり、卯より將に酉に及ばむとす。

(三八)久客惜(三九)人情。如何拒(四〇)鄰叟。　久客、人情を惜しむ、如何ぞ鄰叟を拒まむ。

高聲索(四一)果栗。欲起(四二)時被肘。(四三)　高聲、果栗を索む、起たむと欲すれば時に肘せらる。

(四四)指揮過無禮。未覺村(四五)野醜。　指揮、無禮に過ぐるも、未だ覺えず村野の醜なるを。

月出遮我留。仍嗔(四六)問(四七)升斗。』　月出でて我を遮りて留め、仍嗔つて升斗を問ふ。』

【字解】【一】田父　農家の老父。【二】泥飲　飲酒に拘泥せしむる、しひてひきとめ酒をのますこと。【三】美　ほめること。【四】嚴中丞　嚴武なり。【五】步屧　ざうり。【六】隨春風　はる風の吹くままに方位さだめずさそはれゆくをいふ。【七】田翁　田父。【八】社日　これは春の社日、春分前後の戊の日、この日農家にてはいはひのさけをのむ。【九】誇　農父がほこりとく。【一〇】新尹　新任の成都尹嚴武、尹は府知事のごとき官職、上元二年建丑月（十二月）嚴武は成都尹となる。【一一】畜眼　めのなかにたくはへたところでは、農父なればかく俗つぽくいふなり、「滿眼」とでもいふべきところなり。【一二】大男　田父の長男。【一三】渠　「かれ」、俗語。【一四】弓弩手　ゆみ、いしゆみのかかり。【一五】飛騎　騎隊の名。【一六】籍　兵の名簿。【一七】長番　廠制、一萬五千の兵を六番に分けて更代す、今この飛騎は一番のみにていつまでも更代なきなり。【一八】歲時久　更代せぬゆゑあちらへいつてゐること久し。【一九】放　軍隊から放たれ還へされしこと。【二〇】衰朽　田父の老いの身をいふ。【二一】差科　雜役をいふ。【二二】死則已　死而止におなじ。【二三】擧家走　一家みんなで他鄉へにげゆく。【二四】大作社　さかんに社日の祝宴をなする。【二五】拾遺　作者をさす。【二六】婦　田父のつま。【二七】大瓶　大きなさかがめ。【二八】盆　大椀をいふ。【二九】酒　作者。【三〇】取　瓶より盆のなかへ酒をくみとる。【三一】氣揚揚　田父の氣前よろしきさま。【三二】風化首　舊注に郡守縣令、風化之首、の語をひけり、風化之首とは德風を以て人民を感化するものの首、先導者の義、ここは尹についていへるならん。【三三】語多　田父のことばかず多し。【三四】終在口　口からはなさずあくまでいふ。【三五】朝來　あさからかけて。【三六】卯　朝の名、朝六時頃。【三七】酉　夕の六時頃。【三八】久客　ながくとどまつてゐる旅客、自己をさす。【三九】惜人情　人情の淳樸得がたきを愛惜す。【四〇】拒鄰叟　隣家の老人の厚意を拒絶する。【四一】索　田父がもとめる。【四二】起　作者が起ちあがる。【四三】肘　田父が肘でおさへて前進をとどめる。【四四】指揮　さしづ。【四五】村野醜　ゐなかくさきみにくさ。【四六】嗔　いかりごゑをだす。【四七】問升斗　田父がその家内のものに酒のあるなしの分量をとひただすなり。

【題意】農家のおやぢが春の社日にむりにひきとめて酒をふるまひくれ、御史中丞成都尹嚴武をほめたてたことにでくはして作つた詩。寶應元年春の作。

【詩意】草履ばきで春風にさそはれながらぶらついてゆくと、村村にはひとりでに花がさいたり柳が煙つたりしてゐる。ある農家のおやぢが社日にせまつたので自分をむかへて酒をのませてくれた。酒の醉がまはるにつれおやぢが新任の尹のことをほこりがにときだす。「こんどの知事さまの樣のひとはわたしの目玉ではまだあんな人のあることをみたことがありません」と。それからちよいと頭をむけて長男の方をゆびざしして、「あれは弓弩掛りで、飛騎の軍籍に在るもので、更代なしの番役になからくでてをりましたが、前日おかみのおゆるしで放免になりまして百姓仕事をして骨折りながら衰朽しかけたこのおやぢをたすけてくれます、まだ雜役を仰せつかつて死ぬならば死ぬるまでのこと

でございます、我我どもは誓つて全家逃げだすやうなことはいたしませぬ。ことしはさかんに社日のお祝ひをやるのでございます、あなたここにゐてくださるかどうか。」といふておやぢは妻をよんで大きな酒瓶をあけさせ、自分（作者）のためにお椀のなかへ酒をくみとつてくれた。これはどうしても新任の尹が風化の先導者であるといふことが知らるるのである。このおやぢのことばかずは多くて亂雜ではあるが尹、尹、とたえず口からはなさず言うてをるのである。』　自分は朝からふと家を出たのだが朝の六時から夕の六時までにもならうとしてゐる。長い旅の身のうへはとかく人情のかざりけないのを愛するもので、どうしてこのとなりのおやぢの厚意をこばむことができようぞ。おやぢは大聲をだしてくだものはないか、栗はないかといふ。自分が起ちあがらうとすると時としては肘で自分をさしとめる樣にする。ひとの行動をさしづすることが無禮にすぎてはゐるが、そのゐなかくさいみにくさがめだつてはみえぬ。もう月がでた。がおやぢはまだ自分をさへぎつてひきとどめ、いままでどほりつのりごゑで一升あるのか一斗あるのかなどとせんぎだてしてゐる。』

奉和（一）嚴中丞（二）西城晩眺十韻

嚴中丞が西城晩眺を和し奉る十韻

（三）汲黯（四）匡君切。（五）廉頗（六）出將頻。　汲黯君を匡すこと切なり、廉頗、出將頻なり。

（七）直詞才不世。（八）雄略動如神。　直詞、才、世ならず、雄略動くこと神の如し。

（九）政簡（一〇）移風速。（一一）詩清（一二）立意新。　政簡にして風を移すこと速に、詩清くして意を立つること新なり。

（一三）層城臨（一四）暇景。（一五）絶域望（一六）餘春。　層城、暇景に臨み、絶域、餘春を望む。

（一七）旗尾（一八）蛟龍會。（一九）樓頭（二〇）燕雀馴。　旗尾、蛟龍會す、樓頭、燕雀馴る。

（二一）地平（二二）江動蜀。天潤（二三）樹浮秦。　地平にして江、蜀に動き、天潤くして樹、秦に浮ぶ。』

（二四）帝念（二五）深分閫。（二六）軍須（二七）遠算緡。　帝念、分閫に深く、軍須、算緡を遠ざく。

（二八）花羅（二九）封（三〇）蛺蝶。（三一）瑞錦（三二）送麒麟。　花羅、蛺蝶を封じ、瑞錦、麒麟を送る。

（三三）辭第（三四）輸高義。（三五）觀圖憶古人。　辭第、高義を輸し、觀圖、古人を憶ふ。

（三六）征南多（三七）興緒。（三八）事業（三九）闇相親。』　征南、興緒多し、事業、闇に相親しむ。』

【字解】【一】嚴中丞　嚴武。【二】西城晩眺　嚴武が作りし詩の題なり、成都の西城にて夕がた景色をながめしことをよめり。【三】汲黯　漢の武帝の時の人、大中大夫となりしばしば切諫す。【四】匡君　君の惡事を正す。【五】廉頗　戰國時代の趙國の武將。【六】出將　他の地へ出でて將となること、嚴武の處處へ節度使となりていでしをいふ。【七】直詞　直言を吐くこと、「匡君」の句を承く、不世、不世出の義、まれにしかでぬ。【八】雄略　をゝしきはかりごと、「出將」の句を承く。【九】政簡　政治の仕方簡單なり。【一〇】移風　民の惡風を良風にかへる。【一一】詩淸　淸はさつぱりとしてゐること。【一二】立意　意匠のたてかた。【一三】層城　いくへかかさなつた城。【一四】暇景　暇は遐の誤字なるべし、遐景ははるかなる景色。【一五】絶域　かけはなれたばしよ、成都の

地をなさす。【一七】餘春　春ののこんのけしき。【一七】旆尾　旆は竿頭に鈴のついたはた。そのはたの旒に蛟龍をゑがく、尾ははたのすゑをいふ。【一八】蛟龍　畫のそれをさす。【一九】樓頭　樓は城樓。【二〇】燕雀　これは實物をいふ。【二一】地平二句　卽ち眺望の實景。【二二】江動蜀　江は岷江、江水蜀地に於て動き流る。【二三】樹浮秦　樹色遠く秦（長安）の方へ平につらなるさま。【二四】帝念　天子のおこころ。【二五】深分閫　「漢書」馮唐傳に、古者、命ㇾ將、跪推ㇾ轂曰、閫以外將軍制ㇾ之の語あり、閫は門の「しきみ」なり、天子大將を遣はすに、城門を出たうへは門外の事は全部權力を之に一任するといふなり、分閫は閫內、閫外を分つなり。【二六】軍須　軍需なり、軍事についていりようなもの。【二七】違算緡　孔のあいた錢を貫く絲を緡といふ、凡そ千錢を一貫とし、稅二十錢をいだす、緡を算するは人民の財產しらべをして稅を取るためなり、違とはそんな方法にちかよらぬ樣にすること。【二八】花羅　うつくしいうすぎぬ。【二九】封、送　天子の方で之を封じ之を送りよこされること。【三〇】蛺蝶　てふてふ、羅の模樣なり。【三一】瑞錦　うつくしいにしきのおりもの。【三二】麒麟　錦の織紋。【三三】辭第　漢の霍去病の爲めに天子が第宅を治めたまはんとせしに、去病は匈奴未ㇾ滅、何以ㇾ家爲（家を以て何をか爲さんの意）とて之を辭したり、嚴武亦之と似たるをいふ。【三四】輸高義　輸とは武の方から天子に對して之を致すをいふ。【三五】覩圖憶古人　圖は蜀道畫圖をいふ、蜀の圖を觀て政治に資せんとするなり、その事古人と似たり、作者別に「同嚴公詠蜀道畫圖詩」あり。晉の文帝嘗て有司に命じて吳蜀の地圖を撰せしめ、之により攻戰の方略を定めしことあり、古人とはこの類是なり。【三六】征南　晉の杜預、卒して征南大將軍を贈らる、作者の十三世の祖なり。【三七】興緒　舊解說なし、或は立碑峴山の類をさすといふも詩と關係なし。愚案するに卽ち西城晩眺の事を指すのみ、此句は本題にしてしかも陪句なり、次の句が主旨の存する所なり。【三八】事業　杜預は伐吳の計を建てたり、嚴武必ず平蜀の功を立つるならんといふなり。【三九】關相親　親は近き意なり。

【題義】嚴武が西城晩眺の詩を作つたについて、それに和してつくつた詩。寶應元年春の作。

【詩意】汲黯に比すべき君は天子のわるいところを切にただし、廉頗に比すべき君は頻に武將として地方へ出でられる。君の直言は世每には出ぬほどまれなものであり、君の雄略はそのはたらき神明のごときものである。この樣な君であるからその政は簡單でしかも速に惡風俗を易へ、また詩才があつてその詩は淸で意匠は新しい。君は高い城で遠き風景に臨みてみおろし、蜀のごとき絕域に於て春ののこんの景色をながめられる。』その建てられたはたには蛟龍の畫すがたが會合し、君の立つ城樓のうへの方には燕や雀もなれしたしんでゐる。それから土地は平で江水が動きながれ、天はひろくして樹色が遠く秦地の方までうかんでみえる。』天子は君に對して閫外の任をお託しになるおぼしめしが深く、軍需についてはなるたけ人民から稅金を取らぬ樣にとの方針である。それで或は蛺蝶の模樣のある羅を封じて賜はり、或は麒麟の紋樣のある瑞錦の織物を送りつかはされる。之に對して、君は恩寵になれず、霍去病のごとく第宅を賜はらうとしても之を御辭退するほどの高義を致し、蜀の治亂安危に心をとどめて蜀の地方の圖を觀ては古人の風をおもうてをられる。吾が遠祖征南大將軍にも比すべき君は巳に風景などながめて政治の餘暇の興趣にとんでをられるが、それよりも自家のうちたてられんとする功業に於て君はそれとなく征南に近いものがある。』

中丞嚴公雨中垂(一)ㇾ寄見(二)ㇾ憶一絕奉ㇾ答二絕

中丞嚴公雨中に憶はるる一絕を垂寄す答へ奉る二絕

〔二〕

雨映行宮辱贈詩。(三)　雨行宮に映す、贈詩を辱くす、
元戎肯赴野人期。(四)　元戎肯て野人の期に赴かむとす。
江邊老病雖無力。(五)　江邊老病　力無しと雖も、
强擬晴天理釣絲。(六)　强ひて晴天、釣絲を理めむと擬す。

【字解】〔一〕乘寄　寄することを乘る、よせてくださつたといふこと。〔二〕見憶一絕　こちらを憶うてくれた絕句一首。〔三〕雨映行宮　これは嚴武が詩中の字句を切りとりしものなるべし、卽ち贈詩中のもの。行宮は成都の城内にありて玄宗が蜀に幸したまひしときのかりごてんなり、もと天寶中に鮮于仲通といふ者が建てしものなり、のちに武人そこに住む。嚴武が原作に雨映行宮云云といひこせしとみゆ。〔四〕赴野人期　野人は自己をさす、赴期とは約束の期會にでかけるなり。〔五〕江邊　錦江のほとり。〔六〕理釣絲　つりいとを整理する、お客がきたならばともに魚をつらんとおもふなり。

【題義】御史中丞嚴武が雨のふる日に自分を憶うてくれる詩一首を寄せてくれた。因つてそれに答へる詩。寶應元年建巳月（四月）の作ならん。

【詩意】あなたから雨映行宮云云の贈詩をかたじけなうした。それによるとあなたは元戎の身で自分のやうな野人との約束の期限にでかけられるとのことだ。自分は江のほとりで老いかつ病んで體力は無いが、しひて天氣のいいときに釣絲をととのへようとまちかまへてゐる。

〔三〕

何日雨晴雲出溪。(一)　何の日か雨晴れて雲溪を出で、
白沙青石洗無泥。(二)(三)　白沙青石洗はれて泥無からむ。
只須伐竹開荒徑。(四)　只須らく竹を伐りて荒徑を開き、
倚杖穿花聽馬嘶。(五)(六)　杖に倚り花を穿ちて馬嘶を聽くべし。

【字解】〔一〕雲出溪　雲が浣花溪を出で去るをいふ。〔二〕白沙青石　溪邊のものにして、釣をたるるときに關係あるなり。〔三〕洗無泥　雨にあらひきよめられて泥がついてならぬ。〔四〕荒徑　やぶやぶとしたこみち。〔五〕穿花　花のこのまをくぐる。〔六〕馬嘶　嚴武ののれる馬のいななくこゑ。

【詩意】いつになつたら雨が晴れて雲が溪からでてしまひ、白い沙も青い石も洗ひきよめられて泥なしになることであらう。さうなつたら竹をきつてにはさきのこみちをとほれるやうにあけ、杖により花の間をくぐりぬけてお客の馬のいななくのをきくばかりのことである。

謝嚴中丞送青城山(一)道士(二)乳酒(三)一瓶

嚴中丞が青城山の道士の乳酒一瓶を送りしを謝す

山瓶乳酒下青雲。(四)　山瓶の乳酒、青雲より下る、
氣味濃香幸見分。(五)　氣味濃香　幸に分たる。
鳴鞭走送憐漁父。(六)(七)　鞭を鳴らし走り送らしむるは漁父を憐む、

【字解】〔一〕青城山　卷十に「丈人山」の詩あり、就て看るべし。〔二〕道士　道教の坊主。〔三〕乳酒　乳でつくりし酒か、乳に似たる

洗盞開嘗對馬軍。　盞を洗ひ開き嘗めて馬軍に對す。

酒か明ならず。【四】下青雲 山奥からきた酒ゆゑ青雲よりくだるといふ。【五】見分 分けてくれた。【六】鳴鞭走送 すなはち馬軍をよこしたこと。【七】漁父 自己をさす。【八】盞 盞のあるさかづき。【九】馬軍 走りづかひの騎兵。

【題義】嚴武が青城山の道士がこしらへた乳酒ひとかめ送つてくれたことにつきお禮をのべた詩。寶應元年の作。

【詩意】山中のかめにつめた乳酒が青雲のゐるところから下界へおりてきた。その酒は氣香しく味濃かなものである。かかるめづらしきしなを幸におわけくださつた。すなはちあなたが馬軍に鞭をならさせて走つて送りとどけさせてくださつたのはこのすなどりおやぢを愛憐されたためである。わたくしはその馬軍に對して早速さかづきをあらひかめをあけて酒を頂戴いたしました。

三絶句

〔一〕

楸樹馨香倚釣磯。　楸樹馨香ありて釣磯に倚る、

斬新花蘂未應飛。　斬新の花蘂未だ應に飛ぶべからず。

不如醉裏風吹盡。　如かず醉裏風吹き盡さむには、

何忍醒時雨打稀。　何ぞ忍びむ醒時、雨打稀なるに。

【字解】【一】楸 「かや」の類。【二】馨香 花のかをりあるをいふ。【三】釣磯 つりをたるるいそべ、江岸をいふ。【四】斬新 まあたらしきこと。【五】雨打稀 花が雨にうたれてまれになる。

【題義】楸花のことをよめる詩。寶應元年の作。

【詩意】楸のきの花がかをりをもちながらいそばたによつて立つてゐる。その花はいまさいたばかりのまあたらしい花だから飛び散るはずがないのに飛び散る。そんなことなら自分の醉つてゐるうちにみんな風が吹きとばして散らしてしまうた方がいいのだ。醉はずにゐるときにそれが雨にうたれてのこりすくなになるのをどうしてがまんしてみてゐられるものか。

〔二〕

門外鸕鷀去不來。　門外の鸕鷀去つて來らず、

沙頭忽見眼相猜。　沙頭忽ち見て眼相猜す。

自今已後知人意。　今より已後、人意を知らば、

一日須來一百迴。　一日須らく來ること一百迴すべし。

【字解】【一】鸕鷀 うのとりの類。【二】去不來 去の字或は久に作る、去は立ち去ること、久はいままでながくの意。【三】相猜 相とあれども鸕鷀が猜するをいふ、猜とはうたがひの念をもつこと、おのれを害するに非るかとうたがふなり。【四】知人意 人意とは作者の意をいふ、作者は鸕鷀に親しまんとの意こそあれ之を害せんなどの意はすこしもなし。

【題義】江邊の鸕鷀のことをよめり。

【詩意】わが家の門外の鸕鷀がどこかへいつて（或は「ながなが」）こなかつたが、このたびまたやつてきて沙頭で自分と見あひ、なんだかうたぐりぶかい樣なかつかうをしてゐる。鸕鷀よ、おまへは今日からは自分のこころもちがわかつたらうから、毎日百迴づつもやつてくるがよいぞよ。

〔三〕

無數春筍(一)滿林生。
柴門密(二)掩斷人行。
會(三)須上番(四)看(五)成(六)竹。
客(七)至從(八)嗔不出迎(九)。

〔三〕

無數の春筍、滿林生ず、
柴門密かに掩うて人行斷ゆ。
會ず須らく上番看て竹と成すべし、
客至るも嗔るに從す、出で迎へず。

【字解】〔一〕筍　たけのこ。〔二〕密掩　ひとしれず門をとざしておく。〔三〕會　必す。〔四〕上番　初回のこと、初回に出た筍のことをいふ。〔五〕看　看守ること。〔六〕成竹　しあげて竹にする。〔七〕客　來訪の賓客。〔八〕從嗔　いかるにまかす。〔九〕出迎　こちらがでむかへる。

【題義】春のたけのこのことをよめり。

【詩意】數しれぬ春のたけのこが林ぢうにはえた。このとき自分はわがやの柴の門をこつそりとざしてだれも門前にとほるものもない。自分は最初でたたけのこをば看まもつて竹にしあげ、あたりを竹だらけにしていくらおきやくがきてまごついておこらうともかつてにおこらせて自分は竹林にかくれてでむかへなどせぬ樣にしようとおもふのだ。

戲爲六絕句。

戲れに六絕句を爲る

〔一〕

庾信(一)文章老更成(二)。
凌雲(三)健筆意縱橫。
今人(四)嗤點(五)流傳賦(六)。
不覺(七)前賢畏後生(八)。

〔一〕

庾信が文章老いて更に成る、
凌雲健筆、意縱橫。
今人嗤點す流傳の賦、
覺らず前賢、後生を畏れしことを。

【字解】〔一〕庾信　北周の人、初、梁に事へ、のち周に使して留められ遂に周に仕ふ。南朝の徐陵とともに徐庾として並稱せらる。〔二〕老更成　老年に至りてさらに成熟す。〔三〕凌雲健筆　健筆凌雲に同じ。〔四〕今人　作者同時代の輕薄文士をさす。〔五〕嗤點　ここがどう、かしこがどう、とわらつてゆびさしする。〔六〕流傳賦　庾信の名作として傳へられつつある賦、信が哀江南賦、枯樹賦、其他名あるもの多し。〔七〕不覺　今人之をさとらず。〔八〕前賢畏後生　此句諸解一ならず、余は余が見をのぶ、前賢畏後生とは孔子が後生可畏といはれしことをいふ、前賢とは前代の賢人にて孔子をさす、後生はわかもの、後進の義、庾信は風騷の作者、又は屈原、宋玉、漢魏の作者等に對すれば後生なりといふべし、しかし後生にも畏るべきものあるなり、たとへば庾信の如きこれなり。

【題義】作者戲れにつくりし六首の絕句なり。しかし決して戲れにはあらずまじめなる文學上の議論をのべたり。第一首は今人の無識をそしれり。仇氏は梁氏に從ひ上元二年の作なりとせり。

【詩意】北周の庾信はその文章は老年になつてからさらに成熟し、その健筆は雲をもしのぎ、その意は縱橫にのべてある。かういふところを知りもせず今の人たちが傳來の庾信の賦をかれこれいひくさすが、彼等はむかしの聖賢も「後生畏るべし」といはれた意味をしらぬものである。庾信は後生ではあるが畏るべき人なのである。

〔二〕

楊王盧駱當時體。 楊王盧駱、當時の體、
輕薄爲文哂未休。 輕薄、文を爲つて、哂うて未だ休まず。
爾曹身與名俱滅。 爾が曹、身、名と俱に滅す、
不廢江河萬古流。 廢せず江河萬古の流。

【字解】〔一〕楊王盧駱 楊炯・王勃・盧照鄰・駱賓王、初唐の四傑と稱せらるる文學者。〔二〕輕薄 すなはち輕薄の文士。〔三〕爾曹 汝等、輕薄文士をさす。〔四〕江河萬古流 四傑の作品をたとへていふ。

【題義】此の第二首は初唐四傑をあしくいふ文士をそしれり。

【詩意】初唐のとき楊王盧駱の四傑が華麗な詩文を作つた。そのころの文體をいまの輕薄文士どもはわらうてやまない。之を笑ふところの汝等こそはからだも名もともにほろびてしまふのであるが、四傑の作品は江河の水が萬古滾滾として流れてつきぬごとくすたることのないものなのである。

〔三〕

縱使盧王操翰墨。 縱ひ盧王をして翰墨を操ること、
劣於漢魏近風騷。 漢魏の風騷に近きより劣らしむるも、
龍文虎脊皆君馭。 龍文虎脊皆君が馭なり、
歷塊過都見爾曹。 歷塊過都爾が曹を見む。

【字解】〔一〕縱使 この二字末句までへかかる。〔二〕盧王 前篇にみゆ、ここは盧王をいひて楊駱をいはざれどもすべて四傑についていへるならん。〔三〕操翰墨 ふですみをとる、文章をつづるをいふ。〔四〕漢魏近風騷 風は詩經の詩をさしていふ、騷は屈原宋玉等の辭文をいふ。漢魏時代の作品は風騷のおもかげありと稱せらる。〔五〕龍文虎脊 駿馬のすがたなり、四傑を駿馬にたとふ、龍文の語は漢書西域傳贊にみえ、虎脊は漢の天馬歌にみゆ。〔六〕君馭 馭は御におなじ、馬をあやつること、ここはあやつるにたへるものの義、君の字は人君をさすとする說と一般人をさすとする說とあり、余は一般人とみる。〔七〕歷塊過都 漢の王褒の聖主得賢臣頌の「過都越國・蹶若歷塊」に本く。ただしここは蹶くの義に用ひしに似たり、「都を過ぐるとき塊を歷てつまづくごとく」といふほどの義。〔八〕爾曹 輕薄文士の四傑をわらふ者をさす。

【題義】此第三首四傑を辯護すること第二首と似たり。

【詩意】四傑に詩文を作らせたとして、それは漢魏が風騷に近いおもむきがあるのとくらべれば劣るにしても、どうして四傑の作品はたいしたものだ、たとへば龍文虎脊のすがたをした駿馬のごとくみな人の馭すべき乘りものたるに十分なるものである。而してそれをわらふ汝等こそは馳せて國都をすぐるとき塊を歷てつまづく駑馬のごとく、そのときはじめて汝等の駑馬たるを見うるならん。

〔四〕

才力應難跨數公。 才力應に數公に跨り難かるべし、
凡今誰是出羣雄。 凡そ今誰か是れ出羣の雄なる。
或看翡翠蘭苕上。 或は看る翡翠蘭苕の上、
未掣鯨魚碧海中。 未だ鯨魚を掣せず碧海の中。

【字解】【一】才力 文學者の才能力量。【二】跨 またがる、こゆるをいふ。【三】數公 庾信、四傑の輩をさす。【四】出羣雄 拔羣の英雄。【五】翡翠 「かはせみ」の鳥羽毛うるはし。【六】蘭苕 「らん」のはなぶさ、此句は作品の華麗なるにたとふ。【七】掣 ひきてひしぐをいふ。【八】鯨魚 いさな、海中の大魚。此句は作品の雄健なるにたとふ。

【題義】今人中に大文豪なきをいふ。暗に自己の理想をのべたり。

【詩意】今人は古人のことをかれこれいふが、その才力に於て前述の數公よりまさることはむつかしいであらう。いつたいいまはだれが拔羣の英雄なのだ。蘭の花ぶさのうへに翡翠がとまつた樣な華麗なすがたをしたものは或はみとめうるが、碧海の中に鯨魚をとりひしぐ樣な雄健なるものはないではないか。

〔五〕

不薄今人愛古人。 今人を薄んせず古人を愛せば、
清詞麗句必爲鄰。 清詞麗句必ず鄰を爲す。

【字解】【一】薄 さげすんでみること。【二】今人 比較的近代の人をさす、四傑の如きもこれなり。【三】古人 庾信をはじめ六朝以上の人人はみな古人なり。【四】爲鄰 わが手もとちかくにあるをいふ。

竊攀屈宋宜方駕。 竊に屈宋を攀ち宜しく駕を方ぶべし、
恐與齊梁作後塵。 恐らくは齊梁と後塵と作らむ。

【五】攀 古代の人ゆゑたかくよぢのぼるといへり。【六】屈宋 屈原、宋玉。【七】方駕 車をひく馬がかぢ棒をそろへてはしる樣にする。【八】與齊梁 與とは「於て」といはんがごとし、比較の辭なり。【九】作後塵 後塵とは車がはしるとき風下におこるちりほこりをいふ、後塵と作るとは後塵を拜する人となるをいふ、齊・梁は六朝の中期にて文學最も華麗綺靡となり、しかも雄健の風、衰へし時期なり。

【題義】古今を併せてしかも理想をたかくもつべきことをいへり。

【詩意】近代の人をも輕視せず古代の人をも愛するときは清詞麗句は必ずわが手もとちかくにあるものである。しかし理想はたかくすべし、內心には屈原、宋玉、以上のところに攀ち、彼等とくつわをならべて馳すべきである。理想のもちかたがひくければ齊梁時代にくらべて却つてその後塵を拜むに終るのおそれがあるのである。

〔六〕

未及前賢更勿疑。 未だ前賢に及ばざるも更に疑ふこと勿れ、
遞相祖述復先誰。 遞に相祖述す復誰をか先にせむ。

【字解】【一】前賢 第一首の前賢とは語は同じきも義は異なり、ここは前代の作家をさす。【二】祖述

別裁僞體親風雅。 別に僞體を裁して風雅に親しむ、

轉益多師是汝師。 轉益、多師なるは是れ汝が師なり。

祖として述べる、後人はその前代作家の作品を祖師として之に從て我が思想をのべる。【三】先輩 「誰なか先にせん」とは「誰なか先にし、また誰なか後にせん」との意なり、甲乙の間に必しも優劣の差異を甚しくつけざるをいふ、つまり荀も一長あるものは皆祖述すべしとの意、（舊解に此句を古人を祖述するを非とする義と爲せり、余之を取らず）。【四】別 特別に、此語は前代のものすべてを祖述すべしといふには非ることを注意するなり。（舊解に區別する義とせり。今從はず）。【五】裁 刀にてたちてすてる。【六】僞體 風雅にそむけるにせのすがた。

【題義】すべてよきものはみな師とすべしとの意をのぶ。此第六首をみれば杜甫が古今の諸長を集めて大成せし所以を知るに足らん。

【詩意】諸君は自己が前代のすぐれた作者に及ばないからとて少しも疑ひの念をもつにはあたらぬ。我我は前代作家をたがひに祖述しゆくものであつてだれを先きにせねばならぬとかだれを後にせねばならぬとかいふことはないのである。しかし特別に風雅の正體と風雅の精神を得ない僞體とは區別せねばならぬ、そしてその僞體は之をきりすてて正體には親しむ。かくしていよいよ我が師とするものが多ければ多いほど、これが諸君にとつての眞の良師なのである。

野人送朱櫻

野人朱櫻を送る

西蜀櫻桃也自紅。 西蜀の櫻桃も也自から紅なり、

野人相贈滿筠籠。 野人相贈りて筠籠に滿つ。

數回細寫愁仍破。 數回細寫す仍破れむことを愁ふ、

萬顆匀圓訝許同。 萬顆匀圓許ごとく同じきかと訝る。

憶昨賜霑門下省。 憶ふ昨賜霑す門下省、

退朝擎出大明宮。 退朝擎出す大明宮。

金盤玉筯無消息。 金盤玉筯、消息無し、

此日嘗新任轉蓬。 此の日嘗新、轉蓬に任す。

【字解】【一】野人 ひやくしやう。【二】朱櫻 さくらんぼ、みざくら。卽ち詩中の「櫻桃」是なり。【三】西蜀 西方蜀の地、西とは都に對していふ。【四】也 「亦」に同じ、都の櫻桃に對していふ。【五】相贈 こちらへおくつてくれしこと。【六】筠籠 筠は竹幹の色ないふ字なれども竹籠のことを筠籠といへり。【七】細寫 すこしづつ籠から瀉しだすをいふ、實のこはれぬためなり。【八】愁 作者が心配する。【九】仍破 仍は「それでもなほ」、破は破損の意。【一〇】匀圓 そろつてまるい。【一一】許 此くのごとく。【一二】同 みなどれも一様のまるさをもつてゐる。【一三】昨 往年左拾遺として長安にありしとき。【一四】賜霑 この實を天子よりたまはり、その惠みの露にうるほふ。【一五】門下省 長安の宣政殿の東にあり、左拾遺の官はそこに隷屬す。【一六】退朝 朝廷よりまかりしりぞく。【一七】擎出 ささげていづる。【一八】大明宮 禁苑の東にあり、已に前にみゆ、唐にては四月一日に天子の御園より櫻桃をとりて之を宗廟に薦む、訖りてそれぞれの官にも之を賜ふ。【一九】金盤 黃金の大皿。【二〇】玉筯 玉にてつくりし「はし」、櫻桃を盛り、之を摘むに用ふる器具なり。【二一】無消息 盤・筯についてのたよりなし、此句は肅宗の崩御の意をふくみていへるものなりと、肅宗は寶應元年四月十八日丁卯に崩ぜられたり、もし崩御を意味すとせば此詩はその報知が成都につたはりし以後の作なり、余は單に消息なしと

いふだけにて必しも崩御の意をふくまぬものとおもふ。【三】此日　作者が之をたべたその日。【三】嘗新　新味をなむること。【二】轉蓬　よもぎの葉のころがりゆく如く飄泊の生活をなすをいふ。

【題義】 ある百姓が櫻の實を送りこしたについてよめる詩。上元・寶應の間、成都にての作。

【詩意】 ここの蜀の櫻桃も都とおなじく紅である。その實をひやくしやうが竹かごにいつぱい贈つてくれた。かごからあけるときに三四度もすこしづつうつすのだがそれでも實が破損しはせぬかときづかはれ、また千個も萬個もつぶがそろつて圓いのでよくもこんなに同じくそろつたものだとふしぎにおもふほどである。おもへば前年門下省につとめてゐたとき我我までもこの實の御下賜の恩典があり、朝廷からまかりしりぞくとき大明宮から頂戴の實をささげて退出したものだ。しかるに今や自分はこの蜀の遠方に居て前日の金盤や玉筯を用ひて臣下にこの實をたまはる樣子如何についてはさらに消息が無い。ただけふこそこんな新味をなめて飄泊のままにくらしてゐるといふありさまである。

【餘論】 唐の王維・韓愈・竝に櫻桃に關する詩あり、併せて此に錄す。王維が作に曰く

芙蓉闕下會千官　紫禁朱櫻出上闌
纔是寢園春薦後　非關御苑鳥啣殘
歸鞍競帶青絲籠　中使頻傾赤玉盤
飽食不須愁內熱　太官還有蔗漿寒

韓愈が作に曰く

漢家舊種明光殿　炎帝還書本草經
豈似滿朝承雨露　共看傳賜出青冥
香隨翠籠擎偏重　色照銀盤寫未停
食罷自知無補報　空然慚汗仰皇扃

(一)嚴公仲(二)夏枉駕草堂兼攜酒饌(三)得(四)寒字

嚴公仲夏駕を草堂に枉げ兼て酒饌を攜ふ、寒の字を得たり

(五)竹裏行(六)廚洗(七)玉盤　竹裏行廚、玉盤を洗ふ、
花邊立(八)馬簇金鞍　花邊馬を立てて金鞍簇る。
非關(九)使者徵求急　使者徵求の急なるに關するに非ず、
自識將(一〇)軍禮(一一)數寬　自ら識る將軍禮數の寬なるを。
(一二)百年地(一三)僻柴門(一四)迴　百年地僻にして柴門迴に。
(一五)五月江(一六)深草(一七)閣寒(一八)　五月江深うして草閣寒し。

【字解】【一】嚴公　嚴武。【二】仲夏　五月。【三】饌　食物。【四】得寒字　主客共に詩を賦し、その用ふる韻字に「寒」の字があたつたこと本詩は第六句に寒の字押韻せり。【五】竹裏　草堂の庭のたけやぶのなか。【六】行廚　攜帶してきた臺所。【七】玉盤　玉の大皿。【八】立馬　馬は從者の騎馬。【九】使者

看（一九）弄（二〇）漁舟移（二一）白日。　看漁舟を弄して白日移る、
老農（二二）何有罄（二三）交歡（二四）。　老農何ぞ交歡を罄す有らむ。

徵求急　「莊子」にみえたる顔闔が故事を用ふ、昔に顔闔といへる賢人あり、魯君よりめしだしの使者至る。闔對へて曰く、もしききあやまりこれありてはすまぬゆゑ、願くはかへりて果して闔をめすやいなやただされよと。使者もどりしに闔はそのまによそににげ去れり。ここの使者は嚴武をいふ、武は地方官なれば天子の使者なり、徵求は賢者をめし求むるなり。【一〇】將軍　嚴武は節度使なれば之を將軍といへり。【一一】禮數寬　禮數とは禮儀をいふ、すべて禮儀には階級あるゆゑ度數はつきものなり、故に禮數といふ、寬とは人に求むるに嚴重ならぬをいふ。【一二】百年　生涯をいふ。【一三】地僻　僻はかたよること。【一四】遠　城中よりしてははるかなること。【一五】五月　卽ち題の仲夏。【一六】江　錦江。【一七】草閣　草堂。【一八】寒　仲夏なれば本來は寒くはなきなれども竹林中に在りて清江の深きにのぞめるを以て寒くおぼゆるなり。【一九】看　看看におなじ。【二〇】弄漁舟　魚をとる舟、釣網のあそびをなすをいふ、嚴武がかくするなり、前に見えし「晴天理釣絲」の句などがこれにあたる。【二一】移白日　これは人よりいはば消白日などいふべきなるも、白日よりいふ故に移といへり、移白日は白日移とおなじ、一日の時間のたつをいふ。【二二】老農　としよりの百姓、作者自己をいふ。【二三】罄　つくす。【二四】交歡　たがひによろこぶ、末句は謙遜の辭なり。

【題義】嚴武が五月にわざわざ草堂をたづね、そのうへ酒や食物まで持參でやつてきてくれたときに作つた詩。但し韻を分けて自分は寒の字を得てつくつたのである。寶應元年五月の作。

【詩意】わが草堂の花のさいたあたりには金鞍をむらがらせて馬が立ちならび、竹林のなかでは臺所かたが玉盤を洗うてゐる。かく節度使たる嚴武がたづねてくれたのは急に自分をめしださうといふ樣な事に關してではない、かれがここまできてくれるといふのはまつたく自分如き無作法ものを寬大にもてなしてくれるといふに外ならぬことを自分はしつてゐる。自分が生涯をおくるこの地はかたゐなかでわが柴門は城中からはかけはなれてをり、五月にあたつて江水ふかうして草堂も寒くおぼゆるのである。ここで武は釣網などをするのをみながらけふの日をしらぬまにすごしてくれた。このひやくしやうおやぢがなんで節度使たるものと十分のうれしさをかはしたといふほどのことがあらうぞ。

【餘論】此詩の後半の平側は正式に違へり。

嚴公廳宴同詠蜀道畫圖得空字（一）

嚴公の廳宴に同じく蜀道の畫圖を詠ず、空の字を得たり

日臨公館靜。畫（三）滿地圖雄。　日臨みて公館靜なり、畫滿ちて地圖雄なり。
劍閣（四）星橋（五）北。松州雪嶺（六）東。　劍閣は星橋の北、松州雪嶺は東なり。
華夷（七）山不斷。吳蜀（八）水相通。　華夷、山斷えず、吳蜀、水相通ず。
興（九）與煙霞（一〇）會。淸樽幸不空（一一）。　興、煙霞と會す、淸樽幸に空しからず。

【字解】【一】廳宴　廳は成都城の府の公堂、卽ち詩中の「公館」、宴はそこでのさかもり。【二】蜀道　蜀の棧道、陝西漢中府より四川の成都府へ通ずる道路なり。【三】畫滿　滿といへば多くの畫をへやいつぱいにならべしこと。一に列に作る、列はならぶること。【四】劍閣　劍門なり。【五】星橋　李氷の造る所、成都にありと。【六】松州雪嶺東　此句は上句の例によれば、松州ハ雪嶺ノ東とよむ

べきに似たり、（趙注にてはしかよませたり）、しかるに仇氏は雪山（卽ち雪嶺）在二松州嘉城縣東八十里一といふを引き、劍橋在二星橋之北一松州則雪嶺居二東といへり、卽ち松州雪嶺ハ東ナリとよませたるなり、（余は「劍閣・星橋」ノ北、「松州・雪嶺」ノ東、とよますかとも疑ふも敢て愚見を守らず。）今かりに仇氏によりおく。【七】華夷　支那本土と夷狄の地と。【八】吳蜀　吳は江蘇・浙江の地方をさす。【九】興　詩興。【一〇】煙霞　圖中の山水に伴ふもの。【一一】空　酒のからなること。

【題義】嚴武の官邸の酒宴にて蜀道の畫圖を觀てともに詠じた詩。寶應元年成都にての作。

【詩意】日が官邸のうへにかかつてやかたが靜である。そのをりざしきぢう畫がならべられ蜀道の地圖のさまは最も雄大にみえる。星橋の北には劍閣があり、松州では雪嶺がその東に橫はつてをる。中國の方から夷狄の地へかけて山はつづいて斷えぬし、吳の方まで蜀から江水が相通じてゐる。これをみるとわが詩興が煙霞の景と合致するものがある、幸に酒だるもからつぼでないからいよいよ興がつきぬ。

戲贈友二首

戲れに友に贈る　二首

元年建巳月。郎有焦校書。
元年建巳の月、郎に焦校書有り。

自誇足膂力。能騎生馬駒。
自ら誇る膂力足り、能く生馬駒に騎ると。

一朝被馬踏。脣裂板齒無。
一朝馬に踏まれ、脣裂けて板齒無し。

壯心不肯已。欲得東擒胡。
壯心肯て已まず、東のかた胡を擒にするを得むと欲す。

【字解】【一】元年　寶應元年。【二】建巳月　上元の末に建子月（十一月）を歲首とせしこと前に見えたり、子よりかぞへ來れば巳の月は四月にあたる。【三】郎　校書郎の官。【四】焦校書　校書郎焦某。【五】膂力　せぼねの力。【六】騎　のる。【七】生馬駒　馬または駒のならされてゐぬもの。【八】板齒　まへば。【九】東擒胡　東は東北をいふ、擒はいけどりにすること、胡は安・史の賊黨。

【題義】たはふれに友人に贈つた詩。いづれも馬から墜ちた人人なり。寶應元年四月成都にての作。

【詩意】元年の四月に校書郎に焦某といふものが有り、みづからせぼねの力が十分あつて、ならされてゐぬ馬にものれると誇つてゐた。ところが一朝馬にふまれて、脣は裂かれ前齒はなくなつてしまつた。それでも焦はその壯な心は已まうとはしない、まだいくさに出かけて東のかた胡賊をいけどりにしたいものだといふてをる。

〔二〕

元年建巳月。官有王司直。
元年建巳の月、官に王司直有り。

馬驚折左臂。骨折面如墨。
馬驚いて左臂を折る、骨折れて面墨の如し。

駑駘漫深泥。何不避雨色。
駑駘、深泥を漫にす、何ぞ雨色を避けざる。

勸君休嘆恨。未必不爲福。(六)　君に勸む嘆恨するを休めよ、未だ必ずしも福爲らずんばあらず。

【字解】【一】王司直　東宮の官にも大理寺の官にも司直と稱するものあり、王はいづれに屬せしか不明、王は其名詳ならず、作者のちに王郎司直に贈れる歌あり、同人ならん。【二】如墨　蓋し泥土にけがされしならん。【三】駑駘　だうま。【四】漫　漫はみだりにす、どろかどろでないかをみきはめず、よいかげんにあるくをいふ。漫一に慢に作る。【五】雨色　色の字深き義なし、あまげしきといふことなるも雨をいふなり。【六】未必一句　暗に塞翁が馬の故事を用ふ、塞翁の子馬よりおち腕を折りしため軍役にやられて死することをまぬかれたり。

【詩意】元年の四月に王司直といふ官員があり、そののれる馬がものに驚いて王は左の臂を折つた。骨は折れたし面はどろまみれで墨の様にくろくなつた。駄馬は深い泥みちでもよいかげんにあるくものだ、なんで雨模様のときを避けなかつたのだ。君にすすめるが、臂が折れてもなげきうらむなよ、塞翁の子の様にそれが幸福にならぬともかぎらぬから。(これはたはふれにいへるなり)

大雨

大雨

西蜀冬不雪。(一)春農尚嗷嗷。(二)(三)　西蜀、冬、雪ふらず、春農尚嗷嗷たり。

上天(四)回哀眷。(五)朱夏(六)雲鬱陶。(七)　上天、哀眷を回らす、朱夏、雲鬱陶たり。

執熱(八)乃沸鼎。(九)纖絺(一〇)成縕袍。(一一)　執熱乃ち鼎を沸す、纖絺、縕袍と成る。

風雷颯(一二)萬里。霈澤(一三)施蓬蒿。(一四)(一五)　風雷、萬里に颯たり、霈澤、蓬蒿に施す。

敢辭茅葦(一六)漏。已喜黍豆高。(一七)　敢て辭せむや茅葦の漏るるを、已に喜ぶ黍豆の高きを。

三日無行人。二江(一八)聲怒號。　三日、行人無し、二江聲怒號す。

流惡(一九)邑里清。(二〇)矧茲遠江皐。(二一)　惡を流して邑里清し、矧や茲の江皐遠きをや。

荒庭步鸛鶴。隱几(二二)望波濤。　荒庭に鸛鶴步す、几に隱りて波濤を望む。

沈痾(二三)聚藥餌。(二四)頓忘所進(二五)勞。(二六)　沈痾、藥餌聚まる、頓に進むる所の勞するを忘る。

則知潤物(二七)功。可以貸(二八)不毛。(二九)　則ち知る物を潤すの功、以て不毛に貸す可きを。

陰色(三〇)靜壠畝。(三一)勸耕自官曹。(三二)　陰色、壠畝靜なり、耕を勸むること官曹よりす。

四隣未耜(三三)出。何必吾家操。(三四)　四隣、未耜出づ、何ぞ必ずしも吾が家の操のみならむ。

【字解】【一】冬不雪　上元二年の十月以來雨なかりしといふ。【二】春農　春のひやくしやう、寶應元年に入りての農家をいふ。【三】嗷嗷　雨ほしと口やかましくいふ。【四】上天　天帝。【五】回哀眷　回とは眼をこちらへむけかへること、哀眷とは農家のなんぎをあはれみて眼をかけてやること。【六】朱夏　五行說により四時に色を配す、春は靑、夏はあかにて朱なり。【七】鬱陶　いぶせくふさがるさま。【八】執熱　詩經の語、ここはただ熱の義に用ふ。【九】沸鼎　かなへのお湯をわかすごとし。【一〇】纖絺　ほ

そいいとすぢのくづれの、かたびらないふ。【二一】成縕袍　どてらの様になる、とは鬱く感ずるないふ。【二二】颯　風の吹くさま。【二三】霈澤　霈は雨の多きさま、澤はうるほひ。【二四】施　施與の義。【二五】蓬蒿　よもぎのくさ。【二六】茅葦　かや、よし、草堂の屋根ないふ。【二七】高　たけがのびしこと。【二八】二江　李氷がひらさし内江・外江ないふと。【二九】流惡　惡とは穢惡の物ないふ。【三〇】邑里　縣や村。【三一】遠江皋　江皋遠とおなじ、江皋はかはぞひの岡、浣花溪の地なさす。【三二】隱几　几に息にもたれること。【三三】沈痾　ながながのやまひ。【三四】藥餌　藥物、滋養物の問屋となつてゐたといふこと。【三五】頓　にはかに。【三六】所進　進は進御、服用することないふ。【三七】潤物功　雨の功。【三八】貸　施與の義。【三九】不毛　草木の生ぜざる地ないふ。【四〇】陰色　あめのはれぬやうす。【四一】壠畝　なか、うれ。【四二】官曹　官のつめしよ、官員なさす。【四三】耒耜　耜は「すきがしら」。【四四】操　「とる」、すきなとり用ふるないふ。

【題義】大雨のありしを喜びて作れる詩。寶應元年夏成都にての作。

【詩意】西方蜀の地では去年の冬、雪がふらなかつたのでことしの春になつて農家はまだ口やかましく雨がほしいというてゐる。天もそれをあはれとおぼしめしてなさけの眼をこちらへおむけかへくださつて、ま夏のそらに雲がふさがつた。あつさは鼎のお湯をわかす様であり、かたびらもどてらの様に感ぜらるるほどになつた。ところへ萬里の遠くまで風や雷がさつとやつてきて、多量の雨のうるほひがよもぎの草にまで施し與へらるるに至つた。』自分は屋根にあまもりがするぐらゐのことは辭する所ではなくみるうちにはや黍や豆がせがたかくなつたのをうれしくおもふ。三日のあひだは途ゆく人さへなく、城邊の二つの江は水の聲が怒り號んでゐる。きたないものはみんな洗ひ流して縣や村も清らかになつた、ましてこの遠方の江ぞひのをかのあたりに於てをや。わが草むらの庭には鸛や鶴があるいてゐるし、自分は脇息によりながら波濤のさまをながめてをる。』自分は長長の病氣で藥品と滋養物の問屋であつたが、この雨のおかげで急にせつせとそんな品物を用ふる御苦勞を忘れてしまつた。これでかんがへるとこの雨の物をうるほす功は草木のはえぬ地にまでも及ぼして施すことができるであらう。あまぐもりのうちにはたけのうねが靜に横はつてゐる。役所からはしきりに耕作をすすめる。それがためあたり近所からみんな耒をとるものが出だした。吾が家のものがそれを手にしだしたばかりではない。』

溪漲

當時浣花橋。溪水纔尺餘。
白石明可把。水中有行車。
秋夏忽泛溢。豈惟入吾廬。
蛟龍亦狼狽。況是鼈與魚。
茲晨已半落。歸路跬步疎。
馬嘶未敢動。前有深塡淤。

溪漲

當時浣花橋、溪水纔に尺餘。
白石明にして把る可く、水中に行車有り。』
秋夏忽ち泛溢、豈に惟吾が廬に入るのみならむ。
蛟龍亦狼狽す、況や是れ鼈と魚とをや。
茲晨已に半ば落つ、歸路、跬步疎なり。
馬嘶いて未だ敢て動かず、前に深き塡淤有り。』

青青屋東麻。散亂床上書。(一〇)
不知遠山雨。夜來復何如。(一一)
我遊都市間。晚憩必村墟。(一二)(一三)
乃知久行客。終日思其居。

青青たり屋東の麻、散亂す床上の書。知らず遠山の雨、夜來復何如。我都市の間に遊ぶ、晚に憩ふは必ず村墟なり。乃ち知る久行の客、終日其の居を思ふことを。』

【字解】【一】當時　平時をいふ。【二】浣花橋　浣花溪に架したる橋、萬里橋をいふ。【三】苦晨　作者のかへらんとしたあさをいふ。【四】落　水かさの減ぜしこと。【五】歸路　城から村へのかへりみち。【六】跬步　跬とは一たび足を擧ぐるをいふ、三尺なり、步とは兩たび足をあぐるをいふ、六尺なり、支那の步とは甲の足があがりてから地につくまでの距離をいふ、我我の一步は支那の半步(即ち跬)なり。【七】疎　人どほりまばら。【八】馬　作者自己の乘馬。【九】壩淤　うづまれるどろ。【一〇】青青二句　作者意中にて想像していふ。【一一】復何如　遠山に夜雨がふりはせぬか、若し果して雨あればこの江水がますであらうと案ずるなり。【一二】都市間　成都の市街をいふ。【一三】村墟　村のあれあと、浣花村をさす、すなはち草堂をいふ。

【題義】浣花溪の水がみなぎりて、城からのかへりみちをくひとめられしことをのべたり。實應元年成都にての作。

【詩意】いつもは浣花溪の橋のところは溪水がわづかに一尺あまりで、川底の白い石ははつきり見えて手にとることができ、水の中には車がとほるほどである。』しかるに夏秋にはこの水が忽ちあふれだして、自分のいほりにいりこんだばかりでなく、蛟龍さへうろたへだす、ましてただの鼈や魚はなほのことである。けふのあさは水は半はへつたのだが城からのかへりみちにはまだ人のあるきかたはまばらである。自分ののつた馬は嘶いて動かうとはせぬ、それは前に深いどろがあるからである。』おもふにわが家屋の東の麻は青青とのびたであらう。わが書齋のゆかのうへの書物は讀みさしたまま散亂してゐるであらう。(どれも自分がみまはらねばならぬものだ) 遠山ではまた雨が夜にかけてふりだしはせぬか、ふればこの溪川の水がまたまして自分をさまたげるだらう。自分は市街へ遊びにでかけるが、晚にかへつてやすむのはいつも浣花の村墟なのだ、(それがけふはかへれぬのだ。)ながたびをしてをる旅客(自己をさしていふ。一說に一般旅人の情をいふとなす。)といふものはあさからばんまで自分の住居を思うてゐるものだといふことがこれで知らるる。

大麥行(一)

大麥乾枯小麥黃。
婦女行泣夫走藏。(二)
東至集壁西梁洋。(三)
問誰腰鎌胡與羌。(四)(五)

大麥行
大麥は乾枯し小麥は黃なり、婦女は行くゆく泣き夫は走り藏る。東は集壁に至り西は梁洋、問ふ誰か鎌を腰にする胡と羌と。

【字解】【一】大麥行　大麥の枯れしころの兵亂についてつくれるうた、後漢の桓帝の時の童謠に曰く、小麥青青大麥枯。誰當穫者婦與姑。丈夫何在西擊胡。と。作者之にならひて此詩をつくる。【二】行泣　ゆく

豈無蜀兵三千人。　豈に蜀兵三千人無からむや、
(六)簿領辛苦江(七)山長。　簿領辛苦、江山長し。
(八)安得如鳥有羽翅(九)。　安んぞ得む鳥の如く羽翅有るを、
託身白雲歸故鄕。　身を白雲に託して故鄕に歸らむ。

ゆく泣く。【三】集壁　梁洋四州の名なり、今の陝西漢中府、四川保寧府にわたる地。【四】腰鎌　麥を刈りにきたことをいふ。【五】胡與羌　これは答への辭、刈りにきたものは胡と羌とである。朱氏の說に胡羌は渾奴刺・黨項羌をいふとなせり。【六】簿領　簿領とは記錄の帳面をつかさどることなり、兵とは關係なし、簿一に部に作る、從ふべし、部領は軍隊の部曲を領することなり。【七】江山長　胡羌のところまでの距離とほし。【八】安得　希望のことば。【九】翅　つばさ。

【題義】麥のみのるころ胡羌の侵入ありしことについてつくれるうた。寶應元年夏の作。

【詩意】大麥はひて枯れ小麥は黃ばんで熟した。このとき婦女はゆくゆく泣き夫は走りかくれる。その地方は東は集・壁の二州に至り、西は梁・洋の二州へかけてである。だれがその麥を刈りに侵入してきたのかと問へば、それは胡と羌のえびすだとのことだ。胡羌をおひはらふには蜀の兵が三千人無いわけではないが、その部隊を引きつれて征伐にでかけることはなんぎなことであり途中の江山も長くとほい。こんな兵亂をみるより自分は鳥の樣に羽やつばさがありたいとおもふ、つばさがあればおのがからだを白雲に託して故鄕へとんでかへらうものを。

奉送嚴公入朝十韻(一)　嚴公が入朝するを送り奉る十韻

(二)鼎湖瞻(三)望遠。象闕(四)憲(五)章新。　鼎湖、瞻望遠く、象闕、憲章新なり。
四海猶多(六)難。中(七)原憶舊(八)臣。」　四海猶多難、中原、舊臣を憶ふ。」
(九)與時安反(一〇)側。自昔有經綸(一一)。　時の與に反側を安んず、昔より經綸有り。
(一二)感激張天(一三)步。從(一四)容靜塞(一五)塵。　感激、天步を張り、從容、塞塵を靜にす。
(一六)南圖迴羽翮。北(一七)極捧星辰。　南圖、羽翮を迴らし、北極、星辰を捧ず。
(一八)漏鼓還思(一九)晝。宮鶯罷(二〇)囀春。」　漏鼓還晝を思ふ、宮鶯春に囀るを罷む。」
空留玉(二一)帳術。愁殺錦(二二)城人。　空しく留む玉帳の術、愁殺す錦城の人。
(二三)閣道通丹(二四)地。江(二五)潭隱(二六)白蘋。　閣道、丹地に通ず、江潭、白蘋に隱る。
此生那(二七)老蜀。不死會(二八)歸秦(二九)。　此の生那ぞ蜀に老いむ、死せずんば會ず秦に歸らむ。
(三〇)公若登台(三一)輔。臨危莫愛(三二)身。」　公若し台輔に登らば、危きに臨みて身を愛すること莫れ。」

【字解】【一】嚴公入朝　寶應元年四月十八日丁卯肅宗長生殿に崩す、是の月二十八日己巳、代宗位に卽く、嚴武を召して橋道使(山陵をつくる長官)となす、武の蜀を出發せるは夏にあり。【二】鼎湖　黃帝が死せし故事、已に前に見ゆ、肅宗の崩をいふ。【三】瞻望　こちらから升天した天子をながめること。【四】象闕　或は象魏といふ、象は法令なり、魏は觀に當りて高くそびゆるをいふ、古は宮門の闕に法令を揭示せり、その門を象魏といへり。【五】憲章　法令をいふ、此句は代宗の卽位をいふ、卽位の初は法令新にい

づ。【六】多難　賊徒史朝義未だ平がず。【七】中原　都の地方、その地方の官民をさす。【八】舊臣　嚴武をさす。【九】與時　時世のために。【一〇】反側　反逆の徒をさす。【一一】經綸　致治上のきりもりをすること。【一二】感激　國恩にはげしく感ずる。【一三】張天步　天步の二字は詩經にいづ、國運の進行をいふ、張るとは長安を賊の手からとりかへせしをいふ。【一四】從容　ゆつたり。【一五】靜塞塵　とりでのちりをしづかならしめる。成都に來任して其土をしづめしをいふ。【一六】南圖還羽翮　南圖の羽翮をかへすといふこと、南圖は「莊子」に鵬といふ大鳥が九萬里につばさをうちて南せんとはかるといへるはなしあり、嚴武南方に事功をたてんとせしに忽ち都へかへるを鵬に比していへり。【一七】北極捧星辰　北極にて星辰をささぐ、中央にかへりて天子をうやまひ之に仕ふるをいふ。【一八】漏鼓　宮中にある水時計。【一九】思晝　天子の朝に侍ることの久しきをいふ、思とは作者が之をおもふならん、蓋し作者の晝漏希聞高閣報のことなどを連想していふなるべし。【二〇】罷囀春　嚴武の入京のときの夏にして春すでにすぐるをいふ。【二一】玉帳術　玉帳は兵家の厭勝の方位にして、主將もしその方位に軍帳を置くときは堅くして犯す可らざること玉帳のごとく然りといへり、これは羌胡に對する方略をさすならん。【二二】錦城人　錦官城中の人、蜀民をいふ。【二三】閣道　棧道をいふ。【二四】丹地　丹墀ともいふ、宮殿の階下の土床、そこには丹を以て地を塗るゆゑ丹墀といふ。【二五】江潭　錦江の百花潭。【二六】隱白蘋　白蘋は白き花さくよもぎ、水草なり、江邊にかくるるを白蘋にかくるといへり。【二七】那老蜀　どうして蜀にて老いをすごさうや、すごさぬ。【二八】會　必ず。【二九】秦　長安。【三〇】公　嚴武をさす。【三一】台輔　宰相の地位。【三二】愛　愛惜する。

【題義】嚴武が成都から中央朝廷へかへるのを送つた詩。寶應元年夏の作。

【詩意】肅宗皇帝が黃帝のやうに鼎湖でおかくれになり升天されたためこちらからいくらながめても遠くてみえぬ樣になつてしまはれた。それとともに新天子代宗皇帝が御卽位になつて御所の御門には法令が新にかかげられるに至つた。いま天下はまだ難儀なことが多いので、中原の地では君の如き舊臣をおもうて、之を迎へ用ふることになつた。』君は昔から經綸の才があつて、かつては時世のために反逆の徒を安んじた、また感激して國運の艱難を救うてその威力を張り、出でては從容として塞の塵をしづかならしめた。それがこんど圖南のつばさをむけかへて、北極に於て星辰をささぐることになつた。君のゆくところは宮中の鶯も春にさへづることをやめ夏になつてゐるし、參朝久しきにわたつてはいつしか晝になるだらうが、自分も水時計がかつては晝の刻を報じたのをきいたことを思ふ。』君はいたづらに兵法の術をとどめて蜀を去るにより、錦城の蜀民はみな非常に愁ひをふくんでゐる。君のゆく棧道は宮殿の丹地の方へと通じてゐるが、自分は江潭で白蘋のそばにかくれてゐる。自分の生涯はどうしてこんな蜀に老いはてることができよう、死なずにいのちさへあるなら自分はきつと長安へかへるつもりだ。君は若し中央で宰相の位にでものぼつたなら、決して危難にさしかかつても一身を愛惜することなかれ、身命をなげだして國家のためにつくすがよい。』

【餘論】嚴武の此の行、作者送りて綿州に至りて別る。武作者にむくいて別るる詩あり、此に併記す。

酬別杜二　嚴武

獨逢堯典日。再覩漢官儀。未效風霜勁。空慚雨露私。
夜鐘清萬戶。曙漏拂千旗。竝向殊庭謁。倶承別館追。

斗城憐舊路。　涪水惜歸期。　峰樹還相伴。　江雲更對誰。
試回滄海棹。　莫妬敬亭詩。　秖是書應寄。　無忘酒共持。
但令心事在。　未肯鬢毛衰。　最悵巴山裏。　淸猿惱夢思。

杜二に酬い別る　嚴武

獨り逢ふ堯典の日、再び覩る漢官の儀。未だ效さず風霜の勁、空しく慙づ雨露の私。夜鐘、萬戶淸く、曙漏、千旗拂ふ。竝に殊庭に向つて謁す、俱に承く別館の追。斗城、舊路を憐み、涪水、歸期を惜しむ。峰樹還相伴ふ、江雲更に誰にか對す。試に滄海の棹を回せ、妬む莫れ敬亭の詩。秖是れ書應に寄すべし、忘るる無れ酒共に持せしことを。但心事をして在らしめば、未だ肯て鬢毛衰へたりとせず。最も恨む巴山の裏、淸猿、夢思を惱ますことを。

送嚴侍郞(一)到綿州(二)同登杜使君(三)江樓宴。得心字

嚴侍郞を送りて綿州に到り同じく杜使君が江樓に登りて宴す。心の字を得たり

(四)野興每難盡。江樓延(五)賞心(六)。　野興每に盡き難し、江樓、賞心を延く。
(七)歸朝送使節(八)。落景(九)惜登臨(一〇)。　歸朝、使節を送る、落景惜しみて登臨す。
(一一)稍稍煙集渚。微微風動襟。　稍稍、煙、渚に集まり、微微、風、襟を動かす。
(一二)重船依淺瀨(一三)。輕鳥度(一四)曾陰(一五)。　重船、淺瀨に依り、輕鳥、曾陰を度る。
(一六)檻峻背(一七)幽谷。牕虛交(一八)茂林。　檻、峻にして幽谷に背く、牕、虛にして茂林に交はる。
(一九)燈光散遠近。月彩靜高深(二〇)。　燈光、遠近に散じ、月彩、高深に靜かなり。
(二一)(二二)城擁朝來客(二三)。天橫醉後參(二四)。　城は擁す朝來の客、天には橫はる醉後の參。
(二五)窮途衰謝(二六)意。苦調(二七)短長(二八)吟。　窮途、衰謝の意、苦調、短長の吟。
此會共能幾(二九)。諸孫(三〇)賢至(三一)今。　此の會共にすること能く幾たびぞ、諸孫、賢今に至る。
不勞(三二)(三三)朱戶閉。自待白(三四)河沈(三五)。　勞せず朱戶を閉づるを、自ら待つ白河の沈むを。

【字解】【一】嚴侍郞　嚴武をいふ、このとき嚴武が兵部侍郞なりしや黃門侍郞なりしや吏部侍郞なりしや明確ならざるも「通鑑」によれば兵部侍郞なり。【二】綿州　成都の東北にあり。【三】杜使君　使君は刺史の敬稱、杜は綿州の刺史なり、名は詳ならず、詩によれば蓋し作者の從孫にあたるものなり。江樓　涪江のほとりの樓。【四】野興　田野の風景をながめる興味。【五】延　我が心を引くをいふ。【六】賞心　佳景を賞愛する心。【七】歸朝　朝廷へかへる。【八】使節　使者、嚴武をさす。【九】落景　ゆふ日のかげ。【一〇】惜　この字は落景へかかる。【一一】稍稍　しだいに。【一二】重船　おもきふね、即ち大船。【一三】輕鳥　みがるくとぶとり。【一四】度　とびてゆく。【一五】曾陰　曾層通ず、かさなりたるくもり。【一六】檻　樓のてすり。【一七】背　背面にしてなる。【一八】交茂林　しげつた林の影がいりまじる。【一九】燈光　人家のともしび。【二〇】高深　高は山峰をいひ、深は溪

答をいふ。』【二一】城　綿州城。【二二】擁　かかへる、大切に迎へたこと。【二三】客　嚴武の一行をさす。【二四】參　星の名、みつぼし、月沒してあらはる。【二五】窮途　逆境をいふ。【二六】衰謝　謝も「おとろへる」なり。【二七】苦調　くるしげな音調。【二八】短長吟　みじかくながくこゑをひきてうたふうた、作者の詩をいふ。【二九】幾　幾回の義。【三〇】諸孫　羣從孫、杜使君をさす。【三一】賢　杜使君をほめていふ。【三二】勞　わづらはす義。【三三】朱戸　りつぱな戸。【三四】白河　あまのがは。【三五】沈　あまのがはしづむは夜明けなり。

【題義】兵部侍郎嚴武を送りて綿州までゆき、そこでいつしよに刺史杜某が江樓にのぼつてさかもりをしたことをのべたる詩なり。寶應元年六月綿州にての作。

【詩意】田野の景に對する興味はいつも盡きがないがここでは江ぞひの樓のながめがさらに我我の賞愛の心をひく。それで朝廷へかへる使者を送りながら、いり日のかげを惜しみつつここに登臨してみるのである。』みるとしだいに煙が渚に集まり、そよそよと風がえりもとをうごかす、おもたげな船は淺瀨に依つてゐるし、身輕の鳥はいくへのくもれるそらをわたつてゆく。幽邃な谷を背にしててすりがけはしくそびえ、からりとしたまどにはしげつた林樹の影がまじはつてゐる。遠近には人家の燈火がちらほらみえ、月のひかりも高山深谷に靜にてりこんでゐる。』ここの城では朝からかけてのお客を迎へてをるが、醉のまはるにつけて、はや參星が天に橫はつてゐる。このとき逆境にありてかつ老衰しゆく自分のこころもち、くるしげな音調をもつ自分の短吟長吟それはいかなるものであるか。ともどもこの樣な會合をするのも幾たびできるか、恐らくたびたびはできまい。幸にして今日に於て我が羣從孫中に賢なること杜使君のごときものを見るのである。使君よ、どうぞこの江樓の朱戸をわざわざおしめくださるな、わたしはひとりでにあまのがはが沈んでよあけになるのを待たうとおもふのである。』

(一)奉濟驛重送(二)嚴公四韻

奉濟驛にて重ねて嚴公を送る四韻

遠送從(三)此別。青山(四)空復情(五)。　遠送此より別る、青山空しく復情あり。

(六)幾時盃重把。昨夜月同行。　幾時か盃重ねて把らむ、昨夜月に同じく行けり。

(七)列郡謳歌(八)惜(九)。三朝(一〇)出入(一一)榮(一二)。　列郡、謳歌惜しむ、三朝、出入榮ゆ。

(一三)江村獨歸處。寂寞養殘生。　江村、獨歸の處、寂寞、殘生を養はむ。

【字解】【一】奉濟驛　綿州の東三十里にありといふ。【二】嚴公　嚴武。【三】此　此地、驛をさす。【四】青山　附近の山をいふ。【五】空復情　情とはこちらが悲しみの情をもつをいふ。【六】幾時　何時におなじ。【七】列郡　東川・西川の地方。【八】謳歌　嚴武の政治上の德をうたひたたへる。【九】惜　武の去るをおしむ。【一〇】三朝　玄宗肅宗代宗の三代。【一一】出入　出でて將となり、入りて相となる。【一二】榮　榮譽をになふ。【一三】江村　浣花村。

【題義】綿州の城外の奉濟驛といふところで、いよいよ嚴武と別れるときに、重ねて之を送るために作つた詩。

【詩意】自分ははるばる送つてきたがここでお別れをする。別れるとなると附近の青山を見てもいたづらにわが悲しみの情をいだかせるばかりだ。いつ君とふたたび盃を手にしようか、ゆうべは明月のもとにいつしよにあるいたものを。君は三朝に歷事して出入ともに榮譽をになうてをり、その去るにあたつては列郡は君の德をたたへてこれを惜しんでゐる。自分はこれから浣花の江村へひとりでもどつて、そこでさびしく老いさきを養ひゆくであらう。

送梓(一)州李(二)使君之(三)任

梓州の李使君が任に之くを送る

【原注】故(四)陳拾遺射(五)洪人也。篇末有(六)云。

【原注】故の陳拾遺は射洪の人なり、篇末に云ふこと有り。

籍(七)甚黃(八)丞相。能名自潁(九)川。
近看除(一〇)刺史。還喜得吾(一一)賢。
五(一二)馬何時到(一三)。雙(一四)魚會早傳(一五)。
老思筇(一六)竹杖(一七)。冬要錦(一八)衾眠。
不作臨(一九)岐恨。惟聽擧(二〇)最先。
火(二一)雲揮(二二)汗日。山(二三)驛醒(二四)心泉。

籍甚なり黃丞相、能名、潁川よりす。
近ごろ看る刺史に除せらるるを、還た喜ぶ吾が賢を得たるを。
五馬何の時か到らむ、雙魚會ず早く傳へむ。
老いて思ふ筇竹を杖かむことを、冬は要す錦衾の眠り。
臨岐の恨を作さず、惟だ聽く擧最の先なるを。
火雲、揮汗の日、山驛、醒心の泉。

遇(二五)害陳公殞。于今蜀(二六)道憐。
君行射洪縣。爲我一(二七)潸然。

害に遇うて陳公殞ちぬ、今に于て蜀道憐む。
君射洪縣に行かば、我が爲に一たび潸然たれ。

【字解】〔一〕梓州　唐にては東川節度使の治所なり、綿州の南にあたる、今の四川省潼川府これなり。〔二〕李使君　名は詳ならず、梓州の刺史なり。〔三〕之任　任地梓州へゆくなり。〔四〕故陳拾遺　已になくなつた拾遺の官陳子昂、子昂は初唐の武后時代に文名ありし人。〔五〕射洪　縣の名、潼川府三臺縣の東南にあり。〔六〕有云　本篇の末の四句をさす。〔七〕籍甚　名聲のかまびすしきこと。〔八〕黃丞相　漢の黃霸が事、霸は潁川太守となり神明と稱せらる、のちめされて入りて丞相となれり、いま李使君を之に比す。〔九〕潁川　郡の名、事は上にみゆ、蓋し李の前任地にあてていへるならん。〔一〇〕除　任命さるること、舊官を除きて新官に拜する義なりと。〔一一〕吾賢　賢とは李をほめていふ、吾とは親しむことばなり。〔一二〕五馬　太守の用ふる車の馬かず、已に前にみゆ。〔一三〕到　任地に到着するをいふ。〔一四〕雙魚　雙鯉魚なり、手紙のむすびかたなりといふ、手紙の義に用ふ。〔一五〕傳　先方よりこちらへ傳へくるるならんといふなり。〔一六〕筇竹　邛州より產するふしだかの竹なり。〔一七〕杖　動詞として用ふ。〔一八〕錦衾　うつくしきかいまき。〔一九〕臨岐恨　岐はまたになりたるみち。〔二〇〕擧最先　最とは殿最の最、考課の成績の優等なるを最、劣等なるを殿といふ、李が刺史に任ぜられしは最にあげらるること他人よりも先なるなり。〔二一〕火雲二句　節候をいふ、火雲はあかやけのくも。〔二二〕揮汗日　汗をふるふ日とはあつきときをいふ。〔二三〕山驛　李の通過する驛をいふ。〔二四〕醒心泉　つめたくて人の情心をよびさますいづみ。〔二五〕遇害陳公殞　陳子昂の父、射洪に在り、縣令段簡に辱しめらる、子昂之をききて鄕にかへりしに、簡、事に因りて子昂を獄中に收繫す、子昂憂憤して卒せり、これ遇害の事實なり、殞は死ぬこと。〔二六〕蜀道　蜀道の人人。〔二七〕潸然　さめざめとなく貌。

【題義】梓州の刺史李某が任地へゆくのを送る詩。梓州の管內には射洪縣があり、縣からは陳拾遺が出て非命にたふれてゐる、だから篇末にその事にいひおよんでおいた。寶應元年夏、綿州にての作。

【詩意】漢の黃覇にも比すべき君の評判はやかましいもので有能の名が潁川からつたはつてをる。ちかごろみると君は刺史に任命されてゐる。君のやうな賢者を得たことはよろこばしいことだ。』いつになつたら君の馬車はあちらへ到著するだらうか、到著したらきつと手紙を早くよこしてくれることとおもうてゐる。またこのおやぢは年がよつて筇竹のつゑをつきたいともおもふし、冬になれば錦のかいまきで眠りたいともおもうてゐる。（そのことも君はかんがへてくれるであらう、の意ならん）』自分はわかれぢに臨んでの恨みをもつことはせぬ、ただ君が成績優等として拔擢されたのをきいてよろこぶ。いまやひでりぐもがあかくでて人人が汗をふるふのとき、君は山驛をへて醒心のしみづを汲みつつゆく。』彼の陳拾遺は人のために殺害されてなくなられた。蜀道の人人はそれを今でもきのどくにおもうてをる。君が管內をめぐつて射洪縣をとほられたなら、わたしのために之を弔うて一掬同情の淚をそそいでやつてくだされ。』

觀打魚歌（一）　打魚を觀る歌

綿州江（二）水之東津（三）。　綿州江水の東津、
魴（四）魚鱍鱍（五）色勝銀。　魴魚鱍鱍として色銀に勝る。

【字解】【一】打魚　「打」の字は俗語になんでもはたらくことばに通用させてつかふ字なり、ここは「網

漁人漾舟沈大網。　漁人舟を漾はして大網を沈む、
截（六）江一擁（七）數百鱗（八）。　江を截りて一擁す數百鱗。
衆（九）魚常才（一〇）盡却棄（一一）。　衆魚は常才なり盡く却棄す、
赤（一二）鯉騰出（一三）如有神。　赤鯉は騰出す、神有るが如し。
潛龍無聲（一四）老蛟怒（一五）。　潛龍聲無く老蛟怒る、
迴（一六）風颯颯（一七）吹沙塵。』　迴風颯颯として沙塵を吹く。』
饔（一八）子左右揮霜刀（一九）。　饔子左右に霜刀を揮ふ、
鱠（二〇）飛金盤白雪高（二一）。　鱠飛んで金盤に白雪高し。
徐（二二）州禿尾不足憶。　徐州の禿尾は憶ふに足らず、
漢（二三）陰槎頭遠遁逃（二四）。　漢陰の槎頭遠く遁逃す。
魴魚肥美（二五）知第一。　魴魚の肥美知る第一、
既（二六）飽驩娛亦蕭瑟（二七）。　既に飽きては驩娛も亦蕭瑟たり。
君不見朝來割素鬐（二八）。　君見ずや朝來、素鬐を割く、

もて取る」義に用ふ。【二】江水　江は涪江。【三】東津　ひがしのわたりば。【四】魴魚　魚の名、鯿といふ魚と同種なりといへり。【五】鱍鱍　はねる貌。【六】截江　江水をよこ一文字にたちきる、網をひきはへるさま。【七】一擁　一ぺんでなかへかかへこむ。【八】鱗　魴魚をさす。【九】衆魚　魴以外の多くのうを。【一〇】常才　平凡なやつ。【一一】却棄　しりぞけすてる。【一二】赤鯉　まごひ。【一三】騰出　あみからをどつてでてしまふ。【一四】無聲　機を知りて害をうけぬ樣に聲をださぬ。【一五】怒　同類の魚がとられることを怒るなり。【一六】迴風　吹きまはすかぜ。【一七】颯颯　風の吹くさま。』【一八】饔子　料理人。【一九】霜刀　とぎすまし

（三九）咫尺波濤永相失。」　咫尺波濤永く相失す。」

た白刃の庖刀。【三〇】鱠　なます、いきづくり。【三一】白雪　肉の形容。【三二】徐州禿尾　徐州に鯉または鱸といへる魚あり、禿尾とはそれならんかといへり、其地の名物にてうまきものなるべし。【三三】漢陰槎頭　漢陰は漢水のほとりの地名、槎木を水中に積み中に魚を養ふ、その槎木のことを槮といふ、襄陽にては槮をなまりて槎といふ、槎頭とは槮頭なりと、ただし襄陽にては養魚のためでなく水を塞つために槎を用ふといへり、槎頭は槎のほとりでとりたる魚のこと、魚の名は鯿といふ、この魚あたまがつぶれた様なるものと見え縮頭鯿の名あり。孟浩然が詩句に、試垂竹竿釣、果得槎頭鯿などあり。【三四】遁逃　競爭できぬゆゑにげだす。【三五】肥美　ふとりてうまし。【三六】既飽　十分滿腹するまでたべあきては。【三七】蕭瑟　さびしきさま。【三八】割素鬐　魴魚のしろきひれをさく、鱠をつくるため之を殺すをいふ。【三九】咫尺　八寸一尺のまぢかで。

【題義】　綿州の涪江の東津で魴魚の網打ちを觀てつくつたうた。寶應元年綿州にての作。

【詩意】　綿州の涪江の東津。そこでは魴魚がぴちぴちとはね色は銀よりも白い。れふしが舟をただよはせて大きな網を沈める、さうしてよこ一文字に江水をたちきつてあみをひくと一ぺんに數百匹の魴がだきこまれる。平凡なおほくのさかなはみんなのけてすててしまふ。まごひは神力あるかの如くあみからをどりだしてでていつてしまふ。穴に潛んでゐる龍は聲をたてずひつこんでゐるし、としふけた蛟は同類が害せらるるのを見て怒つてゐる、吹きまはす風が颯颯として沙や塵をとばしてゐる。』料理人が霜の如くとぎすました庖刀をふるふと、鱠の肉は飛ぶがごとく黃金の盤上に白雪のやうに高くもりあげられる。魴の味にくらべると徐州の禿尾魚はおもふにも足らぬし、漢陰の槎頭の鯿もはだしでとほくにげだしてしまふ。ふとつてうまいのは魴魚が第一だといふことがわかる。が既にその味に飽いてしまふとたのしみもさびしくなる感じがある。なぜかといふと諸君見られよ、朝からかけて我我はやたらに魴魚の白きひれを割いたが、彼等は咫尺の間にこの江上の波濤と永久に別れてしまつたのである。（氣の毒にたへぬ。）』

又觀打魚

蒼（一）江漁（二）子清（三）晨集。
設網提（四）綱取（五）魚急。
能（六）者操舟疾若風。
撐（七）突波濤挺（八）叉入（九）。
小魚脫（一〇）漏不可記（一一）。
半死半生猶戢戢（一二）。
大魚傷損皆垂頭。

又打魚を觀る
蒼江漁子、清晨に集る、
網を設け綱を提げて魚を取ること急なり。
能者は舟を操る疾きこと風の若く、
波濤に撐突して叉を挺して入る。
小魚の脫漏、記す可からず、
半死半生猶戢戢たり。
大魚は傷損皆頭を垂る、

【字解】【一】蒼江　あをき水色の江、涪江をいふ。【二】漁子　れふし。【三】清晨　はれたあした。【四】綱　あみの大づな。【五】取魚　取の字は一に萬に作る、萬の字に從へば、設網提綱萬魚急　とよみ、急の字は魚の逃げださんと爭ふさまとなる。取魚急は魚のとりかたが急なるなり。【六】能者　舟を操るにたくみなもの。【七】撐突　撐

(一三)屈强泥沙有時立。」　泥沙に屈强して時有りてか立つ。」
東津(一四)觀魚已再來。　東津魚を觀て已に再び來る、
(一五)主人(一六)罷鱠還傾盃。　主人、鱠を罷めて還盃を傾く、
日暮蛟龍(一七)改窟穴。　日暮れて蛟龍、窟穴を改む、
山根(一八)鱣鮪(一九)隨雲雷。　山根の鱣鮪、雲雷に隨ふ。
干戈格鬭尚未已。　干戈格鬭尚未だ已まず、
(二〇)鳳凰麒麟安在哉。　鳳凰麒麟安に在りや。
吾徒胡爲縱此樂。　吾が徒胡爲れぞ此の樂みを縱にする、
(二一)暴殄天物(二二)聖所哀。」　天物を暴殄するは聖の哀む所なり。」

はささへる義なるも、撑突はぶつかる意とみゆ。【八】挺叉　挺は「ぬきんづる」、叉は魚を刺す「さすまた」。【九】入　舟をのりいれること。【一〇】脫漏　あみからもれること。【一一】記　かぞへてしるしたてる。【一二】戢戢　あつまる貌。【一三】屈强　しひて立ちあがらんとするさま。【一四】觀魚　すなどりをみんがための意。【一五】主人　蓋し綿州の刺史杜使君なり。【一六】罷鱠　鱠を初には作つてたべたのだがたべあきてからそれをやめて。鱠のことは前詩にのべたれば簡略にしたるなり。【一七】改窟穴　べつなあなへうつるをいふ。【一八】鱣鮪　みなうなの名。【一九】幽雲雷　雲雷の起るにつれてどこへかうつる。【二〇】鳳凰麒麟　瑞物にして聖人あれば德に感じて至ると稱せらる。【二一】暴殄天物　「書經」の語、天の生じたものをむやみにころしたりすること。【二二】聖　聖人。

【題義】　また魚をとるのを觀てよめるうた。前詩と殆ど同時の作ならん。

【詩意】　きれいな江にれふしどもがあさから集り、網を設け大網をひつさげてせつせと魚を取る。舟をあやつるにたくみなものは船を風のごとくはやくあやつり、さすまたをぬきんでながら波にぶつかつてのりこんでゆく。小さな魚はあみからどれほどぬけでたか記したてることもできぬが、それでも半死半生のすがたでたくさんあつまつてゐる。大きな魚はからだをきずつけられてみな頭を垂れてよわりこんでゐるが、時としては泥沙のうへにしやちよこばつてつつたちあがることもある。』自分は東津へ魚を觀るためにはこれで二度きてゐるのだ。主人は鱠をやめてもまだ酒盃を傾けてもてなしてくれる。日ぐれになると蛟龍も不安を感じてかその穴をうつし、山のふもとにすむ鱣や鮪も雲雷の起るにつれてどこへかひきうつてしまふ。（魚も身の安全をはかりつつある。）今や天下は干戈を用ひて人間どうしがうちあひたたかふことがまだやまぬ。鳳凰だの麒麟だのの瑞鳥瑞獸はいつたいどこにか在るのか。このときにあたつて我我はなんでこんなすなどりなどの樂みをほしいままにするのであるか、天の生じたものをむやみに殺すことはむかしの聖人もかなしとせられたことである。』

(一)越王樓歌　　越王樓の歌
綿州州(二)府何(三)磊落。　綿州の州府何ぞ磊落なる、
(四)顯慶年中越王作。　顯慶年中、越王の作。

【字解】【一】越王樓　越王がたてた樓、越王、名は貞といひ、唐の太宗の第八子なり、蓋し嘗て綿州の刺

孤城西北起高樓。　孤城の西北に高樓を起す、
碧瓦朱甍照城郭。』　碧瓦朱甍、城郭を照す。』
樓下長江百丈淸。　樓下の長江、百丈淸し、
山頭落日半輪明。　山頭の落日、半輪明なり。
君王舊跡今人賞。　君王の舊跡、今人賞す、
轉見千秋萬古情。』　轉た見る千秋萬古の情。』

史たりしならんといふ、綿州城外西北に臺あり、高さ百尺、上に樓あり、州城を下瞰す、高宗の顯慶中の作なり。【二】州府　府の治所をいふ。【三】磊落　壯大なるさま。【四】顯慶　高宗の年號、西紀六五六至六六〇。【五】甍　棟にあたるかはら。【六】長江　涪江。【七】君王　越王をさす。【八】千秋萬古情　後世の人の情、越王は蔡州の刺史となり、則天武后が獨立せしとき兵を起して唐の興復をはかりしが克たずして死せり、蓋し賢王なり、故に後世の人、その舊跡を見て必ず無限懷古の情をいだくべきをいふ。

【題義】越王貞が建てた綿州の城外の樓にのぼりてつくれる歌。寶應元年綿州にての作。

【詩意】綿州の府治はなんでこんなに壯大であるか、それは顯慶年間に越王貞がおたてになつたのである。その城の西北にあたつてもまた高い樓を起された。その樓の碧色の瓦、朱色の甍瓦ははるかに城郭を照らしてゐる。』この樓にのぼつてみると樓の下には涪江が百丈の水を淸らかにたたへ、附近の山のはには半輪の夕日があかるくかがやいてゐる。むかしの王のたてられた舊迹をいま我我が見て之を賞するのであるが、之によつてさらに今後千年萬年の後の人人のこころもまた我我とおなじく王の舊跡を賞しなつかしむであらうことが知らるるのである。』

海棕行

海棕行

左綿公館清江濆。　左綿の公館、清江の濆、
海棕一株高入雲。　海棕一株高く雲に入る。
龍鱗犀甲相錯落。　龍鱗犀甲相錯落す、
蒼稜白皮十抱文。　蒼稜白皮、十抱の文。
自是衆木亂紛紛。　自ら是れ衆木亂れて紛紛たり、
海棕焉知身出羣。　海棕焉んぞ知らむ身の羣を出づるを。
移栽北辰不可得。　北辰に移栽するは得べからず、
時有西域胡僧識。　時に西域胡僧の識る有り。

【字解】【一】海棕　海外より舶載された棕といふ木、波斯棗の木といふものとおなじとの說あれども明ならず。【二】左綿　涪江の左にあるゆゑに左綿といふとの說あるも、疑らくは成都の東にあるを以て左綿といふならん、綿州のこと。【三】公館　刺史の官邸。【四】濆　ほとり。【五】犀甲　さいの皮のよろひ。【六】錯落　いりまじる。【七】蒼稜　あをきふし。【八】十抱　とかかへ。【九】文　あやもやう。【一〇】移栽北辰　北極星のある地方（都をさす）へうつしうゑる。【一一】西域胡僧　西域地方の外國僧。

【題義】海棕といふ樹をみてよめるうた。寶應元年綿州にての作。

【詩意】綿州の刺史の官邸の江のほとりに、一本の海棕があつて、その高いこと雲にまではひつてを

る。幹をみると十かかへもある大木の蒼きふし、白き皮があや模様をなしてちやうど龍の鱗や、犀の皮の甲がいりみだれてをるごとくみえる。もとより他の多くの木はやたらにたくさんあるから、海棕はどうして自分のからだが他の羣を拔いてゐるものだといふことがわからうぞ。このめづらしい木を北方へ移しうゑたくおもふがそんなことはできぬ、ただ時として西域の外國僧がみてこれは海棕といふ木だといつて識つてくれるくらゐのことにすぎぬ。

姜楚公畫角鷹歌　姜楚公の畫ける角鷹の歌

楚公畫鷹鷹戴角。　楚公の畫鷹は鷹角を戴く、
殺氣森森到幽朔。　殺氣森森として幽朔より到る。
觀者貪愁掣臂飛。　觀るもの貪愁す臂を掣して飛ぶかと、
畫師不是無心學。　畫師も是れ學ぶに心無くんばあらず。
此鷹寫眞在左綿。　此鷹眞を寫して左綿に在り、「ことを。
却嗟眞骨遂虛傳。　却て嗟す眞骨の遂に虛しく傳らるる」
梁間燕雀休驚怕。　梁間の燕雀、驚怕するを休めよ、
亦未摶空上九天。　亦未だ空に摶つて九天に上らず。

【字解】【一】姜楚公　姜皎をいふ、皎は上邽の人、善く鷹をゑがく、玄宗の朝に累官して太常卿に至り、竇懷貞を誅せし功により、楚國公に封ぜらる。【二】戴角　角のごとき毛のふさを頭上に戴だける鷹なり。【三】殺氣　殺伐の氣。【四】森森　しづかにつらなるさま。【五】到幽朔　幽朔の地方より來到するをいふ、幽朔は北方。【六】貪愁　この二字其義詳ならず、仇氏は二義ありとし、貪ニ其能飛一、又愁ニ其飛去一といへるが同時にこんな矛盾した語を用ふるはず無し。或は太愁（はなはだしく愁ふる）といふにあたる當時の俗語なるやも知れず、かりに太愁の義とみておく。【七】掣臂飛　臂衣から一文字をひいて飛び去る。【八】畫師　他のゑかき。【九】不是無心學　非ㇾ無ニ學ㇾ之之心一の義、學びたいとの心はあるがまるでまなべぬ、といふなり。【一〇】眞骨　まことの「たか」。【一一】虛傳　「たか」の名のみありてつたへられ其の實を知らざるをいふ。【一二】梁　はりの木。【一三】怕　おそれる。【一四】亦　畫は妙は妙なれどもまたの義。【一五】摶空　そらに羽をうちつける。【一六】九天　九重の天。

【題義】姜楚公がゑがいた角毛をいただいてゐる鷹をみてよめるうた。寶應元年綿州にての作。

【詩意】楚公がゑがいた鷹は角毛をいただいてゐるたかだ、これをみると北方から殺氣がしづかにつらなつてやつてくる樣な感じがする。之を觀るものはもしや鷹が臂衣から一文字に飛びだしはすまいかとひどく心配するし、ゑかきはできるなら自分もこの樣なたかをかきたいと之を學ぶの念が無いでもないらしい。この鷹が鷹の眞をうつしてこの綿州にあるために却つて眞の鷹は畫に壓倒されて名ばかり傳へられるといふなげかはしいことになつてゐる。がはりのあたりの燕や雀どもよ、驚きおそれることなかれ、いくらうまい畫だとてもまさか空にはねうつて天までまひあがりはせぬから。

東津送韋諷攝閬州錄事　東津にて韋諷が閬州の錄事を攝するを送る

聞說(六)江山好。憐君(七)吏隱兼。　聞說らく江山好しと、憐む君が吏隱を兼ぬるを。
(八)寵行舟遠泛。惜別酒頻添。　寵行舟遠く泛ぶ、惜別酒頻りに添ふ。
(九)推薦非(一〇)承乏。(一一)操持必(一二)去嫌。　推薦、承乏に非ず、操持必ず嫌を去れ。
他時如(一三)按縣。不得(一四)慢(一五)陶潛。　他時如し縣を按せば、陶潛を慢にするを得ず。

【字解】〔一〕東津　觀打魚歌にみえたり。〔二〕韋諷　人名。〔三〕攝　人の代理をつとめる。〔四〕閬州　四川省保寧府なり。〔五〕錄事　官名。〔六〕江山　閬州の江山。〔七〕吏隱兼　吏にして隱者をかぬ。〔八〕寵行　官の舟にて特別に見送るとみゆ、故に行くを寵すといふ。〔九〕推薦　他人のすすめによる。〔一〇〕承乏　不才を以て其の任を承くるなり。〔一一〕操持　身のおこなひかた。〔一二〕去嫌　嫌疑を去る、人からうたがひをうくるごときことをせぬこと。〔一三〕按縣　州内の屬縣の様子をしらべにあるく。〔一四〕慢　なほざりにする、あなどる。〔一五〕陶潛　縣内の賢人にあてて用ふ。

【題義】韋諷といふものが綿州から閬州の錄事代理として赴任するので、之を東津で送つた詩。寶應元年綿州にての作。

【詩意】きくところによると閬州は江山の景色がいいとのことだが、君が吏にして隱者をかぬるは愛すべきことである。君が遠方へゆくについてそれをみ送るため遠くまで舟を泛べ、別れを惜んでは酒をしきりに添へる。このたびの赴任は君の賢なるが故に推薦されたに由るものであつて不才なものがまがりなりに職を承くるのとはわけがちがふ、君は著任後身の行ひに於ては必ず人から嫌疑をうける様なことをさけねばならぬ。それから他日管內の縣を巡視するときに陶淵明の様な賢人が縣の屬官にあるかも知れぬからそんな人物をあなどつてはならぬ。

(一)光祿坂行

光祿坂行

(二)山行(三)落日(四)下(五)絶壁。　山行して落日に絶壁より下り、
(六)南望千山萬山赤。　南望すれば千山萬山赤し。
樹枝有鳥亂鳴時。　樹枝鳥有り亂れ鳴く時、
暝色無人獨歸客。　暝色人無く獨歸の客あり。
馬驚不憂深谷墜。　馬驚くも憂へず深谷に墜つるを、
草動只怕(七)長弓射。　草動いて只怕る長弓の射むことを。
(八)安得更似(九)開元中。　安んぞ得む更に開元の中に似むことを、
道路(一〇)卽今多(一一)擁隔。　道路卽今、擁隔多し。

【字解】〔一〕光祿坂　梓州銅山縣（今の潼川府中江縣）にあり、綿州より梓州へいるときに通過せしとみゆ。〔二〕山行　山みちをゆく。〔三〕落日　日のおちかかるとき。〔四〕下　作者がくだるなり。〔五〕絶壁　きつたてのがけ、卽ち光祿坂をいふ。〔六〕南望　梓州の方をながめる。〔七〕長弓射　盜賊が旅客をめがけて長い弓にて射殺するをいふ。〔八〕安得　希望のことば。〔九〕開元　玄宗の朝太平の時代。〔一〇〕卽今　ただいま。〔一一〕擁隔　まへをふさぎへだてられる。

【題義】光祿坂をとほりしときのうた。寶應元年梓州にての作。

【詩意】自分は日の落ちかかるとき山みちをあるいて絕壁からくだりかける。このとき南の方をながめると千山萬山みなまつかに見える。樹の枝には鳥が居て鳴いてゐる。くらがりの色があたりをとざしてだれもとほる人もなくただひとりかへる自分といふものがあるばかり。自分は馬がものに驚いてそのため深い谷におちても心配はせぬが、ただ草むらがうごいてそこから盜賊があらはれ長い弓で射はせぬかとおそれるものである。どうしたならばもいちど開元年間のやうな太平の時期になることができるであらうか、ただいまは道路がふさがれてとほれぬことが多いのでこまるのである。

(一)苦戰行

苦戰身死馬將軍。(二)
自云伏波之子孫。(三)
干戈未定失壯士。(四)
使我嘆恨傷精魂。(五)
去年南行討狂賊。(六)(七)
臨江把臂難再得。(八)

苦戰行

苦戰身死す馬將軍、
自ら云ふ伏波の子孫なりと。
干戈未だ定まらず壯士を失ふ、
我をして嘆恨、精魂を傷ましむ。
去年南行、狂賊を討つ、
江に臨み臂を把ること再び得難し。

別時孤雲今不飛。
時獨看雲涙橫臆。

別時の孤雲今飛ばず、
時に獨り雲を看て涙臆に橫はる。

【字解】【一】苦戰　馬將軍なる者が苦戰して死せしことを惜しみてよめるうた。其の事實が何年の事なるや諸家異說あり、上元二年段子璋の反して遂州綿州を陷れし時なりとする者多きも疑ふべき點もあり、今決する能はず、しばらく上元二年說に從ふ。【二】馬將軍　名は詳ならず。【三】伏波　後漢の伏波將軍馬援。【四】壯士　馬將軍をさす。【五】去年　戰死の事實が上元二年にありとするものは此語によりて此詩を寶應元年とす、而して寶應元年から前年上元二年をさして去年といひしものとみる。【六】南行　遂州の方へゆきしこと、唐の遂州は今の潼川府遂寧縣なり、一に南行を江南に作る、江南は涪江の南の義。【七】狂賊　段子璋。【八】臨江把臂　此の臨江の江がどこなるかは疑問なり、上文を讀むとき江は涪江なりとみること至當なるも上元二年に作者は涪江には居らず成都にありしなり、因つて浦氏の如きは馬將軍を賊を討ちにゆくとき成都からでかけしものにてこの江は錦江なりとさへいへり、或は作者漫然とかつて錦江にてかたりあひしことをさしていへるか、把臂はひぢをとりてしたしくかたる。

【題義】馬將軍が賊を討ち苦戰して死せしことを惜しみてよめるうた。作時は未詳。かりに寶應元年とす。

【詩意】苦戰をして死んでしまつた馬將軍。彼自らのいふ所によると彼は伏波將軍の子孫だといふことだ。世の兵亂がまだ定まらぬのに彼の如き壯士を失うたについては自分はなげきうらんでひどくこころをいためさせられるのである。彼が去年南方へ賊をうちにでかけたとき江にのぞみ臂をとつてしたしく物語りをして別れたが、それはまたと爲すことはできぬ。あのときみた天上の孤雲は今は飛ばない。自分は時時ひとりで別な雲をみてはむねに涙をながしてゐる。

(一)去秋行

(二)去秋(三)涪江(四)木落時。　去秋涪江木落ちし時、
(五)胥槍走馬誰家兒。　槍を臂にし馬を走らせしは誰家の兒ぞ。
到今不知(六)白骨處。　今に到つて知らず白骨の處、
(七)部曲有(八)去皆無(九)歸。　部曲去る有りて皆歸る無し。
(十)遂州城中(十一)漢節在。　遂州城中、漢節在り、
遂州城外(十二)巴人稀。　遂州城外、巴人稀なり。
戰場(十三)冤魂每夜哭。　戰場の冤魂、每夜哭す、
空令(十四)野營猛士悲。　空しく野營の猛士をして悲ましむ。

【字解】【一】「去秋」 詩中の初の二字をきりとりてうたの題とせしのみ。【二】去秋 此詩前の「胥戰行」とおなじことをいへる詩なり、前詩の事と時と不明なるごとく此篇も不明なり、しばらく上元二年段子璋の反の時の事とみなしおく、子璋は二年四月に反し五月には誅に伏したれば秋とは關係なし、故に注家秋に至りて寇が全く平ぎしならんといへり。【三】浩江 これは遂州の方面の浩江をさす。【四】木落 木の葉のおつること。【五】胥槍走馬 賊を征伐にゆきし官軍のさま。【六】白骨處 官軍戰死者の白骨の橫はれるところ。【七】部曲 部隊。【八】去 征伐にでかけしこと。【九】歸 家へもどる。【十】遂州 潼川府遂寧縣治。【十一】漢節在 漢節とは漢の天子の使者のはたの義、ここは遂州の刺史嗣虢王巨をさすといへり。【十二】巴人 卽ち上の部曲、討賊の官兵。【十三】冤魂 無實の罪に死したたましひ、不幸な戰死者をいふ。【十四】野營猛士 營中の生存の兵をいふ。

【題意】去年の秋のできごとについてのべたるうた。作時未詳。かりに寶應元年とす。

【詩意】去年の秋、涪江のほとりで木の葉のおちたころ、槍を臂にし馬を走らせていつた人人はどこの家のものたちであつたか。その人たちは今は白骨になつてしまつたにその所在がわからぬ。あのときの部隊はいつたものはあるがかへつたものはない。遂州には天子の使者がをられたが立派に戰死された。さうして官軍には利あらず部曲となつていつた巴地の人人もいきのこつたものは稀である。戰場の不幸の死鬼はまいばん哭してをる、之をきいては野營の猛士もいたづらに悲しみをもよほすばかりである。

(一)廣州段(二)功曹到。(三)得楊(四)五長史譚書。功曹(五)却歸。聊寄此詩

廣州の段功曹到る。楊五長史譚が書を得たり。功曹却歸す。聊か此の詩を寄す

(六)衞青開幕府。(七)楊僕將樓船。　衞青、幕府を開く、楊僕、樓船に將たり。
(八)漢節(九)梅花外。(十)春城海水邊。　漢節、梅花の外、春城、海水の邊。
(十一)銅梁書(十二)遠及。(十三)珠浦使(十四)將旋。　銅梁、書遠く及ばる、珠浦、使將に旋らむとす。
(十五)貧病(十六)他鄉老。煩(十七)君(十八)萬里傳。　貧病、他鄉に老ゆ、君を煩はして萬里に傳へしむ。

【字解】【一】廣州　廣東にあり。【二】段功曹　功曹參軍段某。【三】到　梓州へきたこと。【四】楊五長史譚　楊はさきに桂州にありしが桂州より廣東へ轉任せしとみゆるなり、長史は官名。【五】卻歸　もどる。【六】衛青　漢の武帝の時の武將、今かりて廣州の都督をさす、楊譚が長官たるもののことをいふ。【七】楊僕　漢の時樓船將軍となり豫章より出で横浦に下れり、楊譚に比す。【八】漢節　都督、天子の命をうけ節を持するをいふ。【九】梅花　廣東の北の大庾嶺は梅花を以て名あり。【一〇】春城　廣州の城をさす、時に春なるを以て春城といふ。【一一】銅梁　山の名、梓州にあり、作者自己の居處をいふ。【一二】遠及　わざわざここまでよこしてくれたといふこと。【一三】珠浦　合浦のこと、廣東廉州にあり、眞珠を以て名あり、名所をあげたるのみ。【一四】使　使者、段功曹をさす。【一五】貧病　作者の況。【一六】他郷　蜀地をさす。【一七】君　段。【一八】萬里　廣州。

【題義】廣州の段功曹がきてくれたので自分は廣州の都督府の長史楊譚が手紙を得た。段がもどるといふので自分は此詩を楊に寄せた。寶應元年梓州にての作。

【詩意】衛青に比すべき君の長官が廣州に幕府を開いてゐる。楊僕に比すべき君はその部下として樓船をひきゐてゐる。都督は梅花の名所のさらに遠くに使節を持してをるし、その城は海水のほとりにある。そんな遠方の地からこんな銅梁山のある所までわざわざ手紙をよこしてくれられた。その手紙をもつてきてくれた使者段君はいま合浦の方へかへらうとする。それで段君よ、君を煩はしてわたしが貧しくかつ病んで他郷に老いつつあるといふことを傳言してもらふのである。

送段功曹歸廣州

段功曹が廣州に歸るを送る

南海(一)春天(二)外。功曹(三)幾月程(四)。

峽雲籠樹小(五)。湖日蕩船明(六)。

交趾(七)丹砂重。韶州(八)白葛(九)輕。

幸君(一〇)因旅客。時寄錦官城(一一)。

南海、春天の外、功曹、幾月の程ぞ。
峽雲籠めて樹小に、湖日蕩して船明なり。
交趾、丹砂重く、韶州、白葛輕し。
幸に君、旅客に因りて、時に錦官城に寄せよ。

【字解】【一】南海　廣東の海。【二】春天　時春なるゆゑ春天といふ、一に青天に作る。【三】功曹　段をさす。【四】幾月程　いくつきのみちのりぞ。【五】峽雲籠樹小　上三字下二字の句法なり、籠レ樹小とよみては雲が小なることになりて不都合なり。【六】湖日蕩船明　これも上三字下二字によむべし、湖とは洞庭湖などをさす、蕩とは水面の日光がうごくこと。【七】交趾　嶺東よりさらに南にあり、丹砂をいだす、葛洪、丹砂いづとききき、勾漏の令たらんと欲せしこと前にみゆ。【八】韶州　廣東にあり。【九】白葛　白いくづのかたびら。【一〇】君　段をさす。【一一】錦官城　成都の西城、じつは浣花草堂をさす、此句あるにより此詩を成都にての作とするものあるも、段功曹は梓州へ手紙をもち來りしものなれば此詩も梓州にての作なるべし、錦官城といへるはそこに草堂ありて弟をるすにおいてあるゆゑそこを假りの根據地としてのべしなるべし。

【題義】段功曹が廣州へもどるのを送る詩。寶應元年春梓州にての作か。

【詩意】南海は春天の外のとほくにある、功曹はそこへゆきつくにいく月のみちのりを要するのか。君の通過するところ、或は峽雲にこめられて樹木が小さくみえたり、或は湖上の落日波上にうごいて船の窓明なるをみることであらう。廣州へいつたなら交趾には貴重すべき丹砂があるし、韶州には

輕らかな白い葛のかたびらがある。どうか君はたびびとにあつらへて時としてはそれを錦官城のわたしの方へよこしてもらひたい。

題玄(一)武禪(二)師屋壁

玄武の禪師が屋壁に題す

何年顧(三)虎頭。滿壁畫滄洲(四)。
赤日石林氣。青天江海流。
錫(五)飛常近鶴(六)。杯(七)渡不驚鷗(八)。
似得廬(九)山路。眞隨惠遠遊。

何の年か顧虎頭、滿壁、滄洲を畫ける。
赤日、石林の氣、青天、江海の流れ。
錫飛びて常に鶴に近く、杯渡、鷗を驚かさず。
廬山の路、眞に惠遠に隨つて遊ぶを得るに似たり。

【字解】【一】玄武　山の名にして又縣の名、潼川府中江縣これなり。【二】禪師　名は詳ならず。【三】顧虎頭　晉の顧愷之、小字を虎頭といふ、畫の名人なり。【四】滄洲　仙境なり。【五】錫飛　梁の時、寶誌上人と白鶴道人と舒州の灊山に之くことを爭ひ、上人は錫を飛ばし道人は鶴をつかはし各〻そのゆきつきし處をしるさしめしとの話あり。【六】鶴　畫中の石林に屬するもの。【七】杯渡　木杯にて河をわたることなり、これも仙人のすることなり。【八】鷗　畫中の江海に屬するものなり、「列子」に道を得て機を忘れしものは鷗にまじりても鷗は之になれて驚かぬといふ話あり。【九】廬山　山の名、江西九江府にあり、晉の僧惠遠その山麓に東林寺を建て白蓮社を結ぶ、十八人の賢人相會す。

【題意】玄武山の或る禪師の屋壁にかきつけた詩。寶應元年梓州にての作。

【詩意】いつのとしにか顧虎頭がここの壁ぢうに滄洲の仙境をゑがいた。赤日照らして石林の氣うかぶさま、青天たかくして江海の水流るるさま。仙境のすがたである。之に對して禪師は常に圖中の鶴にちかく錫を飛ばし、或は古仙のやうに木杯をうかべて鷗にちかづくとも鷗を驚かすことなく、この畫境としたしんでをられる。自分も禪師のところでこの圖を見るとなんだか廬山のやまみちで惠遠法師にしたがうて遊ぶことができたかの樣なここちがする。

悲(一)秋

悲秋

涼風動萬里。羣(二)盜尙縱橫。
家遠傳(三)書日。秋來爲客情。
愁窺(四)高鳥過。老逐衆人行。
始欲投(五)三峽。何(六)由見兩(七)京。

涼風、萬里に動く、羣盜尙縱橫。
家は遠し傳書の日、秋來、客と爲るの情。
愁へて高鳥の過ぐるを窺ひ、老いて衆人の行くを逐ふ。
始めて三峽に投ぜむと欲す、何に由りてか兩京を見む。

【字解】【一】悲秋　かなしむべきあき。【二】羣盜　史朝義、吐蕃未だ平がず、成都には徐知道が亂あり。【三】傳書　留守宅から手紙がこちらへつたへらるる。【四】窺高鳥過　自己も飛びたしとおもふなり。【五】投三峽　身を三峽の地に投ずること。作者は蜀を出づるには先づ三峽に至りて、そこより都へかへるを便利とかんがへしなり、是、後年夔州に至りし所以なり。【六】何由　いか

なる方法によりてか。(三峽に投ずるに非ればし)。【七】兩京　長安、洛陽。

【題義】かなしき秋のをりのこころをよめり。寶應元年の秋梓州にありて作る、時に家族は成都に在り。

【詩意】すずかぜが萬里の地に吹きそめた。それだのにさまざまの盜賊どもがまた縱橫にはびこつてゐる。家が遠くて手紙が容易にこぬとき、秋からかけて異鄉にひとりたびの身となつてゐる自分のこころもち、(それはどんなであるか)自分は愁へては高くとぶ鳥のすぎるのをのぞいては自分もあんなになりたいなあとかんがへ、老いては多くの人人のあるくあとからくつついてゆくばかりである。自分は今はじめて身を三峽の地に投じようとおもふのだ、それがいちばん都合がいい。それでなければいかなる方法によつて兩京を見ることができようぞ。

客夜（一）

客睡何曾著（二）。秋天不肯明（三）。
入簾殘月影。高枕遠江聲。
計拙無衣食。途窮仗（四）友生（五）。
老妻書（六）數紙（七）。應悉（八）未歸情（九）。

客夜

客睡何ぞ曾て著せむ、秋天肯て明ならず。
簾に入る殘月の影あり、高枕、遠江聲あり。
計拙にして衣食無し、途窮して友生に仗る。
老妻、書數紙、應に未歸の情を悉すなるべし。

【字解】【一】客夜　たびのよる。【二】客睡何曾著　睡著の二字をきりはなして用ひたり、客何曾睡著と同意、睡著はねむりつづけること。【三】不肯明　意地わるくあけようとせぬといふこと、ねむれぬものは早く夜のあけんことを欲す、欲すれば欲するほど夜はあけぬ、それをかくいへり。【四】仗　よる。【五】友生　ともだち、梓州の武官章彝をさすかとの說あり。【六】老妻書　仇氏は書乃寄妻之書と注して妻へあてる手紙とときたるも、恐くは妻からの手紙なるべし、前詩の家遠傳書日の書はこの妻の手紙を待ちしものなるべく、前詩の書と本詩の書とは同じからん。【七】數紙　三四枚。【八】悉　妻が知りつくす。【九】未歸情　梓州に居て成都へかへらぬ作者のこころ。作者の歸らざるは衣食のためと、三峽へ出ようとの考との二つによる。

【題義】梓州にありてのたびの夜のこころもちをのぶ。蓋し妻の手紙を得し夜のことなり。寶應元年秋、梓州にての作。

【詩意】たびのねむりはねむらうとしたところでどうしてねむりつづけることができるものか、とてもねつかれぬ。それにあきのそらが意地わるくよあけになつてくれようとせぬ。すだれのなかへは殘月のかげがさしこむし、枕を高くしてねてゐると遠くの方で江の流れのなるおとがする。自分は世わたりの計がまづくて衣食をもたぬので、逆境にこまつてここの友だちにたよつてをるのである。老妻からちかごろ三四枚の手紙がきた。それによれば妻もわしのかへらずにゐるこころもちをよく知つてくれたこととおもはれる。

客亭(一)

秋窗猶曙色。落木更高風。
日出寒山外。江流宿霧中。
聖朝無棄物。衰病已成翁。
多少殘生事。飄零任轉蓬。

客亭

秋窗猶曙色、落木更に高風。
日は出づ寒山の外、江は流る宿霧の中。
聖朝、棄物無し、衰病已に翁と成る。
多少殘生の事、飄零、轉蓬に任す。

【字解】【一】客亭　客居せる所の亭。

【題義】梓州の寓居の亭にてのさまをのべたり。前の「客夜」と同時の作なるべし。寶應元年梓州にての作。

【詩意】秋の部屋のまどがまだあけぼのの色をおびてゐる。そとでは木の葉が落ちつつあるのにさらに風がたかく吹いてゐる。さむぞらの山の外から太陽がでる、まだはれぬ霧のなかに江の水がながれてゐる。聖代にはうちすてられておかれるものとてはないのであるが、自分は老衰、疾病でなにごともなすことなくしてはやおぢいさんになつてしまうた。これからどれほどかの老いさきの事があらうが、それはおちぶれて蓬のころがりゆくにまかす樣な飄泊生活を爲すにとどまるのである。

九日登梓州城(一)(二)

伊(三)昔黃(四)花酒。如(五)今白(六)髮翁。
追(七)歡筋(八)力異。望(九)遠歲(一〇)時同。
弟妹悲歌裏。乾坤醉(一一)眼中。
兵(一二)戈與關(一三)塞。此日意(一四)無窮。

九日梓州の城に登る

伊昔黃花の酒、如今、白髮の翁。
追歡、筋力異なり、望遠、歲時同じ。
弟妹、悲歌の裏、乾坤、醉眼の中。
兵戈と關塞と、此の日意窮り無し。

【字解】【一】九日　陰曆九月九日、重陽菊酒なのみ祝する日なり。【二】梓州　今四川省潼川府三臺縣治。【三】伊　これ、ことばなり。【四】黃花酒　菊花なうかべたるさけ。【五】如今　いま。【六】白髮翁　自己をいふ。【七】追歡　むかしのおもしろさを今日よりさかのぼつてかんがへる。【八】筋力異　昔は壯年にして今は老年となりたれば筋力の强弱ことなれり。【九】望遠　遠地を望むこと、遠地とは弟妹等の居る地方をいふ。【一〇】歲時同　歲は一歲、時は四時、歲時にて一年中をいふも意味する所は九日にあり。同じとは遠きを望むはいつもこの祝日に於てし、すこしもかはらぬをいふ。【一一】醉眼中　醉ひのまなこにてながめてをる。【一二】兵戈　兵亂をいふ。【一三】關塞　これは弟妹等と關塞をへだててをるをいふ、望遠の遠の字をうけて距離のうへよりいひし辭なり。仇注に兵戈阻於關塞とときたるは兵戈と關塞とを同じ樣に見たるものにて、それならば「與」の字を以て對等に結びつける要なきなり。【一四】意無窮　意は悲哀のこころをいふ。

【題義】菊花酒をのみ重陽の日に梓州の城にのぼりて感をのぶ。寶應元年秋、梓州にての作。

【詩意】むかしわかいころ菊酒をのんだが今や自分はしらがのおやぢとなつた。むかしのおもしろさ

をさかのぼつてかんがへるとむかしとは筋力がちがつてきた、ただ遠地の様子如何とながめることはいつもこの祝日であつてかはらず、同じことである。卽ち弟妹のことはいつも悲歌のうちに之をおもひ、この天地のさまもただ酔の眼からながめてゐる、酔によらざればみてをれぬのである。どうしていま兵亂のさわぎと關塞のへだたりとが我我近親の會合をさまたげてゐるのか、けふに於ける自分の悲哀のこころもちははてしないものである。

九日奉寄(一)嚴大夫

九日嚴大夫に寄せ奉る

九日(二)應愁思。(三)經時冒(四)險難。
不眠持(五)漢節。何路出(六)巴山。
小驛(七)香醪(八)嫩。(九)重巖(一〇)細菊斑。
遙知(一一)簇鞍馬。(一二)回首(一三)白雲間。

九日應に愁思するなるべし、經時、險難を冒す。
眠らずして漢節を持す、何の路か巴山を出でむ。
小驛、香醪嫩に、重巖、細菊斑なり。
遙に知る鞍馬を簇らして、首を白雲の間に回らさむことを。

【字解】〔一〕嚴大夫　嚴武なり、武は歸朝を命ぜられ御史中丞より御史大夫に進められたり。武は六月朝廷へかへりかけしが徐知道の亂ありて九月になほ巴の地方を出でざりしなり。〔二〕應愁思　武のことを想像していふ、愁思とは武が愁思するなり。〔三〕經時　時をへて、ながき時をいふ。〔四〕險難　道路のなんぎ。〔五〕漢節　漢の天子の使者のもつ「はた」、武が唐の天子より軍務の重任を委任せられたるをいふ。〔六〕巴山　大巴山、四川省保寧府南江縣にあり。〔七〕香醪　かんばしきにごりざけ。〔八〕嫩　やはらか、できたてなるをいふ。〔九〕重巖　かさなれるいはほ。〔一〇〕細菊　小花の「きく」。〔一一〕簇鞍馬　嚴武一行の鞍馬が多くなる。〔一二〕回首　杜甫の方へかうべをむけてながめる。〔一三〕白雲　山中のことゆゑ白雲といふ。

【題義】九日の祝日にあたり御史大夫嚴武に寄せた詩。寶應元年重陽に梓州にありて、梓州より寄せたる作なり。

【詩意】あなたはいまごろは愁へて思ひつつあるであらう、それはながらく道路のなんぎををかしてゐられるからである。すなはち夜もろくろく眠らずに使者の節を持ち、朝威をはづしめぬ樣にしてをられるが、どの路から巴山を出ようとされるのであるか。あなたのとほられる小驛には香しきにごりざけがやはらかな味をもち、かさなれる巖にはこまかい菊の花がまだらにさいてゐるであらう。自分がここからはるかに想像すると、あなたはそこに鞍馬をむらがらせてをりながら、白雲のあひだに首をめぐらしてわたしのゐるこちらをながめてをられることであらう。

【餘論】杜甫の此篇に對して嚴武が答へたる詩あり。左の如し。

巴嶺答杜二見憶　　嚴武

臥向巴山落月時。　兩鄉千里夢相思。

可但步兵偏愛酒。　也知光祿最能詩。
江頭赤葉楓愁客。　籬外黃花菊對誰。
跋馬望君非一度。　冷猿愁雁不勝悲。

巴嶺にて杜二が憶はるるに答ふ　嚴武

臥して向ふ巴山落月の時、兩鄉千里夢相思ふ。但步兵の偏に酒を愛するのみなるべけんや、也知る光祿が最も詩を能くするを。江頭の赤葉楓客を愁へしむ、籬外の黃花菊誰にか對す。馬を跋し君を望む一度に非ず、冷猿愁雁悲みに勝へず。

秋盡(一)

(二)秋盡(三)東行(四)且未(五)迴。
(六)茅齋(七)寄在(八)少城(九)隈。
籬邊(一〇)老却(一一)陶潛菊。
(一二)江上徒逢(一三)袁紹杯。
(一四)雪嶺獨看西日落。
(一五)劍門猶(一六)阻(一七)北人來。
不辭萬里長爲客。
(一八)懷抱何時好一(一九)開。

秋盡

秋盡きて東行且未だ迴らず、
茅齋寄せて少城の隈に在り。
籬邊老却す陶潛が菊、
江上徒らに逢ふ袁紹が杯。
雪嶺獨り看る西日の落つるを、
劍門猶阻つ北人の來るを。
辭せず萬里長く客と爲るを、
懷抱何の時か好し一たび開かむ。

【字解】【一】秋盡　題の二字は詩の首句の二字を取る。【二】秋盡　秋のをはりしこと。【三】東行　梓州は成都より東にあり。【四】且　秋盡きて尚且の意。【五】迴　成都へもどること。【六】茅齋　かやぶきの書齋、草堂のそれをいふ。【七】寄　依託の意。【八】少城　成都の西城、張儀が作る所といひ、錦官城と名くるものとおなじ。【九】隈　水の回るところをいふ、「くま」。【一〇】老却　却はつけ字なり、老いてしまふこと。【一一】陶潛菊　陶淵明菊を愛す、自己を淵明に比して其の愛する菊をさして陶潛が菊といへり。【一二】江上　これは梓州の涪江をさす。【一三】袁紹杯　後漢の鄭玄が故事。袁紹兵を冀州に總べしときかつて大に賓客を會し、使をつかはして鄭玄をむかふ、玄至れば身長八尺、酒を飲むこと一斛、秀眉明目、容儀溫偉なりしと。鄭玄を以て自己に比し、梓州の李使君を袁紹に比したり。【一四】雪嶺　雪山なり、梓州よりみれば、西にあたる、故に下に西日といへり。【一五】劍門　梓州よりいへば北にあたる。【一六】阻　じやましてへだてること。【一七】北人　長安方面よりくる人。【一八】懷抱　むねにいだくものおもひ。【一九】開　懷抱を開くなり。

【題義】秋の末になりてまだ他鄉に居ることをのべたり。寶應元年秋、梓州にありての作。

【詩意】自分は東の方へでかけてゐてはや秋が終りかけたにかかはらずまだ家へかへらず、書齋は成都の少城の水のくまに寄託してある。家をあけてあるから草堂の籬のほとりには淵明の愛した菊が老いぼれてゐるであらうし、ここの江のほとりでは徒らに土地の主人袁紹の酒杯をうけてをる。家を思ふからただひとりで雪嶺の方に夕日の落つるのをながめやるし、さらに兩都の消息如何と案ずるに依

然として劍門は北方から人のくるのをじやましてをる。萬里の遠くにあつていつまで旅客の身となつてをることはいとはぬが、いつたいいつになつたらこのふさがつたむねのおもひをからりとさせることができるのであらうか。

(一)戲題(二)寄上(三)漢中王三首　戲れに題して漢中王に寄せ上る三首

(四)西漢(五)親王子。成都(六)老客星。　西漢の親王子、成都の老客星。

(七)百年(八)雙白鬢。一別(九)五秋螢。　百年、雙白鬢、一別、五秋螢。

忍(一〇)斷杯中物。秖看(一一)座右銘。　杯中の物を斷ちて、秖座右の銘を看るに忍びむや。

不能隨(一二)皂蓋。(一三)自醉(一四)逐流萍。　皂蓋に隨ふこと能はず、自ら醉ひて流萍を逐ふ。

【字解】【一】戲題　たはむれにかきつける、諧謔に王に酒なれだる意をのべたり、是れ戲れといふ所以なり。【二】寄上　寄せて獻上する。【三】漢中王　名を瑀といひ讓皇帝(寧王)の第六子にして汝陽王璡が弟なり。玄宗が蜀に幸せしとき之に從て漢中に至り、漢中王に封ぜられ銀青光祿大夫・漢中郡太守を加へらる。肅宗のとき之を諫めしによりて帝の怒りにふれ蓬州の刺史に貶せらる。ここには漢中王と稱したるも蓬州の刺史として何かの事により梓州に來るにより作者之とあひたるものとおもはる。【四】西漢　前漢、唐のことなれど漢をかりていふ。【五】親王子　天子の近親なる王子。【六】老客星　星の名、巳にみゆ、自らを比す。【七】百年　生涯をいふ。【八】雙白鬢　左右の白いびんのけ。【九】五秋螢　五年をへしこと、乾元元年長安より華州へ出でしとき王と別れ、今寶應元年に至りて五年となる。【一〇】斷杯中物　酒を禁ずること、王は時に禁酒してゐたるものとみゆ。【一一】座右銘　後漢の崔瑗が作る所なり、銘は人の戒めとなることをのべたり。【一二】皂蓋　黑色の車蓋、地方官の用ふるもの。王は刺史なれば皂蓋を用ふ。【一三】自醉　じぶんひとりでゑふ。【一四】逐流萍　うきくさなまれてながれあるく。

【題義】漢中王李瑀にであうたところ酒を禁じてをられるので戲れにかきつけて之にたてまつた詩。寶應元年梓州にての作。

【詩意】漢中王は漢の皇室御近親の王子であられる。自分は成都の年とつた客星である。自分の生涯ははや左右に白い鬢の毛がはえる樣になつたが、王とお別れして以來はや五箇年となりまする。久しぶりでおあひしたのだから一杯やりたいものではござりませぬか。酒を斷つてただまじめくさつて座右の銘などばかりごらんになつてゐるにたへられませうや。ただ御禁酒とあつてはいたしかたもござらぬ。おのりもののあとにおともするわけにはまゐらず、うきくさの流れをおうて自力で醉うてゐるよりほかはござりませぬ。

〔二〕

(一)策杖時能出。(二)王門(三)異昔遊。　策を杖つきて時に能く出づ、王門、昔遊に異なり。

(四)已知(五)嗟不起。(六)未許(七)醉相留。　已に知る嗟して起たざるを、未だ許さず醉ひて相留むるを。

蜀酒濃無敵。江魚美可求。
終思一酩酊。淨掃雁池頭。

蜀酒、濃にして敵無し、江魚、美にして求む可し。終に思ふ一たび酩酊せむことを、淨く掃はむ雁池の頭。

【字解】[一] 策杖　策はつゑ、杖は之をつくこと、通常「杖策」といひて策杖とはいはず、或は誤りて顚倒せるか、此句自己をいふ。[二] 王門　漢中王の邸の門。[三] 異昔遊　昔年王の門にあそびしときとは様子がちがふ、今は王は賓客を宴せざるなり。[四] 已知　知るは作者が知るなり。[五] 嗟不起　王がかくするなり、嗟はなげく、不起とは酒にあてられてたちあがれぬをいふ。[六] 未許　許とは王がゆるすなり。[七] 醉相留　客をひきとめてよはせる。[八] 酩酊　ひどくゑふこと。[九] 淨掃　さつぱりと掃除する。[一〇] 雁池　王の邸内の池をいふ。漢代、梁の孝王兎園を築く、うちに雁池あり、末の二句は「終に思ふ、淨く雁池の頭を掃うて一たび酩酊せんことを」の意。

【詩意】自分は杖をついて時としてでかけるにはでかけるが、王の門はむかしとは様子がちがふ。あなたはためいきついて起きられぬと仰せられて、まだ人をひきとめて醉はせようとはなされませぬ。蜀の酒の味のこまやかなことは他に敵するものがないし、涪江の魚のうまいやつはぢきに求められまするぞ。わたくしはどうあつてもお邸の池のほとりをさつぱり掃除してくださつてそこでいつぺん十分醉ひたいものだとおもうてをりまする。

〔三〕

羣盗無歸路。衰顏會遠方。
尙憐詩警策。猶記酒顚狂。
魯衛彌尊重。徐陳畧喪亡。
空餘枚叟在。應念早升堂。

羣盗に歸路無し、衰顏に遠方に會す。尙憐む詩の警策、猶記す酒の顚狂。魯衛彌、尊重、徐陳畧喪亡す。空しく枚叟を餘して在り、應に念ふべし「早く堂に升りし」ことを。

【字解】[一] 羣盗　羣盗のはびこるときにあたつての意、羣盗とは蜀に徐知道あり、兩京には黨項羌あり、東都には史朝義あるの類をいふ。[二] 無歸路　自分の故郷へかへるべき道路がない。[三] 衰顏　かほつきが老衰したときにあたつての意。[四] 會遠方　王と遠方に於てであうたこと、遠方とはこの梓州の地をさす。[五] 詩、[六] 酒　ともに作者自己のこと。[七] 警策　馬にくれるいましめのむち、詩文の一篇のなかに短いぴりつとこたへる様な文句あるをいふ。[八] 顚狂　ゑうてくるひまはるさま。[九] 魯衛　魯も衛も周代には天子の家と親戚のあひだがらなり、漢中王は皇族ゆゑかくいふ、また開元十四年十一月玄宗が寧王の宅へ行幸して宴せしときの詩にも魯衛情尤重の句あり。[一〇] 尊重　たふとくおもし。[一一] 徐陳　魏の徐幹・陳琳、魏の文帝に愛せられし文學者なり、文帝が吳質に與へし書に、徐陳應劉、一時倶逝の語あり、ここは漢中王の賓客たりし他の多くの文學者をさす。[一二] 枚叟　漢の枚乘、乘は梁の孝王の賓客として詞賦最も高かりし、今かりて自己に比す。[一三] 念　王がおもふ。[一四] 早升堂　かつて以前に王邸の堂にのぼり知遇を得しことをいふ。

【詩意】いま諸處で多くの盗賊があるのでわたくしは故郷へかへる路がありませぬ。かかるときこの老衰した顏つきであなたとこんな遠方でおあひをしました。それにあなたはまだわたくしの詩に警策のあることを愛せられ、またわたくしが酒をのんでくるひまはるくせのあることをお忘れになりませぬ。あなたは皇室のおつづきあひでいよいよ尊貴の地位にあらせられるがかつて知遇を辱うした文

學者ども、徐・陳に比すべき人たちはあらかたなくなつてしまひました。いたづらに枚乘に比ぶべきわたくしだけがのこつてをりまする。どうかこのおやぢはずつと以前からお邸の堂にのぼつたものであるといふことをおかんがへくだされたい。

（一）翫月呈（二）漢中王

月を翫びて漢中王に呈す

夜深露氣清。（三）江月滿江城。
夜深くして露氣清し、江月、江城に滿つ。

（四）浮客轉（五）危坐。（六）歸舟應獨行。
浮客轉た危坐す、歸舟應に獨行すべし。

關山（七）同一照。烏鵲自多驚。
關山、同一に照らす、烏鵲自ら多く驚く。

欲得（八）淮王術。風吹（九）暈已生。
得むと欲す淮王の術、風吹きて暈已に生ず。

【字解】【一】翫月　月色のあかるきをめでしこと。【二】漢中王　前詩の王なり。【三】江　涪江。【四】浮客　飄泊する旅客、自己をさす。【五】危坐　脚をうしろへまげかされてすわること、けだしおちつかぬさま、おちつかぬに瓶といふは矛盾せる如くなるもそこに月を惜むこころこもるなるべし。【六】歸舟　王に別れて自己の居所成都へかへるに舟にのるなるべし、（或は曰く王が蓬州へかへるなりと、しかし王ならば獨行は似合はしからざれば作者の舟をいふならん）。【七】同一照　照を或は點に作るはよろしからず。【八】淮王術　淮王とは漢の淮南王劉安をいふ、以て漢中王に比す、安が著はせる「淮南子」に「畫蘆灰」而月暈闕の語あり、蘆をもやした灰のうへに月の形をかき、その一部分をけせば天上の月のくもりもその部分がかける、といふなり。【九】暈　月暈なり、おつきさまのかさ、舟がゆくに風があつてはならぬゆゑ「かさ」をはらひのけたしといふなり。

【題義】月の光りをめでて漢中王にたてまつつた詩。これは月をもてあそぶといふも惜別の詩なり、惜別のあわただしきとき月の光りをめづるといふは王に對する戀著の情をこめしものかと察せらる。寶應元年梓州にての作。

【詩意】夜がふけて露の氣がきよくおき、江上の月がかはぞひの城いつぱいにさしこんでゐる。この月をながめながら旅行のことが氣になるから飄泊ものたる自分はたちひざのかたちでこの月をながめる。しかしつまりはただひとりで舟にのつてかへらねばならぬのである。この月の光りはすべての關山を同一に照らし、わたしをてらすひかりはすなはちあなたをてらしてゐる、ただ月前の烏鵲は多くみづから驚いておちつかぬ。いま舟のでかかつてゐるときに風が吹きだし月のおかさがでだした、これではならぬによつて、どうか淮南王の術でもつてこのおかさをはらひのけてしまひたいとおもふのである。

（一）從事行。贈（二）嚴二別駕

從事行、嚴二別駕に贈る

我行入（三）東川。
我行きて東川に入る、

【字解】【一】從事行　從事のことをうたへるうた、詩中に「本州從

十步一迴首。　十步に一たび首を迴らす。

（四）成都亂罷氣（五）蕭索。　成都、亂罷みて氣蕭索たり、

浣花草堂亦（六）何有。』　浣花の草堂亦何ぞ有らむ。』

（七）梓中（八）豪俊大者誰。　梓中の豪俊、大者は誰ぞ、

（九）本州從事知名久。　本州の從事名を知らるること久し。

把臂開樽飲我酒。　臂を把り樽を開き我に酒を飲ましむ、

酒酣擊（一〇）劍蛟（一一）龍吼。　酒酣に劍を擊てば蛟龍吼ゆ。

（一二）烏帽拂塵青（一三）驟粟。　烏帽には塵を拂ひ青驟には粟、

（一四）紫衣將（一五）炙緋衣走（一六）。』　紫衣は炙を將ひ緋衣は走る。』

（一七）銅盤燒（一八）蠟光（一九）吐日。　銅盤、蠟を燒き光り日を吐く、

（二〇）夜如何其初促（二一）膝。　夜如何其、初めて膝を促す。

（二二）黃昏始扣（二三）（二四）主人門。　黃昏始めて扣く主人の門、

（二五）誰謂俄（二六）頃膠（二七）在漆。　誰か謂はむ俄頃、膠、漆に在り。

萬事盡付（二八）形骸外。　萬事盡く付す形骸の外、

（二九）百年未見歡娛畢。　百年未だ見ず歡娛の畢るを。

（三〇）神傾意（三一）豁眞佳（三二）士。　神傾き意豁にして眞に佳士なり、

（三三）久客多憂今愈（三四）疾。』　久客憂多し、今疾を愈す。』

（三五）高視乾坤又可愁。　高く乾坤を視るに又愁ふ可し、

（三六）一體交（三七）態同悠（三八）悠。　一體交態同じく悠悠たり。

（三九）垂老遇君未恨晩（四〇）。　垂老君に遇ふ未だ晩きを恨みず、

（四一）似君須向古（四二）人求。』　君に似たるは須らく古人に向つて求むべし。』

事」の語あり。【二】贈二別駕　梓州の別駕の官なる嚴某。【三】東川　梓州をいふ、梓州は東川節度使の治所なり。【四】成都亂罷　寶應元年七月に劍南兵馬使徐知道反す、八月知道は其の將李忠厚に殺さる、是に於て亂平ぐ。ここに亂罷むとあれば八月以後のことなり。【五】氣蕭索　氣象さびし。【六】亦何有　草堂も焚かれてあるまじとおもふなり。【七】梓中　梓州以內をいふ。【八】豪俊　すぐれた人物。【九】本州從事　本州とは梓州をいふ、從事とは屬官なり、州の長官は刺史、別駕はその下に屬す、即ち從事なり。【一〇】擊劍　劍舞をなすなり。【一一】蛟龍吼　劍の鳴る様子。【一二】烏帽拂塵　主人が客（作者）のゑばうしのほこりを拂はせる。【一三】青驟粟　客の青驟には粟をあたへてたべさせる（或は驟を鰻に作り青鰻粟とは帽子の紋様なりとの解をなすものあれども今從はず）。【一四】紫衣、緋衣　主人の子弟の雜役を執るものをいふ。【一五】將炙　きやくの前にあぶり肉をもちだす。【一六】走　いろいろもてなしごとの爲めに奔走する。【一七】銅盤　あかがねの大きなばん、これは燭臺のこと。【一八】燒蠟　らふそくをもやす。【一九】光吐日　あきらかなさま。【二〇】夜如何其　「其」の字は助字、詩經に夜如何其、夜未央、とあり、これは夜なかごろをさしていへり。【二一】促膝　ひざとひざをつきあはせる、促とはさあお先きへといふて客を前へのりださせるをいふ。【二二】黃昏　たそがれどき。【二三】扣　叩と同じ。【二四】主人　嚴別駕。【二五】誰謂　意外にも、かくあり。【二六】俄頃　しばらくにして。【二七】膠在漆　にかは、うるし、共に物をくつつけあはせる用を爲す、二者を合すれば更によくくつつく、賓主交情の密に合するをいふ。【二八】付形骸外　事の重んずべきものは精神に在りて形骸に在らず、形骸の外に付すとは之を輕視して措いて問はざるをいふ。【二九】百年　生涯の時間。【三〇】神傾　その精神を我がかたへかたむける。【三一】意豁　こころひろくして能く我をいれる。【三二】佳士　よい人物。【三三】久客　なが〳〵の旅客、自己をさす。【三四】

瘴疾　やまひがなほる。【三五】**高觀乾坤**　天地をみあげてみる。【三六】**一體**　世上一般をいふ。【三七】**交態**　人と人と交るさま。【三八】**悠悠**　悠悠とは悠悠行路の略言なるべし、悠悠行路とははるかなるみちのことなり、ただし人の人に於ける親切心なく路傍の人を見るがごとくなるをさして悠悠行路心といふ。【三九】**垂老**　年老いかかつて、老ゆるになんなんとして。【四〇】**晩**　おそし。【四一】**似君**　如君の意。【四二】**古人**　むかしの人、今世にはなきなり。

【題義】 梓州で別駕の官嚴某にであうてその人物が氣にいりたるによりつくれるうた。寶應元年秋、梓州にての作。

【詩意】 自分はあるいて東川（梓州）にはひつたが、十あしあるいては一たびふりむいて成都の方をながめた。成都も兵亂が終つて氣象ものさびしくなつたであらう、我が浣花の草堂もどうして存在してゐるとおもはれよう。』 さて梓州には豪俊もあるがその大なるものはだれかといふと、本州の從事たる嚴別駕その人が尤も久しく名を知られてゐる、この人が自分の臂をとり酒だるを開いて自分に酒を飮ませてくれ、酒の酣なるときには劍舞をなす、劍は蛟龍の吼ゆるごとくにうなる。それからわたしの帽子の塵をはらはせ、わたしの靑騾にもみがらをたべさせてくれ、また子弟をもつかつて、その紫衣をきたものはあぶり肉をもちだす、緋の衣をきたものは色色の事のために奔走してくれる。』 銅盤の燭臺にはらふそくをもやして太陽のやうにあかるくし夜の刻限を問ふころにはじめて膝をのりださせていよいよ親密さを加へる。自分はたそがれどきにはじめて主人の門を叩いたにすぎぬのに意外にもしばしの時間ではやくもかく膠が漆のなかに在るほどの親密さである。萬事はすべて形骸の外にかろくうちすててかかる、生涯たつともこのたのしみがいつ終るかわからぬと思はるるほどである。主人はその精神をすべてわたしに向けて傾けてくれこころひろくわたしを容れてくれまことによい人物で、ながく旅にゐる自分もいつもは心配が多いのだが、いまは心配もなく病氣もなほつたかの感がある。』 ここに天地を見わたすと愁ふべきことがある、それはどこを見ても一様に世間の交際のありさまが人に對して親切心がなく路傍の他人を見る様な輕薄ぶりだといふことである。こんな際に老いかかつた今ではあるが自分が君にであふのはおそいと恨むるにはあたらぬ、君のごとき人は古人のうちに向つて之を求めねばならぬ、今の世のなかには見ることのできぬ人物である。』

贈韋（一）贊善別

韋贊善に贈りて別る

（二）扶病送君發。自憐猶（三）不歸。
病を扶けて君が發するを送る、自ら憐む猶歸らざるを。

秖應（四）盡客淚。復作（五）掩荊扉。
秖應に客淚を盡して、復荊扉を掩ふことを作すべし。

（六）江漢（七）故人少。（八）音書從此稀。
江漢、故人少し、音書此より稀ならむ。

（九）往還二十載。（一〇）歳晩（一一）寸心違。
往還、二十載、歳晩、寸心違ふ。

【字解】〔一〕韋贊善　贊善の官なる韋某、東宮の官に左贊善大夫五人あり、傳令・諷過失・贊禮儀を掌る、韋は韋見素の子孫なりといへり、蓋し韋はかつて贊善の官にあり、今は南方へ流落してきてをりしものなるべし。〔二〕扶病　病氣のからだを他人から手だすけしてもらふこと。〔三〕不歸　故郷にかへらぬこと。〔四〕盡客淚　泣きあかして客中の涙をそそぎつくす。〔五〕作掩荊扉　作の字はいらぬ様なれども用あり、意味は之なきと同じことなり、掩は手でおさへてとざすこと、荊扉はいばらであんだとびら、掩扉は隱居してゐることをいふ。〔六〕江漢　漢水江水の流るる地、江漢の義をひろく用ひて自己の居處梓州のことに用ふ。〔七〕故人　ふるいしりあひの人。〔八〕音書　てがみ。〔九〕往還　韋と往來して交際せしこと。〔一〇〕歲晚　自己の晚年をいふ。〔一一〕寸心違　寸心とは方寸內のこころ、違ふとはこころが事實とあはぬをいふ、心では韋とともに居たいとおもふ、事實は韋と別れればならぬ、これ心が事とたがふなり。

【題義】贊善大夫の官をつとめたことのある韋某に贈りて別れをのべた詩。寶應元年梓州にての作。

【詩意】自分は人だすけによつて病氣のからだを起して君の出發するのを送る、その自分はやつぱり故郷にまだ歸らぬ氣のどくな境遇にあるものである。つまりはただ客中の涙をそそぎつくしてまた自分のあばらやの扉をとざしてゐるよりほかはないのであらう。君が去れば江漢の地方（梓州）には自分の舊知もすくないし、君のたよりもこれから稀になるであらう。二十年間も君と交際してきたのが、この晚年になつて事が願ひとかなはぬのはまことにつらいことである。

寄高適（一）

高適に寄す

楚（二）隔乾（三）坤遠（四）。難招（五）病（六）客魂。　楚隔りて乾坤遠し、招き難し病客の魂。

詩（七）名惟我（八）共。世事與誰論。　詩名惟我共にす、世事誰と論せむ。

北（九）闕更（一〇）新主。南（一一）星落（一二）故園。　北闕、新主更る、南星、故園に落つ。

定知相見（一三）日。爛漫（一四）倒芳樽。　定めて知る相見るの日、爛漫、芳樽を倒さむことを。

【字解】〔一〕寄高適　高適に寄せたる詩。此詩は宋の朝奉大夫員安宇が收むる所の集外詩にして其の作時詳ならず、從つて諸家の解釋一定せず、仇氏の說亦服しがたきものあり、余は鄙見によりとく。〔二〕楚　成都地方をさして楚といふ、戰國の時代蜀は楚の國に屬したれば之を楚といへり。〔三〕乾坤　天地、ひろく言ひなしたるなり。〔四〕遠　この遠の字と楚隔の隔の字は長安を主として成都の地をいへるならん。〔五〕招魂　魂を招くといふことは已に前に屢〻見ゆ、故鄉（兩京）へ自己の魂をよびもどしがたしといふなり。〔六〕病客　病客とは作者自己をいふ。〔七〕詩名　高適の詩を善くすとの名聲。〔八〕我　作者。〔九〕北闕　長安城の北門。〔一〇〕更新主　肅宗崩ぜられ代宗之にかはりて卽位せられしをいふ。〔一一〕南星　南極老人星、以て高適に比す。〔一二〕落故園　故園とは成都浣花溪の草堂をさしていへり、この用法は作者の他詩にも故園脩得見幾春などとあり、高適が成都に赴任することを南星が故園に落つといへり。寶應元年四月十八日丁卯肅宗崩じ、二十八日己巳代宗卽位す、六月嚴武召されて朝廷にかへる（但し秋まで巳だ出でざりしこと已に前にみゆ）。高適蜀州刺史より嚴武に代りて西川節度使・成都尹となる。この作詩の時不明なれども適が成都尹となりしにつきいはひてやりしなり。〔一三〕相見　面會する。〔一四〕爛漫　醉ひどれのさま、芳樽花草の芳はしき時節のさかだる。

【題義】此詩余は作者成都にありて高適の新任について寄せしものかとかんがふ。寶應元年四五月頃成都にての作ならんか。

【詩意】むかし楚に屬せしこの蜀の地は都とはへだたつて天地茫茫として遠い、だからとてもこの病客の魂を都の方へよびもどすことなどはできぬ。君は詩名に於ては自分だけが之と共にしてをるが、自分は世間の事については君でなくて誰とともに之をかたりあはうか。このたび北方では新天子が御卽位になり、此地では南極星といふべき君が我がこの第二の故鄉に落ちてきた。きつとおたがひが面會する日に於てはゑひどれになつて酒榼をのみたふすことであらう。

野望（一）

金華山北（二）涪（三）水西（四）。　金華山の北涪水の西、
仲（五）冬風日（六）始淒淒（七）。　仲冬風日始めて淒淒たり。
山連越嶲（八）蟠三蜀（九）。　山は越嶲に連なりて三蜀に蟠り、
水散巴渝（一〇）下五谿（一一）。　水は巴渝に散じて五谿に下る。
獨鶴（一二）不知何事舞。　獨鶴知らず何事あつてか舞ふ、
饑烏（一三）似欲向人啼。　饑烏人に向つて啼かむと欲するに似たり。
射洪（一四）春酒（一五）寒仍綠（一六）。　射洪の春酒寒きも仍綠なり、
目極（一七）傷神（一八）誰爲攜（一九）。　目極まりて神を傷ましむ誰か爲めに攜へむ。

【字解】【一】野望　野らのながめ。【二】金華山　四川省潼川府射洪縣北二里にあり。【三】北　北の字一に南に作る。【四】涪水西　涪水は涪江、府内を大體に於て北より東南に貫き流るる川なり、西といふは其地江の西にあるなり。【五】仲冬　十一月。【六】風日　風及び太陽の樣子。【七】淒淒　つめたきさま。【八】越嶲　四川西南外夷の地方。【九】三蜀　四川の地、秦漢以後に蜀郡・廣漢郡・犍爲郡を置く、之を三蜀といふ。【一〇】巴渝　巴州渝州、四川の東南部にあたる。【一一】五谿　雄溪・樠溪・力溪・潕溪・酉溪なり、貴州北部にあり、北流して長江に入る。【一二】獨鶴　暗に自己の客境に比す。【一三】饑烏　暗に自己の貧苦に比す。【一四】射洪　縣の名、潼川府三臺縣治（唐の梓州）の東南にあり。【一五】春酒　春になればできあがる酒、今は仲冬なれば酒としては未成品なり、しかるにそれをはやのみたしとの意をのぶるなり。【一六】寒仍綠　まだ仲冬で寒いのだがそれでも綠色にすんでゐるといふなり。【一七】目極　一に極目に作る、同義なり、どこまでもとほくながめること。【一八】傷神　こころをいたましめる。【一九】誰爲攜　「何人か我が爲めにその酒をたづさへ來らん」の意。

【題義】射洪縣の野外にて眺望してよめる詩。寶應元年十一月、射洪縣にての作。

【詩意】金華山の北で涪江の西。ここは風も日も仲冬になつて始めてつめたくおぼゆる。みれば山脈は越嶲の方へつらなつて蜀地全體にわだかまり、水流は巴州渝州の地方へ散らばつてさらに五溪の方へくだる。一匹の鶴が舞ひつつあるがそれはいかなる事があるためなのか。また饑ゑた烏がゐるがそれは人に向つて啼いて窮狀を訴へんとするかの樣子がある。（自分とよく似てゐる。）射洪でつくりこむ春酒は今からはや綠色をして飮めさうだが、この極目傷神のをりから、だれか自分のためにそれをもつてきてのませてくれるものはないか。

冬到金華山觀(一)因得故拾(二)遺陳公學堂(三)遺跡

冬金華山の觀に到り因つて故の拾遺陳公の學堂の遺跡を得たり

(四)涪右衆山內。金華紫(五)崔嵬(六)。　涪右、衆山の內、金華紫にして崔嵬たり。
上有蔚藍天(七)。垂光(八)抱瓊臺(九)。　上に蔚藍の天有り、光りを垂れて瓊臺を抱く。
繫舟接(一〇)絶壑(一一)。杖策(一二)窮縈回(一三)。　舟を繫ぎて絶壑に接す、策を杖いて縈回せるを窮む。
四顧俯層巓(一四)。淡然(一五)川谷開。　四顧、層巓より俯す、淡然、川谷開く。
雪嶺(一六)日色死(一七)。霜鴻有餘哀。　雪嶺、日色死す、霜鴻、餘哀有り。
焚香玉女(一八)跪(一九)。霧(二〇)裏仙人(二一)來。　香を焚きて玉女跪き、霧裏、仙人來る。
陳公讀書堂。石柱仄(二二)青苔。　陳公の讀書堂、石柱、青苔に仄く。
悲風爲我起。激烈(二三)傷雄才(二四)。　悲風我がために起る、激烈、雄才を傷む。

【字解】【一】觀　道士の居る寺。【二】故拾遺陳公　已に前にみゆ、陳公は陳子昂。【三】學堂　詩中に讀書堂とあれば勉學せしいへなり。【四】涪右　涪江の右、右とは西をいふ。【五】紫　山の色。【六】崔嵬　石載土の貌。【七】蔚藍天　こきあゐいろのそら。【八】垂光　天から藍光をたれて。【九】瓊臺　瓊は赤き玉、この觀をさしていへり。【一〇】接　接近するをいふ。【一一】絶壑　きつたてのたに、或は壑を壑につくる、壑は「がけ」をいふ。【一二】杖策　策をつゑつくこと。【一三】縈回　溪流のめぐりたるところ。【一四】俯層巓　山のかさなれるいただきから下をみおろす。【一五】淡然　色のあはきさま。【一六】雪嶺　雪山。【一七】死　光りなきさま。【一八】玉女　香たきにくる參詣の女。【一九】跪、來　この二字は互文にて男女たがひに共用せしむるなり、どちらも來りて跪くなり。【二〇】霧　香煙をいふ。【二一】仙人　道を訪ふ男子をいふ。【二二】仄　かたむく。【二三】激烈　感激すること。【二四】雄才　大力量ある文才。

【題義】冬、金華山の道觀にいつたところが、もとの拾遺陳公の勉學した堂の遺跡をみつけた。寶應元年十一月射洪縣にての作。

【詩意】涪江の西で多くの山のあるなかで金華山は崔嵬として紫色を呈してゐる、そのうへの方にはこき藍色の天があつてそのうへから垂れた光りが瓊の臺を抱きかかへてゐる。』自分はきつたてになつてゐる大きなたにのそばに舟をつないで、それから上陸してつゑをついて溪流のうねうねしたところの奥をきはめた。さうして高いところにあがつて四方をながめながらたかいいただきから見おろしたら川や谷があつさりした色で前に展開してゐる、雪嶺をながめるともはや日光は沒してしまひ、霜どきの鴻が十分のあはれさをもつて鳴いてゐる。そこへ玉女や仙人がおまゐりに來て霧のやうにもやもやと香煙をたいて跪き禮拜をしてゐる。』陳公の讀書堂はといふと青苔のはえたところに石の柱がかたむいてをる。ときに自分の悲みをそへるがごとく風が吹き起る、之によつて自分の情もますますはげしくなりこの千古の雄才についていたましくおもふのである。』

陳拾遺故宅(一)

拾遺平(二)昔居。大屋尚脩(三)椽。
悠(四)揚荒山日。慘(五)澹故(六)園煙。
位(七)下曷(八)足傷。所貴者聖(九)賢。
有(一〇)才繼騷(一一)雅。哲(一二)匠不比(一三)肩。
公生揚(一四)馬後。名與日月懸。
同(一五)遊英俊人。多秉(一六)輔佐權。
彥(一七)昭超(一八)玉價。郭(一九)震起通(二〇)泉。
到今素(二一)壁滑。灑(二二)翰銀(二三)鉤連。
盛(二四)事會(二五)一時。此堂豈千年。
終(二六)古立(二七)忠義。感(二八)遇有遺篇。

陳拾遺の故宅

拾遺平昔の居、大屋尚脩椽。
悠揚たり荒山の日、慘澹たり故園の煙。』
位下ること曷ぞ傷むに足らむ、貴き所の者は聖賢なり。』
才有り騷雅を繼ぐ、哲匠も肩を比せず。
公、揚馬の後に生れ、名、日月と懸る。』
同遊英俊の人、多く輔佐の權を秉る。
彥昭、玉價超えたり、郭震、通泉より起る。
今に到つて素壁滑なり、灑翰、銀鉤連る。』
盛事會一時のみ、此の堂豈千年ならむや。
終古、忠義を立つ、感遇、遺篇有り。』

【字解】〔一〕故宅　陳子昂の宅は射洪縣の東七里、東武山下に在りと。〔二〕平昔　むかし。〔三〕脩椽　ながきたるき。〔四〕悠揚　ゆつたりしたさま。〔五〕慘澹　ものがなしきさま。〔六〕故園　舊苑の意。〔七〕位下　子昂は右拾遺の官なれば位ひくし。〔八〕曷　何ぞ。〔九〕聖賢　聖人賢人。〔一〇〕有才　才は文才。〔一一〕騷雅　離騷、詩の大雅小雅。〔一二〕哲匠　當代のすぐれたる作家。〔一三〕不比肩　子昂とは肩をならべることができぬ。〔一四〕揚馬　揚雄・司馬相如、竝に蜀の人。〔一五〕同遊　子昂と交遊を同じくせし人。〔一六〕秉輔佐權　天子を輔佐する權力をにぎる、宰相となりしをいふ。〔一七〕彥昭　趙彥昭。彥昭は甘州の人、中宗の時、中書侍郎・同中書門下三品に累遷す。〔一八〕超玉價　玉價はその人物の價、超とは他の衆多のものよりこえてゐること。〔一九〕郭震　後の「過郭代公故宅」詩をあはせ見るべし。〔二〇〕通泉　縣の名、梓州の東南百三十里にあり、郭震は此地に尉たり、それより世にあらはる。〔二一〕素壁　故宅のしらかべ。〔二二〕灑翰　揮毫をいふ、故宅に趙彥昭・郭元震の題壁の文字ありといふ。〔二三〕銀鉤　ぎんのかぎ、書體の筆畫の形容なり。〔二四〕盛事　英俊時を同じくせしこと。〔二五〕會一時　たまたまあるひとときだけのこと。〔二六〕終古　萬古に同じ、永久の義。〔二七〕立忠義　唐に對して忠義の道をうちたてる、則天武后の時、之をそしる意をのべしことをさす。〔二八〕感遇有遺篇　「感遇」と稱するのこされた詩篇がある。子昂は感遇詩三十八篇を著はす、王適見て驚きて曰く此の子必ず天下の文宗とならん、と。子昂の作は唐の文章を一變するに功ありしものなり。

【題義】射洪の陳子昂の舊宅をみてよめる詩。寶應元年射洪にての作。

【詩意】拾遺のむかしのすまひ、それは大屋でいまもながいたるきがのこつてゐる。きてみると荒山の日の光ゆつたりとさし、もとのにはの煙がものがなしさうにうかんでゐる。』拾遺は位はひくかつたがそんなことはいたむには足らぬ、人に貴しとする所のものはその人が聖賢であるや否やに在る。』拾遺は文才があつて騷雅を繼ぐに足り、當世の作家といへども之と肩をならべることはできぬ。拾遺は揚雄・司馬相如以後に生れてその名は日月とともに高くかかつてゐる。』また同時交際のあつた人には英俊が多く、その人人は多くは天子を輔佐する權力をにぎつたものだ。そのうちで趙彥昭はその

人物の價、常等に超え、郭震は通泉縣から起つて有名なものになつた。いまもなほ故宅の白壁なめかにひかり、この二人の筆のあとが銀鈎のごとくつらなつてのこつてをる。』ただかかる英俊等がそろつてゐたことはたまたま一時だけのことであるし、此の家の堂だとてよもや千年もつづくはずもなからう。しかし拾遺には感遇詩といふのこされたる詩篇があつて、そこに於て永遠に忠義の道を建立されてをる。これこそ不朽なるものである。』

謁(一)文公(二)上方

文公に上方に謁す

野寺隱喬木。山僧高下居。　野寺、喬木に隱る、山僧、高下に居る。

石門日色異。(三)絳氣橫(四)扶疎。　石門、日色異なり、絳氣橫はりて扶疎たり。

(五)窈窕入(六)風磴。長蘿(七)紛(八)卷舒。　窈窕、風磴に入る、長蘿、紛として卷舒す。

庭前(九)猛虎臥。遂得文公廬。　庭前、猛虎臥す、遂に文公の廬を得たり。』

俯視(一〇)萬家邑。煙塵對階除。　俯して視る萬家の邑、煙塵、階除に對す。

(一一)吾師(一二)雨花外。(一三)不下十年餘。　吾が師、雨花の外、下らざること十年餘。

(一四)長者自布金。(一五)禪龕只(一六)宴如。　長者自ら金を布く、禪龕只宴如たり。

(一七)大珠脫(一八)玷翳。(一九)白月當空虛。　大珠、玷翳を脫す、白月、空虛に當る。』

(二〇)甫也(二一)南北人。(二二)蕪蔓少(二三)耘鋤。　甫也は南北の人なり、蕪蔓、耘鋤少し。

久遭詩酒汙。何事(二四)忝簪裾。　久しく詩酒の汙に遭へり、何事ぞ簪裾を忝なうせり。

王侯與(二五)螻蟻。同盡(二六)(二七)隨丘墟。　王侯と螻蟻と、同じく盡きて丘墟に隨ふ。

願聞(二八)第一義。(二九)迴向(三〇)心地初。　願はくは第一義を聞かむ、心地の初に迴向せん。

(三一)金篦刮眼膜。價重(三二)百車渠。　金篦、眼膜を刮る、價は百車渠よりも重し。

(三三)無生有(三四)汲引。(三五)茲理(三六)(三七)儻吹噓。』　無生、汲引有らむ、茲理儻しくは吹噓せられむ。』

【字解】【一】文公　僧名、寺名を逸せり。【二】上方　寺は山上にありとみゆ、高處をさして上方といへり。【三】絳氣　あかき雲の氣。【四】扶疎　まばらなるさま。【五】窈窕　おくふかきさま。【六】風磴　風の吹く石の階段。【七】紛　みだるるさま。【八】卷舒　まかれたりのびたり、つるの風になぶらるる樣子。【九】猛虎臥　僧の德に服しておとなし。【一〇】萬家邑　けだし郪城をさす。【一一】吾師　文公をさす。【一二】雨花　法を說くこと、法雲が法華經を講ぜしとき天より花が雨のごとくくだりしといふ。【一三】不下　下とは山より下ること。【一四】長者自布金　善施長者、卽ち給孤獨が逝多太子の園地に黃金を敷きつめ、それほどの錢にて園を買ひとりて精舍を建てしはなし。【一五】禪龕　龕は塔下の室なり、これ坐禪の室をいふ。【一六】宴如　晏如に同じ、やすらかなるさま。【一七】大珠　おほきな眞珠。【一八】玷翳　かけ、くもり。【一九】白月　しろくかがやいた月、上句の珠、この句の月は並に性の圓明なることのたとへなり。【二〇】甫也　自己をさす、也の字はつけ字なり。【二一】南北人　東西南北に飄泊するもの。【二二】蕪蔓　くさあればはびこる、性といふ田地を手入れせぬこと。【二三】耘鋤　くさぎり、すく。【二四】忝簪裾　簪裾はかんざし、

韍服のすそ、これは官吏の服装をいふ、杜甫かつて拾遺の官たり、忝とはその資格もなきに之をうけ居たりといふなり。【二五】蟻螻　けら、あり。【二六】盡　死滅すること。【二七】隨丘墟　丘壠とは墓場をいふ。【二八】第一義　佛法の根本義。【二九】廻向　ふりむいてそちらへ赴くこと。【三〇】心地初　心のいちばんの初のさま。【三一】金篦刮眼膜　醫療のことのたとへなり、「涅槃經」に人の心をなほすことをたとへて、めくらが目をなほしてもらひに良醫のところへゆくに、良醫は金の篦を以て其の眼膜を決りてなほすがごとし、との話あり。【三二】車渠　石の美なるもの。【三三】無生　佛敎の語、無生法なり、無生法とは眞如實相をいふと。【三四】汲引　文公が自分を井水をくむにつるべなはをひくごとくひつぱつてくれること。【三五】玆理　佛敎の至極の道理。【三六】儻　もしくは、ひよつとすると、萬一。【三七】吹噓　いきを吹きかけてくれる、世話をしてくれること。

【題意】文公といふ僧を寺の上方にたづねて面會せしことをよめり。舊本に寶應元年梓州の詩の内に列し、仇氏之に從へり。余も之に依る。

【詩意】田野にみゆる寺、その寺は喬木のなかにかくれてをり、僧たちは或は高いところ、或はひくいところにおもひおもひに住居してゐる。石の門をすぎるとはや日光のさまも俗界とちがふ樣であり、金霞の氣がまばらに横はつてゐる。だんだんおくふかく風の吹きつける石段の路をはひつてゆくとせのたかくのびた蘿が風になぶられてみだれてちぢんだりのびたりしてゐる。寺の庭前きには猛虎が臥てゐる、ここまできてやつと文公のおいでになるいほりにであうた。』ここからしたの縣城をうつぶして視ると、きざはしの前には煙塵がまむかうにみえる、吾が師（文公）におかれてはここで御說法をなさるほかには山から十年あまりもおくだりはならぬ。この寺は長者が黃金をしきつめてそれを寄附してたてたので、その禪室のなかにやすらかにすまはれてをる。たとへばかけもくもりもない大きな眞珠のごとく、また虛空にあたつててつてをる明皎皎たる月のごときものである。』わたくしは飄泊をしてをる人間であつて心性の田地は草だらけにあらして草ぎることも鋤くこともしたことがないのである、それにながく詩だの酒だのといふもののけがれをうけ、またどういふしだいかふつつかながら役人のきものをきたこともござる。かんがへてみると王侯でもありけらの蟲でもつまりは同じ樣に死滅して墓場へ葬られてしまふものである。どうぞわたくしも自分の心を心の最初の姿のところへむけかへさせ佛法の根本第一義をおききいたしたいものでござる。あなたの金の篦でわたくしのめくら目の眼膜をけづりとつていただくならばそれは百の車渠にもましたたふといものである。どうぞ眞如實相無生の法の方へお手ひきをねがひたいもので、とても及びもつかぬこととはおもひますが御息のかかりぐあひによつてはひよつとすると至上の道理にも達することができるかもわかりませぬ。』

奉ﾚ贈ニ射洪李(一)四丈ニ　明(二)甫

射洪の李四丈に贈り奉る　明甫

丈人屋(三)上烏。人好烏亦好。

丈人屋上の烏、人好く烏亦好し。

人生意(四)氣豁。不ﾚ(五)在ニ相(六)逢早ニ。

人生、意氣豁ならば、相逢ふの早きに在らず。』

南京亂初定。所向色枯槁。　南京、亂初めて定まり、向ふ所色枯槁す。
遊子無根株。茅齋付秋草。　遊子、根株無し、茅齋、秋草に付す。
東征下月峽。挂席窮海島。　東征、月峽より下り、席を挂けて海島を窮めむとす。
萬里須十金。妻孥未相保。」　萬里、十金を須つ、妻孥未だ相保んせず。」
蒼茫風塵際。蹭蹬麒驎老。　蒼茫風塵の際、蹭蹬、麒驎老ゆ。
志士懷感傷。心胸已傾倒。」　志士、感傷を懷かむ、心胸已に傾倒せり。」

【字解】〔一〕李四丈　丈は丈人の略、年長者に對する敬稱。〔二〕明甫　李の字なるべし。〔三〕屋上烏「尙書大傳」に愛其人者、愛其屋上之烏とみゆ、詩は其語よりおもひつきしならんも意味は同じからず。〔四〕意氣豁　豁はひろきこと、意ひろければ他人の異を容るるに足れり、これは李の意のひろきをいふ。〔五〕不在　貴ぶべき點がそこにはない。〔六〕相逢早　會合することが早き時期にあること。〔七〕南京　成都をいふ、已に見ゆ。〔八〕亂初定　亂は徐知道の反亂。〔九〕所向　みわたすところ。〔一〇〕色枯槁　人民、事物の樣子に生きたさまなきこと。〔一一〕遊子　たびびと、自己をさす。〔一二〕無根株　一處に定著せざるをいふ。〔一三〕茅齋　草堂の書齋。〔一四〕付秋草　秋草のあれたるままにしてある。〔一五〕東征　東方にゆく。〔一六〕月峽　明月峽、渝州にあり、三峽の口なり。〔一七〕挂席　席はむしろでつくりし帆。〔一八〕窮海島　うみにある島のはてまでゆききはめる。〔一九〕萬里　旅程のながきをいふ。〔二〇〕須　いりようなといふこと。〔二一〕十金　漢のころ一兩(兩はめかたの名)の金は十千錢にあたる、十金は十萬錢なり。〔二二〕妻孥　妻子。〔二三〕保　安んずる。〔二四〕蒼茫　はつきりせぬさま。〔二五〕蹭蹬　勢を失ひつかれし貌。〔二六〕麒驎　名馬、自ら比す。〔二七〕志士　李をさす。〔二八〕心胸　李のこころ。〔二九〕傾倒　我が方へすつかりかたむける、此詩の「意氣豁」及び「心胸傾倒」は「從事行」の「神傾意豁」と同意ならん。

【題意】射洪縣の李某に贈りたる詩。詩によれば作者蜀を出でて東遊するの意あり、旅費の周旋を乞ひたるなり、舊本寶應元年梓州の詩内にあり、仇氏之に從ふ、今之に依る。

【詩意】あなたの屋のうへに烏がゐる。主人がよい人であるから烏までもよい。(烏まで愛せらるる人ならばもちろん人には同情せらるるにちがひない。)』いま南京(成都)では兵亂がやつと定まつたばかりで、みわたす所どこも枯槁憔悴の色がある、自分は根のない草木のやうなもので飄泊生活をしてをり、草堂の書齋も秋草の荒るるがままにまかせてある。これから東方へでかけて明月峽から江を下り席帆を掛けて海島までも窮めてみようとおもふ、妻子さへ安らかにさせることができぬので萬里のたびには十萬錢のかねがいるのである。』風塵みなぎりて前路あてどもなきをり、麒驎の駿馬も勢を失うて老いてしまつた。志士たるあなたは已にその心をわたくしに向つて傾倒せられたあひだがらであるうへはこのわたくしの境遇を見てさだめて感傷をいだき御同情してくださることとおもふ。

早發射洪縣南途中作　　早に發す、射洪縣南途中の作

將老憂貧窶。筋力豈能及。　將に老いむとして貧窶を憂ふ、筋力豈能く及ばむや。

征途乃侵星。得使諸病入。　征途乃ち星を侵す、諸病をして入らしむるを得むや。
鄙人寡道氣。在困無獨立。　鄙人、道氣寡し、困に在つて獨立すること無し。
俶裝逐徒旅。達曙凌險澀。　俶裝、徒旅を逐ふ、曙に達して險澀を凌ぐ。
寒日出霧遲。清江轉山急。　寒日、霧を出づること遲く、清江、山に轉すること急なり。
僕夫行不進。駑馬若維縶。　僕夫行けども進まず、駑馬維れ縶ぐが若し。
汀洲稍疎散。風景開快悒。　汀洲稍く疎散なり、風景、快悒たるを開く。
空慰所尙懷。終非曩遊集。　空しく尙ぶ所の懷を慰む、終に曩の遊集に非ず。
衰顏偶一破。勝事難屢挹。　衰顏偶〻一たび破る、勝事屢〻挹み難し。
茫然阮籍途。更灑楊朱泣。　茫然たり阮籍の途、更に楊朱の泣を灑ぐ。

【字解】【一】早發　あさはやく出發すること、此の二字は詩の本題なり、射洪縣南途中作はその説明に添へたる句なり。【二】窶　窶はやつやつし、貧の甚しきさま。【三】及　壯時の強健なるにおひつく。【四】侵星　星光をおかすとは非常にはやく出發すること、此句は下句と連絡してみるべし。【五】得　豈可レ得の義、反語にみる、元來「豈可得」の三字が「征途」の上にあると同じ意なり。【六】諸病入　さまざまの病氣がからだにはひつてくる。【七】鄙人　いやしきもの、自己を謙遜していふ。道氣仙人の氣象、仙人は險路などにたへる力を有す。【八】在困　困は困難。【九】俶裝　俶は始なり、裝を始むるとはあさ旅行の用意をすること。【一〇】徒旅　たびのなかま。【一一】險澀　道路のなんぎなところ。【一二】轉山急　山に隨つて急に屈曲する。【一三】僕夫　めしつかひ。【一四】維縶　縶は「つなぐ」、維はことばなり。【一五】疎散　からりとひらける。【一六】快悒　むれのふさぐこと。【一七】所尙懷　尙は好尙、山水をみるは自己の平生このみたつとぶ所なり。【一八】曩　さきの日。【一九】遊集　同志とつどひあそぶ。【二〇】顏、破　かほのしわをのばす、につこりする。【二一】勝事　よき景色。【二二】挹　とる、我がものにすること。【二三】茫然　前程不明のさま。【二四】阮籍途　窮途をいふ、已に屢〻みゆ。【二五】楊朱泣　楊朱、岐路を見、その南すべく北すべきによりて泣きたりとの話「淮南子」にみゆ。

【題意】あさはやく出發せしことをのぶ。これは射洪縣の南の途中での作である。射洪から又その南の通泉縣へゆく途上の作。生活の計をなすためにでかけしなるべし。時は寶應元年十一月。

【詩意】としよりになりかけて貧乏を心配するため旅をする、どうして筋力が若い時分のやうになれるものか。やせがまんをして星の光を侵して途にでださうものならいろいろの病氣がはひつてくるだらう、そんなことはできぬ。』自分は仙人の氣象をもたず、困難に在つてひとりだちはできぬ、だからあさのたび仕度をしても途づれのあとをおひ曙になつてからなんぎなみちをとほる。さむぞらの太陽はおそく霧のなかから出で、清らかな江水は山にくつついて急に折れまがる。しもべはあるくけれども前へはすすまず、やくざ馬はつないであるかの様にちつともあるかぬ。』汀の洲があるところへくるとしだいにそこらがからりとした樣でその風景がふさがつたむねをすけてくれる。しかしいたづらに平生からしたうてをる心をなぐさめるのみでたうてい往年のあそびつどひとはおなじでない。このけしきで偶然ひとたびは衰へた顏のしわをのばすけれども、それもこの佳景さへそんなにたびた

び我がものとすることはできぬのである。ただ茫然と阮籍の如き窮途に立つてそのうへに方向に迷ふ所の楊朱の涙をそそぐのである。』

(一)通泉驛(二)南去通泉縣十五里山水作

通泉驛、南のかた通泉縣を去ること十五里の山水の作

(三)溪行衣自濕。(四)亭午(五)氣始散。　溪行衣自ら濕ふ、亭午、氣始めて散す。
冬溫(六)蚊蚋集。人遠鳧鴨亂。　冬溫にして蚊蚋集まり、人遠くして鳧鴨亂る。
(七)登頓生(八)曾陰。(九)攲傾出高岸。』　登頓、曾陰生ず、攲傾、高岸出づ。』
驛樓衰柳側。縣郭輕煙畔。　驛樓、衰柳の側、縣郭、輕煙の畔。
(一〇)一川何綺麗。盡日窮壯觀。　一川何ぞ綺麗なる、盡日、壯觀を窮む。
山色遠(一一)寂寞。江光夕(一二)滋漫。』　山色遠く寂寞、江光夕に滋漫。』
(一三)傷時愧(一四)孔父。(一五)去國同(一六)王粲。　傷時、孔父に愧ぢ、去國、王粲に同じ。
我生苦飄零。(一七)所歷有嗟嘆。』　我が生、飄零に苦しむ、歷る所嗟嘆有り。』

【字解】〔一〕通泉驛　梓州の東南百三十里、射洪縣よりは東南七十里にあり、通泉驛の三字が本詩の題にして「南去」云云は其の說明にそへたることばなり。〔二〕南去通泉縣十五里山水　通泉縣の北十五里のところの山水をいふ、沈家抗といふ處なりと。まだ縣城へつかぬ前のことなり。〔三〕溪行　たにがはにそうてゆく。〔四〕亭午　正午。〔五〕氣　雲氣。〔六〕蚊蚋「か」・「こばへ」。〔七〕登頓　のぼつたり、やすんだり。〔八〕曾陰　曾は層に同じ、かさなれるくもり。〔九〕攲傾　かたむく。〔一〇〕一川　涪江なり。〔一一〕寂寞　ひつそり、みえなくなるをいふ。〔一二〕滋漫　ゆふばえの水上にましあふれること。〔一三〕傷時　時世をいたむ。〔一四〕孔父　孔子をいふ。〔一五〕去國　故國をはなれる。〔一六〕王粲　魏の王粲、都を去て南方荊州に至り、故國をおもひ登樓賦をつくる。〔一七〕所歷　經過するところ。

【題義】射洪から通泉縣の方へ赴くとき、縣のてまへ十里ばかりの通泉驛で山水をみてつくつた詩。寶應元年十一月の作。

【詩意】たにがはにそうてゆくと衣がひとりでにぬれる、それがひるごろになるとやつと雲氣が散つてしまつた。冬ではあるがあたたかいので蚊だの蚋だのがたかつてくる、まだ人がちかづかぬのに鳧鴨などがみだれたつ。のぼつたりくだつたりするうちにあつい くもりができ、かたむいてあぶなげに高い岸が突出たりしてゐる。』やがて縣の郭がうすい煙のほとりにみえ、驛樓がげんきのない柳のそばにある。川のながめはなんでかほどに綺麗であるか、一日ぢう壯觀をあかすみきはめる。そのうちにゆふばえだけは江面にひろがり遠方の山の色はあるかなきかにきえゆく。』自分は時世を傷むことは孔夫子には及ばぬので愧ぢるが、故國を去つて悲みを抱くことは王粲と同じである。自分の

生活は飄泊零落にこまつてゐるので經過するところどこでもなげきをおこすのである。』

過郭(一)代公故宅(二)

郭代公が故宅に過る

(三)豪俊初未(四)遇。其迹(五)或脱略(六)。　豪俊初め未だ遇はず、其の迹或は脱略せり。
(七)代公尉(八)通泉。放(九)意何自若(一〇)。　代公、通泉に尉たり、意を放にする何ぞ自若たる。
及夫登(一一)衰冕。直氣(一二)森(一三)噴薄(一四)。　夫の衰冕に登るに及んで、直氣、森として噴薄す。
(一五)磊落見異人(一六)。豈伊(一七)常情度(一八)。』　磊落、異人を見る、豈伊常情もて度らむや。』
(一九)定策神龍後。宮中翕清廓。　策を定めて神龍の後、宮中、翕として清廓す。
(二〇)俄頃辨(二一)尊親。指揮(二二)存顧託(二三)。　俄頃、尊親を辨じ、指揮、顧託を存す。
(二四)羣公有慚色。王室無削弱。　羣公、慚色有り、王室、削弱無し。
迥出名臣上。丹青(二五)照臺閣。』　迥に名臣の上に出づ、丹青、臺閣を照す。』
我行得遺跡。池館皆疏鑿(二六)。　我行いて遺跡を得、池館皆疏鑿せらる。
(二七)壯公臨(二八)事斷。顧(二九)步涕横落。　公が事に臨みて斷せしを壯とす、顧歩して涕横に落つ。

精魄凜(三〇)如在。所歷終(三一)蕭索。　精魄、凜として在すが如し、歷る所終に蕭索たり。
高詠寶(三二)劍篇。神交(三三)付冥漠(三四)。』　高く詠ず寶劍の篇、神交、冥漠に付す。』

【字解】【一】郭代公　郭震、字は元振、魏州貴鄉の人、玄宗の朝、代國公に封ぜらる。【二】故宅　これは通泉縣の尉たりしときの居宅をいふ。【三】豪俊　すぐれた人物、郭震をさす。【四】未遇　時世にであはぬ。【五】迹　行のあと。【六】脱略　小事を簡略にして心にとめぬ、この脱略は次の放意とおなじことをさす。【七】代公　震をさす。【八】尉　縣令の次ぎの官。【九】放意　きままにする、震が尉たりしとき私鑄を鑄、又は民財を奪ひて四方を濟ひなどし、任俠にして氣を使ひ同類千人萬人に至るといへり。【一〇】自若　平氣なさま。【一一】登衰冕　宰相の地位にのぼること、衰は卷き龍の模樣あるきもの、冕はかんむりなり、かかる禮服をきる身分となること、震は先天二年に兵部尙書を以て同中書門下三品となり、政事をあづかりきく。【一二】直氣　正直の意氣。【一三】森　嚴肅なさま。【一四】噴薄　ふきだす、先天二年に震政事をあづかりきしとき太平公主、竇懷貞と黨を結び玄宗(時に太子)を廢せんと謀る、睿宗猶豫して決せず、ただ震廷にて爭ひ詔を受けず。【一五】磊落　不羣の貌。【一六】異人　非凡の人。【一七】伊　これ。【一八】常情度　なみなみのこころではかる。【一九】定策神龍後宮中翕清廓　此句舊解に　定策神龍後、宮中翕清廓　とよませたり、而して定策の事實が先天以後に在りて事實とあはぬゆゑ神龍といふはさかのぼりて禍根の胚胎せしときを記したるなりとせり。これは無理な解なり。此句の形はかくあれども作者の意は「定策」二字にて句、「神龍後宮中翕清廓」の八字にて句、とするつもりなりと解すべきなり、定策が先天に在ることは動かさずして可なり。定策とは玄宗を廢せんとしたるを玄宗を擁立するはかりごとを定めたるをいふ、神龍は中宗の年號にして西紀七〇五、七〇六なり、先天は睿宗の年號にして西紀七一二、七一三なり、宮中は奥向きのこと、當時中宗の皇后韋氏、太平公主、等のさわぎありて奥向きみだれたり、翕はあつまるかたち、すつかりといふこと、淸廓とはさつぱりと掃除してきよめること。【二〇】俄頃　しばらくのうちに。【二一】辨尊親　尊と親とについて區別する。君臣の關係では玄宗が尊位を得、父子の關係では玄宗が親子相傳して帝位をふむに至りしことをさす。【二二】指揮　さしずする。【二三】顧託　睿

宗の御依託。玄宗の太平公主竇懷貞を誅するや宮城大に亂る、睿宗承天門に出でて變を觀る、諸相みな外省にかくる、震ひとり侍す、睿宗、玄宗の兵至るときき樓下に投ぜんとす、震之を扶けてあつく勸めて阻止す、此等必しも睿宗の依託に由るにあらざれども辭をかざりていへるなり。【二四】羣公　他の權臣等。【二五】丹青照臺閣　丹青は畫像、臺閣のうへに像をかかぐるにより像が之を照すといふ、郭震は玄宗の廟に配饗せらる、ただ像をゑがかれしやは不明、舊解は之を震に屬せしめたるも或は名臣へかかるものならんも知れず、然らば「臺閣に像をゑがかれてゐる名臣の上にいづ」の義となるなり。今舊解を用ひおく。【二六】疏鑿　ほりわりをつくること。【二七】壯　壯なりとして歎嘉するなり。【二八】臨事斷　大事に當つてよく決斷せしこと、玄宗を擁立せしことをさす。【二九】顧步　左右をかへりみながらあるく。【三〇】所歷　自己のとほりしところ、即ちこの池館のあとをさす。【三一】蕭索　さびしきさま。【三二】寶劍篇　震が通泉の尉たりし當時の作なり、震則天武后にめしだされしときこの篇を上る、武后數十本を寫して遍く學士に賜はしめしといふ。原文別にのちに載す。【三三】神交　精神と精神との交り。【三四】冥漠　天、幽冥界をいふ。

【題義】通泉縣にある代國公郭震が故宅を見まひてつくれる詩。寶應元年十一月の作。

【詩意】豪俊とよばるるほどの人も初め時世にであはぬときは其の行迹は小事にかかはらぬことがあるものだ。我が代國公郭震は通泉縣に尉であつたときどうしてあんなに平氣でわがままをやつてゐたか。それがかの袞冕の服を身につける樣な地位にのぼるや正直の氣が嚴然としてはきだされた、じつに磊落たる非常の人物たるを見るので、これはとてもなみなみのこころではかれるわけのものではない。』公が先天の時に大策を定めてから神龍以後の宮中の亂脈はすつかりひとまとめに掃除して清められた。公は咄嗟の間に玄宗の尊にして且つ親たることを辨別し、大事をさしづして睿宗の依託を存立した。之にくらべると他の羣臣は愧づるの色がある。公があつたから王室も削りよわめらるることなくなつた。だから公ははるかに名臣以上にあつて、その像は臺閣にかがやいてゐる。（或は公は臺閣に畫がかれてゐる名臣のうへにある。）』自分はいまここをあるいて公の遺跡を得たが、もとの池や館のところはみなほりわりになつてゐる。自分は公がよく大事にのぞんで決斷したことを壯なりとして、このさまをみてはあるきながら涕がよこさまに落ちるのである。公のたましひは凜然としてなほ存在してゐるかのごとくであるが、既に經過する所はけつきよくかくさびしいやうすである。自分はただ公の作である寶劍篇を高く詠じてこころどうしの交りは之を天に付するのみである。』

寶劍篇　　郭震

君不見昆吾鐵冶飛炎煙。紅光紫氣俱赫然。良工鍛鍊凡幾年。鑄作寶劍名龍泉。龍泉顏色如霜雪。良工咨嗟歎奇絕。瑠璃玉匣吐蓮花。錯鏤金環生明月。正逢天下無風塵。幸得周防君子身。精光黯黯青蛇色。文章片片綠龜鱗。非直結交遊俠子。亦曾親近英雄人。何言中路遭棄捐。零落飄淪古獄邊。雖復沈埋無所用。猶能夜夜氣衝天。

觀薛稷(一)少保書畫壁(二)

薛稷少保が書畫の壁を觀る

少保有古風(三)。得之陝郊(四)篇。

少保、古風有り、之を陝郊の篇に得たり。

惜哉功名忤(五)。但見書畫傳。　惜しい哉功名忤ふ、但見る書畫の傳はるを。
我遊梓州東(六)。遺跡涪水邊(七)。　我、梓州の東に遊ぶ、遺跡、涪水の邊。
畫藏青蓮界(八)。書入金牓(九)懸。』　畫は青蓮界に藏せられ、書は金牓に入りて懸る。』
仰看垂露姿(一〇)。不崩亦不鶱(一一)。　仰ぎ看る垂露の姿、崩れず亦鶱けず。
(一二)鬱鬱三大字(一三)。蛟龍岌(一四)相纏。　鬱鬱たり三大字、蛟龍、岌として相纏ふ。
又揮(一五)西方變(一六)。發(一七)地扶屋椽(一八)。　又西方の變を揮ふ、地より發りて屋椽を扶く。
(一九)慘澹壁飛動。到今色未塡(二〇)。』　慘澹として壁、飛動す、今に到つて色未だ塡しからず。』
(二一)此行疊(二二)壯觀。郭薛(二三)俱才賢。　此の行、壯觀を疊す、郭薛は俱に才賢なり。
不知百載後。誰復來通泉。』　知らず百載の後、誰か復通泉に來らむ。』

【字解】【一】薛稷少保　薛稷、字は嗣通、收が從子、古を好みて博雅、外祖魏徵が家に虞世南・褚遂良の墨蹟を藏す、稷之を學び遂に書を以て天下に名あり、畫も亦絶品なり。睿宗の時黄門侍郎に遷り、太子少保を歷たり、たまたま竇懷貞、太平公主に附きし故を以て誅せらる、稷は其の謀を知れりといふに坐せられて萬年縣の獄に於て死を賜はれり。稷は郭震、趙彥昭と同じく太學に遊びしことあり、蓋し郭震の關係によりて通泉縣に稷の書畫あるなり。【二】書畫壁　壁書と壁畫となり。【三】古風　五言古詩をいふ。【四】陝郊篇　稷に秋日還京陝西十里作あり、曰く、驅車越陝郊、北顧臨大河、此行見鄉邑、秋風水增波、西家成陽途、日暮憂思多、傳巖既紆鬱、首山亦嵯峨、操築無昔老、采薇有遺歌、客遊節向換、人生知幾何、と。驅車越陝郊の句あるによりて之を陝郊篇といへり。【五】忤　違ひ戻るなり。【六】梓州東　東は東南、通泉をさす。【七】涪水　涪江。【八】青蓮界　佛寺をいふ。【九】金牓　金字のかんばん、額なるべし。【一〇】垂露姿　書のさま。【一一】鶱　翥ける。【一二】鬱鬱　さかんなるさま。【一三】三大字　通泉縣慶善寺に薛稷の書せる「慧普寺」の楷書の三大字あり、字の徑三尺ばかりなりといふ。【一四】岌　山たかきさま。【一五】揮　筆をふるひてかく。【一六】西方變　西方諸佛の變相。【一七】發地　平地よりおこりて。【一八】扶屋椽　やれのたるきに人手にたすけられてのぼるほどの所に達するをいふ。【一九】慘澹　畫者の心を苦しめしさま。【二〇】塡　黴と同じ、「久し」なり。【二一】此行　このたびの旅行。【二二】疊　かさなること。【二三】郭薛　郭震、薛稷。

【題義】通泉縣の慧普寺にある太子少保薛稷の壁書と壁畫とをみてよめる詩。寶應元年十一月通泉にての作。

【詩意】薛少保には五言の古詩がある、自分はそれを驅車越陝郊といふ詩篇に於て之を得た。かかる文事に秀でた人であるのに功名の念をとげることができず、ただその書や畫が傳へらるるのを見るのである。自分は梓州の東南に遊び、少保の遺跡を涪江のほとりで得た。畫は佛寺に藏せられ、書は寺の金牓に於てかかげられてゐる。』仰いでみると露を垂れた樣な文字の姿がくづれもかけもせず、三個の大字があたかも蛟龍の勢たかくあひまつはつてをる樣である。また西方諸佛の變相をも揮毫してあるがそれは平地から屋根のたるきのうへまでつづいてゐる。この畫者がいかに苦心したか壁が飛動してゐる樣で、今日にいたるまでその著色がふるぼけずにをる。』自分のこのたびの旅行にはいくつもの壯觀がかさなつた、すなはち郭震といひ薛稷といひともに才あり賢なる人である。知らず百

年の後にははたしてだれがこの通泉の地に來るであらうか。二人に恥ぢぬ人物がくるかどうか。』

通泉縣(一)署壁後(二)薛少保畫鶴　通泉縣の署壁の後の薛少保の畫鶴

薛公(三)十一鶴。皆寫(四)青田眞。　薛公の十一鶴、皆青田の眞を寫す。

畫色久欲盡。(五)蒼然猶(六)出塵。　畫色久しくして盡きむと欲す、蒼然猶塵を出づ。

(七)低昂各有意。(八)磊落如(九)長人。　低昂各〻意有り、磊落、長人の如し。

(一〇)佳此(一一)志氣遠。豈惟(一二)粉墨新。　此の志氣の遠きを佳とす、豈惟粉墨の新なるのみならむや。

(一三)萬里不以(一四)力。(一五)羣遊(一六)森(一七)會神。　萬里、力を以てせず、羣遊、森として神を會す。

(一八)威遲白鳳態。非是(一九)倉鶊隣。』　威遲たり白鳳の態、是れ倉鶊の隣に非ず。』

(二〇)高堂未傾覆。常得慰嘉賓。　高堂未だ傾覆せず、常に嘉賓を慰むることを得。

(二一)曝露墻壁外。終嗟風雨頻。　墻壁の外に曝露す、終に嗟す風雨の頻なるを。

(二二)赤霄有(二三)眞骨。恥飮(二四)洿池(二五)津。　赤霄、眞骨有り、洿池の津に飮むを恥づ。

(二六)冥冥任所往。(二七)脫略誰能(二八)馴。』　冥冥、往く所に任す、脫略、誰か能く馴れむ。』

【字解】〔一〕署壁　縣の役所のかべ。〔二〕薛少保畫鶴　薛稷は花鳥人物雜畫を善くし、鶴を畫くことによりて名を知らる。〔三〕十一鶴　壁にある鶴の數をあぐ。〔四〕青田　浙江省にある縣の名、鶴の產地なり。〔五〕蒼然　すすけてぼんやりとした貌。〔六〕出塵　塵俗から超越してゐる。〔七〕低昂　つるの伏したりのびあがつたりするさま。〔八〕磊落　不羣のさま。〔九〕長人　せのたかい人。〔一〇〕佳　よしとして賞する。〔一一〕志氣遠　鶴のこころもちの塵俗からとほくはなれてゐること。〔一二〕粉墨　ごふん、すみ色。〔一三〕萬里　卽ち上句の志氣遠の遠の字の說明なり、志氣の萬里の遠きにあるさま、老鶴萬里心などあるも同じ。〔一四〕力　筆さきの形體的の力。〔一五〕羣遊　つるのむれあそぶさま。〔一六〕森　森然羅列するさま。〔一七〕會神　精神を會得する、會の字「あつむる」義にあらずして領會する義ならん。〔一八〕威遲　のつそりとしたさまをいふならん。〔一九〕倉鶊　黃鸝留（てうせんうぐひすの類）。〔二〇〕高堂　縣署をいふ。〔二一〕曝露　さらし、あらはす。〔二二〕赤霄　赤色のあをぞら、赤色は金僊の色を帶ぶるをいふ。〔二三〕眞骨　まことの鶴をいふ。〔二四〕洿池　たまり水の池。〔二五〕津　わたりばをいふ、但し、ここは單に水邊をさす。〔二六〕冥冥　雲ふかきところをいふ。〔二七〕脫略　衆鳥に頓著せぬをいふ。〔二八〕馴　なれちかづく、眞骨四句は暗に自己を比したり。

【題義】通泉縣の役所の壁の背面に薛稷のかいた鶴があるのを觀てよんだ詩。前詩と同時の作。

【詩意】薛少保がかいた十一匹の鶴、それはみな青田の鶴の眞相をうつしてある、畫の色は年をへたので無くなりかけてゐるが、はつきりせぬながら塵俗を超越してゐる。』うつ伏したのものびあがつたのもそれぞれ意があるし、磊落羣せずしてせのたかい人間の樣なのもある。自分はこの畫鶴のこころもちの塵俗から遠くはなれてゐるのを佳しとしてめでるのである、ただ胡粉や墨色の新しいのをほめるわけではない。萬里の遠き心をもつた趣は力づくでかいてはゐないし、たくさんのなかまがむ

れあそんでゐる様子はそれぞれその精神をよくのみこんでかかれてある。これはおほやうな白い鳳凰といつた樣な態であつて、倉鶊などの親類すぢではないのである。』いまこの縣のざしきは傾覆もしないからここでお客を會合したりするときこの畫でそれらの人たちの心を慰めることができるが、壁の外にかかる名畫をさらしておくといふは、つまりはあめ風がしきりにやつてきてこはしてしまひはせぬかとなげかざるを得ぬ。畫鶴をみて更に感ずる所は、ここにはほんものの鶴が赤氣の横はるあをぞらに居る、この鶴はたまり水の池のほとりなどに水を飲むことを恥としてをる、だから雲中の奥ふかくくらいところにかつてにゆかうとしてゐる、そこへいつてしまへば羣鳥からはなれてしまふのでだれがまた之に近づきなれることができようぞ。』

陪(一)王侍御宴通泉東山野亭

王侍御に陪して通泉の東山の野亭に宴す

江(二)水東流去。清樽日復斜。
異(三)方同宴(四)賞。何處是京(五)華。
亭(六)景臨山水。村煙對浦沙。
狂歌遇形(七)勝。得醉卽爲家。

江水、東流し去る、清樽日復斜なり。
異方同じく宴賞す、何の處か是れ京華ぞ。
亭景に山水に臨み、村煙に浦沙に對す。
狂歌、形勝に遇ふ、醉ふことを得れば卽ち家と爲す。

【字解】【一】王侍御　前に王侍御掄あり、これは果して王掄なるや否やを知らず。【二】江水　涪江。【三】異方　他郷。【四】宴賞　さかもりなし、風景を賞美する。【五】京華　みやこ。【六】亭景　景は影に同じ、ゆふがた亭のかげの地上におつるころの意。【七】形勝　風景のすぐれしところ。

【題義】王侍御のともをして通泉縣の東山の野亭に宴した詩。寶應元年十一月通泉にての作。

【詩意】涪江の水は東に流れ去る、清樽のうへに夕日がはやかたむきだした。他郷とはいひかく宴賞を同じくしてをれば京華はどこだらうとかまふことはない。日かたむきて亭影の生ずるころ、この山水に臨み、村煙の起るをみつつ浦上の沙に對してをる。かかる佳景にであうては自分は狂歌を發するものであり、苟も醉ふことができればすなはちそこをわが故郷の家とかんがへるのである。

陪(一)王侍御同登東(二)山最高頂宴。姚(三)通泉晩攜酒泛江

王侍御に陪して同じく東山の最高頂に登り宴す。姚通泉晩に酒を攜へて江に泛ぶ

姚江美(四)政誰(五)與儔。
不減昔時陳(六)太丘。
邑(七)中上客有杜(八)史。
多(九)暇日(一〇)陪驄(一一)馬遊。

姚江の美政誰か與に儔せむ、
減せず昔時の陳太丘。
邑中の上客杜史有り、
多暇日』に驄馬の遊に陪す。』

【字解】【一】王侍御　前詩の王と同人なるべし。【二】東山　通泉の東山、前詩のそれと同じ。【三】姚通泉　通泉縣の縣令姚某。【四】美政　りつぱな政治。【五】誰與儔　儔は「たぐひ」なり、だれが姚公と

東山高項羅（一二）（一三）珍羞。　東山の高頂に珍羞を羅ぬ、
下顧城郭銷我憂。　下城郭を顧みて我が憂を銷す。
清江白日落欲盡。　清江白日、落ちて盡きむと欲す、
復攜美人登綵（一四）舟。　復美人を攜へて綵舟に登る。
笛聲憤怨哀中流。　笛聲憤怨、中流に哀し、
妙舞逶（一五）迤夜未休。　妙舞逶迤として夜も未だ休まず。
燈前往往大魚出。　燈前、往往、大魚出づ、
（一八）聽曲（一六）低（一七）昂如有求。　曲を聽き低昂求むる有るが如し。」
三更風起寒浪湧。　三更風起つて寒浪湧く、
取樂喧呼覺船（一九）重。　樂みを取つて喧呼し船の重きを覺ゆ。
滿空星（二〇）河光破碎。　滿空の星河光り破碎す、
四座賓客色（二一）不動。　四座の賓客色動かず。
請公（二二）臨（二三）深莫（二四）相違。　請ふ公深きに臨む相違ふこと莫れ、

【六】陳太丘　後漢の陳寔なり、嘗て聞喜（縣名）の長となり、また太丘の長となり、よく管内を治む。【七】邑　縣をいふ。【八】柱史　柱下史の略、御史の官をいふ、卽ち王侍御。【九】多暇　縣治のうへに仕事なくてひま多し。【一〇】日陪　日は日日。【一一】鞍馬遊　鞍馬は桓典が故事、屢ゝ前にみゆ、鞍馬遊は王侍御のあそびをいふ。【一二】羅　羅列。【一三】珍羞　めづらしきお膳のさかな。【一四】綵舟　さいしきした舟。【一五】逶迤　うれうれするさま。【一六】曲　歌曲。【一七】低昂　浮沈するさま。【一八】三更　夜半。【一九】船重　船の進まざるさま。【二〇】星河　ほし、あまのがは。【二一】色不動　顏色をうごかさぬ、

迴船罷酒上馬歸。　船を迴らし酒を罷め馬に上つて歸らむ。
人生歡會豈有極。　人生歡會豈極り有らむや、
無使霜（二五）露霑人衣。」　霜露をして人衣を霑さしむること無れ。」

平氣でかへるけしき無きをいふ、仇氏注に飲容知懼といへるは取らず。【二二】公　姚をさす。【二三】臨深　如臨深淵、如履薄氷の詩の語をさす。【二四】莫相違　臨深云云の戒めに違ふことなかれ。【二五】霜露霑人衣　あまりに夜ぶかをいふ。

【題義】　王侍御のともをしてともに東山のてつぺんへあがつてさかもりをした。ところが晩になつて通泉縣令の姚氏が酒をたづさへてさらに涪江に舟をうかべて遊びをした。寶應元年十一月通泉にての作。

【詩意】　姚君の政治のりつぱなことはだれも肩をならべるものがない。昔しの太丘の令陳寔にもおとらぬほどである。それゆゑに縣の上客としていま王侍御がをらるるが、姚君はひまが多いから毎日王侍御の遊びのともをしてをられる。』先づ東山の絶頂でごちそうをならべ、縣の城郭をみおろして自分の憂さばらしをし、涪江に日が落ちてしまはうとするや、また美人をつれてうつくしくかざつた舟に登つた。笛の聲はいかりうらむがごとく中流であはれな音をだす、美人の妙なる舞すがたはうねうねとして夜になつてもやまぬ。燈の前には時時大きな魚がでて、美人の歌曲をきいてうきつしづみつなにか求むる所あるかの樣子である。』夜半になると風が吹きおこつて浪がわきだした。ががやが

やさわいで樂みをしてゐるので船あしは重きかとおもはれさらに進まない。空はいつぱいに星や天の河がみちてその光が水面におちてくだける、それでも一座のおきやくたちはかへらうとする氣色もない。わたくしはいふ、どうぞ姚公よ古聖人の「臨深」の戒めに逢ひたまふな、船をめぐらして酒をやめ、馬にうちのつて歸りませう。人生のおもしろき會合といふものははてしのないものである。あまりに夜ふかしをして霜や露に人の衣をうるほさせるやうなことをしたまふな。』

漁陽（一）

漁陽

漁陽突騎（二）猶精銳。
漁陽の突騎は猶精銳なるも、

（三）赫赫（四）雍王（五）都節制。
赫赫たる雍王都て節制す。

（六）猛將（七）翻然恐（八）後時。
猛將翻然として時に後れむことを恐る、

（九）本朝不入（一〇）非高（一一）計。」
本朝に入らざるは高計に非ず。」

祿山北築雄武（一二）城。
祿山北のかた築く雄武城、

舊防（一三）（一四）敗走歸其營。
舊、敗走して其の營に歸るを防ぐ。

（一五）繫書（一六）請問燕（一七）（一八）耆舊。
書を繫けて請ひ問ふ燕の耆舊、

今日何須（一九）十萬兵。』
今日何ぞ須ひむ十萬の兵。』

【字解】【一】漁陽　今直隸順天府の地方、安祿山の根據地。【二】突騎　突擊する騎兵。【三】赫赫　武威のかがやくさま。【四】雍王　寶應元年九月魯王适、改めて雍王に封ぜられ、十月天下兵馬元帥に任ぜられ、河北・朔方・及び諸道の行營を統ぶ、雍王は後に德宗となりし人。【五】都節制　一般にきりもりする權をにぎる。【六】猛將　賊軍の猛將なり、河北の薛嵩は四州を以て來り降り、張忠志は五州を以て來り降るの類。【七】翻然　態度をかへるさま。【八】後時　時期におくれる。【九】本朝　朝廷。【一〇】入　歸順すること。【一一】高計　上等のはかりごと。【一二】雄武城　安祿山反きしとき范陽の北に壘をきづき之を雄武城と號せり。【一三】防　防護の義。【一四】敗走　賊軍味方の敗走。【一五】繫書　てがみを箭につなぐ、戰國の時、魯仲連が箭文を燕の聊城に射こみて城を降らしめし故事を用ふ。【一六】請問　問の字必ずしも質問する義ならず、むしろ問告する義なるべし。【一七】燕　漁陽地方をさす。【一八】耆舊　父老たちをさす。【一九】十萬兵　官軍の方にてそれほどの多くの兵を擁して賊に向ふ。

【題義】雍王が元帥に任ぜられしことをききて漁陽の平げらるべきみこみあることをおもひて作れる詩。寶應元年冬晚梓州にての作なるべし。

【詩意】漁陽の突騎はまだ精銳ではあるが、官軍の方では赫赫たる雍王が元帥におなりになつて諸軍の節制を統べられることになつた。それで賊軍の猛將もこれまでの態度をさらりとかへて我がちに降參して時期に後れることを恐れ、朝廷へ歸順せねば上策でないとかんがへだした。』安祿山が北のかた雄武城を築いたときでさへ、それはもとその味方の兵が敗けて營中へもどるときの防護のためだつたのだ。まして祿山がゐなくなり、雍王が元帥になられた今日に於てをや。自分は箭文を以て燕の父老たちに對してつげるが、今日官軍はなんで十萬などの多衆の兵を擁して賊に對する必要があるもの

か。ただちに賊を降參させることになるでござらう。

花底

紫萼扶千蘂。黄鬚照萬花。
忽疑行暮雨。何事入朝霞。
恐是潘安縣。堪留衞玠車。
深知好顏色。莫作委泥沙。

花底

紫萼、千蘂を扶け、黄鬚、萬花を照らす。
忽ち疑ふ暮雨に行くかと、何事ぞ朝霞に入る。
恐らくは是れ潘安が縣ならむ、衞玠が車を留むるに堪へ「たり。」
深く知る好顏色なるを、泥沙に委するを作す莫れ。

【字解】〔一〕花底　梅花のさけるした、これは次の「柳邊」の篇と近き時の作なるべく、「柳邊」の第一句に只道梅花發とあるによつて此篇の花の梅花なることを知る。〔二〕紫萼　むらさきの「花のつけね」。〔三〕蘂　「くわずゐ」。〔四〕黄鬚　花房内の「しべ」の黄なるもの。〔五〕行暮雨　花の露にしめりたるさまをいへり。〔六〕入朝霞　花の日に映じてあざやかなるさまをいふ。行の字入の字は人にかかるなり。〔七〕潘安縣　晉の潘岳、字は安仁、河陽縣令となり、一縣に花をうう。〔八〕衞玠車　晉の衞玠、風神秀異、羊車に乘じて市に入るとき、見るもの以て玉人となし、爭うて果物をなげあたへたりといふ。〔九〕好顏色　花のいろつやのうつくしきをいふ。〔一〇〕委泥沙　散りおつるをいふ。

【題義】梅花のさきたるしたをとほりてよめり。代宗の廣德元年春梓州にての作。

【詩意】紫色の萼が多くの花蘂をささへてたすけるかの樣であり、黄粉をもつた「しべ」が多くの花を照らさんばかりである。この花の木の間をとほるとうへから露がおちてくるので暮雨のふるときあるいてゐるのかと疑はれ、またそれがあざやかに日にうつろうてゐるあたりをとほると、なんで自分は朝霞のなかにはひりこんだのかとおもふ。こんな花のあるところをみるとここは潘安仁が治めてゐる縣ではあるまいか。またこんなうつくしい花ばかりあるところなら玉人だとほめそやされた衞玠の乘つてゐる車さへひきとめおいても十分につかはしからう。自分はこの花のいろつやのうつくしいことを深く知つてをる、どうかあたら花を泥や沙にうちちらさせたくはないものである。

柳邊

只道梅花發。那知柳亦新。
枝枝總到地。葉葉自開春。
紫燕時翻翼。黄鸝不露身。
漢南應老盡。霸上遠愁人。

柳邊

只道ふ梅花發くと、那ぞ知らむ柳も亦新なり。
枝枝總て地に到る、葉葉自ら春に開く。
紫燕時に翼を翻し、黄鸝身を露はさず。
漢南應に老い盡すなるべし、霸上遠く人を愁へしむ。

【字解】〔一〕柳邊　やなぎの木のほとりにてよめる詩なり。〔二〕只道　道ふとは「おもふ」ことなり。〔三〕到地　垂るるをいふ。〔四〕開春　春にあたりてひらくをいふ。〔五〕漢南　漢水の南、北周の庾信が枯樹賦に「昔年楊柳、依依漢南」とあるを用ふ、庾信は北にありて南をおもひしなり、作者は之を借りて鄕を思ふ意を寫せり、次の霸上の句と同意に使用す。〔六〕霸上　霸水のほと

り、長安の東に霸水あり、そのうへに霸橋あり、長安の人、東にゆくものあれば之を送りて霸橋に至り、柳を折りて贈りて別る、柳の多くある處なると且作者の故鄕長安附近の事なれば之をいへり。

【題義】柳のほとりにてよめり。前詩「花底」とおなじく代宗の廣德元年春の作なるべし。

【詩意】梅の花がさいたとばかりおもつてゐたところ、いつのまにか柳もあたらしくのびた。枝といふ枝はみんな地面へたれさがり、葉といふ葉はひとりでに春の時節を逐うてひらく。時としては紫色の燕がそのちかくで翼をひるがへしてとび、黃鸝は葉かげにかくれてからだをあらはさぬ。この柳をみるにつけておもひだすが、漢水の南では柳は老いつくしたことだらうし、長安霸水のほとりのそれも今ごろはどんな樣子になつてをるやら遠く自分のうれひのたねになるのである。

聞官軍收(一)河南河北

(二)劍外忽傳收(三)薊北。　劍外忽ち傳ふ薊北を收むと、
初聞(四)涕淚滿衣裳。　初めて聞きて涕淚、衣裳に滿つ。
(五)卻看妻子愁何在。　卻つて妻子を看れば愁何にか在る、
(六)漫卷詩書喜欲狂。　漫に詩書を卷いて喜んで狂せむと欲す。
(七)白首放歌須縱酒。　白首放歌須らく酒を縱にすべし、
(八)青春作伴好還(九)鄕。　青春、伴を作して好し鄕に還らむ。
卽從巴(一〇)峽穿巫(一一)峽。　卽ち巴峽より巫峽を穿ち、
(一二)便下襄陽向洛陽。　便ち襄陽に下りて洛陽に向はむ。

【原注】余田園在東京。

官軍河南河北を收むと聞く

【字解】【一】收河南河北　寶應元冬十月、僕固懷恩等しばしば賊史朝義が兵を破り進みて東京（洛陽）に克つ、其の將薛嵩、相・衞等の州を以て降り、張忠志は恆・趙等の州を以て降る、次年（即ち廣德元年）春正月、朝義走りて廣陽に至りて自ら縊る。其の將田承嗣、莫州を以て降り、李懷仙、幽州を以て降る。これ河南・河北を收めし事實なり。【二】劍外　劍門の外、蜀をいふ。【三】薊北　薊州の北、今の直隸順天府地方、賊の根據地。【四】涕淚　感激のなみだ。【五】卻看妻子　此語によればこの詩を作りしときは妻子此に在るなり、黃鶴の說に公は寶應元年秋に梓州より成都に歸りて家族を迎へて再び梓州に至り、十一月に射洪縣へ往けり、といへり。いつ妻子を迎へとりしやは詩にはみえず、此詩に於て妻子の語あり。【六】漫卷詩書　詩書とは詩經書經、「卷」とは當時の書物は卷きものなればなり、「漫に」とはうれしさのあまり、いいかげんに卷きおさめること。【七】白首　しらがあたま、老年なるをいふ、首を一に日に作る、白日ならばまひるなかをいふ。【八】青春作伴　青春は春の節をいふ、作伴とは妻子一家つれだつをいふ、「青春を伴と作して」とよます說あり、取らず。【九】鄕　洛陽をさしていへり。【一〇】巴峽　四川巴縣にある峽の名。【一一】巫峽　四川巫山縣にある峽の名。【一二】便下　下るの義明ならず、愚見地理上よりみれば「上りて」とあるべしとおもはるるも「下」とあり。强ていはば都にゆくを上ることとし他地にゆくを下るといひしか。ともかく襄陽へゆくことなり。

【題義】官軍が河北・河南の地方を賊軍の手からとりこんだといふしらせを聞いてよんだ詩。廣德元年春、梓州にての作。

【詩意】劍門のそとなる蜀に忽ち官軍が薊北までとつたことが傳へられた。自分ははじめて之をきい

たときはただ感激のなみだが衣裳にいつぱいになつた。一方妻子をみては平生の愁はどこへかとんでしまひ、讀みかけた詩書の卷きものもいいかげんにはふりだして狂ほしいまでにうれしくおもふ。このしらがあたまも、かつてに歌をうたうて、きままに酒をのむがいいし、時候のいい春のことでもあるから一家つれだつていざ故郷にたちかへらう。すぐに巴峽から巫峽をとほりぬけ、それから襄陽をとほつて洛陽の方へ向ふことにしよう。

遠遊（一）

遠遊

賤子（二）何人記（三）。迷（四）方著處（五）家（六）。　賤子何人か記せむ、方に迷ひて著處に家とす。

竹風（七）連野色（八）。江沫（九）擁（一〇）春沙。　竹風に野色連なり、江沫、春沙を擁す。

種藥扶衰病。吟詩解（一一）嘆嗟。　藥を種ゑて衰病を扶け、詩を吟じて嘆嗟を解く。

似聞（一二）胡騎走（一三）。失喜（一四）問京華（一五）。　聞くに似たり胡騎走ると、失喜して京華を問ふ。

【字解】〔一〕遠遊　故鄕をはなれ遠く他鄕に遊びつつあるときのことをのぶ。〔二〕賤子　わたくし、自己を謙遜していふ。〔三〕記　記憶する。〔四〕迷方　方向に迷ふ。〔五〕著處　俗語なり、到る處と同義。〔六〕家　以爲レ家をいふ。〔七〕竹風　竹林上に風のふきわたること、此二字副詞として用ふ。〔八〕連野色　野色連と同じ、田野の色平らにうちつづくをいふ。〔九〕江沫　江水のあわだつをいふ。〔一〇〕擁　蓋し江汀に水波くだけてあわだち、あわだちの曲線が沙際をいだくがごとくなるをいふものなるべし。〔一一〕解　解き除くをいふ。〔一二〕似聞　「きくがごとくんば」の意、正確でなきことを示す。〔一三〕胡騎走　前年（寶應元年）に賊史朝義戰敗れて北、河を渡り、僕固懷恩が騎兵をひきゐて來り戰ひ、又敗走す、これ「胡騎走」の事實なり。〔一四〕失喜　おぼえずあやまつてよろこぶ。〔一五〕問京華　京華は都をいふ、問ふとは都の樣子いかにと人に問ふなり、之を問ふは若し安穩ならば都へかへらんとおもふによる。

【題義】他鄕に遠遊する身にて賊軍の敗北をきき喜びのあまり作りたる詩。廣德元年春、梓州にての作。

【詩意】自分のことなどはいまはだれが記憶してゐるものがあらう、自分は方向に迷うて到る處そこを以て自分の家としてゐる。ここでは竹のこずゑに風の吹きわたるところ、遠く田野の色が連接し、江汀に沫起りて曲線を以て沙際を抱くがごとし。また自己は藥草をうゑて之を以て老衰と疾病とを扶け、詩を吟じて之によりてなげきを解き去つてゐる。このごろ聞くが如くんば胡騎はにげたといふことだ。それがためあまりに喜んで京華の樣子いかにと人にとひただしてみる。

春日梓州登樓二首

春日梓州にて樓に登る　二首

〔一〕

〔一〕

行（一）路難如此。登樓（二）望欲迷。　行路難きこと此の如し、登樓、望迷はむと欲す。

身無(三)卻少壯。(四)跡有(五)但羇栖。 身は卻つて少壯なること無く、跡は但羇栖なる有り。
(六)江水流城郭。春風(七)入鼓鼙。 江水、城郭に流れ、春風、鼓鼙に入る。
(八)雙雙(九)新燕子。(一〇)依舊已(一一)銜泥。 雙雙たる新燕子、舊に依つて已に泥を銜む。

【字解】【一】行路難 人生の途をゆくことのむづかしきこと、樂府に「行路難」と題する篇あり。【二】登樓 梓州の城樓にのぼる。【三】卻少壯 あともどりして年わかく氣力さかんになる。【四】跡 行跡。【五】但羇栖 たびのすまひばかりしてゐる。【六】江水 涪江の流れ。【七】入鼓鼙 太鼓、こつづみの聲中にいりこむ、風が聲を吹くをいふ。【八】雙雙 雌雄ならびとぶさま。【九】新燕子 ことし來たつばめ。【一〇】依舊 もとのとほりに、巳引の黃鶴の說の如く寶應元年秋に妻子を梓州へ迎へおきたりとすれば舊とは寶應元年春をさすにあらず、漠然と往年をさしたるなり。【一一】銜泥 どろをくはへてきて巢をつくる。

【題意】春の日にあたり梓州に於てその城樓にのぼりて旅の思ひをのべたる詩。廣德元年春梓州にての作。

【詩意】自分の處世難はこれほどである。ここの樓にのぼつてあたりをながめるとどこをながめてよいのやら迷ひさうである。自分のからだはあともどりしてわかくきつくなることは無く、行ひのあとはとみればただたびずまひといふことばかりがある。みれば城郭の方には江の水が流れさり、春の風は兵亂のたいこ、つづみのおとを吹き送つてくる。さうして雌雄して飛ぶことし來た燕がまたもとどほりにはやくも泥をくはへて巢をつくりはじめてゐる。

〔二〕

(一)天畔(二)登樓眼。(三)隨春入(四)故園。 天畔、登樓の眼、春に隨つて故園に入る。
(五)戰場今始定。(六)移柳(七)更能存。 戰場今始めて定まる、移柳更に能く存せむや。
(八)厭蜀交遊冷。(九)思吳(一〇)勝事繁。 厭ふ蜀の交遊冷なるを、思ふ吳の勝事繁きを。
應須(一一)理舟楫。長嘯下(一二)荊門。 應に須らく舟楫を理めて、長嘯して荊門より下るべし。

【字解】【一】天畔 天涯の意、天のはて。【二】登樓眼 城樓にのぼつてながめる所の我が眼。【三】隨春 春は春色。【四】故園 洛陽をさす。【五】戰場今始定 是年の春、史朝義初めて誅し、洛陽は官軍に歸す。【六】移柳 うつしうゑたやなぎ、此二字は庾信の哀江南賦に、釣臺移柳、非玉關之可望とあるに本づく。【七】更能存 反語によむ。【八】蜀 成都、梓州、現在客寓の地。【九】吳 江蘇浙江地方、作者壯年時に遊歷せし地。【一〇】勝事 風景のよきこと。【一一】理 整備すること。【一二】荊門 山の名、湖北荊州府宜昌縣にあり、三峽を出で道を此山のある所に取りて東南に向ふなり。

【詩意】天のはてで樓にのぼつてながめる我が眼は、つい春景色とともどもなつかしき故鄉の方へとはひる。故鄉たる洛陽は今やつと賊がにげて平定したが、自分がかつてうつしうゑた柳はどうして生存してゐることができようぞ。自分は蜀の地が人の交際の冷淡なことをいとふ。之に反して吳の地方の風景のよいことの多いことをなつかしくおもふ。だからすべからく舟や楫を整備して、ながくうそぶきながら荊門山を經て江をくだるべきである。

有感五首

感有り　五首

〔一〕

(一)將帥蒙(二)恩澤。兵戈(三)有歲年。
至今勞聖主。何以報(四)皇天。
(五)白骨新交戰。(六)雲臺舊(七)拓邊。
(八)乘槎斷消息。無處覓張騫。

〔一〕

將帥、恩澤を蒙る、兵戈、歲年有り。
今に至つて聖主を勞せしむ、何を以てか皇天に報せむ。
白骨、新交戰、雲臺舊邊を拓く。
乘槎、消息斷ゆ、張騫を覓むるに處無し。

【字解】〔一〕將帥　諸方の將軍節度使等をいふ。〔二〕恩澤　天子のごおん。〔三〕有歲年　久しきにわたるをいふ。〔四〕皇天　てん、君に比す、君の恩をいふ。〔五〕白骨新交戰　新に交戰せるによりて戰死の者あり白骨となりたるをいふ、これ吐蕃との戰をさす。〔六〕雲臺　漢の時雲臺に功臣をゑがく、唐の太宗の時も亦然り、これ國初の功臣をさす。〔七〕拓邊　邊境の土地を開拓する。〔八〕乘槎　張騫　張騫は漢の武帝の時西域三十六國と交通を開きし人。此人が槎にのりて天の河に到りしといふ話あり。其事は宗懍の歲時記・東方朔內傳等の書に出づといへり、後世出でし話なれども文人往往之を用ふ。此詩は李之芳が事を指していふ、是の時、之芳和諧のために吐蕃に使し、年を經てひき留めらる、故に之を張騫が事をかりて喩となす。

【題義】感ずる所ありて作れる詩。蓋し廣德元年の作。

【詩意】將帥たちは天子の御恩澤を蒙つてをるが、兵亂は幾年かにわたつてつゞいてゐる。さうして今日に至るまで聖天子に御苦勞をかけたてまつてゐるが、こんなことで彼等はいかなることを以て天恩に報いることができるか。國家創立の當初には雲臺に畫かれた功臣たちは土地を開拓したものであるがいまは近く新らしい交戰があつて味方は死者の白骨となるものを多く出だしつつある。また張騫にも比すべき使者（李之芳）が槎に乘つて遠くでかけたがさつぱりたよりがとだえ、どこに之をさがしもとむればよいのか、さがしどころも無い始末である。

〔二〕

(一)幽薊餘(二)蛇豕。乾坤尙(三)虎狼。
(四)諸侯春不(五)貢。(六)使者日(七)相望。
愼勿呑(八)青海。無勞問(九)(一〇)越裳。
(一一)大君先息戰。歸馬華山陽。

〔二〕

幽薊、蛇豕を餘す、乾坤尙虎狼あり。
諸侯春貢せず、使者日〻に相望む。
愼みて青海を呑むこと勿れ、越裳を問ふことを勞する無れ。
大君先づ戰を息め、馬を華山の陽に歸されむ。

【字解】〔一〕幽薊　幽州薊州、今直隸北部、祿山殘黨の根據地。〔二〕蛇豕　「左傳」に封豕長蛇の語あり、封豕は大なるぶた。他國を侵略する者をたとへていへり、ここは賊の降將等をいふ。〔三〕虎狼　吐蕃・羌夷をたとふ。〔四〕諸侯　節度使の或るもの、卽ち上の降將等をさす。〔五〕貢　朝廷へみつぎものをたてまつる。〔六〕使者　朝廷へ服從せぬ節度使に向つて歸順をさとしにゆくつかひのもの。〔七〕相望　前發のつかひについでまた後發のつかひが出るゆゑ、使者が前後相のぞむことになる。〔八〕青海　吐蕃の居る所の地方。〔九〕問　その歸服如何をとふ。〔一〇〕越裳　古代交阯の南にありし國の名、ここは南詔國（今の雲南地方に據れるもの）をさす、南詔は天寶以後唐に叛きて吐蕃につき屢〻邊土の患をなせり。〔一一〕大君先息戰歸馬華山陽　大君は天子をさす、息は

やめること、歸馬華山陽とは「尙書」武成篇に周の武王が天下を平定せし後のことをのべて歸馬於華山之陽といへるに本く。此二句の解釋種種あり、一に曰く、大君は玄宗をさす、今日の禍を玄宗時にさかのぼりていへるなり、大君先息メテ戰、歸セシナランニハ馬華山陽の義なり、と。是にては上と接せず。二に曰く、大君は代宗をさし、代宗が兵を用ひざるを惜み、辭を婉曲にして之を譏れるなり、大君先息メテ戰、歸シヌ馬華山陽の意なり、と。上に勿呑・無問と非戰の意をのべながら用兵せざるを惜むといふは矛盾なり。三に曰く、大君先息メテ戰、歸サム馬華山陽とよみ、當時の事を外夷と構ふるものを戒むるなりと、大君は時君（代宗）をさす。この第三の說宜しきかと考ふ、よりて之に從ひてとく。

【題義】此篇は武將兵を擁して割據し居ることの大害あるを歎息せり。

【詩意】幽薊の地方にはまだ封豕長蛇に比すべきわるい武將がをり、天地の間にはまだ虎狼のやうな夷狄がある。すなはち武將である諸侯どもは春にあたつて朝廷へ貢物をたてまつらず、朝廷から彼等に歸順をすすめにゆくお使が日日ひききりなしである。自分の考によれば青海地方を併呑することなどは注意してせぬ樣にすべきであり、越裳（南詔）などいふ遠隔地のことなどは問ふにおよばぬことである。どうぞ大君におかせられてまつさきに戰爭といふことをおやめになつて周の武王みたいに馬を華山の南におかへしになりたいものである。

〔三〕

洛(一)下舟(二)車入。天(三)中貢(四)賦均。　洛下、舟車入る、天中、貢賦均し。

日(五)聞紅(六)粟腐。寒(七)待翠(八)華春。　日日に聞く紅粟の腐するを、寒に翠華の春を待つと。

莫(九)取金(一〇)湯固。長令宇(一一)宙新。　金湯の固めに取ること莫れ、長く宇宙をして新ならしめむ。

不過行(一二)儉德。盜(一三)賊本王(一四)臣。　儉德を行ふに過ぎず、盜賊も本王臣なり。

【字解】〔一〕洛下　洛陽の地をいふ。〔二〕舟車入　「史記」に周の成王、召公をして洛邑を營ましめて曰く、此天下之中、四方入貢、道里均焉と。此篇起二句其意を用ふ、舟車入るとは四方の舟も車もここにいり來るをいふ。〔三〕天中　上文の天下之中の意、四方からみて中央なりといふこと。〔四〕貢賦均　貢は各地の土產をたてまつる、賦はわりつけたる租稅をだすこと、均とは上文の道里均焉の意、貢賦をもつてくるに里程が平均した場處にあるといふこと。〔五〕日聞　作者日日之をきく、聞の字下句までへかかる。〔六〕紅粟腐　穀物を多く倉にたくはへおくためにそれが腐る、紅粟はもみの米があかく變色すること。〔七〕寒　春寒なり。〔八〕翠華春　翠華は天子の旗なり。是の時洛陽へ遷都すべしとの議あり、人人天子の御旗の來りて春色の生ぜんことを待つ。〔九〕莫取　これより以下は作者の議論なり、そこに取る所の何ものもない、そんなことにいりようはない、の意。〔一〇〕金湯固　金湯は金城湯池の略、金鐵できづいた城、熱水をためた濠池の義、固は堅固なること、普通ならばかかる防禦物は必要であるが天子の都にはそんなものはいらぬ。〔一一〕宇宙新　政治を一變して天下ぢうをあらたにする。〔一二〕行儉德　儉約といふ德をおこなふ、是の時代宗漸く奢侈ならんとする風あり、因て儉を說く。〔一三〕盜賊　人民より誅求する武將等をさす。〔一四〕王臣　天子のけらい。

【題義】此詩は遷都の議をきき政治一新の根本論を說く。仇氏は遷都の非を歎じたる詩なりととけるも、余は之に贊せず、むしろ遷都の是非云云を超越して君德をときたるものと考ふ。

【詩意】洛陽には四方から舟車がいりこむ、さうして其の地は天下の中央で四方から貢賦をはこぶに

は里程が平均した處だ。そこには穀あまりてくさり、人人寒時にあたり天子の遷幸の旗きたつて春の生ぜんことを待ちつつあると聞く。或る人は天子の都としては金湯の固めがいる、洛陽は金湯の固めをかいてゐるではないかといふが、自分の考では都に金湯の固めなんどいふものは取りえのないものだ、それよりもどうか天子がいままでのやりかたをかへ、この天下を永久に新にされんことを希望するのだ。天下を新にするといふたところで格別むづかしい方法によるわけではない、ただ天子が躬ら儉約の德を行はれるだけのことだ。いま盜賊行爲をしてをる武將どもも、もとはみな天子のごけらいなのである。

〔四〕

（一）丹桂風霜急。（二）青梧日夜凋。
由來（三）強幹地。未有不（四）臣朝。
（五）授鉞親賢往。（六）卑宮制詔遙。
終依（七）古封建。豈獨聽（八）簫韶。

〔四〕

丹桂、風霜急に、青梧、日庭凋む。
由來、強幹の地、未だ臣とし朝せざるは有らず。
授鉞、新賢往けり、卑宮、制詔遙かなり。
終に古の封建に依らむ、豈獨り簫韶を聽くのみならむや。

【字解】〔一〕丹桂　「きんもくせい」のこと、唐の王室をたとへいふ、漢の成帝の時の童謠に桂樹華不實の語あり、桂の花は赤色にして漢家の象なりといへり。〔二〕青梧　「あをぎり」唐の宗藩（親王家）にたとふ、「きり」の木は本幹より子枝孫枝がよくそだつ、由て王室の御親類すぢの象とす。丹桂・青梧の二句節物をのべ同時にたとへをとる。〔三〕強幹地　強幹はつよいみきなり、幹は王室なり、子孫の枝が王室を護れば、王室の幹はつよくなる、強幹地とは「つよいみきのあるところに於ては」の意。〔四〕臣朝　臣下となりてきまりどほりに朝廷へ參勤すること、唐の藩鎭の武將どもは往往天子に對し臣下たる禮節をつくさず。〔五〕授鉞親賢往　鉞を授くるとは兵馬の權を委任するをいふ、親賢とは天子の近親にして且賢なるをいふ、此句は寶應元年に代宗位に卽き雍王适を以て元帥とせしことをさす。〔六〕卑宮制詔遙　卑宮は天子が宮室を卑くし、みすぼらしき建物にすまはるること、儉約のさまなり、制詔はみことのりなり、代宗に卑宮の詔ありしや否や不明なるも此詩句によれば之ありしものとみるべきなり、（仇氏は授鉞二句について玄宗の時の事を引きて解きたるも恐くは是に非ず）遙とは作者遠方にありて之をきくをいふ。〔七〕古封建　周の仕方をさす。周は天子のこどもを諸國に封じて建て置きたり、それに由つて王室を護らしめんとせるなり。〔八〕聽簫韶　韶は舜の音樂の名、簫がおもなる樂器なるにより之を簫韶といふ、此句は諷意あるならん、蓋し干戚を舞はして三苗を服從せしめしの手段を非とするものにあらざるか。

【題義】此篇は宗室を封じて王室を護らしむべきことを說けり。

【詩意】丹桂のうへには風霜がしきりに置き、青梧もまた日となく夜となくしぼむ。王室宗室ともにふるはなくなりつつある。元來もし樹の本幹が強いならばそこに向つてはいかなる不心得ものも臣節をいたし參朝せぬものはないはずであるのだ。このごろわが天子におかせられては鉞を授けて親賢のお方（雍王适）を敵前へおつかはしになり、また吾吾は遙に卑宮の詔をうけたまはつた。まことに結構なことである。結局は今の世も古代の封建の趣旨に依るべきものである。ただ深宮に在つて簫韶の音樂をきいてをるといふことが目的ではあるまい。

〔五〕

〔五〕

胡滅人還亂。兵殘將自疑。　胡滅して人還亂れ、兵殘りて將自ら疑ふ。
登壇名絕假。報主爾何遲。　登壇、名、假を絕つ、主に報ずる爾何ぞ遲き。
領郡輒無色。之官皆有詞。　郡を領すれば輒ち色無く、官に之く皆詞有り。
願聞哀痛詔。端拱問瘡痍。　願くは聞かむ哀痛の詔、端拱、瘡痍を問ふを。

【字解】【一】胡　賊軍。【二】人　人民。【三】兵殘　兵の少數がのこるなり。【四】將自疑　將は賊の降將、自疑とは自ら信ぜざるなり、もと賊に從ひ居て新しく降りしものなればいつ官から僇せらるるかとあやぶみて疑ふなり、自ら疑ふによりて又た兵をつのりて自己を守ることになる。【五】登壇　漢の高祖、韓信を大將に任命するとき特別に壇をきづきそのうへに信を登らせたり、ここはただ武將を任命することをいふ。【六】名絕假　韓信齊の地を定めしとき假りに王とならんと請ふ、高祖、「大丈夫諸侯を定むるには卽ち眞王とならんのみ、何ぞ假を以て爲さん」といひて齊王を授けたり。いまその如く名には假なるものなく武將みな眞王となるといふなり、ただし唐の時王の稱はなし、武將は爵と土地と名實ともに之を受けしことをさす。【七】主　天子。【八】爾　武將をさす。【九】領郡　郡を支配する。唐にては郡なし、州の刺史に任ぜらるることを領郡といへり。【一〇】輒　すなはち、いつでもの義。【一一】無色　顏色うかばぬをいふ。【一二】之官　官に之く、とは州へ赴任するなり。【一三】有詞　詞は怨言なり。【一四】哀痛詔　天子自らいたみ過ちを悔ゆる意をのべたまへるみことのり。【一五】端拱　端坐して手を拱く、容儀をただすさま。【一六】瘡痍　きずあと、民のなんぎをいふ。

【題義】此篇は當時武將を重んじて郡守（州の刺史）を輕んせるを慨する意をのべたり。

【詩意】胡賊は滅亡したにかかはらず人民はなほみだれたつておちつかぬ。兵は減少して殘りすくなになつたが武將は却つて自己の安否を疑ひつつある。苟くも將に任ぜられ壇にのぼるものはみな眞王の如く名稱實利をならびうけてをる。それになんで汝等は天子に報いたてまつることがおそいのであるか。武將はこんなであるに、他面、行政の官はといふと、郡を領し州の長官に任ぜらるればいつもその人は顏色がうかばぬ。さうして赴任するにあたつては皆ぶつぶつ怨みのことばをだす。こんなことではならぬ。自分はどうかして天子が悔過の哀痛の詔をおだしになり、端然容儀を正しうして人民の艱苦をお問になることを希望するのである。

春日戲題惱郝使君兄。　春日戲に題して郝使君兄を惱ます

使君意氣凌青霄。　使君の意氣、青霄を凌ぐ、
憶昨歡娛常見招。　憶ふ昨、歡娛常に招かれしを。
細馬時鳴金騕褭。　細馬時に鳴く金騕褭、
佳人屢出董嬌饒。　佳人屢〻出づ董嬌饒。
東流江水西飛燕。　東に流るるは江水、西に飛ぶは燕、
可惜春光不相見。　惜しむべし春光に相見ず。

【字解】【一】惱　なやます、こまらす。【二】郝使君　郝使君は某州の刺史にて通泉に居りしものならん。或は既に退居せしものか。【三】兄　年長者に對する敬稱。【四】青霄　あをぞら。【五】憶昨　昨とは去年冬通泉にゆきし時をさす。【六】細馬　良馬。【七】鳴　馬がなく。【八】金騕褭　卽ち細馬と同物、騕

裏は赤喙黑身の駿馬、金とは金なかざれるないふか。【九】董嬌饒 漢末の美女の名、うへの佳人と同物。【一〇】東流江水 水の流るる如く時はすぎ去る。【一一】西飛燕 春すぐれば燕飛び來る。【一二】春光 はるげしきのあるときにの意。【一三】不相見 郗と面會せぬこと。【一四】王趙兩紅顏 二人の美妓。

願攜王趙兩紅顏。　願はくは王趙の兩紅顏を攜へて、
再騁肌膚如素練。　再び騁せよ、肌膚、素練の如し。』
通泉百里近梓州。　通泉は百里、梓州に近し、
請公一來開我愁。　請ふ公一たび來りて我が愁を開け。
舞處重看花滿面。　舞處重ねて看む花面に滿つるを、
樽前還有錦纏頭。　樽前還錦纏頭有り。』

【一五】再騁肌膚如素練　此七字一句なるも再騁の二字は上句に屬せしめてみるべし、郗に向ていふなり、杜詩の無理なる句法の一例とすべし。【一六】肌膚如素練　の五字は兩紅顏の補足的說明なり、素練はしろきねりぎぬ。騁の字を此句に屬せしめ「逞しくせしめよ」の義なりとときくものあれど依りがたし。【一七】公　郗をさす。【一八】花滿面　前に笑時花近眼、舞罷錦纏頭の句あり、余さきに花は花枝かとのべおきたり。ここの花も同義かとおもふ、一說に花は顏面の裝飾に用ふるものなりといへり。

【題義】春の日に戲れにかきつけて郗使君をこまらせた詩。廣德元年春梓州にての作。

【詩意】使君の意氣はあをぞらをしのぐばかりだ、通泉でおもしろいたのしみをしたときいつもお招きにあづかつたことはいまもおもひだす。あのときは金騕褭の細馬が時時いななき、董嬌饒に比すべき佳人がときどきあらはれでた。』水は東にながれる燕は西に飛ぶ。惜しくも春げしきは過ぎやすいのだが、その春げしきのをりからあなたとは面會せずにゐる。どうか王・趙・の二美人をたづさへてふたたび馬をとばせておいでなさい、彼女等美人はその肌膚はしろいねりぎぬのごとくうつくしいものどもである。』あなたの居る通泉はたつた百里でわたしの居る梓州には近い。どうぞ一ど來てわたしの愁をはらしていただきたい。彼女等の舞ふ處、かさねて花の面に滿つるを看ませう。また酒樽の前には錦の纏頭もござる。

春日戲題惱郝使君兄

309
65

終

續國譯漢文大成

文學部 二十

309
65

始

吉田修郎氏
寄贈本

續國譯漢文大成

文學部第二十册（第五帙の四）

杜少陵詩集 中の四

309
65

杜少陵詩集　卷十二

題(一)鄭原郭三十二明府(二)茅屋壁。　鄭原の郭三十二明府が茅屋の壁に題す

江頭(三)且(四)繫船(五)。爲爾(六)獨相憐。　江頭且く船を繫ぐ、爾が獨り相憐むが爲なり。

雲散灌壇(七)雨。春青(八)彭澤(九)田。　雲は散ず灌壇の雨、春は青し彭澤の田。

頻驚適(一〇)小國。一擬(一一)問高(一二)天。　頻りに驚く小國に適く、一に高天に問はむと擬す。

別後巴東(一三)路。逢人問(一四)幾賢。　別後、巴東の路、人に逢はば幾賢かあると問はむ。

【字解】【一】鄭原　原の字一に縣に作る。のちに「鄭城西原」の語あり、縣の字ならば鄭縣のこと、原の字ならば鄭城西原の意なるべし。鄭縣は梓州の治所、今の三臺縣治なり。【二】明府　縣令の敬稱。【三】江頭　江は涪江。【四】且　しばらく。【五】繫船　ここに船をつなぎ寓居するをいふ。【六】爾　郭をさす。【七】灌壇　縣の名、搜神記といふ小說に、太公望が灌壇の令となりしときに、泰山の女で西海の婦になつたものが文王の夢にあらはれていふには自分は泰山の方へかへらうとするに、灌壇の令にさまたげられてゆけぬ、自分のとほる處には必ず大風疾雨あり、と。文王、太公望を召して之に問ひしに果して急風暴雨が管外を通過せしとこたへたり。【八】春青　青とは耕作物が生じてあをみなるなり。【九】彭澤　縣の名、晉の陶淵明かつてここの縣令となる、灌壇・彭澤は鄭縣を比していへり。【一〇】適小國　小國とは鄭縣をさす、郭は賢者でありながらつまらぬ縣へばかり赴任させられてゐる。【一一】一

もつぱらの義。【三】問高天　屈原「天問」を作りわからぬことを一一天に向て詰問せり、そのまねをする。【三】巴東　巴州の東、巴州は今の四川重慶府、作者は梓州から涪江をくだり巴州を經て三峽から出ようとの考をもちしなり。【四】問耆賢　耆賢とは長人の賢者の義、郭ほどの賢者がいく人あるかをひとにたづねようといふなり。其の意はいくにんも居るまじといふに在り。

【題義】郪縣の縣令郭某の茅屋の壁に題したる詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】自分はこの涪江のほとりにしばらく船をつないだのはあなたがひとりわたしを憐んでくれたがためである。あなたは賢人であるから灌壇の雨にも雨はきつからすすぐ雲が散らばつてしまひ、彭澤の田には春の作物が青青としてゐる。あなたほどの賢人が小さい地方へばかりゆくのには驚く、これはどうしたわけなのかそのわけを天にたづねてみよう。またあなたとわかれて巴東の路をとほるときには人に逢ふごとにあなたほどの賢い縣令がいくにんゐるかとたづねてみよう。

奉送崔(一)都水翁下(二)峽。　崔都水翁が峽より下るを送り奉る

無數涪江筏(三)。鳴橈(四)總(五)發時。　無數、涪江の筏、橈を鳴らして總て發する時。

別離終不久。宗族(六)忍相遺(七)。　別離終に久しからず、宗族、相遺すに忍びんや。

白狗黃牛峽(八)。朝雲(九)暮雨祠。　白狗黃牛峽、朝雲暮雨祠。

(一〇)所過憑問訊。到日自題詩。　過ぐる所憑つて問訊せむ、到らむ日自ら詩を題せよ。

【字解】【一】崔都水翁　都水とは都水監使者なり、正五品上の官にて河渠諸津の監署を總ぶ。この崔某は作者の舅にあたる人なり、因て之を翁といへり。【二】下峽　三峽よりくだる、崔はそれより洛陽の方へゆかんとするなり。【三】筏　いかだ、木を組みて水に浮かせたるもの、此人筏にのりてくだるとみゆ。【四】橈　短き棹なり。【五】總發　一齊に出發する。【六】宗族　洛陽にある同姓の親族。【七】相遺　遺は遺棄しておくこと、別離二句は作者よりいふ。【八】白狗黃牛峽　白狗峽は湖北省歸州にあり、兩脇削るが如く白石壁に起り其の狀狗の如し。黃牛峽は夷陵州（今の宜昌）にあり、石色人の牛を牽く狀のごとく人は黑く牛は黃なり。【九】朝雲暮雨祠　夔州府巫山縣の東にあり、楚の襄王の夢に巫山の神女あらはれ、妾は朝には行雲となり、暮には行雨となるといひしと傳ふ。峽と祠とは竝に崔が經過するところなり。【一〇】所過憑問訊到日自題詩　二句諸解あり、一に曰く、君が過ぐる所吾が相知のものあらば先づ君によりて問訊しおき、吾自らそこに到りし日に吾自ら詩を題して之に贈らん、と。この說は所過憑問訊シ到ラン日自題セン詩とよますなり。仇氏この說をとれり。二に曰く、君がそこに到りし日に君自ら詩を題しおかれよ、君が過ぐる所、吾、君の詩によりて之を問訊すべし。のちに張籍の詩に顧君到處自題セヨ名ヲ　他日知ラム君從レ此去リシコトヲとあると同意なりと。余はこの第二說に依る。

【題義】舅にあたる都水監使者崔老人が三峽からくだつて洛陽の方へゆかうとするのを送る詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】數しれぬ多くの涪江の筏が、橈を鳴らして一齊に出發するとき。あなたといまはお別れするがこのお別れも結局はそんなにながくはあるまい、なぜかといふと洛陽においてある親族のもの、それをわたしだとてどうしてはふつておくに忍びませうぞ。あなたはこれから朝雲暮雨となつたといはれる巫山の神女の祠や、白狗峽、黃牛峽などをおとほりになるであらうが、おとほりになるところはわたしも他日あなたのおかきになつたものによつてたづぬるようすがといたしますから、あなたは各地

におつきになつたときにはごじぶんでそこに詩を題しておいていただきたい。

(一)鄭城西原送李判官(二)兄・武判官(三)弟赴成都府。

鄭城の西原にて李判官兄・武判官弟が成都府に赴くを送る

(四)憑高送所(五)親。久坐惜芳(六)辰。高きに憑りて所親を送る、久しく坐して芳辰を惜しむ。
遠水非(七)無涙。他山(八)自有(九)春。遠水、浪無きに非ず、他山自ら春有り。
野花隨(一〇)處發。官(一一)柳著(一二)行新(一三)。野花、隨處に發き、官柳、著行新なり。
(一四)天際傷愁(一五)別。離(一六)筵何太(一七)頻。天際、愁別を傷む、離筵何ぞ太だ頻なる。

【字解】〔一〕鄭城西原 鄭縣の城の西方の高地。〔二〕李判官兄 判官李某、年長者ゆゑ兄といふ。〔三〕武判官弟 判官武某、年少者ゆゑ弟といふ。〔四〕憑高 高地によりて。〔五〕所親 したしき人、李・武・は兄弟なみに交る人人ゆゑ所親といふ。〔六〕芳辰 春のとき。〔七〕非無浪 浪ありて舟行には辛苦なるをいふ。〔八〕他山 他地方の山。〔九〕有春 春のけしきの見るべきものあるをいふ。〔一〇〕隨處 どこにでも。〔一一〕官柳 官にてうゑた柳、これは官道にならび立つ。〔一二〕著行 行は行列、著處はどこでもの義なるごとく著行は「どの行列も」の義。〔一三〕新 あらたにわか芽をふいたこと。〔一四〕天際 天涯のごとし、梓州は鄭よりみて天のはてなり。〔一五〕愁別 愁を帶びてのわかれ。〔一六〕離筵 わかれの宴席。〔一七〕太頻 甚し頻繁な筵り、また李・武・の二人を送る、これ「頻り」なるなり。

【題義】鄭縣縣城の西方高地で判官たる李・武・の二人が成都府の方へ赴くのを送る詩。廣德元年春梓州にての作。

【詩意】自分は高地によつて親しくしてゐた人たちを送り、じつとすわつて春のときを惜しむ。諸君がとほる遠方の川水には浪が無いわけでない、浪はあつて舟行にはなんぎなこともあらうが、他地方の山にはおのづと春景色があつて慰めらるるであらう。すなはち到るところ野のもの花はひらき、官道の柳の並樹はどれもわかめをふいてゐるだらう。自分は天のはてでかなしい別れにこころをいためる。なんでかくわかれの宴席が頻頻ともよほされるのであらう。

涪江泛舟送韋班(一)歸京(二)得山字

涪江に舟を泛べ韋班が京に歸るを送る山の字を得たり

(三)追餞同舟日。傷春一水間。追餞、同舟の日、春を傷む一水の間。
飄零爲客久。衰老羨君還。飄零、客となること久しく、衰老、君が還るを羨む。
(四)花雜重重樹。雲輕處處山。花は雜はる重重たる樹、雲は輕し處處の山。
(五)天涯故人少。更益鬢毛斑。天涯、故人少し、更に鬢毛の斑なるを益さむ。

【字解】〔一〕韋班 事歷詳ならず。〔二〕京 長安なるべきか。〔三〕追餞 あとをおひかけてはなむけする。〔四〕花雜 雜とは異種類の花がさきあへるをいふ、雜一に遠に作る。〔五〕天涯 京に對し居地梓州をさす。

【題義】浩江にて舟をうかべて韋班といふものがみやこへかへるのを送る詩。廣德元年春、梓州にての作。

【詩意】あとからおひかけて旅立ちのはなむけせんと同じ舟でゆくとき。この一すぢの江の流に於て春げしきに對してもこころをいためる。自分はおちぶれながら久しく旅客となつてゐるし、衰老の境涯にあるのでこのたび君がみやこへかへるのをうらやましくおもふ。君のとほる處にはいへにもかさなつた樹にはいろいろの花が咲き合うてゐるだらうし、處處の山には雲が輕くういてゐるだらう。君にわかれてしまへばこの天のはてではなじみのものもすくないがうへにさらに鬢の毛の霜斑なることが益すこととおもふ。

泛(一)舟送魏十八倉曹(二)還京。因寄岑中允參(三)范郎中季明(四)

舟を泛べて魏十八倉曹が京に還るを送り、因つて岑中允參・范郎中季明に寄す

遲日(五)深江(六)水。輕舟送別筵。　遲日、深江の水、輕舟、送別の筵。

帝鄕(七)愁緒(八)外。春色淚痕邊。　帝鄕、愁緒の外、春色、淚痕の邊。

見酒(九)須相憶。將詩(一〇)莫浪(一一)傳(一二)。　酒を見ては須らく相憶ふべし、詩を將て浪に傳ふること莫れ。

若逢岑與范。爲報(一三)各衰年(一四)。　若し岑と范とに逢はば、爲に報ぜよ各衰年なりと。

【字解】【一】泛舟　これも浩江に舟をうかべるなり。【二】魏十八倉曹　倉曹は官名、唐の制、諸衞府に倉曹參軍あり。【三】岑中允參　親友の岑參なり、是の年に參は虢州長史より太子中允に改められ、殿中侍御史を兼ね、關西節度判官に充てらる。【四】范郎中季明　范季明が事歷詳ならず、郎中は官名。【五】遲日　遲とは日のくれぬこと、春の永日を遲日といふ。【六】深江　ふかいかは、浩江をいふ。【七】帝鄕　みやこ。【八】愁緒　うれひのこころ。【九】酒　魏某等がのむさけ。【一〇】詩　作者のつくる詩。【一一】浪　みだりに。【一二】傳　世間へ流傳させる。【一三】爲報　吾がためにつげよ。【一四】各衰年　この各の字は衰年へかからず岑范各自をさすに似たり。

【題義】浩江に舟をうかべて倉曹の官魏某がみやこにかへるのを送り、ついでに太子中允岑參と郎中范季明に寄せた詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】はるの日永のときのふかき江の水。輕くうかんだ舟でのわかれを送る宴席。みやこは遠くわが愁のこころの外にあり、春のおもしろきけしきもわが淚痕のほとりにある。君はあちらへいつて酒をみたばあひにはわたしをおもうてくれ、またわたしが作つた詩をばやたらにわたしを知らぬ人たちに傳播させてはくれるな。岑參と范季明に逢うたなら、めいめいにわたしはもう老衰の年になつたとつげてくれ。

送路六侍御入朝(一)(二)

路六侍御が入朝するを送る

(三)童稚情親四十年。
(四)中間消息兩(五)茫(六)然。
更爲後(七)會知(八)何地。
忽漫相逢是別筵。
不(九)分桃花紅似錦。
生(一〇)憎柳絮白於綿。
劍(一一)南春色還無(一二)賴。
觸(一三)忤愁(一四)人到酒邊。

童稚、情親しむ四十年、
中間の消息兩に茫然たり。
更に後會を爲すは知る何の地ぞ、
忽ち漫に相逢ふは是れ別筵なり。
分とせず桃花の紅錦に似たるを、
生憎や柳絮綿よりも白し。
劍南の春色還無賴、
愁人に觸忤して酒邊に到る。

【字解】【一】路六侍御 侍御は官名、侍御史なり、路六の名詳ならず。【二】入朝 朝廷へゆく。【三】童稚 こどものとき。【四】中間消息 童時と老時とのなかごろのたより。【五】兩 彼我の兩方共にの意。【六】茫然 はつきりせぬ貌。【七】後會 これから後日の會合。【八】知何地 不レ知何地の意。【九】不分 汝の本分だとはせぬぞ。意譯すれば「それはきこえぬ」などの義とひとし。【一〇】生憎 「生」の字俗用にて助字なり、動詞の下にもつけ上にもつける、これは上につけたる例なり、太瘦生・可憐生・などは下につけた例なり。【一一】劍南 梓州地方も劍閣の南にあたれり。【一二】無賴 あてにならぬもの、ならずもの、春色を罵る語なり。【一三】觸忤 こころにふれさからふ。【一四】愁人 愁ある人、自己をさす。

【詩意】君とはこどものときたいそうなかがよかつたが、そののち四十年からたつた。いままたであふが童と老との中間のたよりはおたがひにはつきりしてはをらぬ。いまあふが後日またあふのはどこだらう。いま急にであふのがこの送別のむしろではないか。じつに氣にくはぬのは桃の花の錦のやうに紅であることであり、またにくさもにくきは柳の花の綿よりも白いことである。この蜀の春げしきといふやつはまことに無賴であつて、このわしが愁にたへかねてゐるのにそのこころにそむいてこのわかれの酒をのんでをるあたりにやつてくるとはふとどきしごくのやつだ。

(一)涪城縣香積(二)寺官(三)閣

涪城縣の香積寺の官閣

寺下春(四)江深(五)不流。
山(六)腰官閣迥添(七)愁。
含(八)風翠壁孤雲細。
背(九)日丹楓萬木稠(一〇)。
小(一一)院迴(一二)廊春寂寂。
浴鳧飛鷺晚悠悠(一三)。
諸(一四)天合在藤蘿外。
昏(一五)黑應須到上(一六)頭。

寺下の春江深うして流れず、
山腰の官閣迥かに愁を添ふ。
風を含みて翠壁孤雲細に、
日に背きて丹楓萬木稠し。
小院迴廊、春寂寂、
浴鳧飛鷺、晚に悠悠たり。
諸天合に藤蘿の外に在るべし、
昏黑應に須らく上頭に到るべし。

【字解】【一】涪城縣 梓州の西北五十五里にありと。【二】香積寺 香積山は涪城縣の東南三里にあり、北のかた涪江に枕む。寺は山上にあるなるべし。【三】官閣 官にてたてた二階。【四】春江 江は涪江。【五】深不流 ふかくして水のたたへてゐること。【六】山腰 腰とは中段をいふ。【七】添愁 容易にゆきつけぬとうれふるなり。【八】含風翠壁 翠壁含レ風の意、翠壁は山の絶壁。【九】背日丹楓 丹楓背レ日

の意、丹楓はわかばのあかきなるべし。【一〇】稠　おほし。【一一】小院　ちさき奥庭。【一二】迴廊　まはりらうか。【一三】悠　心のしづかなさま。【一四】諸天　佛教の思想にて諸種の天あり、四天王天より非有想天・非無想天にいたる天はみな諸天なり、これ山頂の寺殿をさす。【一五】昏黑　たそがれどきのまつくらきとき。【一六】上頭　頂上をいふ。

【題義】涪城縣の香積寺にある官閣についてよめり。廣德元年春、梓州にありしときの作。

【詩意】寺のましたに春の江があるがこれは深くてながれてをらぬかの樣にしづかだ。そのうへ山の中段のあたりに官閣があるが、これはずつととほくていつあそこまでゆけるのかと心配をますほどだ。だんだんのぼるとみどりの絕壁は風を含んではつそりひとひらの雲がうかび、日光をうしろにして若葉の丹楓が無數にたくさんにある。いよいよ官閣のところへくると小さな奥庭にまはり廊下があつて春のさまひつそりとしてをり、水面をみおろすと水をあびてゐる鳧だの飛んでゐる鷺なんどが夕ぐれにあたつてのんきさうにみえてゐる。佛法でいふ諸天は藤や蘿などのはえてゐる森林の以上にあるはずであつて、そんな絕頂へは日がとつぷりくれてからやつとゆきつくことであらう。

泛（一）江送客（二）

江に泛びて客を送る

二月頻送客。東（三）津江欲平。
二月頻りに客を送る、東津、江、平ならむと欲す。

（四）煙花山際重。（五）舟楫浪前輕。
煙花、山際に重く、舟楫、浪前に輕し。

淚逐勸盃下。愁連吹笛生。
淚は勸盃を逐うて下り、愁は吹笛に連なりて生ず。

離筵不（六）隔日。那（七）得易爲情。
離筵、日を隔てず、那ぞ情を爲し易きを得む。

【字解】【一】泛江　涪江に舟をうかべしこと。【二】客　あるたびにゆくひと、何人なるやを知らず。【三】東津　「打魚歌」にみえたり、綿州にあり。【四】煙花　けぶりをおびた花。【五】重　濃厚の意。【六】不隔日　毎日ひきつづくをいふ。【七】那得易爲情　難爲情といふ語あり、あまりつらくて情が情であり得ないことをいふ、「なんぞ情を爲し易きことを得ん」とはそれと同意。

【題義】涪江にうかびて人を送つた詩。廣德元年梓州にありてしばらく綿州にいたりしときの作ならん。

【詩意】二月にはしきりに人を送る。いまこの東津では江の水がたつぷりあつて岸と平にならうとしてゐる。山のきはみれば煙をおびた花が厚くみえ、浪かきわけて舟の楫がかろくこがれつつある。自分は客に盃をすすめるあとから淚がおちるし、笛を吹くおとにつれて愁の念が生ずる。わかれのさかむしろも一日おかずにつづいてはどうして自分の情が情でありえよう。つらくてたまらぬ。

雙（一）燕

雙燕

（二）旅食驚（三）雙燕。銜泥入（四）北堂。
旅食、雙燕の、泥を銜みて北堂に入るに驚く。

應（五）同避（六）燥濕。且復過（七）炎涼。
應に同じく燥濕を避け、且復炎涼を過すなるべし。

養子風塵際。來時道路長。　子を養ふ風塵の際、來る時道路長し。

今秋天地在。吾亦離殊方。　今秋、天地在り、吾亦殊方を離れむ。

【字解】【一】雙燕 雌雄ふたつのつばめ。【二】旅食 たびずまひすること。【三】驚 この字下句へまでかかる。【四】北堂 婦人のへや、家屋の北方にあり、これは妻の室をさす。【五】同 雄と雌とおなじく。【六】燥濕 かわくと、しめると。【七】炎涼 あつさ、すずしさ。【八】養子 こどもをそだてる。【九】風塵 兵亂のちり。【一〇】來時 北からとんできたとき。【一一】長 遠き意。【一二】今秋 この二字は下句の離殊方へかかる。【一三】天地在 ここの地よりほかにもひろき天地が存在するの意。【一四】離 去るなり。【一五】殊方 他方に同じ、他郷のこと、閬州をさす、閬州は今四川保寧府閬中縣なり。

【題義】雌雄のつばめについてよめり。作者自己夫妻のことをたとへていへり。廣德元年春、閬州にての作。

【詩意】自分はたびずまひをして驚くのは北のへやへ一對のつばめが泥をくはへてはひつてきたことだ。彼等はいつしよにかわき・しめり・を避け、そのうへまたあつさ・すずしさ・をもすごすことであらう。彼等は兵亂のほこりのとぶときに子どもをそだててゐる。そのとんできた道路はなかなかの遠いところからである。（じぶんもこのつばめに似てゐるの意）。しかし他にひろい天地もあるからして、ことしの秋には自分もこんな他郷の地からたち去らうとおもうてゐる。

百舌

百舌來何處。重重祗報春。　百舌何の處よりか來る、重重祗春を報ず。

知音兼衆語。整翮豈多身。　音を知りて衆語を兼ぬ、翮を整ふる豈多身ならむや。

花密藏難見。枝高聽轉新。　花密にして藏して見え難く、枝高くして聽けば轉新なり。

過時如發口。君側有讒人。　時を過ぎて如し口を發かば、君側に讒人有るなり。

【字解】【一】百舌 「もず」のとり。【二】重重 かされてかされて。【三】知音 音をよく知る。【四】衆語 さまざまのことば。【五】整翮 たちばねをととのへてとぶ。【六】豈多身 からだがいくつもあるのではない。【七】過時 時節をはづれて。【八】發口 くちをひらいて鳴くこと。【九】君側有讒人 「汲冢周書」に反舌有聲 佞人在側とみゆ。反舌は即ち百舌なり。

【題義】「もず」の鳥に感じてよめる詩。君側の讒人をそしるなり。程元振を意味せるならんといふ。蓋し「雙燕」と同じころの作。

【詩意】「もず」のとりはどこから來たか、たびたび鳴くがただ春だぞとつげしらせるだけのことだ。このとりは音のことをよく知つてさまざまのことばを兼ねてなく。またたちばねをととのへて様子をよくしてなくがその身はひとつでべつなとりがなくわけではない。花のこんで咲いてゐるところでなくからからだはかくされて見えぬ。枝の高いあたりに鳴くのでそのこゑをきけばきくほど新しくきこ

える。これがその鳴くべき時節に鳴いてゐるのはまだよいが、時節はづれに口をあいて鳴かうものなら、それこそ君のお側に讒言をするやうな惡人のある徵だ。

上牛頭寺（一）

牛頭寺に上る

青山意不盡。（二）袞袞上牛頭。（三）　青山、意盡きず、袞袞、牛頭に上る。
無復能拘礙。（四）眞成浪出遊。（五）　復能く拘礙せらるる無し、眞成に浪りに出遊す。
花濃春寺靜。竹細野池幽。　花濃かにして春寺靜に、竹細くして野池幽なり。
何處啼鶯切。移時獨未休。（六）　何の處か啼鶯切なり、時を移して獨り未だ休ます。

【字解】【一】牛頭寺　梓州郪縣の西南二里に牛頭山あり、高さ一里、形、牛頭に似、四面孤絕、俯して州郭に臨む。寺は蓋し山上にありしもの。【二】意不盡　山をゆきて興味つきざるをいふ。【三】袞袞　絕えざる貌。【四】拘礙　こちらを拘束しさまたげる。【五】眞成　まことに。【六】移時　ひさしくの意。

【題義】牛頭寺にのぼりてよめり。廣德元年梓州にての作。

【詩意】青山をあるいてゆくが興味はつきぬ、それでひきつづいて牛頭山のうへの方へとのぼる。何等の拘束・障礙・をうけず、まことにきままにあそびにでかけるのである。寺についてみると、花の色こまやかで春の寺は靜であり、細つた竹がはえて池が幽邃である。どこでか鶯がしきりにないて

それだけはいくら時刻がうつつてもなきやまうとしない。

望牛頭寺

牛頭寺を望む

牛頭見鶴林。（一）梯逕繞幽深。（二）（三）　牛頭、鶴林を見る、梯逕繞りて幽深なり。
春色浮山外。天河宿殿陰。（四）（五）　春色、山外に浮び、天河、殿陰に宿す。
傳燈無白日。（六）（七）布地有黃金。（八）　傳燈、白日を無す、布地、黃金有り。
休作狂歌老。（九）迴看不住心。（一〇）（一一）　狂歌の老と作るを休めて、迴看せん不住の心。

【字解】【一】牛頭見鶴林　仇氏は寺の名とし、寺は梓州の南七里にあり、此詩は牛頭寺にて鶴林寺を望む詩にて題に誤ありといへり。然れども牛頭は山をさし、鶴林は牛頭寺をさせるものならん、後に「上兜率寺」・「望兜率寺」の二詩あるの例によりてみれば題には誤なからん。佛が涅槃に入りしとき東西の二雙樹、南北の二雙樹、それぞれ合して一樹となりて垂れて佛を覆ひ、その樹慘然として白に變じたり、その色鶴の白きがごとし、故に鶴林と名くと。鶴林は單に寺の意に用ひしなるべし。【二】梯逕　はしごの如くだんだんになれるこみち。【三】繞　紆回してなる。【四】天河　あまのがは。【五】宿殿陰　ごてんのかげにやどる、殿の高きをいふ、これは實にみるに非ず想像にてのぶ。【六】傳燈　佛家は燈を以て法にたとふ、法をつぎつぎに傳へることを傳燈といふ、この寺には代代名僧がつぐとみえたり。【七】無白日　ひるも燈がきえぬ故白日はあれども無きにおなじ。【八】布地有黃金　給孤獨長者が黃金を地に布きて精舍をたてしはなし、已にしばしばみゆ。【九】狂歌老　自己をさす。【一〇】迴看　ふりかへつてみる。【一一】不住心　執着せざる心、悟りのこころ。

【題義】山のうへなる牛頭寺をのぞんだことをのべた詩。この詩は「上牛頭寺」より前にあるべきものに非るか。前の「上牛頭寺」と同じころの作なるべし。

【詩意】牛頭の山なる寺をみると、だんだんばしごのやうなこみちがぐるぐるめぐつておくふかくみえる。春げしきは山の外に浮びいで、夜ならばあまの河もこの寺の佛殿のかげにやどるだらうとおもはれる。ここの住僧は代代法燈を傳へて白日の光りをも無いものあつかひにし、長者は黃金を地面に敷いてこれほどのりつぱなものをたてたのだ。自分もこれから狂歌してゐるおやぢなどになつてゐることをやめて、佛法に歸依して不住心でもふりかへつてみた方がよいとおもふ。

登牛頭山亭子(一)

路出雙(二)林外。亭窺萬(三)井中。
(四)江城孤照日。山谷遠含風。
(五)兵革身將老。關(六)河信(七)不通。
猶殘數行淚。忍對百(八)花叢。

牛頭山の亭子に登る

路は出づ雙林の外、亭は窺ふ萬井の中。
江城、孤にして日に照され、山谷遠く風を含む。
兵革に身將に老いむとす、關河、信、通せず。
猶殘す數行の淚、百花の叢に對するに忍びむや。

【字解】〔一〕亭子　ちん、こやすみ所。〔二〕雙林　雙樹の林、寺をいふ。〔三〕萬井　郭縣の多くの人家。〔四〕江城　涪江にそひし城、梓州の城をいふ。〔五〕兵革　兵亂をいふ。〔六〕關河　關塞河川。〔七〕信　てがみ、たより。〔八〕百花叢　前の「上牛頭寺」に「花濃」とあるとおなじ花なるべし、多くの花のさけるくさむら。

【題義】牛頭山の亭にのぼつてよめる詩。前詩と同時の作なるべし。

【詩意】寺以外にうへの方に路がでる、そこをのぼつて亭について亭から多くの城內の人家をみおろす。城は孤立してゐて日光に照らされ、山谷は遠く風を內部にたくはへてゐるやうである。自分は兵亂のあひだに老いようとしてをる。故鄉とは關河のへだたりがあつて音信は不通である。いままですでに多くの淚をそそいだがまだ二三行ほどの淚はのこつてをる。どうしてこの百花の叢にうちむかふに忍びようか。之にむかへばまた淚をそそぎつくさねばならぬ。

上兜率寺(一)

兜率知名寺。眞(二)如會法堂。
江山有巴(三)蜀。棟(四)宇自齊(五)梁。
(六)庾信哀雖久。周(七)顒好不忘。
(八)白牛車遠近。且欲上慈(九)航。

兜率寺に上る

兜率、知名の寺、眞如、會法の堂。
江上、巴蜀を有す、棟宇、齊梁よりす。
庾信哀しむ久しと雖も、周顒好むこと忘れず。
白牛、車遠近、且慈航に上らむと欲す。

【字解】〔一〕兜率寺　梓州には大小十二の寺あり、北には慧義寺、南には兜率寺、西には牛頭寺、東には觀音寺ありといへり、兜率陀は梵語にして知レ足の義なりと。〔二〕眞如會法堂　眞如の法を領會する堂の義、眞如は圓覺の自性、本、僞妄變易なきものをいふと。（案ずるに起二句は仇氏によりて解きたるも、兜率知二名寺一眞如會二法堂一と讀むも可なるに似たり。）〔三〕有巴蜀　巴蜀の江山を有すること。〔四〕棟宇　むなぎ、やね。〔五〕自齊梁　この寺は隋の開皇中に建てられしとつたふ、作者齊梁といへるは何か據る所あるなるべし、齊梁は六朝の代の名、隋よりふるし。〔六〕庾信　北周の文豪、梁より北にゆきて、南をおもひ「哀江南」の賦を作る、作者之を以て自ら比す。〔七〕周顒　周の字もと何に作れるは誤ならん、周顒は齊梁の時の人、佛敎を好みたり、これも顒を以て自ら比す。〔八〕白牛車　前にみえたり、法華經譬喩品に牛車を以て大乘の法にたとふ、遠近とは「法のところまで達するにみちのりは遠いか近いかわからぬが」の意。〔九〕蘇航　すくひのふね、淸涼禪師の般若經序に、般若者苦海之蘇航とあり、ここは蓋し說法をきくことをさして蘇航に上るといへり。

【題義】兜率寺にのぼりてよめる詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】兜率寺は知名の寺であり、寺の眞如堂は眞如の法を領會する堂である。堂へきてみるとそのながめは巴蜀の江山をわがものとしてゐるし、そのむなぎ・屋根ははやくも齊梁時代からたてられてゐるものである。故鄕をはなれてゐる庾信（自分）はながくかなしみつつあるが周顒（自分）は佛法に對して之を好むの念は忘れたことがない。自分は果して白牛車の大乘にのつてどれほどのみちを行きうるのかしらぬが、まづまづありがたい經文といふおたすけぶねにのぼらうかとおもふのである。

望兜率寺

兜率寺を望む

樹密當山逕。江深隔寺門。
樹密にして山逕に當り、江深くして寺門を隔つ。

霏霏雲氣動。閃閃浪花翻。
霏霏として雲氣動き、閃閃として浪花翻へる。

不復知天大。空餘見佛尊。
復天の大なるを知らず、空しく佛の尊きを見るを餘す。

時應淸盥罷。隨喜給孤園。
時に應に淸盥し罷みて、給孤の園に隨喜すべし。

【字解】〔一〕天大　「老子」に天大・地大・の語あり。〔二〕佛尊　佛は天上天下、惟我獨尊といへり。〔三〕淸盥　きよくたらひの水にて手をあらふ。〔四〕隨喜　喜びて來りしたがふ。〔五〕給孤園　給孤獨がたてた寺、兜率寺をさす。

【題義】兜率寺をのぞんだ詩。これも「上兜率寺」より前にあるべきものかとおもふ。前詩と同時の作ならん。

【詩意】山の逕のところに樹木がこみしげつてをり、寺門をへだてて涪江がふかく横はつてゐる。山の方には霏霏として雲氣が動いてをり、江の方には浪の花がちらちらとひかつてひるがへつてゐる。これをみると天は大きいとはいふもののその大きいことがわからなくなり、かへつていたづらに佛だけが尊いことがわかる樣な氣がする。自分も時としては不淨の手をきよくあらひをはつてこのお寺へ法をきくために隨喜してこようかとおもふ。

甘園

春日清江岸。千甘二頃園。　春日清江の岸、千甘二頃の園。
青雲羞葉密。白雪避花繁。　青雲、葉の密なるに羞ぢ、白雪、花の繁きを避く。
結子隨邊使。開籠近至尊。　子を結びて邊使に隨ひ、籠を開きて至尊に近づく。
後於桃李熟。終得獻金門。　桃李の熟するより後るるも、終に金門に獻せらるるを得。

【字解】【一】甘園　甘は柑の略、みかんをいふ、詩中の千甘の甘もおなじ、柑園は梓州の城南十里にありと。【二】清江　涪江。【三】二頃　一頃は百畝。【四】結子　子は實をいふ。【五】邊使　邊地のつかひ、邊地とは蜀をいふ。【六】開籠　籠の字もと筒に作る、また籠に作るべしとの說あり、みかんをいれしかごをあける。【七】至尊　天子をいふ。【八】金門　金馬門。

【題義】みかんのはたけを見てよめる詩。廣德元年春の作。

【詩意】春のをりすんだ涪江の岸に千本ばかりのみかんをうゑた二百畝のはたけがある。その葉のこんであをあをとしてゐるのには青雲も羞かしがり、その花の繁くついてゐるのには白い雪も避けねばならぬ。これが子を結べばこちらからの使について朝廷の方へもつてゆかれ、かごからだせばもつたいなくも一天萬乘の至尊のおそばにも近づく。このみの熟するのは桃や李よりはおくれるが、けつきよく天子の御門に獻らるることができるのである。（これは自己の境遇をたとへてのべしものとみゆ）

陪李梓州・王閬州・蘇遂州・李果州・四使君登惠義寺

李梓州・王閬州・蘇遂州・李果州・四使君に陪して惠義寺に登る

春日無人境。虛空不住天。　春日無人の境、虛空不住の天。
鶯花隨世界。樓閣倚山巓。　鶯花、世界に隨ふ、樓閣、山巓に倚る。
遲暮身何得。登臨意惆然。　遲暮、身何をか得る、登臨、意惆然たり。
誰能解金印。瀟灑共安禪。　誰か能く金印を解きて、瀟灑共に安禪せむ。

【字解】【一】李梓州　梓州の刺史李某、李の字或は章に作る。【二】王閬州　閬州の刺史王某。【三】蘇遂州　遂州の刺史蘇某。【四】李果州　果州の刺史李某、梓州は今の潼川府、閬州は保寧府、遂州は潼川府遂寧縣、果州は順慶府なり。【五】使君　刺史の敬稱。【六】惠義寺　卽ち慧義寺、梓州の北に在るもの。【七】不住天　循環やまずして四時をなすをいふ。【八】世界　けだしこの寺境をさす。【九】山巓　寺は長平山にありといふ。【一〇】遲暮　晩年。【一一】何得　得る所のものなきをいふ。【一二】惆然　うらみをふくむ貌。【一三】解金印　黄金の印をときすてる、辭職すること。【一四】瀟灑　さらりとした貌。【一五】安禪　おちついて坐禪する。

【題義】李・王・蘇・李・四人の刺史のともをして惠義寺にのぼつた詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】春の日にあたつてだれもをらぬばしよ。そのそらはつねにめぐつて變化しつつあるそら。ここにも鶯や花はそのばしよに應じてあらはれてをり、樓閣は山のいただきによつてたてられてある。自分は晩年になつてゐる身だがこれまで何ものを得てゐるか、なにも得てをらぬ。それでここへのぼ

つてみおろしてみてもこころがうらめしくはればれせぬ。諸君のうちでだれが金印などときすてて、さらりとしてここへきてともに坐禪しようか。そんなものはをらぬか。

數陪李梓州泛江。有女樂在諸舫。戲爲艷曲二首贈李

數李梓州に陪して江に泛ぶ、女樂有り諸舫に在り、戲れに艷曲二首を爲り李に贈る

〔一〕

上客迴空騎。佳人滿近船。　上客、空騎を迴す、佳人、近船に滿つ。

江清歌扇底。野曠舞衣前。　江は清し歌扇の底、野は曠し舞衣の前。

玉袖凌風竝。金壺隱浪偏。　玉袖風を凌ぎて竝び、金壺浪に隱ること偏なり。

競將明媚色。偸眼艷陽天。　競ひて明媚の色を將て、眼を偸む艷陽の天。

【字解】【一】李梓州　李の字或は章に作る。【二】女樂　音樂を爲す女、歌舞の妓をいふ。【三】舫　二つならべた舟をいふ。【四】艶曲　つやつぽいうた。【五】上客　上等のおきやく、おきやくとは妓女よりのことばにて主人李梓州をさすなり。【六】空騎　迎へにきた騎兵をそのままのらずにかへらす。【七】近船　そばのふね。【八】歌扇　歌者のもつうちは。【九】玉袖　うつくしきそで。【一〇】凌風竝　二人でならんで舞ふ、舞ふとき袖が風をしのぐ。【一一】金壺　りつぱな酒壺。【一二】隱浪偏　偏隱浪とおなじ、浪にかくるとは船が高く低く動搖してあるときは浪にかくるるかとおもはるること多きをいふ。玉袖・金壺・の二句は諸說區區たれども余の見は上述のごとし。【一三】明媚色　めもとすずしく人にこびるやうなかほつき。【一四】偸眼　よこめで人をみる。【一五】艷陽天　はるのやうきなそら。

【題意】たびたび李梓州のともをして涪江にうかんだ。が、いろいろの舫に歌舞の妓がのつてゐる、それでたはぶれにつやつぽい曲二首を作つて李に贈つた。廣德元年春、梓州にての作。

【詩意】上客たる主人李君はせつかくきた騎兵をからつぽにかへされた、そしてそばの船には佳人がいつぱいのつてゐる。彼の女の歌扇のましたには江の水がきよくながれ、彼の女の舞衣のまへには田野がひろくよこたはつてゐる。風をしのいで幾人もの舞者がならんで袖をひるがへし、席上のさかつぼは船がうごくためとかく浪にかくるるかとみえがちである。さうして彼の女らはきそうて明媚なかほつきで、この陽氣なはるぞらによこめに人をぬすみみつつある。

〔二〕

白日移歌袖。青霄近笛床。　白日、歌袖に移る、青霄、笛床に近し。

翠眉縈度曲。雲髻儼成行。　翠眉縈りて曲を度し、雲髻儼として行を成す。

立馬千山暮。迴舟一水香。　馬を立つれば千山暮る、舟を迴せば一水香し。

(一三)使君自有(一四)婦。莫學(一五)野鴛鴦。　使君、自から婦有り、野鴛鴦を學ぶ莫れ。

【字解】【一】移歌袖　妓がうたひつつあるあひだに時間のたつをいふ。【二】青霄　あをぞら。【三】近笛床　笛をのせる臺を笛床といふ、これは笛聲たかくのぼりて天にちかづくことを逆に天の方が笛床に近しといへるなり。【四】翠眉　あをくかいたまゆ。【五】縈　めぐる、これは數人にてくるま座を爲すをいふなるべし。【六】度曲　甲の調子から乙の調子へふしをうつす、度は渡と同じ。【七】雲鬟　くもがたのびんのけ。【八】儼　ぎやうぎよく。【九】成行　行列を爲す、これは舞者をいふならん。【一〇】立馬千山暮　これは第一首の「空騎」とおなじ、騎兵は迎へにきたがただかへされたから馬を立ててゐると多くの山山は暮れてしまふ。【一一】迴舟　ふねをこぎもどす。【一二】一水香　美人滿船ゆゑ涪江の川全體がかんばし。【一三】使君自有婦　樂府「陌上桑」に、羅敷といふ女がある太守によめになれといはれしとき之を拒絕した語なり、使君はここは李梓州をさす。【一四】婦　つま。【一五】野鴛鴦　をしどりは雌雄野にてねむる。

【詩意】歌妓が袖をうごかすうちに時間はうつり、笛床より笛の音がのぼるところあをぞらはそれにむかうて垂れてゐる。あをくかきまゆをした女が圓陣をつくつて節うつしをなし、雲鬢の美人が儼然と列をなして舞ふ。空騎は馬を立ててゐるまに山は暮れる、いざとて舟をこぎもどせば滿船香しきかとあやしまれる。李君にまをすが、あなたはおくさまをもつておいでになる、どうか野らにすんでゐる鴛鴦のまねなどなさらぬやうに。

送何(一)侍御歸(二)朝　【原注】李梓州泛舟筵上作(李は一に章に作る)

何侍御が朝に歸るを送る　【原注】李梓州舟を泛ぶ、筵上にて作る

(三)舟楫(四)諸侯餞。(五)車輿(六)使者歸。　舟楫、諸侯餞す、車輿、使者歸る。

山花(七)相映發。(八)水鳥自孤飛。　山花相映じて發く、水鳥自から孤飛す。

春日(九)垂霜鬢。(一〇)天隅(一一)把繡衣。　春日、霜鬢垂る、天隅、繡衣を把る。

(一二)故人(一三)從此去。(一四)寥落(一五)寸心違。　故人此れより去る、寥落、寸心違ふ。

【字解】【一】何侍御　侍御史何某。【二】歸朝　朝廷へかへる。【三】舟楫　舟や楫で江にうかぶ。【四】諸侯　李梓州をさす。【五】車輿　くるま、かご、陸路ののりもの。【六】使者　侍御史をいふ。【七】相映　繡衣とうつろふをいふ。【八】水鳥　「さぎ」の類、暗にみづから比す。【九】垂霜鬢　しもおきたるびんのけをたれる、自己をいふ。【一〇】天隅　天のすみ、天涯といふ類、梓州の地をさす。【一一】把繡衣　繡衣はしばしば前にみゆ、御史のきもの、把とは別れを惜みて之を手にとるなり。【一二】故人　何侍御。【一三】從此　此の時から。【一四】寥落　さびしきさま。【一五】寸心違　事、我が心とたがふ、自己は歸りたくおもひつつかへれぬなり。

【題義】侍御史の何某が朝廷へかへるのを送つた詩。梓州の刺史李が涪江に舟をうかべて送別の宴をひらいた、その宴席での作である。廣德元年春の作。

【詩意】諸侯の身分である李が舟楫でもつて江ではなむけする。御史である使者何某は陸を車でかへるのである。途中では山中の花が侍御の衣にうつろうてひらいてゐるだらう。いまここでは水鳥がひとりでにただひとつ飛んでゐる。自分はこの春日にあたり霜おいた鬢の毛を垂れて、天のすみで旅立つ侍御の繡衣を手にとつて別れを惜しむ。おなじみの君はこれからたち去るが、自分はさびしくてお

もふことがくひちがつてしまつた。

（一）江亭送（二）眉州辛（三）別駕昇之。得蕪字

江亭にて眉州の辛別駕昇之を送る、蕪の字を得たり

柳影含雲（四）幕。江波近酒壺。　柳影、雲幕を含む、江波、酒壺に近し。
（五）異方驚會面。（六）終宴（七）惜征途。　異方、會面に驚く、終宴、征途を惜しむ。
（八）沙晩（九）低風蝶。天晴喜浴凫。　沙晩れて風蝶低れ、天晴れて浴凫喜ぶ。
別離傷老大。（一〇）意緒日（一一）荒蕪。　別離、老大を傷む、意緒日に荒蕪す。

【字解】【一】江亭　閬州の江亭ならんといふ。【二】眉州　地名、成都の西南にあり。【三】辛別駕昇之　別駕の官たる辛昇之。【四】雲幕　たかくはつたまく。【五】異方　他鄉。【六】終宴　宴の終るとき。【七】惜征途　たびぢにゆくことををしむ。【八】沙晩　江べりの沙がくれかかる。【九】低風蝶　低はひくくとぶこと、風蝶は風をうけたてふてふ。【一〇】意緒　こころ。【一一】荒蕪　あれてくさだらけになる。

【題義】閬州の江亭で眉州の別駕である辛昇之を送つた詩。廣德二年閬州にての作ならん。

【詩意】柳のかげは高く張つた幕をつつまんばかりにしだれかかり、江の波は酒つぼをならべたそばにわきたつてゐる。こんな他鄉で君に面會したことを驚くとともに宴はてて君がすぐたびぢにのぼることを惜しくおもふ。もはや江べりの沙はらもくれかけて風をうけた蝶蝶がひくくとび、天はすつかり晴れて浴してゐる凫がよろこんでゐる。別れをしながらまた自分のとしよつたことをもかなしみいたむ、これではこころは日日あれはててゆくのみである。

行次（一）（二）鹽亭縣。聊題（三）四韻。奉（四）簡（五）嚴遂州・蓬州・兩使君・（六）咨議諸昆季

行きて鹽亭縣に次り、聊か四韻を題し、嚴遂州・蓬州の兩使君・咨議諸昆季に簡し奉る

馬首見鹽亭。高山（七）擁縣青。　馬首、鹽亭を見る、高山、縣を擁して青し。
雲溪花淡淡。春郭水冷冷。　雲溪花淡淡たり、春郭水冷冷たり。
全蜀多名士。嚴家（八）聚德星。　全蜀、名士多し、嚴家、德星聚まる。
（九）長歌意無極。好爲（一〇）老夫聽。　長歌、意極まり無し、好し老夫が爲に聽け。

【字解】【一】次　やどる。【二】鹽亭縣　梓州の東九十里にあり。【三】四韻　この八句の五言律詩をさす。【四】奉簡　てがみとしてやる。【五】嚴遂州蓬州兩使君　遂州の刺史嚴某と、蓬州の刺史嚴某と。遂州は今潼川府に屬す、蓬州は順慶府に屬す。【六】咨議諸昆季　昆季は兄弟をいふ、咨議は官名、鹽亭の人嚴震、字は遐聞といふもの肅宗の朝に王府の諮議參軍となる、其の同族嚴礪なるもの後に德宗の朝に山南西道の節度使となる、咨議昆季とは震・礪・をさすならんといへり、遂州・蓬州・の刺史の名は詳ならず。【七】擁　だきかかへる。【八】聚德星　漢末に陳寔といふもの子姪とともに荀淑父子のところにいたる、時に德星聚まる。太史奏す、五百

里内に賢人の聚まるあらんと。これ賢人をさしていふ。【九】長歌　ながくふしつけてうたふ。【一〇】老夫　自己をさす。

【題義】梓州から東へとでかけて鹽亭縣にやどり、この四韻八句の詩をつくつて嚴遂州・嚴蓬州のふたりの刺史・諸議參軍をしてゐる嚴氏の諸兄弟にてがみとしてやつた詩。廣德元年鹽亭にての作。

【詩意】自分ののつてゐる馬の首さきに鹽亭縣が見られる、縣は高い山に青くかこまれてゐる。やうやくちかづいてみると雲のゐる溪にはあはく花がさいてをり、春の時節の城郭には水が冷冷とおとたてながれてゐる、いつたい蜀中全體には名士が多いが、ことに嚴氏の家には賢人があつまつてをる。自分はいま極まりなき意をこめて長歌するが、どうかそのうたをわたしのためにきいてくれたまへ。

倚杖（一）　【原注】鹽亭縣作

杖に倚る　【原注】鹽亭縣にて作る

看花雖郭内。倚杖即溪邊。
花を看るは郭内なりと雖も、杖に倚るは即ち溪邊なり。

山縣早休（二）市。江橋春聚（三）船。
山縣、早く市を休む、江橋、春、船を聚む。

狎鷗（四）輕（五）白浪。歸雁（六）喜青天。
狎鷗、白浪を輕んじ、歸雁、青天を喜ぶ。

物色（七）兼（八）生意（九）。淒涼（一〇）憶去年（一一）。
物色と生意と、淒涼、去年を憶ふ。

【字解】【一】「倚杖」題の二字は詩中の倚杖の二字をぬきだして用ひしに止まる。【二】休市　交易をやめる。【三】聚船　民の多きなり。【四】狎鷗　なれたるかもめ。【五】輕　なんともおもはぬ。【六】歸雁　北へかへる「かり」。【七】物色　景物のさま。【八】兼「と」。【九】生意　生活しつつあるこころもち、鷗雁についていふ。【一〇】淒涼　かなしきさま。【一一】憶去年　去年亂を避けるためここをとほりしなり、そのときは物色生意ともにことしほどのどかではなかりしなり。

【題義】鹽亭縣の溪邊で杖によつてながめたときのことをよめる詩。前詩とおなじく廣德元年春、梓州より鹽亭縣にいたりしときの作。

【詩意】花を看たのは郭の内であつたが、杖によつてながめるのは溪流のほとりである。ここでみると山間の縣であるだけに早く貨物の交易をやめてしまひ、江の橋のところには春にあたつて多くの民船があつまつてゐる。なれたかもめは平氣で白浪のあるところにうかび、北へかへる雁ははれたあをぞらをよろこんで飛んでゆく。いまはかやうにのどかであるが、物の樣子といひ、またその生きごこちといひ去年はどんなであつたか、自分はものがなしく去年のさまをおもひだすのである。

惠義寺送王少尹（一）赴成都得峰字

惠義寺にて王少尹が成都に赴くを送る、峰の字を得たり

苒苒（二）谷中寺。娟娟（三）林表峰。
苒苒たり谷中の寺、娟娟たり林表の峰。

(四)闌干上處遠。(五)結構坐(六)來重(七)。　闌干上る處に遠く、結構坐し來れば重なる。
(八)騎馬行春徑。(九)衣冠起(一〇)暮鐘。　馬に騎つて春徑に行き、衣冠、暮鐘に起く。
(一一)雲門青(一二)寂寂。此別惜(一三)相從。　雲門青くして寂寂たり、此の別、相從ふことを惜しむ。

【字解】〔一〕王少尹　成都府少尹王某。〔二〕苒苒　草の盛なる貌。〔三〕娟娟　うつくしきさま。〔四〕闌干　石段路のわきの「らんかん」。〔五〕結構　石段のくみたて。〔六〕坐來　坐とあれどもそれをふむことなるべし。〔七〕重　級の多きをいふ。〔八〕騎馬　賓主ともにいふ。〔九〕衣冠　衣冠をつけたりつぱな役人、主として王少尹についていふ。〔一〇〕起暮鐘　くれのかれの音におどろいて起ちあがる。〔一一〕雲門　雲のゐる絕巘、寺をさす。〔一二〕青　暮色をいふ。〔一三〕惜相從　もすこしともどもに居たしとおもふなり。

【題義】惠義寺において成都府少尹王某が成都に赴任するのを送つた詩。廣德元年春、梓州にての作なるべし。

【詩意】草のしげつた谷の中の寺。うつくしく林のうへにあらはれてゐる峰。路にある石段のらんかんはのぼつてゆくとなかなか遠く、それをふまへてゆくとくみたてはよほどの級層がかさなつてゐる。共に馬にのつて春のこみちをあるいてかたりあふうちに、いつしか夕暮の鐘がなりだすので官服をきたものはおどろいてたちあがる。雲門も暮色が青くとざしてひつそりとする。このわかれはまだなごりがつきぬ、もすこしいつしよにゐたいものだとをしくおもはれる。

惠義寺園送辛員外。　惠義寺の園にて辛員外を送る

朱櫻此日垂朱實。　郭外誰家負郭田。　萬里相逢貪握手。
高才仰望足離筵。
朱櫻此日朱實垂る、郭外誰が家ぞ負郭の田。萬里相逢うて握手を貪る、高才仰望離筵足る。
此の篇、及び次の「又送」の篇は卞圜・吳若・黃鶴の本にありとのことなるが恐くは贋作ならん。解釋を省略す。

又送　又送る

雙峰寂寂對春臺。　萬竹青青照客杯。　細草留連侵坐軟。
殘花悵望近人開。　同舟昨日何由得。　泣馬今朝未擬迴。
直到綿州始分首。　江邊樹裏共誰來。
雙峰寂寂春臺に對す、萬竹青青客杯を照らす。細草留連すれば坐を侵して軟かに、殘花悵望すれば人に近づいて開く。同舟昨日何に由りてか得む、泣馬今朝未だ迴らむと擬せず。直ちに綿州に到りて始めて首を分つ、江邊樹裏誰と共にか來らむ。

（一）巴西驛亭觀江漲（二）、呈竇（三）十五使君二首

巴西の驛亭にて江漲を觀、竇十五使君に呈す。二首

〔一〕

（四）宿雨南江（五）漲。波濤亂（六）遠峰。
（七）孤亭凌噴（八）薄。萬（九）井逼春容（一〇）。
（一一）霄漢愁（一二）高鳥。泥沙困（一三）老龍。
（一四）天邊同（一五）客舍。攜我豁心胸。

〔一〕

宿雨、南江漲る、波濤、遠峰に亂る。
孤亭、噴薄を凌ぐ、萬井、春容たるに逼まる。
霄漢、高鳥愁へ、泥沙、老龍困す。
天邊、客舍を同じくす、我を攜へて心胸を豁ならしむ。

【字解】〔一〕巴西驛亭　巴西は綿州をさす。〔二〕江漲　涪江のみなぎり。〔三〕竇十五使君　某州の刺史竇某なり、竇はここへ客寓しをるものにて此地の刺史には非るなり。〔四〕宿雨　まへのばんからの雨。〔五〕南江　城南の江水。〔六〕亂遠峰　波濤も峰のごとくみゆるゆゑ遠方の峰とはどれがまことの峰かとまがふ。〔七〕孤亭　卽ち江亭。〔八〕噴薄　水氣のわきたつさま。〔九〕萬井　城中の人家をいふ。〔一〇〕春容　水のぶつつかるこゑのさま。〔一一〕霄漢　あをそら、あまのがは。〔一二〕愁　水勢におそれてうれふる。〔一三〕困　水がでて安居を失はんとす、故に困す。〔一四〕天邊　天のはて。〔一五〕同客舍　ともに客舍ずまひをしてゐる。客寓の身なるをいふ、同一家屋に住むにはあらず。

【題義】巴西すなはち綿州の驛亭で江水のみなぎるをみて竇使君にたてまつつた詩。廣德元年春、綿州にての作。

【詩意】前晩からの雨で南の江が出水になり、波濤がわきたち遠方の峰とはどれがまことの峰かわからぬほどになつた。この亭はその水のわきたつてゐるところをしのいで高處にあり、ここでみると城中萬家はとどろく水勢にごくくつついてゐる。そらでは高くとんでゐる鳥も心配をし、泥沙では老龍も居處を失はんとしてこまつてゐる。竇君は自分と天涯に同じく客寓してゐる人であつて、自分をつれてこの水のありさまをみせてくれたので自分の胸はひろびろとした樣な感がある。

〔二〕

轉驚波作（一）惡。卽恐岸隨流。
（二）賴有盃（三）中物。還同（四）海上鷗。
（五）關心小剡縣。傍（六）眼見揚（七）州。
爲接（八）情（九）人飮（一〇）。朝來減片（一一）愁。

〔二〕

轉驚く波の惡を作すに、卽ち恐る岸の隨つて流れむことを。
賴に盃中の物有り、還海上の鷗に同じくす。
關心、剡縣を小とし、傍眼、揚州を見る。
情人の飮に接するが爲に、朝來、片愁を減ず。

【字解】〔一〕作惡　あれること。〔二〕賴　よる、おかげ、「幸に」とよむを便とす。〔三〕盃中物　酒をいふ。〔四〕同　同じく居るをいふ、「列子」の海上の人鷗鳥を好むものありて之となれゐたりとの事を用ふ。〔五〕關心小剡縣　關心はこころにかけること、剡縣は今浙江省紹興府嵊縣、山水の美を以て稱せらる、「小とす」とは之を重くみぬをいふ。〔六〕傍眼　よそめにみる、これも輕視することなり。〔七〕揚州　大江の經る所にして水勢壯なるところ。〔八〕接　接受する。〔九〕情人　有情の人、なさけあるひと、竇をさす。〔一〇〕飮　さけをのませること。〔一一〕片愁　一片の愁心。

【詩意】波がこんなに猛烈な勢をたくましくするにはいよいよ驚かれる、岸がいまにも水勢に隨つて流れさりはせぬかと氣づかはれる。幸に盃中の酒があり、また海上（水上）の鷗となかまになつてあそんでゐる。この水勢をみては、ひごろ氣がかりにしてゐた剡縣をも小さしとしてみる氣になり、揚州などもよそめにみる氣になる。さうして情愛ある主人の酒のおもてなしをうけたため、自分はけさから平生一片の愁心が減じてしまつた。

又呈竇使君

又竇使君に呈す

向晩波微綠。連空岸却青(一)。　晩に向つて波微しく綠なり、空に連りて岸却つて靑し。

日兼(二)春有暮。愁與醉無醒。　日と春と暮るる有り、愁、醉と醒むること無し。

漂泊猶杯酒。踟躕(三)此驛亭。　漂泊にも猶杯酒、踟躕すこの驛亭。

相看萬里外。同是一浮萍(四)。　相看る萬里の外、同じく是れ一浮萍。

【字解】〔一〕青　暮色をいふ。〔二〕兼　「と」。〔三〕踟躕　ためらふ貌。〔四〕浮萍　うきたる水くさ、ただよふをいふ。

【題義】また竇使君にたてまつつた詩。前の「觀江漲」の詩と同時の作。

【詩意】ひぐれに向つて波がすこし綠になつた、空につづいて岸の方はかへつて靑みをおびてきた。太陽と春とには暮れるといふことがあるが、自分の愁と醉とには醒めるといふことがない。漂泊の境遇でもやつぱり杯酒を手にして、この驛亭でぐづぐづしてゐる。おたがひは萬里のはてで面會して、おなじやうに浮き草の身であるのだ。醉つてくらすのも不思議ではあるまい。

陪王(一)漢州留杜(二)綿州(三)泛房公西湖(四)

王漢州が杜綿州を留めて房公の西湖に泛ぶに陪す

舊相(五)恩追(六)後。春池賞不稀(七)。　舊相、恩追の後、春池、賞稀ならず。

闕庭(八)分(九)未到。舟楫有光輝(一〇)。　闕庭未だ到らざるを分とす、舟楫、光輝有り。

豉化(一一)蓴(一二)絲(一三)熟。刀鳴鱠(一四)縷(一五)飛。　豉化して蓴絲熟し、刀鳴りて鱠縷飛ぶ。

使君(一六)雙(一七)皂蓋。灘(一八)淺正相依(一九)。　使君の雙皂蓋、灘淺くして正に相依る。

【字解】〔一〕王漢州　漢州の刺史王某、漢州は成都の東北にあり、綿州への途中にあり。〔二〕留　ひきとめること。〔三〕杜綿州　綿州の刺史杜某。〔四〕房公西湖　この湖は漢州にあり、上元元年八月に房琯漢州の刺史に任ぜられてこの湖をうがつ、一に西湖といふと。〔五〕舊相　もとの宰相、房琯をさす、琯は宰相をやめられて漢州へ刺史としてだされしなり。〔六〕恩追　琯は上元元年八月漢州刺史に任ぜられ、寶應二年（卽ち廣德元年）四月に特に刑部尙書に進めらる。此詩は春のことをいひたるを以て之を見れば四月以前に召されしなり、恩追とは一たび地方へだしたものをあとからおひかけて恩典を加へられしをいふ。〔七〕賞不稀　たびたび春

池のけしきを賞した。蓋し王漢州の宴に陪せしならん。【八】闕庭　天子のごもん、おには。【九】分未到　そこへゆけぬことを本分とかんがへてゐる。【一〇】有光輝　王漢州の舟の宴ゆゑ之をほめていふ。【一一】豉　みそまめ、じゆんさいにつけてたべるものなり。【一二】化　できあがること。【一三】蓴絲　ほそくて絲のやうな「じゆんさい」。【一四】刀　料理につかふかたな。【一五】鱠　ほそづくりの「なます」、いきづくり。【一六】使君　刺史をさす。【一七】雙皂蓋　一對のくろき車蓋、一對とは王と杜との二人をいふ。【一八】瀨淺　水流のあさきところ、けだしそこに舟をとどむるならん。【一九】相依　車蓋相依る、依るとはひつつきあふこと、なかのよきことをいふ、いかに瀨淺くとも水中にては車蓋よりあふはずなきも車蓋をいふは單に刺史の身分をいふものにて交情の密なるを形容するなり。

【題義】漢州の刺史王君が綿州の刺史杜君をひきとめて舟を房公のうがつた西湖に泛べてさかもりをしたとき、その席に加はつてよめる詩。廣德元年春、漢州に至りしときの作。

【詩意】もとの宰相房公が中央へお召しかへしになつてからも自分はこの春の池ではたびたび風景を賞した。自分は朝廷の方へゆけぬのはあたりまへだとかんがへてゐる。ここで舟あそびの宴にあふことはまことに光輝あることだ。けふは、みそもできてじゆんさいも熟してたべどきであり、庖刀の音がして飛ぶがごとくさかなのほそづくりがこしらへられる。さうしてあさせのところの舟中でふたりの刺史どのがくつつきあうてしたしく酒をのみかはされる。

得房(一)公池鵞(二)

房公が池の鵞を得たり

房相西池鵞一群。　房相が西池の鵞一群、

眠沙泛浦白於雲。　沙に眠り浦に泛び雲よりも白し。

(三)鳳凰池上應回首。　鳳凰池上應に首を回らすべし、

(四)爲報(五)籠隨王右軍。　爲に報ぜよ籠は王右軍に隨へりと。

【字解】【一】房公池　漢州の西湖をさす。【二】鵞　がてう。【三】鳳凰池　晉の荀勗が故事、已にみゆ。池は中書省をさす、房琯はさきに中書省にあり、故に之を用ひて琯のことをいふ。【四】爲報　わがために房琯につげよ。【五】籠隨王右軍　王右軍は晉の右軍內史王羲之なり、羲之は能書を以て著はる、性、鵞を好む、山陰の曇禳村に道士ありよき鵞十あまりを養ふ、羲之往て之をなにかと易へんことを求む、道士いふ君若しよく道德經兩章を書せばすべて之をたてまつらんと、羲之とどまること半日、爲めに寫し畢り、鵞を籠にして歸る。詩句の籠は鵞をいれたかごをいふ、隨とは王右軍のところへいつたといふこと、王右軍は作者自ら比す。

【題義】房公がうがつた漢州西湖の鵞を得たことについてよめり。廣德元年漢州にての作。

【詩意】房公の西池のひとむれの鵞鳥。それは沙のうへに眠つたり、浦べにうかんだりして雲よりも白い。房はこの鳥とはなれて都へゆかれたが、都の中書省の鳳凰池でもつてさだめて漢州の方へかうべをむけてこの鳥のことをかんがへてをらるるであらうが、どうぞわたしのために鵞鳥をいれた籠は王右軍（作者自己）の方へいつたとつげてもらひたい。

答楊梓州

楊梓州に答ふ

悶到房公池水頭。坐逢楊子鎭東州。却向青溪不相見。迴船應載阿戎遊。

悶して到る房公池水の頭、坐ながら逢ふ楊子東州に鎭するに。却つて青溪に向つて相見ず、迴船應に阿戎を載せて遊ぶべし。

此篇古人の解にも服する能はず。余も亦私見なし。疑はしきを闕き、賢者の教を待つ。

舟前小鷺兒（一）　【原注】漢州城西北角官池作

舟前の小鷺兒　【原注】漢州城の西北の角の官池にて作る

鷺兒黃似酒。對酒愛新鵞。
鷺兒黃なること酒に似たり、酒に對して新鵞を愛す。

（二）引頸嗔船逼。（三）無行（四）亂眼多。
頸を引て船の逼るを嗔り、行無くして眼を亂ること多し。

（五）翅開遭宿雨。力小困滄（六）波。
翅開きて宿雨に遭ひ、力小にして滄波に困す。

（七）客散（八）層城暮。狐狸奈若（九）何（一〇）。
客散す層城の暮、狐狸、若を奈何。

【字解】〔一〕鷺兒　がてうのこども。〔二〕引頸　えりくびをさしのべること。〔三〕無行　行は行列、無行とは次第もなきこと。〔四〕亂眼　めさきをみだる。〔五〕翅開遭宿雨　翅開は遭宿雨の結果なり、前夜の雨にであうたために翅がひらける。〔六〕滄波　ひろき水のなみ。〔七〕客散　舟遊の人人のちらばること。〔八〕層城　漢州のたかいしろ。〔九〕若　汝、狐狸をさしていふ。〔一〇〕奈何　いかにせん、若をいかにせんを奈若何とかき奈と何のあひだに「若」をいれるなり。

【題義】房公湖にあそんで舟の前にゐる鷺鳥のこどもをみてよめり。廣德元年漢州にての作。

【詩意】鷺鳥のひなは黃いろなことは酒の樣だ。酒にむかうては酒に似てゐるわかびなはことにかはいい。ひなはえりくびをさしのべて船がちかよるのをいかつたり、行列もなくあるきたててみる人のめさきをみだすことが多い。前夜の雨にあうては翅がくつつかずにあいてをり、まだ力がすこししかなくて波にぶつつかるとこまつてゐる。城がくれかかると舟遊びの人人はみな散り散りにかへつてしまふ。このとき狐狸がでるがそいつをどうしようか、こまつたものだ。

官池（一）春雁二首

官池の春雁。二首

〔一〕

自古稻（二）粱多不足。
古より稻粱多く足らず、

至今（三）鸂鶒亂爲群。
今に至りて鸂鶒亂れて群を爲す。

且休悵望看（四）春水。
且悵望春水を看るを休めよ、

【字解】〔一〕官池　即ち房公湖〔二〕稻粱　いれ、よきいね。〔三〕鸂鶒　をしどり。〔四〕看春水　春の水をみては雁は北へかへらればな

更恐歸飛隔暮雲。　更に恐る歸飛暮雲に隔てられむことを。

らぬ。【五】隔暮雲　夕ぐれの雲にへだてらるるをいふ、これその里程のとほきをいふ。

【題義】房公湖の春の雁をみてよめり。自己の境遇を托したるなり。前詩とおなじく廣德元年春の作ならん。

【詩意】むかしから稻粱のたべものは足らぬがちのものだ、それに今日に至つても「をしどり」ががやがや羣をなしてをる。どうして雁のたべるものがあるものか。まあまあうらめしくながめて春の水を看、ここからはなれたくない樣な樣子をすることをやめよ、ぐつぐづしてゐたならかへりに飛ぶと途中で日がくれ、雲にへだてらるるといふ恐れがあるぞ。

〔二〕

青春欲盡急還鄉。　青春盡きむと欲す急に鄉に還らむ、
紫塞寧論尙有霜。　紫塞寧ぞ論せむ尙霜有るを。
翅在雲天終不遠。　翅在り雲天終に遠からず、
力微矰繳絕須防。　力微なり矰繳絕　須らく防ぐべし。

【字解】【一】紫塞　紫色土にて築きたるとりで、山西太原府雁門關下に在り。【二】有霜　北方は寒し、故に春にあたりても霜あり。【三】翅在　つばささへ存在すれば。【四】雲天　雲のあるそら。【五】矰繳　いぐるみ、鳥を射る器械。【六】絕　はなはだ。【七】防　防禦。

【詩意】春も盡きかけた、いそいで故鄉にかへらう。北のかた紫塞の方にはまだ霜があるが、そんなことは論するにおよばぬ。翅さへ存在してゐれば雲のゐるそらも結局は遠いといふことは無い。ただ飛ぶ力がすこしで弱いからいぐるみに射おとされることは十分氣をつけて防がねばならぬ。

投簡梓州幕府兼簡韋十郎官

梓州の幕府に投簡し、兼ねて韋十郎官に簡す

幕下郎官安穩無。　幕下の郎官安穩なりや無や、
從來不奉一行書。　從來、奉せず一行の書。
固知貧病人須棄。　固知る貧病、人の須らく棄つべきを、
能使韋郎跡也疎。　能く韋郎をして跡也疎ならしめむや。

【字解】【一】投簡　てがみとしてやる。【二】幕府　州の幕僚。【三】韋十郎官　郎の官なる韋某。【四】幕下郎官　これはひろく州の幕僚たる郎官の人人をさす。【五】安穩　穩を一に隱に作る、安穩はおだやか、無事。【六】無　いなや。【七】不奉　奉とは先方の書をうけるをいふ。【八】書　てがみ。【九】貧病　びんばふと病氣、作者自己をいふ。【一〇】能使　能の字反語としてよむ。【一一】韋郎　韋十をさす。【一二】跡也疎　跡は行ひをいふ、也は亦なり、疎は疎音、こちらとはとほざかるをいふ。

【題義】梓州の幕府にゐる人人のところへてがみとしてやり、兼ねて韋某にてがみとしてやつた詩。廣德元年漢州にての作。

【詩意】そちらの幕下の郎官諸君、諸君は無事であるかどうか。これまで諸君から一行の手がみの文をもらつたことがない。自分は貧にしてかつ病めるものであるから人から棄てらるべきものだといふことはもとより知つてゐるが、韋郎までをも疎音にさせるといふことはどうしてありうるか、これはできぬことゝおもふ。

(一)漢川。(二)王大錄事宅作
漢川の王大錄事が宅にて作

(三)南溪老病客。相見下(四)肩輿。　南溪の老病客、相見て肩輿より下る。
(五)近髮看(六)烏帽。(七)催蓴煮白魚。　髮に近きて烏帽を看、蓴を催して白魚を煮る。
宅中平岸水。身外滿牀書。　宅中平岸の水、身外滿牀の書。
憶爾(八)才名(九)叔〔寂〕。(一〇)含悽意(一一)有餘。　憶ふ爾が才名の叔〔寂〕たるを、含悽、意餘り有り。

【字解】〔一〕漢川　仇氏は漢川とし漢川は漢中なりとしてときたり、然れども此詩は郭知達本に見え、郭本には川を州に作れり、川は州の誤なるべし、余は漢州としてとく。〔二〕王大錄事　大は長男をいふ、この人は王氏の長男ゆゑ大といふ、錄事は官名、錄事參軍をいふ、王大錄事とは漢州の錄事の官なる王某、作者、詣王錄事許修草堂貲詩あり、かの王錄事と同一人なるべし。〔三〕南溪老病客　作者自己をいふ、南溪とは成都の浣花溪をいふ、そこに草堂を營くゆゑに南溪の客といふ。〔四〕肩輿　人のかたでかつぐこし。〔五〕近髮　作者のかみの毛にちかよる。〔六〕看烏帽　くろきばうしをみる、あたまに白髮のあるなしを注意してみることをいへり。〔七〕催蓴　じゆんさいをだせと催促する。〔八〕爾　汝、王錄事をさす。〔九〕才名叔　舊解に叔とは尊者の稱なりとし、王は作者より尊位のものゆゑかくいへりと爲せり。しかし「才名の叔」とはきこえがたき語法ならずや。余は叔は寂の誤ならんと考ふ、今寂としてとく、才名寂とは才名世間に聞ゆべきにきこえず寂寞たるをいふ。〔一〇〕含悽　ものがなしさをふくむ。〔一一〕有餘　十分にありすぎる。

【題義】漢州の錄事王某が宅にて作りし詩。廣德元年の作。

【詩意】南溪の客で老病である自分は主人をたづねてきてかごからおりて面會した。主人はわたしの頭髮にちかよつて烏帽をながめ（わたしのしらがを氣にし）、家のものには蓴菜を催促し、白い魚を煮させて肴としてもてなしてくれる。主人の宅中は岸と平になるばかりの川水のそばであり、からだを容れる以外は書架ぢういつぱいの書物である。これほどのおまへがさつぱり世間に才名のきこえぬはどういふものだ、自分はそれをおもうてかなしさを含むこころが十分にありあまるほどである。

(一)短歌行。送(二)祁錄事歸(三)合州。因寄(四)蘇使君
短歌行、祁錄事が合州に歸るを送り、因つて蘇使君に寄す

前者途中一相見。　前者途中一たび相見る、
(五)人事經年(六)記君面。　人事經年君が面を記す。

〰〰

【字解】〔一〕短歌行　古樂府の題に長歌行・短歌行・あり、短歌はふしみじかくうたふ。〔二〕祁錄事

錄事の官鄙某。【三】合州　今重慶府の北部にある州の名、ここには涪江と他の江とが合流す。【四】蘇使君　合州の刺史蘇某。【五】人事經年　幾年か人事にまぎれたがの意。【六】記　記憶する。【七】後生相勸　後生はわかもの、後輩をいふ、相勸とはこちらからその者に向て勸奬の言を爲すなり。「おまへは前途有望だから勉強せよ」などいふなり。【八】寂寥　さびし、人物乏しきをいふ。【九】君　鄙をさす。【一〇】長才　他人にまさつた才。【一一】不貧賤　富貴となるべきをいふ。【一二】起柂　かぢをおこす、舟を漕ぎだすこと。【一三】春江　春時の涪江。【一四】幸爲　「爲めに」は「我がために」の意。【一五】賢府主　かしこい御主人、蘇使君をさす、刺史は錄事の長官なり。【一六】江花未盡　春、花の散りきらぬうちに。【一七】江樓　合州の江邊の樓。

(七)後生相勸何寂寥(八)。　後生相勸むる何ぞ寂寥なる、
(九)君有長才(一〇)不貧賤(一一)。　君長才有り、貧賤ならず。
君今起柂(一二)春江(一三)流。　君今柂を起す春江の流、
余亦沙邊具小舟。　余も亦沙邊に小舟を具ふ。
(一四)幸爲達書賢府主(一五)。　幸に爲に書を達せよ賢府主、
(一六)江花未盡會江樓(一七)。　江花未だ盡きざるに江樓に會せむ。

【題義】みじかくうたふうた。之を作つて錄事祁君が合州へかへるのを送り、ついでに合州の刺史たる蘇君に寄せた。廣德元年春、梓州にての作。

【詩意】君とはこのまへ途中でいちどおめにかかつたが、そののち久しく人事にとりまぎれてゐたがいま逢うてみるとやはり君のかほをおぼえてゐる。ちかごろのわかものには之を勸奬すべきほどの人物がなくてさびしいのだが、君は人なみすぐれた才をもつてゐるからいつまでも貧賤でゐることはない、きつと富貴の身分になるだらう。』君はこれから舟をこぎだして春の涪江の流れをくだるが、自分もかはの沙はらに小舟を具へてゐる、(それでかはをくだらうとおもうてゐるのだ)。君はあちらへいつたら幸にわたしのためにてがみを御主人(蘇君)へとどけてもらひたい、その意味は江べりの花が散つてなくならぬうちにそちらの江樓で會合しようといふのだ。

送韋郎司直歸成都(一)

韋郎司直が成都に歸るを送る

(二)竄身來蜀地。同病得韋郎。　竄身、蜀地に來る、同病、韋郎を得たり。
天下兵戈滿。江邊歲月長(三)。　天下、兵戈滿つ、江邊、歲月長し。
別筵花欲暮。春日鬢俱蒼。　別筵、花暮れむと欲す、春日、鬢俱に蒼たり。
(四)爲問南溪(五)竹。抽梢(六)合過墻。　爲に問へ南溪の竹、抽梢合に墻を過ぐべし。

【原注】余草堂在成都西郭

【字解】【一】韋郎司直　前に簡韋十郎官詩あり、一本に官の字なしといふ、しからば此詩の韋郎は韋十郎と同人かとおもへども明ならず。韋郎の郎はただ男子を稱する言なり、司直は官名。【二】竄身　身をのがれかくす。【三】長　久しきをいふ。【四】爲　我がために。【五】南溪　成都の浣花溪。【六】抽梢　ぬきでたこずゑ。合　まさに云云すべし。

【題義】司直韋某が成都へかへるのを送る詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】自分は身をのがれかくすために蜀の地へ來て、同病相憐むものに韋君といふものを得た。いま天下には兵戈が滿ちてをり、自分は江べりで久しく歲月をへた。この送別の席では花が暮れかかつてをり、春の日にあたつて鬢の毛はおたがひにごましほになつてゐる。君は成都へいつたらわたしのために南溪の竹がどんなになつてゐるかたづねてくれたまへ、そのぬきでたこずゑはもうかきよりうへにでてゐるはずだ。

寄題江外草堂（一）

江外の草堂に寄せ題す

我生性放誕（二）。雅（三）欲逃自然。
我生れて性放誕なり、雅に自然に逃れむと欲す。

嗜酒愛風竹。卜居必林泉。
酒を嗜みて風竹を愛し、居を卜すれば必ず林泉にす。

遭亂到蜀江（四）。臥痾（五）遣所便（六）。
亂に遭ひて蜀江に到る、痾に臥して所便に遣る。

誅茅（七）初一畝。廣地方連延（八）。
誅茅初め一畝、廣地方に連延たり。

經營（九）上元（一〇）始。斷手（一一）寶應（一二）年。
經營す上元の始、手を斷つ寶應の年。

敢謀土木麗。自覺面勢（一三）堅。
敢て土木の麗なるを謀らむや、自から面勢の堅きを覺ゆ。

亭臺隨高下（一四）。敞豁（一五）當淸川（一六）。
亭臺、高下に隨ふ、敞豁、淸川に當る。

惟有（一七）會心（一八）侶。數能同釣船。
惟會心の侶有り、數能く釣船を同じくす。

干戈未偃息（一九）。安得酣歌眠。
干戈未だ偃息せず、安ぞ酣歌して眠ることを得む。

蛟龍無定窟（二〇）。黃鵠摩蒼天。
蛟龍、定窟無く、黃鵠、蒼天を摩す。

古來賢達士。寧受外物（二一）牽。
古來賢達の士、寧ぞ外物の牽を受けむ。

顧惟魯鈍姿。豈識悔吝（二二）先。
顧みて惟ふ魯鈍の姿、豈悔吝に先んずるを識らむや。

偶攜老妻去。慘澹凌風煙（二三）。
偶、老妻を攜へ去りて、慘澹、風煙を凌ぐ。

事跡無固必（二四）。幽貞（二五）貴雙全（二六）。
事跡、固必無く、幽貞、雙全を貴ぶ。

尙念四小松（二七）。蔓草易拘纏（二八）。
尙念ふ四小松、蔓草、拘纏し易し。

霜骨（二九）不堪長（三〇）。永爲鄰里憐（三一）。
霜骨、長ずるに堪へず、永く隣里の憐みを爲さむことを。

【字解】【一】江外草堂　江は錦江、草堂は成都浣花溪の草堂。【二】放誕　やりつぱなし。【三】雅　常なり。【四】蜀江　蜀の錦江。【五】痾　ながきやまひ。【六】遣所便　自己の便とする所に於て病悶を遣る。【七】誅茅　かやをきりて、屋根を葺く。【八】連延　まぢかにつゞいてゐる。【九】經營　こしらへかける。【一〇】上元　年號の名、（上元元年は西紀七六〇）。【一一】斷手　しごとをやめる。【一二】寶應　寶應元年は西紀七六二。【一三】面勢　向ふ所と、高下の形勢。【一四】高下　土地のたかいところ、ひくいところ。【一五】敞豁　からりとひらけたこと。【一六】淸川　錦江のすんだ水。【一七】惟有　「惟」は唯なり、或は雖に作

る、雖ならば次句までへかけてよみ、安得酣歌眠の句に至て完結す。【一八】會心侶　心を諒解しあうたなかま。【一九】偃息　武器をふせやすませる。【二〇】定當　きまつたいはや。【二一】外物牽　亦はつなにてひく、拘束をいふ。【二二】悔吝先　悔は後悔、吝は恨辱、先とはそのことの起るまへにこちらが暴動するをいふ。【二三】風塵　けだし風塵といふほどの意。【二四】因必　因は一のことにこりかたまる、必はきつとそのことでなければならぬとすること。融通のきかぬこと。「論語」の語。【二五】幽貞　幽はしづかにひつこんでゐること、貞は正しきみちをかたくまもること、易經の語。【二六】雙全　幽と貞とをふたつとも全くする。【二七】四小松　草堂に植ゑた四本の小松。【二八】拘纏　からまりまとふ。【二九】霜骨・松の幹をいふ。【三〇】長　生長。【三一】爲隣里儔　爲二隣里所一儔の略。

【題義】錦江のそとなる草堂に寄せ題した詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】自分は生れて性質がやりつぱなしで、いつも自然の世界に逃れようとおもうてゐた。酒をたしみ、風の吹く竹の姿を愛し、すまひをトするには必ず林泉のあるところに於てした。』それが兵亂にあうて蜀江へやつてきて、やまひに臥して自分の便とする所に於て病悶を遣ることにした。すなはち草堂を建てたのだが初は一畝の地に茅ぶきを設けたにすぎぬがとなりに廣い地面がつづいてゐた。上元の始からつくりかけ、寶應の年に至つて仕事をやめた。土木のうるはしいことを謀つたのではないがおのづと形勢が堅固らしく感ぜられる。亭や臺は地勢の高下に隨つて設けられ、からりとしてすんだ川が前面にひらけてゐる。ただ心を知りあうたなかまがきてときどきいつしよに釣船にのつてあそぶ。』しかし兵亂はまだやまぬのだからどうして酒によひうたをうたうて眠つてゐることができよう。蛟龍にはきまつたいはやない、黃鵠といふ鳥はあをぞらをこするばかり高くとぶ、たとへばそのごとくむかしから賢達の士はどうして外物の拘束を受けよう。自分は魯鈍な姿のもので賢達の士のやうなわけにはゆかぬ、悔吝の來ぬまへに先んじて行動することなどはわからぬが、偶然に老妻をつれて草堂からたち去つて、ものがなしきうちに風塵のあひだをしのいだのである。自己の行ひには必ずこれでなければならぬといふへばりつきは無く、「易」にいはゆる幽と貞とをふたつとも全うしたいとかんがへるのだ。』それにつけてもまだ念はれるのはせつかく植ゑた四本の小松のことだ。小松ははびこる草にまつはれやすい、だから霜をしのぐの骨幹も或は生長するにたへずしてあたりの人人の憐む所となつて枯れてしまひはせぬか、これがきがかりである。』

陪(一)章留後侍御宴(二)南樓得風字

章留後侍御陪して南樓に宴す、風の字を得たり

(三)絶域長夏晚。茲樓清宴同。
(四)朝廷燒棧北。鼓角漏(五)天東。』
屢食將(六)軍第。仍騎御(七)史驄。

絶域、長夏の晚、茲樓、清宴同じ。朝廷、燒棧の北、鼓角、漏天の東。』屢食す將軍の第、仍つて騎る御史の驄。

本無丹竈術。(八)那免白頭翁。　本丹竈の術無し、那ぞ免れむ白頭の翁たるを。

寇盜狂歌外。形骸痛飮中。　寇盜、狂歌の外、形骸、痛飮の中。

野雲低度水。(九)簷雨細隨風。　野雲低く水を度り、簷雨細かにして風に隨ふ。

出號江城黑。(一〇)題詩蠟炬紅。(一一)　號を出せば江城黑し、詩を題すれば蠟炬紅なり。

此身醒復醉。不擬哭途窮。(一二)　此身醒めて復醉ふ、途窮に哭せむと擬せず。

【字解】【一】章留後侍御　章は章彝なる人なり、留後とは留守役なり、節度使が朝廷へかへるとそのあとやくに留後を任命するなり、章彝は梓州に於て東川節度使の留守役を命ぜられたるなり、侍御は侍御史、これも帶びてゐるなり。【二】南樓　梓州城の南樓。【三】絕域　かけはなれた地方、蜀地をさす。【四】燒棧　蜀の棧道はむかし漢の張良が燒きはらひしところなり。【五】漏天　蜀には雨多く「漏る天」ありといはる、邛都縣・樊道縣におのおの漏天ありと稱せらる。【六】將軍　章をさす。【七】御史驄　驄はあをうま、已にしばしばみゆ、御史は章をさす。【八】丹竈術　丹藥をかまどにて錬る術、丹藥黃金をねりうれば不老不死なりとせらる、仙人の術なり。【九】出號　號は號令、章が部下に晩にあたりて命令をだすなり、一方には宴をしても他方には事務を視る。【一〇】題詩　作者のすることをいふ。【一一】蠟炬　らふそく。【一二】哭途窮　阮籍が故事。

【題意】東川節度使の留後であり、また侍御史である章彝がともをして梓州城の南樓でさかもりをしたことをよめり。廣德元年夏、梓州にての作。

【詩意】この遠方の土地での日ながの夏のくれがた。この樓で主人といつしよにさかもりをする。朝廷は遠く棧道の北にあり、鼓角の音はまだ漏天の東に於てたえない。』自分はたびたび將軍のやしきでごちそうになり、またそのついでに御史の驄までかりて騎り、眷顧をうけてをる、ただ仙人の術をこころえぬから白頭の老人となることは免れがたい。』いま狂歌しつつ寇盜のやまざるをきき、形骸を痛飮のうちに托してをると、野らの雲はひくくさがつて水をわたり、のきばの雨は風のまにまにこまかくふりそそぐ。』江ぞひの城もくらくなるので將軍は號令を出す、自分はらふそくの火のあかいところでこの詩をかきつける。このからだは醒めてはまた醉うてゐる、これが自分の現在の生活でこれで滿足して、阮籍のごとく途の窮まつたところへぶつつかつて慟哭するなんどのまねをしようとはおもはぬ。』

臺上得涼字

臺上、涼の字を得たり

改席臺能迥。(一)留門月復光。(二)(三)　改席、臺能く迥なり、留門、月復光る。

雲霄遺暑濕。(四)(五)山谷進風涼。(六)　雲霄、暑濕を遺る、山谷、風涼を進む。

老去一杯足。誰憐屢舞長。(七)　老い去つて一杯足れり、誰か憐まむ屢、舞ふの長きを。

何須把官燭。(八)似惱鬢毛蒼。(九)(一〇)　何ぞ須ひむ官燭を把るを、鬢毛の蒼たるに惱ましむるに似たり。

【字解】【一】改席　さかもりをなすに場所をかへること。【二】迴　はるか、とほくまでみえるをいふ。【三】留門　門にとどまるなり、ここの章家の門にひきつづいて居ること、城門をとざすことをさしとめおくといふ解は取らず。【四】雲霄　くも、そら、臺の高きをいふ。【五】遣　遣忘の意。【六】遡　こちらへ發つてよこすをいふ。【七】長　久しきをいふ。【八】把官燭　燭をとるとはともし火をとるとはあかるくするなり、將軍の宅の燭なれば官燭といふ。【九】惱　こまらされること。【一〇】蒼　黑白のまじること、ごましほ。

【題意】これは前篇のひきつづきの詩にして、宴席をかへて高臺のうへで飲みなほしたことをのべたり。

【詩意】席がかへられたがまことにとほくまでみることのできる高臺である。ひきとめられて居のこつたが幸と月もひかつてきた。雲霄にちかい高いところだから暑さも濕りけもすつかりわすれるし、山や谷の方からはすずしい風をだんだんよこしてくれる。自分は老いたので酒は一杯でも十分だ、このおやぢのながながと時時舞ひだすのをだれが愛して見てくれようか。ここでは燭をとる必要はない。あかるくされると自分はびんの毛のごましほなのにこまらされるやうな氣がするのである。

送(一)王十五判官扶侍(二)還黔中(三)得開字

王十五判官が扶侍して黔中に還るを送る、開の字を得たり

大家(四)東(五)征逐(六)子回。　大家東征子を逐うて回る、
風生洲渚錦帆開。　風生じて洲渚錦帆開く。
青青竹(七)笋迎船出。　青青たる竹笋、船を迎へて出で、
白白江(八)魚入饌(九)來。　白白たる江魚、饌に入り來る。
離別不堪無限意。　離別堪へず無限の意に、
艱危深仗(一〇)(一一)濟時才。　艱危深く仗る濟時の才。
黔(一二)陽信(一三)使應稀少。　黔陽信使應に稀少なるべし、
莫怪頻頻勸酒盃。　怪む莫れ頻頻酒盃を勸むるを。

【字解】【一】王十五判官　判官王某、本服詳ならず。【二】扶侍　母に侍して之を扶くるをいふ。【三】黔中　詩中の黔陽なり、今辰州府の地。【四】大家　後漢の班昭なり、昭は彪の女にして曹壽(字は世叔)に嫁し、穀をうむ、穀、陳留の長官となるや之に隨ひて洛陽より東のかた陳留に赴き、東征賦を作る。昭はまた「女誡」を著はす、老いて宮中に入り女官等の師となる、女官等之を尊びて大家(家音姑)とよびしとぞ。【五】東征　上にみゆ。【六】逐子回　逐の字は隨の字に改むべしとの說あり、しかし改めずとも逐の字のままにても俗用にてはあとからついてゆく義となる、唐人は追涼といふべきを逐涼といへり。子とは曹穀をさす。ここにては大家を王判官の母に、曹穀を王判官にあてて用ひたり。【七】竹笋　笋は「たけのこ」。孟宗といふもの孝行にて、その母笋をこのむ、宗、冬、林中に入りて哀號せしに笋之がために生じたりとの話あり。【八】江魚　姜詩が話。詩も孝行のものにて、その母は江の水を飲むことを好み、魚鱠をたしむ、俄にして泉、いへの側にわきいでその味は江の水の如く、かつ每あさ二匹の鯉を出だせりと。【九】饌　食物。【一〇】仗　よる。【一一】濟時才　時世をすくふの才。【一二】黔陽　黔中。【一三】信使　手紙をもつてゆくつかひ。

【題意】判官王某がおつかさんのおともをして黔陽へかへるのを送つた詩。廣德元年、夏梓州にて

の作。

【詩意】むかし曹大家がその子について東の方へでかけたごとく、このたび王君のおつかさんは王君のあとについておかへりになる。それで江邊の洲渚に風がおこつてそれとともに錦の帆がかかげられて船がでだす。王君はおや孝行であるからさだめし青青として笋が船をまちうけて出だし、まつしろの江魚が食物のなかに加へらるることがあらう。（孟宗や姜詩のやうに）。自分はこのわかれには限り無きこころもちにたへられぬ、君の様な人は時世を濟ふ才をもつた人で今の艱危な時節にふかくあてにすべき人なのだがその人がゐなかへかへつてしまふといふのではないか。黔陽といふ遠方ではたよりをする使もいとまれであるであらう、してみればわたしがしきりに酒の杯をおすすめしてもなんの不思議もござるまい。

喜雨

雨を喜ぶ

春（一）旱天地昏。日色赤如血。
春旱、天地昏し、日色赤くして血の如し。

農事都已休。兵戎況騷屑（二）。
農事都て已に休す、兵戎況んや騷屑たるをや。

巴人（三）困軍須（四）。慟哭厚土熱。
巴人、軍須に困しむ、慟哭す厚土の熱するに。

滄江（五）夜來雨。眞宰（六）罪一雪（七）。
滄江夜來の雨、眞宰罪一雪す。

穀根小蘇（八）息。沴氣（九）終不滅。
穀根小しく蘇息するも、沴氣終に滅せず。

何由見寧歲（一〇）。解我憂思結。
何に由りてか寧歲を見、我が憂思の結びたるを解かむ。

崢嶸（一一）群山雲。交會（一二）未斷絕。
崢嶸たる群山の雲、交會未だ斷絕せず。

安得（一三）鞭雷公（一四）。滂沱（一五）洗呉越（一六）。
安んぞ雷公に鞭うちて、滂沱として呉越を洗ふことを得む。

【原注】時浙右多盜賊。

【字解】【一】春旱　はるひでりする。【二】騷屑　安からざる貌。【三】巴人　梓州地方の民。【四】軍須　軍需なり、軍のいりようとするもの、さまざまの物を徵發せらるるなり。【五】滄江　ひろきかは、涪江をいふ。【六】眞宰　造物主、天。【七】罪一雪　ひでりをさせたは天の罪なり、その罪も雨をふらせたがため全く雪ぎきよめたといふなり。【八】蘇息　よみがへりいきつく。【九】沴氣　惡氣。【一〇】寧歲　やすらかなとし。【一一】崢嶸　山の高い貌。【一二】交會　いりまじる。【一三】安得　希望のことば。【一四】雷公　かみなり。【一五】滂沱　雨水のあふれるさま。【一六】呉越　作者の注に浙右に盜賊多しとあり。史によるにいふ、寶應元年八月、台州（浙江省にあり）の人袁晁反し、浙東の州郡を陷れ、廣德元年四月、李光弼之を討つ、と。浙右とは浙西なり、けだし浙西より起りて浙東を陷れしなり。

【題義】雨のふりしことを喜びて作れる詩。廣德元年春、梓州にての作ならん。

【詩意】春ひでりがして天地はまつくらく、太陽の色は赤くて血の様になつた。農事はすべてをはつ

たりである、まして兵亂があつておちつかぬに於てをやだ。』巴地の人民は軍需をとりたてらるるに苦しみ、大地が熱してゐるのには慟哭しつつある。そこへ江上に夜からかけての雨でこれでやつと造物主も罪ほろぼしをしたといふものだ。ただ穀物の根は少しいきをふきかへした樣だが、惡氣はまだなくなりきらぬ。どうしたらやすらかな歳がらを見て、自分の憂のむすぼれを解くことができるであらう。』あたりをながめると多くの山山の高い雲はたがひにまじはつてまだたえきれはせぬ。どうかして雷公に鞭をくれておしながすほどの雨をふらせ、吳越の地方まで洗ひさつてしまひたいものだ。

（一）述古三首　　古を述ぶ　三首

〔一〕　　〔一〕

（二）赤驥（三）頓（四）長纓。非無（五）萬里姿。　赤驥、長纓に頓す、萬里の姿無に非ず。
悲鳴淚至地。（六）爲問馭者誰。　悲鳴、淚、地に至る、爲に問ふ馭する者は誰ぞと。
鳳凰從東來。（七）何意復（八）高飛。　鳳凰東より來る、何の意ぞ復高飛す。
（九）竹花不結實。念（一〇）子忍（一一）朝饑。　竹花、實を結ばず、念ふ子が朝饑を忍ぶことを。
古來（一二）君臣合。可以物理推。　古來君臣の合、物理を以て推す可し。
賢人識定（一三）分。進退（一四）固其宜。　賢人、定分を識る、進退固より其の宜なり。

【字解】【一】述古　ふるきいにしへの事をのべ以て今の事を諷するなり。【二】赤驥　くりげの駿馬。【三】頓　つかれること。【四】長纓　ながきひも、ひもがじやまになりてつかれる。【五】萬里姿　一日に萬里をゆくだけの能力あるすがた。【六】爲問　此がためにしてとふ。【七】何意　どんなつもりか。【八】高飛　たかく飛び去る。【九】竹花不結實　鳳凰は竹の實を食すといはる。【一〇】子　おまへ、鳳凰をさす。【一一】朝饑　あさのひもじさ。【一二】君臣合　合とは際會してあふこと。【一三】定分　きまつた本分。【一四】固其宜　固其所レ宜の義、どちらでもよろしきにかなふ。

【題義】此篇は賢人が明君にであはぬことをいへり。此の三首は廣德元年代宗卽位の後、梓州にありての作なるべし。

【詩意】ひもがながすぎてもくりげの駿馬はつかれる、萬里をゆくだけの姿は無いではないが悲鳴して淚が地に垂れる、いつたいこの馬を馭する者はだれであるか。（これは馭者が馭する道を知らぬのである）。また鳳凰が東からやつてきた。どういふつもりなのかそれがまた高く飛び去つてしまうた。此竹の花には實がむすばぬし、さだめしおまへは朝ひもじからうがそれをがまんしてゐるのだらう。此の駿馬と鳳凰の道理で推してかんがへれば古來君臣といふものはどうして遇合するものであるかがわかるはずだ。賢い人はきまつた本分をしつてゐるから、進んで仕へるべきときは進んで仕へるし、退いて去るべきときには退いて去つてしまふ。進まうが退かうがどちらでも宜しきにかなうてゐるのである。

〔二〕

市人（一）日中（二）集。於利競錐刀（三）。　市人、日中に集まり、利に於て錐刀を競ふ。
置膏（四）烈火上。哀哀自煎熬。　膏を烈火の上に置く、哀哀自ら煎熬す。
農人（五）望歲稔（六）。相率（七）除蓬蒿（八）。　農人歲の稔るを望む、相率ゐて蓬蒿を除く。
所務穀（九）爲本。邪贏（一〇）無乃勞（一一）。　務むる所は穀を本と爲す、邪贏は乃ち勞すること無からむや。
舜擧十六相（一二）。身尊道何高。　舜は十六相を擧ぐ、身尊くして道何ぞ高き。
秦時任商鞅（一三）。法令如牛毛（一四）。　秦の時商鞅に任ず、法令、牛毛の如し。

【字解】〔一〕市人　市ばの人。〔二〕日中　日のさかり。〔三〕錐刀　きり、かたなのさきほどのわづかな利益。〔四〕置膏二句　「莊子」に「膏火自煎」の語あり。〔五〕農人　ひやくしやう。〔六〕稔　さくもつのよくできること。〔七〕相率　ともどもに。〔八〕蓬蒿　よもぎのくさ。〔九〕穀　こくもつ。〔一〇〕邪贏　よこしまなるまうけ、欺僞によりて得る利益をいふ、これは市人の利をさす。〔一一〕無乃勞　あまりにごくらう千萬なことではあるまいか、其事の無用なるをいふ。〔一二〕十六相　八元八愷と稱する十六人のかしこい宰相なり、事は「左傳」（文公十八年）にみゆ。〔一三〕商鞅　衞の國の公子にして秦の孝公に仕へ法によりて秦の富强をはかりし人。〔一四〕如牛毛　法令の密なるをいふ。

【題義】此篇は政治には市利を追ふよりは農を重んずべく、最上は賢德によりて治むるに在りとの意をのべたり。當時第五琦・劉晏・元載・等の宰相が市利を追ひ、法を設けて重稅を取りたるをそしれるなりといへり。

【詩意】市場の人人は日ざかりに集つて、利益にかけては錐刀の小利でも之をきそふ、こんなのはたとへば烈火のうへに膏を置いた樣のものであはれにもじぶんじしんをにるものである。農民はとしがらのいいのをのぞむで、ともどもに草とりをしてはたらく、農民の務むる所は穀物を得るのが本である、之にくらべると市場のものが競爭して不正の手段でまうけを得るのはあまりにごくらうなことではなからうか。（今の政治家はこの市場の利を競ふことを奬勵してゐるものである、それはいかぬ、といふ意ならん。）　根本的にいふと、むかし舜は十六人の賢相をあげて用ひた、それで自身は尊くなり、その道は高尙である。秦の時をみよ、秦の孝公は商鞅に一任して法令がむやみに牛毛の如く綿密であつたにすぎぬではないか。

〔三〕

漢光（一）得天下。祚（二）永固有（三）開。　漢光、天下を得たり、祚の永きは固より開くこと有り。
豈惟高祖（四）聖。功自蕭曹（五）來。　豈惟高祖の聖なるのみならむや、功は蕭曹より來れり。
經綸（六）中興業。何代無長才（七）。　中興の業を經綸するに、何の代か長才無からむ。
吾慕寇鄧（八）勳。濟時信良哉（九）。　吾は寇鄧の勳を慕ふ、濟時信に良なるかな。

(一〇)耿賈亦宗臣。(一一)羽翼共徘徊。　耿賈も亦宗臣なり、羽翼して共に徘徊す。
(一三)休運終四百。(一四)圖畫在雲臺。(一五)　休運終に四百、圖畫、雲臺に在り。

【字解】【一】漢光　後漢の光武帝。【二】祚永　さいはひながし、國運のながくつづいたこと。【三】首開　これをはじめたものがある。【四】高祖　前漢の高祖劉邦。【五】蕭曹　高祖の臣たる蕭何・曹參。蕭何は民を愛ひ賢者を招き致し、曹參は攻城略地の功あり。【六】經綸　すぢみちをたてること。【七】長才　人にまされる才。【八】寇鄧　寇は寇恂、鄧は鄧禹。【九】良　良臣なるをいふ。【一〇】耿賈　耿弇、賈復。【一一】宗臣　一代のたつとぶ所の臣。【一二】羽翼　天子のたすけとなる。【一三】休運　よき運命。【一四】四百　四百年。【一五】雲臺　後漢の明帝、前世の功臣に追感して二十八將を南宮の雲臺に圖畫にせり。

【題義】兩漢の君、人材を用ふるによりて天下をながく保有せしことをのべたり。

【詩意】後漢の光武は天下を得て、その國運がながかつたのはもとよりさきに之を開きはじめたものがあるのだ。それは漢の高祖である。しかし高祖はまた自分が聖徳あつたためのみではなくその功は蕭何や曹參から來てゐるのだ。凡そ中興の業を經綸するにいづれの代でもすぐれた人才が無いわけではない。之を用ふると否とにある。自分は後漢では寇恂や鄧禹の勳を慕ふ、彼等は時世を濟うたものでまことに良臣といふべきものである。それから耿弇だの賈復だのも一代の宗臣であつて光武のつばさとなつてともにたちはたらいたものである。かくのごとくにして後漢のめでたき運命はつひに四百年もつゞいて、彼等功臣は圖畫にかかれて雲臺に列せられてゐるのである。

陪(一)章留後惠義寺(二)餞(三)嘉州(四)崔都督赴(五)州

章留後が惠義寺にて嘉州の崔都督が州に赴くを餞するに陪す

(六)中軍待(七)上(八)客。(九)令肅事有(一〇)恒。　中軍、上客を待つ、令肅として事恒有り。
(一一)前驅入(一二)寶地。(一三)祖帳飄(一四)金繩。　前驅、寶地に入り、祖帳、金繩に飄へる。」
(一五)南陌既留(一六)歡。(一七)茲山亦深登。　南陌既に留歡す、茲山亦深く登る。
(一八)清聞樹(一九)杪磬。遠謁雲端僧。　清は聞く樹杪の磬、遠く謁す雲端の僧。
(二〇)迴策匪(二一)新岸。所攀仍舊藤。　策を迴らすは新岸に匪ず、攀づる所は仍舊藤なり。
耳激洞門(二二)飈。目存寒谷冰。」　耳には激す洞門の飈、目には存す寒谷の冰。」
(二三)出塵閟(二四)軌躅。畢景遺炎蒸。　出塵、軌躅閟づ、畢景、炎蒸を遺る。
永願坐長夏。將(二五)衰棲(二六)大乘。　永く願ふ長夏に坐し、將に衰へむとして大乘に棲まむ」とぞ。
(二七)羇旅惜(二八)宴會。(二九)艱難懷(三〇)友朋。　羇旅、宴會を惜しむ、艱難、友朋を懷ふ。
(三一)勞生共(三二)(三三)幾何。離恨兼相(三四)仍。」　勞生、共に幾何ぞ、離恨、兼ねて相仍る。」

【字解】【一】章留後　已にみゆ。【二】惠義寺　已にみゆ。【三】嘉州　今の嘉定府、成都の南にあり。【四】崔都督　都督、崔

菜。【五】州 嘉州をさす。【六】中軍 本軍をさす、ここは本軍のかしら即ち章彝をさす。【七】待 もてなす。【八】上客 崔都督をさす。【九】令肅 號令嚴肅。【一〇】事有恒 事にきまりがある。【一一】前驅 さきがけのもの。【一二】寶地 寺をいふ。【一三】組帳 別筵のまく。【一四】金繩 うつくしきなは。【一五】南陌 南のみち、これは蓋し城中南樓の宴をいふ。【一六】留歡 崔をひきとめて歡びをつくす。【一七】玆山 長平山をさす。【一八】淸 磬聲のすめるをいふ。【一九】樹杪磬 こずゑのうへにたちのぼる磬石のおと。【二〇】迴策 つゑをめぐらす。仇氏は下山のことをいふといへるも余はここへきたことをいふものとみる、めぐらすとは城からこちらへめぐらしてきたといふ義ならん。【二一】匪新岸 岸は溪岸なるべし、一に崖に作る、新岸に非ずとはこの寺ははじめて來たわけでなく已にたびたびきてゐることをいふ。【二二】颸 ふきまはすかぜ。【二三】出塵 塵界から超出する。【二四】迴軌轍 くるまのあとも、人のあしあとも無きをいふ、畢景 景は影に同じ、日かげのなくなるまで、終日の義。【二五】將衰 老衰になりかけて。【二六】棲大乘 大乘の敎のなかにくらす。【二七】羈旅 たびの身のうへ。【二八】惜宴會 宴の短きを惜しむなり。【二九】艱難 國事のなんぎなること。【三〇】友朋 崔をいふ。【三一】勞生 この世に生きるために勞してゐること。【三二】共 おたがひに。【三三】幾何 どれほどの年月ぞ。【三四】仍 ひとつあるうへにまたひとつかさなること。

【題義】 章留後のともをして惠義寺で崔都督が嘉州へ赴くのを餞した詩。廣德元年夏、梓州にての作。

【詩意】 本軍の將章君はたふとき客をもてなされるに、號令いかめしくちやんと事にきまりがあつてみだれぬ。すなはち前驅の者は早く寶地に入り、金繩をはつて別筵のまくをふはふはとひるがへらせてゐる。』 城中の南のみちでもすでに客をひきとめて歡をつくしたのだが、またこの寺の山へも深くわけのぼつてきた。こずゑたかくたちのぼる磬聲のすんだおとを聞きつつ、遠く雲端に住んでゐる僧に面會する。ここへ策をめぐらしてやつてきたがはじめての岸をとほるのではなく、よぢのぼる藤づるもやつぱりもとよぢたことのあるつるだ。耳には洞門の囘風が激し、目にはつめたい谷の氷がみえる。』 ここは全く塵界から超出して車や人のあともなく、ひいつぱいあつくるしさをわすれるのである。どうかいつまでもこの日ながの夏ここにすわつてゐたい、そして老衰ながら大乘の法門のなかにすみたい。自分はたびの身のうへでこの宴のながくないのを惜しくおもふ、それとともに今の國事の難儀のをりからわかれゆくともだちをおもふ。いつたい我我はおたがひどれだけのあひだ生きるために骨折るのだ。そんなことをかんがへる苦痛のうへにまた友だちとのわかれの恨みがかさなつてくるのである。』

送竇九歸成都(一)

竇九が成都に歸るを送る

文章亦不(二)盡(三)、竇子(四)才(五)縱橫。　文章も亦盡きず、竇子、才、縱横なり。

非(六)爾更苦節、何人符(七)大名(八)。　爾が更に苦節なるに非ずんば、何人か大名に符せむ。

讀書雲閣觀(九)、問(一〇)絹錦官城(一一)。　書を讀む雲閣觀、絹を問ふ錦官城。

我有浣花竹(一二)、題詩須一行(一三)。　我に浣花の竹有り、題詩、一行を須つ。

【字解】〔一〕竇九　成都の竇少尹が子ならん、これその父をみたまふためにかへるなり。〔二〕亦　才に對していふ。〔三〕不盡　蓋し詞源のゆたかなるをいふ。〔四〕竇子　即ち竇九をさす。〔五〕才　世に處するの才。〔六〕苦節　くるしきみさををたもつ、これは行ひのうへについていふ。〔七〕符　一致する、もつてなる實力に相應するだけの名を得るをいふ。〔八〕大名　大なる名聲。〔九〕雲閣觀　成都にある道觀の名ならん。〔一〇〕問絹　父を問ふこと、魏の胡威が故事。胡質といふもの荊州刺史となる、その子威みやこより往きて省す、みづから驢を驅りやどにとまらず十餘日にして歸る、質これに絹一匹を與ふ、威曰く、大人は清貧なり、何を以て此を得たるや、質曰く、これ吾が俸餘なり、聊か汝が糧を助くるのみと。〔一一〕錦官城　成都の西城の名。〔一二〕浣花竹　浣花溪の草堂の竹。〔一三〕一行　ひとくだり。

【題義】竇某が成都に父をみまひにゆくのを送る詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】おまへは處世の才は縱橫にあり、そのうへ文章の技量もつきぬほどゆたかにもつてゐる。おまへの如きものがもつと我慢して苦しいみさををを守るに非んばだれが大名にぴつたり合するものがあらう。おまへはこれからかへつて雲閣觀で書物をよんで勉强し、錦官城へ絹の仔細をたづねにゆく。そのついでにおねがひがある。わしには浣花溪の竹がある。あれにおまへの詩を一行だけ題してもらひたい。

章梓州水亭（一）

（二）【原注】時漢中王（三）兼道士席謙（四）在會。同用荷字韻。

章梓州が水亭【原注】時に漢中王兼び道士席謙會に在り、同じく荷の字の韻を用ふ

城晩通（五）雲霧。亭深（六）到（七）芰荷。

吏人橋外（八）少。秋水席邊（九）多。

（一〇）近屬淮王（一一）至。高門（一二）薊子（一三）過。

（一四）荊州愛山簡（一五）。吾醉亦長歌。

城晩れて雲霧通ず、亭深くして芰荷に到る。

吏人、橋外に少なり、秋水、席邊に多し。

近屬淮王至る、高門、薊子過ぐ。

荊州、山簡を愛す、吾醉ひて亦長歌す。

【字解】〔一〕章梓州　梓州の留後章彝。〔二〕水亭　水にのぞんだ「ちん」。〔三〕漢中王　巳に見ゆ。〔四〕席謙　梓州玄明觀の道士にして棊を善くす、作者の絕句に席謙不見近彈棊とある其人なり。〔五〕通雲霧　通とは城內とここととにみなぎること。〔六〕亭深　亭が池の中央に奥まつてあるなり。〔七〕到芰荷　だんだんゆくと芰荷のあるところまできたといふこと。芰は「ひし」、荷は「はす」。〔八〕橋　亭に達するまでにあるなるべし。〔九〕席　亭にてのしきもの。〔一〇〕近屬　天子の近きおつづきあひ。〔一一〕淮王　淮南王、漢中王を比していへり、前にもみゆ。〔一二〕高門　章彝が家といふこと。〔一三〕薊子　薊子訓といふ仙人なり、この仙人は都に至り二十三家の貴族の宅に同時に姿をあらはしたりとの話あるものなり、以て席謙に比す。〔一四〕荊州　荊州の民。〔一五〕山簡　晉の山簡襄陽に鎮す、つれに習家池に出遊し酒をのむ、兒童之をうたふ、巳に前にみゆ、簡を以て彝に比す。

【題義】章彝が池中の亭で作つた詩。この時漢中王だの道士席謙も座にあり、みなが「荷」の字の韻をつかつて詩をつくつた。廣德元年秋、梓州にての作。

【詩意】城もくれになつて雲や霧が一體にかかるやうになつた。だんだん水亭をおくまでたづねて芰荷のあるところまできた。橋のそとには役人どもはまれだし、坐席のそばには秋の水がたくさんにある。ここへ皇族である淮王（漢中王）がおいでになり、またこのお宅へ仙人の薊子（席謙）もきた。

荊州の人人は山簡を愛してこどもが歌をつくつたが、章留後も山簡の様なひとだ、それでわたしも醉うて荊州の兒童をまねて長くうたふ。

章梓州橘亭(一)餞成都竇少尹得涼字

章梓州が橘亭にて成都の竇少尹を餞す、涼の字を得たり

秋日野亭千橘香。　秋日野亭、千橘香し、
玉杯錦席高雲涼。　玉杯錦席、高雲涼し。
主人(二)送客何所作。　主人、客を送る、何の作す所ぞ、
行酒(三)賦詩殊未央(四)。　酒を行らし詩を賦す殊に未だ央きず。
衰老應爲難(五)離別。　衰老應に離別を爲し難かるべし、
（應難爲離別）
賢聲(六)此去(七)有輝光。　賢聲此を去りて輝光有り。
豫傳籍籍(八)新京兆(九)。　豫め傳ふ籍籍たる新京兆、
青史(一〇)無勞(一一)數趙張(一二)。　青史、趙張を數ふるを勞する無し。

【字解】【一】橘亭　みかんばたけのなかにあるちん。【二】主人　章をさす。【三】行酒　さけを客の杯につぎまはること、勿論主人みづからなすにあらず、給仕人にさせるなり。【四】央　盡くるなり。【五】爲難　爲難にては通じがたし、難爲に作るべし。【六】賢聲　かしこいとのひやうばん、【七】此去　「このゝち」の義。【八】籍籍　うはさのやかましき貌。【九】新京兆　至德二載に成都は府に改められ、尹を置き東西二京に比せらる、故に少尹をも京兆尹に比していへり。【一〇】青史　ふるい書物をいふ、古は竹にて簡をつくり、文字をそのうへに書するには火にてあぶり竹の青みを去る、之を「殺青」といふ、しかしかいたものを青史といふ。【一一】勞　わづらはす、それだけの骨を折る。【一二】趙張　漢の趙廣漢と張敞、二人相繼で京兆尹となりしもの、吏民、語して曰く、前有趙張、後有三王と。

【題意】章彝がみかんばたけのちんで成都の竇少尹をはなむけした詩。廣德元年秋、梓州にての作。

【詩意】秋の日野らの亭のそばでたくさんのみかんの樹がかんばしくにほひ、錦の席をしき玉の杯をやりとりして高く浮いた雲がすずしげにみえてゐる。主人は客を送るになにをするかといふと、酒をつぎまはらせたり、詩をつくつたりしてまだなかなかやまない。自分は老衰の身だから人とわかれなどすることはしにくいはずであるが、竇君はこののちはその賢いとの評判はますます光輝をますことであらう。まだ著任もせぬさきから新任の京兆尹がくるとのうはさがやかましい。わざわざ歷史をたづねて趙廣漢や張敞をかぞへたてる御苦勞はいらぬことだ。

隨章留後新亭會(一)送諸君(二)

章留後が新亭の會に隨ひ諸君を送る

新亭有高會(三)。行子(四)得良時(五)。　新亭、高會有り、行子、良時を得たり。

(六)日動映江幕。風鳴排(七)檻旗。　日は動く江に映ずる幕、風は鳴る檻に排せる旗。

(八)絕葷終不改。勸(九)酒欲無辭。　絕葷、終に改めず、勸酒、辭する無からむと欲す。

已墮(一〇)峴山淚。因題零(一一)雨詩。　已に墮す峴山の淚、因つて題す零雨の詩。

【字解】【一】新亭　あたらしくたてたちん。【二】諸君　たびだつもの一人に非るなり。【三】高會　高堂の會。【四】行子　たびにでかける人人。【五】良時　よきなり。【六】日動　日光がちらつく。【七】排檻　てすりにならべる、檻は板がこひしたてすりなり。【八】絕葷　くさきにほひの食物をたつ、佛道にしたがひ精進するなり、自己のことをいふ。仇氏は座中にかかる人あるらん、或は漢中王をさすかなどいへるも、作者自身のこととみるを當れりとす。【九】勸酒　人からすすめらるるさけ。【一〇】墮峴山淚　已にしばしばみゆ。晉の羊祜民望あり、祜沒するや百姓襄陽の峴山に碑をたつ、見るもの淚を流さざるなし、杜預因て之を墮淚碑と名く。ここは其人去て他人之を思ふことを意味し、これまで梓州に仕官して今たち去る人を慕ふことをいへり。【一一】零雨詩　此の送別の詩をさす。晉の孫楚が陟陽候送別詩に曰く、晨風飄岐路、零雨被秋草と。零雨はおつるあめ。

【題義】章彝が新築の亭で送別の會をした席にともをして多くの人人を送つた詩。廣德元年梓州にての作。

【詩意】新亭でさかんな會がもよほされる。たびにゆく人人もよい時節にあうたといふものだ。みれば江水に映うた幕には日光がちらつき、てすりにたてならべた旗には風がはたはた鳴つてゐる。自分はこの席でもなまくさものの禁食はあくまでまもるが、ひとが酒をすすめてくれればそれはいなますうける。諸君と別れるためすでに昔人が峴山でおとしたやうな淚をおとし、そのついでにこの零雨の詩ともいふべき送別の詩をかきつける。

客(一)舊館

舊館に客たり

陳(二)迹隨(三)人事。初(四)秋別(五)此亭。　陳迹、人事に隨ふ、初秋此の亭に別る。

(六)重來梨葉赤。依舊竹林青。　重ねて來れば梨葉赤し、舊に依つて竹林青し。

(七)風幔何(八)時卷。寒(九)砧昨(一〇)夜聲。　風幔何の時か卷ける、寒砧、昨夜聲あり。

無由出江(一一)漢。愁(一二)緒日冥(一三)冥。　江漢より出づるに由無し、愁緒日に冥冥たり。

【字解】【一】客舊館　舊館に客となるをいふ、舊館とは梓州の客寓をいふ、梓州より一時立去りてまたかへりてもとの客寓にすみしをいふ。【二】陳迹　ふりたるあと、あとふりたりといふも同じ意なり、迹とはこの館の存在するをいふ。【三】人事　主として生計の事をいふ、作者の旅行はつれに生計に迫はれてのことなり。【四】初秋　はつあき、あきのはじめ。【五】別此亭　仇氏はここより去て閬州に赴きしなりといへり。ただ必ず閬州にゆきしや否は不明なり、一時其地に赴きしをいふならん。【六】重來　歸りてきた。【七】風幔　風をうくるまんまく。【八】何時卷　いつまき去つたのか。蓋しさきには垂れてあつたのに今は卷かれてゐるなり。【九】寒砧　さむぞらにうつきぬた。【一〇】昨夜聲　ゆうべはそのこゑがきこえた。【一一】江漢　作者は梓州地方をさして江漢といへり、作者は梓州より涪江を下りて揚子江にいで三峽をくだりて故鄉にかへらんことを念としてゐたるなり。【一二】愁緒　うれへのこころ。【一三】冥冥　くらきさま、はれやかにならぬさま。

【題義】梓州の舊館へもどつてふたたび客寓の身となつたことをよめり。廣德元年晚秋又は初冬の

節に梓州にての作。

【詩意】人事におはれてゐるうちに假りにとおもつたところがふるびた跡とかはる。このやかたはついこの秋の初めに別れたのだ。いまもどつてふたたびきてみると梨の葉は赤くそまつてゐるし、竹林はもとどほりに青青としてゐる。風幔はいつしか卷き去られ、ゆうべは寒砧の聲をきくに至つた。またここにやどらねばならぬ始末でこの江漢の地方から出てしまふようすがはなく、うれへのこころは日日くらくなるばかりである。

戲作寄上漢中王二首　【原注】王新誕明珠

戲れに作りて漢中王に寄せ上る　二首　【原注】王新に明珠を誕す

〔一〕

雲裏不聞雙雁過。
掌中貪看一珠新。
秋風嫋嫋吹江漢。
只在他鄉何處人。

〔一〕

雲裏聞かず雙雁の過ぐるを、
掌中貪り看る一珠の新なるを。
秋風嫋嫋、江漢を吹く、
只他鄉に在るは何處の人ぞ。

【字解】〔一〕誕　誕生なり、うむこと。〔二〕明珠　眞珠、男子をいふ。〔三〕雙雁　雙の字にふかき意味なし、ただ雁をいふ、雁はつらをなしてとぶ、雁はてがみをいふ。〔四〕一珠新　あらたにうまれた一つぶの眞珠、男の子をさしていふ。〔五〕嫋嫋　なよなよとふくさま。〔六〕江漢　梓州地方の水をさす。〔七〕只在他鄉　他鄉にばかりゐる。〔八〕何處人　自己をさすものなれど婉曲にいへり。

【題義】戲れにつくつて漢中王に寄せたてまつつた詩。このとき王はあらたに男の子をもつたのである。廣德元年秋、梓州にての作。

【詩意】雲まに雁がとほるこゑをさつぱりきかぬ。（近來おたよりがない）。これはおもふに新に得られた掌中の珠（男のおこさん）をあんまり看つめてをられるせゐでありませう。なよなよとわたる秋風が江漢（梓州）の地方を吹いてゐます、このときここから出られず他鄉にばかりゐるをとこがありますがそれはいつたいどこの人間でございませう。（このわたくしにほかならぬのでございます）。

〔二〕

謝安舟楫風還起。
梁苑池臺雪欲飛。
杳杳東山攜妓去。
冷冷修竹待王歸。

〔二〕

謝安が舟楫風還起る、
梁苑の池臺、雪飛ばむと欲す。
杳杳、東山に妓を攜へ去る、
冷冷たる修竹、王の歸るを待つ。

【字解】〔一〕謝安舟楫　晉の謝安、孫綽等と海に泛びしに風浪起る、諸人懼る、安は平氣なりしといふ、此句は第三句の攜妓と連絡す。〔二〕梁苑　漢代の梁の孝王の園、孝王、睢陽城をひろめ東苑をきづく方三百里、此句は第四句修竹と連絡す。〔三〕雪欲飛　謝惠連が雪賦に、梁王遊於兎園、俄而微霰零、密雪下とあり。〔四〕東山攜妓　謝安が故事。〔五〕冷冷　水の鳴る音なり、これ蓋し風の竹梢を拂ふ聲をさしていへり。〔六〕修竹　せのたかい竹、梁王の園には竹多し、

枚乘が兎園賦に修竹檀欒夾池水とみゆ。

【題義】此篇は王が妓を攜へ舟遊して風浪にあへるをききて早く歸れといひやりしものなり。

【詩意】謝安（王をさす）が舟あそびするに風が起つたさうである。梁苑（王の園をさす）の池臺には雪が飛びかけてをりまする。あなたは謝安氣どりではるばる東山へ妓をつれてあそびにおでかけになつてゐるが、お苑の冷冷たる修竹はあなたのおかへりを待つてをりまするぞ。（蓋し作者梁園の賓客を以て自ら比し、自ら王の歸るを待つことをいひやりしものならん）。

(一)椶拂子

椶拂且薄(二)陋。豈知身効能。
不堪代白(三)羽。有足除蒼(四)蠅。
(五)熒熒金錯(六)刀。(七)濯濯朱(八)絲繩。
非獨(九)顏色好。亦由(一〇)顧眄稱。
吾老抱疾病。家貧臥炎蒸。
(一一)嗢膚倦(一二)撲滅。(一三)賴(一四)爾甘服膺。
(一五)物(一六)微世競棄。義(一七)在誰肯(一八)徵。
(一九)三歲清秋至。未敢闕緘(二〇)縢。

椶拂子

椶拂且薄陋なり、豈知らむや身に効能あり。
白羽に代ふるに堪へざるも、蒼蠅を除くに足る有り。
熒熒たり金錯刀、濯濯たり朱絲繩。
獨り顏色の好きのみに非ず、亦顧眄に稱ふに由る。
吾老いて疾病を抱く、家貧にして炎蒸に臥す。
嗢膚、撲滅するに倦む、爾に賴りて甘んじて服膺す。
物微なれば世競ひ棄つ、義在るも誰か肯て徵せむ。
三歲、清秋至る、未だ敢て緘縢を闕かず。

【字解】【一】椶拂子　しゆろの毛でつくつた「ほつす」、蠅をはらふに用ふ。【二】薄陋　つまらぬみすぼらしきもの。【三】白羽　鳥の白いはねにてつくりしうちは、諸葛孔明は白羽扇を以て軍事を指揮せしといふ。【四】蒼蠅　あをばへ。【五】熒熒　かがやく貌。【六】金錯刀　刀をいふときと錢をいふときとあり、是は刀をいふならん、金錯とは金すぢの模樣をいろいろにつけたるをいふ、之を拂子のどの部分に施したるか不明なるも恐くは柄が刀形をなしそれに金錯が施されあるに非るか。【七】濯濯　鮮かに潔き貌。【八】朱絲繩　あかききぬいとのなは、これは柄についてゐるひもなるべし。【九】顏色　みば。【一〇】顧眄稱　顧眄とは左右をふりかへつてみること、稱とはつりあひがよきこと。【一一】嗢膚　嗢は嘈と同じといへり、「莊子」天地篇に蚊蝱噆膚則通夕不寐矣の語あり、嗢膚は膚をかむものにて、ここは蠅をさせり。【一二】撲滅　うちころしてたやす。【一三】爾　汝、ほつすをさす。【一四】服膺　むねにあててほつすを持つこと。【一五】物微　つまらぬものであれば。【一六】世　世人。【一七】義在　之を貴ぶべきわけあひの存在すること、ほつすに蠅を拂ふだけの効能あるをいふ。【一八】徵　めす、之をめしもとめること。【一九】三歲　久しきあひだをいふ。【二〇】緘縢　なはにてからげる、これは箱にいれたうへをさらになはでからげ鄭重にしまつておくをいふ。

【題義】しゆろの「ほつす」のことをよめり。廣德元年夏秋の間の作。

【詩意】しゆろのほつすはいはばつまらないものだ、が意外にも身に効能のあるものだ。白羽扇の代用にはならぬが蒼蠅を除くには十分である。かがやいた金錯刀の柄、さつぱりとした朱絲の繩。その體裁みばのよいばかりでなく、之を持つて左右をみるときに持つてる人によくうつるところがあるからばかにはならぬ。』自分は年よつて病氣をもち、貧乏であつてあつくるしいときに臥てゐる。膚を

かみにくる蝿は之を撲滅するのにうみつかれてゐるが、おまへ（ほつす）といふものがあるおかげで甘んじていつもそれをもつてゐるのだ。物が微小であると世の人はあらそうてそれを棄ててしまふ。その用ふべきわけあひがあつてもだれも之を求めるものはない。自分はそれとちがふ、だから三年のあひだすずしい秋がくるといふと、いつも鄭寧にこのほつすをしまひこんでおく、決して箱をなはでからがくことを缺いたことはない。』

送陵州路使君之任
陵州の路使君が任に之くを送る

王室比多難。高官皆武臣。
王室、比多難、高官は皆武臣なり。

幽燕通使者。岳牧用詞人。
幽燕、使者通ず、岳牧、詞人を用ふ。』

國待賢良急。君當拔擢新。
國、賢良を待つこと急なり、君、拔擢に當ること新なり。

佩刀成氣象。行蓋出風塵。
佩刀、氣象を成す、行蓋、風塵を出づ。

戰伐乾坤破。瘡痍府庫貧。
戰伐、乾坤破れ、瘡痍、府庫貧なり。

衆寮宜潔白。萬役但平均。
衆寮宜しく潔白なるべし、萬役但平均なれ。』

霄漢瞻佳士。泥塗任此身。
霄漢、佳士を瞻る、泥塗、此の身を任す。

秋天正搖落。回首大江濱。』
秋天正に搖落す、首を回す大江の濱。』

【字解】【一】陵州　今成都府の南、資州の仁壽縣境。【二】路使君　陵州の刺史路某。【三】比　このごろ。【四】幽燕　幽州及び燕國の地、今の直隸北部、賊軍の據れる所。【五】通使者　賊將歸順し、朝廷よりの使者自由に通ずる樣になれり。【六】岳牧　地方の長官をいふ、古昔舜のとき四岳十二牧あり、ここは刺史を州牧とみていへり。【七】詞人　文學出身の人、上の武臣に對していふ。【八】賢良　かしこくよき人物。【九】拔擢　多くの人のうちよりひきぬかるること。【一〇】佩刀　呂虔が故事、已にみゆ、晉の呂虔刺史となる、虔佩刀あり、相する者ありこれ三公のおぶべきものなりと、虔乃ち之を王祥に贈れり。【一一】成氣象　前途三公の位にものぼるべききざしをあらはすをいふ。【一二】行蓋　管内を行ぐる車の蓋、刺史は馬車にてめぐる。【一三】風塵　兵亂のちり。【一四】瘡痍　民力のきずつくこと。【一五】府庫　官の金穀をいれるくら。【一六】衆寮　多くの役人ども。【一七】潔白　金錢をむさぼらず、賄賂などとらぬこと。【一八】萬役　よろづの賦役、稅または力役。【一九】平均　公平に民に課す。【二〇】霄漢　あをぞら、あまのがは、高き地位をいふ、刺史をほめていふ。【二一】佳士　路をさす。【二二】任　泥まみれにならうとかつてしだい。【二三】搖落　この葉が風にゆられおつる。【二四】大江　浩江をいふ。

【題義】陵州の刺史に任ぜられた路某が任地へゆくのを送る詩。廣德元年秋、梓州にての作。

【詩意】王室はちかごろさまざまの難儀があり、高官のものといへば皆武人であつた。それが幽燕の地方が平定して朝廷からの使者も自由に通ずる樣になり、やつと地方官にも文學出身のものを用ふる樣になつた。』國家はいま賢良なる人物を待つことが急であるので、君は新に拔擢せらるることになつた。君の佩刀は呂虔のそれのごとく前途有望の氣象をあらはし、君の管内巡察の車蓋ははじめて兵亂の塵から出てのしごとである。いま戰伐のあつたため天地は破損してをり、人民はいたでをおう

て官の府庫は貧乏である。このとき君の部下の衆寮たるものは廉潔でなければならぬ、人民に課する種種の賦役はただ公平であるべきである。』自分は君の如きよき人物があをぞらのうへたかくのぼるをうれしく仰ぎみて、このからだは泥にまみれてもそれにまかせておく。いま秋のそらで木の葉がゆられておつる、このとき君を見送つて、大江のほとりでひとへに君の方をふり反つてみるのである。』

送元（一）二適（二）江（三）左　【原注】元結也

元二が江左に適くを送る　【原注】元結なり

亂後今相見。秋深復遠行。　亂後、今相見る、秋深くして復遠く行く。

風塵爲客日。（四）江海送君情。　風塵、客と爲る日、江海、君を送る情。

（五）晉室丹陽尹。（六）公孫白帝城。　晉室、丹陽の尹、公孫、白帝城。

（七）經過（八）自愛惜。（九）取次莫（一〇）論兵。　經過せば自ら愛惜し、取次、兵を論ずること莫れ。

【原注】元嘗應孫吳科擧

【字解】〔一〕元二　元二は原注に元結なりといへり。錢謙益は元結の傳によりて元結となすの誤れることを辯じ、結は蜀にも至らず江左にもゆきしことなしとせり。王維が集に送元二適安西詩あり、有名なる陽關三疊の曲是なり、かの元二とこの元二と同一人なるべきは推察にかたからざるも、そが元結なりや否やはなほ決し易からず、暫く疑を存す。〔二〕適　ゆく。〔三〕江左　江東なり、即ち江南のこと、今の江寧府地方をいふ。〔四〕江海　支那人は江のひろき處を海といふ、江左の方面の江は江海なり。〔五〕晉室丹陽尹　晉の時の丹陽は今の江寧府地方にあたる、尹はその長官なり。〔六〕公孫白帝城　白帝城は四川省夔州府の魚復縣にある城にして漢末公孫述が築く所なり、地理よりいへば白帝城を過ぎてのち丹陽のかたへ赴くなり、押韻の都合にておきかへていへり、丹陽白帝の二句は經過の地をいふ、次ぎの「經過」の語へ接する句法なり。〔七〕經過　白帝城、丹陽などとほつたときには、の意。〔八〕自愛惜　自己の身をたいせつにする。〔九〕取次　或は曰く從容の意なり、或は曰く匆卒の意なり、或は曰く次第の意なり、と。今次第の義に從ふ。〔一〇〕論兵　兵略上について議論する。元二は孫吳の科といふ武事の試驗科目に應じたことのある人なりと。

【題意】元某が江左の方へゆくのを送る詩。廣德元年の作ならんといふ。

【詩意】君とは兵亂以後いまはじめて面會する、しかるにこの秋の深いときにあたつて君はまた遠くへゆくのである。風塵中に客寓の身となつてゐるこのとき、江海の方へゆく君を送る自分の情はどんなであるか、察してくれたまへ。君は道すがら白帝城や丹陽をとほるだらう。白帝城は公孫述が獨立したところ、丹陽には晉の王室で力強い臣が尹となつてゐたところだ。白帝丹陽には今もそんな人物がゐるかも知れぬ、だからそこをとほつたとてもきをつけて自己のからだを大切にし次第に兵事など論じてはいけない。

九（一）日

九日

（二）去年登（三）高鄭（四）縣北。　去年高きに登る鄭縣の北、

【字解】〔一〕九日　陰曆九月九日重陽の菊節句。〔二〕去年　實際

今日重在（五）涪江濱。　今日重ねて涪江の濱に在り。
苦（六）遭白髪不（七）相放。　苦みて遭ふ白髪の相放たざるに、
羞見黃花無數新。　羞ぢ見る黃花の無數に新なるを。
世亂（八）鬱鬱久爲客。　世亂に鬱鬱久しく客となり、
路（九）難（一〇）悠悠常（一一）傍人。　路難に悠悠常に人に傍ふ。
酒（一二）闌却憶（一三）十年事。　酒闌にして却つて憶ふ十年の事、
腸斷（一四）驪山清路塵。　腸は斷ゆ驪山清路の塵。

元年。【三】登高　重陽には高いところにのぼつて厄を拂ふ。【四】鄜縣　梓州をいふ。【五】涪江濱　これも梓州の涪江のほとりをいふ。【六】苦遭　こまりながらであふ。【七】不相放　放とはゆるしてはなすこと、不放はしつかりつかめてはなさぬこと。【八】鬱鬱　心のふさぐさま。【九】路難　行路難なり、よわたりのむつかしきをいふ。【一〇】悠悠　元来道路のながきさまをいふも、冷淡の義となる。【一一】傍人　他人にたよるをいふ。【一二】闌　たけなは、さかりのすぎんとするころ。【一三】十年事　十年前の事、天寶十四年冬作者驪山の麓をすぎ赴奉先縣詩を作る、これが玄宗の朝の太平の最後にして同年冬安祿山反し、爾來天下大亂となる、天寶十四年より廣德元年までにて九年なり、十年とは成數をあげしなり。【一四】驪山清路塵　驪山のこと上にいへり、玄宗時に驪山華清宮に在りしなり、清路とは天子行幸になるときは道路の掃除をして清めることをいふ、きよめた路ならば塵は無きはずなれど塵字なれば加へて用ひしなり、清路のことについておもひだすといふ義にとどまる。

【題義】重陽の節を迎へた感をのぶ。廣德元年秋、梓州にての作。

【詩意】去年は鄜縣の北で高地にのぼつて厄拂ひをしたが、こんにちもふたたびおなじ涪江のほとりで菊節句をする。白髪が自分をつかまへて放してくれぬにはこまるが運命まぬかれぬ。また年がよるのではづかしくおもひながら無數に菊の花が咲きだしたのをながめる。自分は世の亂れたときにあたつて不愉快なおもひをしながらいつまでも客寓の身となり、よわたりのなんぎな際に冷淡にあつかはれながらいつも他人にたよつてその世話になつてゐる。酒の醉ひが絶頂に達しさめかけるころ十年前の事をおもひめぐらすと、驪山に行幸のあつたころ、あのときまでは太平であつたのにと腸がちぎれる樣なここちがする。

對雨　雨に對す

莽（一）莽天（二）涯雨。江（三）邊獨立時。　莽莽たり天涯の雨、江邊獨立の時。
不愁巴（四）道路。恐（五）濕漢旌旗。　愁へず巴の道路、濕さむことを恐る漢の旌旗。
雪（六）嶺防（七）秋急。繩（八）橋戰勝遲。　雪嶺、防秋急なり、繩橋、戰勝遲し。
西（九）戎甥（一〇）舅禮。未（一一）敢背恩（一二）私。　西戎甥舅の禮、未だ敢て恩私に背かざらむ。

【字解】【一】莽莽　くらきかたち。【二】天涯　天のはて、梓州をさす。【三】江邊　江は涪江。【四】巴　梓州地方をさす。【五】恐濕漢旌旗　漢とは唐をいふ、旌旗は軍人のもつもの、旗を濕ほさんことを恐るといふは軍人がぬれんことをきづかふなり。【六】雪嶺　西山なり、已にしばしばみゆ。【七】防秋　秋にあたりて敵の侵入し來るを防ぐこと、このとし七月に吐蕃は河隴の地方を取りたり、因て雪嶺のかたに防禦をなす。【八】繩橋　卷十「入奏行」をみよ。【九】西戎　吐蕃をさす。【一〇】甥舅禮　唐は中宗の景

龍二年（西紀七〇八）に金城公主を贊普（吐蕃の酋長）に妻はし、之と親戚關係を結びたり。故に彼はみづから甥の身分に居り、唐の天子を舅さんとして敬禮すべき地位にありといふなり。【二】未敢　これは「よもやすまい」といふことなれども、事實をいふにあらず、希望をいふなり。【三】恩私　恩愛、私寵なり。

【題義】雨にうちむかひて感をのぶ。廣德元年秋、梓州より閬州に往かんとするころの作。

【詩意】自分が江邊にひとりで立つてゐると、天涯に莽莽とくらく雨がふる。自分はこの巴の地方が雨のためになんぎにならうとそれは心配せぬが、この雨が漢（唐）の軍隊の旗をうるほしはせぬかと恐れるのである。いま吐蕃の侵入のために蜀では雪嶺の方は秋の防禦に急であり、繩橋の方面は官軍の戰勝がぐずぐずしておそい。どうか西戎は我が唐との關係に於て甥舅の禮をおもんじ敢て我が天子の恩寵に背かぬ樣にありたいものだ。

（一）薄暮

（二）江水長流地。山雲薄暮時。

寒花隱亂草。宿鳥探（三）深枝。

故國見何日。高秋心苦悲。

薄暮

江水長流の地、山雲薄暮の時。

寒花、亂草に隱れ、宿鳥、深枝を探る。

故國見る何の日ぞ、高秋心苦だ悲し。

人生不再好。鬢髮白成絲。

人生、再び好からず、鬢髮白くして絲を成す。

【字解】【一】薄暮　くれにせまる、くれかかるときをいふ。【二】江水　これは嘉陵江、閬州にての詩なればなり。【三】探　さぐる、一に擇（えらぶ）に作る。

【題義】日のくれかかつたときのことをよめり。廣德元年秋、閬州（次の篇に於て說明す）にての作。作者このとし九月閬州に至りしといへり。

【詩意】江水のながく流れてゐるところ、山の雲のくれかかつたとき。寒さうなあはれに咲いた花はみだれた草のなかに隱れてゐるし、やどりを求める鳥はおくふかい木の枝をさがしてゐる。ふるさとはいつ見られるだらう。そら高き秋にあたつて自分の心は非常にかなしい。人生はもいちどよいときにあふことはできぬ、びんの毛は白くて絲の樣になつてしまつた。

（一）閬州奉送（二）二十四舅使自京（三）赴任青城（四）

閬州にて二十四舅使が京より青城に赴任するを送り奉る

聞道王喬（五）舃。名因太史（六）傳。

如何（七）碧雞（八）使。把詔（九）紫微天。

秦嶺（一〇）愁回首。涪江（一一）醉泛船。

聞道王喬が舃、名は太史に因つて傳ふと。

如何ぞ碧雞の使、詔を把る紫微の天に。

秦嶺愁へて首を回らし、涪江醉ひて船を泛べむ。

青城漫汚雜。(一二)吾舅意淒然。(一三)　青城は漫に汚雜なり、吾が舅、意淒然たらむ。

【字解】【一】閬州　今四川省保寧府閬中縣。【二】二十四舅使　二十四は排行なり、舅は母の兄弟をさす、この人も姓は崔ならんか、使とは詩に碧雞使とあれば天子の命を帶びて蜀に使ひせしならん。【三】京　長安。【四】青城　山の名、又縣の名、成都府灌縣の西南。【五】王喬舄　後漢の王喬、葉縣の令となり、一日と十五日とに朝廷へゆくに先づ二匹の鳧がくるので天子、太史（天文記錄のかかりの官）をして之を伺はしめしに體用の舄二つを得たりといふ。縣令の故事として用ひたり。【六】因太史傳　上にみゆ。【七】如何　とがめかつ怪しむ語なり。【八】碧雞使　漢の王褒、宣帝の命をうけて蜀にありといふ金馬碧雞の神を祀るために使としていだされたり、この舅は碧雞を祀るためなるや否やは不明なるもともかく天子より蜀へつかひにだされたるなり、それが朝廷へ報告にかへりてまたこんどは縣令としてだされたるなり。【九】把詔紫微天　紫微は宮殿の名、開元四年に縣令の試驗をここに行ふ、二十四年には新任の縣令をここに宴す。把詔とは縣令に任ぜられたる詔をここにて手にするをいふ。【一〇】秦嶺　藍田縣の南にあり、舅が途中にて經しところ。【一一】涪江　これまた舅が經べきところをいふ。【一二】汚雜　風俗汚れて、居民雜多なり。【一三】淒然　ものがなし。

【題義】閬州で天子のお使者にたつたことのある舅がみやこから青城縣へ赴任するのを送つた詩。廣德元年閬州にての作。

【詩意】きけば王喬の舄は太史によつてその名が傳へられた、むかしは縣令もかく重んぜられた。しかるに今はなんで碧雞の使をつとめたほどのものが紫微宮で縣令任命の詔書などを手にする樣になつたのか。あなたはこちらへくる途中、秦嶺では愁へてみやこをふりむいてみ、さらに涪江では醉つて船をうかべるであらう。さうして青城につけば、そこはやたらに汚雜なところであるから、あなたはいやなものがなしいここちがするであらう。

王閬州(一)筵奉酬(二)十一(三)舅惜別之作(四)

王閬州が筵にて十一舅が惜別の作に酬い奉る

萬壑樹(五)聲滿。千崖秋氣高。(六)　萬壑、樹聲滿つ、千崖、秋氣高し。
浮舟(七)出郡郭。別酒(八)寄(九)江濤。(一〇)　浮舟、郡郭を出で、別酒、江濤に寄す。
良會(一一)不復久。此生(一二)何太勞。　良會復久しからず、此の生、何ぞ太だ勞せる。
窮愁(一三)但有骨。(一四)群盜尙如毛。(一五)　窮愁、但骨有り、群盜、尙毛の如し。
吾舅(一六)惜分手。(一七)使君(一八)寒贈袍。(一九)　吾が舅、分手を惜しむ、使君、寒くして袍を贈る。
沙頭暮黃鶴。(二〇)失侶(二一)亦哀號。(二二)　沙頭の暮の黃鶴、侶を失して亦哀號す。

【字解】【一】王閬州　閬州の刺史王某。【二】酬　あいさつする。【三】十一舅　十一は排行、舅は母かたのをぢ、崔氏なるべし、次篇に「青城に往く」とありてこの十一舅は二十四舅に從て赴任すとみえたり。【四】惜別之作　十一舅が別れを惜しむためにつくつた詩。【五】樹聲滿　どこもみなこがらしのこゑ。【六】秋氣高　崖なるゆゑに秋の氣たかくそびゆ。【七】浮舟　別宴をひらくためにうかべたふね。【八】別酒　わかれをおしむさけ。【九】寄　托する義。【一〇】江濤　江は嘉陵江。【一一】良會　よき會合、したしきものがいつしよに居るはよき會合なり。【一二】此生　人生をいふ。【一三】窮愁　こまりかつうれふ。【一四】但有骨　肉おちて骨のみがある。【一五】如毛　多きをいふ。【一六】吾舅　十一舅をさす、吾とはしたしみをもつていふことば。【一七】分手　わかれること。【一八】使君　王閬州をさす。【一九】寒贈袍　むかし戰國のとき范雎といふもの秦に至りその舊友須賈に面會す、須賈、

睢が寒げなるを憐みて之に綈袍を贈りたりとの話あり、王閬も作者に袍をめぐみたるなり。【二〇】黄鵠　鵠一に鶴に作る、鵠と鶴とは古来混用せり。【二一】失侶　なかまをうしなふ。【二二】亦　自己に對して「また」といふ。

【題義】王閬州が送別の宴を舟でやつたとき十一舅が別れを惜しむ詩を作つた。それにあいさつするためにつくつた詩。廣德元年九月、閬州に至りしときの作。

【詩意】よろづのたにに こがらしが吹きみち、多くの崖には秋の氣が高くそびえてゐる。このとき舟をうかべて郡のそとぐるわから出かけ、江の濤のうへに托して別れの酒をくむ。』かく親しいものがともにゐることも久しくはない、この人生はなんでこんなに骨折りが多いのであらう。自分は羇愁の極ただ骨をあますばかりである、盜賊どもはまだ毛のごとくむらがりおこつてゐる。王閬州は親切にも寒さにあたつて自分に袍を贈つてくだされるが、吾がをぢはわかれを惜しんでこれから立ち去られる。これがため自分は非常にかなしいが、沙頭にゐるゆふぐれの黄鵠をみると彼等もまたわがごとくそのなかまを失うたものとみえしきりにかなしみさけんでをる。』

(一)閬州東樓筵奉送十一舅往(二)青城。得昏字

閬州の東樓の筵にて十一舅が青城に往くを送り奉る、昏の字を得たり

(三)曾城有高樓。制古(四)丹雘存。　曾城、高樓有り、制古りて丹雘存す。

(五)迢迢百餘尺。(六)豁達開四門。　迢迢たり百餘尺、豁達、四門開く。

雖有車馬客。而無人世喧。　車馬の客有りと雖も、而も人生の喧しき無し。

(七)遊目俯大江。(八)列筵慰(九)別魂。　遊目、大江に俯し、列筵、別魂を慰む。

是時秋冬(一〇)交。(一一)節往顏色昏。　是時秋冬の交、節往いて顏色昏し。

天寒鳥獸伏。霜露在草根。　天寒くして鳥獸伏す、霜露、草根に在り。

今我送(一二)舅氏。萬感集清樽。　今、我、舅氏を送る、萬感、清樽に集まる。

豈(一三)伊山川(一四)間。囘首盜賊繁。　豈伊山川の間つるのみならむや、首を囘せば盜賊繁し。

(一五)高賢(一六)意(一七)不暇。(一八)王命久(一九)崩奔。　高賢は意ふに暇あらず、王命に久しく崩奔す。

臨風欲慟哭。聲出已復(二〇)呑。　風に臨みて慟哭せむと欲す、聲出でて已に復呑む。

【字解】【一】閬州東樓　保寧府治の南、嘉陵江のほとりにあり。【二】青城　前にみゆ、これはこの十一舅は二十四舅についてゆくなり。【三】曾城　曾は層に同じ。【四】丹雘　丹は朱の色、雘は彩色。【五】迢迢　はるかなる貌。【六】豁達　ひろびろとしたさま。【七】遊目　みまはす。【八】列筵　むしろをつらねる。【九】別魂　わかれのこころ。【一〇】交　あはひ。【一一】節往　時節がすぎさる。【一二】舅氏　十一舅。【一三】伊　これ。【一四】間　隔つること。【一五】高賢　舅氏の德をいふ。【一六】意　おもふに、こちらが推察するなり。【一七】不暇　賢者は國事のために勞するを以ていとまなし。【一八】王命　天子の命令によりて。【一九】崩奔　奔走の義。【二〇】呑　泣き聲をのみこむ、むせびてなくこと。

【題義】閬州の東樓の別れの宴席で十一舅が青城へゆくのを送つた詩。前詩と同時の作。

【詩意】閬州のかさなれる城に高い樓がある、其の制はふるめかしく丹雘の色彩もまだ殘つてゐる。それは百尺あまりもたかくそびえ、四方の門がひろびろと開かれてゐる。ここは車馬にのつてとほる人人はあるが人世のやかましさがない。ここであちらこちらとみまはしながら大江の流れに俯し、さかむしろをしきならべて別れのこころを慰めるのである。』時はちやうど秋冬のあはひで、時節もすぎて歲のくれになりかけるので集まつた人人のかほつきもはればれしくはない。そらは寒く鳥や獸も起きず、草の根には露霜がおいてゐる。いま自分は舅氏を送るにつけて清樽にむかうて萬感が集つてくる。それはをぢとわかれて中間に山や川が我我をへだてることをかなしむだけのことではなく、首をめぐらしてみると盜賊がはなはだ多くあるからである。』あなたの樣な賢者はおもふにいつも暇がなく、天子の命令によつていつまでも奔走されるのである。こんなことをかんがへて風にのぞんで慟哭しようとおもふが、ひとたびはなきごゑも出るがやがてそれはひつこんでむせびなきとなる。

（一）放船

船を放つ

（二）送客（三）蒼溪縣。山寒雨不開。　客を送る蒼溪縣、山寒くして雨開けず。

直愁（四）騎馬滑。故作放舟迴（五）。　「直愁ふ騎馬の滑かならむことを、故に舟を放ちて迴る」

（六）青惜峰巒過（七）。（八）黃知（九）橘柚來（一〇）。　靑には惜しむ峰巒の過ぐるを、黃には知る橘柚の來るを。

（一一）江流大自在（一二）。（一三）坐穩（一四）興（一五）悠哉。　江流は大だ自在なり、坐穩かにして興悠なる哉。」を作す。

【字解】【一】放船　水流に船をだしたこと。【二】送客　客はだれかわからぬが旅行する人なり。【三】蒼溪縣　閬州閬中縣の北にある縣、江の上流にあたる、上流へいつたから船でくだつて閬中へもどるなり。【四】騎馬滑　馬にのつて陸をとほると路がすべる。【五】迴　閬中へかへる。【六】靑　峰巒の色。【七】過　とほりすぎてしまふ、流れのはやきさま。【八】黃　橘柚の色。【九】橘柚　みかん、ゆずの樹になつてゐる實。【一〇】來　前面からくる、これも水流のはやきさまを示す。【一一】江流　江は嘉陵江。【一二】自在　自由の意。【一三】坐穩　船にのつてゐるゆゑ馬とちがひじつとしてをられる。【一四】興　峰巒橘柚を見去り見來るおもしろきをいふ。【一五】悠　ゆつたりとしたさま。

【題義】船を放つて嘉陵江をくだつたことをのぶ。廣德元年秋、閬州にての作。

【詩意】自分は蒼溪縣まで客を見送つたが、山は寒く雨ははれない。馬にのれば路がすべるだらうと心配されたのでわざと舟を水流に放つてかへることにした。靑い色がみえる、もつとみてゐたいとおもふうちにその靑い色の持ちぬしたる峰巒はとほりすぎてしまふ。さうかとおもふと前面から黃のものがやつて來る、それはすなはちこの地方で作つてゐる橘・柚の實の色である。陸とはちがひ江流はまことに自由自在なもので、じつとすわつてもゐられるし、興味も悠然としてつきない。

(一)薄遊

(二)淅淅風生(三)砌。團團日隱墻。
遙空秋雁滅。半嶺暮雲長。
病葉多先墜。寒花只暫香。
(四)巴城添(五)淚眼。今夕復(六)清光。

薄遊

淅淅、風、砌に生じ、團團、日、墻に隱る。
遙空、秋雁滅し、半嶺、暮雲長し。
病葉多く先づ墜つ、寒花只暫らく香し。
巴城、淚眼を添ふ、今夕復清光あり。

【字解】【一】薄遊　いささかあそぶ、「かりのさまよひ」の義、一地に永住せず暫時寓遊するをいふ、詩は薄遊中のことをのべたり。【二】淅淅　風のおとの細きさま。【三】砌　みぎり。【四】巴城　閬州の城をさす。【五】添淚眼　眼淚を添へる義なり。【六】淸光　明月の光りすめるをいふ。

【題義】客遊中のふとしたことをのべたり。廣德元年秋、閬州にての作ならん。

【詩意】砌に風がさわさわ吹きだして、まんまると太陽がかきねにかくれた。はるかの空では秋の雁が消えてゆき、嶺のなかほどにはゆふぐれの雲が長くひきはへてゐる。枯れた葉は多くは他の葉よりさきに墜ちるし、寒さうな色をした花はただしばしのあひだにほふのである。これだけみたのでさへ自分の淚の材料には十分なのだが、巴城の今夕はこれにさらに自分の淚を添へさせるものがある、それはこよひはさらに月の光りがすんでゐるといふことだ。

(一)嚴氏溪放(二)歌

天下兵馬未盡銷。
豈免(三)溝壑常(四)漂漂。
(五)劍南歲月不可(六)度。
(七)邊頭公卿仍獨驕。
(八)費心(九)姑息是(一〇)一役。
肥肉大酒徒(一一)相要。
嗚呼(一二)古人已(一三)糞土。
獨覺(一四)志士(一五)甘漁樵。』
況我(一六)飄蓬無定所。
終日(一七)慽慽忍羇旅。
秋宿(一八)霜溪(一九)素月高。
喜得與子(二〇)長夜語。

嚴氏溪の放歌

天下の兵馬未だ盡く銷せず、
豈溝壑に常に漂漂たるを免れむ。
劍南の歲月、度るべからず、
邊頭の公卿仍獨り驕る。
費心姑息是れ一役、
肥肉大酒徒らに相要す。
嗚呼、古人、已に糞土なり、
獨り覺ゆ、志士の漁樵に甘んずるを。』
況んや我飄蓬、定所無し、
終日、慽慽、羇旅を忍ぶ。
秋、霜溪に宿すれば、素月高し、
喜ぶ、子と長夜に語ることを得るを。

【字解】【一】嚴氏溪　嚴は閬州の大姓の一、溪は蓋し嚴氏の族によつて名を得たるなり。【二】放歌　きままにうたひだしたうた。【三】溝壑　餓死してみぞ、たにゝにはまりこむほどの境遇をいふ。【四】漂漂　ただよふ。【五】劍南　蜀の地をいふ【六】度　わたる、すごすをいふ。【七】邊頭公卿　邊頭は邊地、ゐなか、公卿は大臣、これは章彝を指せるならんといふ。【八】費心　心をくばる。【九】姑息　かりそめの愛をほどこすをいふ、「禮記」に君子之愛レ人也以レ德、細人之愛レ人也以二姑息一とみゆ、たとへば酒食にてもてなすの類、次句に「肥肉大酒」とあるは是なり。【一〇】一役　一役夫、しごとにん、勞働者。【一一】相要

（二一）東遊西還力實倦。　東遊西還、力實に倦む、
（二二）從此將（二三）身更何許（二四）。　此れより身を將ゐる更に何れの許ぞ。
知子松根長茯苓（二五）。　知る、子が松根茯苓を長ずるを、
（二六）遲暮有意來同煮。　遲暮、來つて同じく煮るに意有り。

要は邀、むかへ招待すること。【一二】古人　むかしの士を好み之を尊敬せしごとき人物。【一三】義士　死して義士に化したり。【一四】志士　有爲の志をもつたもの。【一五】甘漁樵　漁者樵者の生活をして甘んじてゐる。【一六】飄蓬　ひるがへる「よもぎ」のごとく。【一七】慼慼　うれふるかたち。【一八】霜溪　しもおけるたに、嚴氏溪をさす。【一九】素月　しろくひかる月。【二〇】子　嚴家の主人をさす。【二一】東遊西還　閬州に遊んだり、梓州へかへつたり。【二二】從此　今後。【二三】將身　からだをもつてゆく。【二四】何許　何處に同じ。【二五】茯苓「ぶくりやう」、藥草なり。【二六】遲暮　晩年。

【題義】嚴氏溪にてきままにうたひでた歌。廣德元年秋、閬州にての作。

【詩意】天下の騷亂はまだすつかりなくなつたわけではない。だから自分は溝壑にころがりこむやうな樣子でいつも漂泊してゐることから免れるわけにゆかぬ。蜀でもながくくらすことはできぬ、何となればこのゐなかの大臣はやつぱりひとりで威張つてゐる。自分に對して心を用ひてくれたとて姑息なことにとどまるので自分を視ること一人の役夫をみるがごときにすぎず、肥肉や大酒を以ていたづらによんで御馳走してくれるくらゐのことだ、眞に自分を知つて尊敬してくれるのではない。ああ士を重んずるやうな古人はもはや死んでつちになつた、志士たるものが俗界を去つて漁樵に甘んずるはもつとものことだといふことがわかる。』まして自分は風にひるがへるよもぎのやうにきまつたゐばしよがなく、あさからばんまでうれへのこころをもちながら旅ずまひをがまんしてゐる。このたびこの霜のおいた溪邊にやどるとしろい月が高くてりかがやいてゐる、このをりおまへと夜長にものがたることのできることは喜ばしいことだ。自分は東へでかけたり西へかへつたりするのでつかれてゐる、このさきどこへこの身をもつていつたらよいのであるか。おまへのところの松の樹の根には「ぶくりやう」が生えるさうであるが、自分は晩年にはここへやつてきてその藥草をいつしよに煮てのまうとおもうてゐるのである。』

（一）警急　【原注】（二）高公適領（三）西川節度

警急　【原注】高公適西川の節度を領す

（四）才名（五）舊楚將。（六）妙略擁（七）兵機。　才名、舊の楚の將、妙略、兵機を擁す。
（八）玉壘雖傳（九）檄。（一〇）松州會解（一一）圍。　玉壘、檄を傳ふと雖も、松州會ず圍みを解かむ。
（一二）和親知計拙。（一三）公主漫無（一四）歸。　和親、計の拙なるを知る、公主、漫に歸る無し。
（一五）青海今誰得。（一六）西戎實飽（一七）飛。　青海、今誰か得る、西戎、實に飽いて飛ぶ。

【字解】【一】警急　吐蕃の侵入の事變ありて警戒すべきことの急なることなのべたり。【二】高公適　親友高適、節度使なるにつき貴びて公といふ。【三】領西川節度　西川地方の兵馬の權を支配するないふ。【四】才名　才ありとの評判。【五】舊楚將　適は嘗て揚州左都督府長史・淮南節度使となる、揚州・淮南はむかしの楚地なり、故に楚の將といふ。【六】妙略　ふしぎなはかりごと。【七】握兵機　軍事上の機微なにぎる。【八】玉壘　山の名、灌縣の西にあり。【九】傳檄　檄文を以て吐蕃侵入ないそぎしらす。【一〇】松州　今の松潘縣。【一一】會　「必ず」、俗語。【一二】和親　吐蕃と和睦し親密にする。【一三】公主　唐より吐蕃へやりたるひめみや。「留花門」の詩の公主歌黄鵠の句の注をみよ。【一四】漫　漫然、とりとめなき貌。【一五】青海　甘肅の西の地方、もと唐の地にして吐蕃にとられたる地方。【一六】西戎　吐蕃。【一七】飽飛　已にしばしばみゆ、鷹のごとく饑うれば人に從ひ飽けば飛び去ること。

【題義】吐蕃侵入の急變につきてのべたる詩。廣德元年十月、閬州にての作なるべし。

【詩意】才名ある舊の楚の將軍である高適は妙略を抱いて兵機をにぎつてゐる。だから玉壘の方面まで檄文を傳へ急を報じてゐるけれども松州の圍まれはきつと解けるであらう。いま吐蕃と和親をするなどいふことはその計のまづいことはわかつてゐる。その證據は姫宮をよめにやつてもそれはむだで漫然おかへりが無いことに終はつたでないか。青海一帶の地、これは今はそもだれの所有なのだ。西戎などいふやつはじぶんの都合のいいときだけはこちらへつくが、たべものに飽けばすぐ飛び去つてしまふ勝手千萬のものなのだ。

王(一)命

王命

(二)漢北(三)豺狼滿。巴西道路難。
(四)血埋諸將甲。(五)骨斷使臣鞍。
(六)牢落(七)新燒棧。(八)蒼茫(九)舊築壇。
深懷(一〇)喩蜀意。慟哭望(一一)王官。

漢北、豺狼滿つ、巴西、道路難し。
血は埋む諸將の甲、骨は斷ゆ使臣の鞍。
牢落たり新燒棧、蒼茫たり舊築壇。
深く懷ふ喩蜀の意、慟哭、王官を望む。

【字解】【一】王命　「詩經」に王命二南仲一とあり、周の天子が南仲といふ武將に命じ夷狄を征伐せしむることをいふ。これは朝廷より蜀を治める將を命ぜんことを希望する意をのべて「王命」と題したり。結句の「望二王官一」といふの意。【二】漢北　漢中府の北。【三】豺狼　吐蕃の兵をいふ。巴西　綿州・漢州あたりをさす。【四】血埋　渭北兵馬使呂月將といふもの吐蕃と盩厔に戰ひ擒にせらる、の類。【五】骨斷使臣鞍　廣德元年李之芳・崔倫、吐蕃に使す、吐蕃之を留めてかへさず。【六】牢落　さびしきさま。【七】新燒棧　上元二年二月、奴剌黨項、寶雞縣に寇し、大散關を燒く。又廣德元年七月吐蕃大震關に入り、蘭廓河鄯洮岷秦成渭等の州を陷る、等の類。【八】蒼茫　はつきりせぬ貌。【九】舊築壇　從前名將を任命せられしこと、仇注に郭子儀の事を引きたるは恐らくは當らず。【一〇】喩蜀意　喩蜀は司馬相如が故事。漢の武帝のとき唐蒙、夜郎（今の雲南地方）に通じ、巴蜀の吏卒を徵し、暴擧を爲す、巴蜀の人民大に驚く、武帝、相如に命じ使して唐蒙を責め、巴蜀の人民に蒙がしわざの天子の意に非ることを喩さしむ。【一一】王官　天子の任命せる官。

【題義】「字解」の條に詳かなり。前の「警急」と同じころの作ならん。

【詩意】漢北には豺狼がいつぱいあり、巴西は道路が不通である。味方の諸將の甲は血に埋められ、こちらから使にでかけた臣の鞍には死骸の骨さへないありさまだ。新に燒かれた棧道はさびしく、從

前擴をきづいて大將を任命したことなどは昔話みたやうにとりとめもないことがらとなつてしまつた。自分はむかし漢の武帝がわざわざ司馬相如を使者に任命して蜀の安堵をはかられた御趣意をおもうて、慟哭してさやうなお使ひの人でもきてくれればよいとのぞんでゐるのである。

征夫（一）

征夫

（二）十室幾人在。千山空自多。　十室、幾人か在る、千山空しく自ら多し。
（三）路衢唯見哭。城市不聞歌。　路衢、唯哭するを見る、城市、歌を聞かず。
（四）漂梗無安地。（五）銜枚有（六）荷戈。　漂梗、安地無く、銜枚、荷戈有り。
官軍（七）未通蜀。（八）吾道竟如何。　官軍未だ蜀に通ぜず、吾が道覚に如何。

【字解】（一）征夫　征伐にでてゐるをとこ。（二）十室　十戸。（三）衢　またみち。（四）漂梗　梗は棒切れ、漂梗は自己を比す。（五）銜枚　枚は箸のごときもの、それに紐をつけ、口にくはへさせて紐をうしろにしばる、兵卒に物を言はさず行軍するときの器なり、銜はふくむ、くはへること。（六）荷戈　戈をになふもの、兵卒をいふ。（七）未通蜀　蜀へかよふことができぬ。（八）吾道　自己のゆくべきみち、前途をいふ。

【題義】征夫のことに感じてより、前詩と同時の作ならん。

【詩意】このへんの地方では十軒の家にはたして幾人がのこつてゐるか。山だけがいたづらに多くあるばかりだ。路をあるいてみると哭してゐるものばかりみうける、城市をとほつても歌ふこゑはすこしもきこえぬ。自分も水にただようてゐる棒切のごとくおちついたばしよをもたぬが、それ以上に枚を口にくはへて戈を荷うて從軍してゐるものさへあるのである。まだ官軍が蜀への道をひらいてくれぬさうだが、いつたい自分の前途はどうなるだらう。

西山三首（一）

西山三首

〔一〕

夷界荒山頂。蕃州積雪邊。　夷界、荒山の頂、蕃州、積雪の邊。
築城（二）依白帝。（三）轉粟（四）上青天。　築城、白帝に依る、轉粟、青天に上る。
蜀將（五）分旗鼓。（六）羌兵（七）助（八）鎧鋋。　蜀將、旗鼓を分ち、羌兵、鎧鋋を助く。
（九）西南背（一〇）和好。殺氣日相纏。　西南、和好に背く、殺氣日に相纏ふ。

【字解】（一）西山　雪嶺をいふ、吐蕃との接境なり。（二）依白帝　白帝は西方をつかさどる帝なり、その帝のゐるところに依つてゐるとは高きをいふ。（三）轉粟　兵糧をはこぶこと。（四）上青天　山をのぼるの高きをたとへていふ。（五）分　部隊に分配す

る。【六】羌兵　唐に降參した羌種の兵。【七】助　吐蕃の亂に内應するをいふならん。【八】鎧鋌　鎧は頭盔なり、鋌は小さき矛なり。【九】西南　蜀の吐蕃と境を接した地をいふ、西南とは都よりして西南の義、一本に南を戎に作る、簡明なりといふべし。【一〇】和好　なかをよくすること。

【題意】吐蕃が松州を圍みしときのことをのぶ、雪嶺その境にあるを以て「西山」と題せり。廣德元年の作。

【詩意】夷の界は荒れた山の頂にあり、蕃の州は雪の積もつてゐるあたりにある。之をふせぐに味方は城を築くに白帝の居る樣な高いところに依り、兵糧をはこぶに青天にのぼるほどの困難をしてをる。さうして蜀將は旗鼓を分ちて之をふせぎ、降參した羌兵までが敵に內應して鎧鋌のことのてつだひをしてをる。西南境吐蕃のものが和好を破つたために、かくして日日殺氣がまとひつつある。

〔二〕

辛苦三城戍。長防萬里秋。　辛苦、三城の戍、長く防ぐ萬里の秋。

煙塵侵火井。雨雪閉松州。　煙塵、火井を侵し、雨雪、松州を閉づ。

風動將軍幕。天寒使者裘。　風は動く將軍の幕、天は寒し使者の裘。

漫山賊營壘。迴首得無憂。　漫山、賊、壘を營む、首を迴らして憂無きを得むや。

【字解】【一】三城　松・維・保・三州の城。【二】防秋　秋の來寇をふせぐ。【三】火井　邛州の火井をさすならん。【四】閉　城門とづ、即ち敵にかこまれてゐること。【五】風動　幕の不安をいふ。【六】使者裘　蓋し和親を議するため使者をだせしならん。【七】漫山　山にはびこる。【八】迴首　作者閬州にあるものなれば閬州より松州の方面へむくをいふ。

【詩意】吐蕃に對する三城の戍は辛苦なことで、萬里のとほくにでていつまでも秋の侵入をふせいでゐるのだ。いま敵の兵馬の塵は火井の方面を侵し、雨雪のときに松州はかこまれその城門は閉ぢられてゐる。將軍の陣營の幕には風がはためき、こちらから出した使者の裘にはいたづらに天が寒く感ぜられる。みわたす山山賊がとりでを營んでゐる。これではそちらをむいて心配せずにゐられようか。

〔三〕

子弟猶深入。關城未解圍。　子弟猶深く入る、關城未だ圍を解かず。

蠶崖鐵馬瘦。灌口米船稀。　蠶崖、鐵馬瘦せ、灌口、米船稀なり。

辯士安邊策。元戎決勝威。　辯士、安邊の策、元戎、決勝の威。

今朝烏鵲喜。欲報凱歌歸。　今朝、烏鵲喜ぶ、凱歌して歸るを報せむと欲す。

【字解】【一】子弟　邛州雅州及び羌兵のわかもの。【二】深入　敵地へおくふかくはひる。【三】關城　せきしよを設けたしろ。けだし松州城をいふ。【四】蠶崖　關の名、導江縣西北七十里にありと、導江縣は唐のとき今の灌縣を分ちて置きたるものなり。【五】鐵馬　よろひたるうま。【六】灌口　鎭の名、導江縣西六十里にありと。【七】辯士　雄辯をふるふ策士。【八】安邊策　邊境を安全に

するはかりごと。【九】元戎　總大將、けだし節度使をさす。【一〇】決勝威　かちいくさをきめる威力。【一一】烏鵲喜　「西京雜記」に烏鵲噪而行人至の語あり、かささぎのよろこぶはいいことのあるきざしなりといへり。【一二】報　かささぎがしらせる。【一三】凱歌歸　官軍がかちどきをあげてかへる。

【詩意】諸方のわかものがまだおくふかく攻め入つてゐるが關城はまだ圍みがとけぬ。蠶崖關ではみかたの鐵馬は痩せ、灌口鎭には兵糧ぶねもまれである。このとき辯士は邊地を安全にするはかりごとをたて、大將は勝敗を決定するだけの威力を示さうとかかつてゐる。けさはかささぎが喜んでゐるが、それをみると味方がかちどきをあげてかへるぞといつてしらせてくれるつもりであるかの様にみえる。

與嚴二郎奉禮別

嚴二郎奉禮と別る

別君誰暖眼。將老病纏身。　君に別るれば誰か暖眼ならむ、將に老いむとして病、身に纏ふ。

出涕同斜日。臨風看去塵。　出涕、斜日に同じくす、臨風、去塵を看る。

商歌還入夜。巴俗自爲隣。　商歌還た夜に入る、巴俗自ら隣を爲す。

尙愧微軀在。遙聞盛禮新。　尙愧づ微軀の在るを、遙に聞く盛禮の新なるを。

山東群盜散。闕下受降頻。　山東、群盜散ず、闕下、受降頻なり。

諸將歸應盡。題書報旅人。　諸將、歸する應に盡くべし、書を題して旅人に報せよ。」

【字解】【一】嚴二郎奉禮　嚴二郎は排行二なる人ならん、奉禮は官名、奉禮郎なり、君臣の班位を掌りて以て朝會祭祀の禮を奉ずるものなり。【二】暖眼　冷眼の反對、あたたかいめでみてくれるをいふ。【三】出涕同斜日　斜日のときに同じく涕をだす。【四】去塵　嚴が去りゆくみちにたちのぼるちり。【五】商歌　商調のうた。「淮南子」に齊の桓公、甯戚といふものが牛を飼ひ車のそばで牛の角をうちながら疾く商歌するを聞きその賢なるを知りて擧げ用ひたり。また孔子の門人子貢の商歌せること「莊子」にみゆ。【六】巴俗　巴地の風俗、これは輕蔑していへるものなるべし。【七】微軀　ささいなからだ。【八】盛禮新　盛禮は長安にて行はるるさかんなる儀禮にて大事を宗廟に告げ、また俘虜を獻ずる等のことをさす。【九】山東　太行山の東、河北、直隸の地方をいふ。【一〇】盜散、受降　このとき薛嵩は四州を以て降り、田承嗣は魏州を以て降れり、是、盜散受降のことなり。【一一】諸將　はじめ賊軍に從ひし武將等をさす。【一二】題書　てがみをかく。【一三】旅人　作者自己をさす。

【題義】嚴某が奉禮郎に任ぜられて長安へゆくので之と別れることをのべた詩。廣德元年閬州にての作。

【詩意】あなたと別れたなら、だれが果してわたしをあたたかいめでみてくれようか、わたくしは老いんとして病氣にまとはれてゐる。日のかたむくときいつしよに涕をながし、風にのぞんであなたの去るあとに立ちのぼるほこりをながめやる。』それから商調のうたをうたうてまた夜になつた。あたりを見れば自分ととなるものは巴地の風俗である。自分はじぶんの様なつまらないからだがなくなり

もせずまだ存在してゐるのかと愧づかしくおもうてゐるが、はるかにみやこに盛禮があらたに行はれるときくはうれしい。いま山東に盜賊は離散してしまひ、御所のごもんでは賊の降參をしきりにおうけになつてゐる。賊の武將等はすつかり歸順したとおもはれるが、あなたはそのことがあつたら手紙にかいてこの旅人たるわたしにしらせてください。』

贈裴南部(一)　【原注】聞袁判官(二)自來欲有按問(三)

裴南部に贈る　【原注】袁判官自ら來り按問する有らんと欲すと聞く

塵滿萊蕪甑(四)。堂橫單父琴(五)。　塵は滿つ萊蕪の甑、堂には橫はる單父の琴。
人皆知飮水(六)。公輩(七)不偸金(八)。　人皆、水を飮みて、公が輩の金を偸まざるを知る。
梁獄書應上(九)。秦臺鏡欲臨(一〇)。　梁獄、書應に上るなるべし、秦臺、鏡、臨まむと欲す。
獨醒(一一)時所嫉。群小(一二)謗能深。　獨醒、時の嫉む所、群小、謗能く深し。
卽出黃沙(一三)在。何須白髮侵(一四)。　卽ち黃沙を出でて在らむ、何ぞ須ひむ白髮の侵すを。
使君(一五)傳舊德(一六)。已見直繩心(一七)。　使君、舊德傳ふ、已に見る直繩の心。

【字解】【一】裴南部　南部は縣の名、閬中縣の南にあり、裴南部とは南部縣令裴某をいふ。【二】袁判官　判官袁某。【三】按問　裴某が罪惡をしたかどうかをとひただししらべる。【四】萊蕪甑　後漢の范丹が故事、丹、字は史雲、萊蕪縣の長となり淸貧なり、人歌うて曰く、甑中生塵范史雲、釜中生魚范萊蕪と。甑は米を炊ぐもの、「脚のなきなべ」なり、范を以て裴に比するなり。【五】單父琴　單父は縣の名、孔子の門人宓子賤單父の宰となり琴を彈じ、堂より下らずして治まるといへり、子賤を以て裴に比す。【六】飮水　晉の鄧攸、吳郡の守となる、米を載せて官にゆき、俸祿は受くる所なく、吳の水を飮むのみ、鄧攸を以て裴に比す。【七】公輩　公は裴をさす、あなたのごとき人人の意。【八】不偸金　漢の直不疑が故事。不疑、郞となる、同舍に休暇にてかへるものあり、同舍の郞の金を持ちて去る、金の所有者不疑を疑ふ、不疑なんともいはず金を償ふ、のち休暇にてかへりし男歸り來る、金の所有者大に慙づと。不疑を以て裴に比す。この裴某は蓋し他人の財をどうかせしとの嫌疑をうけしとみゆるなり。【九】梁獄書應上　漢の鄒陽が故事、鄒陽、梁の孝王に從て遊ぶに羊勝之といふものの讒言をうけ獄にくださる。陽獄中より書を上りて獄よりいづることを得たり。裴某時に辯明書をだせしをいふ。【一〇】秦臺鏡欲臨　秦に廣四尺、高五尺九寸の方鏡あり、表裏洞明にして腸胃五臟をも照らし見るといふ、臺は鏡をのせる臺、鏡は袁判官の明知にたとふ、臺に臨まんとするとはしらべにこようとしてゐることをいふ。【一一】獨醒　屈原が故事、原は衆人が醉へるにひとりさめたり、裴、之に似たるをいふ。【一二】群小　多くの小人。【一三】黃沙　地名にして獄を意味す、晉の太康五年六月初めて黃沙の獄を置くと史にみゆ。【一四】何須白髮侵　心配して白髮に侵されるなかれといふなり。【一五】使君　袁判官をさす。【一六】傳舊德　これまでの德が世につたへられてゐる。【一七】直繩心　正直の心、正直なればその裁判の正しきこともしらるる。

【題義】南部縣の縣令裴某に贈つた詩。裴は疑獄事件にひつかかりて袁判官のとりしらべをうけんとしてゐた。それでこの詩をやつてなぐさめたのである。廣德元年閬州にての作。

【詩意】范萊蕪の甑には塵がいつぱいだ。單父の縣宰宓子賤の堂には琴が一張おいてあるきりだ。あ

なたはそんなひとだ。だから人はみんなあなたは鄧攸のごとく水ばかりのみ、直不疑のごとく他人の金などぬすまぬものだといふことを知つてゐる。』 あなたは鄒陽のごとく辯明書をだしたでありませう、いまや秦鏡の如きあかるい裁判官がこようとしてゐるのである、酔つばらひのなかにひとりで醒めてをれば時世の人たちにねたまれる、つまらぬやつらはずゐぶん深くひとのことをわるくいふものだ。あなたはすぐに黄沙の獄から出られることであらう。心配して白髪に侵される必要はちつともない。判官袁君は評判の徳のある人だ。この人がくるなら法にかなつたまつすぐな裁判することは見えてゐる。

巴山(一)

巴山遇(二)中使。(三)云自(四)陝城來。
(五)盗賊還(六)奔突。(七)乘輿恐未(八)回。
天寒(九)邵伯樹。(一〇)地濶(一一)望仙臺。
(一二)狼狽(一三)風塵裏。(一四)羣臣安在哉。

巴山

巴山、中使に遇ふ、云ふ陝城より來る。
盗賊還奔突す、乘輿恐らくは未だ回らざらむと。
天は寒し邵伯の樹、地は濶なり望仙臺。
狼狽す風塵の裏、羣臣安くに在りや。

【字解】【一】巴山 閬州の山をいふ。【二】中使 宮中よりの使者。【三】云 使者が云ふ。【四】陝城 陝州の城、陝州は河南省にあり、廣德元年十月、吐蕃は邠州及び奉天を陷れ、代宗の車駕陝州に行幸あり、又三日にして吐蕃は長安を陷れたり。【五】盗賊 吐蕃をいふ。【六】奔突 はしつてついてくる。【七】乘輿 天子(代宗)のおのりもの。【八】回 長安へかへる。【九】邵伯樹 「詩經」に甘棠の詩あり、甘棠(やまなしのき)の樹のしたで周の邵伯が訴をきいたといはれ、樹が陝州府署にのこつてゐると稱せられてゐる。【一〇】地濶 濶はひろき義なるも作者は遠き義に用ふ、ここからかしこまでまびろいといふので遠い義を生ずる。【一一】望仙臺 漢の武帝の建てし臺にて華州華陰縣に在り、陝州へゆくには華州を經てゆく、近地の名所をあげたり。【一二】狼狽 うろたへる。【一三】風塵 兵亂のちり。【一四】羣臣 多くの朝廷の臣。

【題義】閬州の山地で當時代宗の逃げてをられた陝州からきた使者にあうたことをのべたり。廣德元年十一月閬州にての作。

【詩意】自分は巴山で宮中からきた使者にであうた。彼がいふに「自分は陝州の城から來た。また盗賊が奔つて突撃してきた。お上(代宗)のおのりものは未だ都へおかへりにはならぬであらう。」と。邵伯の訴をきいた樹のあるところには寒ぞらがきた。望仙臺のあるところはここからよほどとほい。そんなところまで兵亂のちりのなかをうろたへて逃げだしたとはなんといふざまだ。朝廷に果して羣臣が居るといへるのか。

早花(一)

(二)西京安穩未。不見一人來。

早花

西京、安穩なりや未や、見ず一人の來るを。

（三）臘日（四）巴江（五）曲。山花已自開。　臘日、巴江の曲、山花已に自ら開く。
（六）盈盈（七）當（八）雪杏。（九）艷艷（一〇）待春梅。　盈盈、雪杏に當る、艷艷として春梅を待つ。
（一一）直苦（一二）風塵暗。誰憂客鬢（一三）催。　直風塵の暗きに苦しむ、誰か憂へむ客鬢の催すを。

【字解】【一】早花　はやざきの花、花は桃花ならん。【二】西京　長安。【三】臘日　十二月の臘日、臘日のこと已にみゆ。【四】巴江　嘉陵江。【五】曲　みくまり。【六】盈盈　みづみづしき貌。【七】當　匹敵する。【八】雪杏　雪のごとくしろいあんずの花。【九】艷艷　つやあるさま。【一〇】待春梅　春梅のさくのを待つてゐる、自分がはやくさいたからである。【一一】直苦　作者の感じをいふ。【一二】風塵　兵亂のちり。【一三】催　次第に生じ來るをいふ。

【題義】はやざきの桃花をみてよめり。廣德元年十二月の作ならん。

【詩意】長安は安穩であるのやらどうやら、だれひとりこちらへ來たものがない。ここの巴江のみくまりには臘日であるのにはや山の桃の花がさいた。花の樣子はみづみづしくて雪のやうな杏の花にも匹敵してをり、つやつやとして梅がさくのを待つてをるやうだ。自分は之を見てただ兵亂の塵がまだ暗くとざしてゐることのみにこまつてをる。（兵亂の塵ある故に長安へかへれず巴地に居る、巴地にをるからこんな時ならぬ花をみるとの底意なるべし）。客中のびんの毛がおひおひに白髮になることなどはだれが心配するものか。

發閬中（一）　閬中より發す

前有毒蛇後猛虎。　前には毒蛇有り、後には猛虎。
（二）溪行盡日無（三）村塢。　溪行盡日、村塢無し。
江風蕭蕭雲拂地。　江風蕭蕭として、雲、地を拂ふ。
山木慘慘天欲雨。　山木慘慘として、天、雨ふらむと欲す。
（四）女病妻憂（五）歸意急。　女病み妻憂へて歸意急なり。
（六）秋花（七）錦石誰能數。　秋花錦石、誰か能く數へむ。
（八）別家（九）三月一書來。　家に別れて三月、一書來る。
（一〇）避地何時免愁苦。　避地何の時か愁苦を免れむ。

【字解】【一】閬中　閬州の閬中縣。【二】溪行　渓邊をあるく。【三】村塢　塢は「どて」。【四】女病妻憂　これは後にある書中の内容なり、梓州に於てむすめが病み、妻がしんぱいしてゐるなり。【五】歸意急　家へかへらうとの意が急だ。【六】秋花　今は冬なれど秋から咲いてゐる花をいふ。【七】錦石　うつくしい石。【八】別家　家は梓州の家。【九】三月　九月に閬州へきたのであるから、十二月で三月になる。【一〇】避地　嚴氣の土地をさける。

【題義】閬中から出發して梓州へかへつたときの詩。廣德元年十二月の作。

【詩意】前には毒蛇がゐる、うしろには猛虎がゐる、あさから晩までたにがはにそうてゆくが村のどてのやうなものはみあたらぬ。江風はさびしく吹いて雲は地面を拂ひ、山の木はものがなしさうで雨がふりだしさうなそらだ。きけばむすめは病氣であり妻は心配してゐるといふので自分のかへるここ

ろはいそいでゐるのだ。秋草の花だの錦紋の石などが溪のそばにあつたとてそんなものをだれがかぞへたててゐられようぞ。うちから別れて三月めに一本の手紙がきたのだ。あちこち土地をよけてゐてはいつ愁苦から免れることができようか。

江陵望幸（一）

（二）雄都元壯麗。望幸欻（三）威神。
地利西通蜀。天（四）文北照秦。
風煙含（五）越鳥。舟楫控（六）吳人。
未枉周（七）王駕。終期漢（八）武巡。
甲（九）兵分聖旨。居（一〇）守付宗臣。
早發雲（一一）臺仗。恩（一二）波起（一三）涸鱗。

江陵幸を望む
雄都元壯麗、望幸欻ち威神。
地利、西、蜀に通ず、天文、北、秦を照らす。
風煙、越鳥を含み、舟楫、吳人を控す。
未だ枉げず周王の駕、終に期す漢武の巡。
甲兵、聖旨より分つ、居守、宗臣に付す。
早く雲臺の仗を發して、恩波、涸鱗を起さむ。

【字解】【一】江陵望幸　江陵は湖北の荊州府江陵縣、これは江陵の人人をさす、望幸とは天子の行幸をのぞむをいふ。建都十二韻の詩とくらべてみるべし。上元の初に呂諲といふもの荊州に南都を置かんことを請ひたり、因て荊州を江陵府とし諲をその尹とし、永平軍一萬人を置きたり。廣德元年十月に代宗吐蕃の亂を避けて陝州に幸するや、衛伯玉が才幹あるを以て之を江陵尹に任じ、荊南節度觀察等使に充てたり。當時代宗陝州より江陵に巡幸せんと欲すとのうはさありしによりてこの詩を作りたり。作者は「建都」に於ては建都に不滿の意を示したるが、この詩には行幸を望むことをのべたり。【二】雄都　地形の雄大なみやこ、江陵をさす。【三】欻威神　威神とは尊嚴の意、たちまち威神とは「にはかに尊嚴をますがごとし」との意ならん。【四】天文　南方朱鳥の星宿をさすといへり。【五】含越鳥　越は今の浙江省、荊州とはかけ離れたるも風煙は越の鳥までいれてをると大きくいひしなり。【六】控吳人　吳は江蘇省の地、吳の人をもひかへてゐる。【七】周王駕　周の穆王の車駕、穆王は天下を周遊してどこにも車轍馬迹あらしめんとしたといふ人なり、ここは代宗にあてていふ。【八】漢武巡　漢の武帝の巡幸。武帝も南方を巡ぐりて盛唐といふ地までゆけり。以て代宗に比す。【九】甲兵分聖旨　代宗のおぼしめしによりて、甲や武器を分けたとは永平軍をここに置いたことをいふ。【一〇】居守付宗臣　ここに居て守る役を世の宗ぶ所の臣に付托した、とは衛伯玉を任命したことをいふ。【一一】雲臺仗　已にみゆ、御所の旗さしものをいふ、お行列に加はるものなり。【一二】恩波　天子のごおんの波。【一三】起涸鱗　涸鱗はみづのかれたところになるさかななり、水なければさかなはひからびて死せんとす。起とはれてゐるのをひきたたせること。涸鱗とは窮餓せる人民をたとへていふ。

【題義】江陵の人が代宗の行幸をおまちしてゐることをのべたり。（餘は「字解」の條をみよ）。廣德元年冬の作。

【詩意】江陵の雄都は元來が壯麗なるものであるが、人民が行幸を望む樣になつてからはにはかに尊嚴が加はつた樣である。江陵は地の利はといへば西のかた蜀に通じてをり、天文でいへば朱鳥の星のひかりは北のかた秦を照らし、風煙ははるかに越の鳥をもふくみいれ、舟楫の便はとほく吳地の人をひかへてゐる。これほどの場所だ。まだ周の穆王の車駕をおまげくださらぬけれども結局漢の武帝の御巡幸あらんことを期してゐるのである。すでにおぼしめしによつて甲兵をここに分けて永平軍を駐在せしめられ、またここにゐてここを守る役としては衆望のたつとぶ臣下に御付托があつた。このう

へは早くごしよから御行列のたてものを發せられここにおいでくださつて、ご恩の波のうるほひを以て枯死せんばかりの魚の樣な罷敝してゐる人民をひきたたせる樣にしていただきたいものでござる。

愁坐

愁坐

高齋常見野。愁坐更臨門。　高齋常に野を見る、愁坐更に門に臨む。

十月山寒重。孤城水氣昏。　十月、山寒重く、孤城、水氣昏し。

葭萌氐種迥。左擔犬戎屯。　葭萌、氐種迥に、左擔、犬戎屯す。

終日憂奔走。歸期未敢論。　終日、奔走を憂ふ、歸期未だ敢て論せず。

【字解】〔一〕愁坐　心配しながらすわる、第二句の「愁坐」の二字をとる。〔二〕高齋　たかき書齋。〔三〕重　つよきをいふ。〔四〕孤城　閬州の城。〔五〕葭萌　蜀王その弟葭萌を漢中に封じ號して苴侯といふ、因て其地を命じて葭萌といふ、人名にして地名となりしなり、のち縣名となる、保寧府昭化縣にあり。梓州よりは東北にあたる。〔六〕氐種　すなはち羌人をさす。〔七〕左擔　その地險阻にして北より來るものは右肩にて物を擔ふを得ざるにより左擔道の名ありと、地は綿州梓潼縣にあり、梓州の北にあたる。〔八〕犬戎　吐蕃をさす。〔九〕奔走　東奔西走なり。〔一〇〕歸期　故鄕へかへる時期。

【題義】心配しながらすわつてかんがへたことをのぶ。詩中に「奔走」とあれば梓州閬州の間を往來せしころの作なるには相違なきも、「十月」とあれば恐くは廣德元年閬州にての作ならんか。

【詩意】書齋からはいつも原野がみえてゐるが、いまは更に門のところへでてきて心配がほにすわつてみる。いま十月で山の寒さはきつく、このはなれ城では水氣がくらくとざしてゐる。葭萌の地にははるかに氐種のものが居り、左擔の地には犬戎（吐蕃）がたむろしてゐる。（いづれも道路のじやまになるもの。）こんなありさまで自分はあさから晩まで奔走の心配がある。いつ故鄕にかへれるかなどいふことは詮議だてさへようせぬのである。

遣憂

憂を遣る

亂離知又甚。消息苦難眞。　亂離、又甚しきを知る、消息、眞なり難きに苦しむ。

受諫無今日。臨危憶古人。　諫を受くれば今日無かりしならむ、危に臨みて古人を憶ふ。

紛紛乘白馬。攘攘著黃巾。　紛紛として白馬に乘ず、攘攘として黃巾を著く。

隋氏留宮室。焚燒何太頻。　隋氏、宮室を留む、焚燒何ぞ太だ頻りなる。

【字解】〔一〕遣憂　うれへのこころをおひはらふ。〔二〕亂離　世みだれて人人離散すること。〔三〕消息　みやこのたより。〔四〕受諫　郭子儀、代宗に對して吐蕃に對し警戒せざるべからざることをいふ、代宗用ひず、受諫とは代宗が子儀のいさめを受け用ひられしならばの意。〔五〕今日　今日の擾亂をいふ。〔六〕臨危　國家のあやふきときにさしかかつては。〔七〕古人　むかしの賢人。〔八〕紛紛、攘攘　並にみだろるかたち。〔九〕乘白馬、著黃巾　反亂者、盜賊のおこること。梁の武帝のとき侯景反す、白馬に乘る。後漢の

靈帝のとき鉅鹿の人張角自ら天公と稱し兵をあぐ、其の兵三十六萬人みな黃巾を著く。【一〇】隋氏　隋朝をいふ、唐のことなれど遠慮して隋といふ。【一一】留宮室　唐の宮室は隋以來のもの、隋がとどめおきしものといへるなり。【一二】焚燒　宮室を燒きはらふこと。廣德元年吐蕃入寇す、邊將急を告ぐ。程元振みな奏聞せず。十月吐蕃深く入り來る、代宗はじめて兵を治めしむ、吐蕃はすでに長安の北、渭水の便橋を渡る。代宗逃れて陝州に幸す。吐蕃長安に入り大に宮室を燒きはらふ。詩はその事をききて詠ぜり。

【題意】吐蕃使入のことをきき心配をはらふためにつくれる詩。廣德元年冬の作。

【詩意】みやこの騷動はまたひどくなつたことを知つたが、たよりがどれがほんたうだかわかりにくいのでこまる。もしお上（代宗）が以前臣下の諫めをおうけいれになつてゐたなら今日のやうなさわぎも無かつたであらうものを。自分は國家の危難にのぞんでは古の賢人をおもふのである。いまどこでもだれでもがみだれたつて白馬に乘つてそむくもの黃巾をつけて盜賊をはたらくものばかりである。さうして隋以來のこされたわが唐の宮室の焚きはらはれることがなんでかく頻頻とあるのであらうか。

冬狩行（一）

【原注】時梓州刺史章彝、兼侍御史、留後東川

冬狩行　【原注】時に梓州の刺史章彝、侍御史を兼ねて、東川に留後たり

君不見東川（二）節度　　君見ずや東川の節度、兵馬雄なり、

兵馬雄（三）。

校獵（四）亦似觀（五）成功（六）。　校獵、亦、成功を觀すに似たり。

夜發猛士三千人。　夜、猛士三千人を發す、

淸晨（七）合圍（八）步驟同（九）。　淸晨合圍、步驟同じ。

禽獸已斃十七八（一〇）。　禽獸已に斃る十に七八、

殺聲（一一）落日（一二）迴（一三）蒼穹（一四）。　殺聲落日、蒼穹に迴る。

幕前（一五）生致（一六）九靑兕（一七）。　幕前生きながら致す九靑兕、

馲駝（一八）巖嵬（一九）垂玄熊（二〇）。　馲駝巖嵬として玄熊垂る。

東西南北百里間。　東西南北百里の間、

髣髴（二一）蹴踏（二二）寒山空（二三）。　髣髴たり蹴踏寒山空しきに。

有鳥名鸜鵒（二四）。　鳥有り鸜鵒と名く、

力不能高飛逐走蓬（二五）。　力高飛する能はず走蓬を逐ふ。

肉味不足登鼎俎（二六）。　肉味、鼎俎に登すに足らず、

【字解】【一】冬狩行　冬のかりのうた。【二】東川節度　東川節度使の留後（ろすやく）章彝をいふ。【三】雄　雄壯。【四】校獵　諸將あるも障害物を設け禽獸をさへぎりてかりする義と解すべし。【五】觀　人人にみせしめること。【六】成功　士卒の訓練ゆきとどきたる成績。【七】淸晨　はれたるあした。【八】合圍　多人數で包圍する。【九】步驟同　驟ははしること、あしなみのそろひて一致するをいふ。【一〇】十七八　十中に七又は八。【一一】殺聲　殺伐なこゑ。【一二】落日　ゆふひのおつるとき。【一三】迴　殺聲がめぐるなり。【一四】蒼穹　あをぞら、穹とは天の弓なりになりたるをいふ。【一五】幕前　節度使の陣幕のまへ。【一六】生致　生きながらもつてくる。【一七】靑兕

（二七）胡爲見羈（二八）虞羅（二九）中。　胡爲れぞ虞羅の中に羈せらるるや。』
（三〇）春蒐冬狩侯（三一）得（三二）用。　春蒐冬狩、侯、用ふることを得、
使君（三三）五馬（三四）一馬（三五）驄。　使君五馬、一馬は驄なり。
況今攝（三六）行大將權。　況んや今攝行す大將の權、
號令頗有前賢（三七）風。　號令頗る前賢の風有り。』
（三八）飄然時危一老翁。　飄然時危し一老翁、
（三九）十年厭見旌旗（四〇）紅。　十年見るを厭ふ旌旗の紅。
喜君士卒甚整肅。　喜ぶ君が士卒甚だ整肅なるを、
爲我迴轡（四一）擒西戎（四二）。　我が爲に轡を迴して西戎を擒にせよ。
草中狐兎盡（四三）何益。　草中の狐兎盡すも何の益かあらむ、
（四四）天子不在咸陽宮。　天子は在さず咸陽宮。
朝廷雖無幽（四五）王禍。　朝廷、幽王の禍無しと雖も、
（四六）得不哀（四七）痛塵（四八）再蒙。　哀痛せざるを得むや、塵再び蒙れり。

鳴呼得不哀痛塵再蒙。』　嗚呼哀痛せざるを得むや、塵再び蒙れり。』

見は野牛。【一八】駝駝　駱駝、らくだのせなかをいふ。【一九】嵬峞　高き貌、獲物をうづだかくつめるさま。【二〇】垂玄熊　玄熊は即ち獲物の一なり、垂るとは獲物が多きゆゑらくだの背からはみだして下方へぶらさがつてゐるといふこと。【二一】髣髴　さも似たり。【二二】蹴踏　士卒が人馬にてけちらしてあるく。【二三】寒山空　冬の山ががらつぽになる。【二四】鸜鵒　ひふどり。【二五】逐走蓬　走蓬は飛蓬のごとし、とんでゆくよもぎ、逐とはそのあとをおつかける、これは高くとべず地面をはうてとぶをいふ。【二六】登鼎俎　かなへ、まないたのうへにのぼす、料理するをいふ。【二七】胡爲　何爲に同じ、いかなるわけで。【二八】羈　つなぐ。【二九】虞羅　虞は山林の番人、羅は「あみ」、鸜鵒をいへるはこんな微物までとつたことの例にあげたるなり。【三〇】春蒐冬狩　「周禮」に天子の四時のかりをあげて、春蒐夏苗秋獮冬狩といへり。又「左傳」にみゆ。【三一】侯　諸侯。【三二】得用　用は行ひもちふること、蒐狩の事は諸侯も之を爲すことを得べし。【三三】使君　韋彝をいふ。【三四】五馬　太守は駟馬に右驂をそへ五匹の馬を用ふ。【三五】一馬驄　驄はあをうま、御史ののるうま。韋彝は侍御史を兼ぬるゆゑに之をいへり。【三六】攝行　かりにおこなふ、留後なればなり。【三七】前賢　むかしの賢人。【三八】飄然時危　時危飄然をさかさまにいへり。【三九】十年　天寶十四年より廣德元年まで九年、成數をあげ「十」といへり。【四〇】旌旗紅　軍隊の旗色。【四一】迴轡　たづなをひきめぐらす。かりばから西戎の方へむけかへること。【四二】西戎　吐蕃をさす。【四三】盡　狩りつくす。【四四】天子不在咸陽宮　代宗吐蕃に攻められ陝州へ逃げだせしことをいふ、事實は前詩「遣憂」の條を見よ。咸陽宮は長安の宮殿をさす。【四五】無幽王禍　周の幽王は驪山の犬戎に攻められて殺さる。禍とは殺されることをいふ。代宗は逃げただけでまだ殺されるにはいたらぬ。【四六】得　反語によむ。【四七】哀痛　かなしみいたむ。【四八】塵再蒙　天子外へにげだすことを蒙塵といふ、再蒙といふはさきに玄宗は安祿山の亂にあひて蜀へ逃げゆかれたり、こんど代宗の陝州への逃げだしにて二回めなり。

【題義】章彝が冬の狩をせしことにつきてのぶ。廣德元年冬、梓州にての作。

【詩意】諸君見よ、東川節度の兵馬は雄壯なるものである。こんど障害物を設けて獵をするのだが同時に平生の訓練のゆきとどいてゐることを人にみせるつもりのやうである。まづ夜なかから三千人の猛士をくりだす、あしたにはそれがあしなみをそろへて禽獸を包圍するのである。』かりたてられた禽獸はすでにたふれたものが十中七八であり、ゆふ日のおつるころ殺伐な聲があをぞらまでまひあが

る。本陣の幕のまへには九匹の青色の野牛が生きたままもちきたされる。駱駝のせなかには獲物がうづだかくつまれ玄熊などが背から垂れさがつてゐる。凡そ東西南北百里の間といふものは士卒がそれをふみちらして冬の山もからつぽになつたと同様である。ここに鸐鴿といふ鳥があつてその力はたかくとべず草むらで蓬のあとをおつかけまはる、これは料理してもたべられるほどの肉味のあるものでもないのになんで山番のあみのなかにひつかかつたのか、かやうなものまでかりとられたのである。』いつたい春の蒐、冬の狩は天子の禮であるが諸侯でもそれはやれるのである、韋君は刺史でまづ諸侯の身分だ、その馬は刺史としては五馬であるが、そのうへに侍御史だから一馬は驄馬である。まして節度使の留後で今は大將の權力を代行して、その號令やすこぶる前代賢者の風がある。』（之をみるにつけて自分に所感がある。）いま時世の危きとき漂泊生活をしてをるこのおやぢは十年このかた軍旗の色をみるのがいやになつてをる。ところで君の士卒の甚だ整肅であるのを見てうれしくおもふ。どうかわたしの爲めに轡をむけかへていまあばれてゐる西戎（吐蕃）をいけどりにしてもらひたい。草のなかにゐる狐や兎をかりつくしてみたところで何の利益があるか。今、天子は咸陽宮におはさず陝州の方へおにげになつてをるのである。朝廷におかせられてはなるほどまだむかしの周の幽王が驪山で殺されたまうたほどの禍はないといふものの、どうして我我はこんどの二度めの御蒙塵に對して哀痛せずにゐられうか。ああどうして二度めの御蒙塵に對して哀痛せずにゐられうか。』

（一）山寺　【原注】章留後同遊。得開字　山寺　【原注】章留後同遊す、開の字を得たり

野寺根（二）石壁。諸龕（三）遍（四）崔嵬。　野寺、石壁に根す、諸龕、崔嵬に遍し。
（五）前佛不復辯（六）。百身一苺苔。　前佛、復辯せず、百身、一に苺苔なり。
雖有古殿存。（七）世尊亦塵埃。　古殿の存する有りと雖も、世尊も亦塵埃なり。
如聞（八）龍象泣。足令（九）信者哀。』　龍象の泣くを聞くが如し、信者をして哀ましむるに足れり。』
（一〇）使君騎紫馬。（一一）捧擁從（一二）西來。　使君、紫馬に騎り、捧擁して西より來る。
（一三）樹羽靜（一四）千里。（一五）臨江久徘徊。　樹羽、千里靜なり、江に臨みて久しく徘徊す。
山僧衣（一六）藍縷。（一七）告訴（一八）棟梁摧。　山僧、藍縷を衣る、告訴す棟梁摧くと。
（一九）（二〇）公爲顧（二一）賓從。（二二）咄嗟（二三）檀施開。』　公爲に賓從を顧み、咄嗟、檀施開く。』
（二四）吾知多（二五）羅樹。（二六）卻倚蓮華臺。　吾知る多羅樹、卻つて倚る蓮華臺。
（二七）諸天必歡喜。（二八）鬼物無（二九）嫌猜。　諸天必ず歡喜し、鬼物、嫌猜無きを。
（三〇）以茲（三一）撫士卒。孰曰非（三二）周才。』　茲を以て士卒を撫す、孰れか周才に非ずと曰はむ。』
（三三）窮子失淨處。高人憂禍胎。　窮子、淨處を失す、高人、禍胎を憂ふ。

歲晏(三四)風(三五)破肉。荒林(三六)寒司迴(三七)。　歲晏れて風肉を破る、荒林寒くして司迴る。
思量入(三八)道苦。自哂同嬰孩(三九)。　思量す入道の苦しきを、自ら哂ふ嬰孩に同じきを。』

【字解】【一】山寺　山上の寺。梓州の某寺なり。觀音寺ならんか。【二】根　石壁を根基とするなり。【三】諸龕　龕は佛像をはめこんである處をいふ、蓋し石巖にほりつけしものならん。【四】崔嵬　山をいふ。【五】前佛　眼前にあらはれてゐる佛像。【六】苺苔　こけ。【七】世尊　釋迦の像、これは殿中にあるもの。【八】龍象　僧の秀でたるものをさしていふ。【九】信者　佛法を信奉する人人。【一〇】使君　章彝。【一一】排擠　多くの人人にかこまれる。【一二】從西來　此句によれば寺は梓州の東にあたる寺とみえたり、東なる寺ならば觀音寺ならんか。【一三】樹羽　羽は羽旆ならん、羽のついたはた。【一四】靜千里　經過するところ人さわがせをせぬ。【一五】臨江　江は涪江。【一六】藍縷　ぼろぼろ。【一七】告訴　章に向つて申しだす。【一八】棟梁　寺のむなぎ、はり。【一九】公　章をさす。【二〇】爲　僧のために。【二一】賓從　賓客、從者。【二二】咄嗟　あつといふまに。【二三】檀施開　檀施とは梵語と漢語とを合併したる語なり、梵語の檀波羅蜜は漢語にて布施の義なり、檀と施とを合はせて檀施といふなりと。開とははじめたこと。【二四】吾知　知の字は恐らくは無嫌猜の句までへかかるならん。【二五】多羅樹　佛教の經文を寫す樹の名。「酉陽雜俎」にいふ、貝多は摩伽陀國に出づ、樹の長さ六七尺、冬を經て凋まず、此の樹に三等あり、一は多羅婆力叉貝多、二は多梨婆力叉貝多、三は部闍婆力叉貝多これなり。多羅・多梨は並に其の葉に書す。部闍の一種は其の皮を取りて之に書す。貝多は漢譯すれば葉なり、婆力叉は漢譯すれば樹なり云云。詩には樹とあれどいきた樹があるはずなければ、樹葉にて寫せし經文をさせるなるべし。【二六】卻倚蓮華臺　蓮華臺は佛の座をいふ、七寶蓮華臺なり、卻倚とは一たび荒廢せし寺なりしが章使君の布施によりて經文がふたたび佛の寶座に倚るを得るの義ならん。【二七】諸天　佛教にていふ欲界以上の天はみな諸天なり。【二八】鬼物　まのかみ。【二九】嫌猜　そねみきらふ。【三〇】以玆　玆とは佛法尊信の態度をさす。【三一】撫　愛撫する。【三二】周才　ておちのなき才。【三三】窮子失淨處、高人憂禍胎　この二句は舊解定說なし、余は鄙見をのぶ。余は此の二句倒裝法を用ひしものにて自己のことをいふが主なりとみる。大體蔡夢弼の注意に本づく。高人は德高き人、だれにてもよきことなれども主として山僧をさす、禍には基あり、禍には胎あり、僧は禍胎を憂とし人をして行を修め務めて福田を作さしめんとす。これ高人憂禍胎の義なり。（或は章彝が作者に奉佛をすすめ、章をさして高人といひしとみるも通ずべきがごとし。）窮子とは作者自らを稱す、故事あり、「法華經」に佛が人を救ふたとへばなしあり曰く、ある人があつてこどものとき父をすててにげた、生長して困窮になつてゐる、父は之をさがすがたづねつけられぬ、困窮の子は人に傭はれて使役さるるものになつてゐた。偶然にもその子がその父のところへやとはれ、汚穢不淨を掃除する、父がいふに、おまへはわしの子ぢや、わしの財物はみなおまへのものぢや、と。困窮の子は之をきいて大に歡喜す云云。詩には淨處を失すとあれど意は「不淨處を失す」の義ならん、不淨處とは父の宅をいふ、適切にいへば佛の道場が窮子にとりての淨處（或は不淨處）なり、作者は自分はそのばしよをもたぬといふなり。【三四】歲晏　としのくれかかること。【三五】風破肉　寒さはげしきをいふ。【三六】荒林　寺の冬枯れのはやし。【三七】迴　寓所へもどる。【三八】入道苦　佛道にはひることのくるしきこと。【三九】嬰孩　みどりご。

【題義】梓州の山寺（觀音寺か）へあそびにゆきしことをのぶ、章彝も同行したるなり。廣德元年冬の作。

【詩意】石壁を根基として野寺がたつてゐる、その崔嵬たる山崖には佛像をはめこんだづしがたくさんある。前方にある佛像はどれがどれやらみわけがつかぬ、多くの像體はみな苔におほはれてゐる。うしろにはふるびた佛殿がのこつてゐるが、そのなかの世尊の像もほこりだらけである。之をみると心ある僧の泣くのをきくやうで佛法を信奉するものはあはれをもよほすだけのことはある。』章使君は紫の馬にのつて衆人にかこまれながら西の方からこの寺へやつてきた。千里のあひだ人さわがせをせずはたをたてて江にのぞみながらぶらぶらあそんでをられる。さうするとぼろぼろの

きものをきた山僧がお寺の棟梁がくだけてこまつてをりますと訴へる。章君はお客分のものやおとものものを顧みて咄嗟のあひだに寺に向つてお布施をおだしになつた。』之によつて自分は知る、貝多に寫した經文も蓮華の臺に倚ることができ、諸天はみなきつと歡喜し、魔物らもそねみきらつて寺に災をくだす樣なことがないであらうといふことを。章君はこの佛法尊信の態度で士卒を愛撫さるるならば人人みなゆきとどいた才のあるお方だといふであらう。』さて自分であるが、高德人は禍胎をつくらぬ樣に佛道を修めて善行をつめといふが自分はお經にある掃除すべき親の不淨處をもたぬ困窮の子の樣なもので佛道には緣がうすい。いま歲くれかかつて風が肉を破らんばかりにはげしく、冬枯れの林は寒くてたまらぬのでうちへもどるがよろしい。よくかんがへてみると佛道にはひることは苦しいものである。これをいやにおもふことはまるでこどもの考へみた樣なので自分ながらをかしくなる。』

(一)桃竹杖引贈章留後　　桃竹杖の引、章留後に贈る

江心(二)蟠石(三)生桃竹。　　江心の蟠石、桃竹を生ず、

蒼波(四)噴浸尺度(五)足。　　蒼波噴浸、尺度足る。

斬根削皮如紫玉(六)。　　根を斬り皮を削れば紫玉の如し、

【字解】【一】桃竹杖　しゆろ竹のつゑ。【二】江心　涪江の中心。【三】蟠石　蟠屈せる石。【四】噴浸　ふきつけ、ひたす。【五】尺度足　杖とするだけの長さ十分そなはる。【六】紫玉　杖の色。【七】江妃　漢江のめがみ。【八】水仙　馮夷といふ仙人。【九】惜不得　不レ得レ惜とおなじ、惜しんでもつてゆかせまいとしてもだめだ。【一〇】梓潼使君　梓州は唐のとき、梓潼郡といへり、使君は刺史、章をさす。【一一】開一束　ひとたばの杖をあける。【一二】嘆息　みごとなことをなげく。【一三】兩莖　ふたもと。【一四】出入　家よりではひりする。【一五】爪甲　つめ。【一六】鏗　かちんといふおと。【一七】老夫　おやぢ、自らさす。【一八】東南征　吳楚の方へゆく。【一九】鼓枻　楫をうごかす。【二〇】白帝城　夔州府の城、梓州より涪江を下れば先づここへでる。【二一】爲鬼神奪　奪の上に、

江妃(七)水仙(八)惜不得(九)。　　江妃水仙、惜しみ得ず。

梓潼使君(一〇)開一束(一一)。　　梓潼の使君開くこと一束、

滿堂賓客皆嘆息(一二)。』　　滿堂の賓客皆嘆息す。』

憐我老病贈兩莖(一三)。　　我が老病なるを憐みて兩莖を贈る、

出入(一四)爪甲(一五)鏗(一六)有聲。　　出入するに爪甲、鏗として聲有り。

老夫(一七)復欲東南征(一八)。　　老夫復た東南に征かむと欲す、

乘濤鼓枻(一九)白帝城(二〇)。　　濤に乘じ枻を鼓す白帝城。

路幽必爲鬼神奪(二一)。　　路幽にして必ず鬼神に奪はるるをなさむ、

拔劍或與蛟龍爭。』　　劍を拔きて或は蛟龍と爭はむ。』

重爲告曰。　　重ねて爲に告げて曰く、

杖兮杖兮爾之生也甚正直。　　杖や杖や、爾の生や甚だ正直なり。

愼勿見水踴躍學(二二)　　愼みて水を見て踴躍して變化して龍

變化爲龍。　となるを學び、

使我不得爾(三三)之扶(三四)持。　我をして爾の扶持を得ず、

滅(三五)跡於君山(三六)湖上之青峰。　跡を君山湖上の青峰に滅せしむること勿れ。

噫風塵澒(三七)洞兮豺(二八)虎咬人。　噫風塵澒洞、豺虎、人を咬む、

忽失雙(二九)杖兮吾將曷(三〇)從。』　忽ち雙杖を失はば吾將に曷にか從はむとする。』

「所」の字をいれてみるべし。【三二】學變化爲龍　壺公といふ仙人、費長房をやり歸すとき一の竹杖を與へ、これに騎らば家にかへりうべしといふ。長房杖にのるに忽然として家に到る。竹杖を以て葛陂の中に投じ之を眠れば青龍なりとの話あり。【三三】爾　汝、杖をさす。【三四】扶持　たすけ。【三五】滅跡　ゆくへ不明になる。【三六】君山湖上之青峰　湖上之青峰と君山とは同じものなり、君山は洞庭湖のなかにある山の名なり、湖上の湖は洞庭湖なり。【三七】澒洞　もやくやとした貌。【二八】豺虎　盜賊をたとへいふ。【二九】雙杖　前に「兩莖」とありて二本のつゑなり。【三〇】曷從　曷は何なり、どこへゆかうか。

【題義】章留後からしゆろ竹の杖二本をもらつたので章に贈つた詩。廣德元年冬の作。

【詩意】江の中心に蟠屈してゐた石に桃竹がはえた。かはの波がふきつけひたしてゐたのだが長さは十分にある。杖にするにいいから人がその根を斬り皮をむくと紫玉のやうなはだがあらはれる。江妃や水仙が斬られては惜しいとおもうてもだめである。梓潼の長官章君がこの杖一束をもちだしたところが滿堂の賓客はあつとおどろいた。』章君はわしが老人で病氣なのを氣の毒におもうて二本贈つてくれた。これをついてではひりするとき爪甲がふれるとかちんとおとがする。じぶんはこれからまた東南の地方へでかけようとおもうてゐる、かぢをうごかし濤にのつて白帝城をとほるだらう。途中にくらつぽい路を經るときは鬼神にこの杖を奪はれようとするかも知れぬ。或はまた劍をぬいて蛟龍と爭ふかも知れぬ。』そこでかさねてこの杖にむかつていひきかせる。杖よ杖よ、おまへの生れいでたるやいと正直にでてきた。つつしんで水を見てもをどりだして變化して龍となる樣なまねをして、わたしをしておまへのたすけを得ず、湖上の青峰君山のあたりでゆくへ不明にならせる樣なことをしてはくれるなよ。ああいまは兵亂の塵がもやくやとわきたち豺虎のごときものが人をかむ時節だ。このときにはかにこの二本の杖をなくしたら、自分はどこにいつたらよいやらわからぬことになる。』

將適吳(一)楚留(二)別章使君留後兼(三)幕(四)府諸公得柳字

將に吳楚に適かんとして章使君留後兼び幕府諸公に留別す。柳の字を得たり

我來入(五)蜀門。歲月亦已久。　我來つて蜀門に入る、歲月亦已に久し。

豈惟長(六)兒童。自覺成(七)老醜。　豈に惟兒童を長せしめしのみならむや、自ら覺ゆ老醜と成れるを。
常恐性坦(八)率。失(九)身爲杯酒。　常に恐る性坦率にして、身を失ふ杯酒の爲ならむことを。
近辭(一〇)痛飲徒。折(一一)節萬(一二)夫後。』　近ろ痛飲の徒を辭して、節を折る萬夫の後。』
昔如縱(一三)壑魚。今如喪(一四)家狗。　昔は縱壑の魚の如くなりき、今は喪家の狗の如し。
既無遊(一五)方戀。行止復何有。　既に遊方の戀無し。行止復何か有らむ。
相逢半新(一六)故。取別隨薄(一七)厚。　相逢ふ半新故、別を取る、薄厚に隨ふ。
(一八)不意青草湖。扁舟落吾手。』　意はざりき青草湖、扁舟吾が手に落つ。』
(一九)眷眷章梓州。開筵俯高柳。　眷眷たり章梓州、筵を開きて高柳に俯す。
樓前出(二〇)騎馬。帳下羅(二一)賓友。　樓前、騎馬出づ、帳下、賓友羅る。
(二二)健兒簸(二三)紅旗。此樂幾難朽。　健兒、紅旗を簸る、此の樂幾ど朽ち難し。
(二四)日車隱崑(二五)崙。鳥雀噪戸牖。』　日車、崑崙に隱る、鳥雀、戸牖に噪ぐ。』
波濤未足畏。三(二六)峽徒雷吼。　波濤未だ畏るるに足らず、三峽徒らに雷吼す。
所憂盜賊多。重見衣(二七)冠走。　憂ふる所は盜賊多しくて、重ねて衣冠の走るを見むことを。

(二八)中原消息斷。黃(二九)屋今安否。　中原、消息斷ゆ、黃屋今安きや否や。
終作適(三〇)荊蠻。安(三一)排用莊(三二)叟。』　終に荊蠻に適くことを作す、排に安んずるは莊叟を用ふ。』
隨雲拜東(三三)皇。挂(三四)席上南(三五)斗。　雲に隨つて東皇を拜し、席を挂けて南斗に上る。
(三六)有使卽寄書。無使長迴(三七)首。』　使有らば卽ち書を寄せよ、長く首を迴らさしむる無れ。』

【字解】【一】吳楚　吳は江蘇省地方、楚は湖北・湖南地方。【二】留別　詩を留めて別るること。【三】兼　「及」の字のごとくよむ。【四】幕府諸公　幕僚の人人。【五】入獨門　門はいりくち、けだし劍門をさす、獨門に入るは獨の地内にはひるなり。【六】長兒童　兒童が生長する。【七】成老醜　としよりみにくくなる。【八】坦率　ひらべつたくかざりなし。【九】失身　一身をあやまつこと。【一〇】痛飲徒　ひどく酒をのむなかま。【一一】折節　ならぬ辛抱をすること。【一二】萬夫　けだし武人等をさす。【一三】縱壑魚　たにゝはなたれたるうを。自由な境涯をいふ。【一四】喪家狗　喪儀のある家はいそがしき故かひ狗も食物を與へられず瘦せてゐる。【一五】遊方戀　「論語」に父母いますときは子たるもの遊必有方とあり、一定の方位に遊ぶべしといへり。作者は已に父母なきゆゑ一定の方位にあそぶといふことに戀著してゐるにおよばず、どこへむいてあそぶも可なるなり、故に行止復何有の句あり。【一六】新故　新知の人、舊知の人。【一七】隨薄厚　交際の厚薄に隨ふなり、仇注に「杜臆」をひきたるは恐らくは是に非ず。【一八】不意　意外にも。不意青草湖、扁舟落吾手、此二句にて青草湖のかかりぐあひははつきりせず。余は青草湖にゆくべき扁舟の義かとおもふ。何となれば作者のちに荊州を過ぎて青草湖の方へ赴きたればなり。青草湖は巴丘湖ともいひ湖南の岳州府巴陵縣の南にあり、周圍二百六十五里。【一九】眷眷　めをかけてくれる貌。【二〇】出騎馬　卽ち下の紅旗をふる兵ののれるものならん。【二一】羅　つらなる。【二二】健兒　つよい卒。【二三】簸紅旗　あかき旗をさまざまに振つてみせるなり、作者別に「揚旗」の詩あり、併せ看るべし。【二四】日車　太陽。【二五】崑崙　西方の山。【二六】三峽　夔州以東にあり。【二七】衣冠走　文官等のにげまはること。【二八】中原　洛陽

地方。【二九】黄屋　車蓋のうらの黄色なるもの、天子の用ひたまふもの、以て天子をさす、代宗陝州に巡幸せるを以ていふ。【三〇】適荊蠻　荊州蠻民の居る地にゆく。【三一】安排　造化の推排する所に安んずる、造化は變化しつぎからつぎへとものをおしのけてゆく、おしのけらるるままにおちついてゐるが安排なり、「莊子」にみゆ。【三二】用莊叟　莊周のやりかたを用ふ。【三三】東皇　日の神、楚の都たる郢（荊州府江陵縣）の東に祀られたりしもの、作者荊州へゆくゆゑに之をいふ。【三四】挂席　むしろの帆を舟にかける。【三五】南斗　南斗は星宿、吳の分野にあたる、上とはその方へゆくこと。【三六】有使　使は信使、手紙をもつてあるくひきやく。【三七】長還首　久しく自分のかうべをともだちの方へむける。

【題義】吳楚の地方へゆかうとして梓州の刺史で留後である章彝やまたは他の幕僚諸君に別れをつげのこした詩。但し一旦かく決心したが嚴武が成都へ來任することになつたので事情はまたかはつたのである。それはのちに知らるる。此詩は廣德元年十一月、代宗がまだ長安へかへらざる時の作。

【詩意】自分が蜀へはひつてからとしつきはかなり久しい。こどもらが大きくなつたばかりでなく自分じしんも老いてみにくくなつたのをおぼえる。自分はいつも性質がひらべつたくかざりがなくて酒でしくじりはせぬかと恐れてゐる。だからちかごろは大酒のみのなかまを辭してがまんして萬人のあとにくつついてゐる。』昔はたにはなたれた魚のやうに自由であつたが、今は喪式のある家の狗のやうにあはれなものだ。親にわかれたから一定の方位に遊ばねばならぬといふ戀著心もなく行かうと止まらうとどちらにしてもなんでもないのである。自分のであうた人人、それは新知と舊知と半半ぐらゐだがそれらの人には平生の交りの厚い薄いにしたがつてそれぞれ別れをした、これは靑草湖の方へゆく舟が意外にも偶然自分の手に落ちたからである。』自分をかはいがつてくれる章梓州はそれで自分のため送別の筵を開いてくれた、そのばしよは高い柳をしたにみおろしてゐる。樓の前には騎馬のものがあらはれる。帳の下には賓客朋友が羅列する。さうしてつよい兵卒が紅の旗をあふつて藝をしてみせる、この樂みは永久に忘れられぬ。そのうち太陽は崑崙の山にかくれ、烏や雀は戶や牖のあたりにさわぐ。』舟でゆくに波濤がおそろしいといふがそれは畏れるに足らぬ、三峽だとていたづらに雷のごとく吼えてゐるにすぎぬ。それよりも心配になるのは盜賊が多くてふたたび衣冠階級のものが逃げまはつて奔走しはせぬかといふことだ。中原の方からも消息がたえてゐる、わが君は平安であらせらるるや否や。自分はつひに荊蠻の地へゆくことにした、なるやうになるといふやりかたは莊子の說いてゐるとほりを用ふるのである。』しののめの雲につれて東皇の日の神を拜み、席帆を掛けて南斗星の分野にとのぼる。諸君よ、もし使があつたらすぐ手紙をよこしてくれたまへ、わたしにいつまでも諸君の方をみつめさせることをしたまふなよ。』

（一）舎弟占歸（二）草堂（三）檢校。聊示此詩

舎弟占、草堂に歸りて檢校す、聊か此の詩を示す

久客應吾道。相隨獨爾來。　久しく客たるは應に吾が道なるべし、相隨ふは獨り爾來「れり。

孰知江路近。頻爲草堂迴。　孰(熟)知す江路の近きを、頻に草堂の爲に迴る。

鵝鴨宜長數。柴荊莫浪開。　鵝鴨宜しく長く數ふべし、柴荊、浪に開くこと莫れ。

東林竹影薄。臘月更須栽。　東林、竹影薄し、臘月更に須らく栽すべし。

【字解】【一】舍弟占　わがやのおとうと占といふもの。【二】草堂　成都の浣花溪にあるもの。【三】檢校　留守宅の模樣をしらべる。【四】久客　ながく旅客となつてゐること。【五】吾道　自分のゆくべきみち。【六】獨爾來　作者の弟に穎・觀・豐などいへる人あるがそれらは他地方に在り、作者に隨つて蜀に來りしは占のみなり。【七】孰知　孰は熟なり、熟知はよくこころえてゐること。【八】江路近　江すぢをとほることの近いこと。【九】迴　かへる。【一〇】長數　常數の義、いつでもかぞへる。【一一】柴荊　しばいばらにてあみたる門。【一二】浪　みだりに。【一三】竹影薄　かげがうすいといふはつまり幹がすくないなり。【一四】臘月　十二月。【一五】栽　うゑつける。

【題義】弟が留守宅の模樣をしらべに成都の草堂へかへるといふので、ちよつと此の詩をつくつてみせた。廣德元年冬の作。

【詩意】じぶんのゆくべき道はいつまでも旅客としてくらすことであらうか、よくもおまへひとりだけがわたしについてこちらへ來たものだ。おまへは江すぢの路のどこをどうゆけば近いかをよく知つてゐるのでたびたび草堂のことのためにあちらへかへる。草堂へいつたら鵝鳥や鴨はいつも數をかぞへるがよいぞ。柴荊の門はむやみにあけてはならぬぞ。東の方の林の竹の影はすこし薄すぎるから、十二月になつたらもつとうゑるがよいぞ。

歲暮

歲暮

歲暮遠爲客。邊隅還用兵。　歲暮遠く客と爲る、邊隅還た兵を用ふ。

煙塵犯雪嶺。鼓角動江城。　煙塵、雪嶺を犯す、鼓角、江城に動く。

天地日流血。朝廷誰請纓。　天地日に血を流す、朝廷誰か纓を請はむ。

濟時敢愛死。寂寞壯心驚。　時を濟ふに敢て死を愛せむや、寂寞、壯心驚く。

【字解】【一】歲暮　廣德元年のとしのくれなるべし、詩中に「煙塵犯雪嶺」とあれば吐蕃三州を陷れしときなるべし。【二】邊隅　蜀の西邊をいふ。【三】雪嶺　西山。【四】江城　梓州の城。【五】請纓　漢の終軍といふもの上書して長纓を受けて必ず南粤王をつないで之を闕下に致かんと請うた。【六】濟時　時世をすくふ。【七】愛　愛惜。【八】寂寞　さびしきうちにもの意。【九】驚　にはかに起るをいふ。

【題義】歲暮の感をのぶ。廣德元年年末、梓州にての作ならん。

【詩意】自分は歲のくれに遠く旅客となつてをるが、邊隅の地ではまた兵を用ひてをる。吐蕃の兵塵が雪嶺方面を犯し、鼓角の聲がここの城に於ても動いてゐる。かく天地のあひだに日日血をながしてゐるが、朝廷にはだれが終軍のやうに長纓を請うて敵の王のくびをつながうといふほどのものがある

か。自分は時世をすくふためとあらばどうして一死を惜しむものであらうか。かくかんがへるといまのさびしいなかにもにはかに壯心が躍りたつのである。

送李卿曄（一）

李卿曄を送る

王子（二）思歸日。長安已亂兵（三）。　王子歸るを思ふ日、長安已に亂兵。

霑（四）衣問行在（五）。走馬向承明（六）。　衣を霑して行在を問ひ、馬を走らせて承明に向ふ。

暮景（七）巴蜀僻（八）。春風（九）江漢（一〇）清。　暮景、巴蜀僻なり、春風、江漢清し。

晉山（一一）雖自棄。魏闕（一二）尚含情（一三）。　晉山、自ら棄つと雖も、魏闕尚情を含む。

【字解】〔一〕李卿曄　曄は皇族、淮安忠公李琇の子にして官は刑部侍郎となる、これは南方より洛陽の方へかへるものとみゆ。〔二〕王子　皇族ゆゑ王の子といふ。〔三〕亂兵　吐蕃の兵がいりしをいふ。〔四〕霑衣　涙にて衣をうるほすことなりといへり。〔五〕行在　天子の行の在る所、陝州をさす。〔六〕承明　宿直の廬の名、これは長安の宮中のそれをいふ。〔七〕暮景　ひぐれ、送別の時刻。〔八〕僻　かたよる。〔九〕春風　時候をいふ。〔一〇〕江漢　作者梓州の詩に江漢といへり、江は涪江、漢は嘉陵江、一に閬江とも西漢水ともいふ、李は江をも漢をもわたるなるべし。〔一一〕晉山雖自棄　晉の介之推、文公に從つて諸國を歴遊し歸りて恩賞にあづからず綿上の山中にかくれたり、作者嘗て肅宗に從ふ、故に介之推を以て自ら比す、「壯遊」の詩にも之推避賞從とあり、晉山とは晉國の山、綿上の山をいふ、自棄とは天子にすてられしにあらずみづからをすてたるなりといふなり。〔一二〕魏闕　ごしよのたかきごもん、「莊子」に曰く、中山の公子牟が曰く、身在江海之上、心在魏闕之下と。〔一三〕含情　それに對して之をしたふのこころなもつないふ。

【題義】李曄が北の方へかへるのを送る詩。廣德二年の初春の作。

【詩意】皇族たるあなたが故鄕へおかへりになりたいと思はるるとき、長安ははや亂兵がおこつてをりまする。あなたは涙で衣をぬらしながら代宗の行在を陝州におたづねになり、それから馬を走らせて長安の承明の廬にお向ひになりまする。いまひぐれにあたつてここの巴蜀はかたゐなかのさびしさでござりまする、春風の吹いてゐる時節にあなたのおとほりになる江・漢・の水はすんでをるでござりませう。わたくしは介之推のごとく晉國の山に自分と我が身を棄てたものでござりますが、我が君のござる宮門に向つてはつねに之をしたふのこころをいだいてをりまする。

釋悶（一）

悶を釋く

四海十年（二）不解兵。　四海十年、兵を解かず、

犬戎（三）也（四）復臨咸京（五）。　犬戎也復咸京に臨めり。

失道（六）非關（七）出襄野（八）。　失道、襄野に出づるに關するに非ず、

揚鞭忽是過（九）湖城。　揚鞭忽ち是れ湖城を過ぐ。

【字解】〔一〕釋悶　もだえのこころをとく。〔二〕十年　天寶十四載安祿山の亂より今廣德二年まで十年なり。〔三〕犬戎　吐蕃をさす。〔四〕也　「亦」に同じ。〔五〕咸京　咸陽のこと、長安をさす。〔六〕失

豺狼塞路人斷絕。　豺狼路を塞いで人斷絕す、
烽火照夜屍縱橫。　烽火夜を照らして屍縱橫。
(一〇)天子亦應厭奔走。　天子亦應に奔走を厭ふなるべし、
(一一)羣公固合思昇平。(一二)　羣公固合に昇平を思ふべし。
但恐誅求(一三)不改轍(一四)。　但恐る誅求、轍を改めざるを、
聞道孼孽(一五)能全生(一六)。　聞道らく孼孽能く生を全うすと。
(一七)江邊老翁錯料事(一八)。　江邊の老翁錯つて事を料る、
(一九)眼暗不見風塵清。　眼暗くして見ず風塵の淸きを。

道　道をあやまつ、道にふみまよふこと、代宗の陝州への出奔をいふ、「莊子」に黄帝將に大隗を具茨の山に見んとす、襄城の野に至りて七聖皆迷ひ塗を問ふ所なしとみゆ。失道は即ち迷の義。【七】非關　關係なし。【八】出襄野　襄城の野に出でしこと、出典は上にみゆ。【九】過湖城　仇注に曰く、晉の明帝微行して蕪湖に至りて王敦が營壘を察す、湖城とは蕪湖の王敦が城の義なりと。然れども時に於て適切ならず、是れ蓋し故事を引くに非ず實事を敍するなり、陝州にゆくには靈寶縣を過ぐ、即ち漢の湖縣の地、湖城とは湖縣の城の義にして以て陝州に出奔されしことをいふなり。【一〇】天子　代宗。【一一】羣公　朝廷の羣臣。【一二】昇平　太平。【一三】誅求　人民より金財物をしぼりとること。【一四】不改轍　これまでどほり。【一五】孼孽　天子に寵愛されるわるもの、宦者程元振をさす、程元振がこと「遣憂」の詩をみよ。【一六】全生　死刑にならずいのちをたもつ。【一七】江邊老翁　作者自己をさす。【一八】錯料事　事をまちがつてはかる、まちがつてとは謙遜の辭なり。【一九】眼暗　老眼なるべければくらきにちがひなきも、暗しといふは婉曲の辭なり。

【題義】　こころのもだえをとくためにつくる、代宗が宦者程元振を誅戮せざることをきまづくおもひてつくれり。廣德二年の作。

【詩意】　十年のあひだ四海には兵が解かれないでゐるのに犬戎（吐蕃）がまたまた咸陽のみやこにのぞんできた。このたび我が君は鞭をあげて忽ち湖縣の城をおとほりになつたが（陝州へおでましになつたがの意。）それはむかし黄帝が大道を問はんとして襄城の野に出て道に迷うたのとは關係は無い。豺狼は路をふさいで人はとだえる、のろし火は夜を照らして屍は縱橫にころがつてゐる。わが天子も奔走にはおあきになつてござるだらう。羣臣ももとより太平を思ふはずである。ただきづかはれるのは人民に對するむりな取り立てが依然としてかはらぬことだ、きけばこんどの禍の張本人ともいふべきわが君のご寵愛のわるもの（程元振）がまだ生きてゐるといふではないか。江邊にさまよふてゐるこのおやぢはことをはかるのがまちがつてゐるかも知らぬが、眼がくらいので風塵の淸らかになつたのが見えぬのである。

贈別賀蘭銛(一)

賀蘭銛に贈り別る

(二)黃雀飽野粟(三)。羣飛動荊榛(四)。　黃雀、野粟に飽き、羣飛、荊榛を動かす。
今君抱何恨。寂寞(五)向時人。　今君何の恨みをか抱いて、寂寞、時人に向ふや。
(六)老驥倦驤(七)首。蒼鷹(八)愁易馴(九)。　老驥、首を驤ぐるに倦む、蒼鷹、馴れ易きを愁ふ。

高賢世未識、固合嬰(一〇)饑貧。』國步(一一)初反正(一二)、乾坤尚風塵(一三)。悲歌鬢髪白(一四)、遠赴湘呉春(一五)。我戀岷下芋(一六)、君思千里蓴(一七)。生離(一八)與死別、自古鼻酸辛(一九)。』

高賢世未だ識らず、固に饑貧に嬰るべし。』國步初めて正に反る、乾坤尚風塵なり。悲歌、鬢髪白し、遠く赴く湘呉の春。我は戀ふ岷下の芋、君は思ふ千里の蓴。生離と死別と、古より鼻酸辛なり。』

【字解】【一】賀蘭銛　事歴詳ならず。【二】黄雀　すずめ、平凡の人物にたとふ。【三】野粟　田野のもみ。【四】荊榛　いばら、はり。【五】寂寞向時人　世の人に對して寂寞たる態度でゐる。【六】老驥　おいたる千里の馬。【七】驤　あぐる。【八】蒼鷹　たか。【九】馴　人にならされる、驥と鷹とは非凡人にたとふ、即ち次句の「高賢」。【一〇】嬰　かかる。【一一】國步　國運をいふ。【一二】反正　正しきにかへる、「漢書」高帝紀に撥亂世反之正の語あり、廣德元年十二月に代宗が長安へかへられしことをさす。【一三】風塵　吐蕃の亂なほやまざるをいふ。【一四】悲歌鬢髪白　蓋し作者自己のことをいふ。【一五】遠赴湘呉春　賀蘭銛をいふ、湘は湘水、湖南にあり、呉は江蘇。【一六】岷下芋　岷山のふもとのいも、「史記」貨殖傳に本づく。【一七】千里蓴　千里は湖名なりといへり、昔の陸機、王武子に呉地のうまきものを答へて千里蓴羹といへり、蓴はじゆんさい。【一八】生離　いきわかれ。【一九】鼻酸辛　なければ鼻汁がいで、それが呼吸につれ誤つた道へはひり酸辛の感じをおこす、つらきことを酸鼻といふ。

【題意】賀蘭銛が湖南・江蘇・の方へゆくときに贈つて別れをした詩。廣德二年春の作。

【詩意】雀は田野のもみに飽き飽きしてむらがり飛んで荊榛をうごかしてゐる。いま君はいかなる恨みを抱いてか、世人に對して寂寞たる態度を持してゐる。老いた千里の馬は首をあげるのにも倦んでゐるし、蒼鷹は人からならされ易いことを心配してゐるものだ。高賢なる人物は世のひとが之をしらぬときは饑餓貧乏にかかるのはあたりまへのことだ。』いまや國運は大亂からやつと正しいところにもどつたが天地はまだ風塵がやまぬ。自分は悲歌してびんの毛が白くなつてをる、君は遠く湘呉の春に赴かんとしてをる。自分は蜀の岷山の芋を戀うてこの土地にくつついてゐるが、君は千里湖の蓴菜を思うてその產する地方へゆくのである。いきわかれと、死に別れとはむかしからつらいものになつてをる。(君と僕とはいまいきわかれをするのである。)

昭和四年八月十七日午後十時二十分英京に向
ひビスケー灣航海中箱根丸船室に於て稿了

鈴　木　虎　雄

309
65

昭和四年十一月二十八日印刷
昭和四年十一月三十日發行

著作權所有

續國譯漢文大成 文學部 第五帙 【非賣品】

編輯兼發行者 國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者 鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者 吉原良三
東京市牛込區早稻田鶴巻町百七番地

印刷所 康文社印刷所
東京市牛込區早稻田鶴巻町百七番地

發行所 國民文庫刊行會
電話神田（五三五番 八三八番）
振替東京一八五七二番

終